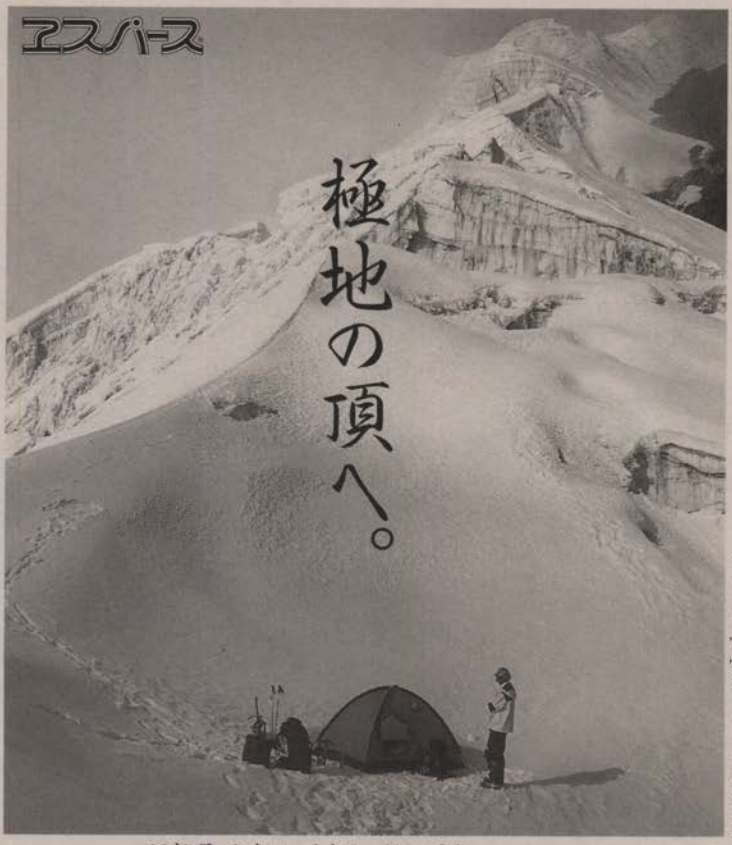
山岳



Vol.88／1993



カモシカ同人・'92-'93冬季アマ・ダプラム登山隊

22年間、山岳テントをリードしてきたエスパース。

1970年、カモシカスポーツがオリジナルテントとして開発したエスパース。
吟味された素材を使用し国内での丁寧な縫製で仕上げる製品作りは、
登山家や冒険家をはじめとして各界から高い評価を受け、ベストセラーを続けています。
カモシカスポーツは登山家の信頼に応えます。

ESPACE　ESPACE MAXIM　LIGHT ESPACE　SUPER LIGHT ESPACE
GORE-TEX ESPACE　ESPACE SUMMITER

KAMOSHIKA

カモシカスポーツ 山の店
〒169 東京都新宿区高田馬場3-3-3 ☎03(3371)4333
AM10:30～PM8:00(月～金)/AM10:30～PM7:00(土・日・祝)
定休日/日曜日（4月・7月・8月・12月は定休日なし
他の月は最初と最後の日曜日は営業）



第八十八年（通巻一四六号）

山岳

一九九三年

山岳　一九九三年　目次

今西錦司さんの山……田口二郎……7
ウォルター・ウェストン青森を行く……三井嘉雄……22
新上高地山岳研究所の建設……石橋正美……30
国際山岳連盟（ＵＩＡＡ）の組織と課題……神崎忠男……38

［日本・中国ナムチャバルワ合同登山］
日中合同ナムチャバルワ登山を終えて……山田二郎……48
ナムチャバルワ峰登頂の軌跡……重廣恒夫……54
第一次隊の登頂……山本一夫……69
第二次隊の登頂……三谷統一郎……70
一九九一年本隊の記録……高見和成……73
ナムチャバルワ雪崩事故について…山本宗彦、合同登山隊のマネージメント…梶田正人、大西宏断片…大西俊章、ベースキャンプ日記…斉藤惇生、私の見た登山隊…中村進、名誉総隊長のベースキャンプ訪問…長尾悌夫、
憧憬の山――私にとってのナムチャバルワ……94
ヒムルンヒマールの初登頂……丹羽由紀夫……103
四姑娘山（スークーニャン）南壁の初登攀……吉村千春……110
アンタークティックウォーク南極点探検……松原尚之……120
アマ・ダブラム冬期登攀……青田浩……128

チョモランマ北東稜……大　宮　　求……133
北大山岳部の登山……朝比奈英三・橋本誠二……141
図書紹介
『台湾に魅せられたナチュラリスト鹿野忠雄』（浅野孝一）、『チベットの報告』（田村俊介）、『日本山岳紀行　ドイツ人が見た明治末の信州』（大森久雄）、『ヒマラヤン・クライマー』（中島　寛）、『ラインホルト・メスナー自伝　自由なる魂を求めて』（永田秀樹）、『森を考える　白神ブナ原生林からの報告』（滑志田隆）、『黒部奥山……162
史談』（広瀬誠）、『日本女性登山史』（伏見紀子）、会報『山』図書紹介一覧
＊
今西錦司氏（梅棹忠夫・岩坪五郎）、麻生武治氏（各務良幸）、野口末延氏（牧野衛）、高山忠四朗氏（赤羽孝一郎・三溝関治郎）、中村勝郎氏（海野治良）、杉本義信氏（小林雄次郎）、小野幸氏（望月達夫）、見学玄氏（長岡忠一）、田中（諏訪田）
追　悼　栄蔵氏（吉永定雄）、板倉勝正氏（小林政志）、柴田均二氏（岡田光行）、川又恒一……183
氏（中嶋正夫）、福住修治氏（羽島　肇）、五十嵐俊治氏（近藤克二）、宮本貴文氏（野村義孝）、長谷川暁一氏（松村多四郎）、平野隆司氏（神崎忠男）、高本信子氏（大久保春美）、山縣浩氏（澤村幸蔵）、奥淳一氏（重廣恒夫）、会報『山』追悼文一覧
＊
支部だより……225
会務報告（一九九二年六月～一九九三年五月）……236
［日本・中国ナムチャバルワ合同登山］資料編……A42
ナムチャバルワの気象（一九九二年）…奥山　巌、ナムチャバルワの気象（一九九二年）…飯田　肇、ナムチャバルワ登山における環境保護…梶田正人、医療報告…小島　彰、食糧・燃料報告…山本　篤、通信機器報告…三谷統一郎、輸送・梱包報告…滝澤守生、会計報告…松田雄一、登山隊日誌、事務局日誌

中高年登山者のトレーニングとその効果……浅野勝己…A30
英文梗概……A21

写　真

海外登山の記録……48～49
追悼……192～193

表紙挿画・本文カット
アルパイン・スケッチクラブ（佐藤智恵子・塔田也寿）

今西錦司さんの山

田口二郎

今西さんはじつに長く山を歩かれた。亡くなる数年前の八十四歳頃まで、ことに晩年にかけては絶えまなく歩かれた。少年時から数えると七十年におよぶ山歴である。

踏んだ頂上も千五百を超す。何頁も重ねた登頂表を『しおり』で残されたが、あまり沢山登ったので、他人が整理する苦労を慮って作られたと想像するほどである。『しおり』はもちろん、今西さん自身がじっくり眺めて心から満足するために編まれたものだ。一つ一つの登山に忘れがたい思いがこめられていたことだろう。

こう思うと、今西さんの山を十把ひとからげに頭に入れようと考えること自体がよろしくないことだ。

それに誰も気づくことだが、今西さんの山は、登った、難しかった、手ごたえがあった、面白かった、といった普通の人の登山とちがい、山と登山の意味づけに非常な重点がおかれた。このため観念性、思想性が強くなった。

もう一つの点は、山が済んでもそれについて書き上げるまで、登山が完結しないと見ることだった。

観念的アプローチにせよ、成果を文字で確かめることにせよ、フィールドワークの学問の手法と同じなので、今西さんの山は学問系統の人の方が理解しやすいのではないかと批評する人が出るくらいだった。事実、今西さんの人物

像にせまる一番面白い書きものは直系の学者連によって書かれている（川喜田二郎監修『今西錦司』一九五八年）。

ただ私たち山だけの人間にとっても幸いなことは、今西さんが山を思想の対象として見たために、じつに豊穣な書きものを残されていることだ。七十年にわたる山との関わりの重要な節々に、その人の山の本性とか、その変化を垣間見せてくれる文言を、ところどころに書きつけていられる。

さて、私自身は今西さんを古くから存じ上げていた。マナスルにもお伴したことがある。一貫しての印象は自然の飄逸というほかはない。いつも考えごとをしていて、およそ人を喜ばそうなど思ったこともない無愛想な人なのに、今西さんという名前を持ち出すだけで人がニャッとするほど、すぐにはわからない魅力を持っていられた。多くの人が持つように、私の思い出すエピソードも一つや二つではない。しかしなんといっても、あの人の重量感、存在感は大きかった。人が巨人（本田靖春）とよび巨像（梅棹忠夫）と仰いだのも、すぐ頷くことができることだ。

その巨像から山の部分だけを取り出す、それだけでも易しいことではない。その人の山の世界の一部を嚙り繋いでみようというのが拙稿の試みである。

今西の山の原点——京都の北山

今西の山の最大の事件は、京都三高入学早々、西洋伝来の強烈なアルピニズムの嵐に見舞われたことだ。その震源地はスイス・アルプスのアイガーにあった。一九二一年（大正十年）無名の青年登山家槇有恒がアルプス積年の懸案である東尾根の登攀に成功し、その快挙が日本中に伝えられた。

しかし三高に入る前の少年時代に山に惹かれていなかったら、槇の快挙も今西少年の気を惹くことはなかったろう。今西と同じ若い仲間たちが遠い西洋での山の出来事に敏感に反応したのは、反応できる山の素地がすでにできていたからだ。なりよりくすぐられたのは青年の冒険心だったろう。

今西青年の冒険心は、三高に入る前に京都・北山で培われていた。しかしこの北山が培ったのは冒険心だけではな

い。それは少年今西の人間形成というより、彼の中に眠る様々な資質も目覚めさせる、忘れ得ぬ精神の舞台になっていた。

北山は京都北辺から日本海まで続く低い山々の重なる連なりで、丹波高地と呼ばれた。千メートル以下の山々だが、今西少年が中学の仲間とわらじを着けて入った大正中期（一九一八年頃）、会う人といえば樵（きこり）か炭焼きくらいで、少年にとっては新鮮な冒険行であったにちがいない。見知らぬ峠を目当てにして登り、そこから目に入る山脈の一番高いところを目指し、山の数を数えるようなこともした。

こうして北山が登山家今西錦司の出発点になったのは事実だが、戦前日本の腕白少年はおおむね裏山を冒険の場にしていたので、京都の少年だけを特殊の場合として取り上げるわけにはいかないだろう。今西少年の特殊なところは、北山風景との情緒的な結びつきである。そこを桃源郷と見るほどに深く心にきざみこんだ。風景をそれほど深く取り入れるようにもともとできていた、ということなのだろう。

そうでないと、北山の自然にうたれ、自然の興趣にめざめた過程を、次のようなやるせない表現で書けるはずがない。

「一つの傾向というのは、もう子供のころからはっきりしていたものらしく、蟬とりや茸狩りに近くの小山へでかけて、林の中をさまよい、梢をわたる風の音を聴き、国境に連なる山々をぼんやり眺めているうちに、ひとりでに味得した、自然の趣味ともいうべきもの。それが単なる観賞を意味するのだったら、絵画も音楽もいっこうわからぬ私などに、どうして理解できるだろう。どこかしらに私の魂の故郷とでもいいたい、美しい森林に囲まれた高原があって、きれいな花が咲き、きれいな水が流れている。森の背後には大きな山が聳えている。夢にまでそんな景色が現れて、日の射す朝となったならば、私は単独行のあの執拗な誘惑を感じて憂鬱となる。とくにいけないのは月のよくさえた晩で、遍歴の衝動耐えがたきも…」

右引用はアルピニズムに遭遇する前の心の在り方を、三十八歳になった今西が回顧したときの文章である。

もう一つ、美しい詩文としか思えない北山憧憬を。同じ中年時代の回顧の文章で、名文としてよく引用される。

「…夕日が射して濃い陰影のついた北山を、加茂川のほとりに立って眺めるとき、その北山は中学生であった私を、はじめて山に誘い入れたときと、同じ迫力をもって、いまも私の心に迫ってくるのである。すると私はやはり心の奥になにかしら不安に似たものを感じ、それがしだいにひろがって行くと、もうすべてのことがつまらなく、ただただ遠い彼方の見知らぬ国々に渡って、人知らぬ自然の中へ分け入ってみたいという願望に閉ざされてしまうのである。北山は罪なるかな。」

北山は今西の、文字通り久遠の恋人の位置を占めているわけだが、一番の側近の川喜田二郎の筆を借りると、北山は「若かりし今西を育んだハイマート・ベルグ」であった。

それほど深い北山への愛情だったが、冒頭に書いたように、三高に入ると同じ時期に、アルピニズムという激震に見舞われた。

アルプスの雪線の上で発達したアルピニズムは、当然の装備としてピッケル、アイゼン、ロープで武装されていたが、今西らの北山組も大阪の貿易商に赴いて、これらのいかつい装備を手に入れ、「変装」をなし遂げた。わらじが山靴に変わったのも勿論である。

本来アルピニズムの武器は、日本の山のほとんどの領域では無用なものである。探検時代（明治後期・大正初期）の山は、それ無しで縦横に歩かれている。

しかしアルピニズムは、ただ道具の輸入という形でなく、立派な技術体系を背景とする新しい登山術として、新しい登山思想の後光につつまれて入ってきたので、大きな登山風俗革命を惹き起こした。明治以来踏み馴らされた山が、登路が、ときには別の山に登路に見えるほど、風俗革命は登山者の意識を変えた。山靴がわらじにとって代わっただけで、登山者の意識に見えない大きな変化があったはずである。

しかし登山者に起こった最大の意識革命は、山は難しいほど尊い、価値が高い、という西欧登山思想だろう。また、

それまでの日本の登山界が真に体験したことのない初登頂、初登路を尊重するイズムである。

今西錦司が時代と共にアルピニズムの流れに乗ったとき、彼の少年時代の山、北山も彼から去った。

もしアルピニズムに遭遇しなかったら、また明治からの先蹤者やその系列の人たち（たとえば木暮理太郎、田部重治、冠松次郎、藤島敏男、沼井鉄太郎、深田久弥）のように、様々な理由からその無条件受容を拒否していたなら、今西錦司はどんな人生を辿っただろう。「…もし私が山岳部というものに足をつっこまなかったら（アルピニズムとの遭遇をいう。田口）、私はたぶん孤独な、多少偏屈なところもあろうが、だいたいにおいて楽天的な一博物学者として、一生気ままに内地の山々を遍歴して歩くことに、満足を見いだしていたであろうと思う」と、アルピニズムの運命的衝撃の深さを後年語っている。

こうして青年今西を直撃したアルピニズムは、山の大きなスタートラインを与えた。しかし同時に今西の山を大きく裂いた。旧い山は沈没したように、それから今西の輝かしい山歴に隠れて見えないが、じつは深く潜って伏流となり、今西の山の遍歴に、姿を変えつつ時おり表れる。少年時代の山は今西の分身になっていた。生きている限り分身がなくなることはあり得なかった。なぜかというと、今西が北山で自己合体したのは、ほかならぬ日本の自然そのものであったからだ。

日本の自然は、今西の青壮年期の「日本アルプス研究」と、晩年の「千五百登山」の中に姿を表す。今西の山の、アルピニズムに劣らぬ重要な人生のテーマになるのだが、これについては後程に書く。

いずれにせよアルピニズムは、今西の温もりある旧愛の世界を超え、それを下敷きに進展する新たな情熱の対象になる。ただその対象は、もともと異国の思想と理論で武装されたもので、知的で冷たく固いものだった。

アルピニズムの習得——その伝播について

日本にアルピニズムが輸入された時の状況を今西は、同時的でひろい伝播の姿と書いている。一教祖が次第に伝え

たのではなく、方々で起こった一続きのムーブメントだ、京都のすぐ隣の阪神でも、自分たちと無関係にＲＣＣが起こっている、と。

名指しはしていないが、ここでいう教祖とは槙有恒のことだろう。槙は帰朝後、新しい登山の方向として、「冬山と岩登り」を唱えて革新的な影響を及ぼした。しかしその影響が爆発的にひろがる素地は、槙以前に日本の登山に醸されていた。学習院の板倉勝宣、慶応の大島亮吉は、それぞれ雪の槍ヶ岳と白馬に足を踏み入れていた。体系的なアルピニズムが入る前に、スキーが日本の雪山を手引きしていた。

しかし槙の新知識は氷雪と岩の世界を相手にする総合的知識で、その中では山と取り組む思想・技術・道具のすべてが統一されていた。岩登り術も氷雪技術もスキー術も、その中に仕分けされた部分にすぎず、深く通底し合っていた。

槙をなにより新しくさせたのは新思想が持つ体系性である。日本の登山はこのような体系性を持つことがかつてなかった。明治・大正前期、先駆者たちは日本の山の在るがままの姿に照応させて、様々な登山を創造したが、体系的な登山術まで発展させるに至らなかった。この欠落のために日本プロパーの登山は大きな遅れをとった。そのために「アルピニズムの旗の下に」といった標語さえ一部の若い登山者の間に生まれることになる。

新しい登山は、日本の雪山と岩山を舞台に引き出して活性化させただけでなく、登山風俗を一新させることで、日本のごく普通の夏山の面目さえ変えた。アルプス縦走や黒部入りで、山靴は当然の履物だが、ピッケル、ロープ、リュックサックも普通の携行品になった。これ以来、日本の山のアルプス化が始まった。

登山に新風を吹きこみ、「山の景観の見方」にさえ大変革をもたらした槙は、圧倒的な人物になった。このような山の文化革新はアルプス史では見ることができず、日本でだけ起こることだった。

槙帰朝後すぐに、彼の出身校である慶応とそれと親しい学習院の山岳部の若い人たちが、彼から直接アルプス技術の手ほどきを受けた。岩やロープやアイゼンの知識である。彼らは槙より六つ七つ若く、京都の今西や西堀栄三郎と

年齢はあまり変わらなかった。しかし槙直接の指導下に、日本の雪山や岩場を一番早く本格的に手がけて『登高行』などに発表したので、新登山の抜きんでた先駆者になった。

アルピニズムはもともと異国文化である。慶応や学習院の他に、彼らとほとんど同時期、暁星中学出身で早稲田に進んだ二、三の若者が岩と雪の登山に抜きんでたのは、暁星のフランス文化の濃い背景が彼らにあったからだ。そのグループのリーダー船田三郎は、年齢は槙より四つほど下で、今西より三つぐらい上である。

アルピニズムはこうしてまず東京を直撃し、東京の他校にも伝播したが、変わらぬ速度で地方にも拡がったのは、西洋の山の技術書が入ったからだ。今西が、自分らは槙や東京から教わったのではない、ムーブメントに自動的に参加したのだ、と主張するのは事実として正しいし、その時代のアルピニズムの伝播の早さを物語っている。

しかし三高生の今西らが、まず山の地理を頭に入れるために早い『山岳』のバックナンバーを求め、初期の登山家たちが力をこめて書いた山岳紀行の「情動」にふれ、次に登山の聖典とみられたウィンスロップ・ヤングの『登山術』の難解な英語と格闘している間に、東京の学生による北アルプスを中心とする岩や雪山の主な開拓は、ほとんど一巡し終えていた。

時代の中心人物槙はアルプスに馴染んでいたので、帰朝して味わった日本の山より、もっと大きなリフレッシメントを求める心境になっていたことだろう。その頃ヒマラヤに一緒に行かぬかと、外国の友人たちから手紙の誘いを受けたと彼は書いている。一九二〇年代半ばのことである。イギリスのエベレスト遠征が始まって間もない。槙にとっても、さすがにヒマラヤは高くて見当のつかぬ世界であったに相違ない。

槙がアルプスに似た岩山のアルバータを初登してカナダから帰朝した年、今西錦司は三高以来の山仲間と共にようやく京大に進み、本格的な登山をするところまで来ていた。

東京勢には遅れたが、大正末から昭和初めの日本の山はまだまだ新鮮だった。京大在学の三カ年、今西と彼のグループは、アルピニズムの「初」の思想を追って、日本アルプスの記録に残るいくつかの登山を次々に行った。

アルピニズムの初期、登山者は少数なのに転落と雪崩その他の事故が続出した。時代が若かったという説明もできるだろう。まず帰朝早々の槙が立山の猛吹雪で、板倉勝宣を失った。松方三郎一行が奥穂で滑り、松方もクレバスに落ちて重傷を負った。少し後だが大島亮吉が墜死した。歴史に残る雪崩の大遭難が続出した。

奥又白から前穂北尾根に初横断した今西一行も涸沢側で転落している。

しかし今西らは、薬師岳の新登路、黒部東沢で雪中露営をして源頭の山々に手をつけること、剱の源次郎尾根、三ノ窓チンネの壁などに、登山史上の新しい記録を残すことができた。こうして今西と彼の仲間は東京勢から遅れたものの、アルピニズムの第一陣を承る人となった。

今西らを駆り立てたもの、それは時代の精神アルピニズムにほかならなかった。その精神は山の世界でも、果てしない前進を登山者に強いるものである。この強烈な前進主義はアルプス登山の歴史の中で生まれ、日本の山に乗り移ったものである。

今西のアルピニズム観——屈折と飛躍

今西がヤングの『登山術』や沢山つめて読んだA・Jから身につけ、日本アルプスの実地で用いたアルピニズムはしかし、素直なストレートな吸収のされ方をせず、異常に屈折された。

三高で仲間たちと覚えた新登山（アルピニズム）は、それまでの少年時代の山とは異質のスポーツ的なものと自覚したと今西は述べるが、つづけて、自分の中にもスポーツを楽しむ部分があったと、保留的に表現しているのが目につく。若々しい仲間と初記録を求めて登山を行っている間にも、剱の岩や黒部源頭の雪山の中に心身ともに没頭していたようには書かれていない。そこには「幻滅」という言葉さえ使われている。

新登山の実践のさなかに、彼はいつもなにかを吟味していた。取り組んでいる岩や雪の吟味よりも、体得中であるアルピニズムを吟味している風に思える。それを概念として検討していたと言える。

官能も人一倍豊かな人だが、この人の圧倒的な部分はやはり、概念（コンセプション）的アプローチである。自ら創り出したものなら別だが、それ以外のもの、他人の作ったもの、外部から持ち込まれたものは、完成度が高くても、たとえスポーツ的快味のスリルのある喜びを与えるものでも、納得できる解釈を引き出し、できれば自分流に組み立てなければ、心から楽しめなかった。これは人の作ったものから自分だけのコンセプト（概念・思想）を創る精神の作業を意味した。『私の履歴書』の中に、若い頃ある外国の生物学者の著書から、理論の構成の美しさを感じたことが述べられているが、何事によらず自分の思索の枠組みを作りたがるのは、もともとその人の本性に根ざしていたもので、今西の「気分」とでも呼ぶしかないものだろう。

こうしてアルピニズムは、彼の手にかかると、日本の山という実験台に載せられて、次のように分析され、その分析の結果が、御本人の山の行動も規制するようになる。

第一は、アルピニズムの尺度に合わせると、今西の体験した日本の岩山は、あまりに容易に過ぎる。その対象になるほどのものでない。アルピニズムはその技術にふさわしい、もっと難しい山でこそ力を発揮できるもので、日本の山はその舞台ではない。

第二は、アルピニズムの思想は、「未知を既知に」変える探検に由来するもので、初登頂が尊いのはそれ故である。日本の山には真正な意味でそんなものはない。太古から高山は踏まれ、明治の近代登山の前に測量登山もあった。初登頂の真の概念からすると、季節を変えて、たとえば雪山の初登頂というのは意味のないことだ。

次にしかし、アルピニズムの根幹にふれる分析がでてくる。もともと初登頂や初なんとかといった、初という概念は西洋思想の中からうまれたもので、東洋には存在しなかったものだ。この指摘は、今西をアルピニズムの外に引っ張る力の存在を暗示している。しかしアルピニズムの文脈ではそれだけに終わっており、山との関連で具体的に東洋思想をさらに展開するようにはなっていないが、若い頃の今西の行動そのものを規制したアルピニズムの解釈の紹介がここでは重要だから、今はそれだけにとどめる。

かくして今西一流の解釈は、彼を海外の大山域に向かわせる思想的根拠になった。それもアルプス経験を経ずに日本の山から直接ヒマラヤに挑む。予行演習とも言える白頭山遠征、シッキムのカブル峰、世界第二の高峰K2の遠征計画と、当時の日本では今西は最も突出したヒマラヤ論者であった。東京の「アルプス仕込みの登山家」の目には、さぞかし無謀なことと映ったにちがいない。しかし、これが戦後のマナスルの「発見」につながり、日本人による初の八千メートル処女峰の登頂へと導いたのである。

だが同時に、日本の山からアルピニズムを追い出したのだから、自国の登山についても道理を立てねばならぬことになった。異国生まれのアルピニズムに対する思想的対決が、今西に内外の山への仕切り直しを求めたといえる。

山岳学の試み——日本の山と登山の体系化

アルプス技術は歴史的な強固な体系であり、今西の「気分」に合わぬからといってこれを無視しては行動が始まらない。ヒマラヤの巨峰への志向は、これを仮の形で取り入れ、それをエンジンにして動きだしているのだが、同時に、これとは別に今西の気分に即した別体系の山の構築が始まる。外から見える存在感に満ちた骨太のヒマラヤ路線と並行して、地味で学術的に見える『日本山岳研究』がこれに当たる。

一九二八年から一九三七年までの、ほぼ三十代の時期に主として『山岳』に書いた諸論文は、数年にわたって春、夏、秋にかけて日本アルプスをタテヨコに歩いた今西の研究と思索の跡である。雪崩、万年雪、雪線、森林限界、垂直分布などの研究に見られる今西の「山を見る目」は、日本の山を登るのに役立てるために日本アルプスで養われたものだが、ここで構想されたモデルは外にも拡がった。マナスルの旅を綴った『ヒマラヤを語る』の中で今西は「実はヒマラヤに接する前に、自分はそれを見るための間尺、モデルを日本アルプスでつくっていた」と述べている。欧州アルプスの知識が外から内に適用されたのではなく、日本の山を見ながらその上方にさらに山を重ねて氷河の世界をつなぎ、その姿を構想する。ここにもアルピニズム受容の今西流の屈折と飛躍が見てとれる。

さらに、これらの論文を集成した『日本山岳研究』が約三十年後の一九六九年（昭和四十四年）に刊行されたとき、六十七歳の今西は「自序」を書いて、若き日の日本アルプス研究の背後に常にあった主題、心中深く抱いていた意図を初めて明らかにした。すなわち「山とはなんであるか」、そして「山とはわれわれにとって、どのようなものとして認められるべきか」。

これは今西の山のキーワードであろう。山とは何かという設問は、小島烏水以来の日本近代登山の先達たちが苦闘してきた主題であるが、山をいかに認識すべきか、どのように知覚さるべきかという問いの立て方には、今西錦司の全人格が表現されているようだ。

今西はここで「山岳学」とも言うべきものの建設を志した。その方法として山に住む人々に目をつけた。専門知識は持ち合わせぬが、町の登山家にくらべて山に関する種々雑多なことを実によく知っている人々。山とは何であるかを心得ているかに見える人々。「私が早くから心をひかれていたのは、むしろこの人たちが持っている個別的な知識の系統化であり、同時にまたそれの総合化であった」と今西は言う。そのためには「カゲロウの仕事から、イワナ・アマゴの仕事にうつり、そこでひと夏を黒部川ですごすような釣師の生活とも触れ、つぎにシカやクマを追う猟師の仲間にはいる予定であった。それから私も彼らとともに、彼らの妻子がすむ村にくだって、彼らをとりまく山村の生活を調べおわったころには、私も相当年をとるが、私の山岳研究もそのころには一冊の本として、ようやくその体裁をととのえるに至るであろう、と考えていたのである。」

ここで今西が語ろうとしたことは何か。私の解釈によれば、今西は日本の山と山登りの体系化を目指したのだ。「まとまった自然そのものとしての山」の研究、いわば山の全的把握である。そして山を認識し知覚するということは、山が発信するものと、それを受信するものとの交流を意味する。この交流の担い手を、今西は山人に求めた。自然と人間との間に成立している交信、これは何だろう。山が発信するものを受信する力を持つのは山人であり、普通の人には——今西にも——その力がない。それを究めるために、長期かつ広範な山人との共同生活によってそれを分

析し、系統化し、総合化するというのが、今西の志した山岳学、日本の山の体系化であった。

さて山からの発信を山人が受信するのは直観、勘であると今西は見た。今西自身も学問の方法論として直観をしばしば使ったと述べているが、「山と遭難」（一九六二年）という素晴らしいエッセイの中に、登山における直観の重要さが興味深い例を挙げて語られている。晩秋の奈良ヶ岳に向かった金沢の四高の山岳部員三名が谷ぞいの道を歩いていたとき、一人が「なんだか木の葉から照りかえす日光が、眼をさすようで、どうしても行く気がしない」といって引き返したが、そのまま登りに行った二人は帰らなかった。

この山における予知、虫の知らせ、予兆の受信能力が、今西が注目する山人の直観である。このエッセイを読んだとき、私は『戦場のメリークリスマス』で知られるヴァン・デ・ポストのある作品を思い出した。西洋人のグループがアフリカの密林を旅行していたとき、原住民の案内人が木の葉の様子が変だ、悪い予兆だと言ってとめたのに、かまわずに進んで大事故に遭い、大勢が死んだという話。現地人のみがなしえた自然と人間との交信が、ここでも木の葉を媒介としている。

私の連想はさらに拡がって、デントの『登山』の最終章でピルキントンが、素人の持っていないプロの直観は地形を記憶する力だ、と述べているのを思い出した。またロンドン市中を引きまわされて一人とり残されたスイスの山案内人が、迷わず宿に帰ってきたという有名なエピソードなども、アルプスの山人にそなわった勘、地形を記憶する能力を物語るものだ。私自身、かつてモンテローザに登ったとき、いつものガイドが不在で仕方なく雇った臨時ガイドの氷河地形の記憶能力が乏しく、大いに閉口した苦い経験がある。

ここに、自然の発信する情報媒体に二つの型があると私は思った。かたや木の葉、かたや地形、いずれもその変化を受信するのが山人の直観であるが、山に変化を与えるものが、木の葉は時間、地形は空間である。西のアルプスの山人の直観が空間の変化を読み取る力だとすれば、東の今西が観察した日本の山人の直観は自然の変化を時間でつかむ。

この時間的思考はもともと今西の素質にあったものらしく、たとえば雪崩の研究では形態的類別を排して、時間の経過による雪崩の型の変化に注目したのもその表れであろう。それは雪崩論のみならず、最後には「自然学」へと発展した今西の学問全体にも通じているような気がするのである。

今西にとっての山は静止したものでなかった。動いている山、生きている山と人間＝登山者との交流、発信と受信の諸相を究めることが、日本の山と登山の体系化であり、そのためには山人と居を共にし、山人から学び、自分自身を鍛えていかなければならない。山岳学とはこのように体を張った、今西の全人格的な営みであったといえる。

こうしてつかんだ日本の山の本質が、アルピニズム発祥の地の山と異質なものであるならば、当然その山を相手にするには別の技術、日本プロパーの登山技術が必要となる。今西の尊敬した大島亮吉は「日本の山は日本の山らしく登れ」と言ったが、今西は「技術が山をつくるのではなく、山が技術をつくる」という哲学を生み出した。

残念ながら戦争のため今西は方向転換を余儀なくされ、山岳学の構築は未完に終わった。もしこれが完成していたら、直観にもとずく日本の山人の山での行動（もちろん技術も含めて）を体系化して、ちょうど欧州アルプスの長い歴史がヤングの『登山術』を生んだように、私たちの前に見せてくれたことだろう。また氷河や雪や岩の世界の技術が、無生物的世界のそれであるのに対比して、今西が生んだ世界はもっと生物的で、民俗学的色彩を帯びたかもしれないが、それが日本山岳技術総論の強い側面を持ったものになる可能性は大いにあった。こうして構築された山岳学が、日本の山と、それより高い山々の世界とのつながりをどう説き明かしたか、興味のあることである。

千五百山登頂——晩年の登山

戦争のためヒマラヤ遠征の計画が挫折したあと、軍の調査隊に便乗して満蒙の地に出かけたことを、今西は「登山から探検への切りかえ」といい、「私は蒙古に出かけて、ようやく山の呪縛から解きはなたれた」と述べている（「探検十話」一九六五年）。山の呪縛とは、アルピニズムとの葛藤のことであろうか。それについて今ここでは詮索しない。

そんなことを書いた頃、今西は「国内五百山登頂」完成にむけて盛んに山を登っていた。やがて六十六歳で五百座を、七十六歳で千座を、八十四歳で千五百座を登頂する。このおびただしい数の登山を今西は、山岳研究とはなんの関係もない、たんなる趣味の山になったと説明している。

ここにおいて今西の「ヒマラヤ」も「山岳学」の学問の山も過去に流れて、晩年の今西には趣味の山だけが残った。ただ自然趣味的な山は、山岳学に発展した今西の山の一番深い根源的な源泉でもあった。

「五百山登頂」を語るさい今西は、山登りの第一歩を踏み出した京都周辺の山のことを書き、そこで快感とともに発見した登頂のパターンを述べている。晩年の山と少年の山との背景に似ていることに気づく。今西のおびただしい晩年登山に三角点に至るという目標があり、登山のパターンが若年にできあがっていたこと、無目標の山地放浪とちがうことは誰の目にもわかることだ。

しかし背景の相似に、今西の山の風景の好みが浮かび上がる。マナスル踏査で初めてヒマラヤの山に接したとき、ヒマラヤの遠景は美しいが、近景は荒々しくて美しくないと、今西は洩らしたことがある。低くても視界の中にうまくまとまる日本の山の風景が美しい、と。この指摘は今西の体質的な好みを語っているだろう。

山と里、自然と人の手との境界があいまいだが、樹林に覆われた起伏ある地形を辿っていくと、不思議なことに必ずどこかに一番高いところがある。普通には山の一番奥まったところ、村里から一番遠く離れたところに山頂があり、その山頂への到達を目的として出かけるのが登山だと、日本の山地の「半自然」について述べたこともある。

これはまさに、この稿の初めに記した少年時代の今西の山の原風景であり、常に伏流として今西の内にあったものだ。その上に遠い国へ、新しいものへの憧憬が重なり、アルピニズムとの遭遇でさらに異質の山が重なる。今西の山はまことに重層的な世界であった。晩年の山は、この重層的世界の頂点と見えながら、実は基層をなす少年時代の山への回帰、ハイマート・ベルクへの懐旧であった。

少年時代のヤブ山のピークハンターが、アルピニズム時代の前人未踏派を経たあと、老いたるピークハンターとし

て故郷の山に再び現れ、ついに千五百山を踏破したわけである。

還暦を間近にして、まだアフリカを歩きまわっていたころ、今西はこんな暗示的なことを述べている。「フロイト学者は、退行現象だというかもしれないが、私にとって、すべては山からでて、最後にはまた山へ、かえってゆくのである。」（「ヤマメ釣り」）。

〔編集部から――田口二郎氏は一九九三年三月二十五日の図書委員会主催〝山岳図書を語る夕〟において「今西錦司の山」について語る予定であったが、直前に病を得て中止となった。そのあと講演のために作成したノートをもとに『山岳』のために稿を起こしたが、視力が弱ったため執筆を中断した。そこで、それまでに書いたものと口述を平井吉夫氏がまとめ、田口氏の希望によって望月達夫氏に目を通していただいたのが本稿である。〕

ウォルター・ウェストン青森を歩く

三井嘉雄

昨年末、青森県三戸郡新郷村にウェストン顕彰碑が一つ建てられた。それも個人宅の庭園に自分の費用でという、異例ずくめであった。作ったのは吉田彌氏、その地きっての旧家・戸来家の当主であり、本会々員でもある。碑をはめこんだ岩は、村長の好意でどれでもどうぞと提供されたと聞く。

*

明治三十五（一九〇二）年の青森県は、大凶作であった。九十一年前の話である。田植えの季節に雨がまったく降らず、植え付けができなかった。ヒエ作が収入が少ないため、稲作に切り換えたばかりでもあった。その上、夏には雨続きで穀物が成育せず、秋の寒冷を迎えることになった。東北地方を襲った大飢饉であり、それは三十数年来という規模であった。

作柄は青森県全体で四分作であり、被災者は四万五千人を超えていた。なかでも被害の最も大きかったのは三戸郡で、平年の七厘作というありさまであった。戸来村（今日の新郷村）ではヒエさえも穫れないほどで、食糧困窮は目に見えていた。

十一月末の『東奥日報』によると、「ことに三戸郡戸来村ほか数ヶ村のごときは、品の善悪にかかわらず収穫皆無にして、種もみを全部他町村より購入せざるを得ざる場合に迫りおれば、遠からずして飢えに泣く者路傍に満つべく。」と伝えている。

悪い家ではクズの根から澱粉をとったかすの根、通称アモの三食で、あとは大根だけだった。年末には山之内県知事が戸来村を視察に訪れ、ここの食事を体験した。交通不便なこの村に県知事が来たのは、明治になって初めてであった。戸来、倉石の二村で馬三百頭が食べつくされ、あるいはわずかな現金収入のために売られたという。

代用食としては、ワラ餅とか松皮餅の名が見える。前者がワラを粉にして練ったもので、後者はヤマグワの皮を挽いてつくった餅のことである。これについては、ウェストンによるとちょっと違う。本当に、松の幹の表皮とソバ粉を混ぜ合わせたものだとする。ワラが食用に供されたため畳や縄が不足して、思わぬところに影響が及ぶことになった。

横浜で発行された英字紙『ジャパン・タイムズ』と『ジャパン・ウィークリー・メイル』が、青森飢饉の惨状を報道したのは翌年の一月末だった。居留外国人社会からはすぐに反応があり、救援の募金が呼びかけられて、その額は日を追うごとに大きくなった。そして三月二十三日現在の合計では二万三千円を越える巨額にのぼった。青森飢饉救済基金は募金活動をする一方、その募金を被災地に有効に届けるための模索をしていた。

基金の管財人には、次の人が選ばれていた。T・S・ベイカー、J・W・コップマン、J・ドッズ、H・J・ホーム、R・D・ロビンソンの五人であった。

ベイカーは香港上海銀行の支店長で、基金への送金もこの銀行宛てとなっていた。横浜で最初にできた外国銀行であり、当時の外国人がほとんど依存していた。英国領事館の隣、山下町二番にあった。

それからコップマンは、スタンダード石油の日本代理人の要職にあった。明治二十七（一八九四）年には、ウェストンが乗った汽船エンプレス・オブ・インディアに乗り合わせていた。スタンダード石油は山下町八番にあり、コッ

プマンの下には支配人のJ・S・ハッパーがいて、岡野金次郎がウェストンの著書を見つけたあの奇跡は、この年の二月のことであった。

ドッズはバターフィールド・スワイヤー商会の支店長だった。その来日は慶応三（一八六七）年という古参で、居留地経済人のなかでも重きを置かれていた。そして、大正元（一九一二）年この会社のT・H・R・ショウが日本山岳会へ入会のとき、推薦人になるのがウェストンだった。

またロビンソンは、R・D・ロビンソン商会を経営していた。

基金の管財人は、青森県に派遣する代表者にウェストンとフレドリック・パロットを決定する。二月中旬のことであった。パロットの来日は明治二十三（一八九〇）年で、英国聖書協会に所属していた。明治三十六年の住いは、ウェストンとは八百メートルほどの山手六十番だった。一方のウェストンは第二回目の滞日で、その前年、横浜聖アンデレ教会に着任していた。

二月十七日の午後、二人は横浜駅をあとにして、上野駅で佐々木勇太郎と岡田が合流した。佐々木は医師で、通訳を兼ねていた。十九日の午後青森駅に着き、県知事と打ち合わせた結果、県属の幸田勇貴知も同行することになった。幸田はすでに現地をまわり、状況はつかんでいた。笹森・青森市長もウェストンたちの宿舎を訪れた。

そして二十二日までは、被害の比較的少ない東津軽郡をまわって、管財人には連日手紙で報告し、電報も打っている。雪道で、みぞれだった。

二十三日は、沼崎停車場に降りたつとH・セントジョージ・タッカーが待っていて、一行に合流した。自発的な協力だと思われる。タッカーはこのとき弘前の牧師で、のちに立教大学を創設し、帰国後は米国聖公会の総裁主教に就任する。この人の登山好きも有名で、日本山岳会に所属したほどの熱の入れようだった。

この日は浦野舘などを視察したが、才市田の一軒では、生後半年の赤ちゃんが力なく泣いていたため、ウェストンはミルクでも買うようにと、自分の小銭を与えている。道が凍っていて、ソリをつけた馬車があまりにも揺れるため、

ウェストンは地震馬車と呼んだ。

翌日も七戸周辺だった。パロットは写真機を持参していて、視察した家の状況を写している。そして郡長と打ち合せ、雪が消えるまでの二ヶ月分として、被災者一人あたりアワが二合二勺として合計三五〇石、味噌は三勺として十二貫入り二九〇樽、古毛布八六〇枚を送ることにした。味噌だけでも十四トンである。飢饉の救済に毛布というのもおかしな話だが、ウェストンの報告では、どの家も寝具はボロかワラかゴザだった。

配分について、群長とは次のように取り決めた。七戸町、大深内村、浦野舘村の分は各村長に渡し、それ以外の村には、その近くの駅から村役場に運んで渡すことになった。すなわち野辺地町、横浜村には野辺地停車場で、甲地村、天間林村へは乙供停車場で、四和村、藤坂村、奥瀬村、三沢村、三本木村、六ヶ所村、法奥沢村は古間木停車場で、下田村、百石村、六戸村の分は下田停車場からであった。

この日から電報が頻繁になる。「七戸を訪ねた、大勢が救済を必要で、食糧の支給もっと迅速に。ここで買える。このため五〇〇円をウェストンに送れ、安田銀行。ロビンソンが毛布千枚送るか知りたい。」

二十七日午後四時五十五分、「最悪地域の救済一一〇〇〇円かかる。南部は未確認。青森でずっとやっていいか、時間かかる、指示の電報くれ。」日付けは二十五日が正しい。

タッカーは次の日から、ウェストンの指図にしたがって、一人で北津軽郡と西津軽郡をまわる。中里、竹田、内潟などであった。ウェストンは管財人に連絡して、タッカーに四〇〇〇円を送るよう依頼し、それは送られた。

二十六日は青森市に釘づけだったらしい。横浜、午前十時三十分、「状況判断まかせる、完全な青森救済作業を。予約申し込み合計六〇〇〇。管財人。」

横浜郵便電信局から管財人に手紙が届き、前日のウェストンからの五〇〇円は、五〇〇〇円ではないだろうか、と照会してきた。横浜、午前十一時三十分、「最初の電報は昨日裁断、五〇〇と読んだが正しくは五〇〇〇。差引き四五〇〇あす電送。きょうは銀行全部閉店。管財人。」青森、午後十二時三十分、「返信受領、それに応じて続けたい。

送金九五〇〇にしてくれ。」

小湊に最初の貨車が到着した。たぶん、貨車は一列車仕立てたと思われる。二十七日に配布が始まった。村役場では、集まった人たちにウェストンが語り、居留外国人から救援品が急送されたこと、次の収穫が良好になるようにと説明して、佐々木が人びとに取り次いだ。続いて同行の幸田が、倹約の励行、勤労を怠けないこと、外国人の好意を心に刻むように、と言葉を加えた。配分については困窮の度合が考慮され、一度に使ってしまわないよう、二ヶ月の間、毎日配ることにした。ウェストンによると、村人の顔が輝いていたという。

この日も電報だった。横浜、午後十二時四十分、「電信振込は日に二〇〇〇が限度、今日二〇〇〇電送した。安田銀行。残りは後日。」青森、午後五時、「電送ありがたく。最初の地で食糧と毛布の配布から帰ったばかり、官吏はよくやっている。外国人の援助に被災者からは多大な感謝。土曜以後の宛先は三戸郵便局宛に。」

二十八日は土曜で、銀行から金を引出したあと、支給品を購入した。アワだったらしい。青森、午前十一時五十五分、「安い米七二〇ピクルを沼崎駅へ、一〇八〇を三戸へ送られたし。急送。それぞれ沼崎駅長と三戸駅長気付ウェストン宛。日曜に三戸に行く。通信宛先は三戸郵便局。以後、青森への送金止めろ。」ピクルは重量の単位で、換算すると沼崎へ約五〇㌧、三戸が約七〇㌧となる。また、前日の残りの送金は青森の安田銀行へはしないよう、という意味であろう。

土曜は続けて配布の打ち合せ、新しい契約、訪問者の応対、計画の再調整に追われた。そして夜遅く、山之内知事に別れの挨拶。

三月一日の朝、三戸に行くため青森駅に来ると、県知事と郡長が見送りに出ていた。ウェストンは管財人への報告で、被災者に代わって、外国人社会への感謝が惜しげもなく表現されたとしている。

翌日は文治屋敷、蛇沼などを視察した。寒い朝で、滑りやすい十二㍄の山道だった。ウェストンはゴム長靴をはいていた。それでも帰路に雨にあい、油紙の帽子をかぶったが服はずぶ濡れとなった。同行の日本人たちは疲れのため、

ウェストンよりも一時間も遅れて宿にもどった。そして、その晩のうちに汽車で尻内停車場に向かった。

三日は横浜からの貨車の到着を待つために、パロットは尻内に留まり、残りは八戸周辺の調査をしたらしい。二日間かける予定だったが一日で打切り、五戸などの計画をねっていた。

貨物列車が沼崎に着いたのは、四日だった。外国米が六輌、味噌は二輌で、内訳は米が六斗入りで四九三袋、味噌が予定通りの二九〇樽、毛布は三九〇枚となっている。ウェストン一行は、この日の朝、パロットを残して尻内から五戸に向けて馬車で出発した。揺れる馬車については、甘やかした身体には厳しすぎたと記している。

五戸には昼に着き、三時間半歩いて戸来に到着した。親切にも金ヶ沢の郵便局長の家で、その晩泊めてくれることになった。ときの局長は戸来喜代治で、前村長でもあった。いままでは宿屋で泊まっているから、この食糧不足の中で民家での宿泊は、ウェストンを痛く感激させたに違いない。近くの小学校では、生徒が弁当を持ってこれず、二、三人が学校に来るだけだとも聞いた。

また、三戸には貨車が五日に到着したようで、パロットが電報を打った。八戸、午前十時二十分、「米四輌、沼崎。四輌、三戸に到着。毛布九〇〇、青森。配布手はず中。」沼崎への米が四輌とあるが、間違いかと思われる。

同じ日、ウェストンたちは忙しかった。朝七時十五分に出発して、土砂降りの中を羽井内と上栃棚をまわった。欠乏の深刻さは最悪で、どの家も食糧の貯えはまったくなかった。その中の一軒では盲目の子息が川でセリをとって、アモと混ぜて食事としていた。三時間ののち金ヶ沢に帰り、郵便局長の家で着替えをし、もう一度食事を受けている。

午後は扇ノ沢から谷地中、太田を調査して五戸にもどった。この日は、戸来村の小坂村長と倉石村の丸谷収入役が同行したが、丸谷によると、ウェストンはひざまで埋まる泥の道を歩き、被害者に何か物を恵み、あまりの惨状に涙を流したという。次の日、尻内でパロットに再会した。

パロットはウェストンと別れた日、上長苗代村の村長と調査にまわっていた。ある老人の家では、杉の木の皮を粉にして大根と煮ていたし、別の六人の子どものいる母親は、赤子に与える乳が出なかった。そして調査の範囲を拡げ

れば、困窮者はもっと数を増すだろうと述べている。

六日は、到着した食糧を配布する日で、パロットは村役場へ行った。雪道のため、受け取って家に急ぐあまり、転倒者が続出した。それから、基金に寄付した人たちに配布の事実を伝えるために、写真を撮っている。八戸、午後二時、「支給衣類品、すべて受領。現在、配布中。どこでも心からの感謝。土曜の晩、横浜へ出発。通信は打切れ。」

ウェストンは浦野舘だった。村役場には被災者が集まっていて、ウェストンたちが立ち去るとき、集まった人全員が道に出て見送った。

一行が任務を終わり、横浜への帰途についたのは三月七日のことだった。

タッカーはまだ続けていた。十二日には青森市近郊の原別と野内で救援品を配布した。受領に来た人の中には病人もいて、気の毒だったと報告している。そして次の日は五所川原を調査していた。さらに十四日は木造にいた。その晩は十一時過ぎに床についたが、夜半過ぎに郡役所の職員が打合せに訪ねてきた。タッカーは十五日には弘前に所用があり、朝二時半に馬車を予約してあったから、一睡もできなかったはずだ。

居留外国人が動きだす数週間前、青森を歩いて惨状を訴えた人があった。A・ベルリオーズである。ウェストンは、「彼が注意を喚起しなければ、困窮はもっと悪くなったと思われる。」と述べるほどだった。ベルリオーズはフランス人司祭で、この年は函館の教区長であり、トラピストやトラピチヌス修道院などを創設している。

送られた救援品を集計すると、外国米一、一六〇石六斗、味噌一〇、八九〇貫、毛布一、三七二枚で、これには北津軽郡の味噌が含まれていない。ほかに現地調達のアワがあった。外国人の救済によって、七千人が命をつないだ。

*

ウェストンは、翌年の日露戦争被害者外国人の会にも協力し、明治三十八（一九〇五）年に帰国した。その年も東北地方は不作となった。明治三十九年三月に、ウェストンはイギリスの有力紙『タイムズ』に寄稿して日本への救援を呼びかけた。

「ちょうど三年前、似たような飢饉が日本の本州の北端で荒れ狂った。私は、日本在住の外国人から寄せられた基金を配分する特権を得た。厳しい真冬に、私が何回となく見た気の毒な状況を述べるには、ちょっと勇気がいる。」としている。後日の同じ新聞に、再びウェストンからの報告が載った。集まった寄付金はロンドン市長官邸基金に渡された、というものだった。さらにそれからずっとして、基金を寄せた人に駐英日本総領事から礼の品が届いたらしく、住所が判らない人の名を列記して、情報を求めていた。

ウェストンによるこれらの行動は、困っている人を見るとじっとしていられない、彼の性分に負うところが大きい。特に日本びいきのウェストンにとって、日本と聞けば、いてもたってもの心境だったであろう。友人に宛てた手紙にも、日本のことを聞くとホームシックにかかりそうだ、と語っている。

大正十二（一九二三）年の関東大震災のときも、そうだった。ウェストンはイギリスの西南端コーンウォールにいたが、『タイムズ』で知ったらしく、地震から四日後の日曜日には地球の裏側のゼナーの教区教会で説教し、募金を始めていた。

ウェストンは、そういう人であった。

*

新郷村には、今年もう一つのウェストン碑が建った。村長であり本会々員の木村弥太郎氏が、村としての感謝を顕したものだ。建立記念式典の日、日本山岳会の松田雄一評議員が参列した。

『タイムズ』の記事は、安江安宣氏の発見による。

新上高地山岳研究所の建設
―日本山岳会百年史の資料ノートとして―

石橋正美

一九九三（平成五）年四月二十八日、新しい上高地山岳研究所の竣工式が関係官庁、関係諸団体、地元の方々の出席を得て盛大に行なわれた。改築の構想が生まれてから足かけ六年、山研改築特別委員会が発足してからでも二年六ヵ月、改築関係者にとっては多少の感慨なきを得ない日であった。

新しい山研が完成したところで，山研の歴史をひと通り簡単に振り返ってみたいと思う。

〝初代〟の山研―神河内山荘

現在の場所に、本会が最初に研究所を持ったのは一九六一（昭和三十六）年のことである。もとは案内人組合のものであった小屋を、その借用地ごと本会が譲り受け、改修工事をほどこして同年十月二十九日に落成式を行なっている。木造平家建て二十坪、和室四室に風呂場、炊事場が付き、収容人数は二十人の規模で、翌六二年の夏から平林次男夫妻を管理人として常駐させ、会員の利用に供している。使用料は当初二食付きで会員四百円、非会員六百円であったが、翌年には各百円ずつ値上げされた。本格的な利用が始まった一九六三（昭和三十八）年には神河内山荘運営委員会が組織され、高山忠四郎氏外六名の委員が委嘱されている。本稿を書くにあたって当時の宿泊帳を見たところ、

六三年の利用者は約四百五十名、六四年も四百名を超えていた。非会員の利用が相当数あるにしても、現在の利用者数と較べて当時の会員数を考えると大変な利用率である。また利用者の大部分は二十歳台の若者であり、往年の登山界の姿が思い出されて興味深い。当初は上高地山荘とも神河内山荘とも称したが、やがて神河内山荘に統一し（会報「山」第二二八号）、以後閉鎖するまでこの名称が用いられた。開設した当初意図した山岳綜合研究所としての表現例はあまり見当たらない。しかし古い家屋に手を加えただけの神河内山荘も次第に老朽化が進み、利用者も減ってゆくという事情も加わって、ついに一九六九（昭和四十四）年を以て閉鎖のやむなきにいたった。

神河内山荘の由来については、日高元会長が会報「山」第三六二号に詳しく書かれているので、ご一読されたい。

〝二代目〟山研の建設

旧上高地山岳研究所が竣工したのは一九七三（昭和四十八）年十月のことだから、本会は四年間山荘を持たない時を過ごす。しかし、新しい山荘を持ちたいという関係者の熱意は非常に強く、建築資金の調達から、関係官庁への許認可申請、又、設計、施工監理など大変な苦労をされて、旧山荘よりひとまわり大きな研究所を完成させることが出来たのである。この間の事情については『山岳』第七十年に山崎安治氏が報告されている。

建物の概要は、木造二階建て、延床面積一〇九・九平方メートル（約三三坪）、一階が玄関、厨房、ホール（食堂）、浴室、便所、倉庫、管理人室で、二階に二つの寝室を兼ねた研究室（和室）を設けている。収容人数は二十人とした。翌一九七四（昭和四十九）年六月十日から一般会員に開放しているが、その一週間前のウェストン祭には関係者が宿泊し、宿泊者名簿の第一号に槙有恒氏が署名されている。

今度は最初から上高地山岳研究所（山研と略称）と称し、同時に制定された利用規定の前書きにも「登山知識と技術等の研究向上と会員相互の懇親をはかるなどの目的のために建設された」と明記されている。前記『山岳』には、そのような名称を使ったのは関係官庁から許可を得るための方便であった旨記されているが、その後山研の名称は完全に定着し、今では「さんけん」の愛称で親しまれるようになった。初代の管理人には津村誉治・はる夫妻になって

いただいたが、一九八二（昭和五十七）年からは島田満・田端光子の両氏に替わり、現在に至っている。初めに設定した会員千円、非会員千八百円の利用料は、最後には会員千八百円、非会員二千八百円にまで値上がりしている。開設以来十八年間、登山の基地として、会員親睦の場として、旧山研は大いに利用された。しかし利用料収入は維持管理費を賄うには程遠く、初め意図した独立採算は達成されることなく赤字の運営が続いたが、利用した会員が充分山研生活を楽しんだとすれば、費用の持ち出しは決して無駄ではなかったと信じる。最近の利用状況を見ると、ここ五ヵ年間平均五百七十人で、最も多い年で六百八十九人であった。又、その間の赤字は平均年五十万円程度である。

時代の要請に応えて改築の検討

こうして先輩たちが苦労して造り、多数の会員に愛され利用された旧山研も、二十年近くの厳しい風雪を経て、思いの外老朽化が進んできた。又、その間の登山界の事情の変化に対応するにはどうしても不足の部分が目立つようになってきた。それが具体的に話題になり、建て替えようという気運が山研委員の間に盛り上ってきたのは一九八八（昭和六十三）年前後、太田担当理事の頃のことである。山研委員に建築士の溝口洋三氏（現山研担当理事）を加えて図面を引き、理想的な山研像の模索を始めたのだった。

山研委員会のメンバー以外の会員の間に山研の建て替えについて認識を共有するようになったきっかけのひとつは、八九（平成元）年八月二十六日、現地で行なった「山研を考える集い」である。会報「山」第五三三号でその報告がされているが、さまざまな問題点が提起され、結局は抜本的に建て替えなければ問題解決にならないだろうという方向付けがなされたのだった。即ち①建物の老朽化、②管理人室の衛生問題、③設備の不備（便所の男女共用、炊事室の狭さ、個室の不備等々）、④収容人員の不足等々。加えて国際交流に目を据えた対策、登山の啓蒙に寄与する施設等。これらは改築をしてそれ相応の設備を整えなければ解決不可能なことばかりである。

山研改築を会の事業として行なうためには正式な機関決定が必要であり、機関に諮るためには資金計画を始めとして関係官庁の許可の可能性など相当高い実現の見通しをつけなければならない。そこで先ず、監督官庁である環境庁

に相談したところ、建物の色や資材等々について若干の注文はあるものの、改築は方向として可であり、面積は一五二・六九平方メートル（四六・二坪）とするもこれ以外に地下室（半地下でも可）を設けることは差し支えない、という回答を得た。これで面積は現在の約一・五倍、地下室を加えると二倍以上の建築が可能となり、これだけあれば理想的な設計が出来ると委員一同喜んだものだった。この面積の上限は、旧山研を建てる際に許可された面積であって、事情があって規模を縮小して建てたのだが、許可面積として環境庁にそのまま残っていたのだった。

資金については、多くを会員の浄財に仰ぐとしても不足分をどうするか、なるべく借金はしたくない。旧山研のときは日本自転車振興会から補助があったということなので今回も非公式にあたってみたところ、補助を受けられる可能性はあるという。結果として自転車振興会からは総事業費の約半分の六千万円に近い巨額の補助金を交付された訳だが、この辺のことは山研委員ではないが近藤隆治会員の影の力に依るところが大きい。又、地元の会員、営林署、環境庁、安曇村、旅館、山小屋の人たちに対しても機会ある毎に理解を求めてきたおかげで、大方は改築に好意的になっていた。こうした環境づくりには、太田委員、小倉茂暉山研委員長の人柄と努力に負うところが大である。

さらに、折から建設中であった上高地汚水処理施設が九一（平成三）年十月に完成する予定であり、その頃に的を絞ればこれ又工事費用の面でもタイミングが良い。

新山研建設へ始動

こうして改築の可能性が充分にあるとの見通しをつけたところで九〇（平成二）年三月の理事会に諮り実施の方向で進むことを確認した。ただ資金の問題もあって九一（平成三）年以降を目途とすることにはなったが、同年の通常総会ではこの旨発表し、ようやく全会員の知るところとなったのである。

その後、なお鋭意各方面との詰めを行ない、可能性をさらに高めた上で同年九月の理事会に山研改築特別委員会の設置を提案し、承認を受けたのである。直ちに藤平副会長（当時）を委員長とし、小倉山研委員長を副委員長とする十六名（後に二十二名）からなる特別委員会が組織され、翌十月の理事会で承認を受けて早速山研増改築の具体的事

業にとりかかることになったのである。

設計は溝口洋三、小川武の両委員にお願いした。溝口は原案の頃から関わってきたのであったが、小川と共同することによってさらに完璧を期したのである。ただ図面を引くだけではなく、確認申請を始めとし、おびただしい数の官公庁への提出書類の作成や折衝、建築業者との接触や工事施工管理、さらには日本自転車振興会の補助金交付申請の手続等々、恐らく改築事業に一番多くの時間を割いたのは溝口であったろう。労を多とするよりも、安い設計料にもかかわらず献身的に働いてくれたことに申し訳ない思いがする。

両名とも建築の専門家であり、改築には強い意欲を持っていただけに設計作業は加速度的に早まり、九一（平成三）年三月号の会報にはその概要を公表出来るまでになった。会報を通じて会員の意見も多く取り入れる試みもしたが、基本的には原案とそれほど変わることはなかった。総床面積二四六・一二平方㍍（七四・四七坪）、地下室の約半分は山岳資料展示室とし、あとは会員のための浴室、洗面設備、男女別便所、倉庫等とした。展示室には直接外から出入り出来る入口を設け、天井には明かり取りもつけて外光を採り入れるようにした。一階（八五・五九平方㍍）は食堂を兼ねた集会室を中心に玄関、厨房と管理人の居住区。厨房は複数のグループが同時に利用できるような構造にし、管理人専用の浴室、洗面所も設けるようにした。地下室が既に地面から二㍍以上高くなっているので、玄関へは階段を使うことになり、階段を昇ったところにちょっとしたテラスを作る余地が出来た。二階（六六・八六平方㍍）には宿泊部屋を兼ねた研究室を二つと、ゲスト・ルームを設けた。研究室は、それぞれ八帖と十二帖の大きさがあり、ゲスト・ルームと合わせれば従来の一・五倍の宿泊が可能となった。

建築施工は松本土建㈱に請負ってもらい、九一（平成三）年の利用を終えた十一月、早速旧山研の解体にとりかかった。「上高地山岳研究所」の看板とＪＡＣのマークは次代に引き継ぐことにして山から降ろした。そして雪解けを待っていよいよ建築工事が始まることになる。工事の出来る期間は約八ヵ月しかなく、しかも観光地ゆえに休日は工事をしてはならないという制約の中で何とか工期を守ってもらえたのは幸いだった。その間、これも建築業を営む太田委

員が何度にもわたって現場に滞在して、工事の監理をしたり東京との接点を努めたりしてくれたことも忘れてはならないことだろう。

上高地は風景そのものが国の特別天然記念物となっており、開発に対する規制は極めて厳しい。しかも、いくつもの法律がいくつもの官庁と絡み合い、それをひとつひとつクリアするのは大変な仕事だった。九二（平成四）年に入ってそれら官庁（環境庁、文化庁、営林署、長野県松本地方事務所等）に各種申請書の提出を始める。建築確認申請が許可されたのは三月十七日であった。

地鎮祭は九二（平成四）年四月二十六日、安曇村、環境庁等の関係者を招いて行なった（会報「山」第五六五号）。既に旧山研は跡形もなく、敷地を囲む石垣だけが妙に佗しかった。その約一ヵ月余り後、ウェストン祭のついでに行ってみたところ、建物の輪郭に縄引きがしてあったが予想外に大きな規模なのに驚いた。基礎工事が終わり、建物が建ち上がってゆくに従ってこの驚きはますます大きくなり、山研委員の間でも「壮大」とも「偉容」とも表現されるようになった。夏の好天が幸いして工事が捗り、九月三日に上棟式が行なわれた（会報「山」第五六九号）。棟板には藤平委員長の揮毫で「平成四年九月吉日　日本山岳会建之　天長地久四海波静　曲尺武寸之水」と書かれ建物の上部にとりつけられた。十月に入って天候が不順となり工事は遅れがちとなったが、何とか年内にとピッチを上げ、ほぼ予定通り下水道工事も含めて建物部分は十二月初旬に完成し、十二月十四日の松本地方事務所の竣工検査を済ませたのだった。既に上高地は五〇㌢の積雪だった。

山研改築に要した総費用は用度品を含めると一億二千万円を超える。当初これほどかかるとは思わなかった。既に述べたように自転車振興会から建築資金の半額の補助金が出るということをあてにし、あとは会員の浄財、会の基金、借り入れ金で賄うとしても、調達の見通しに確信があった訳ではない。

山研改築が会の事業として認められる丁度その頃、ナムチャバルワ登山も具体的になりつつあった。改築特別委員会が承認された九〇年九月の理事会ではナムチャバルワ登山のプロジェクト発足も同時に認められている。早くも十

一月初めには偵察隊が派遣され、翌三月の理事会では募金委員会を含む登山隊の組織が承認されている。しかし、会員に対して山研改築と登山の両方で募金のお願いをするのはどうかということから、結局合同という形で募金活動を行なうことになり、それが理事会で決まって五月十八日に第一回合同募金委員会が開かれたのだった。そして早速募金活動を始めてみると、予想外に大きな反響があって極めて順調なスタートを切ったのである。ひとりで数回応募された方も大勢あり、九三年九月初めの段階で延べ二千六百五十八人、四千五百十万円を超える浄財が寄せられている。またこの外にも女性懇談会から六百万円を超える寄付をいただいた。

日本自転車振興会の方は、これも山岳研究所建築の趣旨を良く理解して下さり、資金の半額補助が認められたのだった。

改築にあたってのいくつかの新しい試みの中で実現出来た最たるものが山岳資料展示室であろうか。本会の所有する多くの貴重な資料を展示して、一般にも公開し、山岳に関する知識の普及、健全な登山の指導に寄与することは、まさに本会の目的に合致する。また上高地観光の新しい目玉としての期待もされ得る。展示は資料委員会が担当し、オープンにあたっては山岳会の歴史、女性登山史、山の装備等の資料が展示された。

また逆に実現出来なかったことのひとつにクリーンエネルギーの利用がある。善六沢の水流を利用して発電をし、展示室の照明等をそれでまかなうという試みで、これについては会報「山」第五六二号で計画案が詳報されている。鳥居亮会員等に大変ご苦労を掛けたが、主として資金の関係で断念のやむなきにいたったのは残念である。しかし可能性は充分あることなので近い将来の実現は期待出来るだろう。

さて、新山研は開所以来誠に順調である。特に休日は早くから予約で一杯となった。この調子でゆくと初年度は過去最高の利用者となることが予想される。利用料金は維持費が増えることを予測して四割相当額を上げさせていただいた。これで非会員料金は近隣山小屋の素泊り料金とほぼ同じになる。利用の手引きは会員名簿に掲載されているが、管理人の指示に従って特に火の元には十分に気をつけて大切に使うようにしたい。まだ若干手直しを要する部分もあ

り、展示室の宣伝も不十分であって問題なしとはしないが、山研委員会、資料委員会の連携プレーで徐々に会員の期待に応えうる山研を造り上げてゆきたいと思う。

こうして思いの外立派な山岳研究所が出来たのも多数の会員の理解と支援があったればこそで、ここで改めて御礼を申し上げたい。又、改築にあたって表舞台で働いた関係者は勿論であるが、地元信濃支部の方々や、いちいち名前は挙げないが目に触れないところで誠心協力下さった多くの方々に対して心から感謝申し上げたい。

国際山岳連盟（ＵＩＡＡ）の組織と課題

神崎忠男

はじめに

国際山岳連盟は一九三二年八月二十七日、シャモニー（フランス）において発足した。今年で六十年以上の歴史をもつ国際山岳連盟も当初は親睦から出発し、交流、情報交換と世界の登山界のロビーとして進展してきた。現在では五十ヵ国、六十八団体加盟という国際的な組織になり、活動も親睦・交流を越えた具体的、実践的なものに発展し、各国の期待も大きいものがある。ただ、登山、山岳に関しては山をもっている「ホスト国」、山を登りに行く「ゲスト国」など国によってその考え方、態勢が違う。そして、山岳組織や登山団体をもっていない国もまだたくさんある。そういった観点からみるとまだまだ緊張と期待の発展途上にあるともいえる。

しかしながら、現状においては関係各国、加盟団体、そして登山者の一人ひとりが世界的に登山の秩序を守ることに心掛けていくことがこれからの国際登山界に重要なことであり、日本の登山界においても必要なことと関係者のひとりとして信じている。

一九九二年十月に国際山岳連盟総会及び理事会が松本市で開かれたのを機会に国際山岳連盟の現状について報告し

てみたい。

ＵＩＡＡの機構

国際山岳連盟は英文で“THE INTERNATIONAL UNION OF ALPINIST ASSOCIATION”と呼ばれ国際山岳協会連合が直訳的日本名ということになるが、日本山岳協会国際部で日本語での呼び方を「国際山岳連盟」に統一した。会議および資料の常用語（公用語）は、英語、仏語、独語の三ヵ国語が使用され、中でも英語を主要語としている。ＵＩＡＡ松本国際会議は、英、仏、独、日の四ヵ国語の同時通訳で実施、会議の円滑化を図った。

㈠　国際山岳連盟

国際山岳連盟は、世界各国の山岳協会のほとんどが加盟する連盟で協会間の交流、情報交換などの役割を果たすことによって、登山の発展に寄与していく。

㈡　会　員

加盟国五十ヵ国、六十八団体（一九九二年現在）

㈢　目　的

国際山岳連盟は、一般的には登山に関連した問題の解決を主たる目的としているが、特に山岳環境、自然保護の問題、スポーツクライミング競技のオリンピック種目参入など、登山に関するすべてのことの振興と奨励を世界レベルで図っている。

㈣　設　立

一九三二年八月二十七日、シャモニー（フランス）において設立された。

㈤　組　織

①総会　毎年秋に各国持ち回り制で開催。

②理事会　十八ヵ国、毎年春と秋（総会開催時）に開催。

③委員会　委員長中心に会議を招集し、活動を推進。
④監事会　総会に合わせて監査業務を司る。

(六)　本部所在地

C／O　CLUB　ALPIN　SUISSE　HELBETIAPLATZ　4　CH—3005　BERN
TEL　031・43・36・11　FAX　031・44・60・63

(七)　主な活動

①国際交流、親睦、情報交換
②山岳環境保全、自然保護
③スポーツクライミング競技の指導と振興、大会開催
④安全対策（遭難対策）
⑤高所登山医学研究および山岳医療データーセンターの運営
⑥安全基準の検討
⑦国際山岳連盟登山者装備基準
⑧広報活動　国際山岳連盟報の発行その他資料、文書広報
⑨各専門委員会活動

(八)　専門委員会活動

一、安全委員会

①登山者、ロッククライマーの使用する用具、装備の質の向上、安全性を研究。
②素材、材料の高品質を保証する安全基準（UIAA基準）の作成および認定。
③事故発生時における人体への影響に関し登山者およびロッククライマーの安全な方法を研究。

二、青年委員会

①若い登山家を対象に、国際レベルでの研修を開催し、新しい登山技術の習得と交流の機会を提供することによって文化交流を図る。

②若い世代に環境問題について考え、自然と共生を図るための活動、運動に参加することを奨励し、世界の山が直面している現実的な環境問題への関心を喚起する。

三、自然保護委員会

①クリーンな山岳の実現のために連盟加盟国及び会員、国際機関等とも協調連携をし、山岳の資産を守るための活動、運動を展開している。

②山岳環境をおびやかす様なそれぞれのケースに対して、その解決のためにＵＩＡＡメンバーの諸団体を援助したり、山岳環境を資産的にするために国際的機構を通して協同、協力を図る。

③山岳環境保全に対する世論を喚起するとともに、自然保護の啓蒙、山岳における水の浄化、山小屋の建設及び管理、ゴミの処理、トレッカーや登山者の行動規範の確立に力を注ぐ。

四、遠征委員会

①トレッキングや遠征によって引き起こされる問題を受け入れ、特に、中国、インド、ネパール、パキスタンと遠征隊のそれぞれの利益を守りながら、より望ましいヒマラヤ登山が行えるよう、当時国と話し合っていく。

②遠征隊、登山隊によって起こされる問題として、自然保護、ゴミの処理（環境）、入山許可、税金、遭難対策、救助、安全などの問題について加盟国との連携、国際機関との協調をもって対応する。

③各国の登山スクールにおける技術研修を援助し、高山に於ける山岳環境保全、自然保護への関心を喚起、啓蒙を行い、山岳保護の強化を図る。

五、医療委員会

①高所医学、高山医療に関連した、調査、研究、会議、出版等を実施。
②ロンドンに国際山岳連盟医療データーセンターを運営、調査及び結果等研究成果を公表する。
センターの所在地　St. Bartholomew's Hospital 38, little britain, london, ECI A7 BE　TEL 071-601-7662

六、登山委員会
①さまざまな条件、例えば、岩、氷、などにおける登山技術の向上を目指す。
②新しい近代的な登山技術、例えばハングライダーや、山岳スキーなどの発展に関する調査、研究を実行。
③ＵＩＡＡ自然保護委員会や安全委員会、その他の委員会と協同して共通の問題、課題に取り組む。

七、クライミング競技委員会
①スポーツ・クライミングとしてクライミング競技の発展と促進。
②ワールドカップ、世界選手権等、国際山岳連盟が公認する協議会として大会、競技の運営、管理を図る。
③競技運営のための基準づくり、競技役員、審判員、ルート設定者の育成や指導を図る。
④ＣＩＣＥ、国際クライミング競技会としてクライミング委員会の執行、実行部、国際山岳連盟公認の大会、及びプログラム、組織づくり等を実践する。

八、文書、広報委員会
①登山者、及び加盟団体会員が必要とする特殊な情報を提供する。
②特定及び一般的な情報を提供するための文書、資料を作製、それらを専門家によってデーターベースとしてまとめている。
③情報収集、及び交換等、管理及び基準づくりを行っている。
④具体的な活動の一つとして、山岳活動並びに専門の定期刊行物の最新リストの整理を行っている。

九、財政委員会

①国際山岳連盟の中期、長期の財政運営を担当し、会計及び資産管理を行っている。
②将来の財政ニーズを満たすための財政確保の任を務めている。

日本の加盟

一九六七年（昭和四十二年）頃、ドイツ山岳会を通じて、日本に国際山岳連盟加盟の要請があった。一九六七年十月六日にスペインのマドリードで開催されたＵＩＡＡ年次総会にオブザーバーとして正式招待を受け、加盟が具体化してきた。

ドイツ山岳会会長で、当時ＵＩＡＡの庶務を担当していた、ハンス・ファーバー博士の手紙（一九六七年七月三日付）により、日本山岳会理事・評議員会で検討。その手紙の内容の要旨は次のようなものであった。

・ＵＩＡＡの執行部で検討した結果、日本が加盟することを希望している。
・日本山岳会と日本山岳協会のどちらかが加盟されることがのぞましい。ＵＩＡＡ規約では両会の加盟も差し支えないが、ＵＩＡＡの中では両会の一つの発言が望ましい。（決議権は一国一票制）

早速、当時の日本山岳会会長松方三郎氏と日本山岳協会会長槙有恒氏の名のもとに文書の交換があり、当時日本山岳協会は法人化の手続中でもありＵＩＡＡ加盟については、組織の態勢も整わず、日本山岳会に加盟をお願いしたい旨の連絡が有った。これを受けて当時の日本山岳会海外連絡委員であった近藤等氏を中心に、定款の邦訳に着手すると同時に一九六七年（昭和四十二年）十月のＵＩＡＡ年次総会に加盟の申請手続きをした。

当然、日本加盟が承認され、その後日本山岳会の会員の中から、外国に精通した人や、海外登山等の経験者をＵＩＡＡに派遣していたが、国内においても日本山岳協会が登山の行政的な活動を行うようになり、日本の登山界の秩序を守る意味からも、ＵＩＡＡ派遣、ＵＩＡＡ活動を日本山岳会から日本山岳協会へ移管するのが望ましいのではないかという、日本山岳会の提案をもとに両会が話し合った結果、日本山岳協会海外委員会が組織的に国際交流の窓口となり、日本の代表として、ＵＩＡＡへ参加することになった。その後、丹部節雄氏の努力で理事国ともなり、アジア

においても中心的加盟国として国際登山界に寄与してきた。

そして最近に至り一九九二年十月、松本で国際山岳連盟総会及び理事会を開催した。一九九三年度に於けるＵＩＡＡアジア地区の副会長として日本山岳協会斉藤一男会長の就任は日本がＵＩＡＡの一員として定着し、責任と使命を果たしていく役割が大きくなったといえる。

国際山岳連盟の現状

ＵＩＡＡが親睦団体から実践団体になってきたことはすでに説明したが、ＵＩＡＡが発展していくなかで、登山の多様化が進み、スポーツクライミングのオリンピック種目への加盟の実現といった大きな問題に取り組みはじめた。競技登山として、新しい登山の分野に入ろうとしているわけであるが、アルピニズムなど考え方による難しい問題もある。考え方を割り切り、オリンピック種目加盟という一つの目標に向かって、明確性の高い事業、登山を競技スポーツとして発展させることで今、世界的な進展を図っている。

しかし、ＵＩＡＡ活動はこればかりではなく、環境問題、遭難対策（安全）、登山隊のマナーなど従来から取り組んでいる大きな活動がある。

それらの活動の充実、進展は各委員会活動にゆだねられるところが大きく、実際、昨今の積極的な委員会活動は国際山岳連盟の存在そのものに大きな影響を与えている。

日本は遠征委員会と医療委員会の構成員（メンバー）となっているが、日本山岳協会のかかえる財政、予算の問題で思うように活動に参加することが出来ないのが現状である。

ヨーロッパ志向、ヨーロッパ中心の活動云々を時折耳にするが、他地域の積極性の無さや、参加が消極的なことも、ヨーロッパ中心的にならざるを得ない要因のひとつとして他の地域（アジア、北南米、アフリカなど）も考え直さなければならない問題も多い。また、言語の問題もあり、現在では英語、仏語、独語が常用語となり、特に英語を主要語と決めている様であるが、実際の会議において同時通訳の質の問題などで、発言の意味、内容が正しく伝えられな

い場面を見かける。最近ではアジアにおいても各国の交流が盛んになり、ブロック性のような形態が出来つつある。そんな中、アジア圏の言語を公用語のひとつにしようという提案などがあり、活動が拡大する反面また複雑性が生まれるといった国際性の難しさに直面している。

日本登山界の国際的責任

近代においては、すべてのことが地球単位で物事が考えられ、進展している。登山界においても地球レベルでの活動が展開されているが、この意識をもつことが、国際的に責任をもつという基本認識なのだろう。最近、ＵＩＡＡの雑談のなかで、登山先進国・後進国（発展途上国）といった話題が出ることがある。そんなとき、私なりに日本は登山先進国なのだろうかと考える。まわりの誰しもが先進国と見ていると思われるが、しかし、一般の登山者たちにそういった意識や実感はないだろう。ヒマラヤや世界の国々の山へ、日本からかなりの登山者、登山隊が出掛けて行くが、自分の山登りしか考えていないというのが実情ではないだろうか。

また、ＵＩＡＡで日本からの登山隊が多いのだからもっと国際登山界に貢献、奉仕してもよいのではないかと言われることがある。こういったことを受け、国内において〝国際化〟〝国際性〟を言うと、国際化なんて関係ないという論者が多い。たしかに国際問題はやらなければやらなくても済む問題も多く、やればやるだけ奥が深く、さわりたくないということかも知れない。しかし、最近の社会では他人に自分を認めてもらったり他人を認めたりしなければ価値も意義もない。また自分がやりたいと思うことの秩序が守られていなければ効果が薄いこともあるだろう。そうしたことを国際社会の中で育て養っていくということが大切で、これこそが国際化につながることと考える。国際性のなかで日本の登山界の責任を云々するならば、まずこういった基本的な認識、姿勢をもつことから始めなければならず、国際山岳連盟で仕事をしたとか、任務を果たしたということとはまた別の次元で、世界の登山者や山を愛する者の大切な基本的問題であると感じる。

ＵＩＡＡの課題と展望

日本の登山界においても、好むと好まざるとにかかわらず国際性の中に浸っているというのが現状である。具体的にはスポーツクライミング競技大会、環境保護問題などがそうであるように、ＵＩＡＡの影響を見えないところで受けている。反面、ＵＩＡＡが日本を含めそういった国々の登山者から理解され、運営、活動が国際的な認識をもってもらえることが、当面の課題であろう。それには当然、資金、財政的問題も大きいが、具体策としてどうするという政策を強力に押し進め、ＵＩＡＡを積極的に評価する意識づくりが大切であろう。そして、ＵＩＡＡが発展すれば環境保護問題はもとより、登山の秩序が守られることにより、望ましい登山界の発展につながるという展望に立った活動を期待するところである。

ＵＩＡＡ総会松本開催

一九九〇年十月、カラクラーデ（オランダ）の総会において日本開催が提案され、一九九一年十月のブタペスト（ハンガリー）総会で、一九九二年十月のＵＩＡＡ総会を松本で開催することが正式に決定された。

ソウルオリンピックに合わせてソウルでＵＩＡＡ総会が開かれ、今回の松本はアジアで二番目の開催国となった。十八ヵ国の理事国で今までに一度も開催していないのが日本だけという事実もあった。スポーツクライミングのオリンピック種目への加盟、国際山岳連盟自身の発展を考えたとき、ヨーロッパ以外の国での会議開催が求められていた。

国際山岳連盟の開催公式要請をうけ、日本山岳協会は各県岳連を通じて協力、開催都市を呼びかけた。国際都市及び、スポーツクライミング・ワールドカップ併開の神戸市、山岳都市北アルプスの両玄関の富山市、松本市、日本の古都金沢市、の四都市が開催立候補をしてきた。ヒアリング等多面的な検討から最終的に松本市に開催依頼をし、すでに一九八六年夏、国際アルピニストシンポジウムの開催の実績がある松本市、松本商工会議所が立派な国際会議の開催を実行してくれた。

今回のＵＩＡＡ松本総会は、今まであまり出席をみなかったアンドラ、ブルガリヤ、クロアチア、キリギスタンな

ど珍しい国からの参加、また参加国も多く、その団体の会長が出席したこと、そして、新しい試みとして環境という一つのテーマを決めてシンポジウム及び分科会形式で特定の議題を討議する一日をくわえたことなど、会議は成功裡に終了することができた。ＵＩＡＡで発行している会報の報告には「会議のセンス、内容の素晴らしさに合わせ、私たちは暖かさと友情に触れた。古い友に逢い、新しい友をつくることも登山家の満足であり…私たち登山家は、言葉の違い、異なる歴史、異なる文化、物の見方の違いはあっても、共に山の素晴らしい美しさに共感し、感動させられるのだと松本で感じた」と書かれてあった。

日本を見る目、接する外国の感覚が変わりつつあるなかで、日本も国際的に大きく変わりつつある。この一年間、スポーツクライミング・ワールドカップ東京大会開催、ＨＡＴ―Ｊ山岳環境国際シンポジウム開催等、国際イベントのまとめとして、松本での国際山岳連盟会議の意義は大きかった。

あとがき

こういった一連の国際的行事をやってみて感じることは日本の登山界がひとつにならなくてはならないということである。国際的なうねりとなってきた環境保護問題についても登山界としてのまとまりの必然性が求められ、日本山岳会、日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、そして日本ヒマラヤ協会など主だった山岳団体のコミュニケーションが計れたことも国際化の大きな意味だと思われる。

なお、今回の松本総会のまとめとして、東アジア会議が東京で開かれ、次期国際山岳連盟副会長（アジア地区担当）に日本山岳協会会長斉藤一男氏が推薦され、またＵＩＡＡ機構改革委員五人のうちの一人として日本が指命されたことなど、アジアにおける中心としても日本への期待が大きくなったことに、責任の重大さを感じる。

［日本・中国ナムチャバルワ合同登山］

日中合同ナムチャバルワ登山を終えて

山田二郎

はじめに

一九〇五年創立の日本山岳会は、永い伝統と多彩な人材を擁し、独り登山活動のみならず、山に係る文化芸術等を含む広範な分野でのクラブ・ライフを楽しむ方々をもって構成されるとともに、創立以来登山の形式は異るとはいえ、それぞれの時代における先駆的な役割を果たしてきたことは皆様ご承知の通りであります。

ことに戦後の海外登山では一九五二年より三度にわたる遠征の結果一九五六年、マナスルの初登頂に成功、その後のわが国登山界発展の基礎を築いたことは世の知るところであり、引き続き行ったエベレスト、ナンダデヴィ、カンチェンジュンガ等での様々な登山にも成功を納めております。

ことに中国とは、一九八〇年チョモランマ北壁初登攀を含む北面からの登頂、一九八八年の日本・中国・ネパール三国によるチョモランマ交差縦走等での合同登山の経験と実績とを重ねてまいりました。

私も一九八九年に会長就任以来、〝日本山岳会はアルパイン・クラブであり、将来にわたって会の活力を維持発展させるためには若年層に重点を置いた先鋭的な山登りを積極的に実施すること〟に励んでまいりました。



▲ナムチャバルワ峰全景(航空)、右はサンルン(7059m)
Mt. Namcha Barwa (Aerophoto) Right: Mt. Sanlun (7059m)

▼ナムチャバルワ頂上に立つ第1次登頂隊員
lst Group members at Namcha Barwa Summit





▲ベースキャンプからナムチャバルワを望む
Namcha Barwa seen from Base-camp

▼キャンプ3と気象ロボット
Camp 3 and Weather Robott





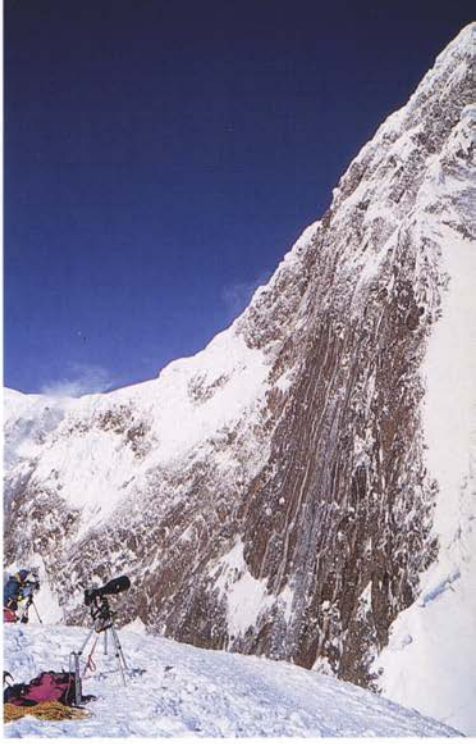
▲キャンプ3からキャンプ4へ
To Camp 4 from Camp 3

▼キャンプ4からキャンプ5へ
To Camp 5 from Camp 4





▲再建されたキャンプ5
Camp 5



▶キャンプ5から見上げる南壁
South Face seen from Camp 5

▼7350m地点からキャンプ6とナイプン峰を見る
Camp 6 and Naipun peak seen from 7350m point







◀▲ロックバンドを登る
Climbing Rockband

▼ナムチャバルワ頂上付近の雪稜
Snow Ridge of Namcha Barwa Summit





▲北西稜6200m付近からのヒムルンヒマール(左、7126m)
Mt. Himlum Himal(Left：7126m)

▼ラトナチュリ(7035m)
Lathnatury (7035m)





▲四姑娘山南壁（中央のリッジを登る）
South Face of Mt. Si-Guniang (Climbing Center Ridge)

▼南極大陸ティール山脈を目指して歩く
Antarctic Continent



▲アマ・ダブラム西壁
右の稜線が南西稜
West Face of
Ama Dablam
Left : South-west Ridge



▶ABC(C3)近くからの
チョモランマ北東稜上部
North-east Ridge of
Chomo Lungma

このたびの日中合同でのナムチャバルワ登山も、そのような流れの一環として捉え、創立以来の伝統たるアルパイン・クラブとして、常に未知なるもの、より困難なものへの憧れと挑戦とを基本とするものであります。

登山申請

このような観点より、私どもは一九八〇年のチョモランマ遠征の帰途、中国に対しナムチャバルワへの登山申請を提出いたしました。しかしながら、同峰は中国領土内に残された未踏の世界最高峰であり、中国登山協会としてはぜひ中国独自の隊により登山を行いたいとの強い希望のあること、さらにこの山は世界の登山家注目の的であって各国からの登山申請が目白押しであることなどの事情から、登山許可取得は極めて困難が予想されておりました。

幸い、日中友好協会、読売新聞社のご支援と桜内義雄衆議院議員のお口添えもあって、一九九〇年秋、ようやく日中合同による一九九二年までの入山許可を得ることができました。

一九九〇年偵察

早速北京に赴き協議の結果、同年初冬の偵察と一九九一年秋の登山隊派遣について合意に達し、その準備に取りかかりました。

前述の通り、中国独自の登山隊は一九六〇年以来一九八四年まで四度にわたって登頂を試みながら、各種の困難に阻まれて登頂するに至っていないということから、この山の難しさを想定し、空陸からの偵察を行った結果、これまで下降不可能とされていた頂上手前のナイプン峰から直下のコルへの下降ルートを発見、登頂への望みを確実なものとすることができました。

一九九一年第一次遠征

この結果を踏まえ、また収集できる気象データを分析した結果、一九九一年の本隊は十一月一日および二日を登頂予定日と定め、日中各六名から成る登山隊を派遣、順調にキャンプを進めておりました。ところが十月十六日、第4キャンプへのルート工作に当たっていた大西宏隊員を雪崩事故で失うという悲運に遭い、現地での同君の葬儀終了を待って登攀を続行いたしました。しかしながら時すでに遅く、冬の偏西風はその猛威を振るい始め、隊員たちは主力隊員を失うというハンディを乗り越えて着々とキャンプを進めました。猛烈な北西風に難渋を極めながらもナイプン峰の下降にも成功、十一月二十二日には難関の岩壁帯をも突破して、頂上まで高度差わずか三三二メートルに迫りましたが、大量の流雪と悪天候に阻まれ、燃料、食料も残り少なくなったため、止むなく撤退せざるを得ませんでした。

一九九二年第二次遠征

一九九二年の遠征は前年の苦い経験を活かし、雪崩への対策を講ずることは勿論、気象についても各種の最新鋭観測機器を用意し、気象担当の専門家を隊員に加え、さらに日本、チベットの両気象台からの予報を受信する設備も備え、万全を期して登山に臨みました。

登山隊の構成は前年とほぼ同じで日中各六名とマネージャー兼通訳及び医師で構成するほか、前述の気象担当隊員を加えたものとなりました。

また登山時期も前年の隊が厳冬期の強風に悩まされたことを考慮し、全般に約半月程早め、登頂日を十月十五日から十七日の間に設定し、このためベースキャンプ入りは降雨期を想定して準備を行いました。

頂上アタックも前回は日中各三名のパーティーで二回計画したのに対し、今回は登頂の確率を高めるべく、日中各二名のパーティーによる三回といたしました。〝全員登頂〟は議定書にもあるとおり前回同様の考えで進めました。

上記の考えを基礎に組織された登山隊は九月二日に日本を出発、現地に向かいましたがこの年のモンスーンの降水量は例年に比べて少なく、九月十五日ベースキャンプを出発した登山隊はC3までは比較的順調にキャンプを進めた

ものの、その後はベンガル湾を北上する低気圧に阻害され、ルート上の雪崩の危険もあって、ようやくにして建設したC5も異常降雪のため十月十五日には猛吹雪の中を強行撤収せざるを得ませんでした。

その後も天候の回復は思わしくなく、二十一日にはついに全員がC3ないしBCに下山して再起を図ることとなりました。

十月二十二日BCに下山した重廣隊長を交えた総指揮部会議では、「十月二十七日から約八日間ナムチャバルワ地域では風の強くない好天が続くであろう」というチベット、東京両気象台からの予報をベースとして、最終運行計画を樹て最後のチャンスを狙うこととなりました。

十月二十三日BC、C2にそれぞれ待機していた隊員は「今度こそ最後のチャンス」とばかり士気大いに上がり、計画通り前進を開始しました。

ところが、二十六日C5に到着した隊員はC5が跡形もなく消え失せているのを発見、事態が理解できぬまま呆然となりましたが、たまたま登攀隊長が持っていた携帯スコップを使って偶然にも見付けたルート標識用の旗竿を手掛かりに除雪し、風に吹き固められた二㍍程の積雪の下からテントを掘り出したのは陽も暮れ始める頃でした。もしこの時テントを掘り出せなかったら、と思うと今でも恐ろしくなります。

翌二十七日第一次登頂隊はC6へ、第二次登頂隊はC5へとそれぞれ進み、二十九日には第一次隊は岩壁帯を抜けて七六〇〇㍍の地点にビバーク、第二次隊もC6に入り、いよいよ最終登頂態勢が整いました。

十月三十日、前夜は寒さのため余り良く眠れなかった第一次隊はビバーク地点を出発、一〇数㌢の積雪の下の蒼氷と、このような高所の雪線には珍しいクレバスに難渋しながら十二時九分念願の頂上に目出たく日中六名の隊員が立ち、遅れて十四時三十分日中の五名の第二次登頂隊も、すでにガスのかかり始めた頂上に立つことができました。

かくて一九九〇年以来われわれ一同の憧れであった未踏の頂は貴い犠牲を払ったものの、周到な準備に加え、隊員たちの不屈の闘志とたゆまぬ努力、関係者全員の協力によって十一名の登山隊員の登頂するところとなった訳であり

ます。

むすび

以上の如く、未踏の頂上に立ったのは十一名に過ぎませんでしたが、この遠征の成功は、そのために縁の下で目に見えぬ地道な努力をしてくれた中国の高所・低所協力員の方々、また三年にわたってこの遠征にご支援を賜った日中官民各位皆様の勝利でもあると思うのであります。

ベースキャンプを引き払い、八一鎮、ラサ、成都、北京に至る中国各地での心温まる盛大な歓迎は永く心に残るものでありましたし、特に北京では李鉄映国家教育委員会主任にもお目にかかる機会を得、誠に光栄なことでありました。

この登山は中国にとって日中国交回復二十周年を記念するものであっただけに、この成功は殊更に意義深いものであり、殊に山登りというスポーツは人と人が競うものではなく、大自然を相手に人と人が協力して初めて成功を期し得るものであります。この意味において私どもの山登りが日中友好に些かでも貢献できたとするならば大いなる喜びであります。

十一月十八日全員揃って帰国し、翌十九日には文部大臣より全員にスポーツ功労者表彰をいただいたことも望外の喜びでありました。

すでに述べましたように、ナムチャバルワ地域はこれまで外国人には入域が許可されていなかっただけに、そこには手付かずの自然が残されておりました。このため私どもの登山隊も当然のことながら環境の保全には万全を期し、遠征の計画段階から特別の配慮をし、また下山に際しても後を汚さぬよう努めてまいりました。その詳細については別項の記事をご覧いただきたく申し添えます。

一九九〇年に始められた日中合同でのナムチャバルワ遠征は、貴い犠牲と幾多の困難の末、一九九二年秋の初登頂

成功をもって終わりを迎えた訳であります。

この遠征は冒頭にも申し述べましたように、アルパイン・クラブである日本山岳会の数多くの高所登山の歴史の中の一環を為すものであります。

私どもはこれらの貴重な経験をもとに、さらに一層の困難に向かって慎重かつ大胆なチャレンジを続けてまいりたいと念願いたしております。

何とぞ今後とも、皆様のご声援を心よりお願い申し上げる次第でございます。

終わりに当たり、貴い犠牲となられた故大西宏君のご遺族に思いを致し、同君のご冥福を祈り、結びといたします。

［日本・中国ナムチャバルワ合同登山］

ナムチャバルワ峰登頂の軌跡

重廣恒夫

ナムチャバルワ峰とは

ナムチャバルワ峰（七七八二㍍）は二千四百㌔に及ぶヒマラヤ山脈最東端の北緯二九度三七分五一秒、東経九五度三分三一秒に位置する東部ヒマラヤの最高峰であるばかりか、世界最高の未踏峰であった。

ヒマラヤ山脈の北側を、聖なる山カイラスを源とし、西から東へほぼ真横に流れているのがヤルツァンポー河であり、豊富で悠久たる流れはナムチャバルワの手前で急に細くなって岩を咬み飛沫を散らす急流となり三角錐の山を囲むように弧を描き、やがてブラマプトラ河となってベンガル湾に注ぐ。成都からラサ空港に向かう機上から朝もやのヒマラヤを望めば、暗紫色の山並みにヤルツァンポーの地を這うがごとき白銀の流れを眼下に見ることが出来る。

ナムチャバルワ峰にいたるアプローチは比較的短く、ラサから川蔵公路を四四〇㌔走って八一鎮にいたり一泊、翌日、ニャン河の右岸沿いに約一時間走るとヤルツァンポーに出会い大橋を渡る。右へ行けば米林県の県庁であり、左へダートロードを走ると自動車道路の終点の格嘎（ギャカル）に到着する。目前にはナムチャバルワ峰の西北西稜が拡がり、その山容はいまにも飛びたたんとする大鷲を彷彿させる。そして、その背後には七〇九五㍍のサンルンに続く東北東稜が連なり、どっしりとした三角錐を形成している。

チベット語の「天から落ちてきた石ころの集まり」の意で現地のチベット族の間では、今でもこの山に関する興味深い神話や伝説が言い伝えられている。大きな樹木の育たない西チベットの殺伐とした乾燥大地に比べ、亜熱帯気候の湿潤な環境による樹林帯の発達した東チベットは動物・植物の種類が豊富なことから、内外の多くの登山家や科学者の関心を集めて来た。

ナムチャバルワ地区の気象状態は、チベットの西部地区とはかなり異なっている。この地区はヒマラヤ山脈と横断山脈の接合地帯に

あたり、地殻変動の活発な地帯でもある。

ベンガル湾の湿った空気がブラマプトラ河からヤルツァンポー河の渓谷沿いに北上し、ナムチャバルワ地区に流入、この地区の気候を温暖・湿潤で雪や雨の多いものにしている。

又、インド洋上に発生したサイクロンの影響を非常に受けやすく、例年十月から十一月にかけて二～四回のサイクロンの通過が記録されている。

通常、五月から始まる雨季は九月末まで続き、時には十月まで長引くこともある。七、八、九の三ヵ月間は降水量の最も多い時期で、ほとんど毎日雨か雪が降り、しかも雲が厚くナムチャバルワ峰の姿はほとんど見ることが出来ない。そして、モンスーンが明ければ数日の後に、それまでのチベットの北側に位置していた強風帯が南下して、ナムチャバルワ峰の上空に居座り、強風のもたらす風成雪による流雪によって登山を極端に困難なものにしている。

登山の歴史

一八七九年、パンディットのネム・シンが初めて遠くからナムチャバルワを望見。一九一二年、英国人モーズヘッド大尉らがナムチャバルワ峰の高さを七七五五㍍と測量。一九一三年、モーズヘッド大尉とベイリー中佐は、ヤルツァンポー河の大屈曲点を探るおり、はじめて近くからナムチャバルワ峰を見た。一九二四年、英国人キングドン・ウォードとカウダーがヤルツァンポー河のゴルジュ帯を一周。一九三六年、三八、四六～四七年、英国人フランク・ラッドロウとジョージ・シェリフが植物学上の探検をナムチャバルワ周辺で行った。

一九六〇年十二月、チベット登山隊によりナムチャバルワ峰の周辺調査が行われ、調査隊はヤルツァンポー河屈曲部を加拉（ギャラ）まで入り、南稜を五〇〇〇㍍まで試登した。

一九八二年三月下旬から五月中旬にかけて、中国登山協会隊が南稜、東北東稜、西北西稜、西壁にルートを探り、南稜上ナムラ峠に到達した。

同年、七月から十月にかけて中国科学院により学術調査隊員二十八名、登山隊員十六名からなる調査隊が派遣された。

一九八三年三月から四月にかけて西北西稜及び前衛ナイプン峰の西稜と南稜を試登し、四月二十一日、レンチンピンゾー、宋志義ら七名が登頂した。

同年、六月から九月にかけて第三次大規模学術調査として、学術隊員など五十名の関係者が派遣された。

一九八四年三月から五月にかけて中国登山協会がナムチャバルワ登山隊を派遣するが、前回と同じくナイプン峰に七名が到達したにとどまり、主峰に至る南稜上部への下降ルートが見出せず登頂を断念した。

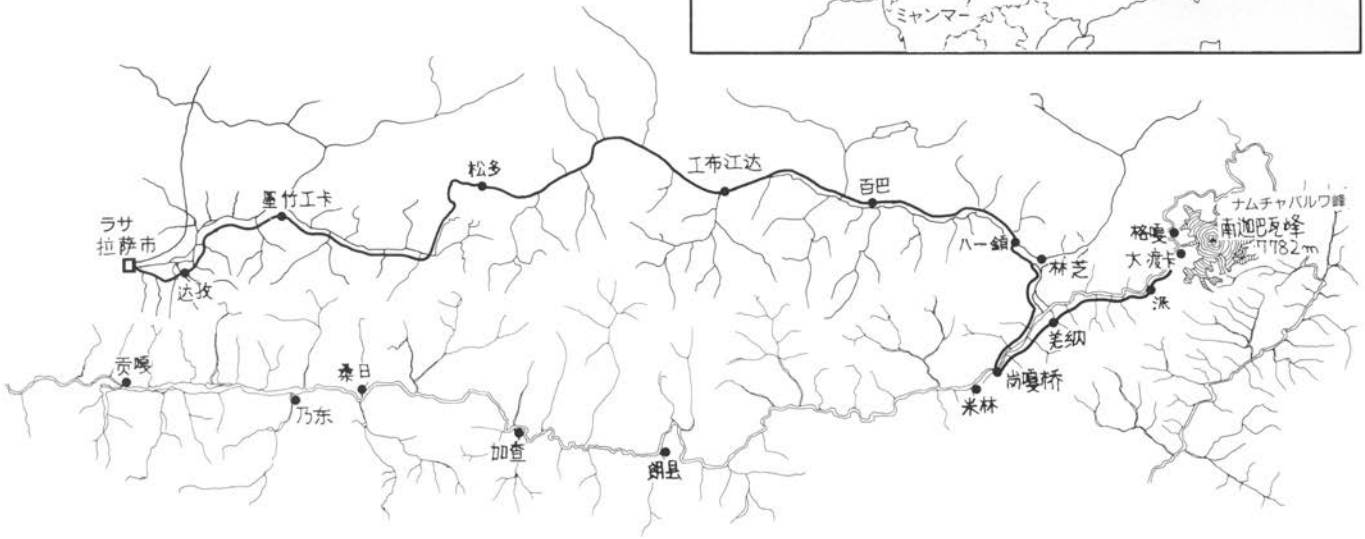
ナムチャバルワ峰許可取得の経緯

ナムチャバルワは世界最高の未踏峰であるがゆえに世界の登山家の渇望の的であり、その登山許可の行方についても永く関心をもたれてきた。

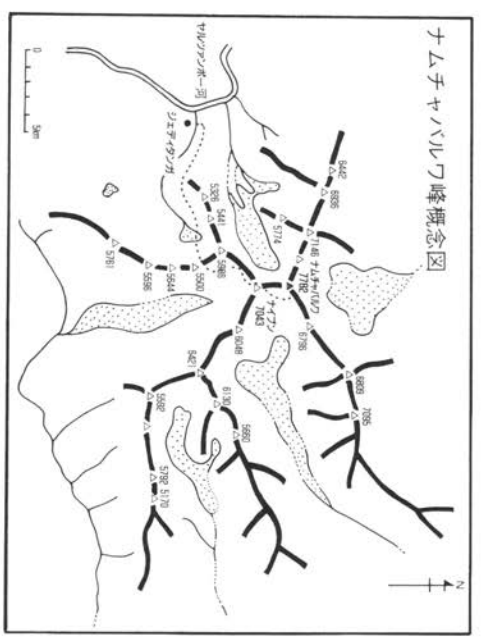
日本山岳会が中国登山協会に対してナムチャバルワ峰の許可取得について言及したのは、一九七九年で、戦後初めてのチベット側からのチョモランマ登山の許可を取得し、一九八〇年の遠征打ち合わ

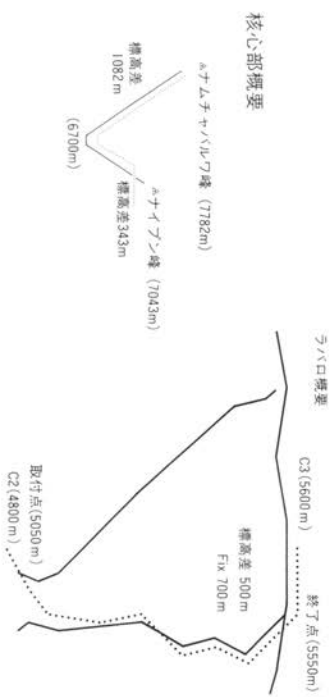
ナムチャバルワ峰への行程






ナムチャバルワ峰 7782m
西北西稜
南稜
C6 6700m
C5 6900m
ビバークポイント 7600m
東北東稜
ロックバンド 7350m～7400m
ナイブン峰頂上 7043m
C4 6200m
C3 5600m
C2 4800m


ナムチャバルワ峰概念図
ヤルツァンポー河
ジェディタンガ
N


核心部概要
ナムチャバルワ峰（7782m）
標高差 1082m
ナイブン峰（7043m）
標高差343m
（6700m）
ラバロ概要
C3（5600m）
終了点（5550m）
標高差 500m
Fix 700m
取付点（5050m）
C2（4800m）

せのために北京を訪問した宮下会員の口頭申請であった。

もちろんそれまでにもヒマラヤン・ジャーナルやベイリーの書いた『ヒマラヤ謎の河』等から、ヒマラヤの東端に位置する幻の山に魅せられた人たちは多く、ただナムチャバルワを見たい、登りたいという憧憬だけでなく、研究会を設けて細部にわたっての検討を始めた大学山岳部や、個人の研究家たちも多かった。

一九八〇年のチョモランマ遠征は幸いにして所期の目的であった北東稜から加藤保男による単独第三登と、未踏の北壁から尾崎、重廣の二名がその初登攀に成功した。

これらの成果を踏まえて宮下隊長は前年に引き続き、今度は書類によるナムチャバルワの登山許可申請を中国登山協会に対しておこなった。その時点でナムチャバルワへの許可申請は十三番目か十四番目であったと聞く。

私自信がナムチャバルワを見たのは成都からラサに向かう飛行機の窓からであった。雪をまとった秀麗な尖峰は、周りを厚い雲に囲まれて幻想的なたたずまいを見せており、私はたちまちその虜になってしまった。

しかし私たちの想いをよそに、ナムチャバルワの登山許可は待てど暮らせど届かず、またその行方はようとして知れなかった。

そのころ耳にしたのはアメリカは元中国大使であった、当時のブッシュ副大統領を通じて、またフランスはミッテラン大統領が自国の登山隊のために中国政府に圧力をかけているというものであった。

さらにイギリスのクリスボニントンの隊に三十万USドルで許可がおりたといったことがまことしやかにささやかれたりした。

そして一九八六年八月には、チベット登山協会が五十万USドルで日本のヒマラヤ協会に許可を出したとの情報が入ってきた。

これに関しては仲介者を通じての桜内義雄議員の口添えということであったので、同議員に日本山岳会の立場と従来からのナムチャバルワに関わる経緯を説明して、許可取得の協力を要請した。

一九八七年、チョモランマ周辺の空からの偵察と一九八八年の日本・中国・ネパールの三国友好登山隊の一員として都合三度チベットを訪れ、その度にナムチャバルワを目の当りにして、登りたいという想いはますます募るばかりであった。

一九八八年の世界最高峰を舞台にしての交差縦走と頂上からの宇宙中継は見事に成功し、三国の友好と登山技術の研鑽に寄与した。

一九八九年六月には日中友好協会が創立四十周年の記念行事としてナムチャバルワ遠征に協力する意向があるとの申し出があり、相前後して読売新聞社からも同様の申し出があった。

そして九月五日、日本山岳会は山田会長名で中国登山協会との合同によるナムチャバルワ峰の登山許可の申請を史占春主席宛てに提出した。

その後、日中友好協会の村岡久平理事が十一月十三日から十九日まで訪中し史占春中国登山協会主席とナムチャバルワ峰登山計画について協議、以下の報告をもたらした。

①日本山岳会の意向である少数精鋭による登山主体の計画については、中国側も同感であり、日中合同で初登頂を果たしたい。

②学術調査隊は、登頂計画から切り離しても構わない。必要なら

別個に検討してもかまわない。また、登山隊には必ずしもテレビチームがつかなくても良い。

③登山隊は日中それぞれ五人ずつの合計十人（登攀メンバー）でどうか。最強の登山家で編成し、過去に中国が手掛けたルートとは別の新ルートから登頂したい。中国側の登攀メンバーのうち過半数はチベット人となる。

④本登山計画の概算経費は、登攀メンバーは十人程度として、約七十万ドルとみられる。偵察費用は別で、経費のほとんどはチベット自治区に支払われる。

⑤登頂成功のための事前偵察は必要。登山申請の際に偵察時期も記載したほうが良い。アメリカ等も許可を強く望んでいるので、できるだけ早く正式な登山許可申請書を提出して欲しい。遅くとも十二月中旬までに出す必要がある。各国からの希望も多いが、中国登山協会としては日本からの申請を優先したい。

ちょうど十一月十七日、日本山岳会の高所登山研究委員会が開催されナムチャバルワ峰の登山について具体的な行動を起こすことが確認されていたので、十二月九日の理事会で、今後村木副会長に読売新聞社等への対応をお願いし、連絡方については高所登山担当理事の伊丹が当たることとした。

そして、十二月十五日付けで改めて中国登山協会に日中友好協会全国本部、日本山岳会、読売新聞社の連名で申請書を送付した。

また、一九九〇年二月三日付けの山田会長の私信を、別件で訪中した平林評議員に託し許可取得の促進をはかった。

その後、中国登山協会からは何の音沙汰もなかったが、一九九〇年八月四日、中華人民共和国体育運動委員会の伍紹祖主任より日中友好協会全国本部宇都宮徳馬会長宛てにナムチャバルワ峰の登山許可の連絡が入り、今後については中国登山協会と具体的な協議を進めていくよう要請があった。

許可取得には中国首脳にあてた宇都宮徳馬先生の書簡はもとより、チョモランマ、ナムナニ等の合同登山の成果と橋本龍太郎先生や斎藤惇生・橋本清両会員を始めとする多くの人々の中国登山界との古くからの繋がりであった。これまで大勢の人達が、それぞれの立場で友好に努めてきたことが、こうした許可となって表われたことを感じ深く感謝しなければと思った。

八月二十二日、山田会長は村木副会長、大塚・橋本両評議員、松田総務担当理事、宮下学生部指導委員会委員長、伊丹・重廣高所登山担当理事を招集、これまでの経過を踏まえて日本山岳会としての態勢を整え対応する旨の確認が行われた。

九月十二日、常務理事会にて常任評議員も交えて、ナムチャバルワについては当面高所登山研究委員会の早坂・伊丹・重廣にてプロジェクトチームを作り、計画実現に向けて始動することについて理事会に上申する意思統一が行われた。

ナムチャバルワ峰についての研究は既に中国、日本で入手し得る資料の収集・分析により終了していたので、早い時期に偵察を行うことを中国側に要請し、十月十一日から十二日にかけて山田会長・伊丹理事が訪中し偵察・その他に関しての打ち合わせを行った。

そして十一月五日、偵察についての最終確認を曽曙生副主席と重廣のあいだで行った。　慌ただしい準備の後、十一月十一日ラサに

日中双方十名の隊員が集結した。十七日から二十三日にかけて西北西稜の支尾根の試登を行ったが、いずれも取り付きの氷河の状態が悪く、あわせて岩の脆さ、上部の懸垂氷河の崩落により多発する雪崩のために危険性が大きいと判断、ナイプン峰南稜のルートへと転進した。

十二月四日、ベースキャンプを出発し、七日にはラバ口を突破。九日に五六〇〇㍍の地点にC3を建設、十一日には大きな雪の斜面に縦横に走るクレバスを避けてルートを延ばし、六九〇〇㍍のナイプン峰直下の氷の割れ目にナムチャバルワ峰の最低コルへの下降ルートを捜し出す事が出来た。（九〇年偵察隊については『山岳』一九九一年を参照されたい。）

一九九一年の敗退

一九九〇年十二月の試登の折には、ベースキャンプから八日間というスピードで到達したナイプン峰の頂上から続く六九〇〇㍍の肩への登高も、連日の降雪による南稜上の深いラッセルに悩まされた。十月十六日、両側を懸垂氷河に阻まれそこしか通過できないというルートの六二〇〇㍍で雪崩が発生し、前年にトレースした経験を持ち隊の先頭に立っていた大西隊員を失ってしまった。

遺体の収容や御遺族をお迎えしてのC2下での葬儀などに十日間を要し、再び態勢を整えて十月末に登山再開をしたが、モンスーンの終息により南下してきた強風帯のためにその登高は遅々として進まなかった。

それにも拘らず日中両国の隊員たちの登高意欲は旺盛で、悪条件にもめげず短い好天を捕えてジリジリと頂上に迫った。

しかし十一月二十二日、何度かのフィックス工作の末、最も難しい箇所と思われていたロックバンドを登り切った直後、頂上付近を通過する強風がもたらす風成雪は多量の流雪（大きなスノーシャワー）となって登高中の隊員たちに襲い掛かり、真空状態の南壁は谷風を呼び下から雪を吹き上げる様は、まさに滝壺のなかで翻弄される小枝のようであった。

十一月二十四日、残念ながら食料・装備の不足と一部の隊員たちの凍傷等による登高意欲の減退により、既に尊い隊員の一命を落としていることもあってベースキャンプの総指揮部は登山続行の断念を決定した。（九一年の登山については『山岳』一九九二年および別項の高見登攀隊長の報告を参照されたい。）

一九九二年のタクティクスの概要

昨年の失敗の要因は過去及び周辺のデータ不足等から来る、計画立案の甘さによる登山開始時期の遅さにあり、それと共に晴れれば風が吹き、曇れば雪が降るという急激な天候の変化を正確に予測出来なかったことにより、好天の少ないチャンスをものにできなかったことにある。

ラサに帰着した後、ラサ気象台に担当官を訪れナムチャバルワ周辺の気象状況の再確認と、帰国の後さらに資料の集積を行いその分析の結果、十月中旬の四～五日程度が登頂のチャンスではないかということが導き出された。

従って、十月十五日前後を登頂日に設定し、十五日間程度の変動に対応できる事を基本として以下の行動計画を策定した。

①日本からの出発を早め、モンスーン時期の九月中旬はC2まで

の荷揚げを行い、モンスーンの終了と共にラバ口のルート工作を開始する。

②登山活動を三期に分け、第一期はBCからC1、C2の建設、C3へのルート工作、荷揚げ。第二期はC3の建設、C4へのルート工作、荷揚げ、C4建設、C5へのルート工作、荷揚げ。第三期はC5の建設、C6へのルート工作、荷下げ、キャンプ建設、そしてロックバンドへのルート工作、アタック。

③高所協力員六名の協力を得て、C3を中心としたキャンプへの物資の荷揚げを確実に行う。

④行動は原則として日中双方三名ずつの合計六名で二隊編成、二隊間の間隔は1キャンプとする（どちらかの隊に事故があった場合に速やかな対応をはかるためと、全員登頂を確実にするため）。

その他、去年の反省として、激しく変化する天候の移り変わりを的確につかむことは、ラサの気象台の予報と現地の観天望気だけでは、気象分析の知識の乏しい登山隊員の推察では不十分だと考えられたので、一九八四年のカンチェンジュンガ縦走の気象分析で実績のあった担当者をスタッフとして加えた。そして現地での気象データ収集のためにBCとC3に気象ロボットの設置を計画した。

また通信機器については、九一年の雪崩事故の経験から非常時には中国側と別の周波数を使用し、緊急事態に対処できるように配慮した。

そのため、BC、C2の固定機と、日本側隊長・登攀隊長・報道のハンディ無線機はデュアルバンド機を使用し、144MHと430MHZの周波数を設けた。

さらに雪崩対策として以下の機器を用意した。

①雪崩救助トランシーバー（ORTOVOX　F1）六台、②発信機（テレマウス　TLM—6M）二十五個、③受信機（ソニーオールバンドレシーバー　P—70）三台、④ゾンデ棒二本、⑤プラスチック製軽量シャベル二本、⑥雪温計二本、⑦風力計三台、⑧雪質・結晶判定カード二十四枚

登山概要

①ラサ—BC

九月二日、多くの人たちに見送られながら成田を出発した日本隊は、北京を経由して九月六日早朝、朝もやに包まれた成都空港を飛び立ち厚い雲の上に古城のように浮かぶナムチャバルワを左手に見ながら小雨降るラサ空港に降り立った。そして中国側のローサンダワ総隊長やサンズー隊長を始めとする登山隊関係者の出迎えを受けた。約九ヵ月ぶりのラサ市内はモンスーンの影響を受けて連日の雨だそうで、いつもの乾燥した西チベットとは思えない多くの水溜まりができていた。

夕方五時よりチベット登山協会においてチベット自治区主席、副主席や自治区首脳が出席して登山隊との会見が行われた。日中合同登山隊を代表して中国側ロータンダワ総隊長が今年の登山にかける意気込みを披露、両国登山隊長が隊員の紹介を行った。その後、場所を移して約八十人の人たちが参加しての歓迎会が夜遅くまで行われた。

九月七日、朝のミーティングで本来ラサ留めにすべき隊荷が西寧からのトラックから降ろされずにそのままベースキャンプに直行し

ていることが判り、十日出発の予定を一部変更して四名が先発して格嘎（キーカル）にて荷物の選別を行うことにした。残りの日本人隊員・中国人隊員・総指揮部・報道隊員及びベースキャンプ要員も予定を一日繰り上げて九日サラを出発することにした。

九月八日早朝・重廣・梶田・三谷・佐藤の四名がランドクルーザーにてボタラ宮下のヒマラヤホテルを後にした。五〇〇〇㍍のミーラを越えるとヤクの放牧された大草原地帯に入り、高度が下がると周辺の山々や道路脇に広葉樹から針葉樹を見るようになり、夕刻には標高三〇〇〇㍍の八一鎮の町に着いた。私にとっては三年続けての訪問であるが、川蔵公路の主要な町と同じように市場や商店が軒を連ね、軍隊の駐屯するこの町も訪問する度に賑やかさを増し、新しい町並にはネオンが眩しい。ラサより四一二㌔の行程であった。九月九日、八一鎮からニャン河に沿って下り三八㌔でヤルツァンポーに合流、上流に向かってさらに二二㌔走り四〇〇㍍程のコンガ大橋を渡ると右へ行けば米林への道となる。我々の車は左折して幾つかの川を横切るダートロードへと入る。腸捻転を起こしそうなガタガタ道を点在する村人たちから手を振られながらパイの村へと入る。途中の峠から久しぶりのナムチャバルワを見る。泣いても笑っても今年で最後のナムチャバルワである。

八一鎮から一四四㌔走って車の通う最後の村格嘎（キーカル）に到着した。村外れの広場には中国テントが張られ、はるばる日本から送られた隊荷が山積みにされている。輸送の進捗状況を確認した後、ＢＣに向かう村人たちと一緒に歩き始め二時間の後に先行した輸送隊と合流した。

今回はいつもより時期が早いせいか周辺は緑一色でのどかな感じがするが、悪天の間に垣間見るナムチャバルワは相変わらず猛々しい姿をしている。夕方から少ない人数ではあるが隊荷の仕分け・整理を始め、十日午後には一日遅れでラサを出発した本隊もＢＣに到着した。ＢＣ入りは予定より二日早まったが、モンスーンの降雨の合間をぬっての作業で開村式は十四日になってしまった。

標高三五二〇メートルのＢＣは入山以後ぐずついた天気が続いていたが、開村式の時には不思議と晴れ間がのぞき幸先良いスタートを切った。十八人の民工も十二日からＣ1に向かって荷揚げを開始していた。

②ＢＣ～Ｃ3

早朝のＢＣ周辺はヤルツァンポーから湧き上がる水蒸気のために雲海が広がり全ての景色を覆い隠している。そして時がたつと共に眼下の景色は墨絵のように浮き上がってくる。ＢＣから十五分ほど歩くと接地当嘎（ナーチャタンガ）という四家族二十八人が生活する村がある。登山隊はこの村の空き地をＢＣとし、村の側の道を辿ってＣ1へと向かう。

九月十五日、第一次隊がＢＣを出発し四三五〇㍍の地点にＣ1を、そして翌日には四八〇〇㍍の地点にＣ2を建設した。

雲海の晴れ上がった道を村の炊事の煙を見ながら鬱蒼とした原生林につけられた小道を辿る。カラ松・シラビソ・トウヒ等日本でもおなじみの針葉樹の大木に多量のサルオガセがぶらさがり、太陽の光線を遮った樹林帯は幽玄さを増している。

標高が三八〇〇㍍近くになると樹林帯はシャクナゲの大木に変わり四二〇〇㍍付近からは高山植物の咲き乱れる草原帯となる。日中

には小型のヒョウモンチョウが飛びかい、驚いたことには時折の暑い日差しにセミの鳴き声を聞いたことである。四五〇〇㍍地点からC2への谷に入ると青いケシの花の咲き終わった後のケシ坊頭が見られるようになり、六月から七月にかけてはこの辺りがすばらしい花の谷であることをほうふつとさせる。ここはまた、ダイオウ・雪蓮などの漢方薬になる薬用植物の宝庫でもある。C2は去年とさほど変わった様子は見られず、心配された故大西隊員のケルンもラバ口を見渡せる台地の上にしっかりと建っていた。ここには日中の登山隊員十二名や高所協力員六名やマネージャーと医師等の登山隊メンバーと報道隊員の前進基地として大小十四張りのテントが張られ長期間にわたって生活の場となった。

今年はモンスーンの開始が例年より約一ヵ月遅れたこともあって、ラバ口を始めとして周辺の雪が少なく九月十八日、ラバ口にルート工作に入った隊員からは核心部はルンゼの底が見えるほどであり一八八四年の中国隊の残したフィックスザイルが所々に見える旨連絡してきた。そして雪の少ないこともあってこの日のうちに十四本のロープを固定することができた。

C2からC3へのルートはキャンプサイトよりガラ場を下り氷河に降り立つ。そして大きな石の点在する氷河上をクレバスを避けて上部氷河の取り付きへと向かう。右手は懸垂氷河となっており左手には垂壁がそそり立ちその境目がルートとなる。

氷河が傾斜を増し始めると南稜の側壁にそって右手のラバ口の取りつ付きまで苦しい登りが続く。特に今回は上部の懸垂氷河の崩壊による雪崩が多く発生し、荷揚げ中何度も氷の塊の襲撃にあうことになってしまった。

ラバ口の登りは五一二〇㍍から始まり岩と雪のミックス帯を固定ロープ五本をセットして登るが、今年は例年より雪が少ないこともあって取り付きの1ピッチは岩のスラブである。登りついた所が〝ラッパの首〟いわゆるラバ口である。一〇㍍ほどのトラバースであるが上部に降り積もった雪や落石がすべてここを通過するので緊張して素早く通りすぎる。ここからは井戸の底をほうふつさせるルンゼの底を二〇〇㍍程登り、傾斜の増したミックス壁を4ピッチでブラックジャンダルムのコルに到着。ここからは雪の稜線となりさらに5ピッチで五五二〇㍍の南稜上に飛び出す。

何回かの荷揚げの末、九月二十三日に昨年のC3の位置より少し高い雪の台地にC3（五六〇〇㍍）を建設した。

③C3～C5

九月二十四日、何度かに分けて持ち上げられた機材を組み立ててC3のテントサイトの側に気象ロボットを設置した。今後二四時間、気温・風向・風速・気圧・雪温等をデータロガに集積、翌日無線でBCにそのデータが送られ今後の気象予報の作成に役立つこととなる。これまでの天候は全体的に良く、日変化はあるが天気の崩れは隊の行動を左右するものではないが、C2～ラバ口間のルート左上部稜線より懸垂氷河の崩壊が相次ぎ、今後の隊員・高所協力員の移動に際してC2からも監視体制を整え安全確保につとめることにした。

九月二十五日、橋本龍太郎名誉総隊長以下四名の関係者がBCに到着。長旅の疲れも見せず中国側総指揮部との打ち合わせ、村人と

の交歓等あわただしい滞在ではあったが、充分にその役を果たしていただいた。

その後計画の第二期が開始され、C4の建設、C5へのルート工作、荷揚げが日中双方の隊員、高所協力員によって始まった。この段階ではまだ計画より二日遅れであった。

C3からC4へのルートは長い雪の斜面を辿るようになり、降雪後の積雪状況によっては体力を消耗するルートである。特に六〇〇〇㍍から上の斜面のラッセルは厳しいものがある。六二〇〇㍍の前年とほぼ同じ場所にC4を建設。C5へのルートはC4の裏の斜面を二本の固定ロープを張ってから通過する。ここからはクレバスと雪崩と強風に悩まされるようになり、ルートを見失わないように多い目の標識の設置とロープを固定した。

九月二十七日の降雪でC4の建設は三十日にずれ込み、十月一日にはC5へのルート工作を完了したが、五日にはC5への荷揚げからの帰り道C4へ下降中の隊員が、昨年大西隊員が遭難した場所で雪板雪崩を引き起こし三人が流されるというアクシデントが発生したが、ロープにつかまり事なきをえた。

計画ではC5に十八個（一個一五㌔）の荷物を集積の予定であったが、九個の集積だけで第二期を終了せざるを得なかった。その後、登山隊は休養のためC2へ下った。

十月七日には、日中双方の総指揮部がC2を訪問、八日には登頂隊員の発表、大西隊員の墓参りを行った。いよいよ第三期の開始である。

九日には十五日を登頂予定日に第一次隊がC2を出発して、十一日には六九〇〇㍍の地点にC5を建設。しかし翌十一日は降雪で動けず足踏み状態となった。その後も悪天候が続き、登頂予定日を十七日に変更し、十五日にはいったん強風をついてC3まで退却した。

そして再度のアタック態勢に入ってからも足踏み状態が続き、これまでの上部での滞在期間もだいぶ長くなったので、隊員の休養が必要と判断して思い切ってC2まで後退、一部の隊員たちはBCまで下って休養した。それは天候の回復の見込みがたたないことと、大事な物資の消耗を最小限にするためでもあった。

丁度ベースキャンプには支援隊が訪問しており、激励の声が無線機を通じて上部キャンプにも流され、支援隊の暖かい声援と差し入れは焦りの見えていた隊員たちへの最高の慰めとなった。

十月二十四日、いよいよ最後のチャンスに賭ける登頂隊がC3に終結した。二十五日にはC4を再開した。そして二十六日、十一日ぶりのC5を再建。この日C5に到着した第一次登頂隊は二㍍以上の雪の下に埋もれたテントを四時間かけて掘り出すという執念を見せて以後の登頂を確実なものにした。

一九九二年の成功の要因

①登山活動の序盤は天候の小さな変化に助けられ、順調にルートを延ばすことができた。しかし、十月九日からの上部への行動はサイクロン通過の影響を受け、二度のアタックを断念せざるを得なかった。

ただ幸いなことに、モンスーン明け後の強風帯の南下・滞留の時期になっても昨年ほどの強風が吹かなかったことと、十月下旬の好天の到来を日本気象協会の情報、ベースキャンプでの気象衛星〝ノ

ア〟の直接受画像の分析などから天候の推移を的確に知ることができたこと。

それにも増して大きかったのは、一九九一年に苦労の末突破されたロックバンドのフィックスがそのまま使用できたことでスピーディーな通過が可能になった事であった。

②今回は新たに高所協力員の支援を得ることによって、各キャンプへの必要物資の確保を行うことができ、予想以上の停滞に耐えることができた。

③ロックバンドまでのルート工作の実施と、登頂時にビバークの準備をすることによって、一九九一年に経験したC6からロックバンドへのルートのコンディションの影響による時間切れからくるC6からの往復の回数を少なくしたことなどが上げられる。

いずれにしても、日本と中国の隊員の相互理解と登頂意欲の持続が最終アタックの時、雪面下二㍍に埋まったC5を強風にもめげず、たった一本のスコップで四時間かけて掘り出した頑張りと、七六〇〇㍍地点での予測されたビバークを安全なものにした無風状況という幸運が大量登頂を確実にしたものである。

隊員の構成

チームの一員として求められる資質は、肉体的、精神的状態の良好なこと、沈着冷静でしかも快活であること、登ることに対する情熱、忍耐力と決断力、辛苦や不自由を甘受する能力が備わっていることなどである。

リーダーの役目としては、〝登頂〟〝成功〟という目標に対する動機づけを明確にし、厳しい条件下での生活環境を快適にして、登頂達成という最終場面まで隊員の持っている意欲を減衰させない環境作りに留意する事である。これこそが閉じ込められた狭い空間に長期間生活することによって生じる、軋轢による精神的苦痛を克服し、二国間あるいは隊員間に必要な団結心を作り上げるからである。

ナムチャバルワは非常に情報の少ない世界最高の未踏峰である。ルートの状況、そして時間によって刻一刻と変化するナムチャバルワの自然を克服することは極度に難しい。

従って故大西隊員の弔いと、今年が最後という登頂のチャンスを逃がすと二度と巡ってくることのない状況下では「登頂成功」という明確な目標と責務を持ったこの登山では隊員と物資の面から、考えられる最大の布陣をしかなければならなかった。

登頂した隊員がサポート隊の力を借りるまでもなく、独力でC5に帰着することが出来る体力と気力が必要だと考えると、そういう厳しい試練に打ち克つためには状況の変化に対応できる瞬間的な判断力に頼らざるを得ない。それは、長い間の登山によって積み上げられた経験によってのみ対応できるものである。

これまでのポーラーメソッド、セミアルパインスタイル、アルパインスタイルの実践を通じての私の持論は、ずば抜けた力量の隊員は一人で充分でその他の隊員は横一線で登り始め、ルート工作、荷揚げの均等負担を実行した結果、隊員全員が頂上に到達することであった。

しかし、日本山岳会の会員の公募からはそれだけのメンバーを確保することはできなかったので、ナムチャバルワを確実に登るためにスカウトを実施、多くの遠征隊に参加をし実績を上げてきた人た

ちや、一緒に登って労苦を共にした気心の知れた人たちにせざるを得なかった。

一般的に高所登山において、行動能率を高めるためには、体力、技術、経験、順応能力等があげられ、これらの要因は、それぞれが互いに結びついている。体力がなければ技術も生かされないし、高所順応がうまくいかなければ、いくら体力があっても役に立たない。また、高所経験が豊富であれば、障害に対する恐れも少ないので順応も順調に行われ、高所環境でつぶれずに行動するためのペース配分を身に付けていれば、自己の体力をより有効に生かすことができるし、限界点も引き上げられる。

高度順化の考え方

ヒマラヤの登山は、私たちの日常の生活圏とは異なる未知の高度に滞在する事によって、高山病と呼ばれる頭痛、嘔吐、下痢、食欲不振、発熱、不眠等の生理的苦痛が起こってきて、隊員の能力は著しく減じられてしまう。

日本人隊員にとっては高度順化の必要な高度であっても、その高度を通常の生活圏としているチベット族の隊員たちに伍して、持てる力を充分に発揮することは大変なことである。

今回は山の高度が低いこともあり、五六〇〇㍍までのルートが難しいこともあって、その間の往復回数が増えるので高度順化のための特別なメニューを組まなかったが、隊員自らが体調を厳しくチェックし、高度障害による行動の停滞はなかった。

従来、一般的に行われてきた高度順化の方法は、幾つかのチームを構成するメンバーを時間がかかっても全員を順化させ、ルート工作、荷揚げ要員を確保することであり、それが登頂成功の一助になると信じられていたわけである。

しかし、必ずしも全員が同一の順化過程を辿るわけではなく、結果として故障者を出したチームの弱体化を招き、計画の遅延につながることが多かった。

従って、全員が登頂できそうな場面でもチームやグループの中から選抜された2～3名の登頂者のみで登山を終結することがあり、努力の割に全員を満足させる結果とはならなかった。また全体的に高所滞在が増加して物資をあたら消費するのみで、決して効率的な登山にはなり得なかった。

アルパインスタイルの登山では、全ての責任は個人に帰属し、個人の強さがその目標達成のカギを握っている。しかも、今日の装備などの進歩・軽量化によって登山はスピーディーに行える条件下では、運悪く目標に到達しなかったとしても、原因は自分の弱さだったと自覚しなければならない。

七〇〇〇㍍までの高度順化については慎重に行うに越したことはないが、このくらいの高度であれば、登山のスピードこそが余裕を持ったチーム作りとルート、物資の確保を行うことができる。

七〇〇〇㍍以上に継続して滞在した場合、その後さらに頂上を目指せる体力を維持できる日数は四日前後と言われている。それ以上の滞在は頂上へ向かう原動力とはならず、いたずらに体力、気力を消耗するだけである。通常七〇〇〇㍍前後から表れる高所衰退のために、その後の行動は隊員個人の体力・技術力・気力にかかってくる。

スピーディーな行動は、体力の低下を防ぎ、行動の継続を推進する。特に今回の登山では、全員に時間をかけて、「満遍なく順化をしてもらう」遠征ではなく、高所での行動を苦ともしない中国の隊員と競い合う事が必要であったので、日本人に若干負担をかけすぎたきらいがないではない。だがそういう環境の中でも、登頂意欲を持続することが、自己のもっている限界点をさらに引き上げる原動力ともなっている。

荷上げ管理

大きな遠征隊では、各キャンプ間の物資の補給が成功のための重要な要素になる。BC、C2、C3、C5と補給の基地となったが、基地での仕事には融通がきき、臨機応変に仕事の処理をしていく能力を持った人が必要となってくる。今回は中国語の堪能な梶田マネージャーによって、総指揮部・高所協力員とのコミュニケーションが上手に行われ、スムーズな荷上げが可能になった。カートンボックスには、食糧、装備、医療等の内容物の識別のためのワッペンにそれぞれ行き先の各キャンプが明記してあり、カートンボックスは全て通しナンバーで管理した。いつでもナンバーを指定すればすぐに探し出すことができるし、必要な物品を必要な場所に移動させることが出来るようにしてあった。また、各人が持っている資料には各キャンプに集荷すべきカートン番号の一覧表と優先順位及びカートン毎の内容物を知ることができるリストがついており、簡単に必要な物を取り出すことができた。しかし、内容物の分配、隊荷の再梱包、及びカートンの区分けについては複雑なオペレーションを必要とし、それらの管理は必然的に日本が行うことになった。

チームワーク

今回、目的を完遂するために構成された登攀隊員数は、各国六名の合計十二名となり、さらに荷上げに従事する協力隊員六名がこれに加わった。

中国、日本は、元来登山の目的も異にしているし、言語や食習慣等、生活環境が異なっている。それを極限の生活の中で無理に友好という文字に収めようとすると、各国の隊員がお互いに気遣いすることになり、高所登山という閉じ込められた空間での、長期間の生活によって生じる軋轢が大きくなると考え、第一期、第二期は別々のテントで各国なりの日常生活を失うことのないようにした。

事実、食事に関しても日本人は多種類の味を求めるし、中国側隊員も独自の素材、辛い味、油っこい料理を好むといったように食習慣がまったく違い、食事を作る過程、時間にも大きな差があった。

今回はそういった点を無理に統一しないで、自分たちで好きなように食べたり、飲んだりした。しかし、最先端を行くルート工作、荷上げに関しては、両国が平等にその任に当たることにした。こうすることによって徐々により良いチームワークが形成され、最終アタック時の両国隊員の信頼感となって現れた。

各国は三名を一チームとし、それぞれチームリーダーをおいたが、ルート工作に関しては、最強メンバーが先端に出ることにした。それによって、予定通りに計画を進行させることができたし、後になってルート変更、修復する必要も生じなかった。スピーディーな登攀こそが、安全を確保する最良の方法であると思ったからである。

ただし、最先端で行動する人たちにどうしても負担がかかるきら

いがあるので、今回は基本的には三日行動、二日休養というオーソドックスな行動パターンをとり、疲労の蓄積が生じないように配慮した。

目標を成功に導くためには、チームを形成するメンバーが、自分の持っている能力を温存することなく、お互いへの思いやりを発揮することによって、チーム全体の能力を向上させることができる。今回、文化を異にする両国の隊員が集まって厳しい環境の中で目的が達成されたが、これは平等の行動はもとより、競い合った後に生じた連帯感によって、目的意識が明確となり、最終的に「友好」という二文字に熟成されたものと思われる。

終わりに

一九九〇年ナイプン峰南稜のルートの試登、小型ジェット機による空からの偵察で、雪の多い山だという印象が強かったが、ルートに関してはそんなに難しい山だとは思わなかった。

ただしその立地条件から気象の変化が大きく、登りにくい山だという覚悟はあったが、慣れと状況の判断ミスによって大西隊員を失ったことは悔やんでも悔やみ切れない。

全体の行動力を高めるために隊員の強い登高意欲が必要であるが、へたをするとそれが事故につながる可能性も高くなる。体力、気力の持続、天候の巡り合わせが登頂の可能性を高めるものとなる。そのために隊長としての仕事は、隊員の登頂意欲の持続と安全登山の確保に集約されていたといっても過言ではない。

十月三十日、第二次登頂隊の最後尾を進む私は、あわよくば自分も未踏のナムチャバルワの頂にその足跡を残したいと思っていたが、骨折の古傷による足の痛みから徐々に遅れ始め、第一次登頂隊の頂上到着の報告を聞くと同時にC6へのUターンを決断した。

隊長の仕事は自らが登頂することではなく、より多くの隊員を頂上に到達させ、安全に下山させることにある。

第一次隊は登頂に成功し、下山にかかっており、第二次登頂隊はジリジリと頂上に迫りつつあった。今、私がなすべきことはC6で第一次登頂隊を温かい飲物で迎えることであり、また彼らをC5に送り出すことであった。そして、苦闘している第二次登頂隊の動向を見守り状況を把握することであった。

アタック隊が行動しているときは、なるべく近い位置で隊の行動を見守ることが不慮の事故が発生した場合に素早く適切な処置が取れる唯一の方法である。

一九九〇年の偵察から一九九一年の本隊、そうして一九九二年の再アタックと三年に及ぶ歳月は、登山が終わってみればあっという間の仕事であったように感じられるが、一つ一つ振り返ってみると何と長い道程であっただろうか。また見方によっては大量の登頂者を出したということは登山が易しかったと思われがちであるが、登頂者の数を増やすことはけっして生易しい事ではなく、特に合同登山においては双方の環境の違いによって日本側に負担がかかりがちであり、中国側の手法を熟知した総合的な戦略が必要であった。

〔日本・中国ナムチャバルワ合同登山〕
第一次隊の登頂

山本一夫

C5の再建

悪天候のために、十月十五日にC5より追い返されてから、今日十月二十六日は、第一次隊としては十一日ぶり二回目のC5入りである。登山の残り予定日数からすれば、今回のアプローチが最後のチャンスになるだろう。

天気は良いが非常に風の強い日である。あえぎ、あえぎやっとラストで着いた私の目に飛び込んできたC5は、一面の雪原と化し何一つキャンプ地の痕跡が見当たらない。風に吹き飛ばされたのだと信じて疑わなかった。重廣隊長から「雪に埋もれているのだろう。今日中に掘り出せなければ、君達はC3まで降りなければなりません」といってくる。C4には、すでに第二次隊が入っていたからだ。

この時は、私が持っていた雪崩対策用の小型シャベルだけが頼りで、固く締まった雪層を掘り始めた。焦りと不安の中、三十分ほどして、ルート標識用の竹竿の先端を、山本篤隊員が掘り当てるが、テントは二㍍以上もの雪の下だと悟ると、今度は一本のシャベルで掘り出せるのだろうかという不安に変わる。テントが掘り出せないということは、登頂を断念することを意味する。シャベルを交替しながら固く締まった雪を掘り返す。まるで何処かの工事現場で土を掘っているようだ。風はますます強くなり、掘り手もきつい労働だが待機している方も、吹雪にたたかれ辛い。やっとテントの一部を掘り当てる。更に掘り進み三張りのテントのうち、一張りを完全に掘り出す。折損していたテントポールを修理して、これに日本隊員が入る。また、同時に掘り出した、報道隊用の予備テントを雪面に張り、中国隊員が入る。こうして、十二時半頃より掘り始めて、午後五時過ぎ、やっとC5が再建された。

ルート工作

十月二十七日、C6へのルート工作を始める。ナイプン峰の肩からナムチャバルワ峰とのコルに約二〇〇㍍、五本のロープを固定して下がり、C6予定地に着くと、再度C5間を往復して、テント、食糧、登攀用具などの荷下げをする。非常に風が強く、コルに着いて二時間以上も風が弱くなるのを待つが、二張りのテントをやっと張れたのは、夕方の五時頃であった。

二十八日は無風快晴で、朝八時半にC6を出発。ルート工作には絶好の日和である。固定ロープは八㍉と九㍉の五〇㍍を十八本用意し、六人で分担する。C6から三十分ほどは膝下のラッセルで南壁下をトラバースし、ロックバンドを見上げる位置から直登開始、ロープを固定しルート工作をして行く。十四本固定して下降する。C6へ午後六時半に帰着する。

十月二十九日、無風快晴で明ける。午前七時出発。前日の固定ロープ終了点まで到達し、更に五〇㍍ロープ三本でロックバンドに取りつく。青田隊員がトップで、前年の残置ロープ伝いに登り、新たに

ロープ一本固定して、午後三時にはロックバンドを突破すると、前年の最高到達地点である七四六〇㍍に達した。ここから上、高度差三二〇㍍は、本当の意味での未知の領域である。3ピッチで白い小さなセラックの直下に到達し、そのセラックを左上へ回り込み、予定通り東北東稜線に出るというルートを取ろうとしたが、膝上のラッセルに雪崩の危険を本能的に察知して、左へ、左へと氷壁にルートを替えて登攀する。そのうちかなり大きなセラック帯が上方に現れた。その基部をビバーク地と決めて登行を続けるが、あと二五㍍ほどで基部という所で、二十三本用意した固定ロープを使い果たしてしまった。雪崩の危険を回避するために距離が予想より長くなったからである。しかし、六㍉の補助ロープが五〇㍍あったので、これをダブルで使いようやく標高七六〇〇㍍のビバーク地点まで辿り着く。ヘッドランプを頼りに雪を削り整地する。ツェルトを被りビバーク態勢に入ったのは、午後八時であった。

頂上への主稜線

十月三十日もまずまずの天気である。主稜線である東北東稜は目の前である。六㍉、三〇㍍の補助ロープを唯一の頼りに、2ピッチで稜線に出ると、そこから先はツェリンドルジ、ペンパザシ、ジャブー、山本篤、青田浩、山本一夫の順でアンザイレンして登行する。膝くらいのラッセルが続く稜線は途中、三―四個所クレバスが出てくる。この頃になると稜線を境にして南側は雪が舞うが、北側は晴れ、間近にギャラペリが、足下にはヤルツァンポーの大屈曲の流れが望まれる。正午、第一次隊は山頂に到着する。頂上は幅五㍍、長さ一五㍍と大変に広い。少し拍子抜けがする。この広い頂上の少しでも高い場所を探し、そこにスノースティックを打ち込み、モニュメントとする。

第二次の登頂

三谷統一郎

十月三十日夜中に起き出し、出発の準備をする。天気は風もなく良い。セラック下でビバークしている第一次隊は、今日頂上に到達するであろう。我々第二次隊も、一気に約一二〇〇㍍を登って頂上に達したいものだ。

朝食の準備として、テルモスに飲み物を詰める。重廣隊長は、BCと交信している。好天も数日続きそうだ。C6より、ヘッドランプをつけ、四時二十分、佐藤、三谷と出発する。最低コルより緩い雪面を右斜上して行く。少し傾斜が増した所より、フィックスロープがある。風のためか、第一次隊のトレースは消えている。ロープに登降器をかけ、佐藤隊員の後を追う。途中何カ所がクレバスがあるが、避けながら登って行く。登り始めると、ある程度の傾斜が続いており、キックステップ気味に登って行く。途中、二―三ピッチほどトップを交代するが、右斜上しているので、上部より小さなチリ雪崩が落ちても、怖い思いをする。

フィックスロープのおかげで、いいペースでロックバンド基部に到着。重廣隊長と交信し、中国隊員三名に、ロックバンドより先行してもらう。ロックバンドは、岩と氷のミックスのようだ。基部で

サンジュ隊長のアイゼンが滑り転んだ。フィックスロープがあるので、笑っていられるが、ロープがなければ大変だ。ロックバンドは、右へトラバースして、体が振られないよう気をつけて登る。そして一番岩壁の幅の狭くなった所を直上する。上部の雪のクーロアールに入ると、表面は雪であるが、下の層は堅くなっており、疲れてきたふくらはぎの力を抜くと滑ってしまう。しっかり蹴りこんで、上部のセラック目指し右斜上して行く。セラック基部には、第一次隊のビバーク跡がある。フィックスロープもここで終わる。

最後に登っている重廣隊長と交信する。第一次隊は、一本のロープで登っている。中国隊員はロープの切れ端のようなものでアンザイレンをしようとしている。天気も少し下り坂のような気がする。交信で、十二時過ぎ第一次隊が登頂した事を知る。トレースもあるので、ロープなしで行こうとする。だが、重廣隊長の指示で、セラックより下のロープ二本を回収して、アンザイレンして行く事となった。佐藤隊員が二本のロープを回収に降り、中国隊員三人、日本隊員二人でアンザイレンして、セラックより右へトラバースして登って行く。雪稜に出る手前のクレバスで、下降して来た第一次隊六人と合流する。登頂を喜び合い、第一次隊にロープ一本を手渡す。我々は、ロープ一本で五人アンザイレンして登って行く。コンティニアスとスタカットを混じえながら、雪稜を登って行く。最後尾にいる自分が遅いのだろう。すぐ前を歩いているサンジュ隊長が時々振り返る。ロープをほどく誘惑にかられるが、このパーティーより離れると登頂できなくなってしまう。何とか後続して、頂上手前の傾斜が緩くなった所で、自分だけロープをほどいた。そして、ゆっくりと午後二時三十分過ぎナムチャバルワ峰の頂上についた。頂上は意外に広かったが、すでに雲のためヤルツァンポー、ギャラペリは見えなくなっていた。BCと交信し登頂した旨を伝える。サンジュ隊長、ダーチミ、ダチョン、佐藤、三谷で記念撮影する。中国隊員はラマ教のセレモニーをしている。

長く頂上にいる訳にはいかないので、またアンザイレンして注意深く下る。ここでだれかがスリップすると、五人一緒に落ちてしまう。ビバーク地点に着き、ひと休みする。これでC6まで安全に帰れるだろう。フィックスロープに沿って、時々、下降器を使いながら下降する。フィックスロープが終わる頃、日没となり、またヘッドランプをつけて、暗くなったC6に戻った。テントでは重廣隊長が温かいお茶を持って迎えてくれた。

一九九二年日本・中国ナムチャバルワ合同登山隊

登山隊の目的

①世界最高の未踏峰ナムチャバルワ峰の初登頂、②日中協力による友好の醸成と登山技術の研鑽、③日中国交正常化二十周年を記念する

登山計画

①登山ルート：ナイプン峰経由の南壁ルート、②登山期間：一九九二年九月十五日～十一月六日、③登山方法：無酸素・ポーラーメソッド

登山活動の組織

総　顧　問　日本側：櫻内義雄、田口二郎、堀田彌一、宇都宮徳馬、小林與三次
中国側：伍紹祖、江村羅布

名誉総隊長　日本側：橋本龍太郎　中国側：史占春

総　隊　長　日本側：山田二郎　中国側：洛桑達瓦

副総隊長　日本側：斎藤惇生　中国側：王鳳桐

総指揮部　双方の総隊長、副総隊長により編成

登山隊

［日本隊］

登山隊長　重廣恒夫（45）（'76年ナンダデヴィ東峰、'77年K2、'79年ラトックI峰、'80年チョモランマ、'84年カンチェンジュンガ縦走、'85年マッシャーブルム、'85年ブロードピーク、'90年ナムチャバルワ偵察、'91年ナムチャバルワ）

登攀隊長　山本一夫（46）（'69年マッキンレー、'76年ラムジュンヒマール、'84年ガウリサンカール）

登攀隊員　三谷統一郎（通信・タクティクス）（36）（'78年アンナプルナ南峰、'82年ダウラギリI峰、'84年カンチェンジュンガ、'85年チョー・オユー、'89年サガルマータ）

登攀隊員　青田　浩（食糧）（34）（'81年アンナプルナ、'84年レーニン、'85年クスムカングルー、'86年冬期ブモリ、'87年マッキンレー、'90年アコンカグワ、'91年ビンソンマシフ）

登攀隊員　山本　篤（食糧）（30）（'88年シシャパンマ、'88年チョー・オユー、'89年サガルマータ、'91年ナムチャバルワ）

登攀隊員　佐藤正倫（装備・雑具）（29）（'86年昆崙山脈7167峰、'90年ナンガパルバット、'90年ナムチャバルワ偵察、'91年ブロードピーク）

気象　飯田　肇（37）（'82年ランタン・ヒマール、ヤラ氷河、'82年アンナプルナ山群、'84年カンチェンジュンガ、'84年ナンガパルバット、'85年ランタン・ヒマール、'90年ヌンプール周辺、'89年クンブヒマール、'92年ノルウェー・リグフォーン）

通訳・マネージャー　梶田正人（31）（'91年ナムチャバルワ）

医師　小島　彰（31）（'85年ナムシュラ、'91年ナムチャバルワ）

［中国側］

登山隊長　桑　珠　Sang zhu（36）（'75年チョモランマ、'77年トムール、'86年ニェンチンカンサ、'90年ナムチャバルワ偵察、'91年ナムチャバルワ）

登攀隊長　加　布　Jiabu（34）（'81年シシャパンマ、'83'84年ナムチャバルワ（ナイブン峰）、'85年ナムナニ、'86年ニェンチンカンサ、'90年ナムチャバルワ偵察、'90年チョモランマ、'91年ナムチャバルワ）

登攀隊員　次仁多吉　Cirenduoji（36）（'83'84年ナムチャバルワ（ナイブン峰）、'85年ナムナニ、'86年チャンツェ、'88年チョモランマ、'91年シシャパンマ、'91年ナムチャバルワ）

登攀隊員　辺巴扎西　Bianba zaxi（36）（'85年チョー・オユー、'86年ニェンチンカンサ、'90年ナムチャバルワ偵察、'92年ナムチャバルワ）

登攀隊員　大斎米　Da Qimi（36）（'85年ナムナニ、'86年ニェンチンカンサ、'92年チョモランマ）

登攀隊員　達　瓊　Da Qiong（31）（'86年チャンツェ、'87年ラプチェンカン、'90年チョモランマ）

【日本・中国ナムチャバルワ合同登山】

一九九一年本隊の記録

高見和成

一九九一年九月二十八日、午後も遅く私たち日中合同登山隊は既に中国側の手により、幾張りかの白く大きな中国製テントの張られたベースキャンプに到着した。

立木の繁る小高い丘のベースキャンプは標高三五二〇㍍。すぐ下の刈り取りの終わった畑には四戸の民家に飼われている牛、馬、羊、豚、鶏、犬が群れ遊び、日本の山里を彷彿とさせる。しかしひとたび目を転ずれば眼下には泡立つヤルツァンポーが大きくうねり、目前には鋭い傾斜角でナムチャバルワの頂が聳える。気品、風格共に申し分のない正に第一級のヒマラヤの高峰である。

前年の偵察隊の持ち帰った写真から私なりにある程度の山容を想像していたのだが、そのスケールの大きさに愕然とする。こんな素晴らしい未踏峰を中国、ましてや地元チベット登山協会もおいそれと外国隊に明け渡すはずがないと一人合点したものである。

私にとり初めての湿潤ヒマラヤ。朝の黎明時には小鳥がさえずり合い、しっとりと露の降りた草を踏んでトイレに行くベースキャンプがヒマラヤにあるとは、つい最近まで想像だにできなかった。

このベースキャンプで三日間を整備、装備の分配などに当て、十月一日、中国の国慶節に合わせてベースキャンプ開村。日中両国の国旗がナムチャバルワの頂に映えて美しくひるがえる。

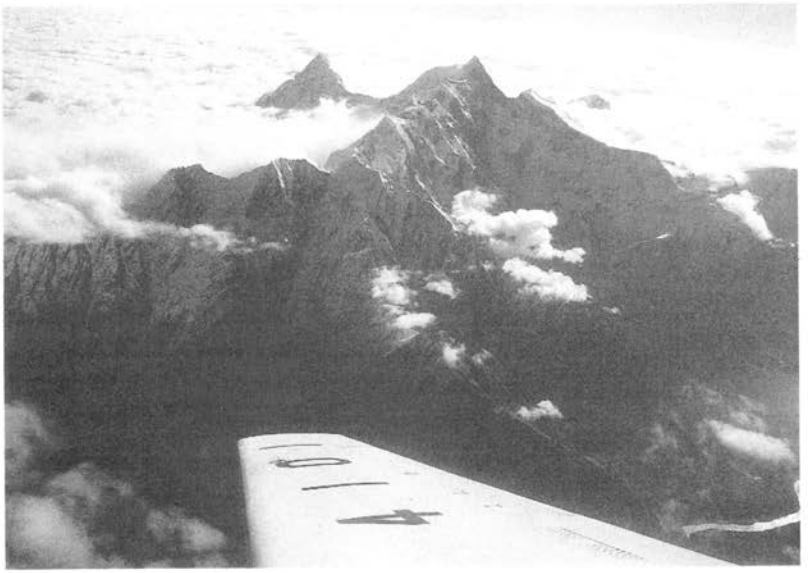
前年の偵察隊は短期間でナイプンのC5地点（六九〇〇㍍）まで到達。今回もその南稜ルートを採るため、各キャンプの位置まで決定されていた。残るは頂上までの標高差一〇〇〇㍍、中間のロックバンドと呼ぶ岩壁部をいかに攻略するかというのが課題とされていた。

隊の構成は隊長以下日中六名ずつの計十二名。高所協力員を使わず、この種の登山としては比較的コンパクトな隊といえようか。勿論、NHK、読売の報道陣の協力員を含めると要員はかなりの人数にはなるが。

今回は合同登山とはいえ、タクティクスは日本側、それも重廣隊長独自の理論で立案されていた。登山許可申請の段階からずっと情熱を注ぎ込んできた経緯、強引とも思えるほどのリーダーシップ。全員登頂を旗印にこれまでの豊富な経験に裏打ちされた、一分のスキもなく作成された登山計画には我々隊員は言うに及ばず、中国側からも異論の余地はなかった。

二日より順次BCを出発。一言でいうなればC1までは日本の秋山。C2までがアルプス、このC2（四八〇〇㍍）がこれまでのヒマラヤのBCというところか。

八日、いよいよ氷雪壁の登攀となるC3へのルート工作。前年の経験者大西と岩壁登攀のスペシャリスト木本の二人が先行。これまでの中国隊、前年の偵察隊の報告から、上部に広い雪壁を持つ「ラ



ナムチャバルワ峰とヤルツァンポー河

バ口」と呼ばれているジョウゴの口の様に狭まった個所の通過が雪崩の危険ありと案じられていた。が今回に限ってみれば雪が重いためか傾斜、積雪のある割には比較的安定していたように思えた。ただ上部には険悪なセラックがあり、これの崩壊に伴う雪崩の誘発ともなると予知ははなはだ困難となる。

大西、木本で所々に出ている岩場を選びながらぐんぐんルートを伸ばす。前年のロープも所々残っていた。雪稜に出てからは中国側にトップに出てもらう。十四本のロープを固定し、C3地まで到達。この五六〇〇㍍地点でBC以来見ることのできなかった頂上が手の届きそうな位置に姿を現した。周囲は四方八方峨々たる山並みが連なり、北側には山を断ち割って流れるヤルツァンポーが光り輝いている。

大西隊員の遭難

十三日、C3建設。登山開始以来天候にも恵まれ、日中隊員間の意志疎通も良く和気あいあい。順調に進んでいた登山活動も、翌十四、十五日と降雪が続き二日間の停滞を強いられる。そしてようやく晴れ間が戻ってきた十六日は痛恨の一日となる。これまで、否これからも牽引車的役割を果たしてきた、果たして行くであろう最強の男、大西宏を雪崩で失う。

前日までの深い雪をかき分け、日中五人の隊員が交代でラッセル。苦労しながらやっとの思いで六二〇〇㍍のプラトー（後でC4を建設）に到着。高所に強いはずの中国側隊員でさえ相当疲れていたはずだ。だがこの地点は傾斜があり適当なキャンプ地ではない。無線交信の後大西が「もう少し上まで登ってみます」と言い残し、一段

と傾斜を増した雪壁に空身で登高を開始した。前年の偵察ではこの雪壁の左上にC4を作った経緯もあり、その地点を確認したかったのであろうが、代償はあまりにも大きい。

私はというと、プラトー手前で疲労困憊し、空身でラッセル。プラトー到着後、荷を取りに戻った後、行動食で空腹を満たしながら、大西の登高を見守っていた。多少風も強まり、彼の登る姿からかなり傾斜があるなと感じていた。少し間を置き木本も後に続く。

私も腰を上げ彼のトレースを辿ること五〇メートル程登った時突如、音もなく足元までデブリが転がってきた。「雪崩だ！」はっとして目を上げると大西の姿がなく、横一文字に切れた雪の断層が目に飛び込んできた。「やられた」と思った一瞬、左横より木本が踊り上がるように飛びはねながら駆け寄ってきた。木本は流されながらも何とか脱出できたようだ。一刻も早く大西を捜し出さねば大変なことになると気ばかりあせる。雪崩の規模は小さいながらも周り一面デブリでどこを捜せば良いか判らず、ただデブリの上を走り廻りながらプラトーで休んでいる中国人を呼ぶ。が彼等は次の雪崩を恐れてか動こうとはしない。暫くして左側より木本が叫ぶ。「見つけたぞ！」すっ飛んで行くと雪面より手だけが出ていた。すぐ掘り出しにかかる。中国人も来てくれ懸命に掘る。雪崩発生から十五分後、大西を掘り出したが時既に遅く、その後祈るような思いで三十分間必死の人工呼吸を続けたがついに蘇生しなかった。テントにくるみ、安全地帯に安置する間じゅう、ほんの数分間であの元気であった大西の変わり果てた姿にただただ茫然とするだけであった。

十八日、大西隊員をC2近くの氷の中に安置の後、全員BCに集合。今後の計画見直しを日中の上層部で協議。中国側からの強く再開を望む意向もあり、大西の意志を継ぐ意味からも登山続行と決まる。

ご遺族の到着を待つ間、入山当時よりずっと秋らしくなった山里を散策して過ごす。紅葉した森に降ったばかりの新雪がきらめき、何か南アルプスの仙丈岳にいるような気がしてならなかった。地元民の案内により三・七（田・七ともいう）と呼ばれている薬草掘りに連れて行ってもらう。細い茎から三本に枝分かれし、その先に長円形の葉っぱが七枚。三・七の由来らしい。根は数珠状に球根が連なり形状はさまざま。切らない様に掘り出すのに苦労する。朝鮮人参より強壮作用があり高価だとか。真偽はともかく、沈みがちだった雰囲気に対して、気分転換には漢方薬以上に効き目があったのは確かである。

二十六日、C1近くのカルカでご遺族の見守るなか、大西隊員を荼毘にふす。いつものことながらご遺族の心情を思うと辛く悲しい。何としても事故だけは避けねばと思う。「ターシー、ターシー（大西）」と登山隊員に限らず、地元の民工（ポーター）たちにも絶大なる人気のあった大西だけに仮葬儀には大勢の人たちの参列を得た。

二十七日登山再開、C2に戻る。十日間の中断で山は一段と寒さが募り、水場も枯れ果て一面雪原と化していた。もうこの雪は明年の夏まで融けないのであろう。C2そばの大黄（だいおう）の根は凍土の中で半年以上も耐えるのであろうか。

二十九日、久々に入ったC3のテントは潰され、張り直しに苦労する。そして、行動は寒気、烈風との戦いになった。C4地は六二

○○㍍のプラトーと決定し、物資の集積を行う。このC4地は雪崩事故現場のすぐ下に当り、風当りも強く良いテントサイトではない。

十一月二日、C4建設に出発。いつものことだが朝は風も弱いのだが、昼前から風が強まる。この日もプラトー手前から烈風すさまじく、マットなどかさばる物を背負った隊員は、風のくるたびに雪面に身を伏せ、這いつくばって耐えるしか方法がない。

テント設営も六人がかりで飛ばされないように押さえつけながらやっと一張りが精一杯。早々とC3に逃げ帰る。この作業中にマット一包みを飛ばされる。糸の切れたタコの様にアッという間に見えなくなってしまった。その後も風雪止まず、C4入りするも停滞の日が多くなる。

そして七日、一次隊六名は烈風に苛まれながらもC5地に到着。懸念していたコルへの下降ルートを確認する。時間的余裕もなくコルへザイルを三本継いで下ろしてみたが、ほとんど下の雪面まで届いた様子。当初の予想ではこの下降を三〇〇㍍と読んでいたので、これは嬉しい誤算であった。翌日C5へ荷上げの後C2に下山。二次隊も九日荷上げの後、C2に下り、アタック出発前の休養に入る。

十一日、翌日からのアタック隊出発に際し、重廣隊長よりメンバーの発表があった。これまでのローテーション通り一次、二次隊による計画通りの全員登頂。毎日一つずつキャンプを上がり、十七日に第一次隊のアタック計画である。

十二日、C2より上部に向かうも強風吹きすさび、予定通りの行動不能、停滞日が多くなり、C5建設は十五日。さらに停滞は続く。十九日、ナイプンと主峰のコル（六七〇〇㍍）にC6を建設するとともに頂上へと続く急峻な雪壁にルート工作を開始する。

第一次アタック

このところの強風でC3～C5間の南稜上は堅雪となっていたが、この壁は風下側に当たるためか、C6から取り付きまでの水平トラバースは雪が深くラッセルに苦労する。しかし、小さなシュルンドを越え、雪壁に取り付いてからは靴先が入るほどの理想的な状態。快調にピッチを稼ぐ。軟い部分では雪を掘り下げ、スノーバーを横に埋めて支点を取る。

直上気味に十一本のロープを固定後、ルートは徐々に上部から垂れ下がった岩場を目指し、右斜上。この地点は傾斜が急なためか、雪が付かず、少しばかり氷が出ていて、本山行で初めて出会った氷であった。

13ピッチ目でラバ口以来、久々の岩場にロックハーケンで支点を作る。良く利いたハーケンほど信頼できるものはない。ジャブーにこの地点まで登ってきてもらうが、後の四人はこの下の支点で待っていてもらう。夕暮れも間近、時間が気になるがもう1ピッチロープを伸ばし、登攀具を支点に吊るした後、C6に下降。私自身予定したロックバンドまで届かぬながらも、到達高度は七二〇〇㍍。C6を建設しながらの一日の行動としてはまずまずといえようか。

二十日朝五時にC6出発。だがいつもの身を切るような冷たさもなく、ガスって星も見えない。それでも今日一日、何とか天候ももつのではとの淡い期待で昨日のトレースを辿る。ガスで塞がれた中、いつ夜が明けたかも分からないうちに朝がきた。

周辺は視界もなく何も見えずただ黙々とロープを登る。途中のデ

ポでロープ二本を拾い到達点で登攀具を身につけると、いつものシャキッとした気分にさせられる。しかし一向に後続のメンバーは姿を現さず悪天候のため行動を中止かと不安にさせられる。ともかく一人でもロックバンドまで到達し、次のアタックを有利にせねばと、ルート工作を開始する。

ところが、これまでと全く違いフカフカの雪でラッセルに苦労する。頂上まで続く広大な斜面の雪が風で飛ばされ、流雪となって落ち続けているのではなかろうか。直上の2ピッチをラッセルであえいでいるとジャブーが追い付いてきた。見え隠れしているロックバンドにも流雪がかかり始めた。3ピッチ目が特にひどい。少し岩の出たミックス壁が殊の外悪い。まるで蟻地獄のようにもがき苦しむ。五〇㍍を登るのに三十分以上も要したであろう。

これよりルートはロックバンドへの水平トラバースとなる。又このトラバースたるや五〇度の斜面に胸までの雪。雪崩の恐れもあるが、その危険を感じながらも行動せねばならない時もある。おそらくこの地点はいつもこんな状態ではないか。意を決し、ジャブーに確保を頼み、流雪の中に身を踊らす。

斜面を切り崩しながら塹壕を掘ってのトラバース。五〇㍍一杯でロックバンドの左端に到達。ロープがなくなり、トラバース地点に引き返す。C5の重廣隊長にこの状況を説明し、今日の行動を打ち切ることを伝える。三本のスノーバーで支点を補強。ジャブーには一足先に下りてもらう。この地点も流雪が度々襲うがスノーシャワー程度で大事には至らない。

次々と残りの隊員も到着し、支点に登攀具を吊るした後早々と下降して行く。私が最後にこの地を離れたのは到着後二時間以上たっていたろうか。この間の流雪は十回を下るまい。この日はわずか四本のロープを固定したにとどまったが、懸案のロックバンドに到達し、次のアタックに自信が持てたのは間違いない。

第二次アタック

十一月二十二日未明四時、打ち合わせ通り先ず私がテントから這い出る。外は皓々と照る満月、それに負けじと星もまたたき、ライトは不要。風一つなく、冷え込みも厳しく最良のアタック日和のようである。だが交信で得ていたC2での積雪二〇㌢という通り、この地点でも傾斜面の積雪は深くラッセルに苦労させられる。いつの間にか中国隊員三名が追いついてきた。これまではゆっくり出発するのが例の彼等とて、今日のアタックにかける意気込みは相当なものであろう。

先日のトレースは完全に消え、セラックの変動個所、又雪崩の恐れもあり、ルート選定に気を遣う。だが固定ロープに辿りついてからは、新雪もあまりなくスムーズな登攀が続く。七〇〇〇㍍付近を登っている時、雷光が一つ二つ。満点の星空なのにと思っていると、どうも先行する中国隊員の暗闇のフラッシュ撮影のようである。余裕がなければできる芸当ではない。なかなか味なことをやるなと内心ニンマリする。

固定ロープを攀ること二時間、気がつけば満月が北稜に没すると同時に東側の連山の山並みが茜色に染まってきた。神々しい黎明の一時であるが、カメラを出す時間も惜しんで登り続ける。ロックバンドへのトラバース地点で中国隊員に迎え入れられる。ペンパザシ

の輝く目が美しく、リタイヤしたジャブーに代わり、急遽アタック隊に入ったツェリンドルジの笑顔も頼もしい。

九時、登攀具を身につけ、トラバースの後最後の難関と見られていたロックバンドに取りつく。写真で見慣れていた偵察時とは異なり新雪でおおい尽くされ、ルートは簡単そうに見える。

セカンドはツェリンドルジ。今では中国隊のエースに成長した彼の確保は心強い。彼とは一九八〇年チョモランマ北壁以来の再会。当時まだ二十歳。初めて登山隊に高所協力員としての参加というのに、急峻な北壁を駆け登る姿にこの若者はタダ者ではないと確信していた。その通り一九八八年のチョモランマ三国隊では縦走隊員となり一躍スター的存在となっていた。カモシカの様だった細身の身体が少々太めになってはいるが明朗、快活そして素直な性格は以前のままである。

時々ナイプンのC5からカメラで我々を追っているであろう重廣隊長と交信、ルートの指示を仰ぐ。振り返るといつの間にか山本、木本も追いついてきて、五人が一団となっている。トラバース気味にロープを三本固定し、右端の岩壁の短い部分から直上、上部雪団に抜け出て、雪を掘り下げ氷にアイスハーケンを利かす。この辺りで周辺がガスに包まれたことに気付くが、まだ風もなく上部雪田の見通しも利き、余すところ頂上まで高度差で三〇〇㍍ほど。後は多少のラッセルはあろうと頂上は射程距離。まだ十二時前後、日没までにはまだ八時間の余裕がある。

次いでツェリンドルジが到着。ここで彼にトップに出てもらうこととした。今回の登山ではこれまで日本側がロープを張ってきた。先日の交信でも中国側からルート工作の申し出があったが、時間的な面からこの雪壁でも日本側リードで登ってきた。これから頂上まではパワーに勝る彼等にリードを願うのが良かろうとの考えであった。ロープを持ったペンパザシの到着を待ち、ツェリンドルジが勢いよくラッセル、猛然と登って行く。

ところがほんの二〇㍍ほど登った時いきなり最初の流雪が襲う。まだ量も少なく流されるほどではないが、この急変に驚く。そのうちに流雪の回数、流量も次第に増してくる。我々は固定ピンに身を託しているが、ツェリンドルジたるや流雪の中のピッケル一本にかじりつき、動くことすら出来ない。風下に当たるこの一帯は風が巻いているのだろうか。上と下から吹き上げが強まり、スノーシャワーというより雪崩に近い。五番手の山本はロックバンドの中でゴーグルを飛ばされ、流雪に翻弄されている。

十二時二十分、重廣隊長と交信、ひとまずアタックを中止して岩壁の基部の安全地点まで下降することにする。登高中止を伝えると、ペンパザシの顔からいつも絶やさぬ笑みが消え、顔がひきつり不満の意図がありありと読みとれる。彼のこのナムチャバルワにかける意気込みはすさまじく、次々とリタイヤする中国隊員の中で彼だけが最初から最後まで交替もせず頑張り通したのであった。ツェリンドルジも流雪の合い間を縫い下降してきた。

今日の中止はペンパザシに限らず、皆にとって不本意なはずだ。だが、こんな状況の中でのアタックは不可能だ。今日一日の行動で限りなく頂上が近づき、次のアタックでは万全を期すことができる。あくまで頂上に固執するペンパザシをなだめ、そして、自分をもな

ぐさめながらC6への下降を開始した。

二十三日はまずまずの天候だが昨日の状態から流雪の恐れもあり停滞、休養日に当てる。私はアタックの際、手の指先を凍傷でやられたが、マッサージにより何とか行動に差しつかえない程に回復、正直なところホットする。もう食糧も残り少なく、明日が最後のアタックになることは明白だ。大本営の指揮部からも明日のアタックにかける期待が届く。

二十四日午前二時起床、支度を整え、私はもう片方の靴をはくだけとなっていた四時、指揮部から交信が入る。流雪、隊員の消耗などからして、今日のアタックについて再検討の必要ありというものだった。昨夜の交信からわずか六時間足らずの間に大本営の日・中指揮部の間で重大なことが協議・決定されたのであろうか。C5の重廣隊長からも不満の旨を伝えるがラチが明かない。無線での交信など、所詮言葉を伝えるだけであり、話し合い、協議は無理なような気がした。

一刻を争うアタック出発の大切な折に全く気分をそがれてしまう。延々と交信が続く。結局、結論が出ず出発中止。そして午後、大本営の指揮部から中止命令が伝わってきた。

山登りに限らず、何のスポーツにおいても当事者は、最善を尽くした後の敗退、失敗なら力不足と納得もし、あきらめもする。それが今回のような結末に終わったのでは後味が悪い。確かに今朝出発していても昼前からの悪天で先日の個所まで到達できたかどうかは分からない。が、その判断は先端にいる者の決定することであるとの事前の打ち合わせではなかったか。私は常々、何事においても結果よりその過程を大切にしたいと思っている。この二年間、生活の全てをこの山のためにつぎ込んできた重廣隊長の無念さを思うと、呼びかける言葉も思い出せなかった。

翌日C6を撤収するに際し、同僚、山本隊員とともに頂上まで同行するはずであった大西の遺骨、遺髪をBCが見える個所に埋葬する。頂上用に持ってきた小さな国旗、会旗でささやかな祭壇を作り手を合わす。彼が生きていれば当然一番初めに登頂していたろう、と思うと複雑な気持が込み上げてくる。その後強風の中をBCに向け下降を開始した。

二十八日、全員ベースキャンプに集結。すぐさま明年に向け装備などを四戸の民家に預けるためデポ品を整理。下山後の休養どころではなくリストを作る者、梱包する者と慌ただしく動き廻る。ここでも重廣隊長の目が光る。

二日後、悲喜こもごも、六十二日を過ごしたベースキャンプを後にする。入山時枝もたわわに実っていた野性の桃も葉を振るい、霜柱も立ち既に冬の装いである。轟音を響かせていたヤルツァンポーの流れも澄み、もう間もなく厳しい冬を迎えるのであろう。

四輪駆動車は力強くサラを目指し、西進を始めた。

［日本・中国ナムチャバルワ合同登山］

雪崩事故について

山本宗彦

1．雪崩事故当日の行動概要

前日二日間は約四〇～五〇㌢の降雪があり停滞していた。事故当日の十月十六日は標高五六〇〇㍍のC3より七時十分頃日本人隊員三名（高見・木本・大西）が、八時頃中国人隊員三名がC4予定地に向けて出発した。ルート上は積雪が多く、ラッセルを交代しながら進み、途中五八〇〇㍍最低コルとよばれている所でC1へトランシーバーによる連絡を行った。そこから斜面は約一五度～二〇度の急斜面となり、さらに交代でラッセルを続けて登る。

一九九〇年秋試登の際のC4（六三五〇㍍）の下のプラトーに出て全員が終結した。高見の高度計は六一五〇㍍を示していた。その後NHKの東野、米山が合流する。ここでC4が建設出来ないか否かを検討し、十三時十分頃、C2へ荷上げ途中の重廣へ報告した。高見は先頭でラッセルしていたので、五〇㍍程下った所にある荷物を取りに下った。その間大西から重廣へ、上部の偵察を行うという連絡がトランシーバーを通じて十三時十五分頃なされた。高見がデポ地点に戻ると、大西が上部へ偵察に行くといって出発した。そこから上部は四〇度前後の急斜面でラッセルはかなりありそうであったが、雪崩についてはあまり注意をしていなかった。大西は早いスピードで昇り、その後にすぐ木本が続いた。木本はすぐに左へトラバースし、高見はプラトーにて食事を摂っていた。その後高見はトレースを追い、二〇㍍程登った所でデブリの山によって雪崩の発生を知った。雪崩の発生は十三時三十五分頃と思われる。木本は二〇㍍程流されて姿を現し、木本と高見で姿の見えない大西を探した。十三時五十分大西を発見し、中国隊員も揃って大西を掘り出す。掘り出した後、心臓マッサージと人工呼吸を十四時二十分頃まで行ったが蘇生せず、BCの小島ドクターに状況を報告して死亡を確認した。その後テントにくるみ五八五〇㍍まで降ろして安置し、C3へ戻った。帰路、トレースは風のため消え歩行は困難であった。

2．雪崩事故の状況

木本は大西と話をし、プラトーの左の方にもテントを張れる所があるというのでそちらの方を見に行ったがあまりいい場所ではなかった。上から雪が落ちてきたら壁の方へ流されてしまうような感じで「だめだ。こんな場所にはテントは張れない」と大西と言葉を交わして登って来た道を戻った。戻る途中で亀裂が走って雪が落ちてきたが、その時亀裂はよく分かったが大西が巻き込まれている瞬間は木本の記憶の中にはないので瞬間の状況ははっきりしない。木本は雪が落ちてきたので上から見て左の前方に走って逃げたが、十歩位走って逃げたら雪に巻き込まれてそのまま流された。木本は一〇秒から一五秒の短い時間だと感じたが雪崩の止まる頃に這い出して逃げた。体が出た時に、その時点では雪崩は止まっていたので上を見上げたら大西が確認出来なかったので、木本は大西は雪崩に巻き込

まれたと思った。木本は自分の近くから探し始めたがすぐには見つからなくて、一応自分が流された方向と大西が登っていった地点からの方向なども考えてそちらの方も探したところ運よく手袋をはめた手が出ているのを発見したのでみんなを呼んで掘り出した。この間中国隊員は雪崩の二次災害を恐れて待機していた。木本は、事故発生から掘り出し終わるまで、五分位かと感じていたが実際には一五分位かかっていた。発見までが約一〇分で、掘り出すのに約五分位かかっていた。掘り出した後すぐに心臓マッサージと人工呼吸を行ったが、瞳孔が開き、脈も無く、BCの小島ドクターにその旨を報告し、死亡を確認した。

雪崩の規模は、深さ二〇㌢～六〇㌢、幅一五〇㍍～二〇〇㍍、長さ八〇〇㍍（最長）、右手は五〇〇㍍、標高六二五〇㍍～六二〇〇㍍付近。

3．事故後の処置

雪崩直後の大西の発見まで約十分かかっているが、これは高見と木本の二人だけで行っている。中国人隊員は雪崩の二次発生を恐れて大西を探すことはしていない。発見した後は中国人隊員も加わって掘り出して、その後心臓マッサージと人工呼吸を行う。人工呼吸は「マウス　トゥ　マウス」等を行い、時間にして約二十分位であった。

4．原因―雪崩の分析

事故の前二日間にわたって降雪が続き、五六〇〇㍍のC3付近では大体四〇㌢～五〇㌢の積雪を見ている。事故現場付近の六二〇〇㍍付近ではそれ以上の積雪があったと考えられる。したがって雪崩を誘発した直接原因は、二日間にわたって降り続いた新雪が積もった、約四〇度の傾斜に踏み込んだためであり、ここで発生した雪崩は新雪表層雪崩であろうと考えられる。しかし単純な新雪表層雪崩ではないとする見方もある。それは雪崩の起きた雪の切断面の状態からも推測できることではあるが、積雪の成立に当たって風の与えた影響が無視できないのではないかという視点である。

雪の切断面にはクラック状のもの（亀裂）が入っており、積雪層が不均衡な状態であったことが推測される。これは風によってもたらされた積雪の密度や厚さの違いからくるものであり、積雪のバランスが非常に悪く、かなりのストレスを持った積雪であるということが考えられる。これは、吹き溜まりのような積雪が同一斜面上にできるものであると考えられ、風とリッジの形が積雪の質そのものに強い影響を与えた結果と言え、大量の雪が部分的に積もることによって積雪そのものの見えない部分に逆の意味の凹凸が出来上がり、そのストレスの中に踏み込んだ際、バランスの崩れた状態で起こった雪崩ではないかという視点である。

したがってこれは稜線の形状によって大きな変化を持つ卓越してきた風によってストレスをもった積雪が形成されたと言え、新雪が大量に積もったからだという単純なものではなく、同じ場所にあっては降雪が続いた直後でなくとも起こり得る可能性が充分にあるのではないか、ということであり、一考の余地があると考えられる。

5．その他

①　雪崩対策について

計画を進める中で、京都大学の梅里雪山での雪崩事故を教訓として、通称「ヤマタン」と呼ばれているブローチ型の発信機を

携行した。実際にこれを使ったのか否かという点については、一応C2に集結した時点で全員に配り、さらに各キャンプに受信機を配置できるよう用意した。ただし、荷上げの時点ではそれを携行することはなかなか出来なかった。しかし、この機械は大体の位置を推定するもので、さらに確定されるためにはそのための装置が必要なため、それを携行することは難しいことと、さらに今回のように、短時間で見つかった場合は探知器を使うよりは人の目で探した方がはるかに早い。また、素早い反応ができる。ブローチ型の発信機に関しては今後さらに改良が加えられると思うが、現在の状況では長時間発見されなかった人たちを探すのに使うくらいが限度であろう。電池の容量によって発信は大体一～二年もつので現在のところそういった使い方しか出来ないのではないかと考えられる。

② 事故現場の偵察時における状況

偵察時の時期は今回よりも一カ月程遅く、十一月から十二月にかけてなので今回の登頂目前の頃と重なることになる。その時はもうすでに降雪はなく、風が強かった。ラバ口からナイプン峰、六九〇〇㍍までは、降雪があってラッセルが深かったということはほとんど感じられなかった。したがってラバ口の状態もかなり安定しており、そこから上部もラッセルはあっても膝上からも位まであった。また、雪崩の危険はなかった。大西の事故のあった六二五〇㍍の地点まではそれまでのラッセルとは雪質が変わり、若干堅めで上の方がウインドクラストした様な雪になり、下の方が少し軟らかい雪が積もっているという具合で、潜っても膝下程度であった。危険な斜面ではないという考えをその時の隊員全員がもっていた。しかし、風は強かった。

③ 事故当日の隊員の心情について

これからという時の二日間の降雪による停滞によって、はやる気持ちがあったことは否めないと報告されている。

合同登山隊のマネージメント

梶田正人

一九九一年、一九九二年と連続してナムチャバルワ登山隊にマネージャーとして参加した。

仕事柄、生き馬の目を抜く中国との交渉事には馴れてはいたものの、一癖も二癖もある山男たちの集まりであるナムチャバルワ登山隊のマネージャーを仰せつかり、身の引き締まる思いであった。

最初の年は慣れないながらも、さしたるトラブルも無く乗り切ることが出来た。

おかげで再挑戦の今回も大役を引き受けるはめになったが、帰国後の身の振り方を考える以外は、勝手知ったる気楽さと、また中国側の出方と重廣隊長の反応が大方読めたからか、酒の残量に気を遣うことだけが、日々の仕事であった。

その上、勝利の美酒を味わい、さしたるトラブルも無く無事帰国できたことは、今

になって思えば当たり前のことのように思えるが、今更ながら、おてんとう様のお陰とひたすら感謝しないではいられない。

いわゆるマネージャー業というのは雑用係であり、苦情処理係である。通訳を兼ねていたものだから、何事も舌先三寸、皆に動いて貰えれば、何事もうまく行く。ましてや重廣隊長という強烈な個性の指導下ではバランス感覚さえあれば大した苦労も無い。

ここでは二年間の体験を通じて、会得した中国側との物事の考え方の違い、トラブルの解決法等を通じ、合同登山隊のマネージャー業とは何であるか紹介したい。

登山隊のマネージャーは雑用係である。従って、装備、食糧、通信何でもかんでも、ある程度は分かっていなければならない。しかし何でもかんでも関わっていれば身が持たない。そこで、なるべく自分が動かないでいいように、最も効率よく物事が運ぶように話をもってゆく、そうすれば最も合理的に物事が進む。

それぞれの担当が自分のやるべき事を心得ており、与えられた役割をこなしていたので、マネージャーはそれに対するサポートをすればよかった。その上小島ドクターという優秀なベースキャンプ・マネージャーがいたおかげで、何事もシステマチックに事が運び、随分助かった。

六割日本、四割中国。何でもかんでも日本側の考え方を押しつけていては、必ずトラブルがおこる。トラブルを起こさないためにはどうしたらよいか。時には中国側の代弁者となり、先方と如何に良好な関係を維持するかを考える。たいして重要でない事は取りあえず中国側の言い分を聞いておく。その比率は六対一〇くらいか。

そのためにも、中国側のキーパーソンと日頃から如何に親しくつき合えるかがポイントである。幸い、一九九一年に中国側マネージャーである張江援とチベット人隊員の長老級のレンチンピンゾーの二人と〝老朋友〟になっていたことは私にとってこの上無い幸いであった。

今回は、昨年にも増して、中国側が日本側の要求に理解を示してくれたため、キャンプサイトの設営、タクティクス等について、ほとんど一〇〇%日本側の主張が通った。日常生活上の瑣末な事については、中国側マネージャーである張江援と私の段階で処理し、隊長へは事後報告に止めた。

中国人（漢族）とのつきあいでもっとも重要なことは、相手の顔を立ててやることである。例えば、先方のマネージャーが中国側隊員から食料の補充、装備の交換等を日本側に要求して欲しいとたのまれ、それが日本側から万一断られた場合、先方マネージャーの顔がつぶれるわけである。従って、ある程度の無理も聞いてやらなければならない事になるが、理不尽な事、不可能な事を聞いてやるすべは無い。その意味では張江援はこれまで日本との合同登山隊の経験が豊富であるゆえ、日本人の考え方を理解しており、従って無理な事は当方には要求せず、中国側隊員に対し、自分の階段で拒否してくれ大助かりであった。

今回の登山の成功の大きな鍵は高所協力員が大量の物資をC2～C5間を輸送したことにある。ここではレンチンピンゾーが大きな役割を果たしてくれた。天気が悪い日で、他の高所協力員が出渋っている時や、どうしても荷上げしなければならない物資

があった時など、長老であるレンチンピンゾーが率先して出てくれたおかげで、他の高所協力員も出ざるを得なくなり、荷揚げが順調に進んだことは特筆すべきである。

最後に二年間の荷上げ、荷下ろしについて総括しておきたい。

	1991年　1992年
BC～C1	民工・登山隊・民工　高所協力員
C1～C2	民工・登山隊・民工　高所協力員
C2～C3	登山隊・高所協力員　高所協力員
C3以上	登山隊・高所協力員　登山隊、高所協力員

今回はBC～C2間は隊員、高所協力員とも荷上げはやらず、全て民工による荷上げで、体力を温存した。

また賃金も前回のBC～C1、C1～C2各十元／個（重さ二〇㌔程度）、三日行動、一日休みから各〇・五元／㎏、積み荷制限無しとし、民工の金銭欲を刺激したことで、大幅なスピードアップをはかることが出来た。民工の手配と荷上げに尽力してくれた張江援に心から感謝したい。

日本側も本隊、報道隊が別々に荷上げスケジュールを組むのではなく、全ての物資をまとめて荷揚げの手配を行った。その結果、効率的な荷揚げを行うことができた。時には報道隊、本体の間で不足した物資を融通し合うこともあり、その意味でも本隊、報道隊が一体となった良い山登りが出来たと感じる。

最後に、機会があればまた遠征に参加してみたいという気持ちは有るが、カネと時間がかかる遊びゆえ、なかなか環境が許さないであろう。

ヒマラヤの静止した時間と自然に再び触れる事が出来るのはいつの日か。

一位と二位の人間がいる場合、二位の人間は一位の人間の前を走らなければ強くはなれないのだ

——大西宏断片——

大西俊章

長男宏を失ってから一年余がたち、わが家の生活情況は根底から崩れてしまったといってよかろう。

男の家観といってしまえばその通りであろうけれども、美穂を嫁に出してから俄かに淋しくなり大西家は「断絶」するんだと思うことしきりである。

私の勉強方法も、宏の死生観を含めて新しく問いなおすことはもちろん山の登攀理論・技術など無関係な分野にも及ぶようになってきた。「もっと、幅広く世の中のことを見ないといけないよ」と宏に尻をたたかれている現状である。

宏を失ってから、今つぎのような慰めの言葉をかけてくれる人たちがいる。「山が好きであったのだから、山で死んで本望」という意見である。私はこの意見には反対である。

山があるからそこにゆくの感情とは違い、日頃から山にたち向う連続の訓練を続けていた宏を思うとき、遭難（雪崩）をクリアーしていける筈であった。

宏はすべてに慎重で一生懸命に人生を懸けて頑張り、二十九歳の若さで逝った鋼鉄の男を思うときなんとしても残念であっ

た。

うち続く「三極制覇」のための南極点を目ざし続ける男として、ナムチャバルワ峰に立つ宏のケルンには私の言葉でいうなら、あえて無念と記したい気持ち一杯なのである。

○

明治大学に入学してからの岳友というか親友に山本篤さんがいる。二人を知っている仲間は過去について、しょっちゅう目ざましい論争をやり胸ぐらをつかみ合う相手であったなどと評するものもいる。

一端、結論が出たら二人は山にたち向うといった仲間であったという。

明治大学で有名になっている「お直し」には、音をあげるのが普通であるが二人とも顔を見あわせながら不思議に頑張りとおしたと「キャンパス・リポート」(『岳人』一九九〇／十二)に書いてある。家で電話をかけ合っている二人は自然そのものであり、家のものと話しているよりも内容は濃密であった。

宏と篤さんの山に対する関心は、二人が語っている「スケールのでっかい山に心惹かれますね」(『岳人』一九八九／九)に、彼らの未来をどのような構図としてえがかれていたかがわかる。ちょうど宏が北極点から帰り、二人とも入部のときからヒマラヤへ登るといったことを約束し、カトマンズ・クラブよりエベレストを目ざすという希望をふくらませていた時期のものであった。「(山本)現役時代の貯金が、いまに役立っているという気がします。大西はエライ奴で、きっちりトレーニングするんですが、ぼくはほとんどやらない(笑)」

「(大西)いろんな登山隊に参加して、いろいろな問題に直面したりしても、立ち帰る所。オレには〝明治の山〟があるということは心強いですね」

などと言っており、明治大学山岳部に支えられた二人の深い友情があったのである。

それからの二人の山行は省略するが、一九九一年の日中国交回復二十周年事業ナムチャバルワ峰登山隊に日本山岳会、重廣恒夫隊長より二人は選抜をうけて勇躍として現地におもむいたのである。

宏は十月十六日午後一時四十分ごろ、六二五〇メートル地点で雪崩のため死亡した。

その年の登山隊は、残念ながら、雪崩・雪のシャワーの前に断念せざるをえなかった。

一九九二年には、重廣隊長、篤さんの隊員を含め再編成のうえ、ナムチャバルワ峰へ再挑戦をして十月三十日に初登頂を果たしたのである。

篤さんは、ナムチャバルワ峰頂上に宏のアイゼンを履いて登ってくれた。

篤さんの「大西のことを考えると、再挑戦への気持ちは、感情的に抑えられなかった」という気持ちと明治製菓の温情ある配慮が、二人の友情の絆をともなって涙をさそってくれたものと思わざるをえない。

死んだ宏と生きている篤さんの同志としての親交は、まだまだ永久に続いてくれることを願っている。

○

宏のダビのため私たち(妻和子、長女美穂)は、日本山岳会より引率が決定した橋本清さん、佐野哲也さんの指示に従い遠いナムチャバルワまで遺骨を引き取りに出かけた。

ダビに集まった人たちは約五十人であり、宏の遺体は樹木を交互に積みアルミ製の梯子を置いたうえに日本山岳会の旗にくるまって、胸にはチベットのカタをかけて寝かせられていた。

ラマ僧が右手にカダルをもって読経がはじまる。日本山岳会会長山田二郎さん、中国側総隊長ローサンダワさんの弔辞にひき続いて、明治大学のO・Bである橋本さん、山本（篤）さん、佐野さん、廣瀬学さん、美穂が「明治大学校歌――白雲なびく駿河台――」「炉辺会の歌」を歌い、山峡深く切りきざむように谺した。



大西宏氏を偲ぶメモリアル・ストーン

重廣さんと和子が、ダビに火をいれ、火は野火のように一瞬にして炎となり、山の峰を目ざして雪の登攀者となって登っていった。

○

宏の言行録のうち若干をひろってみることにする。

1．（北極点に立った感想）

「ただの雪原なんですが、何かそこに崇高なもの、つまり神様がいるような気がしてなりませんでした」

2．（ナムチャバルワと南極とを同時に目ざすのを共倒れの危惧ありとの評に対しての発言）

「南極をやり遂げるには、このくらいのスケジュールをこなすだけの自己管理能力が必要なんです。ナムチャバルワが『建て前の隊』という指摘は分かりますが、僕の本音は、機会があれば、地球のひだを一本でも多く確かめたいのです。南極へ行くことも基本的には同じなんです」

3．（第6回冒険とスポーツの白馬大会シンポジウムのアンケート「テクノロジーの発展は冒険の可能性を狭めると考えますか」の質問に答えたもの）

「抽象的な質問であるが、冒険（というよりは探検）はいつの時代にも形を変えて存在しなければならないし、不滅のものだと思う。

それよりも自然と互換性のある探検家として環境問題など冒険が永続的に続けられるフィールドを死守することの方がより大きなテーマであると思う」

4．（マカルー高山研究所国際遠征隊のメンバーとなったポーランドの今は亡きワンダ・ルトケビッチさんとエバ・パンケビッチさんに対する苦言）

「彼女らは全く言行不一致だった。一見百戦錬磨のように見え、気の利いたことをいっているようでいながら、イザとなると障害になることばかりをやってくれた。登山中でも最後まで前に出てラッセルしたり

隊の荷物をポッカしたりというようなことは全然なかった」

○

宏の短かった一生について、若いがゆえに多くの方々に迷惑をおかけしましたことは、深く私よりお詫びを申しあげます。

願わくば、未開放地区になっているナムチャバルワ峰の宏のケルンおよびナムチャバルワ峰とヤルツァンポー河がよく見える岩壁に取りつけたメモリアルについては、中国登山協会（西蔵登山協会）の方や現地の方々による加護をお願いをするものであります。

ベースキャンプ日記

斉藤惇生

木本営（ＢＣ）は高度三五二〇㍍でナムチャバルワの南稜から分かれて西に走る支尾根の末端の段丘の上にあった。解放軍の大テントが八張り、小テントが六張りほど張られ、通信用、気象衛星用のアンテナ、そして国旗掲揚用のポールが立っていた。車道の終点格嘎から高度差約五〇〇㍍の急坂を登って物資は運ばれた。

ＢＣから北を見れば長大な西北西稜の壁、北東を見上げると登路の南稜、ナイプン峰、コル、鋭くそびえ立つ主峰、西を見下せば峡谷となって蛇行し北流するヤルツァンポーを望むことができた。

ＢＣの南の台地は畑になっており、周囲は放牧の牛や羊が入らないように棘のある木で柵を作って囲ってあった。丁度青裸麦が実っていた。そこにはチベット人の部落があり、接地当嘎（ドエタンガ）と呼ばれ四戸で人は二十八人と聞いた。ＢＣはもともと放牧地なので黒い豚、牛、犬がいつもウロウロしていて時には食糧をあらされたり、アンテナを倒されたりして騒動になった。ヤクを屠殺した夜にはヤクたちが一晩中肺腑をえぐるような声で鳴く。ＢＣを九月二十六日訪問し隊員を激励し一泊で引き返された橋本名誉総隊長もこの声を聞いておられた。ラサでこれは仲間の死を悲しんでいるのか、流れた血の塩分を求めて鳴くのか話題になったがどちらだろう。屠殺されたヤクや羊の肉は近くの樹の上に吊るされてゆれていた。

北側の方へ屋根を下りると清冽な水が湧き出る水場があった。地元から雇った工作人がいつもポリタンクで水を運んだ。薪は山火事で黒焦げになって残った木を使ったのでお湯はいつもあり、洗たくも容易で時にはお湯を浴びることもでき快適だった。

ＢＣの管理責任者は巨漢張江援だった。村長と呼ばれ短気だが責任感が強い。食糧、燃料、生活万端、上方への補給などすべて張さんの管理で、いつも心を配っていた。牛、羊のライフルを使っての屠殺も引き受けていた。

雨の多いこの地方は野菜が豊富で、馬鈴薯、キャベツ、カリフラワー、蕪、りんごなどが下の村から届けられて食卓を賑わした。

ＢＣの日常は通信に明け暮れるといっても過言でない。上方との定時通信は朝六時に始まり一日に通常五回であった。行動の報告、物資・補給の連絡、日本からのニュースなどのほかに気象予報が伝えられた。気象担当の飯田は早朝から気象衛星ノアの画像を受信解析、日本気象協会へＢＣ、Ｃ３



山から降ろされBCに集められたガスボンベ

のデータをＦＡＸする。それを参考にした天気予報受信、またラサ気象台の予報も参考にして総合的に分析して予報していた。十月中旬悪天候が続いた時とそのあとのアタックの時、早朝から深夜までデータの解析に骨身を削るような努力をしていた。

ＢＣの生活で素晴らしかったのは湿潤ヒマラヤの秋の移ろいの中にいたことであった。十月中旬に入ると山は紅、黄に彩られ始める。紅葉の葉を見るとナナカマドに似ているが赤い実が無い。ＢＣから接地当嘎を過ぎてＣ１への道を辿ると紅葉の林があった。深くてあざやかな色付きに感嘆するばかりだった。十月十九日、関口令安ドクター以下九名の支援隊が車の事故のため一日遅れてＢＣに到着した。三日間の滞在中は天候不安定でナムチャバルワは姿を見せなかったが、Ｃ１往復やＢＣ横の山へ登って秋を満喫して帰国した。

紅葉が落ちると落葉松の黄葉が鮮やかになる。十一月四日朝、少し積雪があった。山田会長、飯田と三人で原生林へ行ってみた。重廣登山隊長がこれまで見た黄葉のなかで最もきれいという言葉を聞いたからだった。雪を少し被った落葉松の黄色の群落を見て、単純にすごい色だ、きれいだと連発しながらＢＣに帰った。

十一月七日、全員撤収。ＢＣより少し下った所にある大岩に大西の記念碑が打ち付けられた。ここからヤルツァンポー、ＢＣ、ナムチャバルワが望める。大西の魂はきっとここに止まるだろう。我々は別れを告げて格嘎（キーカル）へ下った。

私の見た登山隊

中村　進

「とても爽やかな気持ちで取材ができたなあ」、登山を終え、ＢＣに戻り、ラサに戻り、東京に戻っても、私はそう感じていました。

初登頂に成功し、日・中の全隊員が無事に戻ることができたからかもしれません。さらに経験深い素晴らしい報道隊員に囲まれていたためかもしれません。しかし、それだけではないような気がいたします。

そうした気持ちになれたのは日中合同登山隊が「爽やかな登山隊」であったからにほかなりません。

第一回目の登山では大西宏隊員をナダレで失い、隊員はナムチャバルワという大きな自然の力の前に惨めな撤退を強いられたわけです。

今回はそうした苦い経験を引き下げての

再挑戦でしたが、日中の隊員に暗い影はなく、皆明るいのがとても印象的でした。

今回、読売新聞及びＮＨＫからのお誘いがあって日中共同ナムチャバルワ登山隊に報道隊の一員として参加いたしました。

振り返って見ますと、私が報道隊員として日本山岳会と中国の山岳会との合同登山に初めて参加したのは一九七九年秋のチョモランマ偵察隊でした。

日本人が公式に中国チベットからチョモランマ山域に入り、北壁と北東稜を偵察するのは、登山の歴史上初めてのことでありました。

しかしながら、ノースコル下方の斜面でナダレが発生し、中国隊員三名が死亡、日本山岳会の長谷川さんは奇跡的に助かったものの肋骨を折る大怪我をしてしまいました。

報道隊員として最初の仕事は辛い悲しい結果となってしまいましたが、隊長の斉藤惇生先生の落ち着いた対応と日・中全隊員の誠実な人柄に触れ、深い感銘をうけました。

それから一九八〇春のチョモランマ登山、一九八四年春のカンチェンジュンガ縦走、一九八八年のチョモランマ三国友好登山にいずれも報道隊員として参加してきました。

今、ナムチャバルワ登山隊を見ようとすると、その十数年間をかいま見る気がして感慨深いものがあります。

それらどの合同登山を見ても、そこに共通して存在しているのは「素晴らしい登山家たち」でした。そして、報道隊員として日中の登山家たちの活躍の模様をレンズを通して見てきた私の目に最も深く残像として焼きついているのは隊員たちの人柄でした。

自然に対しては決して傲慢にならず、謙虚さと勇気を持ち、人に対しては信をもって協力し合う誠実な人柄でした。

そして、その隊員たちのその人柄は、報道する私たちの心をいつも清々しい気持ちにさせてくれました。

今回の登山隊はその点特に素晴らしかったと思います。

報道の精神はさまざまでありましょうが、私の精神は常に「真実」をドキュメントすることでした。レンズを通すと登山家の人間性もよく見えてきます。そうした「真実」を見極めて追求して行くのが現場で取材活動をする私の使命と常々思っておりました。

厳しい大自然の中で頂上という一点を目指し、全ての筋力、精神力、直観力を出して限界に挑戦する登山家を見て行くと、そこに新たな人間性を発見し人間が秘めた素晴らしい能力と精神の世界が見えてきます。

それが現れた時、取材をしている私も感動するのです。

そうした観点から、今回のナムチャバルワ登山は大いに私を感動させてくれました。

そこに人跡未踏の巨大なナムチャバルワがあり、その頂上に挑む小さな人たちがいました。日中十二名の登山家と熟年な総副隊長、さらに支援する隊員、医師、気象の専門家たち。このチームワークは見事でした。

その中で特に深い感動を私に与えてくれたのは重廣隊長でした。

未踏峰に打ち込んだ三年間にわたる集中力と経験は、巨大な峰ナムチャバルワという大自然を一人の小さな人間がその心の世界に完全に掌握してしまったように、私には見えました。ナムチャバルワよりも重廣さんという一人の人間のほうが大きく見えたのです。

今回の登山隊の力は、ナムチャバルワとその自然を知り尽くした隊長の深い洞察力に負うところが大きかったように感じます。

未踏の頂上という一点を目指し、日中の全隊員が等しく登頂のチャンスを持った今回の登山はとてもスマートで、そこに爽やかさの理由の一つがあるかもしれません。そして、登山隊は全員登頂をなし遂げました。

しかし、たった一人だけ、重廣隊長だけが頂上を諦めて山を下りました。

ロックバンド下の雪壁を最後に登る隊長を私は望遠レンズを使い撮影していました。長い時間が過ぎ、雪壁は雲の中に包まれ何も見えなくなってしまいました。「私はここから下ります……」突然、隊長の声が無線機に入ってきました。

間もなくして、ガスの切れ間から急峻な雪壁を下る小さな人が見えました。ナムチャバルワの急峻で巨大な雪壁、隊長の姿は小さな小さな存在でした。

しかし、そこに自然と人間の力関係、ナムチャバルワと登山家重廣恒夫のある真実の光景を見るのを覚え、大きな感動と哀愁が入り交じった心情になりました。

その自分の心情をそのまま納得がいくまで何度も何度も、長いカットで撮影し続けました。今回のナムチャバルワ合同登山の中で、私のクライマックスはこの時であったと思います。

登山隊を見ることは終局的には個々の「人間」を見ることでもあると思います。こうした意味で、日本山岳会と中国の山岳会の伝統と思いますが、総隊長を始め全ての隊員の人柄がとても素晴らしく印象に残っています。

私はC5で隊長を待つのを止め、もっと下のキャンプで時間をおいて待つことにしました。そして、C3で頂上に立った日中の隊員たちと隊長と再会しましたが、撮影はしませんでした。する必要がなかったのです。

下山してくる全隊員をドキュメントするのはC2が最適でした。C2では読売の秋元さんとNHKの東野さんが撮影しました。

そばにいた私は、改めて日中全隊員の爽やかな笑顔を見ることができました。

重廣隊長はフィックスロープを全て撤収して山本登攀隊長と青田隊員と共に一番最後に下ってきました。

隊長はC2に着くとそのまま故大西宏君の慰霊碑の前に行き、雪の上にぐたっと膝をつき涙をこらえて天を仰いでいました。

三年間の長い苦難の途であった日中ナムチャバルワ合同登山が終わった瞬間であったと、私の目には今もその光景が強く焼きついています。

しばらくして慰霊碑の前から離れた隊長は爽やかな笑顔を私たちに見せてくれました。

私の見た登山隊はこれまでになく素晴らしく、また大いに報道隊員を感動させてくれた「爽やかな登山隊」でした。

名誉総隊長隊のベースキャンプ訪問

長尾悌夫

橋本龍太郎名誉総隊長が、我が国の海外遠征に直接に関与されたのは、一九七三年の第二次ＲＣＣのエベレスト遠征にさかのぼる。以来二十年、多くの海外遠征にいろいろな形で参画してこられ、ベースキャンプを訪問されたことも二、三にとどまらず、一九八八年の三国合同でのチョモランマ遠征の折も、名誉総隊長として中国側のＢＣとネパール側のＢＣを歴訪されたことは記憶に新しい。今回の日中合同登山隊も、重廣隊長以下始どの隊員が旧知の仲であり、支援のためにＢＣ訪問を強く希望され、名誉総隊長隊が組織された。

隊の構成は、橋本龍太郎名誉総隊長、湯浅道男、橋本清、長尾悌夫の四名である。湯浅、橋本（清）の両氏はキャリアから言っても申し分ないが、ドクターが整形外科だけに心許ない。名誉総隊長はチョモランマの時は鼻出血が止まらず、二日間も続いたとの情報を得て、出発前日、耳鼻科で頑固な鼻出血を止める秘策の伝授を受け、真新しい血圧計と、内科医の息子が心配して指し入れてくれた「研修医のための当直医マニュアル」なる小冊子を後生大事に持って出発した。

九月二十一日、成田から空路北京入り。空港には史占春、王鳳桐、曽曙生等中国登山協会の方々が多数出迎えてくれる。顔色も良く元気な様子の史占春主席に「あなたは入院中の筈だが……」と名誉総隊長は驚くやら喜ぶやら。迎えの車で宿舎の長富宮飯店へ。夜は中国登山協会主催の晩餐会。ホテルのロビーで迎えを待つ間に名誉総隊長は日本のオバタリアン軍団の記念撮影攻撃にさらされる。生まれてこのかた見も知らぬ女性から「一緒に写真を」などと言われたことのない私は呆気にとられて見守るばかり。

晩餐会は、李夢華、史占春、王鳳桐、曽曙生、許競、王振華等の諸氏と日本側は我々四人と大使館一人が出席、茅台酒の乾盃攻めはあったが、日中歌合戦が始まり安曇節までとび出す大変な盛り上り、大使館員がこんな和やかな会は初めてだと感心していた。料理は本場の北京ダックをはじめ美味だったが「さそり」の姿焼きには仰天した。

九月二十二日、空路成都へ。ＢＣ往復には王振華氏と通訳の張玲玲さんが同行してくれることになる。成都双流空港では四川省登山協会副主席于女史と王華山氏が出迎えてくれた。成都では武候祠と杜甫草堂とを駆け足で見学する。名誉総隊長の写真撮影の熱心さに圧倒される。持参されたフィルムの本数を聞いてビックリ、早々と張り合うのはやめにした。錦江飯店に泊る。

九月二十三日、まだ暗いうちに錦江飯店を出て早朝の便で空路ラサへ。快晴のラサ・クンガ空港ではチベット登山協会の高氏等が出迎えてくれた。成都からいきなり飛んできた我々は当然低酸素の影響を受け、昼頃から頭重に悩まされたが、宿舎のラサ賓館には部屋毎に酸素吸入装置があり、コックをひねると毎分二リットルの酸素がゴム管から流れる仕組みになっているのは有難い。夜はチベット登山協会主催の晩餐会。チベット自治区主席も出席され、

今回の合同登山の成功を願って乾盃。チベットの医療、殊に結核対策にも話題が及ぶ。高所でのアルコールの効きは格別であり、ラサに来て血圧上昇気味の名誉総隊長が機嫌よく茅台酒の乾盃を続けるのでそれとなくドクター・ストップをかけるが著効なし。

九月二十四日、九時十分出発。ランドクルーザーとパジェロの二台に分乗して八一鎮へ向う。五〇〇〇㍍のミラ峠を越えて十時間に及ぶ悪路のドライブ、対向車とすれ違うと一瞬前が見えないほどの砂埃である。車は大きくバウンドし、何度となくスキーのジャンプよろしく身体が宙に浮く。名誉総隊長はこの悪路と砂埃にもめげず、頻繁にカメラのレンズを交換してシャッターを切る。尼東川河畔は梓川河畔の上高地を思わせる緑豊かな風景が延々と続く。夕刻に八一鎮着。ここはちょっとした町で解放軍の駐屯地でもある。今夜の宿は共産党要人用の接待所。ベッドとシーツは清潔だが、バスとトイレは水が出ずバケツの水で始末する。部屋には山盛りに盛られたリンゴがなんと二篭、これを一人でどうやって食べろというのだろう。

九月二十五日、今日もまた悪路のドライブが続き、途中でナムチャバルワの鋭峰が雲間に見え隠れする。六時間で格嘎（キーカル）着。BCから下りて来てくれたローサンダワ総隊長等の出迎えを受ける。格嘎からBCまでは約三時間の登りになるが、途中から馬を使い、六時にBC着。重廣隊長等に迎えられる。早速重廣隊長から登山の進行状況の報告を受け、C2とはトランシーバーで交信して、山本登攀隊長の元気な声を聞く。夜はBC滞在中の隊員、読売、NHKの人たちと名誉総隊長差し入れの日本酒を傾けつつ談笑の時を持つ。

九月二十六日、天候が悪く、C1に上る予定を変更し、小雨の中を近くの村を訪れたりして過ごす。夜、中国側総指揮部と和やかな雰囲気の会合がもたれた。

九月二十七日、今日も天候が悪く、予定を一日早めて下山と決める。C2の隊員とそれぞれトランシーバーで交信して激励し、登頂の成功を念じつつBCを後にする。格嘎からは又悪路のドライブで夕刻八一鎮着。その夜、無事BC訪問を終えた安堵感から茅台酒をいささか飲み過ぎ、湯浅氏が寒い寒いと震えだし、名誉総隊長用の携帯酸素吸入装置の御厄介になる珍事がおこった。百戦錬磨の湯浅氏も茅台酒には勝てず、同氏にとっては酸素吸入最低高度記録ではないだろうか。もともとお酒は強いとは言えない湯浅氏に飲ませ過ぎた我々にも責任があるといささか反省もしているが、ちょっと楽しい出来事でもあった。

九月二十八日、八一鎮を出発して間もなく、一号車のパジェロがカーブの出会い頭にトラックと衝突するアクシデントが発生、お互いの車の後方に解放軍の車と公安の車が続いていたのでテンヤワンヤの騒ぎになったが、幸いに怪我人はなく私の出番もなし。チベットの人たちの見事な応急修理の成果で走行を続けることができ、予定通りラサに到着。同日成都からラサ入りした山田総隊長、斉藤副総隊長、王鳳桐の三氏に会い、楽しい語らいの場がもたれた。

九月二十九日、ラサでの予備日となったので、山田総隊長、斉藤副総隊長を誘い、青蔵街道を上り、ヤンバーチンを経て、ニンチェンタンラ峰、チョモカンリ峰を眺め

るチベット高原のドライブ、天気も良く、いかにもチベットらしい景観を楽しむ。

九月三十日、降るような星空の下、真暗なうちにラサ賓館を出発し、早朝の便で成都へ。

十月一日、成都発、国慶節で賑わう北京着。その夜は史占春主席以下中国登山協会の方々がお別れの晩餐会を開いてくれた。

十月二日、中国の厚生大臣にあたる衛生部部長の陳敏章氏が名誉総隊長に会見を希望し、私達三人も同席した。話題は中日友好病院のプロジェクトが完成に近づいたことへの感謝、瀋陽医科大学設立への協力依頼、チベット自治区の結核対策の推進、医療保険制度導入に対する助言等であり、元厚生大臣でもある名誉総隊長の対応は見事であった。会見後、その足で空港に向かい、空港では史占春主席以下中国登山協会の方々の見送りを受け、再会を約して帰国の途についた。

今回の橋本名誉総隊長のＢＣ訪問は、北京、成都、ラサでそれぞれの登山協会の要人たちと会談しつつＢＣを訪問するというハードなスケジュールであったが、中国に知己の多い橋本（清）、湯浅両氏の尽力で順調に運び、今回の日中合同登山の遂行に果たした潤滑油的な意義は大きいと思われる。

名誉総隊長は終始お元気で、藪医者の出番は全くなかった。「電話もかからず、ＦＡＸも来ない生活は……？」という質問に、「こういう時間は私にとって大変貴重なんですよ」とのお答えであった。楽しいとか嬉しいとかでなく貴重だという表現をされたことに感銘を受けた。そして、こと〝山〟になると時には仕事まで放り出してしまう我々とさして違わない仲間であることを確信できた嬉しい旅でありました。

［日本・中国ナムチャバルワ合同登山］

憧憬の山
――私にとってのナムチャバルワ――

山田　二郎

私が海外遠征に参加したのは一九五三年のマナスルが最初で、その後一九五四年のマナスル、一九六〇年のヒマルチュリと、いずれもネパール・ヒマラヤばかりであった。

従って、中国チベットの山は初めてのことであり、また、その間数十年のブランクを置いての遠征隊参加では、見るもの聞くもの総て新鮮で、さらに中国との合同登山も初の貴重な経験となった。

だが、私にとってナムチャバルワとの係わりは遠く五十年前に遡る。

一九四〇年春、私は慶応山岳部に入った。その時、部の書棚に『ヒマラヤン・ジャーナル』一九四〇年号があり、表紙をめくると美しいヒマラヤの高峰の写真が掲載されていた。説明ではこの地方に入った植物探査隊が撮ったものでナムチャバルワという山だということであった。麓から仰いだ見事なピラミッド形の頂上を持つ山容は何故か大変に印象的で忘れ難いものであった。

その後、学生時代、学徒動員で戦車を操縦しながらも、また戦後空きっ腹を抱えながらでも山に夢中になっていた時代、そうしてマナスル遠征でノース・コル上の雪洞の中でも一緒に泊った加藤喜一郎さんと「次は俺たちだけでナムチャバルワへ行こうや」と語り合ったことを忘れたことは無かった。

ところが、一九九〇年、かねて日本山岳会より提出していた同峰への登山申請が突然に許可され、一九九二年までの期限付きながら日中合同で挑むこととなった。

「ナムチャバルワへ登ろう」という私の夢は何と五十年振りに実現したことになる。

私は登山や遠征といったものは、本来登ろうとする者たちが自分自身で計画を練り、所要の資金を調達して実行すべきもので、役にも立たぬ年寄りがベースキャンプにのこのこ出掛けて行くことを快く思っていなかったのだが、日中合同ともなると先方の顔ぶれから〝会長が行かないのは礼を失する〟ということになり、日本側総隊長として一九九一年、一九九二年の二度にわたって参加することとなった。

とはいうものの、一九九一年の第一次遠征でラサから六〇〇キロ程の悪路の末、格嘎（キーカル）手前の尾根から初めて仰いだナムチャバルワの三角錘はかって見た『ヒマラヤン・ジャーナル』の写真そのままで、いい知れぬ感激であった。

一九九一年の第一次遠征では大西宏君を雪崩事故で失うという取り返しのつかぬ犠牲を出してしまったものの、翌年の第二次では日中両国隊員の粘り強い努力によって遂に見事無事に初登頂を果たすことができた。

私にとっては初めてこの山に登ろうと心に決めた時からすでに永い年月が過ぎてしまい、己れ自身でその頂きに立つことはできず、わずかに四八〇〇㍍の第二キャンプで登山に出発する隊員諸君を激励するほかなかったが、私に代って若い隊員たちが登ってくれたことで十分満足であり感謝している。

終りに当たり老人（自分ではそう思っていないのだが）の総隊長に温い心遣いをいただいた日中両国の人々に心からお礼を申し上げたい。

村木潤次郎

「私自身はこの山の姿を見ることも触れることもないと分っているが、老兵の見果てぬ夢を若人に託するような気持ちで登山の推移を見守るつもりである。」

たまたま、囲み記事を頼まれていたある業界誌の一九九一年一月号にのせたナムチャバルワ紹介の一部である。しかし登山計画が進むにつれて総指揮部副総隊長を引き受ける破目になってしまった。日中合同登山としては当然の帰結であったが、もし機会があればこの山を見ておきたいという欲があったことも否定できない。

参加するに当ってまず第一の目的は山を見ること、次は最新のクライマーの登り方はどんなだろう、第三は日中合同登山の実体とはいかなるものか、……を知りたい、観察したいと考えた。

第一の目的については言わずもがなである。ヤルツァンポーの大屈曲点に位置し、印度洋の高温多湿の気流とチベット高原を吹き抜ける朔北の風が衝突する地点と見受けられた。ヤルツァンポーの河原に散在する大きな砂丘と山麓の樹林帯と木々に宿る「さるおがせ」を見れば容易ならぬ気象条件は理解できることである。誠に美しくも厳しい峰々であった。

第二の項目については想像していた通り、局部的な登攀能力、装備、連絡法などその進歩と有効性については感心したが、登山という総合的な見方からはいささか失望した。

いわゆる組織化された近代登山と考えればよいのかも知れないが、自分が従事していた鉄鋼業の生産体制や品質管理の仕事に似て一糸乱れぬ統制といえば聞こえはよいが一流クライマーと目されている人々の共同作業としては面白味に欠けた。その意味で最も生き生きとした男とみられていた大西君の死は惜しみてもあまりあるものであった。

第三の目標、これも結果を簡単にのべるにはいささか難しい。基本的には文化を異にする人々が行動を共にする場合何時もぶつかる鬱陶しい問題である。

今回は両者正確に対等の立場であるが中国といっても漢族とチベット族との間には見えざる相克がある。タクティクスは日本側に依存する約束になっていたが状況判断と結論は日本側と異る場合もあるのだ。確かに多額の入山料を支払っているとしても矢張り中国の山、チベットの山に登らせてもらっているのだという謙虚な気持も大切なのではなかったろうか。日本側がいくら意気がっても中国側が消極的になれば共同登山は成り立たなくなる場合もある。それから強烈な縦社会の構図が、総指揮部から登山隊の末端まで行き届いている中国側と、現場主義で登山隊長に全権を預け、総

指揮部は飾り物だと考える日本側との差が障害になることもある。計画が順調にいっている場合はよいが今回のように遭難事件で日程が遅れ、追いつめられた段階で頂上直下で流雪雪崩に合うような事件が起きると急に難しくなってくる。この時点では私は中国側総隊長洛桑達瓦さんと丸一日かけて話し合った。彼等の決心を察した上で次の日、現地主義の立場で日本側登攀隊長の高見君を説得した。その結果出された日中共同の登山中止命令である。これが正しかったかどうかは神のみぞ知ると言える。まさに日中共同登山の実体と難しさそのものではなかったろうか。それにつけてもこの時の中止決定書は日中両国語で記され署名入りのものが残っているが誰もそれを見ようとする人がいないのは不思議である。最後に四十日に近い私のBCでの生活で接した漢族、チベット族すべての人々は誠にやさしい、思いやりの深いよいパートナーであったことを付け加えておきたい。

斎藤　惇生

一九八五年七月、日中友好ナムナニ峰合同登山隊は登頂に成功して北京に帰ってきた。行事の合間に平林克敏登攀隊長と私は、史占春中国登山協会（CMA）主席から中国の次の計画の相談を受けた。一つはチョモランマの中国とネパールからの交差縦走、一つは中国隊が八三年と八四年に登頂できなかったナムチャバルワであった。その時初めてBCとナイプン峰から撮った主峰の写真を見て、私は興奮した。

チョモランマ縦走のような大きな計画は、日本からの参加を求めるなら全日本としての日本山岳会以外にはない。ナムチャバルワは残された最高の未踏峰だから、できれば中国単独、合同するなら気心の分った日本を選ぶべきでないかと答えたことを覚えている。

その後私はJACが中国主導のチョモランマ計画に参加するのは、多くの困難と苦労があるかも知れないが、ナムチャバルワへの道を大きく開くことになるだろうと考えていた。

JACがチョモランマ計画に参加を決定した後も、CMAのナムチャバルワに対する方針は中国単独か外国との合同か一定してなかったようだ。しかしチョモランマとナムチャバルワに力をさいて同時期にするのは望ましくないというJACからの意見はとりいれられた。そして八八年のチョモランマの成功後二年でCMAはJACと合同に踏みきった。

九〇年秋の偵察隊の医薬品を故早坂敬二郎君に頼まれて準備しながら、ナイプン峰からコルに下るルートが見付かるだろうか、また他にルートがあるのだろうかと案じた。

九二年二月ナムチャバルワへの参加を要請された時、たいへん光栄に思ったのだが、最近登山のため続けて病院に迷惑をかけているので又申し出るのは心苦しかった。しかし私のこれまでの中国での登山の経験が日中合同隊にお役に立つかも知れないということ、まだ知らない東チベットの湿潤ヒマラヤに入れる魅力に私は参加を決心した。見事な成功を収めた二十世紀最後の大きなバイオニア登山に参加する機会を得てこのうえない幸せであったと深く感じている。

高見　和成

私とナムチャバルワとの出会いは十二年前に遡る。一九八九年九月、初めてのチベット入りの際、機上から眺めたどっしりとした山容、急峻な頂を持つナムチャバルワに魅せられた。

九二年訪中の際にもこの山に入った中国隊の動向が気になり、帰途北京で彼等の報告を聞いた。「地震の多発地帯、頻発する流雪に登路なし！　猿や熊のいるジャングルを切り拓いてのアプローチ」。何という山だろう。ますます思いは募る。

その後、暫く海外の山から遠ざかっていた。仲間からの誘いも幾度かあったが、心を揺さぶられる山はなく見送ってきた。そして、九〇年十月偵察に行く重廣さんより登山の許可が下りた旨を知らされた。

何としても連れて行って欲しい。が隊員六名と聞くに及んではいささか悲観的になる。何しろこの十年間ものヒマラヤのブランクが痛い。だが仲間とはありがたいものである。参加が許された。それも登攀隊長として。

登頂は成らなかったが私にとり満足のできる登山であった。気の良い日・中の仲間たちとのナムチャバルワという憧れ続けた最高の舞台での二カ月に及ぶ生活。存在を知って二十年間、想いを寄せていた大黄にも出会えた。私のナムチャバルワは九一年で終った。

頂があっての山登り、頂上に立たずしておこがましいが、私の心にあったあの山はある程度、分かったような気がする。こんな素晴しい山を多くの仲間たちにも知って欲しい。こんな気持が強かった。

今、私の手元に郷土の先輩の遺作詩画集がある。珠玉の詩画集は大黄で染めた紐で結ばれている。この紐をほどく度に、あのナムチャバルワでの充実した日々を想い出すだろう。

廣瀬　学

秋をむかえたチベットの爽やかな大気の奥に、目指す未踏峰ナムチャバルワの頂がある。真っ白な雪の冠をいただいたその頂はまだ誰にもさわられていない。山麓に広がる深い森は太古の姿そのままのようだ。

一九九一年秋、ボクはこの山の初登頂を夢見てやって来た。どんな物語が待ち受けているのか、二カ月間に及ぶ登山の始まりだった。

ヒマラヤ山脈の東端に位置するこの山は、気象変化が激しい。今回の登山も一言で言えば気まぐれな天気に翻弄されたと言える。

あの日も、それまでのように天気に振り回された、いつもの一日になるはずだった。前日まで降り続いた雪が止んだ、久しぶりの快晴。よもや大西さんが雪崩で遭難するとは誰も考えつかなかったに違いない。

大西さんの事故後、登山活動は中断した。ボクの心は初登頂への憧れと、遭難という現実との間をさまよっていた。

登山活動再開後も、あいかわらず不安定な天気には悩まされた。それでもルートは、着実に延びていった。

標高六九〇〇㍍のC5は今日も地吹雪に見舞われている。こうして停滞しているのも何日目だろうか。気温はマイナス三〇℃近くに下がり、テントの中でも体の芯から冷える。ボクは寝袋にもぐりこんで、他愛

もない妄想に浸っている。

今回の登山も間もなく終盤をむかえようとしている。C6にいるアタック隊が明日、最後のアタックをかける予定だ。いずれにしてもボクにはアタックのチャンスはない。自分自身にとってのナムチャバルワ登山は、不完全燃焼のまま終わろうとしている。

最後のアタックの日がやってきた。天気は比較的良好だ。アタック隊は前日までに工作したルートを順調に進み、早いペースでロックバンドに取り付いた。この核心部を越えれば、ほぼ初登頂は間違いないだろう。ボクは複雑な気持ちでアタック隊を見守る。天気が崩れ始め、ガスで視界がなくなってきた。

結局のところ、アタックは失敗した。しだいに強くなった風は、予期しなかった雪崩を引き起し、アタック隊を追い返した。そして誰もナムチャバルワの雪の冠を手にする事は出来なかった。そしてボクの夢物語も終わった。

あれから一年後、ナムチャバルワが日本と中国の登山家を、その純白の頂にのせてくれたという話を聞いた。

また一つ、純白の頂を持つ山がなくなった。

――山本　一夫

七年ほど前のこと、ある研修会にたまたま講演にこられていたH・A・JのOさんから、ナムチャバルワ峰の登山許可を求めて、中国登山協会にアプローチしている、と聞かされる。ナムチャバルワ峰に行くには、まずH・A・Jに入会しなくてはと、岳友のYさんと一緒に入会する。とはいっても、まさか自分が行くことになるとは思ってもみない、これは一つの儀式であった。

歳月が流れ、ナムチャバルワ峰は、日本山岳会が許可を取得し、一九九一年に本隊が出発することになる。JAC京都支部の集まりの折、山の先輩であるUさんは、「君は、重廣さんとは岳友でよく知っているだろう。彼に頼み込み是非連れていってもらえ」とアドバイスしてくれるが、「憧れの山ではあるが、私の力ではとても隊員として勤まらないし、頼み込めば迷惑をかける」というようなやり取りを憶えている。

一九九二年の四月、重廣さんより一緒に行かないかと突然の誘いを受ける。「是非とも」と即答したい自分を必死に押さえ、一日考えさせて欲しいと返事をする。又、こうも付け加えた。「迷惑はかけないと思いますが、若い連中と同じペースでは行けないかもしれない。それでいいですか」それに対しては、私がトップでルートを切り開いて行くことを期待してるわけではない、ということを確認し、自分の仕事は、ルートの安全を確認することが責務であることをわきまえる。

七年前、ナムチャバルワ峰に憧れるが、実現が困難な空想的な願いだと思っていた。それでも夢と勇気があれば、いつかはかなうと感じながら、輝きを追いかけて行く。私は、幸運にも頂上に立つことができた。登山に携わった、皆々様には、深く感謝してやまない。

――三谷統一郎

自分とナムチャバルワ峰のかかわりは、たとえれば、バス停で走りだそうとするバ

スに飛び乗ったら、終点まで行ってしまった、そんな感じのする海外登山であった。

今、振り返っても登っていた時の印象より、下山の時の方が強い。十月三十日に頂上に登って、ロープ伝いに慎重にC6に戻った。翌十月三十一日、C5に向け二〇〇〇㍍の標高差を登り返す時になると、体がだるく動作も緩慢になってしまった。他の隊員と、どんどん離れるばかりである。帰るためには、この斜面を登りきらないと、下りは始まらない。C5より佐藤隊員と山本隊員にはさまれて雪原をとぼとぼと下った。C4も撤収されているのでC3まで歩かないと、ビバークになってしまう。日没になり、はるか向こうにC3の明かりが見えた。やっと七時過ぎテントに到着。二日続けて、日没まで歩いてしまった。その夜は息苦しくて、寝苦しい一夜であった。

十一月一日、C2へ向けて下り、危険な箇所は終わった。三日間で頂上から標高差三〇〇〇㍍近く下り、体調も良くなった。

十一月二日には、ベースキャンプへ向け下山した。登山を開始した当初は、緑のじゅうたんを敷き詰めたような草原も、茶色く枯れている。しかし、木々は紅葉して、そのトンネルの中を下った。登山を始めた時は、まだ夏であった。昨日までは冬。そして秋と三つの季節を感じた。

ベースキャンプから見上げる頂上は、雪煙があがり、登る前と変わらない姿であった。ベースキャンプを撤収し、二カ月余りの遊びも終わった。二時間弱歩くと、車道の終点格嘎（キーカル）に到着。ここまで戻ると、現実の生活に戻っていくのを感じた。

しかし、体力的に苦しかった事も、もう忘れようとしている。自分にとって、過程はどうであれ、初登頂という結果は良かった、海外登山であった。

青田　浩

いつもながらの高所での登攀は鈍く重い。

スローモーションのように六名のアタッカーたちは細い一本のロープにつながり、希望と生命まで預ける単調な登行をくり返す。

未踏のナムチャバルワであれ、どのヒマラヤの峰のアタックであれ同様な状態である。

単純な登山を、複雑な状態にわざわざするのが登山者側も、関係者たちも好きなようだが、やっと自由な時間の中で頂を目指せる。

午後零時頃、日本では晩秋。束の間の安全な場所に辿り着く。メンバーたちの喜びを記録するために、八㍉ビデオカメラを回す。カメラが回ってくれることを祈りながら。

少しでもこれら行為を伝えたいがために。

寒さも、渇きも、雪崩の心配も無い街の生活を続けていると時が過ぎると共に、ナムチャバルワの峰が懐かしく思う。

未踏峰でなくなったあの峰をもう一度眺めてみたいものです。その時、自分はどんな気持になるのだろうか。

未踏峰、美しい山容、地理的条件の興味、報道関係を通じての社会性、いろいろな動機が自分の中にあったけど、終ってみて、一つの山登りにすぎなくなってしまえば、自分の理想とする所です。

峰の頂には何も無いのは知ってはいる

が、再び次なる峰に向かう自分の姿が浮かぶ。

最後に、今回のナムチャバルワ峰に登る機会を与えてくれた人たち、行動を共にした仲間に感謝いたします。

山本　篤

九一、九二年と二年続けて参加したナムチャバルワ登山では、それまでのヒマラヤ登山で経験しなかった二つのことがあった。一つは言うまでもなく、登山中に、それも「大西」というかけがえのない仲間を失ったこと、二つめは、仕事を持ちながら遠征に参加したことである。そしてこの二つのことは、お互いに密接に関連していたと、今になって思うのである。

大西と私は、明大山岳部の同期で、卒業後のヒマラヤ登山もほとんどいっしょだった。しかし八九年のエレベストを境に、私は就職という道を選び、大西は南極を目指し、年々その行動範囲を拡げていた。そしてまたナムチャバルワで、いっしょに参加することになったが、それぞれの立場を理解せぬままに、ぶつかり合うことばかりで、お互いの気持ちが離れたまま、実際の登山に入ってしまったことを知る人は少ない。そんな中、大西は逝ってしまった。このことは、今になっても悔やみきれない痛恨のできごとであり、自分なりに、十字架を背負って参加したのが九二年ナムチャバルワである。

九二年の登山は、隊長の卓越した指揮の下、苦戦はしたものの、大成功を収めることができた。私にとって、最も腐心したのは、会社の休暇取得のことで、特に二年めは、会社勤めをしながら高所登山を行うことのむずかしさを痛感させられた。私のまわりを見回しても、一般にヒマラヤニストの処遇は、それほど恵まれたものではない。行く先の明るくないものに、今の計算高い若い世代が情熱を傾けるはずもない。これは、ひとえに、社会の認知度が低いことにほかならない。実際に山に行った人間は、少なくても山登りに一生懸命であったにもかかわらず、帰ってみると、様々な批判がどこからともなく聞こえてくる。しかし、マスコミの力は絶大であり、一般の人々に、高所登山を認知させるということだけでも、大きな意義があったと私は考える。そして、その一端を担う機会を与えられたことを幸運と思うと同時に、大西という一人の魂をしっかりと心に刻んだことが、二年に亘るナムチャバルワ登山の成果であった。

佐藤　正倫

私がナムチャバルワについて真っ先に想うことは、今回の登山はもちろんであるが、一九九〇年秋、重廣隊長、早坂、大西、私の四人で行った偵察隊のことである。

パキスタンから帰ったばかりの私に急遽、偵察隊メンバーの話が持ち込まれ困惑したが、結局押し切られるように参加。それから出発までは大西さんとバトルロイヤルの毎日であった。明大山岳部の部屋を借りてのあわただしい準備。

現地では、キャラバン途中に忽然とその鋭峰を現したナムチャバルワ峰に驚き、時おり出没するらしい熊に怯えながらヤブをこぎ、バテた民工の荷物をかわりに背負ってやったり、頂上への登路を見い出すための試行錯誤をしながら行った西北西稜や南

壁の偵察。

何もかもが初めてであって、この偵察で苦楽を共にし、ナムチャバルワ登頂を夢見た大西さん、早坂さんの二人が既にこの世の人でなくなったこともあってか、または今回成功したからこそ、今となってはこの偵察が強く印象に残っている。

この登山中、大西さんとルートのことや次の本隊のことなどについて話した覚えがあるが、翌年一緒に隊員として参加することが叶わず、私はカラコルムへ出発した。

大西さんは九一年隊で雪崩によって遭難。早坂さんも北アルプスでと、山登りの難しさを痛切に味わうとともに、私のナムチャバルワへの思いはますます強くなっていった。

そして今回、万難を排して参加を決意し、臨んだわけである。

もはや個人の興味などという意思の枠を越えたところに、この山は存在していた。登山自体のおもしろ味に欠けていた面もあったが、今回のナムチャバルワ峰登山を通じて、初登頂という結果をもたらすために計算し尽くされた管理登山について学ぶことが実に多かった。

今後、大学山岳部の監督としての立場からも、このナムチャバルワの経験を生かしていきたいと思う。（編者注＝佐藤正倫氏は本年十月、トゥインズ峰で遭難し、本稿が事実上の絶筆となった）

――片岡　泰彦

C3は、雪崩の危険地帯ラバロを抜け主峰南稜線へ上り切った安全な場所にある。僕は第一次アタックの前日、朝早くテントを出た。満天の星が東の空から消えていき、サンルン峰の黒いシルエットが浮かび上がる。藍色にオレンジ色が混ざり合い、一瞬透き通った青色を発する荘厳な風景を僕は忘れない。歩を進めるとピンク色のナムチャバルワが、ナイブン峰の山の端より次第に大きくなってくる。雪面にうっすらと自分の影を認める時には、回りは無彩色の雪と岩に戻っていた。この日、C5を往復して後、中止までの間C3に滞在することになった。

第一次アタックが頂上まで届かず、十一月二十二日は風もなく暖い朝であった。四張りあるテントは布地が雪で覆われてしまい、吹きだまりの雪から除雪にかかる。朝方はポカポカ陽気で素手でハンディビデオの操作ができたが、アタック隊が岩壁帯にさしかかる頃より、頂上に雪煙が舞い、たなびくようになってきた。流雪が発生し、退却せざるを得なかった。

C3は各キャンプ間の交信が傍受でき、上部への補給兵站の役割もあるので物資も豊富だが、上部は電池をフライパンで暖めながら倹約している。トランシーバーの交信が頻繁になり抑揚が激しく、沈黙の間合いも多くなってくる。誰にとっても、最終ステージが近づいていることを実感できる緊張がある。僕はTV機材の回収計画を作っている。

第二次攻撃で凍傷を負った中国隊員二名がC6より一気にC2へ降りる途中、暫くC3で休憩し、ガスの中を寂しく下山する後姿を見送った翌二十四日、登山中止となった。学生時代ベイリー著『ヒマラヤ謎の河』でこの山の事を知り、地図の空白部として、ヤルツァンポー、ブラマプトラ、ギャラペリ、青いけし、と魅惑的な名称が

次々と現れる文章に引き込まれた。その中でも、インド測量局のキントップは、生死を賭けて四年も謎の川をさまよい、精神力と忠実な使命感で目的を果たしたものの、結果として報われなかった。大きすぎる成果のため信用されず、数十年後に足跡が確認されたが、わずかな代償金を得ただけで死んでしまった。彼が英国人であったならば、尊敬と生活の安定を得たであろうと、あわれに思えてきた。

そして、まさか今、自分が『ヒマラヤ謎の河』の舞台である地域に入っており、すすけた口絵写真のナムチャバルワのC3にいることが、不思議な感慨となって真夜中の空気を重くした。明日は下山が待っている。

三輪　文一

チベット高原の東端、大ヒマラヤ山脈の果て、ヤルツァンポーの大屈曲部にそびえる世界最高の未踏峰ナムチャバルワ、私にとって長い間憧憬の山であった。その山に日本山岳会から遠征隊を派遣する計画が決定した。私なりに漠然とではあるが参加の可能性を検討して見た。そんな折、九〇年秋の偵察から帰って来られた重廣隊長から報道隊のマネージャーで参加しないかとの打診があった。飛び上がらんばかりの気持でとりあえず職場の上司に相談する。幸いな事に休暇の了解を得る事が出来た。早速隊長の指示のもと種々の準備に入る。

私は仕事柄、テント、シュラフ、ウェア等の調達をおおせつかる。特にテントは、八八年の三国友好登山隊のために開発したテントを一部改良し使用したが、九一年～九二年と、大変厳しい気象条件の下で特に大きな問題も無く耐えてくれた。テントの調達に関しては、数量決定後、生地メーカーに生地を発注し縫製スペースを確保し、生産が完了したのは梱包作業の終了する間際であった。

九月中旬に日本を出発し、憧れのチベットへ、私たち、読売報道隊も全員元気にBCに到着し、報道活動を開始。インマルサットを設置し、チベットの奥地からリアルタイムで、日本と電話・FAXのやり取りが出来る事にただただ感動。読売新聞の皆様の少しでもよい記事、よい写真をという真摯な姿には本当に心をうたれました。

一昔前の日本の山村を彷彿とさせる接地（ダェチ）当嘎（タンガ）の村。のんびりと草を喰むヤクや馬たち、すぐ背後に迫りくるナムチャバルワの屏風。私にとって頂上は、はるかに遠いものでしたが、あのチベットで過ごした三カ月はなにものにかえがたい三カ月でした。

ヒムルンヒマールの初登頂

丹羽由紀夫

一九九二年の九月から十一月にかけて北大山の会はプーコーラの踏査とヒムルンヒマールの西面からの登頂を目的に遠征隊を送った。ヒムルンヒマールは一九八三年弘前大学山岳部・ネパール合同隊により登頂たれたとされている。しかし、我々の登った山は以下に述べるように弘前大学山岳部が初登頂したヒムルンヒマールとは別の「もうひとつのヒムルンヒマール」の初登頂であった。

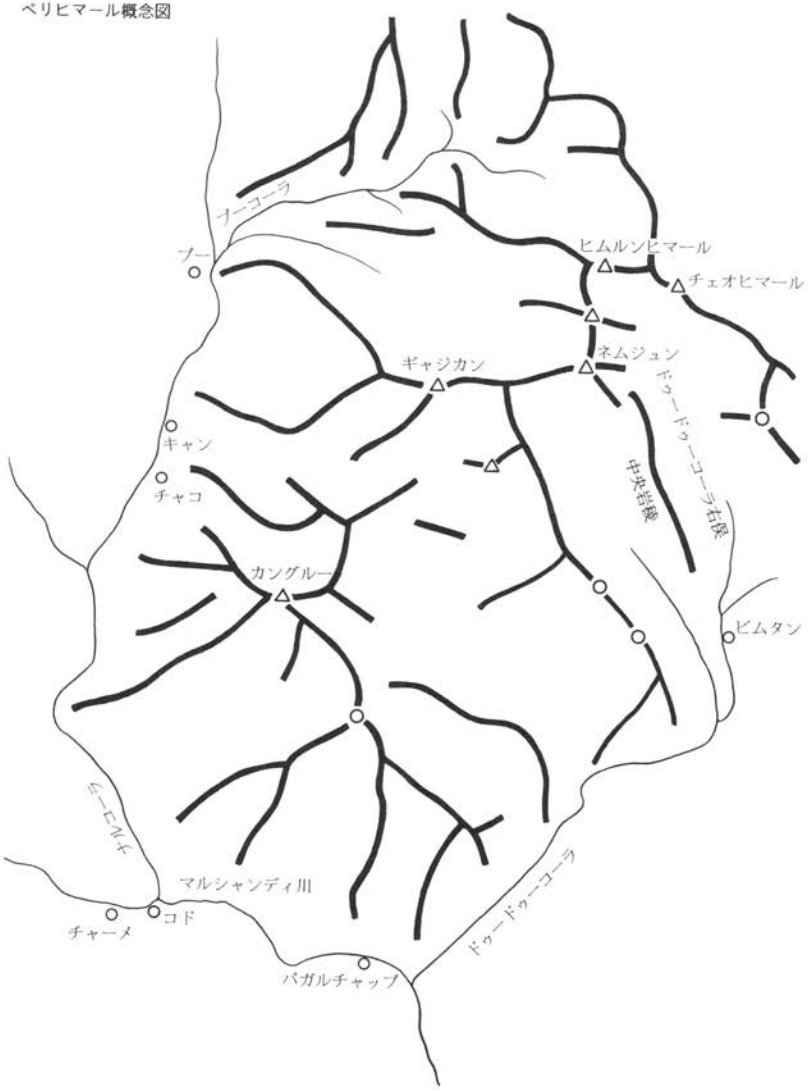
Annapurna Conservation Area および Round Annapurna の地図にはネムジュン（Nemjung）という山名が見られる。ペリヒマール群の最高峰である。しかし、どの文献を見てもネムジュンという山名を見付けることは出来ない。そこでネムジュンの近くにあるヒムルンヒマールについて調べてみた。

一九五〇年ティルマンはマナスル偵察のためドゥードゥコーラよりラルキャ峠に行っている。その際の紀行にヒムルンヒマールの記載が見られる。ヒムルンヒマールを登攀の対象として初めて入山したのは一九六三年の電々九州山岳会である。南東面のドゥードゥコーラから中央岩稜を経て東稜から頂上を目指したが登頂には至らなかった。その後、一九六四年にオランダ隊、一九八二年には弘前大学・ネパール合同隊、一九八三年のプレモンスーン期の仙台市役所山岳会・ネパール合同隊を経て、一九八三年ポストモンスーン期にヒムルンヒマールは弘前大学・ネパール合同隊により登頂された。

弘前大学・ネパール合同隊はドゥードゥコーラを遡上しドゥードゥコーラ右俣氷河にベースキャンプを設ける。ベースキャンプからは側面より中央岩稜上部に達し上部雪田を経て、東稜から登頂を果たしている。弘前大学の登頂報告書と上記の地図を参照すると以下のことが判った。

①彼等が目指した山はドゥードゥコーラ右俣氷河右岸上方に聳える山である。

ペリヒマール概念図


ナーコーラ
プー
ヒムルンヒマール
チェオヒマール
ネムジュン
ギャジカン
ドゥードゥーコーラ右岸
中央岩稜
キャン
チャコ
カングルー
ビムタン
ナルコーラ
マルシャンディ川
チャーメ
コド
バガルチャップ
ドゥードゥーコーラ

②彼等が登路とした尾根（中央岩稜）は上記地図上のネムジュン（七一三九㍍）から派生している。

③ヒムルンヒマールにはドゥードゥコーラへ達する尾根はない。

④今までヒムルンヒマールとして発表されている写真はその位置から上記の地図上ではネムジュンと思われる。

以上のことから、弘前大学・ネパール合同隊はネムジュンに登頂したと考えざるを得ない。

当時の概念としてヒムルンヒマールは分水嶺の国境稜線上にあり、その西稜も国境と考えられていた。また、西面の最奥部落のプーガウンから容易には取り付き難く、南東面のドゥードゥコーラからは電々九州山岳会、弘前大学の記録による中央岩稜から達することが出来る。現行の地図ではヒムルンヒマールは国境の分水嶺より西（ネパール側）に派生した尾根上にあり、さらにヒムルンヒマールから南下した尾根が無名峰（七〇九八㍍）、ネムジュンを起こして西に折れ、ギャジカン（七〇三八㍍）に続いている。ヒムルンヒマールには西面からは容易に近づけるように見える。南東面からは高度差数百㍍のアイスフォールを越え、広大な雪田を横切り、頂上直下には数百㍍の壁が控えている。南東面からは技術的にも距離の長さからも容易には近づけない。ペリヒマールの地形の認識は大きく変貌している。

それでは山の座標はどうであろうか。現在のヒムルンヒマールの座標は北緯二八度四六分一九秒、東経八四度二五分一九秒である。一九八三年、ネパール政府は何故かヒムルンヒマールの座標を北緯二八度四四分、東経八四度二五分から上記に変更している。また、アメリカン・アルパイン・ジャーナルの一九八五年号にはClassification of The Himalayaが掲載されている。そのペリヒマールの項には最高峰はP七一三九（北緯二八度四四分一四秒、東経八四度二五分一二秒）、ヒムルンヒマール七一二六㍍（北緯二八度四六分一九秒、東経八四度二五分一九秒）と記載されている。この新たな座標は現行の地図のヒムルンヒマールの位置に合致する。また、P七一三九の座標はネムジュンの位置に一致している。この座標の変更は下記のような状況の変化をもたらすことになると考えられる。

①単にヒムルンヒマールの座標の間違いを正したのではなく、新たなヒムルンヒマールを出現させた。

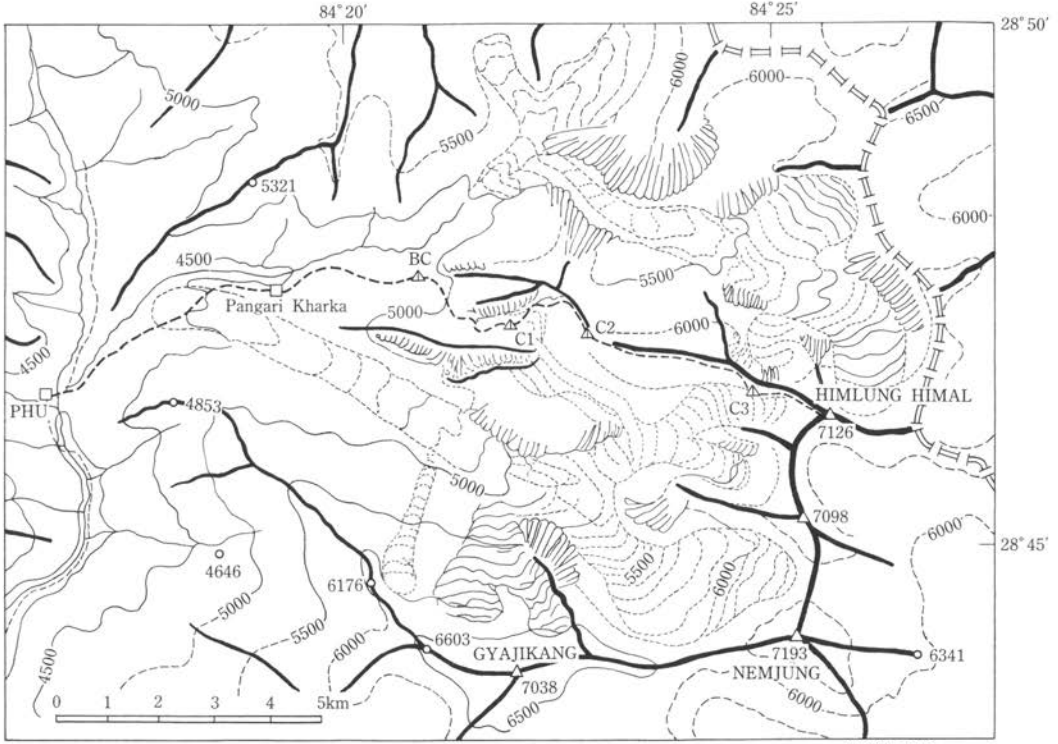
②ペリヒマールの最高峰はヒムルンヒマール（七一二六㍍）ではなく、ネムジュン（七一三九㍍）である。

③従来ヒムルンヒマールとして登り、弘前大学・ネパール合同隊が初登頂した山には現在ネムジュンという山名が冠されている。そして、その北方に「もう一つのヒムルンヒマール」が存在する。

以上のことから、歴史的経緯では弘前大学が登頂した山がヒムルンヒマールであるが、その座標は現在のネパール政府の認識ではネムジュン（P七一三九）であり、その北方に「もう一つのヒムルンヒマール」が存在することになる。

山の存在を示す写真としては、マナスルのプラトーキャンプから撮った写真がある。その写真には弘前大学が登頂したヒムルンヒマールの北方に七千㍍級の山が見られる。しかし、その写真ではヒムルンヒマール付近の地形を掌握することはできず、ヒムルンヒマールを同定することは困難であった。計画を進めているさなか、

ヒムルンヒマール付近概念図



我々は幸運にもヒムルンヒマール付近の航空写真を見る機会を得た。そしてその写真により「もう一つのヒムルンヒマール」の存在と山容を確認できた。

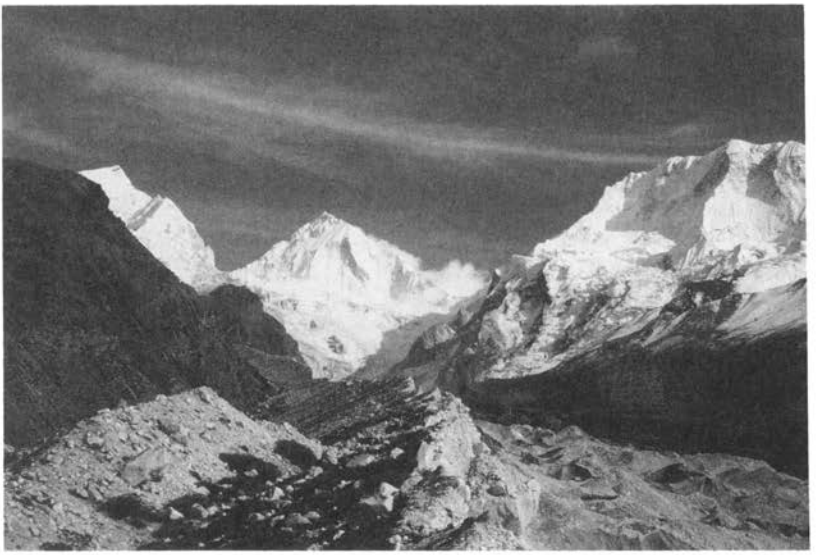
九月五日、本隊は千歳を出発し、北海道以外の地域から参加する隊員と香港で合流し、同日カトマンズに到着した。到着後、ナルコーラ下流の橋が大水のため流失していることが判明する。我々のアプローチルートはドゥムレからマルシャンディ川沿いにコドに達し、コドよりナルコーラを遡り、プーガウンを経てベースキャンプ予定地に至る計画であった。アプローチルートをカン・ラ越えのルートに変更する。

熱暑のカトマンズでの準備を終え、キャラバンに出発したのは九月十二日であった。ベシサハールまで車で入る予定であったが、土砂崩れのためボテオラルまでしか車は使用できない。キャラバンの前半はモンスーンがまだ明けきらず、午後になると雨が降る天候が続いた。ボテオラルからはベシサハール、ンガッティ、シャンゲ、ターール、バガルチャップ、チャーメ、ピサンと泊まりつぎ、二十日にカン・ラの登り口のンガワールに着く。カン・ラ越えは辛い一日となったが、登るにつれてせり上がってくるアンナプルナ連峰の北面は目を見張る景観であった。また、カン・ラの頂上では初めてヒムルンヒマールと覚しき山を望見する。カン・ラからはカングルー、マナスルの北西面を見ながらナルまでの長い道程を下る。ナルは戸数六十戸位のチベット系住民の集落である。狭い耕地には大麦が収穫寸前の実りを見せていた。ナルからは一旦ナルコーラに下り、ナルコーラ沿いに遡上する。ナルとプーの冬の居住地であるチャコ、キャンを通過し、プーに向かう。キャンから上流には樹木はなくなり潅木が沢筋に生えているだけとなった。土地は乾燥している。プーは戸数五十戸位の集落である。小沢の対岸には村の寺院の他に、立派なラマ教の寺院（タシゴンパ）が建っている。集落のわりには寺院はどこでも立派である。集落のはるか高い所まで潅漑を施した耕地が見られた。作物は大麦と馬鈴薯。

プーから氷河舌端のモレーンを登り切ると突如眼前が開けた。右俣氷河の左岸にはギャジカンが大きく翼を広げ、その左にはネムジュンがピラミッド型の端正な山容を見せている。ネムジュンの北稜のコルから高度を上げた稜線は無名峰を起こしゆるやかに「もう一つのヒムルンヒマール」に連なり、穏やかな山容を見せていた。左俣はヒムルンの北西稜により右俣と分かたれ、国境の分水嶺と北西稜の間に回り込んでいる。我々は自分の目で漸くプーコーラ上流域に広がる地形を確認できた。また、ベースキャンプに登る途中、左俣の左奥国境稜線にラトナチュリ（七〇三五㍍）も視認できた。

九月二十五日、ベースキャンプはヒムルンヒマール北西稜の南西斜面の四八五〇㍍に設置された。プーのパンガリカルカの上端に位置していた。そのためベースキャンプにはヤク、羊、山羊、犬、プーの村人、ゴムパの僧と来訪者は多彩であった。

二十六日から登攀活動に入る。花井、小泉で上部の偵察を行う。偵察の結果、北西稜から南西側壁に落ちている小氷河を辿れば北西稜上に出られることが判った。ルートはBCから氷河が後退したあとのサイドモレーンを登り、五二五〇㍍で氷河に取り付く。北西稜



左から無名峰、ネムジュン、ギャジカン（7038 m）
Left is name-less peak, Center is Mt. Nemjung, Right is Gyajikang

側面の氷河は規模も小さくアイスフォールの登高もさして困難ではなく北西稜上に出られる。その後は北西稜上にキャンプを延ばし頂上に到るという見通しがたった。

二十七日、北西稜側面氷河のアイスフォールの中にC1（五四五〇㍍）が設置された。C1からはアイスフォールを登ると「野球場」と呼んでいた広い雪面にでる。そこを横切り、稜線直下の高度差二百㍍の急傾斜の雪面を登り切ると北西稜の五八〇〇㍍地点に出た。到達した稜線は広大な雪面で所々クレバスが横走している。上部六〇〇〇㍍付近には巨大な懸垂状の氷塔が乱立しているが、特に問題もなく間際を抜けられた。稜線上はかなりのラッセルを強いられた。

九月二十九日、これまで本隊と行動を共にしてきた木崎、佐藤、名越の別働隊の三名はカリガンダキを目指してBCを後にした。

十月一日、北西稜六〇〇〇㍍にC2が設置された。C2からしばらく傾斜の緩い雪面が続く。ドーム状ピークの南面をトラバース気味に登ると高度六二〇〇㍍で初めてヒムルンヒマールの頂上を視野に捉えた。六二〇〇㍍のピークから北西稜は北側に雪庇を張り出した痩せた屋根が最終コルに下降し、約千㍍の急峻な雪面が頂上に突き上げていた。

十月二日、最終コルを通過し六二五〇㍍にC3が設置された。天候はすでに二週間以上も好天が続いている。しかし、一旦降雪があれば、ルート上の各所で雪崩が発生することは明瞭である。幸いにC3を建設した花井、小泉とニマは体調も良好である。翌三日、一次隊が登頂を敢行することにした。

十月三日、一次登頂隊の花井、小泉、ニマの三名は五時五十分C

3を出発した。急峻な雪面はまだ陽が当たらず雪は堅い。所々氷結した斜面が六六〇〇㍍付近まで続いた。出発直後から足指に冷感を感じていた花井は応急処置のため七時十五分に一旦C3に戻った。小泉とニマはそのまま登高を続けた。陽が射しはじめた斜面は膝までのラッセルになり、著しくペースは遅くなる。最後の三百㍍はラッセルも腰までとなり一気に直登し、十時四十五分頂上に達した。頂上は狭い雪の円頂であった。登ってきた北西稜以外はすべて鋭く切れ落ちている。沸き上がった雲海の上に遠くダウラギリ、アンナプルナ、マナスルの巨峰が聳え立っていた。南面は急傾斜で高度を落とし、無名峰に続いている。その奥にはネムジュンが、またその右にはギャジカンが見える。頂上から登頂成功の報を各キャンプに交信した二人は下山を開始し、十七時BCに帰着した。

一方、C3に戻った花井は足の処理を終え八時三十分登行を再開し、十三時三十分頂上に達した。

二次隊の清水、樋口、斉藤とダヌーの四名は十月四日C3に入る。五日、前夜体調を崩した斉藤は一人下山した。三名は登頂を試みるが、悪天候のため六五〇〇㍍付近で登行を中止しC3に戻った。六日、清水、樋口、ダヌーは六時にC3を出、十一時十五分頂上に達した。

三次隊の河合、戸田、石橋とサーダーのプリの四名は七日に登頂すべく、行動を開始していたが、いずれも体調を崩し、登頂には至らなかった。

三次隊の登頂断念が決せられた七日、各キャンプに配置されていた隊員・シェルパにより撤収が開始され、夕刻には全ての荷がBCに降ろされ登攀活動は終了した。

十月九日、BCをパンガリカルカに移し、帰りポーターの終結を待つ間は付近の偵察に費やされた。

十月十二日、パンガリカルカを発ち、往路と同じ道を辿り、二十一日カトマンズに帰着し、我々の山登りは完了した。幸運な山であった。

〈記録概要〉

隊の名称 北海道大学山岳部・山の会ヒムルンヒマール遠征隊'92

活動期間 一九九二年九月～十月

目的 ヒムルンヒマール（七一二六㍍）の西面からの登頂

隊の構成 隊長＝丹羽由紀夫（51）、登攀隊長＝花井修（40）、隊員＝益田稔（50）・小泉章夫（36）・戸田英明（34）・清水収（31）・樋口和生（30）・石橋英二（25）・斉藤清克（23）・木崎甲子郎（68）・佐藤行郎（65）、隊員・医師＝山口斌（55）・河合範雄（41）

行動概要 八月十二日先発隊、九月五日本隊日本出国。九月十二日カトマンズ発。九月二十五日BC建設。二十七日C1設置。十月一日C2設置。二日C3設置。三日一次隊、小泉、花井、ニマシェルパ登頂。六日二次隊、清水、樋口、ダヌーシェルパ登頂。十二日BC撤収。

報告 『アメリカン・アルパイン・ジャーナル92年号』。『ヒマラヤン・ジャーナル』（予定）。『岩と雪』（157号）。『岳人』（552号）。『もうひとつのヒムルンヒマール』（ヒムルンヒマール登頂報告書）。

四姑娘（スークーニャン）山南壁の初登攀

吉村千春

アプローチの始まり

一九九〇年のゴールデンウィーク、四名の仲間と四姑娘山周辺を歩いた。山の裾野を巻きながら一歩一歩登ると眺望の良い所に出た。パッと開けた前方に雲をいだいて天を突くようにそびえたつ四姑娘山があった。身震いするほどの感動を覚えたが、無意識のうちに未踏の南壁に登攀の可能性のあるルートを目で追っていた。

四川省の省都・成都より北西へ二百八十キロ、車でちょうど一日（十時間）、パーラン峠を越えて降りた所に四姑娘山の麓、チベット族（チャン族）の集落リーロン（日隆、約三〇〇〇メートル）がある。長江の源流の一つ岷江の支流・長坪溝の谷あいの山腹に開けた六十数戸の町である。

ふもとのリーロンより長坪溝沿いを約六時間歩けば我々の目指す四姑娘山の山麓のベースキャンプに着く。

ここは村の人がヤクの放牧や、薬草を採りに入るぐらいで、ほとんど人も入らない別天地で、一面に花が咲き乱れ、まさに「桃源郷」と呼ぶにふさわしいところだった。再び、この地へ入ろうと固く心に誓った。

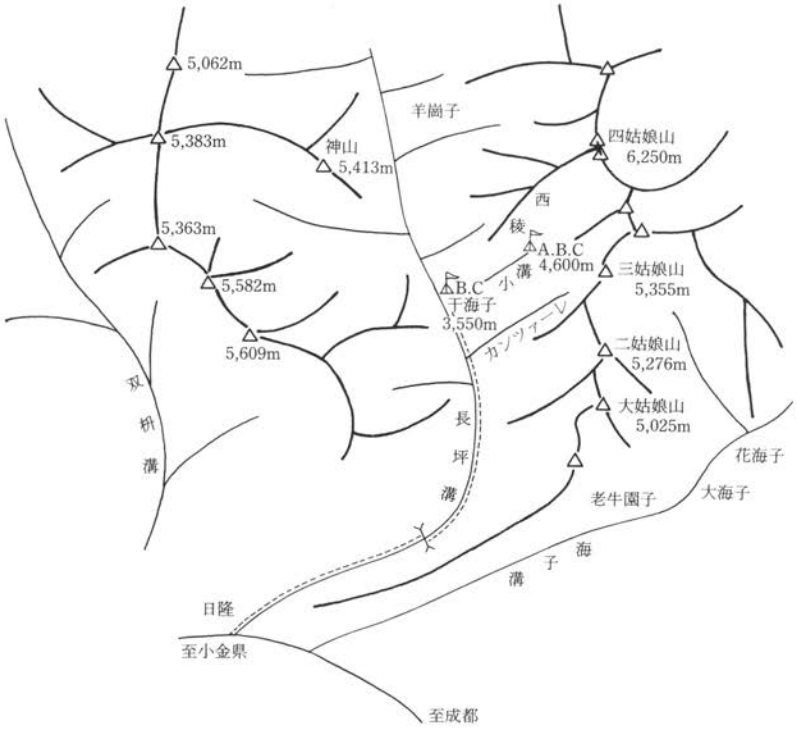
遠征への始動

広島山の会は、一九五〇（昭和二十五）年に発足し、ちょうどこの年、創立四十周年を迎え、記念誌の発刊を秋に控えていた。帰国後、編集作業に戻り、編集の合間、会の中で、四姑娘山遠征へのコンセンサスを少しずつ求めていった。

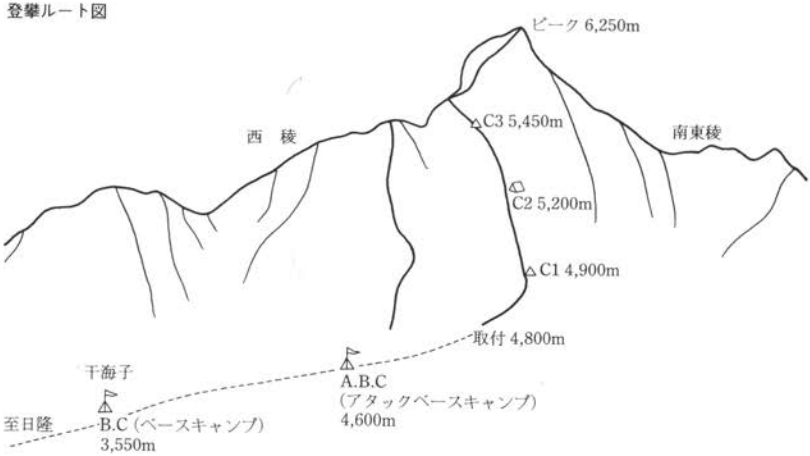
その頃、会の現状はというと、若く意欲的な人材は長年加入せず、いつのまにか会報も途絶え、会員同士のつながりも薄れつつあったので、記念誌の発刊と遠征の話は会に改めて新しい息吹を吹き込むことになった。

当初、遠征のメンバーは、純粋に会員の中から募る事を考えていたが、地方山岳会でしかも小さな当会にあっては、なかなかそろわ

四姑娘山周辺図



登攀ルート図



ず、諦めざるをえなかった。
ただ、九〇年の春より私と行動を共にしてきた後輩の森山亮と、地元の三倉岳で意欲的にハードなルートを拓いている両条輝正が会からの参加となった。
また、七年前、シャモニで知りあった愛媛県西条市に住む小寺敬止が参加の返事を即答してくれ、救われた気持ちになった。
両条と小寺は、冬期登攀の経験も十分で、前者はヨセミテ、後者はヨーロッパの岩壁をそれぞれ登っている。
二人を迎え、私を含め三名のリーダーが決まった。
そして、それぞれ日頃一緒に登っている仲間を募って、黒沢明の『七人の侍』ではないが、個性あふれる七人の登攀チームができあがった。
翌年の春、小寺は当会の久田見均と南壁の下までの偵察を行った。その結果、南壁には二つの岩稜（ピラー）が西稜に突き上げており、クラックシステムが発達した固い花崗岩質の岩壁で登攀可能であることが判明した。
夏から冬にかけては、中国登山協会への登山申請と、中国登山の一番のネックである高額な遠征資金の調達に仕事を半ば忘れ、没頭した。
この間、桑原良敏総隊長と小野隆司医師の参加も決まり、総勢九名となった。
また、登山隊とは別に、四川省との民間交流を目的としてトレッキング隊を組織することになった。一九八九年のコングール登山隊で登攀隊長を務めた須藤建志氏率いる、新聞で公募した十七名と西日本日中旅行社の井上貞義氏、合計十九名である。
そして地元ＲＣＣ中国放送が開局四十周年記念番組として、登山隊を取材する事となった。
取材班は四名（カメラマン二名、技術一名）でディレクターは藤田一成氏。彼は、九〇年の春、私と一緒に行った仲間で、きちんとしたヒマラヤクライミングの番組を世に出す事をもくろんでいた。
これで三つの隊、総勢三十二名が時期は違うが四姑娘山の麓に集うことになる。三隊はそれぞれ協力しあい、一隊がこけても失敗という、いやがうえにも、私にとって責任の重い事業ではあるが、一つ大きな夢となった。

いざ南壁へ

六月二十九日、中国へ入国して四日目、于海子（カンハイツ）というベースキャンプ（以下ＢＣ）に到着した。
ＲＣＣ取材班は一週間前、すでに到着しており、取材の体制を整えていた。
地元の人に一番気がかりな天候を聞くと、夏の到来が遅れ、毎日一度は天候がくずれ雨が降っているとの事。
四姑娘山は、一九八一年の七月、同志社大学隊によって南東稜から登られて以来、再登を許していない。独特の気象条件の悪さがこれまで四隊の攻撃を退けてきた。
出だしからいやな予感がするが、全力投球のみ。皆、遠征直前まで、トレーニングを積んで体を絞り込んで来たではないか。喜々として荷わけ作業をしている隊員たちは元気一杯で表情にも余裕が感じられる。

翌日より高度順化を兼ねて干海子小溝（カンハイツシャオコウ）沿いにＡＢＣ予定地までのんびり登ってゆく。出合いからかなり急で、順化していない体には相当つらい。

ＢＣからＡＢＣ（四六〇〇㍍）までの荷上げは地元の青年十名の活躍によって五日間で完了した。

ＡＢＣは南壁を良く見渡せる氷河の末端、カールの縁に設営した。八人用テント二張りとタープの倉庫、食事用テーブル付きの贅沢な攻撃基地となった。氷河湖の水場もそばにありクライマーにとってこの上ない場所だ。

目の前には、人類がまだ一度も触れていない巨大な壁がそびえ立ち、高所独特の空気と合いまって、腹の底からここまでやって来た喜びが湧き出てくる。

七月五日、全員がＡＢＣに揃い初期の順化を終えた。

ＡＢＣ設営後から、メンバーを替えながらＣ１へのルート工作に入った。

南壁は、ちょうど馬蹄形になっており、二つの岩稜の間を降雪後は定期的に雪崩が滝のように落ち口に集まっている。

まず、この雪崩のリスクを回避するため、右上バンドへつながる右寄りの岩壁帯にザイルを五〇㍍固定した。これで雪崩の直撃をくらう事はないだろう。

さらに雪のバンドに出てから八㍉ザイルを5ピッチ（一四〇㍍）伸ばし目指す岩稜に出た。

六日、岩稜の下の雪の斜面を平らに削って、三人用テントを張り、Ｃ１（四九〇〇㍍）とした。

ここからは、初登頂した同志社大学隊が選んだクーロワールルートが良く観察できた。降雪後には、頻繁に雪崩が落ちていた。

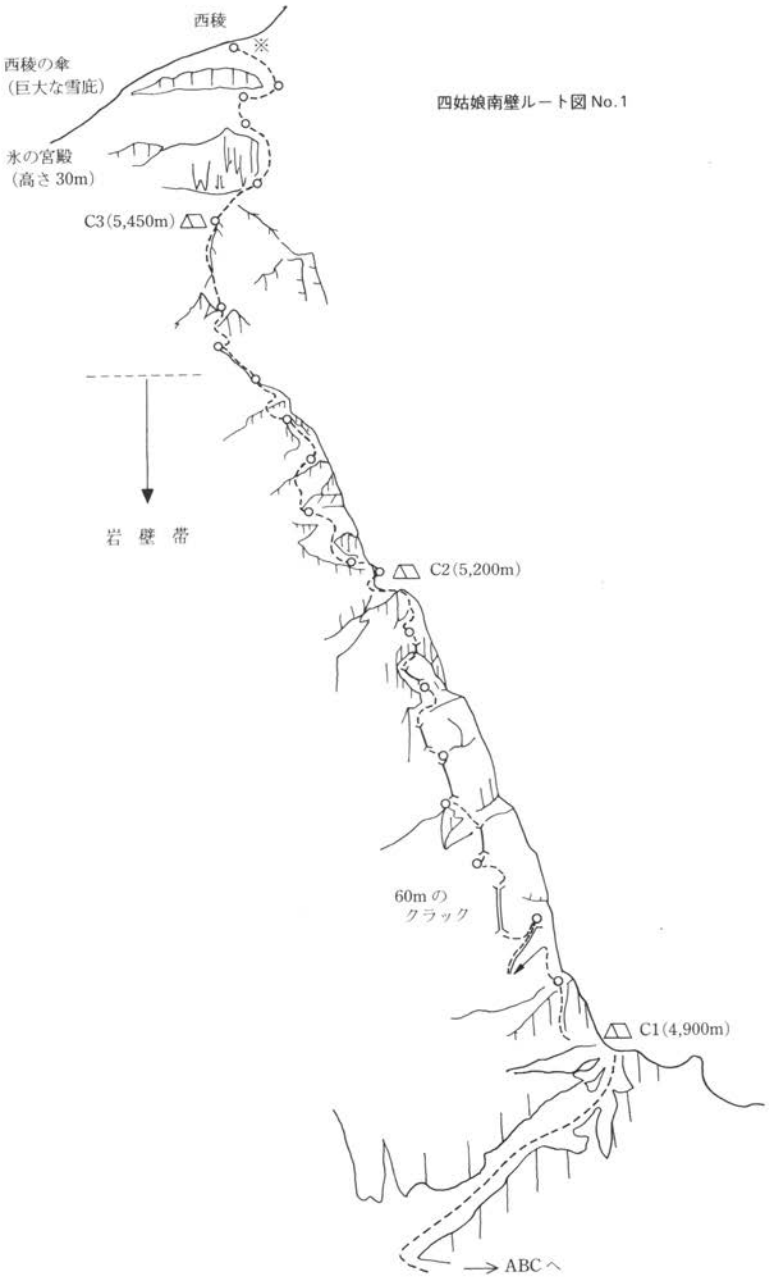
天候は、午後からかならずといっていいほど崩れ、雨からみぞれそして雪となった。

七日、両粂・山本の師弟コンビによる下部岩壁の本格的なルート工作が始まった。荷上げ隊の見守る中、隊のエース、両粂がみぞれの中、濡れた壁にフラットソールで登り始めた。「滑る！　滑る！」と言いながらも、彼の本領の粘り強いクライミングで1ピッチを登る。2ピッチ目、苔のついた滑るフェースからハーケンを打ち、振り子トラバースで右上するランペに取りつく。二人はだんだん悪くなった天候のため、この2ピッチで行動を止め、Ｃ１へ帰幕した。

八日、一日中雪で全員停滞。

九日、ルート工作隊はフィックスした一〇・五㍉のケービングロープに氷が付着してユマーリングが出来ず、早々にＡＢＣへ降りてきた。

十日、待ちに待った晴天がやってきた。両粂と山本はＡＢＣを早朝に出発、先日の最高到達点から右上バンドを一五㍍クライミングダウンし弓形チムニーに入る。チムニーを抜けると浮き石のあるガラ場を約二〇㍍登り、ザイルを固定する。4ピッチ目、二〇㍍の右上するクラックをナッツのエイドで登り、一〇㍍の雪田を越えて浮き石の多いビレイ点へ。5ピッチ目、直上するすっきりした四〇㍍のクラックを山本がリードした。「いいとこ取りしちゃった」「5・10ｂはある」と手応えのあった満足な顔でＡＢＣへ降りてきた。地元、三倉岳でパートナーを組んで三年、二人にとって最高の一日と



四姑娘南壁ルート図 No.1

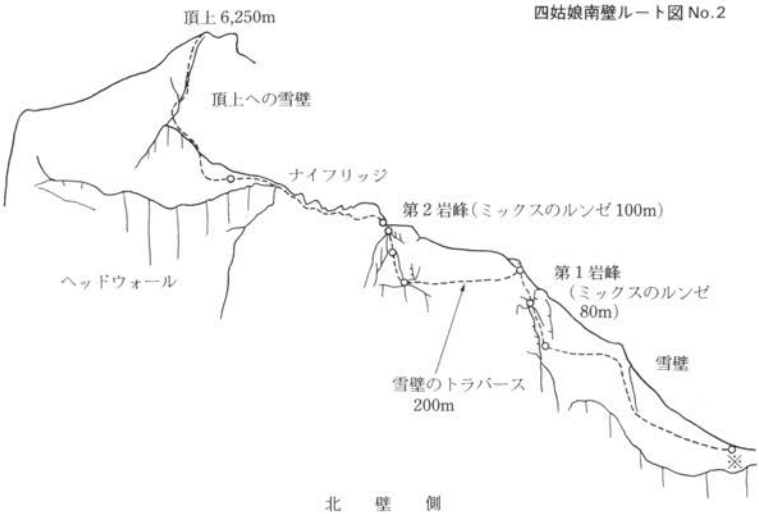
なった。

十一日、開拓メンバーを小寺・斎田の横浜霧峰チームに替えた。彼らは付着した氷のためアイゼンを履き、さらに傾斜の強くなった壁に挑んだ。6ピッチ目、斎田がクラックからボルトを打って雪のついたスラブをこなす。7ピッチ目、小寺はスラブに入った左上クラックから垂壁下を右にトラバースし、三㍍の垂直クラックをフレンズ・アングルピトンのエイドで一度墜落したものの、うまく乗っ越した。8ピッチ目、雪壁から易しいクラックを拾って下部岩壁の頭へ出た。

まさに冬期登攀で、フラットソールの出番はもう無くなった。偵察隊が持ち帰った「登攀は短パン・Tシャツ・フラットソールの世界よ！」はとんでもない話であった。内山と森山は明日のC2建設のため、C1へ泊まる。

十二日、C1の二人は、昨夜降った雪で凍ったフィックスザイルに手こずったが、なんとか明るいうちにC2へ到着、上部岩壁の付け根にテントを設営した。ところが、午後三時頃より雨、そして雪に変わり、深夜、上部からの落雪にテントがつぶされてしまった。テントの位置が壁の下という判断のミスだが大事に至らずラッキーであった。二人はなんとか雪洞を掘ってしのぎ、翌日雨の中を、ABCへ降りてきた。この日より三日間、ABCでは雨、上部は雪。遠征期間中一番辛い停滞になった。テントの中では酒を飲み、隊員各自好き勝手にくつろぐ。私は、遅れた日程のあせりで胃が痛くなる思いをしていた。我々の持ち時間一カ月のうち、残りは二週間もないのだ。

四姑娘南壁ルート図 No.2



北　壁　側



C２からの１ピッチ目　クラックを人工で登る

十六日、「もうこれ以上待てんどー上へ上へ登ろう！」と皆をけしかける。右上バンドの取りつきに着いた時、雪崩の危険性に意見が分かれ、結局私と斎田、小寺の三名だけがC２までの荷上げに行きC１で泊まる。他のメンバーはとぼとぼとABCへ帰っていった。黒々としていた壁には、べったりと雪が付き、心強かったケービンロープは氷づけでまるで棒のよう。ワイヤーブラシでしごきながらユマーリングするが一瞬たりとも油断できない。

十七日、全員C２（五二〇〇㍍）まで荷上げ。雪に埋まったテントを掘り出し下部岩壁と上部岩壁を分ける雪稜のコルをL字型にカットして二張りのテントを設営した。

十八日、斎田、内山が上部岩壁に取り付き3ピッチザイルを固定した。他のメンバーはC１から荷上げ。１ピッチ目、三㍍のクラックをエイドで直上、そして右上ぎみに雪を使いながら登りピッチを切る。２ピッチ目、左のクラックを利用して右から左へエイドで登り返して、雪壁の末端で切る。３ピッチ目、傾斜の強い雪壁。

十九日、両粂、山本はさらに3ピッチ伸ばし、上部岩壁帯を抜ける。４ピッチ目、左のガリーから左上するクラックをつないで最後は一〇㍍の雪壁。５ピッチ目、雪壁。６ピッチ目、一〇㍍のミックス壁を登り、下部懸垂氷河より派生する雪稜に出て、スノーバーでビレイ。上部岩壁は傾斜も強く、ミックスの壁で、ハードなフリークライミングとは違った難しさがあった。特に、両粂の経験豊かな登攀技術が光った。

二十日、C３建設を目指し、吉村、両粂、山本が早朝よりユマーリング。昨日の最高到達地点から、まだ2ピッチほどいやらしいナ

イフリッジと傾斜の強い雪壁が待っていた。見上げる塔の様な下部懸垂氷河は近くに見えるが、今日中に届きそうにない。テントなどをデポして目のくらむような懸垂下降でC2へ降りた。

二十一日、今日こそはC3建設と意気込んで小寺、斎田、山本がC2を出発した。残りの雪稜を約一〇〇㍍程行くと、下部懸垂氷河の雪壁に稜は消え、右へ五〇㍍トラバースをして懸垂氷河の右端のC3予定地に到達。さらに懸垂氷河の付け根を巻きながら、雪壁を一〇〇㍍登る。途中、氷塔の上から落ちて来た新雪で斎田が流されたがアイゼンがひっかかって止まった。ビレーしていた山本は「わしゃーパニック寸前だったで！」とまったく突然の出来事に興奮していた。一人C3予定地に残って氷を削っていた小寺もあまりの固さにテント三張りは無理と判断、またしてもテントが張れずC2へ降りてきた。「パンツの端に手がかかっているのになー」と溜息が出る始末。

最後の闘い

二十二日、二パーティーに分かれ、全員でC2を後にする。吉村、両粂、内山はとにかく西稜へ出ることを目指し、他のメンバーは三チーム三日分の食糧と八㍉×五〇㍍ザイル五本を持ち上げ、C3設営をする。

我々は、遠征フィナーレに向けて、各自最大限の努力を傾ける事にした。

残り少なくなった日程の関係上、西稜上のC4を飛ばし、C3（五四五〇㍍）からピーク（六二五〇㍍）まで高度差八〇〇㍍のアタックをかけることにした。

ルート開拓隊は順調に昨日の最高到達点へ到着。仰ぎ見る頂上は西稜に出てからもかなり遠く、そして傾斜があるように見える。頂上は相当風が強いのか、北から南へと雪煙がいつも舞っていた。

雪のルンゼを七〇㍍、そして広い雪壁を五〇㍍で上部の懸垂氷河の傘の下に出た。ここは平らな幅六㍍位、長さ五〇㍍位の雪原で、幕営地にはもってこいの場所だった。傘の下を三〇㍍右へトラバースし、懸垂氷河を右下へ巻くように二〇㍍降りた。このピッチで初めて前進用にICEハーケンを四本使用した。この地点から氷雪のルンゼを左上ぎみに登れば西稜に出られそうだ。午後になり、雪の状態があまり思わしくないので、明日に伸ばし、C3予定地に降る。後続隊と合流し、下部懸垂氷河下の雪稜をL字に切ってテントを二つ張る。

二十三日、八時頃まで風雪が続き、出発を見合わせていたが、小寺を残し六人で順々にC3を出る。取り残していた最後の氷雪壁をダブルアックスで内山がリードし、ちょうど五〇㍍で西稜に出た。このピッチで思わぬ時間を食い、二番手の吉村だけが上がり、他のメンバーは明日のアタックに備え、早々にC3へ降りた。

南壁の初登攀の感激も無く、「とにかく頂上が見える所まで行こう！」と内山と話し合う。だだっ広い雪原から北側を巻くようにゆるい雪壁を膝下までのラッセルで五十分登ると第一岩峰と呼んだ取り付きに辿り着く。北側のガリーをダブルアックスぎみに2ピッチ登ると顕著な岩峰の付け根に到達した。ここから、又北側を巻くように二〇〇㍍トラバースし、第二岩峰の氷雪のルンゼを一〇〇㍍程登り西稜に出ると、ようやく風雪の中にかすかにピークらしいもの

が見えて来た。「こりゃーまだまだあるでー」「下手をするとC3からのアタックじゃー届かんなー」「やはりC4の必要があったのか?」と自分の判断を悔やんだ。

「天気が崩れてきているので無理をしないでくれ」と小寺がトランシーバーで盛んに帰幕を勧めてくる。ビバーク魔の内山は、腐った雪の下降に自信が無く、交信中ピッケルで雪洞を掘り始めている。時計を見ると、四時を回っており、このままビバーク覚悟で突き進むか、引き揚げるかの判断に迷う。が、しかし、明日のアタック隊に全てを任せ、下ることにした。雪壁を後ろ向きで慎重に降り、八時過ぎによれよれでC3に帰幕。

二十四日、四時三十分に小寺、斎田、六時に両条、山本が出発した。天候はガスが濃く、余り良くない。「十時までは登るよ、天候が回復しなきゃー下降するけー」「回復したら昼までは登ってみるよ」と両条が言い残して出て行った。

昨日の疲労でうとうとしていると現地時間九時四十二分、開局していたトランシーバーから「吉村さん登ったよ!」「鼻水も涙も凍った。みっともなくって……」と小寺の声が飛び込んできた。

一瞬、わが耳を疑ったが、「あいつらついにやったな!」と森山と固い握手をして喜び合う。

一次アタック隊に続き、二次アタック隊も十二時三十二分に登頂。半ば諦めていた両条隊は、ピークを踏んで下降してきた小寺隊に会うことができ、登頂への意欲が出たらしい。C3へ無事帰って来た面々の励ましと登頂した事実が明日の第三次アタック隊の我々を勇気づけてくれる。四人共フィックスロープのおかげで一気にABCまで降りていった。

二十五日四時二十分、風雪の中、次は僕たちの番だと勇んでアタックに出掛けた。吉村、内山、森山の三人は、トレースの残った雪稜をぐんぐん登って行く。第二岩峰からは、雪庇に気をつけながらナイフリッジを約一時間進むと、圧倒的なヘッドウォールと頂上直下の懸垂氷河が見えてきた。雪壁をトレースに導かれて、一時間半ほど登って行くと、ゆるやかになった雪原の向うにこんもりとしたピークがあった。

三年越しの夢は、全員登頂という喜ばしい成果で終わった。

本当にラッキーな登山隊だ。

二十七日、登山隊のBCへの下山に合わせるかのようにトレッキング隊もBCへ入山した。

最後に

我々は、遠征の経験も乏しい（経験者は七人中二人だけ）単に登山愛好家の集団である。会の中では厳しい見方をする先輩が多かったが、運にも恵まれ登攀隊員全員が登頂することができた。

しかし、出発前まで実によくトレーニングと合宿をやった。ヴァーチカルアイスを求め、韓国雪岳山、長い雪稜や岩稜に馴れるため剱岳八ッ峰や硫黄尾根、また穂高の継続登攀や大山の冬壁、そしてルート開拓の練習を近くの未登の壁を探して取り組んだ。

合宿をこなすにつれて、一番大切なチームとしてのコンセンサスが出来たと思う。「個性は許し合うが、各自が自分の持ち場を把握し全力を尽くす、そして、最初から全員ピークに立つタクティクスで登ろうではないか」であった。いみじくも、須藤氏の祝福の言葉

の中に「全員登頂はその気と運が無いと出来ない事だ」があった。いずれにしても、我々は、本当にいい山に出会えた。トレッキング隊も報道隊も短い夏の到来に四姑娘山の微笑みを見つけそれぞれに満足して日隆を離れた。

「再見　四姑娘山！」

［註・本登山隊は日本山岳海外登山基金、平成四年度助成金の割当てを受けて実施された］

〈記録概要〉

隊の名称　広島山の会四姑娘山登山隊

活動期間　一九九二年六月二十六日～八月六日

目　的　四姑娘山（六二五〇㍍）南壁の初登攀

隊の構成　総隊長＝桑原良敏（65）、隊長＝吉村千春（33）、副隊長＝小寺敬止（37）、登攀隊長＝両条輝正（45）、隊員＝内山龍司（35）・山本茂樹（33）・斎田　功（33）・森山亮（26）、医師＝小野隆司（30）

行動概要　六月二十二日～二十六日の間三次にわたって日本を出発。六月二十九日ＢＣ建設（三五〇〇㍍）、七月五日ＡＢＣ建設（四六〇〇㍍）、六日Ｃ1建設（四九〇〇㍍）、十七日Ｃ2建設（五二〇〇㍍）、二十二日Ｃ3建設（五四五〇㍍）、二十四日一次隊・二次隊登頂（四名）、二十五日三次隊登頂（三名）、登山隊員全員登頂となる。二十七日ＡＢＣ撤収、三十日ＢＣ撤収、八月二日成都へ下山。

報　告　『岩と雪』一五六号、『四姑娘山一九九二年夏の記録』、*"L'année montagne"*

アンタークティックウォーク南極点探検

松原尚之

はじめに

アンタークティックウォーク南極点探検隊は、明治大学山岳部OBまた本会会員でもあった大西宏を隊長とし、一九九〇年秋よりその具体的準備がはじめられた。東京の大学山岳部出身者と北海道大学で環境科学を専攻する学生からなる、プライベートな南極探検隊である。

隊の目的は、南極大陸パトリオットヒル（南緯約八〇度）から南極点まで一一〇〇キロメートルの無補給徒歩による踏破と、その歩行行程における環境調査、またパトリオットヒル周辺の環境調査、そして新しい極地装備の研究と開発などである。

出発までの準備期間の中で、一九九一年一〇月、隊長の大西がナムチャバルワ峰で遭難死するという思いもよらぬ大きなアクシデントに見舞われたが、新たに吉川謙二を隊長とし計画を続行。一九九二年五～六月のカラヒヌナ（グリーンランド）徒歩合宿などを経て、出発にこぎつけた。

大西の死による隊の建て直しの中で、隊は環境調査隊としての性格を前面に出すものになったが、ここでは南極大陸徒歩旅行の観点から簡単にその内容の一端を紹介する。

南極点への歩行

魚の鱗状に波打つ、ガチガチのブルーアイスの上に、すさまじい迫力で二十五人乗りの小さな飛行機ＤＣ６が着陸した。南米最南端の町チリのプンタアレナスから約八時間のフライトで、私たちは南極大陸の西の外れ、パトリオットヒルに到着した。

ビニールハウスを頑丈にしたような格好の極地用テントが、ここに幾張りかかたまって建てられている。南極専門の旅行会社・アドベンチャーネットワーク社のキャンプである。十一月から一月までの南極の最も穏やかなシーズンにだけスタッフが滞在し、観光客やビンソンマシフ登山に赴く世界中の人々を受け入れている。



雪原を進む吉川隊長

一九九二年十一月十二日。吉川、私、佐野の三名は、長い旅路の最終目的地、はるか地平線の彼方にある南極点を目指して、いよいよ歩行を開始した。暖かく居心地のいいパトリオットヒルのキャンプが後ろ髪をひく。二年間にも及ぶ長い準備の末に、ついにそのスタート地点に立った私たちを、三人の仲間が見送ってくれる。キャンプに残り学術調査と無線交信を担う石丸、原田と、数日後には再び帰国の途につく毎日新聞の荒木功記者だ。

原田と握手する。荒木記者と握手する。最後に石丸に手を差し出すと、彼は笑ってそれを拒み、「握手は極点で」と言った。

エルスワース山脈のふもとは、吹き下ろす風が強いためか、ガチガチの裸氷帯になっている。カラヒヌナで使い慣れたシールをはったテレマークスキーではなく、アイゼンをはいて歩を進める。傾斜こそさほどではないが、カラヒヌナでは経験しなかったような大きな登り下りが連続する。裸氷帯のため橇は滑り、下りでは後ろから人間を轢きそうになる。登りの労苦は言うまでもない。最も急な登りでは、息をぜいぜいと吐きながら、三人がかりで一台の橇を上げた。

七十五日分の装備と食糧・燃料を積んだ橇は一人分が一五〇キログラムにもなった。南緯八〇度のパトリオットヒルから、南緯九〇度、すなわち南極点まで約一一〇〇キロメートル。約七十日間で歩き通す予定だ。その間飛行機などによる物資の補給は一切受けない。

重量のためか、寒さのためか、裸氷帯の上でも橇の滑りはきわめて悪い。彼方まで広がる大雪原と険しい峰々のつらなる風景はこの上なく美しいが、右手の山がいつまでも後方に遠のかないのが、苦々

しい。二日目も三日目も、一日に一〇キロメートルを越えて歩くことができなかった。果たして極点まで辿り着くことができるのだろうか。

出発の日から吹いている強風は、一週間過ぎても一時もおさまる気配を見せようとしない。マイナス二〇度を下回るその気温はともかくとして、ほとんど進行方向から吹き続ける風速一〇メートルの向かい風が、寒気をこよなく厳しいものにする。露出している頬や鼻は、絶えず気にしていないとすぐに感覚がなくなり白くなる。マッサージしてやると赤味が戻るが、一部はすでに凍傷にかかっているようだ。ストックを握る手の指は、手袋の中でしょっちゅうグーをして暖める。この地では、この強風も、風というよりは自然な大気の流れなのかもしれないな。そんなふうに思った。

歩き初めて三日目にエルスワース山脈の峠を越えた。前方に開けた視界には一つの山も谷もなく、どこまでも平らな茫漠たる大雪原が広がっている。急な登り下りはなくなって、路面も裸氷帯から固くしまった雪に変わった。アイゼンはお払い箱となり、シールを貼ったスキーにはきかえる。雪面にはサスツルギが一定間隔で現われだした。風によってできる雪面の凹凸だ。ある時は乗り越え、ある時は左右によけ、数千数万のサスツルギの群れの中を進んでいく。

風は強いが天気が崩れることはなく、雲さえもめったに見ることはない。太陽は一日中天空高く回っている。そう、この時期の南極では太陽は沈まない。夜はおろか夕暮れすらない。

朝は八時（時間は便宜的にチリ時間を採用）に起床する。魔法瓶に入れる紅茶を沸かし、気象観測をしたのち十時前後に出発。一時間歩いたら五分から十分休み、その間に行動食を食べたり用を足す。ナビゲーションの大変な先頭を交替し、再び一時間の行進（マーチ）。そして休憩。そうして一人が三回ずつ先頭を務め、九回のマーチを終えてテントを建てる頃、時刻は午後八時を回っている。登山などと違い、今日はどこまで、というその日の目的地があるわけではない。毎日ひたすら九本のマーチ。終わったところがその日のキャンプ・サイトだ。

幕営後約一時間かけて雪や大気のサンプリングなどを行い、夕食を摂り終えるとはじめてしばしの安らぎの時間が訪れる。もっともたいていその時間はごく短い。スキーのシールを補修したり、縫い物をしたり、壊れ物の修理をしたり、足裏のマメの水を抜いたり……。何かを修理していない日の方が珍しいからだ。

十二月に入ると、前半あれだけ私たちを苦しめた強い風が吹かなくなり、寒さで悩まされることはほとんどなくなった。気温は常にマイナス二〇度前後。これくらいの気温で風がなければ順応した体にはどうってことはない。日本の冬の北アルプスなどと異なり、南極は極めて乾燥しているから、体が濡れて乾かないというような不快さは味わわなくともよい。寝袋にもぐれば、暑すぎて眠れぬことはあっても、寒くて困るようなことはない。想像していた以上に穏やかな気候条件である。

一日の歩行距離も少しずつ伸びている。歩行開始一週間後にはじめて一〇キロメートルを越え、十二月に入る頃には二〇キロメートルを歩けるようになっていた。

何も目印になるもののない真っ平らな大雪原では、GPSという機械を用いて現在位置を出す。人工衛星からの電波をとらえて、わ



南極点に立つ　左から松原，吉川，佐野

ずか数十秒でほとんど狂いのない正確なポジションを出してくれるこのハンディで軽量な機械は、六分儀を使って手間のかかる天測をしていたほんの数年前までの遠征隊と比べても隔世の感がある。そして歩行中は、偏差を修正したコンパスと、太陽の位置などから進路を割り出し、先頭の者が隊を南へと導いていく。

真っ平らな雪の大地は、ほとんど常に三六〇度を地平線に囲まれている。ごくたまに遠くにヌナタク（山）が見えるが、それに近づくわけではなく、何日か過ぎれば再び見えなくなる。このような場所における唯一の危険と言っていいクレバスは、カラヒヌナと同じくまったく出てくる気配はない。サスツルギだけは大きくなったり小さくなったり、常に歩行の妨げとなり、また手造りである私たちの橇にダメージを与える。

一日の食事の量は一人あたり約四千カロリーだ。成人男子の平均摂取量よりはかなり多いが、一日十時間も重たい橇を曳くという重労働をする私たちにはそれでも足りなく、毎日少しずつ体重が減っていく。

食事の内容は日本で行う冬山登山などとさして違いはない。時間と燃料を節約するため朝食と昼食に関しては特にその時間を設けず、ビスケットやチョコレートバーを中心とする「行動食」を、各人が好きな時に好きな量だけ口にする。むろん一日の分量は決まっている。行動食の管理はある程度各自まかせになっているが、食べすぎれば旅の後半に自分が食べるものがなくなってしまうわけだから、断腸の思いで我慢をする。

ビスケットというのは市販されたものではなく、吉川が昔一人でカラヒヌナに行った際に開発した自家製のビスケットだ。材料は、

卵、バター、オートミール、きなこ、マッシュポテト、ナッツ、砂糖、ココア、胡麻……。行きのプンタアレナスで苦労して何十キロと焼き上げたビスケットというより見た目はハンバーグのようだが、栄養のバランスがとれ、かつきわめて高カロリーなものになっている。

夕食だけは、夜、テントの中で調理をする。アルファー米を炊き、乾燥野菜とベーコンを具に入れたおかずを一品つくる。おかずはカレーであったり、シチューであったり、マーボ味であったり、七種類ほどの味つけをローテーションさせる。アルファー米にもおかずにもやはりバターを固まりで入れ、少しでもカロリーを高める努力をする。

一日約十時間、百何十キロの橇を曳いて歩くという労働は、やはりかなり肉体を消耗させる。純粋に体力的に見たら、おそらく大抵の登山は凌駕しているだろう。ただ、平らな道をひたすら歩き続けるだけだから、登山のように短い時間に爆発的に体力を浪費したり、度重なる危険に精神をすり減らしたりするようなことはない。純肉体的な疲れであり、それは少しずつ少しずつ私たちの肉体に蓄積されていく。

極点までのこの旅の最大の苦しみはずばり、その歩行そのものだ。そしてその苦しみは、瞬間的なものではなく、その継続性にこそあると思う。一日必ず十時間と決められた長さ。七十日という長さ。終わってしまえば人生のひとこまかもしれないが、歩きだして間もない頃は、五十日先だって、考えの及ばぬほど遠い先のことだ。十時間ではなく、一日五時間の歩行だったら、どんなに楽しいだろう。七十日ではなく二十日間だったら、どんなに楽だろう。七十日の旅の最初の半分では、私たちに旅は永遠に続くのではないか、と思われた。

十二月十六日。七、八メートルの幅で河のように雪面五〇センチばかりへこんだ所を渡る。

なんだろう？　吉川がスコップで掘ってみる。ズボッと、底が抜け、その下に蒼い空間が広がった。はじめて遭遇したクレバスだ。続けて何度か同じようなへこみを渡る。幸い、私たちの荷重で、一度も落ち込みはしなかった。

果てしない雪原

ティール山脈がだんだんと近づいてきた。とても美しい。岩壁は大きくはないが、黒々とし、屹立して立派である。一カ月以上も白と青だけの単調な景色の中を歩き続けてきた私たちにとって、それは久しぶりに接する風景だった。雪面に小さな石粒が見られるようになった。石粒さえも久しぶりだ。

路面はエルスワース山脈以来の裸氷となる。あと数キロメートルで、目指す山脈の基部である。裸氷には小さな貝殻か木の葉のような凹凸ができている。サスツルギとは違い、雪の昇華によってできたものなんだ。そう、吉川が教えてくれる。まるで干上がった湖の底にでもいるような、不思議な景観だ。

この日十二月二十日、ふだんの歩行よりも一時間少々多く歩き、ようやくティール山脈基部に到着した。歩行距離も過去最高の二五キロメートルだ。

行程の中間地点と言えるこの地で、初めて二日続けての停滞をす



る。初日、私と佐野は主にモレーンの礫の調査を行なった。一人でヌナタクの裏側まで行ってきた吉川は、「あまり面白いところではない」と収穫不足に少々つまらなそうにテントに戻ってきた。

ティール山脈に寄り道するためにこれまで若干西寄りにとっていた進行方向も、これからは真南にとっていく。最終ゴールである南極点まで一直線に進むのだ。もう、途中にヌナタクが現れることもない。景色のまったく変わらない白い沙漠で、再び私たちは夢幻世界の旅人たろう。

歩いている時、たびたび不思議な気持ちにかられることがある。なんだか常に歩いているような錯覚を覚えるのだ。昨日と今日との間には、テントの中での安らかな夜という時間が確かに存在したはずなのに、はっと気づいた時、いつも歩いているような気がしてしまう。昨日もおとといも、その何十日前も、やはりオレはまったく同じように、こうして歩いていたんじゃなかったか？　たえまなく繰り返されるデジャビュ（既視感）。

私にはわかっているのだ。今こうして私は歩いているけれど、明日の私が同じように歩いているのも、ほんのまばたきするほどの瞬時の先のことであることを。そして実際に翌日の歩行の時、私は、昨日の歩行が今日の歩行と、ほとんど連続した行為であると思えるほどに近いことを確認するのである。

一日十時間の歩行中、三人の間に交わされる会話は二言か三言。単調な雪原の単調な歩行の間、常に私は空想の世界に遊んでいる。もはや私は風景など見ていない。ナビゲーションに気を遣う先頭で歩くときをのぞいては、いつも何かしら考えている。空腹だからそ

の空想の半分は食べ物のことであるけれど、残りの半分で様々な空想に浸るのだ。私はカラヒヌナで気づいていた。このような単調な旅の最大の楽しみは歩行中の空想にあることに。今回の南極はカラヒヌナの旅よりもさらに長い。

とにかく色々なことが考えられていいなあ。カラヒヌナでは、そう私は思った。しかし、今回南極を数十日歩くうちに、このようなところを歩き、空想するとき、逆に私は色々なことを考えない。そう、気づいた。考えるのはだいたい決まっている。家族のこと、山のこと、仕事のこと、山岳部のことなど、数個の事柄について、形を変えながら繰り返し空想しているだけなのだ。そうか。すなわちこれらは、私の人生において最も大切な核になる要素なのではないか。私はそうして、自分のこれからの人生について、何十年も先まで綿密に具体的に計画を立てていた。

ティール山脈基部に到達した日に記録した最長歩行距離の二五キロメートルは、その後伸びることがなかった。よくても二一キロメートル止まりで、悪いときには二〇キロメートルに満たぬ日もある。食糧と燃料が減っていく分、荷物は少しずつ軽くなっているのに、である。要因はいくつか考えられる。気温がまた少しずつ下がりだしたので、低温が橇の滑りを悪くしている。また、路面自体が登っていることも考えられる。見た目には真っ平らな雪原だが、出発点のパトリオットヒルから南極点まで、標高差で約二〇〇〇メートルもあるのである。見た目にはわからないくらいの緩い傾斜で、私たちの歩く道はたいていわずかずつでも登っているのだ。あるいは、と私は思う。もしかしたら私たちが疲れているのでは、と。

年が明けるとこれまでとはうって変わって、雪の降る日が多くなった。それは他の地域であれば「小雪が舞う」程度の、降雪とは言えないような雪なのだが、あまりにも晴天ばかりが続いていたこの地においては、立派な降雪だ。雪が降るたびに、その貴重な新雪を私たちはサンプリングする。

太陽が出ないと、ナビゲーションもやりづらい。わたしたちは磁石も用いるが、もっぱら自分の影の角度を見て、おおよその進行方向を決めているからだ。

曇天の下の雪原は、地平線と空との境も曖昧で、ただ茫洋としているばかりである。太陽の光は、単調だと思っていた雪原に、影という大きなアクセントを与える唯一のものであったと気づかされる。

一月十六日、南極点の二〇キロメートル手前でテントを張った。明日には極点に着くだろう。実感はまったく湧いてこない。このわずか二〇キロメートル先に夢見た終着地・南極点が本当にあるのだろうか？　辺りを見回しても風景は今までの六十六日間とまったく変わらない。雪原はどこまでも果てしなく、私たちのテントはそこにぽつんと建っているだけである。

翌朝ツインオッター機が上空真上を飛ぶ、プワーンという轟音で目が覚めた。パトリオットヒルから私たちを迎えにきた飛行機だ。今日は晴天である。

四本目のマーチが始まってすぐ、時刻は一時三十分、ついに極点の建物が目に入った。見えてからが長い、ということは三人ともカラヒヌナの最終日によく実感している。皆のペースが自然に上がる。

建物は次第に大きくなってくる。あれが、現在の南極点の象徴、アメリカの「アムンセン・スコット基地」のドームだ。いよいよ終着地に着く。二年間に及ぶ長い準備期間のことが自然に脳裏をよぎる。大西の死をはじめ、本当に様々なことがあった。不意に、目頭が熱くなる。

一月十七日、チリ時間十九時二十分、私たちは立ち止まった。

橇の曳き棒を腰から外し、ストックを放し、スキーを脱ぐ。いつもの休憩に入る時の動作と同じだが、違うのはもう二度と私たちが今手放した橇やスキーを身につけることがないということだ。

私たちを真っ先に迎えてくれたのはむろん、迎えのツインオッターに乗ってきた石丸と原田である。

こっけいなナマズ髭を伸ばした石丸が本当に嬉しそうに近づいてきた。私たちは六十七日前に交わした約束を、むろん忘れてはいなかった。だから二人で同時にその言葉を発しながら右手を差し出す。歩き始めるとき、石丸と私はこう約束したのである。「握手は極点で」。私は何物にも代えがたい、無上の幸福を手に入れた。

しばし休んで、差し入れのチョコレートなどを食べたのち、私たちは五人でゆっくりと極点の記念ポールに向かった。

記念ポールの前で、何枚も何枚も写真を撮る。

そして、佐野が肌身離さず持っていた大西宏の遺骨を、彼が夢見た南極点の雪の中に、そっと埋めた。

〈記録概要〉

隊の名称　アンタークティックウォーク南極点探検隊

活動期間　一九九〇年秋～一九九三年春（うち、南極大陸歩行期間は一九九二年十一月十一日～一九九三年一月十六日）

隊の構成　隊長＝吉川謙二（29・北大大学院環境科学研究科）、副隊長＝松原尚之（27・法政大学山岳部ＯＢ）、隊員＝佐野哲也（24・明治大学山岳部ＯＢ）以上歩行調査隊

学術隊員＝石丸聡（27・北海道立地下資源調査所）、原田鉱一郎（25・北海道大学低温科学研究所）、特別顧問＝木崎甲子郎（68・琉球大学名誉教授）以上定着調査隊

行動概要　十一月八日チリ・プンタアレナスから南極大陸パトリオットヒルへ。十一月十一日歩行隊、パトリオットヒル発。十二月十九日歩行隊、ティール山脈基部着。九三年一月十六日歩行隊、南極点到達。一月十八日全員パトリオットヒル帰着。

［註：本探検隊は日本山岳会海外登山基金、平成四年度助成金を受けて実施された］

アマ・ダブラム冬期登攀

青田　浩

いつもながら、峰々との出会いは、偶然性と少しばかりの潜在意識の中に有るみたいだ。

花見には少々早い三月中旬ごろだったと思うが、カモシカスポーツの店長の笹原君と昼飯を一緒に食べ、雑談する途中にアマ・ダブラム峰の話が彼から出たと思う。

「この冬にアマ・ダブラムに行こうと思う」。

アマ・ダブラム、この峰の名を聞けば、稜線を少し歩いているものなら、あの美しい山容を思い浮かべ、少々登攀というものを味わっているものなら、峻厳として弧絶する壁の中に攀じる自身の姿を夢みることが出来るかもしれない。

私も何度となくタンボチェ、チュクン氷河から眺める機会があったが、気品のあるこの峰の頂にいつかは立ってみたいものと心の隅に抱き続けていた。

彼に返す言葉は、すぐに「俺も行くよ」だったと思う。

その時には、秋にＪＡＣのナムチャバルワ峰に登攀メンバーとして参加が決まっていたと思うが、チベットからネパールの峰へ続けて登ることに大きな問題は無かった。

私の中には組織登山隊と、このようなプライベート登山を連続することによって、その時の登山における自己のバランスを保ちたい気持があったのかもしれない。

笹原君との話を続ければ、許可は「カモシカ同人」で取るとのこと。メンバーは、彼の同僚の大野君と「南西稜」を登り、他に各地の岩峰、岩壁をこよなく愛し、単独登攀を続ける山野井君が「西壁」を、もちろん単独で行くかもしれないとのこと、と続く。

私はと言えば、「じゃ、俺は南壁からでも行くか」と、言ってしまったが、南面がどんな形をしているのかも詳しくは分かっていなかった。以前にジェフ・ローが単独で登ったことくらいのことしか思い浮かばない。

このような調子で、冬の穂高に行くような雰囲気で足早に参加を決めてしまったが、この山行の全体像をイメージするにはさほど難しいこともなかった。

要は、許可といった事務的なことは笹原、大野君にまかせ、装備、食糧、必要品を各自持参で現地に遅刻しないように集合とのことだ。

今回の隊長の笹原君、彼とは街では何度も酒は飲んでいるが、一緒にザイルを組んだのは'86冬のプモリ峰の取り付きが最初で最後という有り様だが、この上なく気が合う。他のメンバーも一緒に登ったことは無いが、各自のスタイルで登れる連中だし、無駄のない山行ができる能力を備えている。

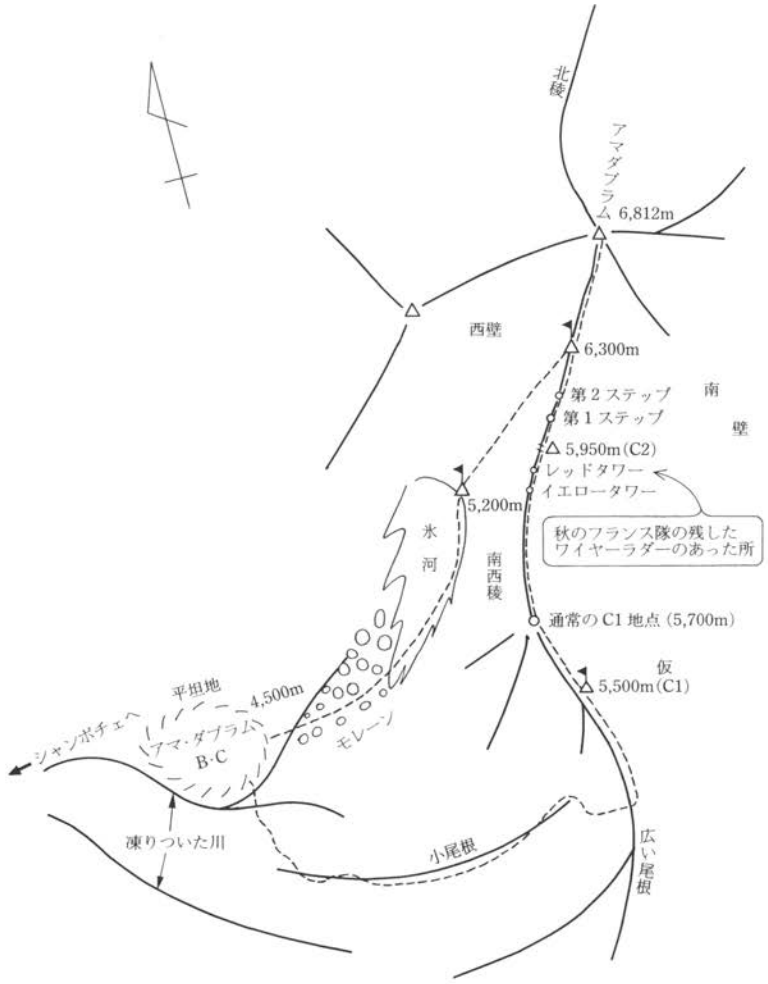
私がチベットに発つ前に、一度、メンバーの顔合わせを兼ねて集まろうかということになったが、話す内容と言っても「十一月二十六日、ナムチェバザールで合流」のみ。合流以前の活動リストには、笹原、大野組は十一月中はアイランドピーク、ロブジェピークの登頂。山野井は同時期にメラ・ピーク西壁に新ルート開拓と記してあった。

ナムチェバザールにこのメンバー全員顔を合わせられることができるかは、その時になってみなければわからない。打ち合わせも二十分くらいで終わり、各自の思い入れを抱き、再会を約束し残暑の東京の街に消えて行った。

※　※　※

ナチャバルワの頂を隊全体で手中におさめ、組織登山の理想的な成功を帰国後味わう時間も持てず、三日間滞在後、私はアマ・ダブラムを登るべくナムチェバザールの坂道を歩いていた。とてつもなく長い登山の直後のため、肉体的には消耗していたが、体調の悪さは私以上に山野井で、メラ・ピーク西壁登攀後の疲労と、風邪のためか、食事も満足に食べられない状態だが、彼も後からこの坂道を登ってくる。彼には六カ月後に控えているガッシャブルム四峰のためにもアマ・ダブラムを登っておくべき課題でもあるのだろう。類い希れな彼の登攀行為には目を見張るものがあるし、次から次へと理想をヒマラヤの壁に持ち続ける彼の姿には本能的に大自然に求めるバランス感覚が強く感じられる。反面、私を含めこのような登攀行為の反復で自己再生、発見、救済、そして生の歓びが感じられるなら生涯、形こそ変われ継続されてもなんら不思議さ、不自然さはないであろう。

予定のナムチェに全員合流したのは三日遅れの十一月二十九日だった。ベースキャンプに入る途中のディンボチェで大雪のため不安な停滞をさせられるが、十二月二日、ベースに入った時には、すでにスイス、ベルギー、韓国の三隊が登山活動中であり、我々は最後のBC（四五〇〇㍍）入りであり、聞くところによればスイス隊は昨日一日に登頂を終えていたとのこと、例によって十一月中に活動を開始していたのだろう。冬期登山開始が十二月一日とあり、このような例は過去にも数多くあったが、登山規則の違反と言う以前に登る側のポリシーの問題だろう。しかし、この五隊が同時期にスタートしたなら、混雑し、危険きまわりないことも大きな問題でもある。こうなったら現実は現実として、楽な気持で登るしかない。最後のBC入り新参者として、各隊に挨拶に出かけるが、特に韓国隊は大変に親切でお茶に食事にともてなしてくれ、ここの韓国料理



○山野井　　12/5 西壁基部 5,200m ビバーク
　　6 南 西 稜 6,300m　〃
　　7　〃　5,700m　〃
○笹原，大野　12/5 南西稜末端　通常 C1 の下 (5,500m) キャンプ
　　6 南 西 稜 5,950m キャンプ
　　7　〃

は抜群に美味しく、それ以来現地食のダルバートしかないわが隊は自然と食事時になると彼らのテントで膝を並べることになったのだった。

明けて十二月三日、遅めの朝食を摂って私は南壁の偵察に行くことにする。他のメンバーの笹原、大野組は登攀前の食糧、装備をチェックしているし、山野井は目の前にそびえる西壁を双眼鏡で入念に観察を始めている。冬期のせいか、ダブル・アックスで登れるルートも多くの岩が露出しているので、少々難問みたいだ。彼がどう解きほぐすか、偵察から帰る夕方ごろには答が出ているだろう。

ゆっくりと裏山を散歩するように高度を上げる。一カ月ほど前にナムチャバルワに登っているので高度順化の心配も無いし、冬の寒さもこれといって気にもならない。ゆっくりと言っても、先に登っている韓国隊員などの半分のペースで高度を上げることができた。

後方に岩峰、チャムラン、右側に名峰、カンテが美しく輝いて全容をみせ、谷間に転々と集落を覗き見ることができる。ひときわ大きい建物はタンボチェ寺院だろうか。この登っているルートは南西稜のC1（五五〇〇㍍）へと通じているため、左側に西壁をよく眺めることができる。水筒、行動食と少々の緊張感をザックにハイキング気分でいれるこの解放感は幸せ以外のなにものでもない。空を見上げれば雲の流れもゆったりで、まだまだ怖いジェット・ストリームも見あたらない。私にとって、マナスル、プモリに次いでの冬のヒマラヤ。ここにも申し分のない登攀空間が用意されている。さりげなく風にのってBGMがそよぐとしたなら、どんな音楽が似合うのだろうか。登る側で、嗜好や意識も大きく変わることだろう。

C1が見えるころには、予定する南壁も少しずつ姿を見せてくれる。深く切れ落ちている数多くのルンゼには岩の地肌が表われ、全容を眺めた瞬間には、もう行き詰まってしまう。危険の率があまりにも高すぎてしまう。我慢してここで考えてもしかたがあるまい。もう足はBCに向かっていた。

※　※　※

十一月五日、快晴。まず八時三十分山野井が西壁に向けて出発する。彼は観察した結果、唯一抜けられるラインを解き明かしたようだ。「右のクロワールからロックバンドを越え、ベルグラ部分を通り、ヒマラヤヒダを登って南西稜の六三〇〇㍍に抜ける、新ルート」でもちろんワンプッシュで登り、登りだしたら退却が難しく、南西稜上部に出るしかない。今夜は西壁基部でひとり朝を待ち続けるビヴァークとなることだろう。黙々と歩む彼の姿が小さくなり、氷河の中に入るころには笹原・大野組も十時三十分ごろ南西稜に向け出発。私はと言えば、壁の状態が悪い南壁を、疑問も無く南西稜に変更する。昼食を食べ、西壁の山野井を双眼鏡で確認し、南西稜の取り付きC1に向け出発する。背には、三〇㌔のザックの中に二日分の食糧と六㍉ロープ一本、最小限の登攀具、シュラフカバー、ツェルト。例によって今日はルート上困難な所は無く、三時間も登れば、C1、五七〇〇㍍地点に着く。笹原組は少し下の所でキャンプに入っている。C1には韓国隊（大学山岳部）がキャンプしていて、彼たちの好意で夕食の世話になる。月明かりの中、星でも眺めての耐えるビヴァークよりも幸せなことは確かだった。

十二月六日、快晴。今日中に頂上に登りここに帰るつもりで六時

三十分、C1を後にする。

右手に南壁、左手に西壁を持つ南西稜は技術的にも岩壁、ミックス、雪稜とバラエティー豊かなルートで本来あるが、予想していた以上に過去の登山隊のフィックス・ロープが目の前に現われ登攀の快感と興味を大きく変えてくれる。もちろん使用しなくていい部分、古くて使用できない代物は触らずにどんどんと高度を上げる。C2手前の垂直二〇〇㍍ほどのレッド・タワーには秋のフランス隊の残したワイヤーラダーまで残っている。残置した食糧、フィックス・ロープなどは回収しない限りゴミとして永久に残ってしまう。フィックス・ロープを大量に使用するなら、使用しなくて済む峰に変えた方がいいのにと思ってしまう。私も過去の経験からも、フィックス・ロープを使用したなら登れない者も登れてしまうのをよく知っている。国内と同じ流れでヒマラヤを登ればいいことなのだと思うが。

二時間余りでC2（五九五〇㍍）を越えてしまう。西壁をのぞき込んで見るが山野井の姿は無い。太陽もよくあたり無風状態の中スピードを鈍らせることもなくC1から八時間少し過ぎ、私はそれほどの苦労もなくアマ・ダブラムの頂に立っていた。反対側で今まで姿を隠していた、ローツェ、エベレスト、マカルー、チベットの無数の峰々が現れる。パノラマの写真を撮り、暖かく迎えてくれるBCに向かい早ばやと降りることにする。夕暮れせまる頃、笹原・大野組に六〇〇〇㍍近くで出会う。彼らは今夜ここをキャンプ地とするのだろう。私はと言えば、C1手前で日没のためビヴァークすることになる。山野井は、六三〇〇㍍で西壁から南西稜に抜け出て腰掛けのこれまたビヴァークだったと聞く。この夜は月明かりの中で孤独を楽しむしかない。朝が来れば危険の無い、幸せなBCが待っているのだ。

明けて、十二月八日私はBCに下り、午前中は山野井が、続き午後に笹原・大野組が登頂することができた。

結果的には、青田は南西稜をC1からのワンデイ・アッセント、一日遅れて笹原・大野組もアルパインスタイルで登頂、山野井は西壁に新ルートを冬期単独初登頂と言うぐあいに予定通りに行うことができた。BC設営から撤収まで八日間の全員登頂であり、遅れて入山しながらも一番早い下山にかかる。四日ぶりに合う顔には、喜びと、安らぎが漂い、そろそろジェット・ストリームの始まりのすじ雲がうずまいているアマ・ダブラムに感謝しつつ、十二月九日BCを後にする。

〈記録概要〉

隊の名称　'92カモシカ同人冬期アマ・ダブラム登山隊

活動期間　一九九二年十二月

隊の構成　隊長＝笹原芳樹（34）、隊員＝青田浩（34）・大野敏男（27）・山野井泰史（27）

行動概要

十一月二十九日ナムチェバザールに全員集合、十二月二日BC入り、十二月五日登攀開始

- 青田・南西稜からの単独登頂（C1ワンデイ・アッセント、登山二日、下山一日）
- 笹原・大野　南西稜から登頂（登山三日、下山一日）
- 山野井　西壁新ルート冬期単独初登頂（登山三日、下山一日）十二月九日BC撤収

報　告
『岩と雪』157号

チョモランマ北東稜(※1)

一九九二年日本・カザフスタン友好登山隊の記録

大宮　求

はじめに

一九九二年の春期、私たちはカザフスタンと合同で、チョモランマのルートの中でも、残り少ない未登ルートである北東稜からの完登を目指し、登頂を試みた。

このルートは一九八二年春、英国のボニントン隊により開拓されたルートで、既にこの時八二五〇㍍付近の第二ピナクル付近まで達していたが、ピーター・ボードマンとジョー・タスカーの二名は遂に戻らなかった。

その後一九八五年春には、スコットランドのマルカム・ダフ隊、八六年秋には、ブラミー・ストークスに率いられた英国隊が、このルートを登ったが、何れもこの岩峰群(ピナクル)(※2)を越えることができなかった。

一九八八年夏に再挙をはかったストークス隊の、ラッセル・ブライズとハリー・テーラーの二名は遂に岩稜帯を越えて、頂上稜線へのルートを開拓したが、八月六日北稜ノーマル・ルートとのジャンクション（八四一二㍍）でビバークの夜から降雪が続き、ノーマルルートから下山している。

さらに一九九一年春には前記テーラー（英）とブライズ（NZ）は国際登山隊を組織して、五月十六日にジャンクションに達しているが、これから先へ進めず、ルートは未登のままで残されていた。

今回合同登山のパートナーとなった、カザフスタン・チームは、旧ソ連邦の中でも強力なメンバー（前年の冬期ハンテンリ登山競走の一位から四位まで）で、困難な国情にもかかわらず、日本側チームが使用する予定で依頼した、高所アタック用、チタン合金製の新型（超小型）酸素ボンベと、これに使用する酸素マスクのセットを用意して参加してくれた。一方日本側チームは、中国登山協会に支払う合同登山隊の費用全部と、合同登山隊の共同装備・食糧・燃料と、ネパールから呼んだシェルパ三名の経費を負担した。



チョモランマ北東稜（貫田宗男氏撮影）

Qomolanma North-East ridge

計画と準備

一九八八年夏、その年の春に行われた中国・ネパール・日本三国友好チョモランマ登山隊に参加して帰国した直後、大宮個人の発案ではじまったこの計画は、当初は、大宮の所属する山学同志会の会員のみで構成してでかける予定であった。

しかし、一九八〇年のカンチェンジュンガ、八二年のマカルー、八三年のエベレストと会の遠征を送り出したあとは、後につづく若手メンバーが、充分育っているとはいえず、ネパール、インド方面の六千㍍峰を数回経験した会員が四、五人いる程度であった。しかも、今回のチョモランマのように、一人あたりの個人負担金が、最低でも百五十万円くらい必要となると、毎週池袋駅前のコーヒー屋で開いていたチョモランマ・ミーティングにも、二、三週出席しても個人負担金の額が大きいことがわかると、足が遠のくという状態であった。何とか工夫せねばと考えていた矢先、八九年の十二月頃、旅行代理店に勤務している、武川俊二氏が、九〇年夏の「カザフスタン・ハンテンリ・インターナショナルキャンプ」の広報活動のために、強力なアルピニストでもある担当者が、通訳つきで、九〇年二月に来日予定だと言うニュースを持ってきた。たまたま、時期も良かったので、日本山岳協会の定例である、八王子の大学セミナーハウスにおける、海外登山技術研究会で講演していただける事になった。会議が終わった後で、カザフスタンからゲスト・スピーカーとして来日したカズベク・バリエフ氏（一九八二年のエベレスト南西壁からの登頂者）に、九一年春予定の私どものチョモランマ隊にメンバーを何人か派遣してもらえないかと相談すると、二つ返事で

OKしてくれた。このようにして登るためのメンバーは確保できたが、問題の資金の方は依然として充分とは言えなかった。そうこうしているうちに、九〇年の秋には、中国登山協会より、最終版に近い予算書が届いた。この時まで残っていた日本人メンバーの数でこの総額を割ってみると、何と一人あたり三百万円を優に越える額の個人負担金となることがわかった。

しっかりした資金のある派遣母体を持たない私たちは、このため九一年春の計画を一年延期して、再構築せざるを得なくなった。

そこで、一歩一歩ステップを踏むように、まず、東京都山岳連盟の名義後援を得、その後日本山岳協会にも後援を依頼し、朝日新聞社からも名義後援をいただくことができた。又、一九九一年度より発足したスポーツ振興基金による助成制度にも日本山岳協会経由で申請することができた。

幸い「スポーツ振興基金」からは、対象の山が世界最高峰であり、ルートも難度の高い未完登の北東稜からで、もし成功すればその成果は国際的にも高く評価されるものであるとして、卓越スポーツの分野での助成金の交付を受けることができた。

しかし、私たちの隊は、三月末と四月一日に切りかわる会計年度をまたがっており、その申請が一九九二年度の申請であったため、助成金の支給は、登山隊出発後となることがわかった。このため登山隊は一千万円近い外部からの借入金で、やっと出発することができた。

登山報告

日本・カザフ各四名からなる合同登山隊とはいっても、日本側の隊員でヒマラヤの高所登山の経験があるのは私一人であり、実質的にはカザフスタン四名、日本一名の五人からなる登山隊と同じようなものであった。

しかし、幸いなことにカトマンズのエージェントに任せた三名のシェルパの人選がよかったこともあり、高所で必要な八名のメンバーを揃えることができた。

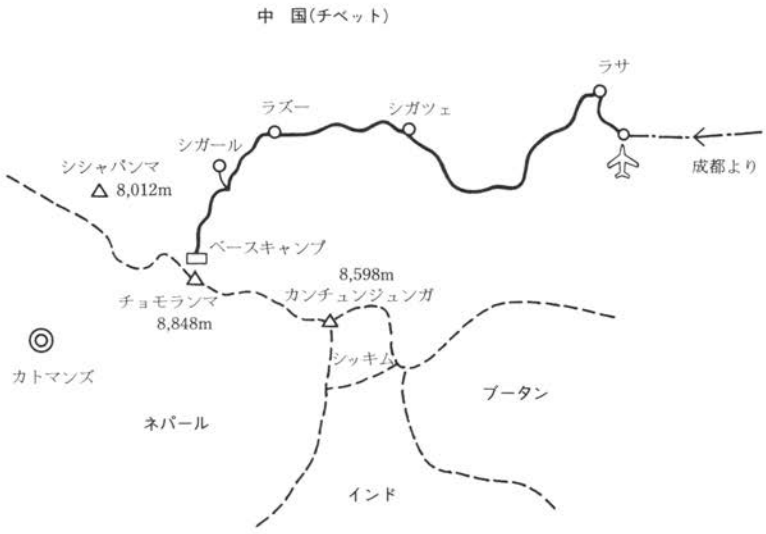
三月二十六日、全員揃って成田を出発した一行は、北京経由で、成都に至り、ここでカザフスタンの四名と合流。ついでラサ経由シガールにて、ネパールからきた三名のシェルパと合流した後、四月三日には、ロンブクのベースキャンプ（五一〇〇㍍）入りすることができた。

BCから上のルートの開拓は、シェルパの協力のもとカザフ・チームが主として担当して、東ロンブク氷河上にキャンプをすすめ、四月六日C1（五五〇〇㍍）、七日C2（六〇〇〇㍍）、八日にはアドバンスベース（ABC）となるC3を六五〇〇㍍の地点に建設した。

ABCからは、ラクパ・ラ[※3]を経て北東稜上にルートをのばし、四月十五日にはカザフ・チームによりC4（七〇五〇㍍）を設営、さらに四月十八日には七九九〇㍍のピークの上にC5を設営した。この間、四〇〇〇㍍近いフィックスド・ロープがつけられ、C4、C5には強風を避けて雪洞が掘られた。

このようにBC入りしてから三週間たらずの間にカザフ・チームはラクパ・ラより八一〇〇㍍までのルート工作を一気にやってのけた。

入山アプローチルート



更にカザフ・チームは四月二十三日から三日間ＢＣで休養をとった後、再びＣ５に上がり、四月三十日、五月一日の両日を費やして、八二九〇㍍までルート工作を行い、頂上アタック前の休養のため、再びＢＣへ下った。

五月初旬に、下山してきたカザフ・チームと今後の計画についてのミーティングを行った。彼らは、次の段階で、ルート工作を行いながらＣ６へ入り、日本チームの前にアタックしたいと申し入れてきた。

日本チームの高所順化の具合からすると、彼らの申し入れを受けるしかなかったが、その代わりにカザフ・チームのあとは、四日遅れで日本チームがつづき、かつそのサポートをカザフがするということで話が決まった。

しかし、いかに強力なカザフスタンとネパール・シェルパといえども、生身の人間であり、あまりにも早く上部へキャンプの建設が進んだので、四月末には、ネパールのシェルパ一人、五月初めにはカザフスタンのリーダー格の一人が肺水腫の症状をおこしてダウンしてしまった。困ったことに、カザフスタン・チームは、リーダーがザンムーへ下り、さらにコダリの町まで治療のため、当番車で下山してしまったので、〝彼が治って戻って来るまで我々三人は先に登るような事はできない〟といい出した。カザフスタン・チームは鉄の団結ですばらしいのだが、シェルパや、中国人スタッフも含めて、トータルに判断しなくてはならないゼネラルリーダーをまかされた私は、丁度、四月中の強風もおさまって、五月初旬の好天の周期が訪れかけており、さあこれからいよいよ最終アタックキャンプ

の建設だと予定していた時なので困ってしまった。

結局五月十二日になって上部ルート工作が再開され、五月十六日岩稜帯を突破し八三六〇㍍にC6のキャンプを建設することができた。しかし、運の悪い事に翌十七日は、晴れてはいたが、強風のためカザフスタンメンバーは窮屈な二人用夏テントで停滞せざるをえず、明日風がやめばアタックすると言って無酸素でねばっていたが、彼等も五月十八日には、食糧がなくなり下山せざるを得なくなり、フリシチャーティとスヴィガの二人は北東稜を下り、他の二名はノースコル経由途中アメリカ隊テントで宿泊後ABCへ下った。しかし食糧、燃料ともにほとんどなくなるまでアタックキャンプでねばる彼らの執念とハングリー精神には感心させられた。

カザフスタン・チームによる第一次アタックと入れかわりに、いよいよ日本チームの出番がきた。日本出発前より決めていたクライミング・メンバー四人のうち、高所順化がうまくいかず、カザフ・チームと前後して、ザンムー、コダリまで治療に下山していた谷口隊員を除く、大宮、星、小久保の三名が、日本人サポートメンバーとシェルパ三人の支援を受けて、五月十四日前進基地である東ロンブク氷河源頭のABCを出発した。一日目が、北東稜をラクパ・ラより五〇メートルのフィックスを約30ピッチ上がったところの雪洞キャンプC4である。ここで強風のため三日間とじこめられた。四日目の五月十九日の朝、晴れた中を七〇五〇㍍のC4をあとにする。午後になると西風が強くなってきて、シェルパとともに、七九九〇㍍のC5にころがり込んだときには、目出し帽ごしに右頬が軽い凍傷になっていた。小久保隊員はコンディション悪く七二〇〇㍍地点より引き返した。

結局、この日八〇〇〇㍍に近いC5入りをしたのはシェルパ三人と、日本人は大宮、星の二名だけであった。

五月二十一日、C5よりシェルパともども出発したが、かなり強い西風でシェルパ（プルバ）一人と我々日本人二名はC5に戻った。十五分くらい先に出たシェルパ二人は、早く荷上げを最終キャンプに届けてノーマルルートで下山したいといい、良くはないコンディションの中をC6（八三六〇㍍）まで登った。C5に残ったシェルパ一人と星隊員は睡眠用酸素を使ったが、私は使用しなかった。翌二十二日、風もおさまったので、一時間ほどシェルパにサポートしたもらったあと酸素を使用し、最終キャンプへ向かった。

斜度六〇度以上で、かつ両側がスパッと切れているナイフリッジ上をユマールを使っての登高はかなりシビアな登攀だった。しかし超軽量酸素ボンベのおかげて、かなりのスピードで小ピナクルをいくつも突破して行けた。

しかし午後三時半ごろ降雪もひどくなり、ここしかビバークできないという所を見つけビバークに入る。次の日（五月二十三日）星隊員先行でC6に向けてスタートし、一〇㍍ほど行った所で、彼は欧米人らしい遺体[※4]をみつけ指をさしていた（帰国後ピーター・ボードマン氏と判明した）。夕方になり、登高スピードの落ちた私に対し、星隊員は「先にC6まで行って余裕があれば酸素ボンベを持って戻ってきますよ」と云って先行する。私は少し登って小さなピナクルの横でビバーク。

二十四日、私が数ピッチをユマーリングで行くと、昨日先行した

星隊員のザックが、トラバース・ルートの終点の所にキチンとパッキングされたまま岩にもたせかけてある。少しすると、後よりカザフスタンメンバー四人がコールを送りながら登ってきた。

この時はわからなかったが、後で知ったところによると、カザフ・チームの四人は、二十三日十九時にC4に到着して、大宮、星の二名が未だC6に到着してないことを知り、直ちに救助態勢に入った。二十二時三十分、ヘッドランプをつけてC5へ向かい、夜を徹して登り、翌朝五時三十分にC5に到着。ここでお茶を飲み、二時間程休憩しただけで、再び登攀を開始。こうして午後二時、大宮に追いついたのだった。

この時点では、私自身、八〇〇〇㍍の高所で無酸素でビバークした後であったので、疲労困憊していたが、救助にかけつけてくれたカザフのメンバーも夜通し歩いてきたので同様に疲労していた。こうしてカザフ四人の真ん中に入れてもらい、バテバテになりながらも、C6（八三六〇㍍ピナクル直下）に入ることができた。

期待していたC6には星隊員の姿は見えなかった。安否を気にしたもののどうすることもできなかった。

五月二十五日は朝から、シンシンと雪が降っていた。好天なら私にだれか一人つけてノーマル・ルートを下山させて、彼らはアタックにでかけることもできたかも知れないが、それほど好天のきざしも見えないので、五人でノーマル・ルートより下山することになった。途中アメリカ隊のC5（七五〇〇㍍）で星隊員が中にいないかと二張りあけてみたが無人であった。

私の歩きが遅かったせいで、この日はABCまで行きつけず、五人はドイツ隊の好意に甘え、ノース・コル上にあるドイツ隊のC4に泊まることにした。

五月二十六日、ノース・コルより昼すぎにABCに下山した。フランクフルトから来ていたドイツ隊のドクターが親切に点滴で凍傷の治療をしてくれた。

しかし星隊員の姿はどこにもなかった。こうして私にとっての一縷の望みもたたれ、哀しい現実を認めざるを得なかった。

五月二十七日、一人ABCに残っていてくれた日本人のサポートメンバーの加藤隊員と、ABCをきれいに撤収し、迎えのヤクにまたがり、夜おそくベースキャンプに戻った。

ベースキャンプ撤収が二日遅れていたので五月二十八日は早朝よりベースキャンプを撤収し、シガールをとばしシガツェまでおりた。五月二十九日にはラサまで戻り、そこでやっと日本へ連絡をとる事ができた。

あとがき

今回は、結果的には、山学同志会の仲間である星隊員を滑落事故で失う事になり、大変残念なかたちで終了したが、チョモランマに自分の意志で挑戦したいという、五年ごしの夢は関係者ならびに参加隊員の協力により実現する事ができた。

これからのチョモランマ北東稜の課題としては、八三六〇㍍の肩（ショルダー）までは、今回の私たちを含めて三隊が到達しているが、七六〇〇㍍から七九〇〇㍍までの壁の部分と、八一〇〇㍍からショルダーまでのナイフリッジ部分、プラス、登り、下り、トラバースありのピナクルの部分が、高難度のクライミング技術を要するた

め、チョモランマ本峰頂上までの完登を目ざすためには、チーム編成において、まず高所（八〇〇〇㍍以上）においてルート工作、それに荷上げの能力がある隊員を、五人から六人そろえないと頂上までは届かないと考えられる。その他には運の問題ではあるが、ノース・コルごしの強烈な北風の対策があげられる。我々のチームは、テントを多めに持参していたが、結局、強風対策を考慮して雪洞になった。

今回の合同隊で、カザフ・チームは二度のアタックを敢行し、一度目は強風にはばまれ、二回目は、アタック前より日本隊のサポートにまわり、チャンスがあれば彼ら自身もアタックに加わるという、彼ら自らの申し出であったが、日本チームの事故により、彼らは二回目のアタックを中止し、日本チームの捜索、レスキュー活動に全力であたってくれた。このようにカザフスタン・チームはもちろんのこと、登頂時に後方支援を担当されたサポート隊員各位、そしてテントを借用する等お世話になったドイツ隊、アメリカ隊には、合同隊々長として、又、大宮個人としても深甚な謝意を表したいと思います。

最後に、いつの日か、実力と幸運に恵まれたチームによって、北東稜が頂上まで完登される日が来ることを信じて報告を終わります。

〈記録概要〉

隊の名称　日本・カザフスタン友好チョモランマ登山隊一九九二

活動期間　一九九二年三月～五月

目　的　チョモランマ（八八四八㍍）の北東稜よりの初完登

隊の構成

総隊長＝斉藤一男（66）、隊長＝大宮求（44）、隊員＝星学（28）・谷口洋一郎（35）・小久保壮（22）、サポート隊員＝楮木康之（24）・加藤隆次（30）・土屋一廣（59）、ベースキャンプキーパー＝森井寿美子（38）・大宮敏彦（36）、カメラマン＝市原基（43）

カザフスタン隊員＝ワレリー・フリシチャーティ（40）、ウラジミール・スヴィガ（38）、ユーリ・モイセーエフ（38）、ヴィクトル・デディ（32）

高所ポーター＝ナワン・サキャ（44）、ナワン・プルバ（24）、ダワ・チリン（21）

連絡官＝劉大義

行動概要

三月二十六日、全員そろって成田より出発。北京経由で、成都にてカザフスタン四名と合流。ラサ経由、シガールにてシェルパ三名と合流後、四月三日ロンブクベースキャンプ入り。四月六日、五五〇〇㍍地点にC1建設。四月七日、六〇〇〇㍍地点にC2建設。四月八日、六五〇〇㍍地点にABC（C3）を建設。四月十五日、七〇五〇㍍地点に（C4）建設。四月十八日（北東稜上）七九九〇㍍地点に（C5）建設。五月十六日、八三六〇㍍地点に（最終キャンプ）C6建設。カザフスタンとシェルパに十日遅れて日本隊も八三六〇㍍地点に達するが、強風と星隊員の事故により、五月二十五日、登頂断念、登山活動中止を決定。五月二十八日ベースキャンプ撤収。

報　告

『日本・カザフスタン友好チョモランマ登山隊（一九九

二）報告書』
"Everest's Northeast Ridge", The American Alpine Journal 1993, pp. 15～18.

〔編者注〕

(1)本稿のタイトルは原文では、「チョモランマ東北東稜」となっていたが、最近の外国隊はNortheast Ridgeを採用しているケースが多いので、著者の了承を得て、北東稜に統一させてもらった。

即ち地図上で見てもわかる通り、この尾根は文字通り北東稜そのものであり、北東稜の肩（ショルダー）から、ノース・コルへ続くノーマル・ルートは、北東稜の支尾根である。

従来、ノースコル経由のルートを北東稜と称し、ラピュー・ラから頂上につづく尾根のことを東北東稜と称していた。しかし近年、ナショナル・ジオグラフィック・ソサエティ発行のエベレスト周辺図（一・五万分の一及び五万分の一）で東北東稜がNortheast Ridgeと標記されるようになってからは、一般的にこれに従うようになったので、本稿でも北東稜を採用することにした。

(2)北東稜の肩（ショルダー）につづく岩稜帯（英文ではPinacles）は記録上では、第一ピナクルから第三ピナクルまで登場してくるが、その他にも小ピナクルもあり、明確には区分し難いので、地図上では明記を避けた。

(3)ラクパ・ラ

従来の地図でRaphu La（六五一〇㍍）と標記されている地名と同じ場所である。著者によれば、チベット人の発音は、その中間にあるとのことである。本稿では著者の標記を尊重することにした。

(4)八二五〇㍍のピナクル付近で発見された遺体の写真は、五月上旬、カザフのスヴィガ隊員が撮影し、その鑑定をボニントン氏等に依頼していが、写真に写っている小さなバッジのロゴ（スイスのレイザンにある国際登山学校のもの）から、ボードマン隊員（彼はこの学校の役員をしている）であることが確認された。（注）ヒマラヤンクラブ・ニュースレター46号36頁参照。

(5)近着の英国の登山雑誌High Magazineの一九九三年十月号のMountain INFO欄によれば、一九九三年八月三日、キルギスタンのハンテンリ（七〇一〇㍍）において、カザフスタンのリーダーであったフリシチャーティ氏（41）は同僚のイリア・ロディス氏とともに英国人を案内して、セミノフスキー氷河を直登中、巨大な氷河雪崩（総量一万㌧）に遭い、英国のクライマー、ロバート・ゲイ、ポール・ウエスト両氏とともに遭難死された。ここに生前の日本の登山隊に寄せられたご厚誼に感謝し、謹んで哀悼の意を表します。

北大山岳部の登山——戦前の回想を主として——

朝比奈英三
橋本誠二

北海道大学山岳部（以下北大山岳部）は非常に恵まれた環境にあったおかげで、一九二六（昭和元）年の創立以来きわめて順調に発展することができた。恵まれた環境とは次の様なものである。

北海道は北緯四一・二―四五・三度という北半球ではほぼ中間に位置するにもかかわらず、その気候的特性のため、冬季には本州に比べてはるかに寒冷で氷雪に富み、また地形的にも日高山脈に数多くの氷河地形を残し、北海道内（以下道内）の二〇〇〇㍍内外の山々が、日本アルプスの三〇〇〇㍍級の山々に匹敵する高級の登山対象となっている。また生物学的にみると、これらの山の植物相は、本州に比べて八〇〇～一〇〇〇㍍位高い場所のものに相当している。たとえば本州中部山岳では、ダケカンバ帯がハイマツ等の高山帯に移る高度が二四〇〇㍍内外であるのに対し、道内では一二〇〇～一六〇〇㍍である。つまり北海道の山は高さこそ低いが、日本の高山としての条件を充分にそなえたものが多いのである。さらに特筆すべきことは、開発がおくれていたお陰で、本州よりもはるかに豊かな自然がこれらの山域に残されている事実である。

このように優れた登山対象があるにもかかわらず、戦前には本州の各大学山岳部や登山団体で、大正時代から昭和初期にかけての慶応大学の数人の人々を除けば、北海道の山を目指す者はほとんどなかった。従って北大山岳部は、日本国土の一二㌫（東北地方プラス新潟県より大）を占める島の主だった山々の初登頂のほとんどを行い、特に冬期のそれは完全に自分たちで果たしてきたのである。このような自然環境にあったことの他に、北大山岳部は、北大という大学が戦前は自然科学系の学部だけで構成されていたということもあって、本州の大学の山岳部に比べて何か変わったところのある存在であったように見られている。もしもそのようなものがあるとすれば、それに留意して記述し、できればそのことをもたらした要因にふれてみたいと思う。以下数多くの登山記録を述べるが、特にことわった場合を除いて、すべて北大山岳部もしくはその前身である北大スキー部山班などのメンバーによるものである。

本文の目的からして戦後の記述はごく簡略にし、一九六〇（昭和三十五）年ごろまでの主な登山のいくつかを挙げるに止めた。また、チャムラン遠征以後の数多くの海外登山については、その都度詳細な報告書が出版され、『山岳』誌上にも発表されているのですべて省略した。戦後の北大山岳部について興味をもたれる読者は次の文

献を参照して頂ければ幸いである。

北大山岳部々報　第八号　一九五九年
北大山岳部々報　第九号　一九六二年
北大山岳部々報　第一〇号　一九六六年
北大山岳部々報　第一一号　一九七二年
北大山岳部々報　第一二号　一九八四年
北大山岳部々報　第一三号　一九九〇年
北大山岳部五十周年記念誌　一九七八年
以上北大山岳部発行



山岳史懇談会で語る朝比奈氏（右）と橋本氏

北海道大学西ネパール遠征隊報告
一九六四年　同遠征隊事務局発行
チャムラン　一九六五
ベースボールマガジン社発行
北大山岳部一九七八カラコルム遠征隊報告
北大山岳部発行
カラコルム（シュマリクンヤンチッシュ）
登山報告　一九八一年
バルンツェ厳冬期登頂報告　一九八二年
スダルシャンパルバート登頂報告
一九八四年
ダウラギリⅠ峰厳冬期初登頂報告書
一九八五年
もうひとつのヒムルンヒマール一九九三年
以上北大山の会発行

山岳部創立以前

周知のようにわが国の近代的登山は明治中期に始められ、一九〇五（明治三十八）年に日本山岳会が創立された。当時はまず夏山登山が盛んになり、大正初期の十年間に本州の各大学の山岳部またはその前身となるものが創立された。北大でも一九一二（明治四十五）年に北大スキー部が創立された。このスキー部には、一九二〇年頃になるとスキー競技に専念する人々が多くなり、以後次第にスキー部の中心となってゆくのであるが、それまではスキー登山を目的とする部員が多く、さかんに冬山を登り、創立の翌一九一三年十二月三十一日には荒木忠郎、柳沢秀雄、角倉邦彦の三名が人夫三名と富士山に登頂している。このときスキー登行は二合八勺までで、これより上はアイゼンで登っている。その後数年の間に道内の山々の冬期登頂が次々と行われ、夏山登山の隆盛期以前に冬のスキー登山が先行する感があった。この理由として、北海道には登山路のあった山がきわめて少ないこと、またこれらの山の多くは、約一五〇〇メートル以下の山腹にチシマザサが密生し、積雪期以外にこの中を登行することが非常に困難であったことなどがあげられる。

余談ではあるがわが国で始めて西欧型の山小屋が建てられたのは札幌付近で、一九二六（大正十五）年パラダイス・ヒュッテ、その翌年ヘルベチア・ヒュッテが建ち、これらの小屋に泊られた秩父宮の御希望に副って帝室林野局が空沼ヒュッテを建てた

といわれている。これらのヒュッテを根拠地として札幌近郊のスキーツアーは大いに普及した。

一九二〇（大正九）年五月北大予科の恵迪寮（学生寮）に旅行部が創立され、田口鎮雄、佐々木政吉らを中心にして夏山登山が盛んになっていった。この当時学習院で松方三郎らと共に活発な登山活動をしていた板倉勝宣が北大に転学し、スキー部に入ったことも、当時の北大の登山グループに強い影響を与えた。同じころ京都帝国大学に農学部ができ、北大のスキー部長であった並河功教授と、スキー部ＯＢの木原均助教授が京大に移った。またこの一九二〇年は、北海道の自然にひかれた大島亮吉ら慶応大学山岳部のメンバーが、トムラウシ山―石狩岳を訪れた記憶されるべき年でもあった。当時は道内の山岳地帯の精密な地図はほとんどなかった（五万分の一陸測地形図の旭岳は一九二四年初めて発行）ので、北海道の中央部で最も奥地にある石狩岳―ユニ石狩岳―ユニ石狩川のような全く未知のルートを歩くのは大きな冒険と思われ、北大のその後の登山にも少なからぬ刺戟となった。「大島さんらが東京からこの山行に向ったとき、彼らはヨーロッパアルプスを登っていた英国の登山家たちが人跡未踏のコーカサスやカナダの山に遠征したのと同じような夢をえがき、そしてその成功に大きな喜を感じたにちがいない」（伊藤秀五郎、『山とスキー』第九九・一〇〇合併号、九頁、一九三〇）。

一九二一（大正十）年四月北大予科の桜星会（校友会）にも旅行部ができ、前年にできた恵迪寮旅行部と一体になって夏冬を問わず登山を行った。またこの年六月加納一郎、板橋敬一らが中心となって「山とスキーの会」が設立され、月刊誌『山とスキー』を創刊した。編集にはこの二人の他に中野誠一、松川五郎、板倉勝宣らが参加した。毎号五〇〇部、一部三〇銭で、一九三〇年六月まで九年間つづいたが、一〇〇号で廃刊となった。当時登山の専門誌はほとんどなかったので、この雑誌はわが国の登山者に非常に歓迎された。執筆者には北大以外の人々も多く、槇有恒、松方三郎、大島亮吉、成瀬岩雄、麻生武治、武田久吉等の名も見ることができる。特に大島は数十篇を寄稿している。雑誌の内容は登山の他スキー技術の研究や指導も多かった。この「山とスキーの会」は一九二二年十月に槇有恒氏を札幌に招いて、アイガー東山稜登山の講演会を開いた。またこの翌年と翌々年にはハンネス・シュナイダーの映画「スキーの驚異」の映写会を札幌で開催した。

一九二二（大正十一）年一月には北海道の最高峰大雪山の旭岳が西麓のユコマンベツ（現在の旭岳温泉）から、スキー部の板倉、加納、松川、板橋らにより冬期として初めて登頂され、三月には黒岳が同じメンバーにより登られている。まだアザラシ皮が使用されなかった時代のスキー登山としては刮目すべき成果である。

一九二三年七月、田口鎮雄、佐々木政吉、藤江永次ら恵迪寮旅行部のメンバーは、帯広から音更川を遡行して石狩岳に登り石狩川に下った。また日高山脈では最初の夏山登頂の記録として、メムロ岳が松川五郎らに登られた。彼らの計画では稜線を縦走してポロシリ岳に達する予定であったが、山稜のブッシュに阻まれ、わずかに日高山脈主稜の北端に立っただけで終った。一九二

四年一月には十勝岳が小森五作、藤江永次、伊藤秀五郎、田口鎮雄、佐々木政吉らによって厳冬期初めて登られ、七月には小森五作、宮沢精、須藤宣之助らが大雪山から忠別岳のヌタップヤンベツを下り石狩岳に登った。一九二五年三月には前記の伊藤、佐々木、須藤、小森、宮沢と田中二郎、高杉正樹、和辻広樹らにより黒岳小屋を根拠地として大雪山の主な山頂のほとんどが登られ、この夏にはピパイロ岳よりトッタベツ岳―ポロシリ岳の初登頂すなわち日高山脈で最高の尾根の縦走が、前記の小森、伊藤、和辻らと永井政治によって行われた。またこの夏慶応大山岳部の大賀道昺らは十勝川より十勝岳に登り、八木橋豊吉らはトムラウシ山より十勝川に下っている。

一九二六（大正十五）年には一月に暑寒別岳、二月に夕張岳がそれぞれ冬期初めて登られた。この頃から北大の登山者たちも本州に脚をのばし、この年三―四月には槍ヶ岳と穂高連峰を訪れた。五月にはゾンメルシー（夏スキー）を使って十勝岳よりトムラウシ山―化雲岳まで縦走して松山温泉（現在の天人峡）に下っている。七月には知床半島の羅臼岳、硫黄山、中央高地の武華岳、武利岳、ニペソツ山などが初めて登られた。また当時の日本領土で東北地方以北では最高峰であった北千島のアライト山（二三三九㍍）が、伊藤秀五郎、小森五作によって登られた。この日（七月十五日）アライト山の頂は粉雪におおわれていたが、頂上の岩が露出している時期（一九三〇年七月二十九日）に第二登を果たした佐々保雄らによると、頂上には三角櫓も標石もなく、陸地測量部の測量隊は恐らく頂には登らなかったようにみえる。

北大山岳部の創立とその後の登山

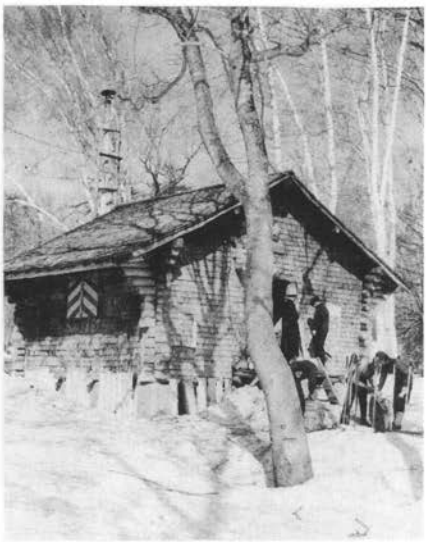
一九二六年十一月十日北大山岳部が創立された。恵迪寮旅行部、桜星会旅行部の部員と、北大スキー部員で夏冬を問わず山登りをしていた者たちの大部分がこれに参加した。山岳部創立の中心になった人々は、登山の精神を重視する伊藤秀五郎、沢本三郎、井田清らと、それぞれ気楽に自分の好む山登りをやりたい山口健児、山縣浩、須藤宣之助、西川桜、宮沢精、田中二郎、和辻広樹、小森五作、原忠平、渡辺千尚、中野征紀ほかの多くの人々で、彼らを育てた先輩松川五郎、板橋敬一はすでに卒業し、田口鎮雄、佐々木政吉らも現役を退いていた。教官では植物学の栃内吉彦、鈴木隈三、館脇操らは直接創立に参加し、医学部の山崎春雄もきわめて親密な関係にあった。戦後に、山岳部員で海外遠征を目指すグループに大きな影響を与えた加納一郎はこのときは参加しなかった。

創立部員たちは、山登りの思想こそいろいろであったが、よく協力して山岳部の発展に尽力した。この年は最初のスキー合宿をニセコ連峰の新見温泉で行い四十七名が参加した。創立後部員の登山はますます活発となり、主な対象を中央高地と日高山脈に求め、一、二年の間に日高山脈以外の高い山々（天塩岳、上ホロカメットク山、ニセイカウシュペ山、トムラウシ山、雌阿寒岳、雄阿寒岳＝以上一九二七年、美瑛岳、石狩岳、武利岳、武華岳、斜里岳、芦別岳＝以上一九二八年）の冬期初登頂はほとんど終った。

一九二七年の夏には慶応大の斉藤長寿郎

らがクマネシリ山と三国山に、藤江才介らが利尻岳に登った。また成蹊高校の成瀬岩雄らは知床岳に登っている。北大では七月にクマネシリ三山を登り、またピリカペタヌ沢から札内岳―エサオマントッタベツ岳に登った。

この年七月から十一月にかけて、札幌近郊の定山渓温泉に近い小樽内川上流の白樺林の中に、純スイス風の山小屋ヘルベチア・ヒュッテが建設された。このヒュッテは、北大教授山崎春雄、建築家マックス・ヒンデル、北大予科講師アーノルド・グブラーら三人の協力によって建てられたが、一九三四年十一月所有者の山崎教授より北大山岳部に贈られ、北大に寄付されて以後現在まで山岳部が管理している。一九二七年十一月、エーデルワイスの花をザイルで囲みAACH (academic Alpine Club of Hokkaido) の文字を入れた北大山岳部部員章が制定され（デザイン和辻広樹）、十二月には沢本三郎著『登山スキー術の手引』が山岳部から発行された。



ヘルベチア・ヒュッテ
1958年5月4日鮫島惇一郎撮影

一九二八（昭和三）年伊藤、野中ら六名（と人夫三名）によって行われた石狩岳の冬期初登頂は、北大山岳部にとって記録されるべき登山であった。この山行では、前の夏のうちに登路である石狩川上流の二カ所にドロヤナギの幹とトドマツの皮を使って九人が宿泊できる假小屋を建てた。二月八日この上方の小屋（シビナイ川合流の小屋）から前石狩沢を登り、僅か九時間のアルバイトで石狩岳に往復することができた。当時は天幕もシュラーフザックも不完全（シュラーフザックはトナカイの毛皮製）だったので、雪中キャンプの記録は少く、山小屋のほとんどなかった北海道では、山里の最奥人家や、冬だけ建てられる造材飯場からの日帰り登山が多かった。しかし今回のように前進基地を設けることで石狩岳のような奥地の冬期登山も可能なことが実証できたのであった。この年四月西川、須藤らによりピパイロ（美生）岳が登られた。これは日高山脈では最初の積雪期登頂記録である。また六月には北大山岳部々報第一号が発行された。これ以後戦時中まで、総頁数三〇〇内外の部報が、ほぼ二年おきに必ず発行されていたことは、部員の几帳面さもあるが、発表すべき内容に恵まれていたと見ても良いであろう。この夏にも日高の山々にいくつかのパーティーが出されたが、最大の目標であったカムイエクウチカウシ山は一日ちがいで慶応大の斉藤長寿郎、藤江才介らに初登頂をゆずった。斉藤らは引きつづきイドンナップ岳の初登頂も

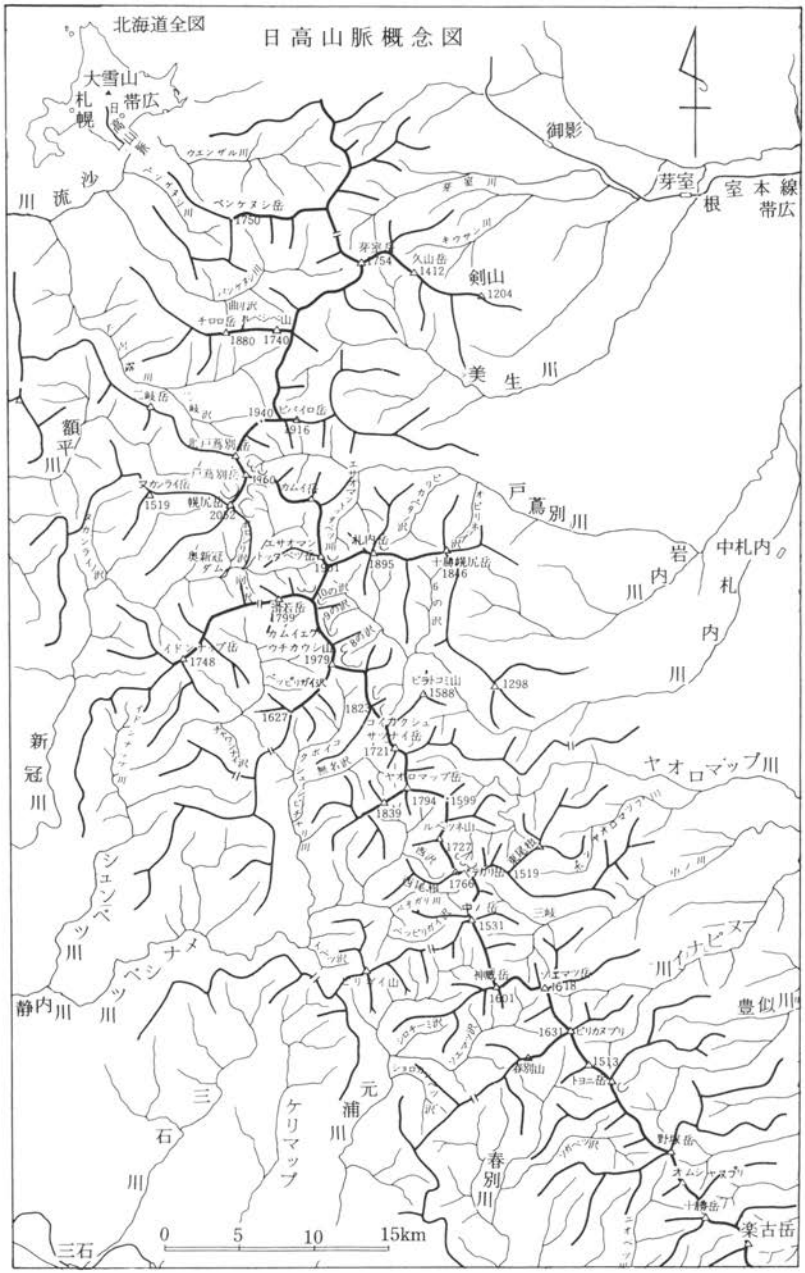
果たしている。さらに慶応大パーティーは、七月末から八月にかけて南日高のソエマツ岳から神威岳に向かったが、ブッシュに阻まれて引き返した。同じ頃、ソエマツ岳の南につづくピリカヌプリを目指した北大の高橋喜久司は水本文太郎と共に初めて登頂することができた。恒例になった年末のスキー合宿は、この年から十勝岳の吹上温泉で行われるようになった。

このころの北大山岳部の山行は、ごく短期間のものを除いて、少数のガイドや人夫を伴うのが常であった。これは日本山岳会の初期の登山と同じ様式で、当時の北大の部員には本州からきた者が多く、また日本山岳会の人々と親交のあるメンバーが山岳部の中心にいたので、その影響もあったと思われる。しかしこの後道内出身の部員も増加し、また登山ルートが開拓されるにつれ、ガイドの必要もなくなり、自分たちだけの水いらずの山行が次第に主流となっていった。

一九二九年一月に行われた、須藤、小森、伊藤、高橋、野中らによるポロシリ岳とトッタベツ岳の登頂も、さきの石狩岳登山と同様前年から組織的に計画された山行であった。この時登路となったトッタベツ川上流には二カ所に小屋を建てる必要があったが、幸いこの冬には途中に造材飯場ができたので、小屋掛けはエサオマントッタベツ川合流より約四キロメートル上流の一カ所ですんだ。この小屋からまずトッタベツ岳を登り、その三日後トッタベツ岳を越えて十二時間でポロシリ岳を往復することができた。この成功は今まで困難視されていた日高山脈の冬期登山の開幕に、最高峰が登られたという意味でも記憶されるべきものであった。この年二月には渡島半島の最高峰狩場山が、さらに四月には中央高地のニペソツ山が積雪期初めて登られた。五月になると十勝岳よりオプタテシケ山、トムラウシ山、忠別岳をへて大雪山黒岳までの縦走が、また夕張山脈では芦別岳より夕張岳までの主稜の縦走が行われた。五月は残雪が豊富なのでヤブこぎが不要で、飲料水の苦労も無く、ゾンメルシーを使って長距離を短時間に走破できるので、北大のメンバーは好んでこの季節に縦走登山を行っている。

この夏日高山脈には五班が入山したが、七月に一八三九メートル峰を目指してメナシベツ川を遡行した福西幸次郎らは、無名沢のつもりでコイボクシュシピチャリ川本流を遡り、沢頭の一八二三メートル峰に達して初めて五万分ノ一地形図の誤りを知った。彼らは更に国境稜線を縦走してカムイエクウチカウシ山に達している。いっぽう、前年に引き続いて来道した慶応大の斉藤らは、八月に札内川からコイカクシュサツナイ岳に登りヤオロマップ岳をへて一八三九メートル峰の初登頂に成功した。彼らは北海道の山にひかれるものがあったらしく、このすぐ後にもトムラウシ山からオプタテシケ山への縦走を行っている。またこの年、農具や刃物の鍛冶屋であった札幌の門田直馬が、山岳部員和久田弘一の助言と協力によって、ピッケルとシュタイグアイゼンの製作を始めた。

一九三〇年五月、ゾンメルシーを使って二班（松山温泉―石狩岳―ユニ石狩岳―三国山―武華川および武華岳―武利岳―支湧別岳）の縦走登山が行われた。この夏日高山脈には三班が入山し、北日高の主稜や十勝ポロシリ岳、中部日高のコイカクシュサツナイ岳―ヤオロマップ岳―一八三九メートル峰


北海道全図
日高山脈概念図
大雪山
札幌
日高山脈
帯広
御影
芽室
本線
室根
帯広
剣山
1204
久山岳
1412
芽室岳
1754
ペンケヌシ岳
1750
ウエンザル川
ペンケヌシ川
芽室川
キウサン川
美生川
額平川
戸蔦別川
岩内川
中札内
札内川
ヤオロマップ川
シュンベツ川
ペシベツ川
静内川
三石川
ケリマップ
元浦川
春別川
豊似川
楽古岳
十勝岳
オムシャヌプリ
野塚岳
トヨニ岳
春別山
ピリカヌプリ
1631
1513
ソエマップ岳
1618
神威岳
1601
ピラトコミ山
1588
1298
ヤオロマップ岳
1794
1599
1839
1722
1766
1519
中ノ岳
1531
三峠
ペンケヌシ岳
1750
芽室岳
1754
久山岳
1412
チロロ岳
1880
ルベシベ山
1740
二峠岳
1940
ピパイロ岳
1916
十勝幌尻岳
1846
札内岳
1895
ウムイエタ
ウチカウシ山
1979
1748
1627
1823
1721
1519
1766
1531
1601
1618
1631
1513
1298
1588
1599
1794
1839
1722
1895
1846
1979
1748
1627
1823
1721
0
5
10
15km
三石

が登られ、南日高では今まで幾度か試みて果たされなかった神威岳が相川修、有岡隆らによって初めて登られた。また佐々保雄、渡辺盛三はアーノルド・グブラーと共に北千島に向かい、阿頼度島に接岸した貨物船から日帰りでアライト山の第二登を果たした。この年四月、北大に理学部が創設されたが、この学部の地質学鉱物学教室に、教官または学生として多数の山岳部員が集まり、これ以後北大山岳部に大きな力を与えることとなった。後に日本山岳会会長をつとめた佐々保雄も、この時に助手として北大に赴任したのである。またここの教室員は、地質調査などの仕事の性質上、戦前期一般の者は上陸が禁止されていた中部千島などにも入山することができた。

一九三一年には三月にカムイエクウチカウシ山とエサオマントッタベツ岳が冬期として初めて登られた。またこの夏日高山脈を訪れた同志社大学の小島勘次らは、元浦川から中部日高の中ノ岳に登っている。

この年十勝国芽室のアイヌ部落の長老水本文太郎が亡くなった。彼は日高、十勝の山々に対する豊富な知識と経験により当時の北海道の山案内人の第一人者であり、その和やかな性格と、真黒な長いあごひげのある立派な風貌から多くの部員に親しまれ、日高山脈の山や沢の名は彼から教えられたものがきわめて多い。北大山岳部の日高山脈における初期の登山のほとんどは彼が同行するか、彼の助言を得て行われたと言っても過言ではない。

一九三二年には一月にウペペサンケ山、三月にクマネシリ山群の四峰と南日高のラッコ岳が何れも冬期として初めて登られた。この年カムイエクウチカウシ山には七月から八月にかけて三班が登頂するというにぎわいを見せたが、その中で中野、相川の班はチロロ川―ヌカビラ川―ポロシリ岳―新冠川―イドンナップ岳―春別川―カムイエクウチカウシ山―札内川という甚だ変化のあるルートをとった。日高の夏の山行では、これまで一つの沢から一つの頂へ、あるいは最初の頂から縦走して次の頂へというやり方が多かったが、登頂ののち別の沢に下り、その沢すじから次の頂を目指すという方法は、ヤブこぎに悩まされる稜線を避けることができ、登山道も林道もまだ開かれていなかった当時のこの山域では、効率の良い山歩きを楽しむことができた。またこの山行は、その後山岳部員の間に戦後も続いている谷から谷へのさすらいの山旅の一つの先例としても記録されるべきものであった。

この夏にも慶応大の斉藤貞一らが訪れ、メナシベツ川を遡り、コイボクシュおよびコイカクシュ両シピチャリ沢を分ける尾根に取付いて一八三九メートル峰―ヤオロマップ岳に登り、さらに長駆縦走して出発後十日目にペテガリ岳に達した。これがペテガリ岳の初登頂である。この年十二月より翌年一月にかけて佐々保雄らは大雪山の西麓アンタロマ川の上流にある直井温泉（現在の愛山渓温泉）を根拠地として、旭岳、北鎮岳、比布岳、愛別岳、永山岳を登り、これまで入山が不便なため敬遠されていた大雪山西半部のスキールートを開拓し、これらの山々がスキー登山の対象としてもよく知られるようになった。

一九三三年には三月にコイカクシュサツナイ岳、ヤオロマップ岳が冬期初めて登られ、また八月には険悪で知られた中ノ川

から神威岳が登られた。ここ二、三年は部員の増加したこともあって、本州への山行が増え、この夏には道内十班に対し十二班のパーティーが上越国境や中部山岳に向かっている。この年末から翌年一月にかけて極地法によるイトンムカ川からの石狩連峰という特記すべき山行があった。この二年前に京大山岳部が行った極地法による大沢口からの富士登山は、われわれにとっても得難い参考となったが、今回採用したイトンムカ川から石狩北見国境（現在の石北峠付近）―ルベシナイ川―ユニ石狩川―音更山のルートでは、雪の深い石狩川源流を六日間もラッセルしてベースキャンプまで荷を運ぶ必要があるため、この極地法が最適で、これにより隊員十名全員の登頂が初めて可能になったのであった。この山行の計画どおりの成功は北大山岳部の組織としての力を高めることに大きく役立った。この山行では、最初に造材小屋に一泊した以外は、宿泊はすべて通常の夏テントを利用した。以前はやや大きな冬の山行では、その前年の秋までに假小屋を作ることが多かったが、この二、三年前から天幕による雪中露営が次第に普及していった。冬の森林帯での幕営は、よく踏み固めた雪の上に天幕を張り、底面に針葉樹の葉を幾重にも敷くので、柔い上に温かく寝心地はすばらしいものがある。雪が深いときは、大きな焚火場と天幕との間に雪の塹壕を堀り、便所や物置まで作って数日の宿泊にも耐えられる居住性の良い宿泊地を作ることもできた。

北大山岳部の気風

筆者の一人朝比奈は一九三三年北大予科に入学し、山岳部（＝桜星会旅行部）に入ったが、この時すでに北大山岳部の気風らしいものはかなりはっきりと感じられた。この気風の中心をなすものはいわゆるメンバーシップで、これは登山中におこりうる各種の困難を乗り切るために必要な協力、融和、献身などを意味していたが、これと同時に登山はあくまで自発的な自主的行為であるとの考えから、部員相互の関係はきわめて自由で、好きな仲間と好きな山に登るというやり方が最も一般的な山行の形式であった。筆者が北大予科の恵迪寮に入った時も、旅行部の部屋に住んでいた十数名の中には、氷雪の頂を目指して精進している者もいれば、ほとんど札幌付近の低山ばかり歩いている連中もあった。しかし誰も他人に気兼ねすることなく、それぞれ自分の山を楽しんでいられたので、新入生には楽な部員生活であった。上級生の多くが親切であったことも予想外であった。多くの先輩と親しくなって感じたことは、後輩から畏敬の目で見られていたクライマーの中にも、非常に幅広い山登りをしている者が多く、当時の日高の山で沢から尾根へ、頂からまた未知の沢へといった漂泊の山旅に、大きな愛着をもっている様子をうかがい知ることができた。また当時の北海道の山々は、このような放浪の旅を充分享受できる場所であることも、自分自身味わうことができた。

このように自由で幅広い山登りが許されているという体質は、北大山岳部の創立以来伝統的に続いているものらしく、各部員は個人としては非常にバライエティーに富む登山思想を持ちながら、しかも団体としてはよく調和のとれた協力ができるという

はなはだ望ましい雰囲気ができ上っていた。このような雰囲気の造成に役立った要因として、北海道という自然環境が大きくかかわっていることは勿論であるが、人為的なものとしては、学内にある山岳部ルームの存在と、創立以来毎年行われてきたスキー合宿が大きく貢献しているように思われる。このうちルームは、部員が毎日集まって歓談し、親しい仲間との間に自然発生的に次の山行が決まってゆく場であるが、これは他の山岳団体でも同様で北大特有の要素ではない。それ故ここでは合宿について、特にその最も代表的なものと考えられる一九二八（昭和三）年から一九四一年までつづいた十勝岳吹上温泉における戦前のスキー合宿についてやや詳しく述べよう。

十勝合宿

この合宿は毎年十二月下旬、十勝連峰北西斜面の針葉樹林帯、標高一〇四〇㍍の場所にある吹上温泉を宿泊地として一週間行われた。十勝連峰は、中央高地の国境（石狩と十勝）山稜上にある二〇〇〇㍍を上下する数座の山々よりなり、北東端の美瑛岳から南西端の富良野岳まで約一〇㌔にわたってほぼ直線的に連なっている。この山地の樹林帯の上限は、約一一〇〇～一三〇〇㍍の高さであるが、そのあたりの真冬の日中温度はマイナス一二～一五℃で、天候によりマイナス二〇℃以下にも下る。これより上部は高山帯の気候で、わが国で体験できる最もきびしい気象条件のもとで氷雪技術の訓練をすることができる。いっぽう樹林帯では、これもわが国で最高の質の良い粉雪の中でスキー練習が楽しめる。また宿泊地の吹上温泉では、その主人である飛沢辰巳氏とその一家の人々から、永年にわたって打算を離れた好意的なもてなしを受けていた。その上この十勝岳周辺には、当時他の宿泊施設がほとんど無かったため、われわれが入山している一週間の間、この山域全体を借りきったようなもので、そこで会う登山者はすべてが合宿の仲間であるという恵まれ過ぎるほどの好条件がそろっていた。

合宿の参加者は毎年八十～百名内外（最高は昭和七年の百十三名、戦時には急減）で、これを三、四個の初年班、約三個の二年班、二、三個の三年班と、先生班や先輩班に分けた。初年班にはリーダー一名、二年班以上にはリーダーとアシスタントリーダーがそれぞれ一名つき、原則として一班の人数は八名以内にした。このうち部員の占める割合は、初年班で五〇㌫、二年班で六〇㌫、三年班は七〇㌫以上で、戦後の部員だけによる合宿と異なり、北大の教官、学生に広く門戸を開いていた。山岳部は北大全学の校友会の一部で、経済的にも校友会の援助を受けていたので、この合宿は全学の人々に対するサービスの意味も含んでいた。毎年この合宿を機会に入部してくる学生もしばしばあり、また北大教官の山岳部に対する認識と理解を深めるのに非常に役立った。このように多数の部外者を含む合宿ではあったが、合宿期間中の規律は厳正で、各班の起床、出発、帰着の時刻や、登山中のマナーを厳密に守ることが求められ、また先生班を除いては完全に禁酒が守られていた。これらの合宿中の習慣は現在に至るまで続いている。

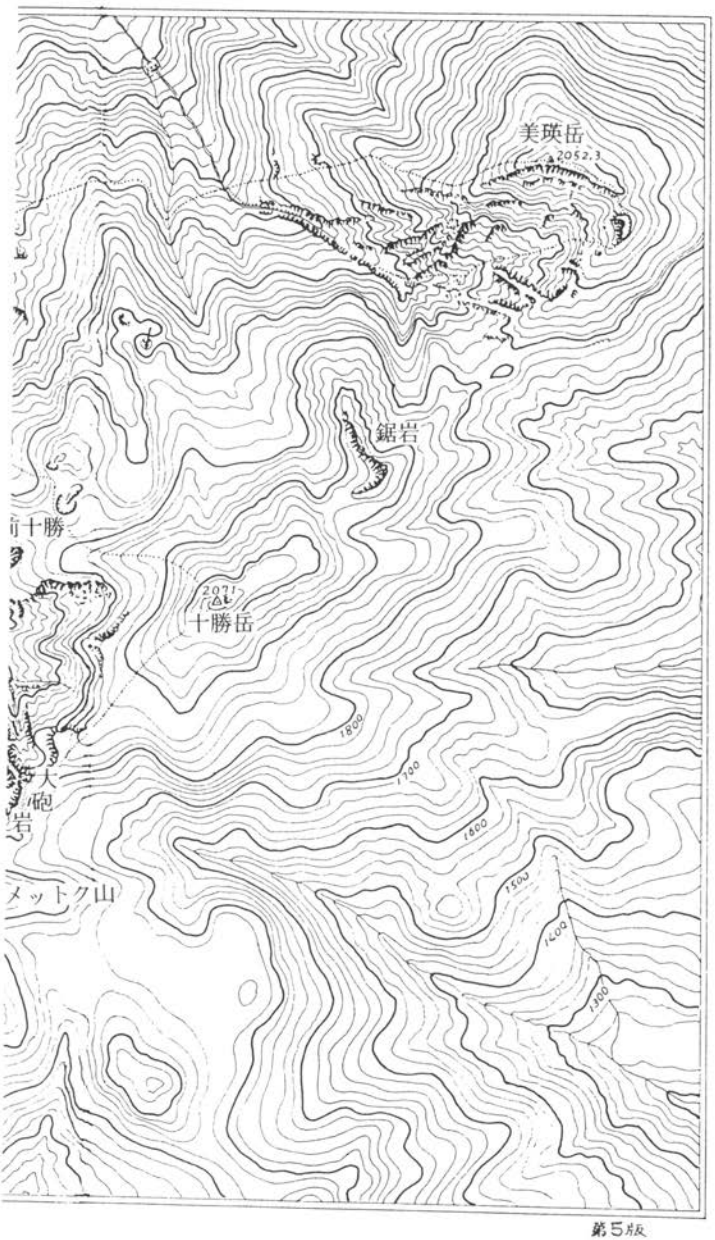
合宿練習の内容として、初年班では登山スキー術を徹底的に教えこむが、六日間の

訓練でも、シュテムボーゲンで山を下れるようになり、シュテムクリスチャニアで一応廻転できるというあたりが平均のレベルであった。二年班は北大山岳部の標準的な冬山練習のクラスで、毎日連峰の何れかの山を登りながら、森林帯の登降、ルートの選定、シーデポーの選定、アイゼン、ピッケルを使う高山帯での登山技術などを練習するが、特にメンバーとしての常識が教えられた。これはほとんどが、リーダーとアシスタントリーダーの行動を見習うという以心伝心的なやり方で行なわれ、いわゆる「しごき」めいた習慣は全くなかった。班のなかで一番重荷を負っているのは、いつもリーダースタッフで、初心者はできるだけ保護される習慣であった。余談ではあるが、全国的に大学山岳部員の減少がすすんでいる現在でも、北大山岳部が今だに二十名以上の現役部員を擁している理由の一つはこのあたりに在るのかも知れない。

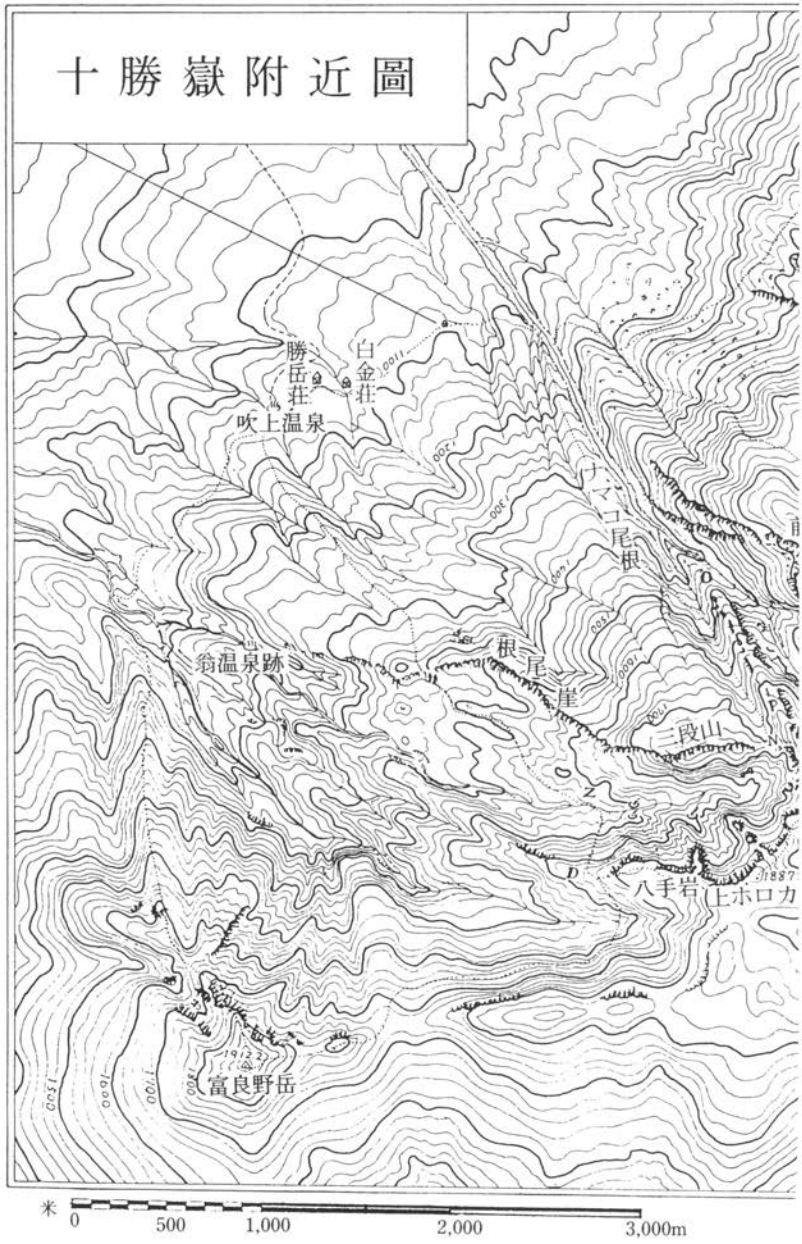
二年班以上のメンバーにとってこの合宿は、スキー術の登山への適用を、各種の地形的、気象的、そして疲労のような生理的条件に応じて学ぶ場所であった。少くとも北海道においては、優れたスキー技術は冬山の成功率を高める最大の要素の一つであるとわれわれは確信していた。こうして二年班のスキー技術は、荷物を負って森林帯をスラロームできる程度にまで上達した。しかしスキー技術の自信の高まりは、冬山ルートの選定にあたって、無意識のうちに沢すじを離れがたくさせ、これが雪崩に対する敏感さを失わせるおそれをはらんでいた。三年班はメンバーのほとんどが部員であるため、長距離の山行（オプタテシケ山、奥十勝岳など）や、岩登りを含む各種のバリエーションルートを開拓し、また森林限界以上の稜線で高所露営なども行っている。悪天候で登頂できぬ日には、スキー技術練習の他、初年班は森林帯で焚火の練習、二年班以上では、特に三九年以降には、雪洞やイグルーの制作研究が行われ、これはその後の冬山で非常に役立った。

この合宿で開発され、または普及した装備も少なくなかった。前述の門田のアイゼンとピッケルは一九三二（昭和七）年以後急速に普及した。当時の合宿参加者の個人装備は、初年班では、地形図、磁石、スキー用具一式、アザラシ皮、スキー帽、耳輪、ゲートル、手袋（毛製および軍手）、二本指のオーバー手袋、サングラス、テルモス、非常食料一食分、予備防寒具等で、前述の沢本三郎著『登山スキー術の手引』（著者改訂版）も全員に配付された。二年班以上はこの他に、アイゼン、（可能ならピッケル）、デポー旗、ローソク、ラテルネ等で、リーダースタッフは、輪かんじき、スキー修繕具、救急箱、スコップ、ナタ、鋸、ザイル等を携帯していた。スキー服は純毛のサージ布地のものが賞用されたが、一九三六年以後にウインドヤッケが導入された。スキーのカンダハー式締具は三五年に導入されたが、北大山岳部では特に服装等について保守的傾向が強かったので、これが普及するのに更に数年を要した。オーバーシューズやマスクのような高所用防寒具も三六年以後使われるようになったが、少くとも合宿中はまず手足を寒さに慣らすことが奨励された。

食事は朝夕を吹上温泉でまかなってくれたので、山岳部が自前で用意したのは午食の紅茶、フランスパン、バター、チーズ、



十勝岳附近図　改訂第五版（昭和二十四年）　昭和十三年ごろより、石橋正夫、中村粂夫らが中心となって二万分の一の十勝岳地形図がつくられ、毎年改訂を加えて戦後までにわたって合宿で愛用された。


十勝嶽附近圖
勝岳荘
白金荘
吹上温泉
ナマコ尾根
翁温泉跡
根尾崖
三段山
八手岩
上ホロカ
富良野岳
米
0
500
1,000
2,000
3,000m

ジャム、ソーセージ等であった。一九三六年以後にはレーズン等を入れた登山用の数種のパンが試作されたが、昼食時には外気にあたると凍結してしまうことが多いので、味はほとんど問題にならず、テルモスの紅茶でようやく飲みこむのが常であった。

陸地測量部五万分の一地形図十勝岳にあやまりが多かったので、一九三六年ごろから迷い易い地点の地形概念図が作られ、一九三八年の雪崩事故（後出）以後は、石橋正夫らにより新しい地形図が制作され、戦後にまで及んでたびたび改訂が行われた（一五二―一五三頁参照）。

この十勝合宿は登山練習の場であったばかりでなく、現役部員とOBの多くが、北大山岳部としての連帯感を味わう年に一度の機会であった。この合宿で、もう部報の上でしかその名を知らない伝説上の先輩たちと山行を共にし、また吹上温泉での入浴やコンパを通じて仲間としての親しみを強めたのであった。現在市販されている山の歌の歌集やCDに、作詞作曲者不詳として収められている「山の四季」も、一九四〇（昭和十五）年の十勝合宿でコンパの余興に筆者が作ったものである。この時合宿のメンバーだった渡辺良一君が軽妙なワルツで曲をつけてくれたおかげで、いつの間にか北大山岳部の部歌となり、山小屋の夜など思いがけない場所でこの歌を聞くこともあった。

しかし、同じ山域で十年以上も合宿が続けられていると、当然のことながらマンネリ化してゆき、リーダーが地形に慣れて、悪天候でも登頂できるという自信が、かえって危険をはらんでいた。こうして一九三八（昭和十三）年の合宿中、上ホロカメットク山の尾根で、雪崩により二名の部員を失うという重大な事故に遭い、われわれは初めて冬山に対する未熟さを体験したのであった。これは創立以来これまで一度も遭難を味わったことのなかった北大山岳部に対する最初の警報であった。

昭和十年前後の山行

一九三四（昭和九）年一月にはカムイエクウチカウシ山とその北にある一九〇〇㍍峰、三月には一八三九㍍峰が登られ、この夏には三隊がペテガリ岳に登頂した。また地質調査のため中部千島のウルップ島に渡った石橋正夫らは、地獄山（一〇一三㍍）に登った。一九三五年三月チロロ岳が登られ、七月にはナメワッカ岳、八月には北千島のアライト山とシリヤジリ岳、九月には北日高のペンケヌシ岳が初めて登られた。また本野正一らはこの夏樺太（サガレン）に渡り、日ソ国境に近い北緯四九度一〇分にある名好山に登った。一九三六年には南日高のピリカヌプリが一月に、三月には音更川から石狩岳とニペソツ山が登られた。この頃北大地質学鉱物学教室の中部千島地質調査に随行してケトイ島とシンシル島に渡った湊正雄は、中部千島の最高峰新知岳（一五二六㍍）と新知富士に登り、翌年八月同じ調査に随行した喜谷勇三は松輪島の芙蓉山（一四八五㍍）に登った。

この年は北大山岳部創立十周年に当たるので、日本山岳会の会長木暮理太郎氏を招聘して十一月に北大で記念講演会を開いた。木暮会長は「吾国登山の時代相について」と題して話され、山岳部からはOB中野征紀が「北大山岳部の沿革とその登山精

神について」語った。このように何か機会があると日本山岳会の長老を招くという習慣は、北大山岳部には創立初期の頃よりあり、この後一九三九年にも槙有恒氏を囲んで座談会を開いている。

一九三七年一月には利尻島オシドマリより利尻岳が登られ、三月には樺太（サガレン）のシスカ岳が登られた。七月にはヤオロマップ川を遡行してペテガリ岳が登られ、九月には悪場で知られていた大雪山忠別川上流の遡行に石橋恭一郎が単独で成功した。またこの夏、木原、今西両教授の北大への来訪を機に、京大、北大両山岳部員の懇談会が持たれた。十月にはヘルベチア・ヒュッテ建設十周年記念祭が、四十名余が参加して盛大に催された。

一九三八年一月には前年末から札内川に入っていた二つの班が、それぞれコイカクシュサツナイ岳からと七ノ沢から一八二三㍍峰に登り、またヌピナイ川に入った班は神威岳に登ることができた。何れも冬期最初の登頂であった。この年十月来札した慶応大山岳部ＯＢの小森宮章正氏を囲んで北大山岳部の幹事らが懇談し啓発されることが多かった。

この年末も例年のように十勝合宿が十四班七十七名が参加して行われた。この年から名称も冬期登山練習合宿とかわり、四班を数える三年班がそれぞれ富良野岳、旧噴火口、美瑛谷などで、バリエーションルートを開拓し、また富良野岳などで高所露営も行った。合宿六日目の十二月二十七日、三年班の一つが上ホロカメットク山から下山中、八ツ手岩分岐点に近い稜線付近で面発生全層乾雪雪崩に遭い、二名の部員を失うという大きな事故をおこした。雪崩の出た緩斜面は稜線にも近く、従来の合宿で毎年のようにわれわれが通過していた場所であった。恐らくこの年のやや異常な気象により、地表面近くの雪層に霜ザラメ雪が形成され、その上を厚さ二㍍を越すカタシマリ雪がおおい、非常に不安定な風成雪層ができていたものと考えられる。この翌年の事故と同様に、当時の北大山岳部に雪崩誘発について関心が不足していたことを痛感させられるアクシデントであった。

次第に戦時色の強まっていたこの時代にも、千島の山々に興味をもつ山岳部員は、地質調査などに随行して、二、三の登頂を果たしている。一九三八年七月新美長夫らはエトロフ島の南散布（チリップ）岳と茂世路岳に登り、翌年八月、丸山喜久男、岡彦一は北千島のアライト山に登った。一九四〇年夏エトロフ島に渡った湊正雄らは単冠（ヒトカップ）山（一五六〇㍍）に、小関幸治らは北散布岳と指臼山に、また住宮省三らは南北の散布岳に登った。

冬のペテガリ岳遭難と初登頂

この数年間に日高山脈に残されていた主な山頂は夏冬を問わず登頂され、日高と十勝を分ける国境稜線上でまだ冬期未登の頂は、ほとんど中部日高のペテガリ連峰付近のみに限られてきた。ペテガリ岳は、その山頂付近に源流をもつ沢の遡行が困難で、冬には雪崩の危険が特に大きかったので、必然的に長大な国境稜線を登路とすることになり、これが天候の不安定な冬期には、登頂を阻む最大の要因であった。

冬のペテガリ岳登頂の試みは、北大山岳部では一九三二年ごろよりたびたび行われ

てきたが、実際にヤオロマップ岳以南の国境山稜にアイゼンの跡を印したのは、一九三七年の冬が最初である。このときの隊は全員が予科生部員で、これに当時山麓の十勝原野で酪農を営んでいたOBの坂本直行が参加していた。全員十一名を四班に分け極地法によりコイカクシュサツナイ川の奥二股にBCを設営、コイカクシュサツナイ岳頂上にC1、ヤオロマップ岳を越した鞍部にC2を設けた。二月二日国境山稜の一五九九(トイ)峰まで偵察を行ったが、その夜猛烈な暴風雪におそわれ、C1、C2を破壊されて全員退却の止むなきに至った。このときの挫折の直接の原因は、このような高所露営に対する研究と経験の不足であり、これを貴重な教訓としてペテガリを目指す努力はさらに続けられた。

一九三九年末、前回のペテガリ隊とほとんど同じ日程の計画が、当時の現役部員の最高のメンバー十名によって実行に移された。しかしこの山行は、一九四〇年一月五日コイカクシュサツナイ岳稜線東斜面の上部に発生した面発生表層雪崩に起因すると思われる大雪崩により九名の隊員が遭難、風邪でBCに残っていた一名（筆者の一人橋本）を除くと、生還者は僅か一名という当時のわが国の登山史上最大の事故となった。この遭難の直接の原因は、雪崩発生のおそれのある急傾斜の沢底を降雪中に登行したことにある。しかしこの谷は過去いく度も冬期の登路に無事故で利用され、前回のペテガリ登山のときも今回遭難したメンバーの多くが、全く同じルートを稜線まで登っていたのである。この度のアクシデントに対しては、これまで北大山岳部が常習的に行ってきたできるだけ沢すじを利用する冬山登山法（それはメンバーのスキー技術が高度ならば、最も容易に短時間で登頂を可能にする）を、安易に継承してきたわれわれ自身が最も大きな責を負うべきであろう。

今回のペテガリ隊のメンバーは当時の山岳部の中心的存在であったので、この遭難によって北大山岳部は壊滅的な打撃を受けた。その上戦時下の生活は、登山活動を物質的にも精神的にも困難にさせて行った。

一九四一年二月、十勝上ホロカメットク山およびペテガリ隊の遭難報告を主な内容とする北大山岳部々報第七号が出版された。当時の社会情勢では、このような出版物の刊行は非常に困難であったが、幸いにペテガリ隊員の御遺族をはじめ、各方面からのきわめて好意的な援助によって、奇蹟的なほど予定通りに発行することができた。出版部数はようやく三〇〇部に過ぎなかった。編集に当たった筆者ら二人は、恐らくこれが北大山岳部の名を冠した最後の出版物になるであろうという危惧の念を抑えることができなかった。

この後もペテガリ岳への試みは山岳部の中で執拗に続けられた。一九四一年三月、筆者ら二人は前回の隊とほぼ同じルートによりペテガリ岳に向かった。この時は雪崩を避けてコイカクシュサツナイ川左股の途中から右手の尾根（OB中野征紀が開拓したルートなので長髪ルートと呼ばれた）に取り付き、国境山稜の約一〇〇(トイ)下までスキーを使った。また天幕を持たず、コイカクシュサツナイ岳頂上付近とヤオロマップ岳東の鞍部に雪洞を堀って根拠地としたのがこの隊の特色である。しかしこの度も天候に恵まれず、辛うじてペテガリ岳北方三

(キロメートル)のルベツネ山頂に達したに過ぎなかった。さらにこの一カ月後今村昌耕、住宮省三の隊は前回とほぼ同じ計画でペテガリ岳に向かい、五月四日ヤオロマップ岳の雪洞から十二時間余のアルバイトで積雪期最初のペテガリ山頂に達した。この年十二月に太平洋戦争が始まり、山岳部の活動も著しく制約されていく中で、厳冬期ペテガリ岳登頂の努力はさらに続けられ、一九四二(昭和十七)年末から翌年一月にかけて戦前最後と思われた試みが成功裡に遂行された。このときは少人数ながら極地法を採用し、コイカクシュサツナイ川にBCを設け、前回と同じルートを辿った。特記すべきは前進基地にイグルーを利用したことである。イグルーの研究は四年位前から十勝合宿等で始まったが、大きな山行の高所基地として使われたのはこの時が最初である。この隊では当初コイカクシュサツナイ岳頂上と、ヤオロマップ岳東の鞍部に、それぞれイグルーを作る予定であったが、天候の予想と、登頂隊員(今村昌耕、佐藤弘)が夜でも歩ける程この尾根ルートを知っていることなどから、コイカクシュサツナイ岳のイグルーからのラッシュアタックを採用した。そして三年前の遭難の命日である一月五日に、午前三時半より十五時間をかけて宿願の厳冬期初登頂を果たすことができた。

北大山の会の設立

一九四〇(昭和十五)年七月、北大山岳部OBの親睦と現役部員への援助を目的として北大山の会が設立された。当初の会員は九十二名であった。OBの会としては既に東京を中心に「こくわ会」があり、一九三二年以来毎年数回の会合を重ね、また三五年よりは、北大山岳部時報が札幌で発行され、OBたちの親睦連絡の役目を果たしていた。しかし最近相ついで山岳部を見舞った不幸なアクシデントを契機として、更に密接に山岳部を援助できる強力なOBのグループを作ることになったのである。この会は創立以来五十年余の現在、会員四百名を擁し、遭難対策等に強力な支援、指導を行うばかりでなく、現役先輩を一丸としたAACHの中心となって、数々の海外遠征や、ヘルベチア・ヒュッテ改修等の事業に十分な業績を果たしている。

戦前末期の山岳部

戦局の進展につれ従来のような大学山岳部の形態は存続できなくなり、一九四一年には北大の校友会(文武会)が報国会に改組され、山岳部も鍛練部山岳班と改称された。この年の十勝合宿には、学生課員一名と、教練の教官二名がついて来たが、彼らはお目付というより、合宿参加者の規律正しい行動や、厳しい登山訓練を感嘆の目で見ていた。一九四四年になると部員の日常生活の一つの中心でもあった学内の山岳部ルームも使用を禁止された。年中行事であった十勝合宿も一九四二年に吹上温泉の経営者が変わり、その年の合宿開始の直前になって宿泊を拒絶された。山岳部では急遽計画を変更して、初年班二十八名はニセコ連峰の新見温泉で、二年班以上の三十四名は大雪山の愛山渓温泉で辛うじて合宿を行った。その後の幹事の努力によりようやく再開できた翌年の吹上温泉での合宿には三十三名が参加した。主食品の入手は次第に困難となり、昼食用のパンは、山岳部O

B野崎健之助の経営する恵庭の牧場から小麦粉を入手し、札幌の教会の工場で焼いてようやく用意出来た。

この頃旧陸軍（の北部軍）から北大山岳部に一つの依頼があった。それは、北千島の占守島で冬期間陸上交通が途絶するので、冬山の経験を生かしてこの島の各拠点をつなぐルートを歩いて欲しいとのことであった。数人の部員が中心となってこれに必要な冬山用の装備や、野営方法などのリポートを軍に提出した。しかし当時占守島にゆくには海軍の潜水艦による以外に方法がなく、結局大学当局の指示で北千島行きは中止された。

一九四四年の合宿はさらに困難となり、吹上温泉はもはや利用できず、結局ニセコ連峰の馬場温泉を根拠地として十六名の部員が不十分ながらスキー合宿を行った。敗戦の年である一九四五年には、それまで夏山冬山それぞれ二、三班ずつは出していた山行にもほとんどでかけられなかったが、それでも部員の熱意で、万難を排して十勝合宿は実現された。既に空屋になっていた吹上温泉は倒壊しており、その近くの村営の小屋勝岳荘に札幌から食糧を運んで十四名の部員が自炊の合宿を行った。札幌から上富良野までスキーなどの荷物が着くのに三日もかかり、実際に登山できたのは二日間に過ぎなかった。しかし全員が上ホロカメットク山に登頂し、富良野岳と美瑛岳にも上部まで登行した。このような事実をみると、戦前の十勝合宿が北大山岳部員の生活に、いかに深く根をおろしていたかがわかる。

戦後の部活動の再開と回復

一九四六（昭和二十一）年二月、山岳部の仮ルームをようやく北大キャンパス内に設けることができ、占領軍の校舎使用のため学内の各所に預けてあった備品を集め登山活動が再開された。五月には現役部員と北大山の会の合同総会が開かれ、敗戦後初めて多くの先輩と現役が一堂に会して山岳部のすみやかな再建について話し合った。この夏は極度に劣悪な食料や装備の条件にもかかわらず、日高に四班、中央高地に一班の山行を出すことができた。九月中旬ヘルベチア・ヒュッテ建設二十年祭が、ちょうど来札されていた日本山岳会の松方会長を迎えて同ヒュッテで行われた。この日は天気も悪く、ランプの石油もなく、乏しいローソクの火も消えた真っ暗なヒュッテの中で、部員たちは姿の見えない松方さんの力強いはげましの言葉に耳をかたむけたのであった。

この年以降の冬山合宿は、再び十勝岳で年末に行われるようになったが、宿泊は勝岳荘（一時白銀荘）で自炊し、一般参加者はなく、すべて部員のみの合宿であることが戦前との大きな相違であった。この年には二十六名が合宿したが、初年班と二年班のリーダーはすべてOBで、部員の登山能力の早急なレベルアップに全力がそそがれた。またOBを講師として、雪崩、イグルーなどの研究会も開かれた。こうして山岳部は次第に実力を回復していったが、戦後初期の比較的大きな山行には、橋本誠二などOBがリーダーをつとめることが多かった。

一九四七年二月には日高山脈の最高峰ポロシリ岳の冬期第二登が行われ、翌年一月には札内岳よりナメワッカ岳までの稜線が

冬期はじめて縦走され、二月にはイドンナップ岳の冬期初登に成功した。また一九四七年末から翌年一月にかけて、中ノ川とポンヤオロマップ川をへだてる長大な尾根（後に早稲田尾根と呼ばれた）を極地法により長駆縦走して、約一カ月をかけて冬期第二登を果たした早大山岳部のペテガリ岳登山は、沢づめ方式にかたよりがちな北大の冬山山行とは対照的な特徴があり、記憶されるべきものであった。

戦後しばらくの間、山行は特に装備の面で貧しく、不自由、不満足なことが多かったが、いっぽう創意工夫によって色々な妙案も生まれた。その一つの例は燃料の鑵づめである。これは占領軍の放出食料品が入っていた小形の空き鑵に灯油をつめてハンダで封じたもので、この頃からよく行われた冬の尾根縦走には特に重宝であった。一九四九年一月には、トッタベツ川より北トッタベツ岳が現役部員によって登られ、また札内岳からカムイエクウチカウシ山までの縦走が、尾根上の宿泊はすべてイグルーを利用して行われた。一九五〇年の一月になると、現役部員のみによって、コイカクシュサツナイ岳に中心基地を置き、一八三九メートル峰と、カムイエクウチカウシ山の双方へ往復縦走が行われた。このようにして北大山岳部はほとんど従前の活動レベルを回復し、一九四九年度の山行は夏山十八班、冬山十一班を数えた。しかしこのような再興の陰に、この年の夏、当時の山岳部長であった奥村敬治郎教授を札内川九ノ沢カールにおいて転石により失うというまことに残念な稀有の事故にも遭わねばならなかった。

一九五一―五二年の冬には、初年班十三名のみが十勝合宿に参加し、主力の十九名は厳冬期の十勝岳―大雪山縦走を行った。一九五三年一月にはナメシベツ川のベッピリガイ沢から中ノ岳、ペテガリ岳、神威岳が登られた。このうち中ノ岳は日高山脈国境稜線上の最後の冬期未登峰であった。同じ頃、知床半島の縦走に成功した京大山岳部パーティーと懇談会を開いている。この頃から全国的に大学の山岳部員が急増し、大型の縦走登山と合宿を同時に行うことも可能となった。すなわち一九五四年十二月には十九名が十勝合宿を行い、主力の十八名が翌年一月にかけてトッタベツ川上流のカムイ岳を基点として、ポロシリ岳とカムイエクウチカウシ山の双方へ極地法による縦走登山を行った。一九五六年末には十五名が十勝合宿、二十一名が翌年一月にかけて懸案の冬期日高山脈全山縦走を行った。これは主隊が南日高のピリカヌプリより国境稜線を北上、北日高のエサオマントッタベツ岳まで縦走し、支援の三隊は荷上げ等の任務終了後それぞれトヨニ岳、一八三九メートル峰、ポロシリ岳を往復したものである。これより先、一九五三年には旧制の北大学生はすべて卒業し、山岳部もすべて四年制の学生で構成されるようになった。しかしこの年以後のいくつかの大型山行の成功は、新制の学生がこれまでの伝統を受けついで、程度の高い山登りが充分に可能であることを実証したものであった。さらに一九六〇年末には、十班四十五名が参加した大規模なカムイエクウチカウシ山集中登山も行うことができた。

このように山岳部の活動が高まってくると、登山の対象も今までの道内や本州中部山岳などの山々を越えて、必然的に海外の

山岳も目標として考えるようになった。北大山岳部内のヒマラヤ志向は、一九三五年前後より数年にわたってかなりの高まりを見せていたが、その中心をなしていた者たちは、一九四〇年一月、その夢をいだいたままコイカクシュサツナイ谷の雪崩に埋もれてしまったのであった。戦後にヒマラヤ遠征が具体的な形で山岳部のスケジュールに登場するのは一九五五年以後のことである。それまで日本山岳会の第一次マナスル遠征（一九五三年）にOB山崎英雄が、またマナスル登山先遣隊（一九五五年）にOB橋本誠二が参加することはあったが、実際に北大山岳部がその最初のヒマラヤ遠征をチャムラン登頂によって果たすまでにはさらに七年の歳月を要したのであった。この後AACH（北大山の会と山岳部の総称）はしばしば遠征隊を出すことになるが、それらの隊の成立の過程には、いかにも北大らしい特色があった。まず登りたいグループができ、そのまわりに登らせたいメンバーが集まり、これが或る程度まで発展すると、実際に勧進元となる北大山の会が、はじめて遠征隊にかかわって来たのであって、山の会自身が主導するようなことはなかった。

日高山脈の変貌と特色ある二、三の山登り

最後に、戦後のわれわれの山登りの中で、北大山岳部らしい色彩を出している二、三のものについて簡単に述べたい。それまで北海道では最も良くその昔の姿が残されていた日高山脈でも、一九五二年ごろより、当時の国策の一つであった電源開発のため、日高側の大きな川にはその源流まで車道ができ、また入山も困難であった国有林には、わが国のモータリゼーションの進展に伴ない、無数の造材林道が作られ、メナシベツ川上流の奥高見のような山奥の土地まで開拓されるようになった。その結果、平原からまず山麓の谷に入り、長い沢歩きを経て次第に目指す山に近づくという伝統的な日高山脈の登りかたは次第に採用されなくなり、戦前は函を巻くだけで一日もかかった峡谷も、コンクリートの立派な橋で結ばれたテラスの林道のおかげで、たった一～二時間のドライブで越えてしまうという味気ない行程に変貌していった。また一九五四年には十五号台風による洪水で、険悪な函が埋まり、沢の地形が著しく変化し、中ノ川、ヤオロマップ川、無名沢などの峡谷の通過が容易になるところもできた。

このように変わりゆく山域の中で、今まで未記録であった困難な沢が登り尽くされると、その後に狙われたものが直登沢である。中南部日高山脈の山頂付近には、非常に急傾斜の岩場をなす沢頭が多いが、このような悪場の岩登りすなわち直登沢の登攀が、一九五七年ごろより十年余にわたって最も先鋭な部員たちの活動の焦点となった。いっぽう彼らは、昔の先輩たちがやってきたものに負けない程素朴な山旅も求めていた。宿泊には天幕や寝袋を使わず、木の枝で小屋掛けし、ビニールシートをかける。食糧は米やパンを持たず小麦粉、豆類、ラード、マーガリン、砂糖と調味料、紅茶等で、あとは沢から沢へと漂泊しながら、露などの山菜を集め、登頂が遅れることなど気にせず、腹を満たすに充分な岩魚を釣り上げたのである。ラジオ等は持たず観天望気に頼った。これで十二日間の山旅の荷

物の総重量は一人四貫目（十五キロ）ですんだ。彼らはこうして最近の「科学的登山」から開放され、できるだけ自然の環境にひたった山登りを楽しんだのであった。また一九五四年ごろトムラウシ川上流の、本流と五色ヶ原からの沢が合流するあたりで、山崎英雄らが温泉の湧出しているのを発見した。五年後部員たちの手でここに小さな丸太小屋が建てられ、温泉小屋と呼んで大勢の部員たちに親しまれた。この小屋は数年で朽ち倒れたが、その後もこの温泉を訪れる部員は少なくなかった。戦後わが国の自然が、「開発」によって大きく変化したとはいえ、北海道の山には、まだこのような山登りを楽しむ余裕が残されていたのである。

あとがき

本稿は、一九九三年二月十六日開催の山岳史懇談会で筆者ら両人が述べた話を中心に加筆して作成したものである。前半を朝比奈、後半を橋本が担当したが、去る七月より橋本が不調で入院中のため、後半部は橋本のすじ書きに沿って朝比奈が脱稿した。従って文責はすべて朝比奈にある。

山岳部創立以前の章は主として伊藤秀五郎「北海道におけるスキー登山の発達」（『北の山続篇』、一九七六年、茗渓堂）を参考にした。また日高山脈概念図は、北大山の会編、『日高山脈』（一九七一年、茗渓堂）の付図を一部訂正して縮小したものである。

筆を置くに当たり、有益な助言を与えられ、あるいは写真を提供された渡辺千尚、山崎英雄、鮫島惇一郎の各氏、十勝連峰の地形図と日高山脈概念図を作成して頂いた熊野純男氏にお礼を申し上げたい。

図書紹介

山崎柄根著

『台湾に魅せられたナチュラリスト 鹿野忠雄』

平凡社　一九九二年刊
四六版　三三六ページ　二七〇〇円



戦後鹿野忠雄のことについて書かれた本は、奥本大三郎著『虫の宇宙誌』で、その一節「サラマオのモンシロチョウ」であった。くわしく台湾に於ける鹿野忠雄の活躍ぶりがかかれている。

この本によって一部の人たちの間に昆虫学者としての輪郭を知ることができた。しかし、その生死については不明の点があると書かれている。

私はかって台湾の山々について、鹿野忠雄の『山と雲と蕃人と』（中央公論社、一九四一）、田中薫『台湾の山と蕃人』（古今書院、一九三七）、大島正満『タイヤルは招く』（第一書房、一九三四）等を読んで知識を得ていた。又個々の情報は『山岳』に記載されていた野口寧や沼井鉄太郎の文章等によるものであった。

一時期台湾山岳への登山がブームとなり、私も人後におちず玉山（新高山）、雪山（次高山）、大覇尖山、大屯火山群の七星山等に登ったがその時々の山行で思い出すのは鹿野忠雄の文章であり、著書にのせられた数々の写真であった。

山崎柄根著『台湾に魅せられたナチュラリスト鹿野忠雄』が発売されると同時に購入して一気に読んだものであった。この本はその年第四十回エッセイスト・クラブ賞を受賞されたのも宜なるかなとの感があった。

著者の山崎柄根さんについて、著書の奥付にある著者紹介の記事を転載してみる。一九三九年東京に生れ、東京教育大学大学院博士課程修了後、埼玉大学助教授、国立科学博物館主任研究官を経て八三年より東京都立大学理学部助教授（自然史）、理学博士、専攻は動物学、著書に『動物系統分類学・節足動物・昆虫類』、『ツルはなぜ一本足で眠るのか』等がある。

著書の内容は一章「ジラコーバック（紅頭山）に立って」は鹿野の現在の紅頭嶼に於けるヤミ族との生活及び民族研究と当時の台湾に於ける日本の植民地支配について書かれている。二章以下は鹿野の研究とその人となりが各章に別けて述べられている。

私が鹿野忠雄に対してもっていた思い出は、台湾山岳登攀者、そして動物特に昆虫採集研究者としてのみしか認識していなかったが、五章「地理学的空白への挑戦」に於いて動物学者鹿野忠雄の他の分野に於ける諸研究を知ることができた。即ち自然地理学者としての鹿野で、著者はその事について「鹿野の山行は、（昭和六年）七月中の三週間を使って、大甲溪（だいこうけい）を遡行、次高山東山稜を精査、バットアノーミン山（標高三六一三・六㍍）のやや南のユボラン山（三三一一・五㍍）より次高山までの稜線の一般人として地形学的観察を行った。次高山の登頂はこれで三度目であったが、それまで特殊地形であると思っていたものが、このときの探査ではじめて氷蝕地形としてのカール（圏谷）であることを認め、台湾における氷河地形最初の発見となった。」と記している。

又六章「台湾における氷河圏谷の発見―台湾ならびに紅頭嶼の自然地理学と動物地理学」では「氷河地形探査は、実は鹿野にとって、台湾における生物学調査の副産物であったという方があたっているかも知れない。高山に氷河地形を探すことは、それ自体楽しい作業であった。しかし、この時代、氷蝕作用のあった時代の決定はまだ容易なことではなかった。近年、古生物の分布状況、火山からの降下火砕物あるいは火砕流下物（いわゆるテフラ）、花粉分析、古汀線の分布などから氷期の時代決定を進めうるようになったが、当時の状況ではこの時代決定はまだまだ困難であったからである。したがって、多くの場合、それが果たして氷蝕作用によるものかどうかの確認にもっとも力が注がれたが、それは必ずしも鹿野の本意ではなく、やはりこの氷期の時代決定のほうが問題であった。氷河地形の台湾における発見は、鹿野にとっては、かれの台湾島ならびに紅頭嶼の生物地理を考えるのに重要なデータを、かれ自身に提供するはずであったからである。そして動物地理学こそ、鹿野の胸に秘めたメイン・テーマであった。」と推測している。

鹿野は台湾に於ける調査には愛用のライカで逐一克明に記録したと伝えられる。それは民族学者の鳥居龍藏が写真映像にその記録性を求めたことに触発されてのことではないかと考えられる。

著者は本書の中で当時台湾をめぐって活躍した日本の学者ばかりでなく外国人スインホー、フォーチュン等の業績にもふれ、著者の筆にはよどみがない。

当時大島正満はサラマオマスの発見につとめていたが、「鹿野は、氷蝕地形を形成した年代を想定し、サラマオマスの古地理的意義を検討しつつ、こうした次高山脈に棲む動物の垂直分布の考察を試みている。」と著者は六章「台湾における氷河圏谷の発見」で述べている。

八章「軍靴の響きの中で」では日本民族学会と渋沢敬三との出合いとその援助のこと。九章「マニラにて」は日本軍占領下のマニラに於ける陸軍嘱託としての活動、フィリッピン大学のドイツ系アメリカ人の人類学社会学科教授ヘンリー・オトレイ・ベイヤーの捕虜収容所からの救出及びその民族資料等の保存に関与した事績が述べられている。

又十章「台湾の歴史民族学」に於いては、「研究途上であったというものの、台湾の先史時代の文化層ならびに原住民族の文化史的位置づけは、鹿野によって著しく鮮明となり、台湾の比較文化史を

大きく前進させることになった。」と幅広い鹿野の学問的視野について説明している。又文字通り台湾に於ける先史時代の調査を実施している。「この事は明治、大正期の鳥居龍蔵、森丑之助等の活動のあとを引継ぐ形となっている」とも記されている。

ここで注目したいのは台湾特に山岳地帯における鹿野の行動である。特別の場合を除いて原地人の青年を伴ったものの単独行が多いという事実である。三千㍍から四千㍍に近い高山も、山頂への登頂ばかりでなく、動物、植物、地形等の採取調査をしながらの山旅であった。現在台湾山地への旅は容易であるといわれているが、現地に入ってみると肉体的な苦痛は、日本内地での登山の比ではない。鹿野は行動中、写真を撮りメモを書き、収集品の整理に研究に没頭したのではないかと思われる。

鹿野の台湾に於ける山行についてはその著書『山と雲と蕃人』や沼井鉄太郎の労作「台湾登山小史」(『山岳』第三十四年第二号)の中にしばしば名をつらねている。

一九四一年鹿野は丹那静子と結婚した。三十五歳の時であった。当時鹿野は東大の地理学科教室に所属していたが、博士論文は京都帝大に提出し受理された。その論文は『次高山彙の動物地理学的研究』で、当時の東大の権威主義アカデミズムのひずみがそうさせた感がないでもない、と著者は述べている。

十四章「悲劇」の中で「あれほど頑健な体であり、高砂族の中に入って、ともに生活した経験の持ち主であるから、おそらく敗戦を知ると同時に原住民の中に逃げこみ、どこかの村できっと元気で暮らしているにちがいない、という見解がある」との憶測も生れたと著者は書くが、悲劇は日本軍憲兵の手によって行なわれていたのであった。「戦後数十年を経過した後、横井さん、小野田さん、台湾のアミ族の中村スリヨンさんなどが、旧戦地から奇跡的な生還するたびに、あるいは鹿野忠雄もひょっとしてまだ生きているのではないかという思いは、御家族ならび知人の多くにとって、祈るような気持であったろうと思われるのだが、日本の敗戦の日の前後、憲兵隊に殺されたというのが、うわさどおりのことかもしれない。なんともやりきれない、悔しいことである。」とその無念さが文章の行間にあふれている。鹿野三十八歳の働きざかりであった。

かって玉山(新高山)の山頂付近に天体観測所を設置しようと台湾に渡り、玉山に登山した一戸直蔵の伝記がリブロポートのシリーズ民間学者の一冊として出版された時、なんで鹿野忠雄の伝記が出ないのか不思議におもった事があった。今日ここに鹿野忠雄の詳細な伝記が出版された意味は非常に大きいものがあったと考えられる。著者の台湾山岳、動植物及び南方文化圏に関する資料等の渉猟の努力はこの著書を読むものに多大の感銘を与えるものと考えられる。

今次の戦争では有意義な文人学者ばかりでなく数多くの岳人を失ってしまったことは、かえすがえすも残念なことである。しかしここに一人の人間の生涯が明らかにされた事は大変なことで著者の労苦に対して最大の賛辞を呈したいと考えている。

最後に一言すると、この様な伝記には参考文献や人名索引が附属

していて、本を読んでゆくのに必要かくべからざるものであるが、鹿野忠雄の年譜がないのが淋しい気がするのは私のみであろうか。

（浅野孝一）

I・デシデリ著、薬師義美訳
『チベットの報告』

平凡社（東洋文庫）全二巻　一九九一年、一九九二年刊
報告1三四七ページ、報告2三四九ページ、各二八八四円（税込）

シドッチとデシデリ

屋久島の夏は盛りだった。その焼け付く海岸の砂浜に一人の男が立っている。ヨハン・シドッチ―イタリア人。イエズス会の宣教師である。彼はフランスの大船で屋久島沖合までやって来て、小舟でたった一人、鎖国日本に上陸した。勿論キリスト教布教のためである。宝永五年（一七〇八年）八月のことであった。

その後、シドッチは江戸に送られ、小日向切支丹屋敷の獄舎につながれた。そして翌年には新井白石から四度の尋問を受けた。白石はシドッチについて「およそ、其人は博聞強記にして、ヨーロッパに於て多学の人として知られ、天文・地理に至っては、とても匹敵できるとは思われない」といっている。

シドッチはそれから五年程生きのび、正徳四年（一七一四年）十月に獄死する。四十七歳であった。

シドッチについては白石の『西洋紀聞』に詳しいし、藤沢周平の『市塵』にも登場する。

イエズス会シドッチ師が獄死した一七一四年の秋、「チベットの報告」の著者イポリット・デシデリはパンジャブ地方のラホールにいた。

デシデリは一六八四年十二月生れのイタリア人である。つまり、デシデリはシドッチの十七歳年下の同国人であった。彼はイエズス会からチベット王国での伝道を命ぜられて、ラホールまでやって来ていたのである。

ほぼ同時期に、シドッチは鎖国政策をとり、すでに何人もの殉教者を出している日本へ、一方デシデリは日本と同じく仏教国であり、当時は殆んど未知の国であったチベットへと入って行くことになったのである。

二人の属したイエズス会は、マルチン・ルターの宗教改革の後、たがのゆるんだカトリックに活を入れるべく創設され、主として海外の伝道にその勢力を注いでいた。そして厳格な規律と統制、教皇への絶対服従により辺境の地で熱烈な布教活動を行っていく。そのストイックな情熱、信仰心、宗教のもつエクスタシーが彼らの行為に横溢していたのである。

本書の成立

『チベットの報告』の編者であるフィリッポ・デ・フィリッピについては多くを語る必要はないだろう。アラスカ・アフリカ・カラ

コルムに大きな足跡を残したイタリアの探検家、登山家、学者である。本文の筆者の登山隊も挑戦したチョゴリザの頂上直下まで、かつて初めてフィリッピが迫っている。

『チベットの報告』は最初イタリアのカルロ・プイーニ教授により『チベット――地理、歴史、宗教、習俗』と題され、一九〇四年に原典のとおりのイタリア語で公刊された。

しかしプイーニの公刊したものの他に、二種類のイタリア語の手書き報告書があり、フィリッピはこれらを編集合体させて、より完全な「チベットの報告」を作り上げた。更にイタリア語では世に流布し難いので、英訳本を次の諸氏に依頼して作ることにしたのである。本文はジャネット・ロス女史翻訳、研究資料、序文、注記はジョアン・レッドファーン嬢翻訳。

このようにして、この編訳本は一九三七年に出版され、これを和訳されたのは、本会会員でありヒマラヤ文献学の第一人者である薬師義美氏である。つまり、フィリッピの意図がわが国でも間接的にであるが、実現したのである。

東西交渉に関するかなりの原典の翻訳が、シルクロード・ブームにも乗って上梓されているというのに、本書は未だ和訳されていなかった。『チベットの報告』はチベット探検に関する邦訳文献の中では、あたかも未登の八千メートル峰の如き存在であった。従って訳者にとっては、大変な大仕事をされたことになる。

さて、本書はまず、C・ウェッセルズ神父によって著された序説「チベットにおけるイエズス会の布教活動　一六二五年～一七二一年」からはじまる。ここではアントニオ・デ・アンドラーデ神父にはじまるグゲ王国の首都ツァラパンでの布教から、デシデリのラサ行きに至るカトリックのチベットでの伝道の歴史が描かれている。

次に本文の「チベットの報告」があり、これは「イエズス会士イポリット・デシデリ神父によって著された、チベットの歴史的概説とそこでの伝道と旅行の報告（一七一二年～一七二七年）」と題されている。

そして第一編にはデシデリのローマからラサまでの旅行記、第四編にはラサからローマまでの帰還の旅について書かれている。

われわれはデシデリの旅までに、数人のフランシスコ派の修道士達が残しているモンゴルのカラコルムや元の大都に至った旅行記録を邦訳で読むことができるが、ラサに至ったデシデリの記録は、それらのものより、はるかにその記述は具体的かつ明確である。

またウェッセルズ神父によるチベットでの布教の歴史や、付録に付けられた同行者フレイレ神父の旅行記「チベットとそこへの旅行の報告」をあわせ読むことによって、デシデリの旅行の行間の意味を知ることができるし、食い違いのある個所が浮き彫りにされて、「チベットの報告」がより立体感を持ってくる。旅行記や日記の類いは、ともすれば自己中心に落ちいるので、それらを補足する記録がついていることは読者の心に安心感を与えてくれる。

デシデリの旅

一七一二年九月二十七日、二十九歳のデシデリはローマ教皇の祝福を受け、ローマを出発した。喜望峰をまわる長い船旅と、ムガール帝国内の旅の末、デリーに到着する。

一七一四年九月デリーを出発し、ラダクのレーに向かう。この頃

イエズス会士シドッチは小日向の地下牢で獄死したのである。

デリーからフレイレ神父に同行してもらうが、フレイレ神父の方が伝道団のリーダーであったようだ。ラホール、スリナガルを経てコーカサス山脈（ヒマラヤ、ゾージ・ラ）を越えてレーに至る。

ラダク地方で伝道事業を行う（再開する）ことが目的であったのだが、この仏教国では十分に伝道を行うことができないと思われた。

フレイレ神父は再びゾージ・ラを越える苦難の山道を行くことを嫌ったので、二人はインダス川沿いに、更にはツァンポ川沿いにラサまで行くことにした。

途中、タシゴンでは幸運にも、ラサに向かおうとしていた地方長官の未亡人の隊と行動を共にさせて貰うことができ、無事ラサに着くことができた。途中の光景は既にわれわれはテレビで何度も見ている。レーの祭り、本文では別名で出てくるカイラス山、マナサロワール湖などである。とはいえ、同時代ヨーロッパには勿論はじめて紹介される光景なのである。

彼らの苦難の旅の完行は、感動的である。だが更に驚異的なのは、フレイレ神父がインドに帰ってしまった後、デシデリが五年間もラサに居続けることである。彼はまずチベット語を習得し、チベット仏教を学習し、その上でキリスト教の布教を目指すのである。その間、地理地形、民俗習慣、政変、歴史などについても観察研究を怠らない。

これらは第二編の「チベットの国土、習慣、国内政治」、第三編の「チベットに広く流布する宗教の、誤謬と特異性について」で詳述されている。そしてこの研究は今なお貴重なチベットの研究資料とされているのである。

第四編ではネパールを経由して、生れ故郷のピストイアを通り、十五年四カ月ぶりにローマに帰り着く行程が書かれているが、全編重量感に満ちあふれ、圧倒的なチベットへの旅及びチベットそのものの記録である。

（田村俊介）

W・シュタイニッツァー著　安藤勉訳

『日本山岳紀行
ドイツ人が見た明治末の信州』

信濃毎日新聞社　一九九二年一月刊

B6判　二六〇ページ　一五〇〇円



一九一一年（明治四十四年）に日本の山を歩いたドイツ人の紀行。原著者名と原題は Wilhelm Steinitzer : "Japanische Bergfahrten" で、「明治末の信州」という副題は、信州の出版社が営業政策上つ

けたものであり、信州以外も舞台になっている。

ヴィルヘルム・シュタイニッツァーという名前を目にするのは私にはこれが初めてだが、明治期に日本の地方や山地を歩いたイザベラ・バード、H・チェンバレン、E・モース、E・サトウ、P・ローウェル、W・ウェストンといった既知の人々の中にまたひとり新しい名前が加わり、貴重な資料が追加された。いまあげたような人々は、他に本業をもっていて、山は趣味として、あるいは業務を利用してのたのしみといった面をもっていたのに対して、この本の著者は、初めから日本の山を歩くことを主な目的として来日したらしく、その点では実に画期的なことといえるだろう。この人の経歴が訳者の解説などでもっと解明されていたら、興味はさらに深まるにちがいない。故国ドイツの山はもちろん、ジャワやスマトラ、ニュージーランド、中国山東省の山などをすでに歩いた後に日本の山に目をつけたようで、参考書は、E・サトウ、H・チェンバレンらの『日本旅行案内』とウェストンの例の本であったようだ。

彼らの目に映った当時の日本の自然や風俗は、その大半がすでに私たちにとっても異国の話のように見えるほどに姿を変えてしまっていて、異人たちの目に頼らなければ自分たちの国のかつての姿を知ることができないという部分があるわけだが、私たちの辿ってきた道筋を正確にするためにも、こうした資料はおおいに役立ち、比較文化のうえからも価値のある出版というべきである。

著者が登ってこの本に描かれているのは、甲斐駒、槍、穂高（前穂高のようだ）、笠ヶ岳、立山、針ノ木峠、妙高、木曽駒、富士、箱根、阿蘇、鶴見岳などで、一つの山を降りてそのまま全くちがう地方の山へとつなげてゆくさまは、いかにも精力的なドイツ人を思わせる。日本がこんなにすばらしいかと思われるような魅力的な描写もあって、新鮮なおもいもする。この人は、私たちがいま、アルプスやヒマラヤ、ロッキーなどに続々とツアーを組んで出かけてゆくのと同じあこがれ、いやそれとは別種の、もっと純なおもいと感受性とを持っていたようだ。

「マツモト！　大多数の人びとにとっては空虚な響きであろう——だが、わたしにとっては、長年憧れ続けた町。数年このかた日本地図をひろげては物欲しげにあれこれと夢想し凝視しつづけた一点」などという文章が明治の末にドイツ人によって書かれていたことには、驚きとともに、不思議な戸惑いすらおぼえる。カトマンズやグリンデルワルトといった地名に日本人がこの種の憧れを抱くようになるのは、大正も末、あるいは昭和に入ってからのことなのだから。

「日本の山々を巡り歩いた日々は、わが生涯のいかなるところにもまして、くめども尽きぬ自然との心からなる交歓ができた。だから、日本の日々は、わたしにとって何物にもかえがたい宝である。いまでも、いわゆる〈ヨーロッパ文明〉と言われるものへの恐怖の念に襲われることがある。そのときには、心中ひそかに日本の山々に逃れ、巡り歩いた日々を追想したいと思う」というような記述に出合うと、まるで辻村伊助におけるスイスの裏返しではないかと思えてくる。

ヨーロッパよりもヨーロッパ的に、アメリカよりもアメリカ的にその文明をかかえこんでしまったような現代日本にいて、私たちは、

日本の山の持つ価値を見直し、いままで以上に大切にしなくてはなるまいと思わせる記述は、この本の中のいたるところにある。

槍沢で偶然出会った嘉門次や、山や山村の興味深い写真が入っているのもありがたい。

（大森久雄）

ダグ・スコット著　坂下直枝／『岩と雪』編集部訳

『ヒマラヤン・クライマー』

山と渓谷社　一九九二年十一月刊

A4変形版一九二ページ　定価四八〇〇円

本書は、イギリスを代表する先鋭的登山家の一人、ダグ・スコットの、はじめての自伝的写真集の邦訳である。

ダグ・スコットは、一九七五年九月、ドゥーガル・ハストンとともに、エベレスト南西壁を登って、エベレスト登頂に成功したことによって、一躍、〝ヒマラヤン・クライマー〟として、注目されるようになった。登頂後、八七五〇㍍の雪洞でビバークを強いられながら、凍傷もなく、無事、下山したことが、一層、強烈な印象を与えた。

それ以外にも、ヒマラヤ登山での業績は数多い。むしろ、ダグ・スコットの活躍は、エベレスト以降、一層、目立つようになる。彼の足跡は、ネパール・ヒマラヤはもとより、ヒンドウクシュ、カラコルム、チベット、ガルワール、ラダック、ブータン等、広義のヒマラヤ山脈で、都合三十六回に及んでおり、毎年のように、記録が発表される度に、それこそ、ヒマラヤ登攀史に衝撃を与え、大きな波紋をよび起こしてきた。マカルー（東南稜、西壁、三回）K2（西稜、南支稜、東壁、四回）、ナンガパルバット（ルパール壁南西稜、一回）等、失敗に終わったものもあるが、オーガ（一九七七年）、カンチェンジュンガ北稜（一九七九年）、ヌプツェ北稜（一九七九年）、チャムラン北壁（一九八一年）、シブリン東稜（一九八一年）、シシャパンマ南西壁（一九八二年）、ロブサン・スパイヤー南稜（一九八三年）、シチュダケ南壁（一九八八年）等で、数々の輝かしい成功を収めている。それらの登攀が、いずれも、無酸素、軽量、少人数のアルパイン・スタイルによる初登攀であるところに、ダグ・スコットの本領を見ることができる。ケン・ウィルソンが、「スコットの登山の特徴は、つねに新しく難しい課題に挑戦しようという意思力にあり、より安全で容易なルートで成功することには絶対に妥協しない強い心にある」と述べているように、ダグ・スコットの半生は、修羅場での、挑戦の連続だった。それだけに、幾つもの失敗があるということは、限界状況のなかで、勇気ある撤退に成功した証しであって、〝ヒマラヤン・クライマー〟の勲章とも云える。一九七七年のオーガでは、登頂成功後、懸垂下降に失敗して両足首を捻挫し、それから八日間の苦闘の末、最後は四つん這いになってベースキャンプに生還する、といった経験をしている。このときは、クリス・ボニントンも肋骨を折り、肺炎を併発して、必死の下山だった。この二人の生命を救ったのは、モー・アントワーヌとクライヴ・

ローランズの献身的・かつ適確なサポートであったことは間違いないが、ダグ・スコットについて云えば、他の人だったら、まず生還できなかったところを何とか下山したことによって、かえって、その体力と技倆が高く評価されたのも、彼ならではのことである。なお、本論とは関係ないが、この時のモー・アントワーヌの側に立ったストーリーが“Feeding the Rat”（by A. Alvaren, 1988）（邦訳『山男にみる生き方の研究』・新潮社一九九〇年）に載っていて、比較して読むと面白い。

いずれにせよ、ダグ・スコットも、ある種の超人であるが、ラインホルト・メスナーのような、天才的な能力をもった超人と異なり、経験によって磨きをかけ、時間をかけて傑出した才能を開花させていったところに魅力を感じる。当然のことながら、抜群の体力と高いレベルの登攀技術をもっているわけだが、「週末のクライミングを積み重ねていくうちに登攀能力が少しずつ向上していったが、私の場合、その時代のトップレヴェルに追いつくまでには至らなかった」（四五ページ）とか、「一九六〇年代のアルプスでは典型的な大ルートを好んで登った。その後は、遠征登山に精を出すようになったため、最高レヴェルのアルプス登攀を私が体験したのは一九八〇年（注・著者三十九歳のとき）になってからだった」（一六ページ）といった文章を読むと、その風貌や伝説的な振る舞いぶりからは想像できない、控え目で真摯な、かつ自分を見つめる目の厳しい人柄が感じられて楽しくなる。

ダグ・スコットが少年時代にもっとも影響を受け、憧れたのは、エリック・シプトンだったそうだが（“Changabang”, 1975）、四回もバフィン島遠征を繰り返すあたりを見ると、納得できる気がする。また、シプトンとの関連で云えば、ダグ・スコットは、シプトンと同じように、五十代になって心の安らぎを得て、新たな挑戦（シプトンの場合にはパタゴニアだった）に立ち向かうことが期待できる数少ない登山家の一人だと思われる。

ダグ・スコットは大変寡作であり、本書が実質的には三冊目の著書である。副題に「世界の山岳探求に捧げた半生」とあるように、本書を通じて、われわれは、はじめて、彼の四十年近くに及ぶ長年の広範、かつ充実した数々の登攀の輪郭を知ると同時に、彼の人となりやものの見方、登山観に触れることができるのは、大変ありがたい。

写真家でもあるダグ・スコットにとって、はじめての自伝的著作が写真を中心としたものになるのは当然の成り行きかも知れないが、素晴しい写真が多く、印刷もきれいで、臨場感を高めている。山に挑む目線で、ファインダーを通して捉えられた山、そして極限状況のなかで山と格闘する人間の姿は、単に山を眺める対象として撮った、いわゆる山岳写真にはない迫力がある。

本書の原本は、ロンドンのDiadem Books社から英文で出されたシリーズものの一冊だが、邦訳も、写真、文章ともに、原本のスタイルを忠実に追っている。しかし、本書をこのシリーズのなかのクリス・ボニントンの“Mountaineer”（1979）と較べてみると、世界各地の辺境の人々や彼らの生活風景を撮った写真が豊富に収められており、ここに同じように先鋭的な登山を志向しても、ボニントンとは異なるダグ・スコットのスタイルの特色が鮮やかに浮かび上

がってくる。

「見知らぬ土地へ行ってみたい、まだ見ぬ岩に触れてみたいという衝動が常に私の中にあって、それが新しいルートを開拓したり、やがては、はるか遠くの世界の辺境の岩場を登ることにつながり、ヒマラヤの高峰に向かう起爆剤になっていたように思う」(一〇ページ)と述べているように、ダグ・スコットにとっては、ヒマラヤだけが全てではなく、世界中の未知、未踏の山々と岩壁が関心の対象であった。また、山に登ることだけでなく、山岳地帯や辺境に住む人々への愛着が強く、彼らを知ろうとする気持ちが人一倍強かった。この点は、地理の教師であったことも関連があるかも知れないし、シプトンの影響ということも感じて興味をそそられる。

クリス・ボニントンが「これ程山登りが好きな男をわたしは知らない」("Everest the Hardway", 1976)とあきれる位、ダグ・スコットの登山への傾倒ぶりは目を見張るものがある。とにかく、一年の三分の二から四分の三を次から次への遠征に費やし、それを何十年も続けてきたエネルギーは驚嘆に値する。しかし、彼の山行歴を見ると、最初の海外遠征は二十一歳のときのモロッコ・アトラス山脈であり、続いて、二十四歳でアフリカのチャドにあるティベスティ山塊に出かけている。その後もトルコ東部のシロダー山塊、アフガン・ヒンドウクシュ、カナダ北極圏のバフィン島と、一九七二年にはじめてエベレスト遠征に参加する以前に精力的に出掛けた地域は、どちらかと云えば、目立たない、話題性に乏しいところばかりである。ダグ・スコットは、これらの山々で、登攀技術を磨き、それぞれ、立派な実績を残しているが、傑出した〝ヒマラヤンクライマー〟の自己形成の過程として考えてみると、このあたりに彼の一味違った持ち味の源泉があるようだ。

ダグ・スコットは、高所登山やビッグウォールの登攀において、記録よりも、未知の世界や限界状況での自らの経験に関心が強く、それだけに、ひとつひとつの登攀に対して、その動機と自己発見の過程を大事にするタイプの登山家である。その点、本書は写真を中心にしたものだけに、著者の内面を詳細に語ってもらうにはスペースが不足で、物足りなさが残る。ダグ・スコットの本格的な自伝の出版を期待したい。

なお、これだけ世界を股にかけた登山活動を扱いながら、地図が一枚もないことは、イギリスの本では往々感じることだが、残念である。

(中島　寛)

ラインホルト・メスナー著　松浦雅之訳

『ラインホルト・メスナー自伝 自由なる魂を求めて』

TBSブリタニカ刊

四六判　四四二ページ　二五〇〇円

ラインホルト・メスナー、一九四四年生まれ。南チロル出身のこの登山家は、六〇年代後半から八〇年代半ばまで、二十年の長きに



わたって世界の登山界に君臨してきた。そのヒマラヤの「超人」も来年五十歳の大台に乗る。本書は、そのメスナーの若き日の山行からクライマーとして世界の頂点を極め続けた三十有余年の日々をまとめた本である。

四六判四四二ページの中に、少年時代から南極徒歩横断を果たした九〇年まで、年代順に全体を四部構成三〇章で綴っている。半分近いページをさくのが第一部で、両親から放浪への憧れを授けられた故郷フィルネスの谷から始まり、一九七〇年のナンガパルバット遠征までをまとめている。ナンガでは弟ギュンターを失う悲劇に見舞われたが、ルパール壁からディアミール壁へと横断して生還している。いわば世界の登山界にデビューするまでの、この第一部が私には読んでいて一番楽しかった。

例えば、「あらゆる大陸に旅するようになって、ぼくはようやく悟った—冒険とは単に遠い土地や山の頂をめざすことではなく、むしろ、家庭の団欒の代わりに不確かな休息の地をみずから求めようとする心の姿勢にあるのだということを」。こういう心の内を語る部分が一番多いのが第一部である。正統派のハインリッヒ・ハラーやヘルマン・ブール、ワルテル・ボナッティの系譜につながるクライミングを行ってきたと自負を覗かせながら、生き生きと岩壁に若い情熱をぶつけている。

第二部は、仲間が死にメスナーだけが生き残ったマナスル遠征、二人で登ったヒドンピーク、エベレスト無酸素登頂の七八年までをまとめている。相次ぐ遭難に批判の嵐を浴び人間不信に陥りながらも、旧来の方法を打ち破る形でヒマラヤ登山を実践した時代である。

第三部が、ナンガパルバット単独行からエベレスト単独行、八千メートル峰十四座登頂、そして九〇年の南極横断と続く。そして最後の第四部は、「新しきクライマーたちへ」と題して、ローツェ南壁単独登攀を果たしたトモ・チェセンへの賛辞に埋められる。わずか三〇ページ足らずだが、さまざまに検証しながら最後に「だからぼくは、あえて主張する。トモ・チェセンは今日における世界最高のクライマーである、と」。

かってボナッティが、アルピニズムの新しい地平を切り開く男としてメスナーを指名したように、チェセンを名指しで称える。本書のハイライト部分である。

すでに単行本で読んだ話も多いし、膨大な著述にもかかわらず、不満は残る。記録を集大成し、数々の山行を凝縮して一冊にしているために、メスナーの持つ「詩的な部分」、登山を語りながら読む者を幻想の世界に誘うような文章がすっぽり落ちてしまっているのに気が付く。例えば、二万五千分ノ一地図で探っていたものを、急に二十万分ノ一地図で見たようなもどかしさがある。今までとは違う別のメスナーの姿が示されれば満足度は違うのだろうが…。

原題は「Free Spirits : a climber's life」である。邦題は、「自伝」

と銘打ってあり、そのつもりで読み進めると失望感が生まれる。本書はクライマーとしての自伝であって、メスナーのそれ以外の部分、妻ウシーとの出会いと別れ、友人たちとの葛藤など、超人メスナーの人間的側面を期待して読むと拍子抜けしてしまう。

邦訳第一号の『第七級』をむさぼるように読み、『ナンガ・パルバート単独行』で、幻影と会話しながら登るメスナーを知っている私のような読者は、がっかりするのではないか。八千㍍峰を世界で初めて単独登頂したメスナーのこの登山記には、頂上近くで疲労困憊しながら見た少女の幻覚が綴られる。普通の登山者では言葉で語れないような世界を表現してきた、そんなメスナーの著述を期待すると裏切られる。

フェアな手段で高峰に登ろうと心がけ、それを実践し続けた男メスナー。「もう、山では語るものがなくなったのか」とがっかりしながら読み進めると、はたと別のことに気が付いた。当たり前のことながら、その膨大にして圧倒的な登山記録である。第一部の修業時代の膨大なクライミングがなければ、ヒマラヤのアルパイン・スタイルの実践は生まれなかっただろうと思う。方法論だけで無酸素速攻登山を理解した多くの登山家にたいして、この生きて還った若き時代の記録があって初めて提示されたアルパイン・スタイルであったことが理解できる。

最後の第四部では、トモ・チェセンを語りながら結局はメスナー自身を表現しているように思える。「トモ・チェセンがその深慮と自信ゆえに達成し得た業績は、他のいかなるクライマーにもまねできない。あまたの登山家たちとの違いは、まさにそこにある」「彼のようにすぐれた能力から生まれる自信と精神的・肉体的な均衡を持ち合わせた者は皆無だ」。巨大な登山記録の山脈を築いた男だけが書ける文章であり、自負である。

メスナーは邦題『生きた、還った』で、グラフィックに八千㍍峰の世界を紹介した。本書で記録の集大成を終えた。次はきっとより文学的な、クライマーとしてではなく、人間としての内面を語るのではないか…。次作にそんな期待を込めたい。

（永田秀樹）

根深　誠編著

『森を考える　白神ブナ原生林からの報告』

立風書房　一九九二年刊　四六判

五五三ページ　二六〇〇円

白神山地は、秋田、青森両県にまたがり、標高五〇〇から一〇〇〇㍍の亜高山である。日本海型の典型的ブナ林を主体とする原生的な天然林は、わが国屈指の森林景観として名高い。

その生態系を保全し、遺伝子資源を後世に伝えるため、国は白神山地の主要部分を森林生態系保護地域（林野庁指定）、また自然環境保全地域（環境庁指定）として手厚く保護する方針を打ち出して



いる。このような政府の姿勢を反映して、世界遺産条約の自然遺産として白神山地を登録し、その保護を国際的に監視していこうとする議論も現在、急速な高まりを見せている。

しかし、白神山地の自然が「後世に無傷で残されるべきもの」として正当に評価され、手厚く保護されるに至るまでには、険しい道程があった。それは、自然の恵みを経済活動の資源として利用しようとする立場と、開発計画を阻止することで自然保護の道筋を確定しようとする立場の激突の場面を通して実現されていったと言えよう。

本書はそのたたかいの過程を、約十年間にわたる新聞、雑誌などの記事によって再現しようとする意思によって編さんされた。問題の青秋林道建設計画の浮上から自然保護運動の高まりへ。そして計画断念と保全計画の具体化。その歩みを年次的に整理し、「森に乱伐の音が鳴りひびく」、「人は自然とともに生きている」、「開発の根底がゆらぐ」、「開発と保護の記録をみる」の四章で構成されている。白神ブナ林保護問題を考えるための研究資料や年表を巻末に収録し、自然保護運動の成果とそれによって残された課題を検証する努力について世に問おうとする記録集である。

第一章の「森に乱伐の音が鳴りひびく」は、冒頭に谷川俊太郎の詩を配している。「森にけものがいなくなった日／森はひっそり息をこらした／森にけものがいなくなった日／ヒトは道路をつくりつづけた」。その詩は、人間による自然破壊がやがて人間の崩壊につながることを予感させながら、「空に小鳥がいなくなった日、ヒトは知らずに歌いつづけた」と結ぶ。それは、白神山地を大規模な林道が貫くことになった時、人々がその彼方に見たカタストロフィを彷彿とさせる。この章で読者は、ブナ林が地上から次々に消えて行き、白神地域が世界的にも貴重な財産であることを知る。しかし、そのブナ林は「保安林」の名を冠せられているにもかかわらず、大型の土木予算の行使のためにはほとんど無価値の代物として排除されようとしていた。

ブナ林をめぐる開発か保護かの議論の焦点となったのは、原生林を貫くかたちで計画された広域基幹林道「青秋線」（略称・青秋林道）である。その林道は秋田県の北、日本海側の八森町から県境に沿って青森県鰺ヶ沢町、西目屋村へと国有林を縦断するはずだった。「地域振興」を旗印に地元の関係者らが開設促進期成同盟を結成したのは一九七八年の十二月のことだった。しかし、その計画はやがてブナ林をズタズタに伐採し、野生動植物の宝庫を根底から破壊するものであるとして批判を招く。

本書に収録された新聞記者・原剛氏の一文によれば、ブナ林はヨーロッパでも「森の母」と呼ばれるという。しかし、樹木の価値が経済的な効率を唯一の軸に語られる現代において、ブナ林は単なる「劣等樹木」の集合として見られるようになった。だが、今やその集合は、「山村の人々の暮らしと野鳥やけもののいのちが共存で

きる森」としての大きな価値を見出されなければならない。森林を見すえる経済万能の価値観を逆転し、「日本で最大の遺伝子貯蔵庫」としての役割に国民の多くの賛同を得ようとすることが、白神山地の保護を叫ぶ人々を支える思想であった。

第二章の「人は自然とともに生きている」で、日本自然保護協会の沼田眞氏は国際的に高まる地球環境保護の機運の中に、白神ブナ林保護運動をしっかりと位置付けている。沼田氏は、「チェルノブイリの事故でみられた放射能汚染のような例がグローバルな問題であることは誰でもよくわかる。ところがサンゴ礁とかマングローブの問題は…」と問題提起し、原生的な森林を保護することが国際社会からあたえられた要請であることを説く。ここにおいて、白神山地は「生態系の多様性の保全」というテーマのもとに、国際的な監視の中に置かれることになった。

八二年、自然保護団体が建設阻止の要望書を関係機関に提出すると反対運動は本格化、やがて全国の自然保護団体がこれに加わった。保護運動に押された国は林道建設計画を断念、九〇年三月、林道が貫くはずだった約一万七千㌶を森林生態系保護地域に指定し、国有林の伐採自粛と白神山地の保全計画が公表された。森林生態系を無傷で後世に伝える行政の決断を引き出し、自然保護運動は一定の成果にたどりついたと言うことができよう。

しかし、白神ブナ林保存運動の一連の過程は、日本の自然保護行政がいかに脆弱であるかを世に問い、その怒りを記録する行為でもあった。本書は、白神山地の論議を通して日本の自然保護運動の現状を見渡そうとする姿勢に貫かれる。それは、多くの場合、権力に対する反抗の声として起こり、運動の最中にも開発が強行される形態を取ってきた。開発をストップさせた白神問題は、極めて稀有な例なのだ。

本書の編者・根深誠氏は「あとがき」で「守り残されたブナの森をこんどは観光の目玉にしようと、開発側が衣替えしただけだとしたら、自然環境保護の理念などあろうはずもない。むしろ、その瞞着性によって混迷する事態を招くだけである」と、自然保護の底辺の貧しさを嘆く。そして、「依然として、ブナ原生林の破壊に対して反対決起した地元赤石川流域住民の水利権をめぐる生活環境問題は解決されないままなのである」と残された課題を指摘して結んでいる。

ところで本書には、「日本最大規模のブナ林」を誇る白神山地の四季折々の写真がふんだんに掲載されている。巻頭を飾る猿のカラー写真が特に印象的だ。その猿は、ブナの大木に半身を隠しながら、カメラの方をうかがっている。それは、落ち着き無くおびえながらも、人間の為すことをしっかりと見届けようとする「自然からのまなざし」である。

ブナ林の保全・活用をめぐる開発派と保護派の攻防は、人間たちの自然への関わりの歴史として、自然の側から見詰められ続けていたのである。本書は自分たちの誤りに気付き、それを是正しようとした人々の自然保護のたたかいの記録である。そして、自然から見られていることを意識した人間理性の記録として読み継がれることだろう。

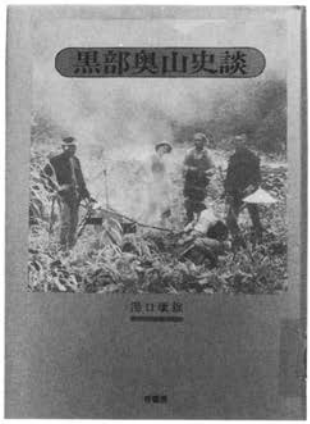
（滑志田　隆）

湯口康雄著

『黒部奥山史談』

桂書房　一九九二年刊

A5判二五七ページ　三〇九〇円



中河与一の名作『天の夕顔』の末尾近く、主人公の薬師岳登山の場面がある。頂上で「遙か遠くの下」から黒部川の谷音が手にとるように聞こえてくるのを聞き、「それはまさに天の旋律のやうな不思議でわたくしの心を魅了しました」（昭和三十八年版）と余韻をこめて書き認めた。川田順の歌集『鷲』収録の連作「立山」五十四首中「現身（うつそみ）の眼はもとどかぬ谷底よりここにきこゆる黒部川の音か」と立山頂上で黒部の谷音に耳を澄ました一首がある。これら文学作品に歌われた黒部川の音は、まさに「うつそみ」を超え、「天の旋律」となって、いつまでも読者の心魂に響いてくる。

しかし、微妙な渓音をかなでながら、容易にその姿を見せぬ「ぬばたまの黒部の谷」は、枕詞「ぬばたま」の語感そのまま黒々として近づき難い神秘境であった。

黒部川最下流の扇状地を乱流する、いわゆる「四十八が瀬」は、すでに『源平盛衰記』『義経記』『梅花無尽蔵』などの古典に登場するが、立山背後の絶巌黒部奥山が史上かすかに姿を見せたのは、ようやく戦国時代も末期の佐々成政ざらざら越えの時であった。成政の壮挙に刺激されて江戸時代年々加賀藩が実施した奥山巡検によって、はじめて黒部は具体的にその雄大な相貌を見せた。

しかし、山廻り関係者は「天罰起請文」を書かせられ、黒部奥山の情報を他に漏洩せぬことを誓約させられた。山廻り役たちの作製した絵図・記録は、一般人の披見を許さぬ加賀藩の秘密文書であった。

わずかに黒薙・西鐘釣・西仙人の諸温泉が開湯され、細々とした湯道がつけられ、奥山の一端をかいま見させてくれたけれども、それも藩政末期になってからで、西仙人の湯のごとき、その開湯許可は実に慶応四年（一八六八年）すなわち明治維新のその年であった。

近代に入り、黒部峡谷に登山家が足を踏み入れたのも、槍・穂高などの峻岳よりずっと遅れ、辛うじて明治最末期になってからで、井上江花・吉澤庄作・冠松次郎・木暮理太郎・中村清太郎らが主として大正年間相次いで入谷した。冠が「黒部峡谷完渉」に成功したのは大正も末の大正十四年であった。

この黒部奥山の重厚複雑な歴史を学問的に跡づけたのは故中島正文氏の『黒部奥山と奥山廻り役』（昭和十四）の一大労作であった。氏の先駆的業績は誠に偉大で、今も黒部研究にとって第一の基本文献であるが、その最大の弱点は、氏があまり実地を踏まず、ほとん

ど文献上の研究に終始されたことであろう。氏の御生前、この点についてお尋ねしたことがあったが、氏は笑って言葉を濁された。

さきに『黒部雑記』（昭和四十八）を著わした湯口康雄氏は、その後多年にわたる研究の成果を『黒部奥山史談』と題する一冊にまとめて、このたび桂書房から刊行された。

湯口氏は日本アルプスの北端と日本海とが相接する地、富山県下新川郡朝日町に生まれ育ち、若いころから黒部の山々谷々を実に丹念に、こまかい谷筋にいたるまで踏破された。その実地体験を縦横に活用しての古文献研究が今回の著書で、披読すれば、行間随所から黒部の谷音が響いてくる。これこそ中島氏の著書にはなかった大きな特色であろう。

山谷の実地のみならず、氏は山廻り役竹内家・登山家吉澤庄作家などの旧家を訪ね、古絵図・古記録をその目で確かめ、また古書店などから未知の稀購文献をこまめに調べ出し、入手された。文献検討が実地調査を活気づけ、実地踏破が文献の解釈を的確にしてゆく。そこに湯口氏の研究の比類を見ぬ特色がある。

更にまた、故中島氏は主として江戸時代から明治初年までの史料に眼を向け、その視野で奥山廻りの綜合的研究を大成されたが、湯口氏の関心は近代登山史・近代登山文献にも及び、隠れた登山家城川範之に照明をあて、山田珠樹、石部幸弐・暎子夫妻などの業績を大きく発掘し、それら登山家を支えて縦横に活躍した音沢村の佐々木助七、下立村の此川新作・瀬川栄吉、片貝谷村の澤崎源次郎等々に及び、これらの人、あるいはその遺族を熱心に訪問して、その生の声をいきいきと再現された。古書渉猟・近代人物探訪、相俟って湯口氏の研究を立体的に深めた。河東碧梧桐・幸田露伴・夏目漱石など文学者の名も隠見し、氏の幅の広さを思わせる。

黒部峡谷には、登山家と相前後して、東洋アルミナム、古河合名、日本電力らの企業が進出し、電源開発のための調査を進め、営々とルートを開拓し、谷沿いの道路を建設していた。山岳研究の立場からは従来忌避されがちであったこれらの事業にも、湯口氏の研究は積極的に延び、登山史と関連づけつつ黒部奥山の近代の変貌を浮彫りにした。

佐々木助七・佐伯源次郎はいずれも屋号であって、本名は助三郎・源之助であったことも、また「源治郎」と書くのは誤りで「源次郎」が正しいことも、湯口氏はそれらの家の系図まで洗って明らかにした。黒部猫又山の猫又伝説が越後国頸城郡重倉山の古伝説の焼き直しであるらしいことも、氏は古書『猫又退治之次第』の研究によって解明した。

学問的考証を押し進めてゆく氏の筆鋒は鋭いが、その研究を支えているのは、黒部の山谷に対しての溢れんばかりの愛情である。それゆえ氏の文は、黒部の出で湯のごとき味わいと熱気をもって読者に迫るのである。

五章三十篇の内容目次を多少要約して示す。①古記録の中の山と人（文久三年の黒部下奥山日記。慶応元年の黒部上奥山日記。西鐘釣温泉界隈―黒部奥山廻り役の遺墨をめぐって。小杉復堂の「游大連華山記」――明治の山旅。初期の薬師岳登山記――城川範之のこと。黒部懐古――碧梧桐の書簡。黎明期の剱岳三ノ窓をめぐる人々

——山田珠樹のことなど。ザラ峠のウェストン——一枚の名刺が語るもの。Ⅱ山案内人列伝（山廻り足軽竹内家の人々——常右衛門前後。「枕雲嗽雪」の扁額——露伴と漱石。黒部の猟師助七——音沢村の人々。黒部の山案内人下立村の人々——此川新作のことなど。黒部の山案内人瀬川栄吉と石部夫妻の交流——昭和初期の剱・黒部を舞台にして。剱の大瀑行余聞——塚本繁松と竹山幸右衛門）。Ⅲ遥かなる山道（黒部古図瑣談——秘められた山道のことなど。海保青陵と伊東彦四郎。西鐘釣・小黒部への古道——片貝谷からの黒部往来。立山新道のこと——明治初年の開通社。幻の黒部横断道路——片貝谷から松本へ。ある黒部開拓史——東洋アルミナムと日本電力）。Ⅳ山名由来記（唐松・白馬・犬ヶ岳。越中駒ヶ岳の雪形——朝日岳の山名にもふれて。僧ヶ岳の入道——農事のこよみ。黒部猫又伝説遺聞。蛇石について——雨乞い伝説。釜谷山命名のいきさつ——田部重治と澤崎源次郎。ふたりの源次郎——剱岳源次郎尾根命名譚）。Ⅴ絵図・写本あれこれ（越中国図逍歴——立山・剱・黒部への推理。僻遠の山村——有峯村絵図をめぐって。さらさら越えのこと——越中古実記の場合）。以上、目次を見てゆくだけでも鮮やかなイメージが点滅し、心がときめく。

故中島氏の研究が体系的綜合的に編成された大著であるのに対して、湯口氏の本書は随時、諸誌に発表した文を集めたもので、書名も「史談」と随筆調であるが、その内容は以上述べたように幾多の新発見・新見解を雲母のようにきらめかせ、新鮮、豊富である。

故中島氏の『黒部奥山と奥山廻り役』、奥田淳爾氏解読、集大成の『黒部と奥山廻記録』にこのたびの湯口氏の著書を加え、黒部奥山研究のための必読三文献として高く評価するものである。

（広瀬　誠）

坂倉登喜子・梅野淑子著『日本女性登山史』

大月書店　一九九二年八月刊
四六版　一五三ページ　年表二八ページ
一六〇〇円



日本山岳会創立八十周年を記念した展覧会の一環として、女性懇談会による「女性登山黎明期から現代への歩み」と題した登山の歴史や各種資料、写真が梅野理事（当時）を中心として収集され、好評を受けた。終了後は、松本アルプス山岳館に寄託し、展示されている。しかし資料収集をそこでやめてしまっては、中途半端になってしまうので、これは誰かがやらなければならないし、今やらなければ資料発堀は、ますます困難になると思われ、その後も資料集め

を継続することになった。

「本をつくることは地味な仕事で、山に登る人は大勢いても、なかなか集まらず、今回二人で作ったが、女性懇談会として出版したかった」と会報「山」一九九二年十二月号に、この本が出版されたばかりの八月の女性懇談会・御岳山全国集会の「女性登山史あれこれ」の席で梅野さんは述べている。

私の育った戦後の時代は男女平等で自由な教育を受けてきたので、あまり、女性、女性とこだわりをもたずに山に親しんできた。一昨年この本を一読したが、今回もう一度読む機会を与えられたので、その読後感を述べます。

共著者は「はじめに」の章で、日本の女性が、山に登るについて次の難関があったと言う。一つ「女人禁制」、二つ「女だてらに」というような差別意識、三つ、社会的、経済的地位の低さ、四つ、男性と比べての体力的な差。この四つの難関が日本女性が山に登ることを阻んでいたという。したがって女性登山史とは、それらを乗り越える歩みの積み重ねなのである。こういうわけで「日本女性登山史」とは、単なるスポーツ史上の興味にとどまらないのであると述べている。

本文は七章からなり、一章は「女人禁制」と女性の登山。山岳信仰が八世紀に興こり、各地の山が開かれたが、女人禁制が続き、一八七二年に太政官布告により、ようやく解ける。その間にも江戸時代に盛んになった富士講の老行者、小谷三志が男女平等、四民平等、「女性解放」の思想を実現するために、一八三二年高山辰（たつ）を伴い初冬の氷雪の中を登ったという。日本女性の登山の記録としても、最高峰登頂の記録としても最初のものが記してある。この資料発見以前の富士山登頂女性第一号は一八六七年、幕末の駐日イギリス公使のパークス夫人であった。また立山に一八九一年初登頂した女性が、私の住む大津市の湖南アルプスから琵琶湖にそそぐ天神川や草津川にダムを指導して築いたオランダ人の技師、デレーケの十三歳の娘ヤコバ・ヨハンナであるという話にも興味がわいた。

二章、「近代登山の黎明」では、科学者の妻として、一八九五年冬富士山頂に七十二日滞在した野中千代子夫人の記録は強烈である。

この本で私が最も興味を抱いたのが、この二章の中と五章の学校登山の項である。地理的にも山々に囲まれている県立長野高等女学校で一九〇二年に集団登山が開始されている。初代渡辺敏校長の教育方針が「強健な国民を養成しようとするには、人の母たるべき女子の体育に注意しなくてはならぬ。しかるに今の女子の服装では下半身の運動等はほとんどできない。従って今の服装は改善しなければならない」と主張してそれを実施し、さらに登山の折には袴にボタンをつけて「くくり袴」にした、とある。また「御承知の如く戸隠は険山中の最も険山で中学又は師範などの男性中、三、四十人に四、五人は蟻ノ塔渡りの険に至り、逡巡して引き返すものが常であると聞き及びます。しかる所ですから、二、三百人も上る間には、崖下に陥ちて死するものなきを必せられぬのです。たとえ死するものがあるとしても、二百九十九人迄の人の精神身体の訓練上、利益であり、国民教育上有用の事と信ずる以上は、一人位の死者ありとするも、忍んで之を実行せざるべからずと信じ」と、このような信

念と主張を持って四年生全員を対象に戸隠登山を始め一九二五年まで続けられた。この間、一九〇六年から富士登山もおこなった。東京府立第一高女と共に、女子として最も早い富士の学校登山である。（因みに日本山岳会が創立されたのは一九〇五年一〇月である。）それ以後多くの師範学校や女学校が札幌なら藻岩山、東北は岩木山、富山は立山、金沢なら白山とそれぞれ地域に根ざした登山が行われ、二十数年もの長期間にどれだけの女子学生に自然の美しさ、厳しさ、楽しさを味わせ、感動を与えたか、想像もつかない。

昨年インドでの登山の帰途不運にも亡くなった高本信子さんのプロフィールと軌跡の中に、「高本さんを山へ強く魅きつけたのは、確かに尾瀬ガ原のニッコウキスゲであるが、もっと幼い頃の記憶をたどると母親の一枚の写真がある。大正の終りか、昭和の初めであろうか、それは、富士山に登った時の古い写真だ。母親は写真の中で夏のワンピースを着て、草鞋をはいて、杖を持って、ござみたいなものを肩からかけている、そして母親の足の下の方に雲海が見える」と言う文章があった。これが学校登山であるということではないが、私にも母の女学校での学校登山での写真が印象に残っている。白いキャラコのブラウスにスカート、丈の長いピッケルを突いたと母は言うが、足は草鞋で、体育や家庭科の先生に連れられた二十六名で高岡を出発して、弘法茶屋、劔御前小屋に泊まり、立山神社に登り、帰路は立山温泉に泊ったとのことであった。その時の高山植物の美しさなどは大変心に残っているようだ。これはほんの一例であろうが、多くの女性たちが近代的な登山を味わった結果が、現代の日本女性が数々の海外登山へ飛びたって行く土壌となっていったと思われてならない。

学校登山で大衆を育てていた時期に、三章では、「近代登山黎明期の女性登山家たち」として、環境にめぐまれた、女流登山家といわれる人達の活躍が述べられている。いよいよ女性アルピニストの登場。一九二三年、村井米子さんが穂高岳から槍ヶ岳縦走。一九二七年元旦中村テルさんが厳冬の富士山登頂。一九二九年、黒田初子さんが小槍登攀後、奥穂高岳から西穂高岳に縦走した。同年、今井喜美子さんが夫と共に穂高岳から槍ヶ岳へガイドなしで縦走した。一九三三年一月、沢智子さんが厳冬期の北穂高岳に登った。また日本登高会では川森左智子、長谷川静子さんが岩登りで活躍する。その他、社会的に活動して来た人たちの中にも登山を楽しむ多くの女性がいたことを教えてくれている。四章では社会人登山として、女性だけの山岳会の誕生や男女混合山岳会の中での女性の活動が記されている。この後者の方に私たちの日本山岳会も入っている。当会会員の活動は次の七章、「海外登山」、に引き継がれる。

戦争が終わり、一九五七年になって、モンブラン、マッターホルンに川森左智子さん、二年後の黒田初子さんのメンヒ登頂が幕開きである。初のヒマラヤ登山は一九六〇年の「ジャパン・レディース・アルパインクラブ」細川沙多子隊長ら六名によるインドのデオ・ティバ峰遠征であった。一九五〇年代から六〇年代の日本の海外登山は、外貨がまだ自由にならず、個人はもとより団体での遠征もなかなかで、親善隊などの名目で出かけるのが精いっぱいだった。この七章の時代を共に歩んできた私には、この本では数行で述べられている数々の海外遠征登山が、どれほどの困難の中で、多数の女性

たちが努力をかさねて夢を実現させてきたかを知っている。

お茶の水ルーム時代の婦人部の仲間たちでヒマラヤ研究会を続け、原宿ルーム時代に東京支部が解散し、婦人部も新たに婦人懇談会と組織をかえて発足した。一九六五年にインドとの合同登山の提案を受け、大変活気のある時代であった。初の女性理事の誕生もあり、詳しく登山史に記録すべきことも多いと思われる。一九八八年のインド・シバ峰の登山に十三名の参加がみられたが、現女性懇談会は、今年一九九三年をもってその存在意義を見直すという考えのもとに活動を終えたのである。なお、当時の困難を知るものとして、一九六四年十二月富田美知子隊長のもとに吉野菊子、松永康子、折井正子さんの台湾の玉山をキスリングで縦走したことと、一九六六年十一月から翌年二月まで山口節子隊長のもとに、ニュージーランドに遠征した、秋田しおみ、武田育子、岡部浩子さんのポプキンズ渓谷でのクライマーズ・ミートへの参加とミナレット峰登頂があったことにも言及していただきたかったと思う。

日本女性登山者の急成長の歴史を、七年と言う歳月にわたり、コツコツと資料収集を続けられ出版された坂倉登喜子さん、梅野淑子さんのご努力に心から敬服いたします。誰でも海外の山に出かけられるようになった今、私たちの先輩が困難を乗り越えて歩んできた歴史の教科書として一人でも多くの方に読んでいただけたら、著者のご苦労もよろこびにかわることでしょう。

（伏見紀子）

会報「山」図書紹介一覧―一九九二年度―

●四月号（五六三号）

菅原達也著、山岳俳句集『登攀者』（山と渓谷社）

W・シュタイニッツアー著『日本山岳紀行―ドイツ人が見た明治末の信州―』（信濃毎日新聞社）

●五月号（五六四号）

星野貞二著『私のスケッチ紀行―信濃路と甲斐路を行く』（さきたま出版会）

『千葉大学の山　40年』（千葉大学山学部・千葉大学学士山岳会刊）

アーネスト・S・バーチJr著『図説エスキモーの民族誌』（原書房）

西澤信雄著『朝日連峰の狩人』（山と渓谷社）

米川正利著『北八ガ岳黒百合ヒュッテ』（山と渓谷社）

神奈川県立博物館編『南の海からきた丹沢―プレートテクトニクスの不思議―』（有隣堂）

Bradford Washburn・Devid Roberts 共著 MOUNT McKINLEY the Conquest of Deuali

●六月号（五六五号）

I・デシデリ著『チベットの報告』（平凡社）

●七月号（五六六号）

酒井昭市著『飛驒の山々　国境編』（ナカニシヤ出版）

●八月号（五六七号）

REINHOLD MESSNER FREE SPIRIT a climber's life

白旗史朗著 THE KARAKORUM（山と渓谷社）

●九月号（五六八号）

①Trekking in Nepal　②Trekking in Tibet　③Trekking in Pakistan

松永敏郎著『空にただよう峰』（アポロスポーツ）

●十月号（五六九号）

原信著『還らざる者たち』（悠々社）

信濃毎日新聞社編集局編『北アルプス（上）』（信濃毎日新聞社出版部）

●十一月号（五七〇号）

アーネスト・サトウ『日本旅行日記1』（平凡社）

クリス・ボニントン著『ヒマラヤ冒険物語』（中島寛）

高橋亭夫著『早池峰山の四季』（岩手日報社）

藤木高嶺著『大自然に生きる人々　写真で見る民族学入門』（くもん出版）

『鳥川の源流』（みやま文庫）

大町山岳博物館編『ライチョウ　生活と飼育への挑戦』（信濃毎日新聞社）

●十二月号（五七一号）

大西俊章著『レクイエム紀行・宏よナムチャバルワ峰の輝く星になったのか』（崑崙社）

坂倉登喜子・梅野淑子著『日本女性登山史』（大月書店）

●一月号（五七二号）

冨田弘平著『百歳までの山登り』（新ハイキング社）

田部井淳子著『七大陸最高峰に立って』（小学館）

『ヒンズークシュの名峰 TIRICH MIR（7708 m）』日本・パキスタン合同ティリッチ・ミール登山隊の記録（日本山岳会京都支部）

渡辺立男著、句集『薄雪草』（朝日新聞出版会）

●二月号（五七三号）

舟津圭三著『犬ぞり隊、南極大陸横断す』（講談社）

根深誠編著『森を考える―白神ブナ原生林からの報告』（立風書房）

小林経雄著『甲斐の山々』（新ハイキング社）

山里寿男著『スケッチの山旅12ヶ月』（実業之日本社）

●三月号（五七四号）

谷口現吉遺稿集『至高』

アンタークティックウォーク南極点探検隊著『カラヒ・ヌナ合宿報告書'92』（探検隊事務局）

天城万三著『八方破れひとり旅』（近代文芸社）

追悼

今西錦司氏（一九〇二〜一九九二）

今西探検隊の成立

ベンゼン核

今西錦司の登山家としての事跡については、わたしにはかたる資格がない。たしかにわたしは今西の推薦で日本山岳会および京都大学学士山岳会に入会したのだが、今西の登山に同行したことはまれである。晩年の有名な一五〇〇山についても、いっしょにのぼった山はほんのすこしにとどまる。

今西についてわたしがかたることができるのは、登山家としてよりも探検家としての側面である。わたしは今西を隊長とする探検隊になんども参加して、その隊長ぶりをわが目でみているからである。

今西が登山の垂直志向から出発して、探検の水平志向にうつっていったのはいつごろからであろうか。一九三二年の樺太東北山脈の踏査や一九三八年の内蒙古学術調査旅行、一九三九年の内蒙古調査など、その探検旅行は一九三〇年代にはじまっている。また一九三九年には京都探検地理学会を創立しているので、そのころからはっきりと探検志向にふみきっていることはたしかである。しかし、その探検家としての活動が本格的になるについては、わたしたちの世代との遭遇がおおきな契機になったようにおもわれる。

一九四一年春、わたしは旧制の第三高等学校を卒業した。その山岳部の仲間のなかに探検をこころざす六人の同志がいて、「ベンゼン核」というグループをつくっていた。有機化学でいうベンゼン核の構造式のなかでは、炭素原子六個が環状に緊密にむすびあわされている。それになぞらえたのである。この六人は『ジオグラフィカル・ジャーナル』などをよみふけり、世界の未開地の探検を夢みていた。太平洋戦争の勃発のまえで、現実に行動をおこしうる地域はごくかぎられていたのだが、それでもこの青年たちの意気は、はなはださかんであった。六人というのは吉良竜夫、川喜田二郎、藤田和夫、伴豊、和崎洋一とわたしであった。しかし、いかに意気さかんであっても、高校をでたばかりの青年たちの力では、なにごともなしえないことはあきらかであった。わたしたちは強力なリーダーを必要としていたのである。

リーダーとしていただくにたるのは、今西錦司をおいてほかにはないことをわたしたちは確信していた。わたしたちは今西のひっぱりだしにかかった。京都大学農学部の近所にあるおしるこ屋の二階で、わたしたちはしばしば探検に関する研究会などをひらいていたのだが、そこへ今西先輩にきてもらって、リーダーになってくれるかどうか談判した。はなしあいの結果、今西はそれを承諾した。こうしてわかい探検家たちのグループが結成されたのである。

探検学校

このグループは、戦前戦後を通じて世界各地の学術探検に活躍す

ることになる。そしてしばしば「今西グループ」などとよばれて、今西とその弟子たちのグループのようにおもわれていることがおおいが、われわれの関係は大学における師弟関係ではない。今西は理学部の動物学の講師であったが、六人の青年たちのうち、大学で今西の講義をきいたものはひとりもいない。それぞれに専門がことなるのである。今西がこれらの学生を弟子として育成したのではなく、この若者たちのほうから今西をグループのリーダーに推戴したのである。

専攻する学科はそれぞれにちがっていたが、われわれは今西から学術探検隊員としての訓練をうけることとなった。その最初のものが一九四一年夏のミクロネシア調査である。これには六人のうち、吉良、川喜田、梅棹の三人がくわわり、ほかに森下正明、中尾佐助などのシニア・メンバーが参加した。こうして主としてポナペ島において、青年たちは学術探検家としての本格的な訓練をうけたのである。このとき、学術探検の指導者としての今西がみせた力量はめざましいものであった。探検隊の行動の判断はもちろんのことだが、フィールド・ワークをすすめつつ思索をふかめてゆく手法を、われわれは骨の髄までたたきこまれた。それは、いうなれば今西探検隊の士官学校であった。

一九四二年には、このグループは北部大興安嶺の縦断をおこなった。この探検行には六人のうち、和崎をのぞく五人がほかの仲間とともに参加して、この地図上の空白地帯を突破したのである。隊長今西と副隊長森下のふたりをのぞいては、全員が学生からなるこの探検隊は、学術探検隊としておおきな成果をあげた。その全行程を通じて、探検家今西はすぐれたリーダーシップを発揮したのである。

一九四四年から四五年にかけては、今西は張家口にあらたにできた西北研究所の所長に就任し、内モンゴル草原の学術探検をおこなった。それには加藤泰安、中尾佐助のほかに、ベンゼン核からは和崎とわたしのふたりがくわわっている。これで戦前における探検家今西の活動はいちおうおわった。

戦後の探検行

戦後に今西探検隊がふたたびうごきだしたのは、一九五二年のマナスル遠征以後である。京都大学学士山岳会はネパール政府との交渉に成功して、マナスル登山の計画を進めていた。許可がえられた段階で、その計画を日本山岳会に委譲したのである。今西はその第一回の偵察隊の隊長をつとめた。登路の発見もさることながら、今西のおおきな興味はこの未知のジャイアンツの探検的踏査にあったようである。

ネパール・ヒマラヤの登山目標をマナスルに決定するまでには若干の経緯があった。わたしたちは、ネパール国内の未踏の八〇〇〇メートル級をかたっぱしからしらべあげていった。しかし、マナスルについてだけはまったくなんの情報もなかったので、計画立案にあたっていた青年将校たちはこの山を目標から除外していた。そのとき今西は「この山をやる」といいだした。「この山はなにもわからないからだめです」と青年たちがいうと、今西は「だからこれをやるのだ」といった。わたしはそのはげしいパイオニア精神と探検家魂に驚嘆した。

一九五五年には京都大学のカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊

がパキスタン、アフガニスタンに派遣された。総隊長は木原均教授であったが、今西はカラコラム支隊長としてこの山群の大氷河地帯の奥ふかくにわけいった。この探検隊にはベンゼン核からは藤田とわたしが参加した。

わたしが今西と行をともにした最後の探検行は一九六二～三年の京都大学アフリカ学術調査隊であった。調査隊は類人猿班と人類班とにわかれていた。この隊には和崎とわたしが参加している。ほかに富川盛道や伊谷純一郎らのすこしわかい世代もたくさん参加して、のちのアフリカ研究の隆盛の基礎をきずいた。

この調査隊はまったくの学術的なものであったが、その一環としてキリマンジャロ登山をおこなっている。わたしは途中で落伍して頂上までゆくことはできなかったが、今西は和崎やそのほかのわかい仲間とともに頂上まで達している。わたしは今西の気力と体力の旺盛さに圧倒されるおもいがした。おもえばこれが今西との探検行、登山行の最後であった。

今西は戦前戦後を通じて多数のわかい探検家たちを育成してきた。そのリーダーシップのもとにそだてられた若者たちが、戦後日本の学術探検を隆盛にみちびいていったことはよくしられているとおりである。それは、みじかかった日本の「探検の時代」の最後の光芒であったといえるであろう。今西はその火つけ役であり、かがやかしきリーダーであったのである。

（梅棹忠夫）

私のボス・今西錦司

今西錦司さんは、私にとって、ボスであった。一九五五年当時、京都大学山岳部の現役部員で、なんとかしてヒマラヤの初登頂に参画したいと希望する私にとって、今西さんは経験と実力を兼ね備えた大ボスであった。私たちは、このボスに取り入って、初登頂の夢を実現したいと努力していた。このような私たちを今西さんは評価し、励ましたり、叱咤したりしてくださった。おかげで私は一九五七年から六二年にかけて、四回ヒマラヤ遠征隊に参加することができた。今考えても心ときめく時節であった。

一九七四年、カラコラムK12峰登山隊に私は隊長として参加し、二人の隊員を失った。自分の隊長としての資質に私は疑問を抱くことになった。

その当時、今西さんは岐阜大学の学長で、岐阜一円における登山はいうに及ばず、日本山岳会の会長として、その登山範囲は各支部、全国に及び、登山の頻度は恐るべきものであった。それまで、しばしばそのお供をしていた会員の土倉九三さんから、ちょっと助けて欲しい、つき合いきれん、との要請があった。

隊員を失った隊長として、謙虚に真摯にボス学の研究と修業をしなければならないと痛感していた私は、即座にお引き受けすることにした。これまで今西さんは、私にとってボスであったが、これからはボス学の研究対象になってもらうことに、私は勝手に決めたのである。こんないい対象は、めったに見つかるものではない。

私は今西さんにボスとして存在し、ボスとして行動することを要求した。つまり、私はボスの勉強をしたいから教えてほしい、私は

子分としてあなたの指示に従いますからと頼み、今西さんはそれを承知するという暗黙の了解が成立していた。英語でいえば、leader と follower の関係である。

今西さんは、私のこの勝手な要求によく応えてくださった。自分自身、つねに優れたボスであらねばならないとの強い自覚があったからだろう。いまどき、こんな窮屈な自覚をもっている人は少ないのではないだろうか。もし、私が若い人からこの要求を受けたとすれば、なんとか勘弁してくれというかも知れない。

いつだったか今西さんは、自分の考えるリーダーの条件というのを言ってくださった。それは、「人気」と「洞察力」と「使命感」に要約できる、と言うものであった。

第一の条件が「人気」ですかとの問いに、そうや、猿でも雌猿や子供猿に人気のない奴はリーダーになれんのやとの答えであった。今西さんはわがままで勝手者だとの評判も高いけれども、そのわがままと勝手を成功させるためにかなり努力をし、それがみごとに成功した事例を私も見ている。八百山登頂のお祝いをしたとき、宴の途中、テーブルをまわり、百人をこえる参会者一人ひとりに、その人だけに通じる登山でのお礼をいい、次はあの山をぜひよろしくと頼み回ったのである。周恩来のようなことをやる人だなあ、これでも学者か、と私は感心した。私たちがヒマラヤに出発するとき、帰国したとき、京都にいれば今西さんは必ず、京都駅で万歳の音頭をとってくださった。生まれついての資質の他に、努力もしていたといえる。

今西さんの洞察力については、定評のあるところである。京都大学学士山岳会のヒマラヤへの登山目標と隊長の決定は、実質的にはみな今西さんが行ったものである。常識を逸脱した発想をする野蛮人であるとか、特殊な本能に恵まれた人であるとの評判もある。研究関係では、文献だけの研究者をこっぴどく攻撃することで有名だが、シプトン、ティルマンを始め、外国遠征隊の報告書を読破していたし、日本での登山でも各地の山岳会の報告書を通読していた。

使命感については、教祖を彷彿させる。自らに課した使命に殉ずる断固たる確信があればこそ、多くの人たちが今西登山に行を共にしたのである。その時、本人は幸福であったし、同行者も幸福であった。今西登山をあれは今西教だ、非理性的、前近代的だと冷笑する人も多い。それも一理ある考え方だけれど、最近、理性的、近代的であるはずの秩序がひどく混乱を招いてきていて、宗教的、使命感的節操をもった人が求められているようである。

最後に一言、私が今西登山にお供したのは、ボス学の勉強もあったけれど、根底的には、やはり、ついていくのが面白くて、今西さんが好きだったことを付け加えて追悼文としたい。

（岩坪五郎）

略　歴

一九〇二（明治三十五）年一月六日　京都・西陣に生まれる
一九一四（大正三）年　京都府立第一中学校に入学。四年生の時に友人十人とともに山城三十山を選定して京都北山の峰々に登る
一九二〇（大正九）年　第三高等学校に入学。山岳部員として日本

アルプスに先鋭的登山を展開
一九二五（大正十四）年　京都帝大農学部に入学（農林生物学科）。旅行部に入り登山を続ける
一九二九（昭和四）年　日本山岳会入会（会員番号一一七）
一九三一（昭和六）年　京都学士山岳会（ＡＡＣＫ）を創設
一九三二（昭和七）年　南樺太・東山山脈を踏査
一九三四（昭和九）年～三五年　白頭山の厳冬期登頂
一九五二（昭和二十七）年　日本山岳会マナスル先遣隊長としてネパール・ヒマラヤを踏査。チュルー峰（六二〇〇㍍）に登頂
一九五五（昭和三十）年　京都大学派遣のカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊のカラコラム支隊長として、パキスタン領のヒスパー、ビアフォ、バルトロの三大氷河地域を踏査
一九六八（昭和四十三）年　日本国内で登頂した山が五百座を記録
一九七二（昭和四十七）年　文化功労者に選ばれる。十二月、日本山岳会岐阜支部発足、初代支部長に就任
一九七三（昭和四十八）～七七年　日本山岳会会長
一九七七（昭和五十二）年　日本山岳会名誉会員に推挙される
一九七八（昭和五十三）年　日本国内の山千座登頂を記録
一九七九（昭和五十四）年　文化勲章受賞。日本山岳会永年会員になる
一九八五（昭和六十）年　日本国内の山千五百座登頂を記録
一九九二（平成四）年六月十五日　逝去。享年九十歳

麻生武治氏（一八九九～一九九三）

故麻生武治氏は、暁星小・中学校の先輩で、私より三歳年上の実兄と同級でした。彼も私も二人とも陸上競技部に入っていたので、在学中から良く指導してもらいました。私は彼のことを武さんと呼んでいて、いわば幼な友達という間柄でした。彼の生家の麻布鳥井坂の敷地内には、西洋人が何家族か住んでいて、そういう環境に育った彼は、幼い頃から英語、ドイツ語、フランス語をよく話しました。暁星から東京農大で陸上競技などやったあと早稲田に進んだ武さんは、一九二〇年代初期のヨーロッパで国際的なスキーヤー、登山家として有名で、日本を代表する人でした。

一九二四年の冬期オリンピックに日本は初参加することになり、彼がスキーの代表選手として、開催地スイスのサンモリッツに来た時、イギリスに留学中だった私は、彼に頼まれて手伝いすることになりました。その時にホテルが混んでいて二人で一部屋に泊まることになりベッドが一つしかなくて一晩おきに交代で床の上に寝たことも想い出の一つです。その後グリンデルワルドで度々スキーをご一緒しました。

一九二六年八月にユングフラウヨッホ（標高三四五四㍍）で夏期氷河スキー大会が開かれて武さんと一緒に参加しました。氷河スキー競技とは、コンコーディア氷河のクレバスの多数ある所に三人

のスキーヤーが一本のロープで結ばれて一組となり約五百メートルのコースを下りるレースです。英国スキー界の大物アーノルド・ランの長男ピーター・ランを先頭に立て、私が二番目で武さんが三番目で滑りました。ロープを手際よくさばいて適当な間隔を置いて安全に早く滑るのです。三人の呼吸が良く合って一等賞をもらいました。

武さんは早大からベルリンの体育大学に入学して、その後はオーストリア、ダボス、クロスターの方へよく行っており、私はミューレンを中心にカンダハースキークラブの連中や英国山岳会のスマイスなどと一緒に活動していたのでご無沙汰になりました。

私が帰国した一九三〇年から後は、日本国内のスキー場、特に志賀高原の発哺に武さん夫婦と私たち夫婦でよく滑りに行きました。雪の結晶に詳しい黒田正夫氏と初子夫人が同行したこともあり、初子夫人からはよくお得意の仏蘭西料理をご馳走になりましたが、そういう時も武さんは一緒でした。日銀の藤島敏男夫妻とも武さんと一緒に滑ったこともあります。

一九三二年、山形県の蔵王でスキー大会があり、蔵王温泉の樹氷の間を滑ってザンゲの急斜面を下り、パラダイスを通って小学校まで滑り下りるコースでした。武さんが審判長をしていて、急斜面を降りた所で「三分半」と言われたので急に頑張ったためブッシュに突っこみころがったりしながらも七分をきって一等になりました。武さんは、暁星時代からの後輩の私が優勝したことを大変喜んで、宿で風呂に入っている私にお祝いだといって水をぶっかけてきました。弟分の私の優勝を共に喜んでくれた温い気持を今でも忘れることができません。その晩、山形県スキー会の会長で、武さんの無二の親友、後藤幹次氏と素晴らしいバーでご馳走になりました。

一九三四年私がヨーロッパで撮った写真を主にして友人たちの山岳写真をものせた『山岳大観』を武さんと二人の名前で出版した時、武さんに写真の説明を書いてもらいました。私が英国から帰国した時、武さんは朝日新聞にお勤めだったので、私が各地の朝日のホールでヨーロッパの登山やスキーの話をして廻った時にも大変お世話になりました。大阪朝日では藤木九三さんを紹介していただき山の面白い話をいろいろしました。

冬の富士山のスキー登山をやろうとして、一九三五年頃の二月、武さんと二人で出かけたのですが、夕方に七合目の小屋にたどり着き、一泊したのですが、翌朝寝坊して、それに天気も悪くなったので頂上へ行くことをあきらめてスキーをやりながら吉田へ下りたこともありました。私たちが滑った後でこの斜面に大きな雪崩が発生したということを聞いて、「何が幸いするかわからないものだね」と武さんと顔を見合わせたものです。

終戦直後の食糧のない頃、ある朝の六時頃、ベルが鳴ったので出てみると、武さんが古ぼけたニッカボッカーの登山姿でリュックサックを背負って立っていました。自分で焼いた自慢の食パンを入れて世田谷の馬事公苑から私の住んでいた西荻窪まで歩いて来られたのです。そんな格好だったので途中交番で三度も止められたとのことでした。あの時食べたパンの味は今だに忘れられません。

心からご冥福をお祈りします。

（各務良幸）

略歴

一八九九（明治三十二）年十一月二十一日　東京で生まれる。暁星中学から農大を経て早稲田に進み、早大時代には箱根駅伝に三年連続して出場、五区の区間新をマーク
一九一七（大正六）年　日本山岳会入会（会員番号五二九）。一九三一（昭和六）年退会、一九五〇（昭和二十五）年復活
一九二二（大正十一）年　早稲田の山仲間・舟田三郎と槍ヶ岳頂上から北鎌尾根を初登降
一九二四（大正十三）年　舟田三郎・小笠原勇八と厳冬期槍ヶ岳登頂
一九二三～二六　ドイツ国立大学に留学。この間ヨーロッパアルプスでツムット稜からマッターホルン、モンテ・ローザなど数々の登攀を行う
東京朝日新聞社運動部に勤務し、日本初のスキー代表選手としてサンモリッツ冬季五輪に出場。その後も二回、選手兼監督として参加
一九八二（昭和五十七）年　日本山岳会名誉会員に推挙される
一九九一（平成三）年　ビッグスポーツ賞特別表彰を受ける
一九九三年五月三十日　死去。享年九十四歳。著書に『銀嶺をゆく』、『わがスキーシュプール』、各務良幸共著『山岳大観』がある

野口　末延氏（一八九八～一九九三）

名誉会員野口末延さんは、一九九三（平成五）年三月十四日、九十五歳の高齢で逝去された。

三月十六日の朝、松田副会長から電話で、「今朝、本日日本山岳会の野口末延さんの葬儀があるとの知らせがあったが、ご存知ですか」と尋ねられ、私は「最近野口さんにはご無沙汰で、ご様子はよく分りませんが」と返事をしたのだった。

その日の午後、念のためルームに問い合わせしたところ、事務局員から「奥様の話では、野口さんは十四日に亡くなり、今日十時に近親者だけで葬儀を済ませて、他のどなたへも通知はされなかったと伺いました」と聞き、はじめて野口さんの死去を知った。

野口さんは一九二二（大正十一）年四月、日本山岳会に入会、以後会員として七十年の長い在籍で、監事も務められ、本部、支部の会合、行事にも進んで熱心に参加された。一九八二（昭和五十七）年十一月には名誉会員に推挙されている。

本会入会の年の十二月、霧の旅会にも入会され、山崎金次郎さんや神谷恭さん達と共に中心メンバーとして活発な活動をされている。戦後私も霧の旅会に入会して、野口さんとはじめて知り合い、会合や遠足会を度々共にした。

野口さんは甘い物は好物であったが、酒は一滴も呑めず、酒豪揃

いの霧の旅会の会員の中では珍しい存在であった。会合の会費は常に割勘と決っており、野口さんは呑まない酒代をいつも払っていた訳で、真面目な野口さんはこの決まりについては只の一度も冗談にも不平を漏らされたことはなかった。

会合の席ではいつも会員の賑やかな談笑の聞き役であった。

永年会員になられたとき「登り…すべる七十四歳、山スキー専門に五十年」の大きな見出しで、松家晋さんが飯縄山で撮られた、野口さん独特のスキースタイルの写真と共に、朝日新聞（八四・三・八、東京版）に紹介記事が出た。野口さんは大変喜んで、わざわざその記事の切り抜きを送ってくれた。

得意の山スキーに私も二度ばかりお供をしたことがある。一九五五年頃の野口さんは、山崎さんや、松本熊次郎君と誘いあって、暮れから正月は吾妻・高湯の玉子湯を宿に、山スキーを楽しまれるのが常であった。

一九五六（昭和三十一）年暮れ、私も松本君に誘われて玉子湯に出掛けた。松本君が勤務の都合で一日遅れて来ることになったので、先から泊っていた野口さんに誘われて二人で家形山にスキーで登った。私はスキーを始めてまだ三回目の未熟者で、頂上から野口さんについて滑りはじめるとすぐ転んで怪我をしてしまった。その場に一人残された私は痛い足を引きづりながら、そろそろと時間をかけて降っていると、野口さんの言い付けで宿の番頭が、ムスビを届けに来てくれた。それで力を得て薄暗くなった頃やっと宿にたどり着いた。この時は野口さんに大変迷惑をかけてしまった。

二度目の誘いも松本君からで、一九六八（昭和四十三）年の二月西吾妻の白布高湯へ行った。私は前回足を骨折してスキーはやめたので、輪かんじき持参で参加した。宿の人はスキー場へ輪かんじきを持って来るとはと笑っていた。この時も連れの都合で野口さんと二人で西吾妻山へ出掛けて、稜線まで登ったが、ガスが濃くて展望もないので引き返すことにした。野口さんはスキー、私は輪かんじきで降ったが、リフトまでの林の中ではスキーよりも私の輪かんじきが早かった思い出がある。

一九七四（昭和四十九）年六月、戸隠高原の戸隠小舎で霧の旅会の会合があった。野口さんから会合の前に妙高の火打山登山を誘われて、松家晋さんと三人で出掛けることにした。第一日目は高谷池ヒュッテ泊りであったが、ヒュッテは自炊だと云うので、用意のない吾々は困ってしまった。野口さんはこの顔で頼んでみるから二人は外で待つように云って一人で交渉された。話はうまくついて食事付で二泊し、無事火打山に登ることが出来た。

野口さんはこのとき、トレードマークの真っ白で長い眉毛と白髪頭が役にたったよと自慢され満足げな様子であった。

長年登山と山スキーで鍛えられた野口さんも、十年前頃から足を悪くされ、霧の旅会の会合にも出席されずお目に掛かる機会がなかった。突然の訃報は誠に寂しい。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

（牧野　衛）

略　歴

一八九八（明治三十一）年十二月二十日生まれ

一九二二（大正十一）年　日本山岳会入会（会員番号八〇六）
一九五八（昭和三十三）年～一九六六（昭和四十一）年　日本山岳会監事
一九七二（昭和四十七）年　日本山岳会永年会員になる
一九八二（昭和五十七）年　日本山岳会名誉会員に推挙さる
一九九三年三月十四日　死去。享年九十五歳

高山忠四朗氏（一九〇一～一九九三）

葬送の辞

本日ここに、高山理化精機㈱取締役名誉会長、タカヤマケミカル㈱取締役名誉会長、㈱環境技術センター取締役相談役並びに日本山岳会名誉会員、故高山忠四朗翁の社葬による葬儀を執り行うにあたり、ひと言お別れの言葉を申し上げます。

高山忠四朗さんは、一九〇一（明治三十四）年九月十九日、現在の塩尻市小澤家にお生まれになり、長じて縁あって、一九二一（大正十）年高山家ご息女、千鶴様とご結婚、高山の姓をお名乗りになられました。

お小さい頃より山が好きで「山の向こうにはいつも何かがある、そんな気持ちで山をみつめて大きくなった」とご生前ご本人が度々述懐されましたとおり、信州松本の生んだ優れたナチュラリストの片鱗は既にその頃より芽生えていたものと思われます。

ご生前の高山さんの大きく広いご足跡をひと言で語るには、私自身極めて浅学の身であり、葬送の辞を述べますものの、いささか適正を欠くやも知れません。とりわけ、日本山岳会信濃支部の歴史そのものと言うべき、高山さんの永いご一生はとても短時間には申せませんこと、どうかご容赦下さるようお願い申し上げる次第でございます。

高山さんの九十二年の永いご生涯は、大きく分けて三つに分かれるかと思います。

その第一は、大正・昭和の初期より国の鳥獣行政機関の委託を受けた、父子二代にわたる鳥獣調査員としてのご活躍をされた時期であり、これを一九四〇（昭和十五）年頃迄続けて来られたという事でございます。

行政機関とは、当時のわが国農商務省の中に設置された鳥獣調査研究機関の事でありますが、当時ようやくにして緒に付いた動物分類学や生態学の研究が始まった頃であり、沢山の鳥獣類を採集することにより、その食性や渡り鳥の性質、農林業への有益性が徐々に解明されつつある、そんな草分けの時期であったわけであります。

鳥獣調査員として、このための基礎調査資料の収集や研究を助けるため、大正末期から昭和の初期の数年間は、その採集と研究者の案内で年の大半は山中で過ごされたと伺っております。このことは、戦後間もなく発刊されました、岩波写真文庫にその若き日のご勇姿を拝見することが出来ます。

長い鳥獣調査員としてのご活躍の中で、高山さんは幾多の鳥獣類学者や動植物学者、またアルピニストと深いご交友の輪を拡げられ、

先年、ご存命中に信濃毎日新聞社より発行された、林正敏氏のご健筆になります『鳥学を支えた岳人』というタイトルの、高山さんご自身の自叙伝とも言うべき書物によれば、清棲（真田）幸保、中西悟堂、内田清之助、黒田長礼、鷹司信輔、松平頼孝の諸先生ら、日本鳥学黎明期に於ける鳥類学者はもとより、川端康成、尾崎喜八、槇有恒、深田久彌氏らの文人、登山家との幅広いご交友が随所に記載されており、ただただ敬服するものでございます。

また、青年期に武者小路実篤氏による、日向の国に求めた理想郷「新しき村」の建設に感銘し、後年高山さんをして、「全てを投げ出しても加わらんと悩んだものの、現実はそれを許して呉れなかった」とも語らしめております。高山さんご持論の自然主義にもとづいた、高山哲学を窺い知ることが出来ます。

これに前後する一九二四（大正十三）年には、現在の高山理化精機㈱の前身であります、高山理化学機械店標本製作所をご創業され、その後傘下の企業は八社余に及び大きくご発展され、高山グループの総帥として今日に至っておりますことは広く周知のとおりでございます。また、現在松本の各小・中学校の教材としての鳥獣標本は大方、高山さんのお手に成ることは驚くべきことでもあり、その数は二千点を超え、これらは経済人としてご活躍された二つ目の大きな部分でございましょう。

先き程の三つの人生、つまり第三の部分とは、それは申し上げるまでもなく山を通じてのご活動でございました。高山さんのアルピニズムへの開眼は、日本近代登山史の黎明期に活躍された、「山を想えば人恋し、人を想えば山恋し」の言葉でご高名な百瀬慎太郎氏との邂逅によるものと思われます。その後の近代登山の揺籃期を経て、暗く長い戦争もようやくにして終った、一九四七（昭和二十二）年六月、戦前その名も識られた信濃山岳会の流れを汲む、日本山岳会信濃支部が、当時、北安曇郡常盤村、現大町市に疎開されて居た世界のアルピニスト、槇有恒氏を初代の支部長として結成されました。結成に当って、只今申し上げました百瀬慎太郎氏と共に、高山さんのご尽力があったことは、槇さん感謝の御芳墨により知る事が出来ます。

高山さんは、その槇さんに次ぐ二代目支部長でこれもまた山の詩人として令名高い、尾崎喜八先生の後を受け、一九五二（昭和二十七）年より一九六七（昭和四十二）年まで、実に十五年間、しかも戦後の日本山岳史の全盛期とも云える時代に、三代目信濃支部長として、又、初代長野県山岳協会会長として幅広い活動にそのご手腕を発揮されました。

高山さんが支部長ご就任の年、日本山岳会ではネパール・ヒマラヤの八千㍍の未登峰マナスルへの遠征準備が始まり、一九五六（昭和三十一）年、槇有恒隊長のもとに、第三次遠征隊が見事初登頂に成功した訳でございますが、この前後十数年は信濃支部にとって、その活動が最も活発な時期であった、とも言えます。

春夏秋冬、四季にわたり開かれた登山技術向上の講習会や合宿、国民体育大会登山部門長野県予選大会の主管、山岳遭難対策も含めた登山者への啓蒙活動等々、枚挙にいとまありません。

毎年六月の第一日曜日には、新緑萌える上高地に於いて、日本山岳会信濃支部主催による「ウェストン祭」が開かれておりますが、

追　悼
OBITUARY



名誉会員

今　西　錦　司氏

IMANISHI Kinji (Hon. Mem.)

(1902～1992)

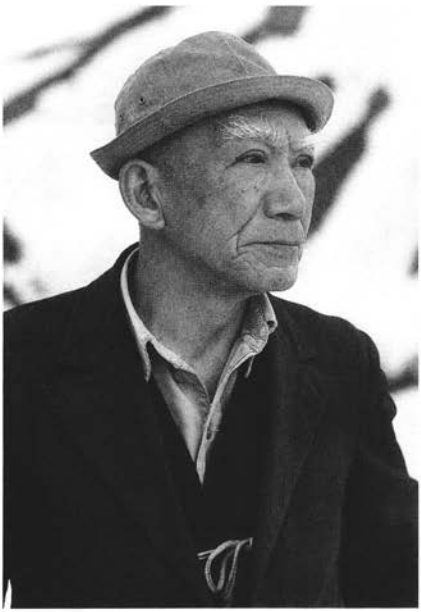


名誉会員

麻　生　武　治氏

ASŌ Takeharu (Hon. Mem.)

(1899～1993)



名誉会員

野　口　末　延氏

NOGUCHI Suenobu (Hon. Mem.)

(1898～1993)



名誉会員

高　山　忠四朗氏

TAKAYAMA Chūshirō (Hon. Mem.)

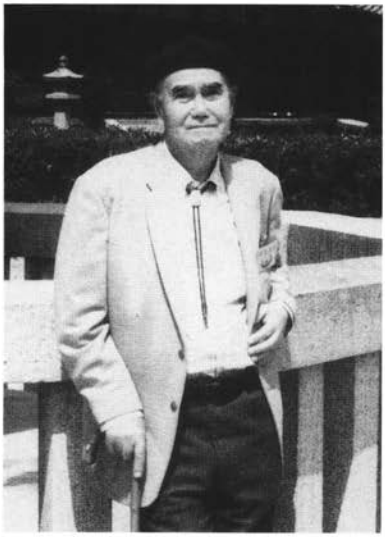
(1901～1993)



杉　本　義　信氏

SUGIMOTO Yoshinobu

(1916～1993)



中　村　勝　郎氏

NAKAMURA Katsurō

(1907～1993)



見　学　　玄氏

KENGAKU Hiroshi

(1908～1992)



小　野　　幸氏

ONO Hisashi

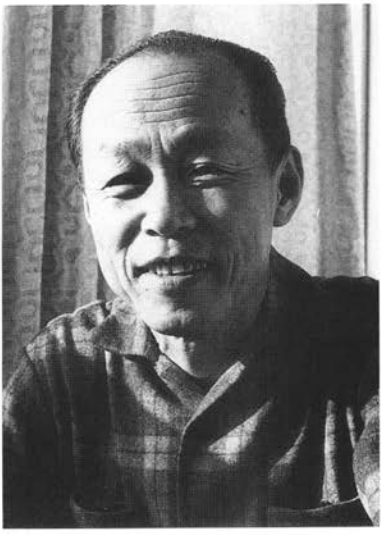
(1912～1993)



柴　田　均　二氏

SHIBATA Kinji

(1923～1992)



田　中(諏訪田)栄　蔵氏

TANAKA(SUWATA)Eizō

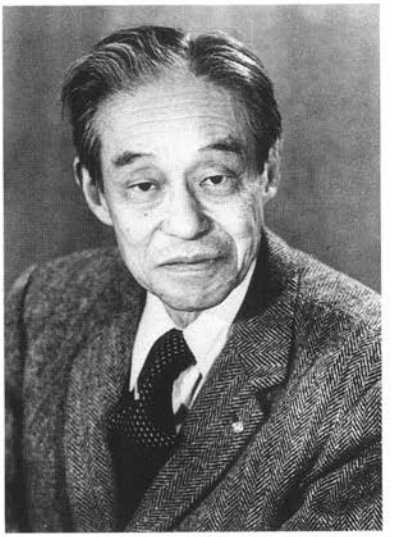
(1911～1992)



五十嵐　俊　治氏

IGARASHI Shunji

(1910～1992)



川　又　恒　一氏

KAWAMATA Tsunekazu

(1911～1992)

初夏の風物誌とも言うべきこの行事が、現在のような形で定着いたしましたのは、矢張り高山さんが支部長を務められてからでありました。

また、一九五六年、戦後の経済最優先による電力不足から、上高地ダム建設の動きがありました時、いち早くこの反対運動に参加され、今日の自然豊かな上高地保存にご尽力され、その後の自然保護運動の範となりました事も、決して忘れてはならないご功績の一つでもございます。

この他にご在任中特筆すべきことは、日本山岳会信濃支部創立二十周年記念山行として行われた、長野県境地帯一周踏査の事業でございます。これは、長野県歌「信濃の国は十州に境連ぬる国にして…」にもある通り、東は埼玉・群馬、西は岐阜・富山、南は山梨、静岡そして愛知、北は新潟の八県に亙る県境およそ一千㌔を、一九六五（昭和四十）年七月から九月までの六十九日間、延べ七十三名の参加を得て行った踏査でございました。日本の屋根と言われる信州の外周を歩き、温古知新、古きを尋ね新しきを知る、信州再発見のロマンある壮大な事業でありました。高山さんはこの計画の実行委員長として、自らも最終パーティーの一員として、安房峠から乗鞍岳までをお歩きになり、この記念すべき事業のアンカーとしてフィナーレを飾ったわけでございます。

然しながら、「お山は常に晴天」と言う訳には参りませんでした。

一九七三（昭和四十八）年、高山さんが実行委員長を務められ、支部の総力を結集し、過ぐる年ご自身も現地の調査までされた、日本山岳会信濃支部ネパール王国ヒマラヤ山脈アンナプルナ第一峰登山において、八〇九一㍍の頂まで、あと五〇㍍に迫りながら、天候急変により隊員四名、シェルパ一名を雪崩のため失ったことは、高山さんの永い登山人生の中で、恐らく唯一にして最大の痛恨事ではなかったかと思うわけでございます。この事は当時関係した者の一人として深くお詫びを申し上げる次第であります。

しかし時を経て、永年の数々のご功績により一九八〇（昭和五十五）年、体育功労者として文部大臣表彰の栄に浴されました事は記憶に新しいところでもあり、また山岳界でのご功績により、一九八四（昭和五十九）年十一月、間もなく創立九十周年を迎える日本山岳会の数少ない名誉会員として推挙されて居ります。

ご生前、殊にご親交の深かった槙有恒氏は次のような一文を高山さんに認めております。

「兄と上高地に遊ぶこと既に幾星霜
久闊　今日また温顔に接し喜び合うて炉辺に酒を酌む
山並みは中天に高く　清流は積翠を縫うて奔る　正に無双郷と言うべし
この静謐なる自然に深く沈潜して
共に楽しむ　兄こそは天地の心を
知る仁乎　只恨むらくは山河は
悠久ならんも　人境哀愁多し……」

高山さんのお人柄の正鵠を得ているものと思います。

その槙さんも一九八九（平成元）年、九十五歳で天寿を全うされました。高山さんもこの後を追うかのように、去る五月二十九日午前八時二十四分御年九十二歳にして、愛してやまなかった悠久なる

自然の中へ静かに還ってゆかれました。まさに「山に還った高山さん」と申し上げるべきでありましょう。「心静かに生きること」これは高山さんの座右の銘でございました。

生涯の大半をナチュラリズムとアルピニズムに捧げ、これを求めて止まなかった高山忠四朗さんの悠然たるご人生に対しまして、深甚なる敬意を申し述べますと共に、ご生前厚きご交際を重ねられました、槙有恒、尾崎喜八両先生を始めとする、多くの山のご友人、そして最も愛されました、御奥様とどうか安らけくお語らい下さい。

そしてご遺族様始めご関係の各御会社、また日本山岳会信濃支部をどうかお護り下さい。

ここに私たちに多くのご功績とご教訓を残されました、故高山忠四朗翁のご冥福をお祈りして葬送の言葉とさせて頂きます。

一九九三（平成五）年六月二十八日

葬儀委員長　日本山岳会信濃支部長　赤羽孝一郎

右は、葬儀委員長として当日の葬送の辞の全文であるが、この他に書き落とした点として、本会上高地山岳研究所のことがある。

本年四月新装成った山研は、当初上高地案内人組合事務所の有償による払い下げであるが、そもそもの払い下げの発端は、高山さんと西穂山荘村上守氏（当時会員）のご努力の結果であることを忘れてはならない。勿論営林署との正式交渉は、日高会長（当時）始め、その折の関係役員の皆さんのご尽力によるものではあるが、世代の変り行く本会にあって、多くの先人たちの遺業を語り伝えてゆくことも大切な事と思っている。

高山さんの御戒名は「岳山院登誉法鳥忠翁善居士」とあるが、故人の永い登山人生を静かにもの語っている。

（高山忠四朗氏は一九四七年入会、会員番号二七〇二）

（赤羽孝一郎・三溝関治郎）

中村勝郎氏（一九〇七～一九九三）

勝郎さんは、山の先輩だった。

大阪堂ビル前の、大阪貯蓄ビル三階の西岡一雄氏の「好日山荘」か、または隣室の『岳』のルームなどで、度々逢っていた。

『岳』のルーム

『岳』のルームは「R・C・C」（ロッククライミング・クラブの略称）の、阪神間に住むメンバーの寄り合いの場であった。

この部屋では、藤木九三先生をはじめ、水野祥太郎、加納一郎、津田周二氏等の常連が、腰を据えておられたものだ。

壁の書棚には古今東西の『山の本』が、ギッシリと並んでおり、又、使い古した『山の道具』が、所狭しとばかりに雑然と置かれていて、私達にとっては、真に居心地の良いルームであった。そして、先輩たちから何かと教えられていたのだった。

夕方、西岡さんが声をかけて、ルームを閉じ、皆で、梅田新道から阪神・阪急の駅へ向って雑談をかわしながら、ぶらぶらと歩いて帰ったものだが、誠に愉しいそぞろ歩きだった。

勝郎さんは、その頃、すでに一流の建築設計技師として腕を振るっており、同時にあの冴えた山のスケッチやカットの優れた画を生み出していたのだった。

戦時中、勝郎さんは召集され、シベリヤで戦っておられたが、やがて戦争が納まり、空白の時が過ぎて、終戦。同時に、ソ連軍により抑留され、その建築設計技術を提供させられていたと聞いた。

勝郎さんの画その他

さて、戦前、勝郎さんの書かれた画やスケッチは、藤木先生の多くの著書の装幀や、本文のなかのカットとして載っており、更に『R・C・C報告』(Ⅰ号～Ⅴ号)の装幀・編輯にも当たられた。それはその本の味合いに、すぐれた趣きを与えているのだった。

「R・C・C」のバッチは、蔦の葉にR・C・Cと白く刻まれた銅製で、このデザインも勝郎さんであろうと思う。

一九三九(昭和十四)年五月、「岩と雪」のクライミングの写真集(私達の山仲間十名程で実地に登攀中を撮影したもの)『山と闘ふ』と云う書名で東京朝日新聞社から発行された。

それは当時、東京朝日新聞社に居られた島田巽氏(現当会名誉会員)が、種々とアドバイスして下され、藤木九三先生が特にあとがきを書いて下さった。その装幀・本文内のカットを勝郎さんが担当。それは実に素晴らしい画であって、写真を引き立たせるものであった。

私が特に好きな画は、谷川岳山頂での幕営風景写真にそえられた星座―カシオペア・北極星・北斗七星―の図で、その幕営の雰囲気を見事にとらえて表現されている。二六頁の「登山者の武装」と題したスキーとピッケルの図や、「サンモリッツ」の雪兎のポスターなどの画は、小川町時代の東京好日山荘と、私の若かりし頃を想い出させてくれるのだった。

又、エーデルワイスを図案化したカットも、多く書き残されており、現在も私たち好日山荘の便箋、封筒などにも使わせてもらっている。

『屋上登攀者』

藤木先生の著書に勝郎さんが協力されたことは前にも触れたが、特に力を入れられたものは、藤木氏の著『屋上登攀者』にカット画と木版を彫って載せられたことであろう。本自体も藤木先生が、先生の個性の出たものにしたいお考えであって、それが如実に表現された傑作であると思う。

それで、以下にこの本の内容を簡単に紹介したい。

一九二九(昭和四)年六月発行、発行社は大阪・黒百合社(社長中原氏はR・C・Cのメンバー)、内容は随筆・感想・研究・詩ほかであるが、装幀等は勝郎さんがすべて引き受けられて完成されたものである。発行元の黒百合社社長もR・C・Cのメンバーであり、著者の藤木先生、中村勝郎氏の考えをすんなりと受け入れたと思われる。

序文中に藤木先生の登山に対する心構えや行動についてのお考えが示されており、その奥深さが読みとれると思う。

次に、勝郎さんが目次の次頁に書かれた文のなかから、次の言葉を引き出して見よう。

「(中略)しかし、そこに思ひ出と、幻想と、過去から未来に通ず

る一つの光が山をめぐって私を力づけてくるのです。（後略）」

勝郎さんとザイルを結んで

或る時、「一度堡塁岩（六甲山）へ案内しようか」と誘ってくれた。この岩とその周辺は、私は行った事がなく未知だったので喜んでお願いした。これがただ一つの勝郎さんとの山行であった。

岩の下でザイルを出して結び合った。トップでするすると登る勝郎さんは、如何にもすっきりと、そして落ち着き払った見事なクライムであった。幾度かの交互ジッヘルの後、岩の頂に立った勝郎さんの声に促されて私も登って行き、頂直下の細いバンドで右足を浮かして左靴先に踏み変えた。

それをジッヘルしながら見下ろしていた勝郎さんが、「やったね！やったね！」と弾んだ声をかけてくれた。この言葉は本当に嬉しかった。今でもこの事は私の記憶に新しく想い出されてくる。

R・C・Cの設立と解散

R・C・Cは一九二四（大正十三）年に設立され、十年後、一九三三（昭和八）年に解散した。

当初、阪神間に在住の岳人たちのグループとしての活動と、山行を共にし、更にそれらを押し進めて、関西の学生一般登山者達への啓蒙と指導を目指したものであった。

それは「岩」だけを対照としたのではなく、「氷雪の登攀」をも含めたものであった。

そのメンバーは、藤木九三氏、榎谷徹蔵氏、直木重一郎氏、三木高令氏、中村勝郎氏、米沢憲造氏等が中心となっておられた。

そして関西では、芦屋ロックガーデンをはじめ、各所に岩登りのゲレンデを開拓した。

そして、技術書として藤木先生著の『岩登り術』を刊行された。R・C・Cのメンバーは勿論、一般にも頒けられて、岳人に尊重されるに至った。又『R・C・C報告』なる部報がV号まで発刊されたが、その装幀やカットは勝郎さんの手になるものであった。

かくて十年を経た時、設立の目的を達したとして、自らR・C・Cの解散を宣言して閉会したのである。

会員には記念として、鉄製のマイエルハーケンの大型、厚手の文鎮を作って配付された。そのハーケンにはR・C・Cのバッチと、一九二四―三三年の年号が刻印されていた。

（海野治良）

杉本義信氏（一九一六～一九九三）

今年三月二日の朝、この日は私の住んでいる金沢では、今冬一番の降雪の寒い朝であった。今村正二君より電話があり、朝早く何事かと受話器をとったところ、「杉本が今朝亡くなったよ」とのこと。しばらく茫然として返事ができなかった。享年七十七歳、喜寿の祝いを待たずして亡くなったのは残念であっただろう。後に未亡人にうかがったところ、「ぜんそく発作による呼吸不全からの心不全」ということだった由。彼はかねてから心臓が悪くペース・メーカーを入れていたことは聞いていたが。

彼は私の最も可愛がった後輩であった。早稲田の山岳部の二年下で、学部も理工学部電気工学科第二分科の後輩でもあった。また彼とは共に同じ吉祥寺に住んでいたので、始終往来しており、こんなことから私にとっては最も親しい後輩であったのである。彼とは四年間、学生時代を共にしたが、戦後私は金沢に住むようになったので、年に一回位しか会っていない。私が上京した際、年一回は昔の仲間が銀座ライオンに集まってくれ旧交を暖めているが、彼もよく来てくれた。

彼との山行で最も印象に残っているのは、一九三八（昭和十三）年三月の西穂高岳瘤尾根の極地法のトレーニングの計画だった。当時の学生山岳界は漸く海外遠征への目が向けられ始めた頃であり、早稲田も二年前に朝鮮（現在の北朝鮮）冠帽峰の極地法による冬期登攀を終わり、極地法の研究が熱心にされている頃であった。あいにくこの計画は「瘤」の登行、下降が困難で、また「瘤」の下のコルに張った前進キャンプが上から見ると大雪庇の尾根からはみだした部分にのっていることが分り、皆怖じけづいて早々にキャンプを撤収し、結局この計画は完全に失敗したのであった。然しまだ計画の日数は十分に残っていたので、私は杉本君と現在中房温泉をやっている百瀬孝君をつれ、西穂より奥穂への登行を試みた。奥穂まで行ったところ、またもとのルートを下るのもつまらないと思い、涸沢を下り徳沢を経て上高地までたどりついたが、ここまで来た以上岳沢のベースキャンプまで、いま一息なので再び岳沢を登りベースまで帰って来た。午前二時にベースを出、帰って来たのは夜半の十二時で、実に二十二時間歩きつづけたことになり、その頃の私でもわれながらよく歩いたものだと感心したものだった。このことが彼との山行で最も印象にのこっている一幕である。

彼は大学卒業後は東芝に入り、定年で辞めるまでは同社の堀川工場長をやっていた。

彼の日本山岳会の会員番号は一八二七で一九四〇（昭和十五）年の入会なので、まだ在学中から入っていたことになる。しかも紹介者は望月達夫、吉沢一郎の両大先輩であった由、この度この稿を書くに当たって事務局で調べて頂いて私も始めて彼の入会の経緯を知り、敬意を表している次第である。

一九九〇（平成二）年の年次晩餐会で永年会員になり、皇太子殿下とテーブルを共にしたと誇らしげに語っていたが、彼の生涯にとっては最高の名誉なことであっただろう。

彼の人柄は、彼を知っている方は誰でも感じられたと思うが、実に温厚で常にニコニコしており、彼の怖い顔など見たこともない。

昨年彼と最後に会ったとき「来年は金沢でゴルフをしようや」と約束していたが、ついに果たせなかったのが、今となっては心のこりである。

ご冥福を心からお祈りする。

（小林雄次郎）

小野　幸（ひさし）氏（一九一二～一九九三）

小野さんについて書いておきたい事柄は少なくも二つあると思う。その第一は、現在金峰山麓金山平にある本会第三代会長木暮理太郎翁の記念碑を、戦後間もないころに造ろうと考えたのは、小野さんであったことである。それは同氏の筆になる「木暮碑以前」（『山岳』第八十二年）に委曲が尽くされているので、ここに縷述の要はないであろう。この記念碑建設は石楠花山岳会と霧の旅会の共催事業として行われ、本会は後援者の立場をとったが、松方三郎、藤島敏男氏らが率先親身の世話をされた。また「讃碑完成の暁は先生の親しまれた日本山岳会に寄贈致し永久に保管保存をお願い致す予定です」と趣意書に書かれたので、共催者の当初の意思通りに寄贈を受けた本会が、以後ずっと管理を行い、実際の煩わしい諸事は、すべて本会山梨支部の会員諸氏によって、永年に亘って続けられてきた訳で、その点もここに特記しておかねばならない。

本会の記録としては『会報』一五六号（一九五一年七月刊）に、レリーフの写真と共に藤島敏男氏による比較的簡単な一文があるだけで、建碑に至る迄の経過等は勿論書かれていない。小野さんの一文は七頁に亘るもので、今では忘れられた事柄も述べられている。これを書き残されたことの意義は少なくない。

その二は、茨木猪之吉さんの三十三回忌にあたり、同画伯をしのぶ会を一九七六年十月二日に、小野さんの肝いりで行なったことである。会報『山』三七八号（一九七六年十二月刊）に小野さん自身によって短文が寄せられているが、場所は故人のお墓のある横浜市の久保山墓地「かるべ茶屋」で、参会者の氏名などは洩れなく右の記録にある。参じた一人の私も当時のことを、まだよく思い出すことができる。

たまたま、この会で配られたB6判大横綴じの、ごく簡単なパンフレット（ガリ版刷）が私の手許に残っているが、表紙には茨木さんの自画像（四十三年不仙と署名）、二頁に会の次第書き、三頁は浅間付近と思われる茨木さんの油彩原色画一点、四頁は空白、五頁には中津川とある同氏のスケッチ及び略歴、六頁（裏表紙）に世話人のお礼を簡単に述べたものだが、勿論小野さんの手造りなのは明白で、こんな処にいかにもこの人らしい面が出ているように思う。

実は、茨木さんの追悼会は一九五九年十一月五日、交野武一氏らの肝いりにより、国際文化会館で、画伯の没後初めて開催されたことがある。松方氏司会のもと足立源一郎、鶴田吾郎、石井鶴三、堀進二氏等の画家をはじめ高野鷹蔵、岡埜徳之助、冠松次郎、松本善二、田部重治、東良三、槇有恒、等の諸氏の追懐談があり、佐藤朝山作の故人のブロンズをはじめ油絵、水彩、スケッチブック、画帖、手紙等が展示され、茨木さんの遺族も何人か集まり、参会者は五十名という大がかりな会であった。私の記憶にもはっきり残っている。『会報』二〇八号（一九六〇年四月刊）に記事がある。この会には小野さんも出席したようである。追悼会の記事のあとに「茨木画伯の年譜」という小野さんの一文が同じ『会報』に併載されている。

小野さんは千葉県成田に生れ、明治大学政経科を卒業し、旧東京市に（東京都になってからも引続き）勤務した。一九四〇年八月、日本山岳会入会（会員番号一八三八）。とくに奥秩父の山々を好み多くの山行を重ねた。一九五〇～五一年、図書担当理事をつとめた。晩年は特に本会資料委員会に協力し、多くのアドヴァイスを供した。また多年に亘って『山岳』、会報『山』への寄稿も少くない。『山岳』に就いては『総合索引』によって一目瞭然であるが、中でも「石井鶴三先生のこと」の一篇はかなりの長文であった。会報への寄稿は数が多いので、それをいちいち述べるのは煩に堪えないが、小野さん自身に独特の好みがあったようで、筆にした人々、山々共に特色が感じられた。また山岳図書に限らず、書物を愛した性格から図書紹介にも多く筆を執っているのが目立つ。一九九〇年十二月、永年会員となる。

本会以外では石楠花山岳会代表をつとめ、また東京都山岳部員としても活躍、一九三九年以来市主催の登山相談所を計画した人の一人と言われている。

著書に『生活の中の山』（一九五三年・朋文堂刊）がある。

私は、小野さんの入会時に偶然紹介者の一人になった（一人は吉沢一郎氏で、同氏から言われてなったように記憶する）関係から、本会のルーム等でお会いすれば、よく話をした方だが、晩年は双方共、会へ行くことが激減したので、最近はあまりお会いしてなかった。本年二月十八日、十二脂腸潰瘍で亡くなられたのも、少しあとになって知った。

明大炉辺会の特別会員でもあったそうだが、明大ＯＢ中には親交を結んだ友もなかったようで、追悼文の執筆者に窮している実状をきくにおよび、不適任と知りつつ筆をとった。合掌。

（望月達夫）

見学　玄氏（一九〇八～一九九二）

見学玄（ひろし）さんの人柄をひと口でいうと、こよなく山を愛し、こよなく酒を愛し、こよなくカメラを愛し、こよなく俳句を愛し、こよなく演劇を愛し、そしてこよなく人生を愛した人と言うことができよう。今の言葉でいうと多才なマルチ人間、その一つ一つが素人の域をはるかに越えていたのだから驚くべきである。三井銀行（現さくら銀行）に入り、忙しい銀行生活のかたわら、こうした趣味人生を生き抜かれた。銀行の方は脇役に徹されたが、永い間、人事部にあって厚生や社内報の編集に綿密な仕事をされた。銀行退職後は東邦大学の会誌の編集をされ、そのかたわら多くの句会を主催され、後進の育成に努められた。

山の方は学生時代から好きで、よく歩かれた由である。日本山岳会へは一九四一（昭和十六）年に入会され、会員番号は一八八二番であった。紹介者は吉沢一郎氏と望月達夫氏というから素晴らしい。三井銀行時代は永く山岳部長を勤められた。当時、三井銀行には日本山岳会員の広瀬潔氏や府川裕氏（故人）がおられて、よくお話をうかがったり、また三井不動産におられた交野武一氏（故人）とも

交流があり、三井不動産の山荘でスキーの指導を受けたりして、山岳部は地味ではあったが、それなりの活動をしていたと思う。

私が見学さんと一緒の山行で特に印象に残っているのは、一九五九（昭和三十四）年の夏に東北の朝日連峰を縦走した時と、その翌年の夏、飯豊連峰を縦走した時である。この時、見学さんはすでにかなりの高齢であったが、若い人たちにまじって重荷に堪え、ともに数日間にわたる山歩きを全うされた。時々、ウィットの利いた冗談が飛び出したり、俳句をひねられたり、一緒にいるだけで心が暖まるような人柄だった。

永い山岳部活動のなかでは、あってはならない遭難事故もおこってくる。一九五八（昭和三十三）年に南アルプスの北岳で、単独行の行員Y君が消息を絶ってしまった。見学さんが急遽、救援隊長となり現地におもむいたが、幸い当人は自力で脱出してきて事なきを得た。五九（昭和三十四）年一月に私は氣心の知れた山岳部員四名とともに、安達太郎山から吾妻山へのスキーツアーに出掛けたが、吾妻小屋からぬる湯温泉に下る途中、猛吹雪となり、最後尾にいたG君がスキーを流して一行とはぐれてしまった。やむを得ずその日は温泉に下り翌朝救助におもむいたが、G君は幸い雪洞を掘って無事で、軽い凍傷にかかっただけですんだ。この時も見学さんにいろいろ心配をかけてしまった。いずれも忘れられない思い出である。

見学さんは晩年になってからも、日本山岳会の年次晩餐会には欠かさず出席され、会員間の交流に尽くされた。そして五十年以上在籍の永年会員となることになったが、栄えの銀巻きの永年会員章を受け取る時の晩さん会には、病氣のため出席することができなかった。故人にとっては何とも心残りのことであったと思う。心からご冥福をお祈りする次第である。

最後に見学さんが生前に上梓された句集『莫逆』より、山に因んだ俳句を選んでご紹介しよう。

野路行けば凍蝶に逢ひ梅に会ひ
夏山を恋う陰毛に白まじりても
山へ行く荷を夜深き汽車の床に
山の事故ありたる焚火夜を燃ゆる
（朝日連峰縦走）
月山が消える蚋来る目を閉ぢて
倒木をまたぎ越えゆくいきなり雪
（飯豊連峰縦走）
滴りに山のたつきの米かしぐ
峠で割れる通草ここから奥只見
繰り返す山の馬鹿雪馬鹿天氣
山小屋の八月燃ゆる炉ありけり

（長岡忠一＝三井銀行山岳部ＯＢ）

田中（諏訪多）栄蔵　氏（一九一一～一九九二）

一九九二（平成四）年五月九日、故人の死を悼むかのように、やわらかな小雨がけむる川崎市立葬祭場で、諏訪多栄蔵さんの葬儀が

営まれた。同月五日朝、眠るようにしずかに八十一年余の生涯を終えられたという。

諏訪多さんは、戦中から戦後の世情の変化のもっとも激しかった時代に、本会関西支部の運営に活躍されたのみならず、その後はもっぱら出版関係を通じてその豊かなキャリアを駆使することによって、後進の指導と自らの研鑽に、弛むことなく努められた人であった。

"Life is meeting."という成句は、かのジョン・ハントの自伝のタイトルにも使われたが、諏訪多さんの人生を語るとき、青年期から交遊の深かった西岡一雄さん、関西に移られてからは加納一郎氏や藤木九三氏、戦後では深田久弥氏など、日本の登山思潮の変遷に大きく関わった大人物との出会いがなかったとしたら、山岳文献研究、特にヒマラヤ研究にのこした諏訪多栄蔵の業績はなかったかもしれない。その後半生にあたる二十五年ほどのあいだ、親しくご交際させて頂いたが、諏訪多さんは、ご自分のことについてあまり多くを語ることはしなかった。しかし、その篤実な人柄からいって、まさに「人生は人との出会い」というこの言葉が、まさしく当てはまるほど、その、人との出会いが諏訪多さんの人生を大きく左右してきただろうと思えてならない。

諏訪多さんは、一九一一（明治四十四）年二月十日、東京日本橋に生まれた。幼少の頃は虚弱体質で、小学校を終えるまで、当時は片田舎だった現川崎市内の他家に里子に出されていたという。神田に移って錦城中学校に入学、関東大震災に遭ったが、実家は被害を免れた。一九二五（大正十四）年、淀橋の工学院に入学、機械科および冶金学科を卒業したあと、一九二八（昭和三）年、現在の江東区にあったトキワ鉛工業株式会社に入社した。三一（昭和七）年一月より三三年十一月まで兵役、除隊後ふたたび同社に復帰、三六（昭和十一）年、同社の大阪工場建設とともに、以来大阪に在住することになった。三八（昭和十三）年、会社のトラブルがあり、帰京を考えていたところ、すでに、山岳雑誌『ケルン』の編集を任されるまでになっていた加納一郎氏の紹介で、別宮貞俊氏が役員をしておられた住友電線製造所に、被鉛作業の専門技術職として入社した。四三（昭和十八）年喜布子夫人と結婚。住友では停年近くまで勤め、六六（昭和四十一）年神戸の三建化工株式会社に入社し、七六（昭和五十一）年、六十五歳で退職した。

西岡一雄さんには、東京在住時代の一九二九（昭和四）年から私淑、その発端は関西出張の折の大阪での出会いであったという。三一（昭和六）年二十歳のとき、夏の大台ヶ原の谷歩きや、秩父山塊への西岡さんの山行に、東京から同行している。同氏を通じての交友は、東京在住の海野治良氏や、同じく関西のＲＣＣメンバーとつながり、関西に移ってからは、勤務先の近くに療養生活を送っておられた加納一郎氏や、西岡さんの好日山荘と、隣あわせの関西支部ルームに集まる若い学生をふくめた関西の岳人たちとの交流が深まった。加納さんはもちろん、特に藤木九三さんの所蔵本との出会い、当時近隣の大阪市役所に勤務されていたＡＡＣＫの宮崎武夫さんとの交わりは、諏訪多さんのヒマラヤ文献研究においおいに拍車をかけることになり、それは、一九四二（昭和十七）年に創刊され四四年に廃刊となった朋文堂の加納一郎主宰の季刊誌『探検』に連載

された「ヒマラヤ山岳文献抄」となって結実した。著者によれば、もともとメルクルの文献目録にある本を全部読もうという目的で始められたものであり、本人としても決して満足のゆくものではなかったという。しかし、アノテイトされた欧文山岳文献目録としては、本邦の嚆矢とされるものであった。

一九四二（昭和十七）年五月日本山岳会への入会（会員番号二一五三、紹介者は西岡一雄・富田健一）は、やっと入会金が払えるようになったから入ったというだけで、本人にしても周囲の友人たちにとっても、今更新入りという感覚では受け取られなかったのであろう。同年六月に催された関西支部の夏山講習会では、装備についての講師をつとめる。この講習会の内容は、関西支部編『山岳研究講座』（1）（2）として朋文堂から刊行された。この時の講師の面々は、桑原、加納、宮崎、今西（錦）氏等、関西岳界超一流の錚々たるメンバーであった。戦中戦後の混乱期から昭和三十年過ぎまでの間、実質的に関西支部の活動を支えてきた中のひとりとして諏訪多さんの活動は高く評価されている。

昭和三十年代に入って、マナスル登頂を契機として登山ブームが起こり、日本国内の各大学では海外登山の気運が昂まり、国内でも困難な冬季岩壁登攀を競う社会人団体が増え、やがてそれもヨーロッパやアンデス、ヒマラヤにつながる道を進みはじめた。関東では、一九五八（昭和三十三）年に第二次RCCが結成された。諏訪多さんは、五五年前後から雑誌『岳人』の編集に関与するようになり、東京の新しい動きの中心であった奥山章、長越茂雄氏などとも交流が始まり、そうした社会人団体の動きには、かなり敏感に反応するなにかがあったものと思われる。諏訪多さんは、表に立って華やかに動くという人では決してなかったけれども、そのあたりから東京の動きを意識されてか、若い日に憧れをもった関西のRCCの復興、社会人山岳会の組織を離れた同人による山岳研究グループのようなものを一時考えられたようである。これは当時の関西でのノレン意識のためか、あるいは追随する若い人材に欠けるところがあったのか、実を結ぶには至らなかった。しかし、何事につけ、後進への力添えには決して身を惜しまれなかったことは、八尾の自宅が東京の九山山房と同じく、海外の山をめざす当時の若者たちの関西での梁山泊であったことや、日本ヒンズー・クシュ・カラコルム会議などのその後の発展にも知られる通りである。

諏訪多さんの本領は、やはり出版界での文筆を通じての登山思潮と技術の啓蒙と、自らの文献研究にあったといえるだろう。戦前からつづけたヒマラヤの文献探索は、一九五二（昭和二十七）年、鳥海山国体ではじめてお目にかかったという深田久彌さんのその後の活動にも、大きな陰の力になっていたことは周知の通りである。私などが所用で呼び出されて会う場所は、決まって大阪駅前の旧い旭屋の二階洋書売場であった。吸い口をつけた煙草をくゆらせながら、キュムレイティブブックスなど欧文カタログの大冊を丹念に調べておられた姿がいまだに目に浮かんでくる。最近のように情報が簡単に得られる時代ではなかったので、新刊を探るだけでも相当な努力が必要であった。

年譜的にみると、文筆活動でもっとも油ののりきった時代は、昭和三十年代後半から二十年ほどの間であろう。いくつかの全集の企

画監修、解説の執筆、それにいくつかの翻訳も出版され、それぞれが時代の潮流にも恵まれて、つぎつぎと新しい企画が生まれ実行されていった。ちょうどその期間に、すぐ手近かなところにいたことで、私もわずかながらそのお手伝いをさせていただいた。これは、私にとっても一つの人生の出会いであり、幸運でもあり、勉強する機会を数多く作って下さったことを今は諏訪多さんに感謝したい気持で一杯である。

私がはじめて八尾のご自宅を訪れたのは、公団住宅に転居されて間もない、多分、一九五七（昭和三十二）年のはじめ頃だったと記憶する。そのころから、すでに八尾のお宅は、『岳人』誌の関西編集分室でもあり、ヒマラヤやアンデスをめざすものにとっては情報のメッカとしての役割を果たしていた。広いとはいえないその部屋は内外の本で溢れていた。整理術ということが云々されるが、それは収蔵場所の許容限界内の話であって、見せて下さいとねだった本を探すのに数時間もかかり、昼飯から夕飯まで奥様の手を煩わせてしまったこともあった。その蔵書は今、立山山麓芦峅に一九九一（平成三）年十一月開館した富山県立山博物館に、「諏訪多文庫」として無事に納められている。その経緯については、すでに会報『山』五六八号に、望月達夫氏が簡潔で要を得た一稿を寄せられた。私たちとしては、ただその蔵書が一冊も散らばることなくいずこかに移されることを願っていたが、最良の結末が得られたことを本当にありがたいことと思っている。

蔵書の内容は、さすがに諏訪多さんの長年に亘るきわめて実証的なヒマラヤ研究にふさわしいもので、和洋を通じて一般愛書家の愛でる山岳書の古典などといった類の本は比較的少なく、ほとんどに書き入れ、傍線が加えられていて熟読の痕を示している。特に洋書に関しては、主として第一次大戦から後の登山隊、探検隊の調査によってまとめられた言語、民族、地質、動植物その他の学術報告類が多く、しかも学術的に重要文献が多いので、これだけの蒐集は、単に金をかければ集まるというものではない。山岳古典などと違い、大部分が滅多に古書業界にも出廻ることの少ないものである。わが国の貴重な文献資産として遺されることにご尽力いただいた望月達夫氏、前富山支部長若林啓之助氏と、富山県当局のご協力には感謝の言葉もない。

あまり一般には流布されていないが、諏訪多さんの書かれたものの中に『覓無抄』（ベキムと読む）というのがあり、日本山書の会の山書月報に連載された、同会会員に対する読書、蒐書、会の在り方などについての指針とでもいうべきものである。それによれば、成長期から以降、氏によって読まれた本の量は、おそらく莫大な数にのぼるのであろう。戦前に藤木文庫の洋書を書き写したという何十冊ものノートも幾度か見せていただいたことがある。複写機を簡単に使える現代のわれわれには及びもつかぬことであるが、自分の不勉強を恥ずかしく思ったものである。整理した蔵書の中に、戦前からの岩波文庫が何百冊とあって、文芸、絵画、哲学、歴史その他、その分野もかなり広範囲に亘っていた。これは富山へのリストからは除外し、奥様のご了解を得た上で当地で処分したが、故人にとっては、かけがえのない自己形成の航跡として残されていたものだったかも知れない。

川崎に移られる前日に八尾のお宅でお別れしたのが、ほんとうのお別れになってしまった。そのあと数年の闘病のお姿を私は知らない。ただただ、ご冥福を祈るばかりである。

諏訪多栄蔵著作関係年譜

著　作

一九四九年　『穂高岳ルート図集』朋文堂
一九五四年　『登山技術と用具』(共著)山と渓谷社
一九五六年　『第三の極地』(訳)朋文堂
一九五七年　『アルピニズム入門』三笠書房
一九五八年　『マッターホルン』山と渓谷社
一九六七年　『登山百年史』(共訳)(世界名著全集別巻)あかね書房
一九六七年　『地図の空白部』(訳)(ヒマラヤ名著全集)あかね書房
一九六八年　『ヒマラヤ謎の河』(共訳)(ヒマラヤ名著全集)あかね書房
一九七九年　『回想―西岡一雄』(編著)(覆刻『泉を聴く』付録)サンブライト出版

企画、監修、編集に関与した主な雑誌、全集など

一九三七年以降廃刊まで　山岳雑誌(旧)『ケルン』朋文堂
一九五五年以降　山岳雑誌『岳人』関西編集分室　東京中日新聞社
一九六七～七一年　『ヒマラヤ名著全集』全十二巻別巻二巻　あかね書房
一九七三年　『ヒマラヤの高峰(深田久弥著)』全三巻　白水社
一九七五～七六年　『ヒマラヤ―人と辺境』全七巻　白水社
一九七七～七八年　『世界山岳地図集成』全二巻　学研

なお、諏訪多栄蔵遺稿集『ヒマラヤ山河誌』が、今秋、京都のナカニシヤ出版より刊行の予定である。

(吉永定雄)

板倉勝正氏(一九一五～一九九二)

昨年(一九九二)六月、板倉先生が亡くなった。七十六歳だった。先生と書いたのは、私が中大山岳部に入部した当時、文学部教授で、山岳部長をなさっており、我々が板倉勝正氏について語る時にはこの呼び方しか知らないためであります。

先生は、一九六五(昭和四十)年山岳部長に就任され、一九八五(昭和六十)年まで、二十年間山岳部を指導してくださった。

決して「山のベテラン」「エキスパート」ではなかった方ですが、新人合宿、夏山合宿と、ほんとうによく参加され、学生やOBに慕われた方でした。合宿への参加やそれ以外にも行かれた山で、先生は楽しく山を歩かれていました。上級生や若手OBがお供をしての

山登りではありますが、合宿での山登りだけでなく、楽しい山登り、年相応の山登りがあることを身をもって示していたように思います。

指導はまた外書講読にも及びました。我々が合宿の山行で授業の出席率が悪く、出来も悪いのを心配し、毎週一度昼休みに、外国語の本（山関係を中心に広範囲）を皆で勉強するというものでした。勉強が終わると、（終わるというよりは、勉強の出来の悪さに先生が、ガッカリする頃）近くの中華料理店からラーメンが出前されます。勉強のわりには出席が良かったのは、食べ物に弱い部員のポイントを見抜いてのことだと思いました。

文学部から給料を貰い、山岳部に勤めているとまで言われるほど、先生は、部員の面倒を見ておられました。

先生は、「山では素性が良い」とおっしゃっておられたそうです。スポーツ登山の草分けであり、立山松尾峠で遭難された、故板倉勝宣氏は、先生の叔父様にあたり、一九六七（昭和四十二）年、先生が中央大学ヒンズークシュ遠征隊長としてコーイ・バンダコールへ行かれた一つの目的は、叔父様の遺愛のピッケルをヒマラヤへ立てるということのようでした。

先生は十六歳（一九三一年）のころから山に登り、やみつきになって、北は十勝岳、八甲田から南北アルプスにいたる多くの山に登られたとのことでした。その後東大に進み、山岳部ではなかったものの、何となく山岳部の方々と交流があったようです。日本山岳会のメンバーでおられる田口二郎氏、渡辺兵力氏などの方々とはこのころからの知人と聞いておりました。

先生が危篤と聞いて、私が病院へ駆けつけた時、集中治療室の先生のそばに、じっと付いていた田口二郎氏の姿が印象的でした。

日本山岳会との関わりは、一九六五（昭和四十）年からと聞いておりましたが、それ以前に一九四六（昭和二十一）年に一度入会され、北大助教授として離京する四九年まで在籍されたとのことでした。一九七一（昭和四十六）年から七七年まで、理事、常務理事を勤められました。

理事をされていた当時は、自然保護委員会を担当されていたようで、早池峰山の開発に反対運動をしていることや、その協力を我々ＯＢ連中にも呼びかけておられました。

「山では素性が良い」と前述しましたが、「生まれ」もまた良い方でした。旧備中松山（現岡山県高梁市）藩主嫡流。つまりお殿様です。日本で今だに城をもっている方は数名程と聞いたことがあります。以前伯備線高梁駅から城を見る機会がありましたが、仰ぎ見るような高さに山城があったのをおぼえております。

先生には、良きに計らえ、よろしくたのむよという殿様気質のようなところがあり、それに振り回された方、ＯＢの方々もあろうかと思います。しかし、ＯＢが集まって先生を山へかつぎ出したり、フッと「先生はどうしているかな」と話題にのるのは、ざっくばらんな、肩ひじ張らない自然体の先生が、楽しく、親しみを感じる方だからではなかったかと思います。

世が世なら、私ごときが追悼の文を書くなぞ先生には考えられず、苦笑いされていると思います。学問的な業績や、大好きだった犬のことなど、先生の色々な面にはふれませんでしたが、山の一面だけ

見ても、やわらかで優しい雰囲気を作り出す人柄は、多くの人に慕われていたと思います。

仰ぎ見るような高さにある山城の空の上へ先生はいってしまわれた。先生との出合いに感謝し、先生のことを追憶しながらの拙い追悼文を終えることとしたい。

（板倉勝正氏は一九四六年入会、会員番号二三七六。紹介者は関根吉郎、塚本繁松。一時会を離れ一九六五年復活）

（小林政志）

柴田均二氏（一九二三～一九九二）

私が、はじめて故柴田氏とお会いしたのは昭和三十年代後半だったと記憶している。紅葉が始まったばかりの鳥海山で開催された県体でお会いしたのが氏から私が指導を受けることになる出会いであった。

県体の時、百宅でキャンプし夕食となった時のことを今でも私は忘れられない。

氏はなかなかの酒豪であった。下戸の私は早く食事をしたくてしょうがなかった。いまから思えば若さゆえもあっただろう、相当おなかがすいていたからだったといえるが、氏の飲みっぷりにお構いなく「お先に」といって飯盒の蓋をとったのである。ところが氏はまだ私が飲んでいるのにということはおくびにも出さずにやさしいまなざしでリュックを開けたのである。なんだろうと興味津々でいたところ、あの氏独特の物静かな言い方で、「これは、秋田市内で食べられないものだ。ちょっとやそっとでは手に入らない」といって新聞紙だったろうか、紙にくるんだ生まれたての子供の手のような大きさの包みを私に向かって差し出されたのである。

何だろうと思い、開けてみたがさっぱり判らない。山菜の漬物の一種かと思ったがそうでもない。御飯に乗せて食べる。その美味たるや素晴らしい。青海苔と魚の匂いを一緒にした味である。それについて後で氏に聞いたところ鮎の内蔵の塩辛の「うるか」というものであった。鮎の解禁の話題が出る度これからも氏を思い出すことだと思う。

氏の生まれは秋田県の羽後町である。この町は、鳥海山からみて北東部に位置している。

この町には、「わが町の尾瀬」と町勢要覧に記された刈女木湿原がある。

「田代・梨ノ木峠より沢づたいに一キロの所に四つの沼が広がる湿原である。秋田県自然環境保全地域に指定されている。

早春に群生する『ザゼンソウ』の見事な花が咲き乱れ、続いて『ミツガシワ』、『トキソウ』、『ミズチドリ』と次々に咲き、秋になると『サワギキョウ』や『リンドウ』、『オオニガナ』さらにはここで発見された『ガリメギイヌノヒゲ』と初冬まで美しい花々が咲き誇り、自然の楽園となってる。」と記載されているとおりの素晴らしい場所である。過去に一度私も訪れたが、その時は特別な感慨もなかった。いまこうしていると故柴田氏がこの地の影響を受けたのかとの

思いを強くする。

また、同町には、国指定重要無形文化財「西馬音内盆踊り」がある。毎年八月十六日から三日間開催されるこの盆踊りは約七百年前に始まったとする説と約三百九十年前から始まったとする説がある。亡霊をなぞったといわれる彦三頭巾や深くかむった編笠に、あでやかな端縫衣裳をまとった踊り子たちがしなやかな手振り、足さばきで流れるようにゆるやかで優美な踊りと、にぎやかで勇ましい囃子の不思議な調和は幻想的でさえある。今年の氏はこれを見ることが出来ないのだが、毎年見続け、踊ったであろうこの行事に氏はどのような精神的な影響を受けたのであろうか。

氏は一九六二（昭和三十七）年に羽後町山岳会を結成し初代会長となった。以後二十七年間に亘り登山技術の普及と自然保護に力を尽くされた。

同山岳会は氏の指導のもと県体にも選手を数多く送り出している。秋田県山岳連盟副会長、日本山岳会秋田支部二代目の支部長、日本山岳協会参与などの要職を務めていただいたことは忘れることが出来ない大きな恩である。氏はあのとおりの明るい性格で物事にこだわらない、しかし言うべき事ははきり言う親分肌であり、岳友はもとより、多くの人が集まり楽しかったのを思い出す。氏は町の昔からの手作りの蕎麦をよくご馳走してくれたがそれは多くの人も同じだったと思う。

その人柄と信望から、三輪公民館長になり、同町教育委員等町の要職につかれた。同町商工会理事として、また、七四（昭和四十九）年から六年間副会長として見事な手腕を発揮されている。というのも、家業は実兄均一氏と建設業としての柴田組を興し基礎固めが済んだところで独立、柴田建設を発足させ、同町建設業界のリーダーとして活躍したことで明らかである。

奢ることなく生活されたことは、土木機械等数多く使用していたにも関わらず交通安全に取り組み、八九（平成元）年に交通栄誉章緑十字金章を受賞したことからも十分推察できる。

山岳技術の普及等の取り組みに対しても九一（平成三）年度秋田県スポーツ栄誉賞を受賞している。

秋田の梅雨明けは近い。鮎の話題も聞かれることだろう。そして、夏休み、氏の新盆もくる。氏の家族の一人、末娘は氏が亡くなってから結婚されたが、皆元気で暮らしている。長女にも三人目の子供が氏が亡くなってから生まれたと聞く。氏の家族、そして氏の会えなかった孫は今年の西馬音内盆踊りをどういう気持ちで見るのであろうか。

氏のご冥福を心より祈る。

略　歴

一九二三（大正十二）年六月十八日　秋田県三輪村で生まれる
一九四七（昭和二十二）年　日本山岳会入会。会員番号二六五五
一九七〇（昭和四十五）年～一九八一（昭和五十六）年　日本山岳会秋田支部長
一九九二（平成四）年十月一日死去。享年六十九歳

（岡田光行）

川又恒一氏（一九一一～一九九二）

日本山岳会福島支部設立時の立役者の一人、川又さんが亡くなられた。一九九二（平成四）年十一月十四日、菩提寺の福島県三春町の紫雲寺において関係者多数列席される中、告別式が行われその折り、山岳関係代表者として弔辞を奉呈したので、それを述べて追悼文とします。

弔　辞

川又さん、長いこと県内山岳団体のご指導を戴き有難うございました。ここに関係団体並びに山の愛好者を代表し、お礼の言葉と共に、お別れのご挨拶を致します。

あなたとお会いしたのは、戦後間もない一九四七（昭和二十二）年、世情不安定の中でしたが、山を愛好する連中が相集い、日本山岳会に入会した時でした。東北で初めて支部を結成し事務局を引き受けられ常任委員として取りまとめに尽くして頂きました。続いて日本山岳会支部が中心となり、県山岳連盟を設立、初代理事長として運営、指導、育成に尽くされました。高体連山岳部の養成、県警に呼びかけ遭難対策に対する講習会等啓蒙活動に努力されました。これが認められ六四（昭和三十九）年県体育協会より優秀指導者表彰を受けられました。

思い出すと終生忘れられないことは言い尽くせませんが、一つ二つお話しいたしましょう。

一九五〇（昭和二十五）年始めて国体予選会として県総合体育大会の一種目として登山部門を計画、実施した時です。飯豊山でやろうとの事で汽車を乗り継ぎ、現地の接渉、調査等何回となく足を運び、募集要項、プログラム、名簿等全て手作りでガリを切り、カーボン紙を何枚も入れ複写し、無我夢中で大会に入りました。

参加者百数十人の行動は払暁三時に川入のテント場を出、懐中電灯を頼りの十五里の登りは見事なものでした。頂上神社に全員到着、休む間もなく下山にかかり麓の弥平四郎の部落に入った頃最後尾の私は夜の八時でした。あなたは終始トップに立ち、後続選手に気を使い、ペースをとり、ただ一人の落伍者もなく引っ張って来られました。真っ暗くなった部落直前の藪の中から突然立ち上がったものがあり一瞬ビクッと立ち尽くしました。それがあなたでした。今までの責任感と気苦労で張りつめた気持ちが、終わったという満足感と気の緩みで動けなくなったのでしょう。ただ顔を見合わせ一言も言わず、残り少なくなった水筒の水をあけ、後はただ笑いのみでした。

昨年知事さんらと飯豊山に入った時、山都町の宿舎の玄関先で真新しい登山靴のベロに「川又」と書いたのがあり珍しい名前もあるものと思い、テレビ関係の人との事で、本人とお会いしたところ、どことなくあなたの面影があるので、失礼とは思いながらも、「もしやあなたは三春の川又さんでは」と伺ったところ、「ハイ三春の…」と言われ本当にびっくりしました。息子さんの暉之（てるゆき）さんだったのです。偶然とは申せ、まさか飯豊で初対面とはと感慨深いものがあ

りました。
　そのほか猛吹雪の中のリングワンデリング、台風下の徒渉、第五回国体に県として始めての参加、第七回国体の計画段階から役員としての活躍等遠い遠い思い出となってしまいました。まだまだ申し述べたい事もありますが、これからも遙か浄土の地からご指導の事をお願いいたしお別れの言葉とします。
　安らかにお眠り下さい。
　戒名　浄覚院公誉道岳恒章清居士

略　歴

一九一一（明治四十）年一月十二日　福島県三春町にて出生
一九三四（昭和九）年三月　早稲田大学政経学部卒業。在学中山岳部に在籍
一九四六（昭和二十一）年一月　家業の本陣本店社長就任
一九四七（昭和二十二）年十二月　日本山岳会入会（会員番号二七二一）、福島支部設立役員として活躍
一九四九（昭和二十四）年六月　福島県山岳連盟設立、初代理事長に就任
その後日本山岳会副支部長、福島県山岳連盟副会長を勤め一九七九（昭和五十四）年三月健康を害し辞任
その他地方教育行政、福祉関係、地域音楽振興、文化関係に活躍
一九九二（平成四）年十一月八日　心不全のため死亡。同日付にて勲五等瑞宝章受章

福住修治氏（一九二九～一九九二）

（中嶋正夫）

　福住君が逝去してから、早や一年が過ぎてしまった。今にして思えば彼とのつき合いは十八歳の春、大学の予科一年に入学し、そろって山岳部に入ったときから始まり、何と四十五年に及んだわけで、人生の重要な部分の総てに拘わり合ってきた様な気がする。
　古い話で恐縮だが、敗戦直後の日本の山は、ルートも山小屋もすっかり荒れ果てたままになっていた。食糧・機材も殆ど手に入らず、現在と比較すれば、全くお話にならない山登りをしていたわけである。それでも記録を調べては、一日も早く戦前の水準を突破しようと、夢中で登りまくり、気が付いたら卒業していた、と言う態たらくであった。
　私たちの卒業を待っていた様に、堀田彌一・小原勝郎の両先輩から「日本山岳会に入会せよ」と命じられた。それは「説得」なんてものではなかった様な気がするし、それが、ごく当たり前であった昔のなつかしい想い出の一つでもある。
　かくして福住君と私は一九五三年に揃って入会、私は会員番号四一〇五番、福住君は四一三三番を頂いた。
　それからの日本山岳会での仕事は二人三脚であった。四国や北海道の国体には、共にインスペクターとして参加、また、学生部担当

の理事を拝命し、多くの学校のO・Bや学生との付き合いも始まった。

その頃であったと思う。戦後最初のヒマラヤブームが始まり、マナスル遠征が着々と進行していた。

私たちに続いて小松君や、中村君が入会し、ごく自然に、「立教隊として単独で、ヒマラヤの未踏峰に登りたい」という考えが芽生えた。目標を、ラカポシュ、ハラモシュにしぼって遠征隊を出そうと決まると、夢中になって研究を重ねたものだった。許可申請はどう書くのか、どうして、どこに提出するのか、まさに五里霧中の中を若さにまかせて忙がしくも充実した毎日が過ぎていった。しかし国際情勢の変化によって、パキスタンに入国が不可能となり、ふくらみ、燃えあがった大きな夢も、どうしようもない挫折感と共に、青春の幻として消えていった。

時が流れた。

私たちの約束……ヒマラヤの夢……を忘れたかの様に、福住君は、突然、あっけなく逝ってしまった。

彼のために弔辞を読みあげながら、私の胸には挫折した青春の夢が甦ってきた。しかし、ハラモシュ、ラカポシュもすでに登頂され、ヒマラヤの未登峰は残り少なくなっている。

既に六十三歳になった私には、ヒマラヤの未登の高峰に挑戦する力は残っていないかも知れない。それならば立教隊のために、わずかに残されたチベットの奥地に、未登峰を探しに行こう。果たせぬ夢を後輩に託そう。そう決心して、古い仲間とチベットに探査旅行を試みた。

そんな或る日、突然、マカルー東北にある姉妹峰チョモロンゾの遠征許可が舞い込んできた。

千載一遇のチャンスと考えた私は、年をも忘れて若い後輩たちとチベットの山にのめり込んでいた。

そんな中で福住君の一年祭がやってきた——彼の家は神道なので一周忌とはいわない。故人を偲び山の話で終始した。……河童稿、ウェストン祭、コーラス・グループ、エーデルワイスクラブの面々……。

ところで、世の中には偶然や不思議なことがある、とはよく聞く話であるが、福住君の一年祭の後の出来ごとは、まさにそんな事かも知れない。その話とは——

六月二日、一冊の本が届いた、渋さがあってスマートな装丁の小冊子で、「釣悠」(Chooyu 創刊号)とある。「おや、昨年ベース・キャンプまで行って来たヒマラヤのチョ・オユーはこんな字を当てるのか」と一瞬考えながら中を見ると、渓流釣り仲間の同人誌であった。U氏の一文が載っていた。

U氏は東北地方の大学山岳部のO・Bである。彼は釣り仲間を介して知り合った友人で、お互いに山ヤであることはよく知ってはいるが、山からみれば余技の世界の友人であり、山の話は殆ど交わす機会が無いままであった。

彼の文章は「釣り」ではなく、「四ツのケルン」と題して、今は亡き山の仲間と山の話であった。その昔、山男として輝いていたU氏たちは、私や福住君と同じく、ヒマラヤの未登峰、しかも偶然にも、ハラモシュを狙っていたとわかると、喰い入る様に一気に読み

下した。

時間と空間を超えて若者たちが、同じ未登峰に青春の情熱を燃やし、遙かなパキスタンの空に輝く白銀の巨人にあこがれていた。しかし、結果は同じ様に、夢は幻として消滅し、挫折する運命が待っていた。

歳月が流れ、男たちはそれぞれに仲間を失いながらも山にとりつかれながら生きている。

読みながらU氏の話に重なる様に古い記憶が甦っては消えていった。

不思議に一致する過去の偶然の数々を、今アラスカに遠征中のU氏は全く知らない筈である。やがていつの日か、山小屋で、或いは釣り宿で、何と言ってこの話を切り出そうか、彼の驚く顔が目に浮かんでくる。そして、カラチ、ギルギット、フンザ、ラワルピンディなど、懐かしい共通の地名が、彼の口から飛び出してくるに違いない。

一冊の小冊子が、二人の山男を、互いに知らなかった過去を介して、改めて強く結びつけようとしている。これはきっと、天上にいる亡き友人たちの計らいではないだろうか、と運命のいたずらを噛みしめながら、福住君や、U氏の友人の追悼に代えたいと思っている。

（羽鳥　肇）

五十嵐俊治氏（一九一〇～一九九二）

五十嵐さんは中学時代からスキーを始めていたので早稲田第一高等学院に入学してより早大山岳部に入部、夏冬の谷川岳特に一の倉に愛着を持ち度々入山していた。続いて穂高、剱岳その他の北アルプス縦走等部活動をしていたが、一九三〇（昭和五）年の冬期西穂高―奥穂高縦走は当時としてはスキーを有効利用しての登行として、『アルピニズム』昭和六年五月号にその記録が緻密に記載されている。その健脚と行動力と俊敏な姿は優秀なクライマーとして、その当時何時も一緒だった出牛陽太郎氏と共に各大学山岳部にも知られていたし多くの岳人との交流があった。

家族の反対もあってスキーに行くと云ってはスキーを担いで出て、山に行った。それもあって山岳部での後半は山岳スキーに熱心だった。

一九三三（昭和八）年神の田圃小屋より白馬乗鞍岳、小蓮華岳、白馬岳、大雪渓、カニ又、小屋へのスキー廻遊を始め、一九三四（昭和九）年五月の槍平小屋より西鎌尾根―黒部五郎―薬師―立山温泉まで一日行程でのスキーによる大縦走は当時としては記録的なものであったと云われる。ワックステクニックだけで縦走したのもたいしたものだった。

山岳部内にヒマラヤ研究会が出来て皆と『マウンテンクラフト』

の翻訳などを始めたのもそのころだった。

冬山の厳しさと美しさ、吹雪の鼓動と神秘な自然の幽玄な姿に魅せられた山への愛着の心が、『リュックサック』七号の神の田圃の記録の名文の中に好く語られている。

一九三五（昭和十）年早大建築学科卒業後清水組への就職と出征で山に行けなくなったが、戦後は休日を利用しての山岳スキーツアーに熱心だった。

退職してから（七十歳過ぎて）時間が出来て、相変わらずの健脚で毎年毎月のように山の旅を続けた。稲門山岳会の中の郎岳会や月例ハイキング、霞会、湯檜曽会等殆ど欠かさず参加された。

欧州アルプスへの旅、ヒマラヤトレッキングの旅、カラコルムやチベットやシルクロード等と旺盛な旅が続いた。八十歳になって一般ツアーではお断りをくらって、仲間たちでツアーを計画しての山旅を続けられた。

朝日新聞一九九一（平成三）年十一月三十日版のさわやか健康特集でダイナミックに老後を過ごしたといと云う記事で八十一歳の時のスキーの勇姿が載っていたが往年の五十嵐さんの姿がそのまま写っていた様に思えた。

五十嵐さんは人付き合いもよく、面倒見もよくて、皆に親しまれ、先輩から「バンドリ」と云うあだ名をつけられて通称「バンさん」と云って先輩にも後輩にも人気があった。お酒が好きで山の行き帰りに旅の中でもよく酒の好きな先輩連中からの御指名が掛かって夜ふけまで歓談されていた姿が思い出される。

晩年には山里の仏像に強い関心を持って、仏像研究家の丸山君（稲門山岳会員）の案内で林田さんや越智さん等と著名な各地の仏像（密仏）巡りをされていたが、自然の中に佇む仏像の深遠にして清浄、尊厳な姿と穏やかさの中に山に求める自然の姿の輝きと共通するものがあると感じておられたのではないかと思われる。

しかし二～三年前から心臓障害があって薬を常備されており、一緒の時だったが電車の中で話をしている間に急に倒れて一時意識不明になられた時には驚いた。すぐ治って大丈夫と云って独りで帰宅されたが、そんなことが三～四度あった。

それでも山への旅は続けられた。又早大山岳部の神の田圃の小屋の再新築には建設委員長として、ここ二～三年の間学校当局や、小谷村役場、地方環境課や工事関係者のところを度々訪ねて最後まで再築に努力し見事な山小屋の完成を喜んでおられた。山岳部同期の清野画伯のヒマラヤの山の絵を小屋に掲げることが出来たことも喜んでおられた。

亡くなる最終の一九九二年には一月には月例のハイキングで小雪の中を大山頂上へご一緒した。三月、六月には神の田圃へ、四月にはカラコルムの旅へ、八月には富士山へ、この時は大分体力の衰えが見られ、途中までに終わった。好きな酒もほとんど飲まれなくなった。それから亡くなる前月の十月に奥さんと一緒にジャワ島のボロフ・トール仏堂を見に行かれたのが最終だった。

十月二十日頃肝臓が悪くなり黄疸の症状が出て入院、検査の結果肝管にガンが二～三個出来ていて手術困難な状況で早くて二週間か一カ月と云うことで、急いで十一月三日見舞いに行った。ご本人はガンとは知らされておらず、とても元気で、四月に行ったヒマラヤ

の山の写真を引き伸ばして病室に掲げ、ベッドの上にも数枚置いて、一緒に行った連中に渡したいと云っておられた。十一月に東北の仏像を見に行くことにしていたのに残念。治ったら又山の旅に行こうと、別れるときに握手した手はしびれるほど元気な力だった。それがその翌早朝心不全で亡くなられた。八十三歳だった。

今でも他界で山の旅と仏像巡拝の旅をしておられる様に思えてならない。ご冥福を祈るのみである。

山の略歴

一九二八（昭和三）　早稲田大学山岳部入部
〃　一月　富士山
一九二九年　二月八ヶ岳、四月三ッ峠岩登り、六月八ヶ岳、七月奥穂・北穂・前穂、八月槍・薬師・立山・剱、十月谷川岳一の倉
一九三〇年　三～四月熊の湯スキー、四月三ッ峠岩登り、五月谷川岳一の倉、九月同、十月西穂・前穂
一九三一年　一月谷川岳一の倉、二月野沢スキー、三～四月西穂・奥穂、五月奥穂・北穂、十月奥穂・北穂・西穂、十一月富士山
一九三二年　四～五月谷川岳
一九三三年　五月神の田圃（白馬スキー縦走）
一九三四年　四月槍平小屋―西鎌尾根―黒部五郎―薬師―立山温泉スキー縦走
一九五五年　日本山岳会入会（会員番号四二七九）。その後一時会籍を離れ一九八四年復活
一九八二年以降　ネパール・エベレスト街道の旅、中パ公路パミール越えの旅、シルクロード紀行、ヨーロッパ・アルプス、ネパール・アンナプルナ周辺トレッキング、カラコルムハイウェーの旅

（近藤克二）

宮本貴文氏（一九二二～一九九二）

日本山岳会会員で、東京慈恵会医科大学山の会会員でもある宮本貴文先生が一九九二（平成四）年四月十四日早朝、心不全のため七十歳で逝去されました。

先生の、日本赤十字社中央病院、そのあと水戸赤十字病院と、二十四年間、赤十字の生えぬきとして実践された医療は正に博愛の精神そのものでした。中でも四九（昭和二十四）年から関わられた海外引揚同胞の救護活動は、前後十年に及び、その苦労は並大抵ではなかった筈です。六〇（昭和三十五）年、コンゴに動乱が発生するや、戦後初の海外派遣に日赤医療班として活躍され、六五（昭和四十）年のネパール王国医療団では団長を務められ、バクタプール地区の結核検診を立派になしとげられたばかりでなく、以後検診が現地スタッフだけで行えるところまで指導したことで、前国王からねぎらいの言葉をいただいた時の先生の輝いた顔が今でも忘れられな

い思い出です。

以前から仏教に帰依されていた先生ではありましたが、七一（昭和四十六）年、三施の一つ「施無畏」を心とした医療を目ざして、施無畏堂宮本内科を興されました。過労のためか心筋梗塞を患いながら、亡くなる前日まで診療を続け、患者に尽くされた正に聖者でした。

亡くなる前年、自分でも写経された大般若経を長安の寺へ無事納められ、永年の念願をかなえられた事は、先生もきっと満足されたことと思います。

先生がいつから山に興味をもたれたかは詳らかではないが、慈恵の山岳部入部は戦争中の四二（昭和十七）年、翌年の夏山縦走を最後に部としての山行は中断され、二年後敗戦、虚脱と飢えの時代、終戦から僅か一年後、苦労して山岳部を復活させたが、更に大きな苦難が待ち受けていた。以下に五六（昭和三十一）年、慈大山岳部部報『ヨッホ』五号に「終戦前後」と題しての宮本貴文先生の寄稿文の一部を掲げて先生を偲びたいと思う。

「私が入部した頃は、山岳部最盛期の余光は既にうすれ、僅かな部員しかいなかった。それから昭和二十二年、松本地裁へ濁小屋事件の判決を聴きにゆく迄が、私達の現役時代であった。

腹を空かして敗戦の日を迎えた頃は、山への望みはおろか、学校へ通える日が来るかどうかさえ見通しがつかなかった。それでいて冬には苗場の小屋に出かける者あり、翌年七月には四名が涸沢に天幕を張り、四名が烏帽子―槍の縦走に、とも角出発した。リーダーとて後輩に継ぐべきテクニックは余りにも貧弱であり、唯山の生活と山に登る心構えとを身を以て伝えるのみであった。しかるに縦走班は前代未聞の災難に遭い、敗戦の運命は山岳部から、美しい二つの魂を奪い去っていった。戦後五年にして部は盛期を取り戻した。今にして思えば、終戦翌年の五日間の涸沢の雨の中に、その種子は皮を破って微かに芽を出そうとしていた」

槍ヶ岳肩の小屋に、慈恵の山岳診療所が開設された五〇（昭和二十五）年から、一番大切で、大変な時期を、十年以上も黙々と務めて下さったのも宮本先生だった。いつも簡単に引き受けていただけるので、思い違いをしてしまったが、病院にお尋ねして先生が職場の誰からも気持よく送りだされる訳がわかった。

診療所開設三十周年号としての『ヨッホ』十二月号に穂刈貞雄氏は「宮本先生というとすぐ雨の事が思い出される。先生は毎年梅雨の明けきらぬ七月の早い頃入所して、早々に急患に出遭い大変御苦労された事が多かった」と書かれ、小屋での救護にもかかわらず亡くなった人の検案書に押す印鑑を持ち合せず、上高地中の旅館を廻って夜やっと同姓者を探し出して任務をはたされた先生のエピソードも披露されている。

先生と私の出合いもこの診療所であり、インターン時代、一緒に勤務した思い出もなつかしい。

更に十年経って、ネパール医療団で四カ月寝食を共に、白き神々の座をのぞんでの楽しさとは別に、偶然別のプロジェクトで来ていた日本人が病院で亡くなった。野天の川端で荼毘に付したのだが、遺族に渡すお骨のために、僧衣をまとわぬ僧・宮本が、一昼夜火の番をされた事は終生わすれられない。満点の星空と、薪の炎を眺め

て、きっと濁小屋で失った二人の仲間の魂にも祈りをささげていたのだと思う。

ここずっと山行記録、部報、他の方の追悼文に接して、先生のイメージは寸分違ってないことを知った。ただ今にもどこかから、余りかいかぶらないでくれよなあ、と声が聞こえるようにも思えるのだが。

合掌

山の略歴

一九四二（昭和十七）年　東京慈恵医科大学山岳部入部、七月徳沢生活（前穂北尾根～又白、天狗沢～ジャンダルム、北穂高～槍ヶ岳）、七月後立山縦走（白馬岳～鹿島槍岳）、十二月苗場スキー合宿

一九四三（昭和十八）年　四月谷川蓬峠　谷川岳ヒツゴー沢、八月水晶岳―槍縦走（大町―不動沢出合―湯俣―野口五郎岳―三俣蓮華―双六岳―槍ヶ岳―徳沢―徳本峠―島々）、戦前の慈恵山岳部（夏山）最終山行、十二月苗場スキー合宿

一九四四（昭和十九）年　三月苗場スキー合宿、九月苗場山

一九四六（昭和二十一）年　七月涸沢生活（涸沢―北穂―奥穂―前穂―北尾根Ⅵコル―涸沢）、夕方、別動隊濁小屋遭難を知り夜を徹して上高地―沢渡を歩きトラックにて松本着、大町病院に二名の部員見舞う、十二月苗場スキー合宿

一九四七（昭和二十二）年　三月苗場スキー合宿、七月槍ヶ岳山岳診療所開設以後毎年勤務

一九五八（昭和三十三）年　九月日本山岳会入会（会員番号四七五三）

一九六〇（昭和三十五）年　槍ヶ岳山岳診療所診療結果報告（十周年記念祝賀会）

一九六五（昭和四十）年　十一月～十二月ネパールカトマンズ、ポカラ散策

（野村孝義）

長谷川嘵一氏（一九三八～一九九二）

長谷川嘵一が直腸ガンで逝って一年がたった。気がつくといつの間にか長谷川と山に行く夢も見なくなっている。

同志社高校二年の冬、すでに山岳部員だった彼に誘われて、比良の打見へスキーをかついで登ったのが、私が山の世界に入るきっかけであった。

二月、伊吹での合宿もスキーが出来ると言われて、大喜びでのこのことついて行った。初心者の私には目もくらむような直滑降コースを「大丈夫や、ついて来い」とひと言残してサーッと鮮やかに滑り降りた。奴の言葉を真に受けて、大胆にも後を追った。滑り出してすぐに「しまった」と思ったがもう遅い。自分ではどうにもコントロール出来ないスピードとなって、スキーは勝手にどんどん滑っ

て行く。頭から突っ込む強烈な顔面制動で止った時は、しばらく息も出来なかった。「おい大丈夫か」の声でわれに返ると「頭からこける奴は早ようまくなるんや」とその声は言いやがった。その後、上手くなるどころか、差は開くばかりで、どうも根本的な才能が違っていたようである。

高校三年三月の八方尾根から五竜往復をすませると、彼と佐藤和男の三人で大学の部室へ直行した。

私は密かに、同志社大学山岳会の有力メンバーを二通りの人種に分類している。一つは、故児島勘次、平林克敏を典型とする人種で、これを「山人間」と呼んでいる。他方は、津田康祐、吉村公一などで、これは「山岳部人間」と言う。長谷川暁一は、私たちの同期を代表する「山人間」である。

山岳部一回生の一九五八年三月、私たちは寺阪元雄をリーダーに早月尾根からチンネの積雪期初登攀を目指した。部をあげてのヘビーなパーティーが作ったトレースを追った吉野満彦さんにあっさりと先を越され、第二登に甘んじることになった。上級生はもちろん、山岳部全員口惜しい思いであった。

三回生となった春、積雪期の剱を早月、小窓の両尾根から三の窓に集結し、剱の岩を集中的に登ろうと、当時としては、野心的な計画をたてた。言い出しっぺは長谷川である。夏山からそのプランにそって進んでいるところへ同志社最初のヒマラヤである西ネパール・アピ峰の登山計画が、現役にとって降って湧いたとしか言いようのない感じで持ち上がった。全員ヒマラヤ熱にうなされているまに、私たちの春山計画は大幅に縮小してしまった。形は違うが、再び口惜しい思いであった。

大学を卒業する時、自分たちの手でヒマラヤをやろうが同期生一同の合い言葉となった。一九六三年のポストに第二次ヒマラヤ登山隊がサイパル峰へ向かうこととなった。大阪に勤務先のあった私は休職願いが認められ、首の皮一枚つながって参加出来たが、沼津の長谷川は出遅れて調整がつかずに涙をのんだ。

翌年、アラスカ学術登山が計画されると、彼は即座に辞表を出して京都に戻って来た。アピ登山の際、平林克敏が大町の電力会社をやめて、当時朋文堂にいた江上康の下宿に転がり込んだひそみに倣うものであった。

長谷川らしい思いきりの良さである。

その後、技術系のエリートサラリーマンの道を再び歩みはじめた彼に、ヒマラヤ登山の機会は訪れなかった。人を山に登らせるために、都合八度も北京へ足を運んだ典型的な「山岳部人間」の私にも、自分の山登りはなかった。共にヒマラヤを登ろうが、せめてヒマラヤトレッキングでも一緒にやろうや、の年になっていた。

何年前だったか、日本山岳会主催で今西壽男さんリーダーのエベレスト・トレッキングツアーが企画されると、「俺も行くからお前も来いよ」と例によっての強力な誘いがあった。十二月決算の小さな会社の経営者の身では、正月休みを利用した企画に乗るわけにもゆかず、足慣らしの初雪の比良につき合うのが関のやまであった。これが長谷川との山行の最後となった。

三年前に、同志社大学山岳会で、アピ登頂三十年、ダウラギリ登頂二十年を記念して、ダウラギリからアピまでのフライト・ツアー

を企画した時、すでに彼は病床にあって、ついに共にヒマラヤの地を踏むことは叶わなくなっていた。

翌春の同志社大学山岳会総会の席上、学生時代絶えず長谷川とザイルを組んでいた岩登りの名手岩間清平が、スピーチで病床の長谷川のことにふれ、「長谷川さんと幾度一緒にザイルを組んだか知れないが、一度もトップを登らせてもらえなかった」と述懐した。「山人間」長谷川嘵一を端的に表わすスピーチであった。私もいつの日か鬼籍に入ったならば、長谷川のトップで三千世界のカイラスを登ろうと思う。

略　歴

一九三八年　京都市に生まれる。同志社中学校、高校を経て
一九六一年　同志社大学工学部卒業。高校、大学と山岳部に所属、仲間内では岩とスキーの名手として聞こえていた
一九六三年　日本山岳会入会、会員番号五七三八
一九六四年　同志社大学アラスカ学術登山隊に登山隊員として参加。リーガル峰（四二〇九メートル）初登頂
一九九二年八月二日死去

（松村多四郎）

平野隆司氏（一九四七～一九九二）

私が病院を訪れたとき、「なぜ、僕がこんな目にあわなければならないのですか……なさけなくなってしまいます」といわれ、あまりに痛ましいというか、山での遭難とはまたちがった悲劇に、何とも返す言葉がなく、元気づけようと見舞いにいきながらそこに立っているのが精一杯といったところだった。「隆司、山登りの勢いはどうした」と、やっとのことで、山に話をそらしながら元気付ける悲しい見舞いだった。

入院以来、彼自身も自分の病状を知っていたのだろう。山仲間と会うのが楽しみであり、気のまぎらう、安堵のひとときだったのだろう。一九九二年十二月のある日、日大山岳部の先輩から、平野君の危篤が知らされ、親しい友人が集まったが、彼自身すでに意識を失い、ただ激しい呼吸だけが我々の不安をかりたてた。

十二月十日、信濃町の慶応病院にて四十五歳にて他界された。病名はすい臓ガンということであった。若いだけに、彼の死をあきらめ切れないものが誰の心にもよぎったと思う。

平野隆司君とは、日本大学山岳部時代からの付き合いであり、大学山岳部の先輩、後輩というひとつの家族的親近感をもったつきあいであった。一九六六年彼が日大山岳部に入部したときは、一九七〇年日本山岳会エベレスト南壁隊で当時最高地点に達した嵯峨野宏

氏（ＪＡＣ会員）が四年生でチーフリーダーであり、三年生には八八年三国友好登山隊エベレスト登頂の時頂上でテレビカメラを回した中村進氏（ＪＡＣ会員）など、後に登山界で活躍する優秀な山仲間の中で育った。彼自身ひとつの山登りの哲学を持っていたようで、時には素直さを欠くかと思うほど自分の考えや意見を強く主張する。しかしそれは彼なりの正義感とか、弱者の立場に立っての正統論であったようで、四年生ではチーフリーダーとしての指導力が良き後輩を育てた。

卒業後、明治大学山岳部ＯＢの高橋進氏の仕事を手伝ってカナダで勤めはじめ、二年後の一九七二年、テレックス講習会で同席した同姓の平野さんという女性とカナダのバンフで結婚し、ヒマラヤ登山もあきらめたかなと思った矢先、七二年の日本大学ヤルンカン登山隊に参加、最後のアタッカーとして頑張るも頂上にとどかなかった。当時彼からもらった絵葉書にはその悔しさが書き込まれていた。その帰り、ヨーロッパを旅行して帰国した八月、肝炎で入院した。

学生時代彼は、同期の原田洋氏、樋山規夫氏、大島育雄氏など山仲間に恵まれ、彼自身も岳人として、リーダーとして育っていた。日大山岳部が一九六三年はじめて、北極圏グリーンランドの地を踏み、十五年計画として徒歩による北極点到達計画を進めるなかで、彼の同期の大島育雄君は、グリーンランドでグリーンランダー（エスキモー）と結婚をしたが、こんなエピソードがある。エスキモーと結婚をしたいと家族に相談のため帰国した大島君は、両親に反対されて平野家に居候した。同期のよしみでエスキモー女性との結婚について相談をもちかけ、平野隆司の「大賛成」のことばに大いに勇気づけられて結婚を決意し、グリーンランドのシオラパルク村に永住してしまった。このように彼は同期、後輩に大きな影響力を持ち、また、日大山岳部のなかでも中心的存在としてＯＢ会活動に大きな貢献をした。

そうしたなか、外資系のＡＨＳ㈱（現在バクスター㈱と改名）に入社、福岡勤務となり、これは彼の登山活動に大きなダメージだったと思われるが、彼の人柄で常に山仲間との心のつながりは維持していた。しかし、二度の福岡勤務に、心境的にはジレンマ（苛立ち）のようなものがあったと思われる。

一九八三年、日本山岳会はカンチェンジュンガ登山計画を発表、彼は強く参加を希望した。鹿野勝彦隊長のもと重廣恒夫氏等とリーダーのひとりとして彼も参加、登山成功の大きな推進力となった。私も、この登山隊の計画・準備の段階では、同じ日大山岳部出身ということもあり個人的に何回となく彼と意見を交わす機会があり、時には真っ向から意見が衝突することもあった。そういったことが、さらに親近感を深め、彼もまた私を理解してくれることになったと思う。彼の登山論・理念を説明するのは難しいことであるが、個性的な彼自身のポリシー（登山思想）が彼の登山者としての信用、信頼を高め、「登山家平野隆司」のイメージがつくられたと思う。

私が、八〇年チョモランマ北壁隊に参加して、高山病で心臓障害をおこし帰国した際、医療関係の会社に勤務していた彼は、なかば強制的に順天堂病院への入院を勧めてくれた。親身になって他人のことを面倒みる彼のやさしさが、仲間にも慕われた。

一九八一年、日大のＯＢが中心となって五十歳以上のメンバーに

よるチョ・オユー登山隊（『山岳』一九九二年に記載）を計画したとき、彼は五十歳にはならないが参加したいという強い希望があった。五十歳以上でなきゃダメ！などと冗談半分に断わられたり、遭難対策としての若い力が欲しいことから遭難対策隊長として参加させようなど、滑稽な場面もあった。結局仕事の関係で行けなくなったが、その頃から体調の変化を彼自身が感じていたのだと、後になって気がついた。

平野君を知るすべての人が、彼の死に当り、「どうして平野君が……」と、若くして他界したことだけでなく、登山界において惜しい人を失ったという心情を強く感じていることとも思う。

ここに平野隆司君のご冥福をお祈りしながら、追悼文とさせていただく。

（神崎忠男）

高本信子氏（一九四一～一九九二）

いつものように、故郷インドに帰って来るという雰囲気で出かけて行った高本さんは、一九九二年八月十八日、インド・ヒマラヤ北部ガルワールのドゥラウパディ・カ・ダンダ（五六七〇㍍）の登山を終え、ウッタルカシへ下山の途中、乗っていた車を直撃した落石により帰らぬ人となりました。

生前はヒマラヤをはじめとして南米やアフリカ、パミール、中国など世界のあちこちの山にでかけ、なかでもインドは七回目ということでした。インドに魅せられ、インドに融和するように山や旅を楽しんでいたのに、たった一個の落石で命を落とすなんて何とも残念でなりません。

今でも、「ただいま、インドに行ってきたよ、ウッタルカシでチャンドラに会ったわ」なんて笑顔で出会えそうな気がします。

チャンドラというのは、一九六七年日印合同女性登山隊のメンバーのひとりであるが、高本さんにとって初めてのヒマラヤがこのインドとの合同隊であり、インドとの出会いでした。高本さんがインドの山に魅せられていったのも、初めてのヒマラヤが荘厳な魅力あふれるインド第二の高峰カメットであり、そしてチャンドラをはじめとして多くの人たちとの出会いの中で、より深く相手を知りたいという気持が出発になったのだろうと推察します。

ウッタルカシに住んでいるチャンドラは、インド女性の中でも体力、技術とも優れた登山家であり、人と競合することを好まず控えめであるが、山へのひたむきな情熱には圧倒されるものがありました。私は、チャンドラと高本さんのイメージが重なってしまうのですが、高本さんも、チャンドラの人間性に自分と共通するものをみつけていたかもしれません。

高本さんの人間としての許容の広さについては誰もが認めるところですが、日常の生活の中ではもちろんのこと、ヒマラヤの過酷な条件のもとでも、変わらぬおだやかさをもっていました。誰もが登頂に対する欲望を秘め、自分にチャンスが与えられることを願っているときにも、高本さんは常に協調的な態度で接していられました

し、人間関係の調和に気を配られていました。私などは頑固で自己中心的な性格ですから、多少の摩擦にたいしても不愉快さを表わしてしまうのですが、そんな時にも高本さんは、「やられたね」などとひとこと言うだけで、私を諫めることもなく紅茶をいれてくれたのでした。今思えば、彼女の雰囲気の中で自然に諭されてしまっていたようであり、高本さんと一緒に行動していたことで私の冷静さは保たれていたのかもしれません。

一九八〇年には婦人懇談会を中心に、高本さんを隊長としてガルワルヒマラヤのケダルナートに行きました。カメット隊のメンバーだったラマちゃんがリエゾンオフィサーを兼ねて隊員に加わり、その他の隊員も私たちの登山準備を手伝ってくださり、またインド登山財団はじめ多くの方々のお世話になりました。

私たちを含め日本からの登山隊は、インドから受けた様々な厚意に対して感謝しつつも、その気持を行動で示すことが少ないように思いますが、前インド登山財団会長のサリンさんが身体障害者のためのリハビリテーションセンターを開設されるにあたり、高本さんは日本での募金活動に積極的に取り組んでくださいました。インドに対する感謝の気持を実際の行動として現してくれたことについても、高本さんの行動力に敬服します。

また、高本さんの謙虚な気持が多くの登山を成功させてくれたように思います。ケダルナート登山の折、いい山登りを実現させるためには具体的にどのような取り組みをすべきかを考え、結論として「チームワーク」という答えになりました。そのチームワークを強めるためには、女性にありがちな依存心を取り除き自立していくことであり、そのためには荷上げ量や休息をふくめ各自の自主性を尊重するとともに、各自が最大限の努力をはらおうと意識づけていったことでした。「私たちは技術的にも体力的にも決して優れているわけではない。お互いを認め、支え、甘えることなく努力することがチームワークであり登山を成功させることになる」と。自主的管理という柱を立てたものの、高本隊長の寛容さと冷静な判断力があったから全員が「いい登山だった」と言えたのでしょう。

その後、ほとんどの隊員が結婚し子育てのために山登りを中断していますが、山に行けないもどかしさを感じながらも、いつかまた同じ仲間でヒマラヤへ行くことを夢みており、たまに会えばお互いの家庭の状況や子どもの成長の具合を確認しあって、再びヒマラヤへ行く日のことを語るのが常でした。

私の五十歳からの人生のページには、再び高本さんとの山登りの思い出が飾られるはずでした。あと数年でその日が来るのに「先に逝っちゃって、どうするのよー」と叫びたい。

高本さんとの山行を心待ちしていたのは私だけではないでしょう。

主な山歴

一九七三年　日本山岳会入会（会員番号七六〇四）
一九七六年　第二回日印合同女子登山隊（インド・カメット）
一九七七年　インドヒマラヤ・バノッティ
一九七九年　ペルーアンデス・ピスコ
一九八〇年　日本山岳会女子ガルワルヒマラヤ登山隊（ケダルナート）

一九八〇～一九八一年　アコンカグア
一九八一年　ダウラギリⅠ峰
一九八三年　インドヒマラヤ・サトパント
一九八四年　パミール・コムニズム
一九八七年　インドヒマラヤ・バギラティⅡ峰
一九八八年　インドヒマラヤ・シヴァ
一九八九年　パミール・レーニン
一九九一年　中国・大姑娘山
一九九二年　インドヒマラヤ・ドゥラウパディ・カ・ダンダ

八月十八日死去、享年五十一歳

（大久保春美）

山縣　浩氏（一九〇四～一九九二）

小柄な身体で何時も瓢々と姿を見せて下さる山縣さんが、米寿をお迎えになる寸前に亡くなられて、もう一年余が経ってしまった。長崎県佐世保市に在住されているが、昭和初期に北海道帝国大学（現北海道大学）へ進学された理由が「山登りをしたい」ということであったそうである。理由のすべてが山登りであったか、どうかお尋ねする機会は無かったが、少なくとも山縣さんの頭の中では登山への思い入れが相当に強かったことは間違いない。北大山岳部での北海道の登山は、山縣さんにとって、人生の最も輝かしいページであったと想像する。工学部機械科を一九三二（昭和七）年卒業された後も、北海道に止まり生活と登山の一体化を目論まれていたが、長兄が亡くなられて次男の山縣さんは再び長崎県へ戻られ、家業に就かれたので、最初の目論見とは大分離れてしまわれたようである。

生家に帰られてからは、北海道での生活とは変わられたであろうが、登山と断絶することなく、戦後は長崎県山岳連盟会長、九州地区山岳連盟会長の要職に就かれ、自身の山登りと共に後進の指導に精進された。登山団体の全国組織である日本山岳協会が社団法人となるに際し、山縣さんは基本財産の増額に努められ、設立発起人の一員として関与されると共に、法人の理事として二期四年御活躍になった。日本山岳会には、一九七三（昭和四十八）年三田幸夫・山口健児両氏の紹介で入会された（会員番号七六九六）。これまで海外登山隊の派遣等の事業募金にも率先応募され常に表面に出ることなく地道に事業完遂へ努力された方であった。

私が山縣さんと出会った最初は、東京での全国会議だと思うが、それは一九六〇年代前半と記憶している。一九七六（昭和五十一）年十月佐賀国体の時、宿舎へ向かう私の背に声を掛けられた人がおり、振り向くと山縣さんがお一人でニコニコされながら歩いてこられた。嬉野で過ぎ去った一駒であるが、今も鮮明に想い出される。一九八〇（昭和五十五）年春、私共夫婦は銀婚式の真似事で九州の旅をし、長崎で山縣さん、田中勝さん、一瀬義典さんらと楽しい夕食を共にさせて頂いた。その後、一九八六（昭和六十一）年九月北海道ニセコ連峰・羊蹄山で全日本登山大会が開催された折、山縣さんと会ったのが登山の環境の中で最後となった。もうこの頃になる

と、必ず付添いと同道されていた。奥様や家人が山縣さんを一人で遠出させないように配慮されておられると推測した。九〇（平成二）年十月福岡国体の帰途、佐世保へ寄り道して山縣さんを訪ねた。長崎岳連の田中会長から身体も弱り殆ど外出もしない、と聞いていたからである。鎌田会長（当時）と御一緒したが、記憶が大分薄れておられるようにお見受けしたがお元気であったことが何よりであった。席上御子息の山縣義道さんにお目に掛かり、同氏が慶応大学山岳部で宮下秀樹さんの指導を得たことを知り、親子二代の山登りを羨ましく思うと同時に、世間は広いようで狭いという言葉を肌で感じた。

それから二年に満たない九二（平成四）年七月九日山縣浩さんは八十七年十一カ月の生涯を閉じられ、七月十一日佐世保市内で告別式が執行された。温厚なお人柄で、すべての人々から敬愛された山縣浩さんの御冥福をお祈りする。

（澤村幸藏）

奥　淳一氏（一九四七～一九九二）

一九九二年四月二十五日、世界に残された最高の未踏峰ナムチャバルワの再挑戦のための打ち合わせで北京に出発しようとしていた矢先、奥淳一氏の訃報に接した。

氏は二十二年の永きにわたって㈱コージツに勤め、それまでの登山専門店「神戸好日山荘」が大型スポーツチェーン店として出発したころからの幹部社員として経営に携わってきたのであった。

三月には㈱コージツを退社、古巣の広島に帰り新しい計画のスタートを切ったばかりで、事業として考えていたパラグライダースクール設立の下見として山口県羅漢山スキー場にてパラグライダー飛行調査中の事故によるものであった。

一九四七年九月一日大分県中津市にて出生、中学時代は大分県トップの駅伝選手として活躍され、六三年四月中津工業高校に入学。この頃から近郊の山登りが始まった。

六六年に高校卒業と同時に広島の東洋工業（現マツダ）に入社、会社の野球部に所属するとともに岩登りに熱中し始め、翌年広島山岳会に入会、卓抜したクライマーとして県内、大山、谷川岳、穂高岳、剣岳の登攀に足跡を残している。また第二十五回岩手国体にも参加したオールラウンダーでもあった。

七〇年に請われて神戸好日山荘に入社、七一年には山岳会の行事としてダウラギリⅡ峰の遠征が計画されたが、諸般の事情により中止された。その後は自分の山登りよりも会社の発展に心血を注ぎ、七五年には名古屋本店のオープンと同時に店長として名古屋に赴任、七八年日本山岳会に入会（会員番号八五一九）。

七九年、「一九七九年ビアフォカラコルム登攀隊」に参加し、ラトックⅠ峰（七一四五㍍）の初登頂に成功している。

八八年には日本・中国・ネパール三国友好登山隊の一員としてチョモランマ交差縦走登山に参加、登山隊の中核として献身的な自らの行動で若手を引っ張ってもらった。無酸素でのC6（八二〇〇㍍）へ

の荷揚げも彼の頑張りを物語るものである。

最後のヒマラヤ遠征は、九一年のパキスタン・ルパールピークからのパラグライダー飛行であった。

本来ならば彼が最後に目指したのはナムチャバルワ峰の頂であるはずであった。そして彼の実力をもってすれば頂は彼の足元になっていたはずである。しかし運命のいたずらはそれを許さなかった。

人と人との出会いには運命的なものがある。私と奥氏との出会いは学生時代にさかのぼる。所属していた岡山クライマースクラブの例会で小豆島の拇指岳にトレーニングに行った時であった。岩場で一緒になった広島山岳会のメンバーと帰路岡山駅前のビアガーデンでジョッキを重ねたのが最初であった。そして彼が神戸好日山荘広島店の店長としてデューダしたのを機に、店舗が私の実家への帰省の途中ということもあって、手に入り難い登山用具の手配に無理を聞いてもらったり、山の話に杯を傾けることが少くなかった。

その後、私は勤める会社の中で開発から営業に移り、神戸好日山荘の担当になった。名古屋店の店長から商品の仕入れ担当部長になった奥氏との仕事上の付き合いが始まった。高く積み上げられた職業の知識と行動力は、新米の私はもとより多くの取引先の人たちに影響を与え、常に社員の先頭に立って仕事に取り組む姿は〝ミスターコージツ〟と呼ばれた所以である。

七九年、私たちはラトックⅠ峰の岩壁にいた。彼にとっては初めてのヒマラヤ遠征であったが、常日頃からトレーニングを欠かさない強靭な体は氷河を重い荷物を担いで走ったり、岩壁の荷揚げも人一倍であった。

取り付きのテントサイトが雪崩で流出したり、岩壁途中のビバーク等の困難を重ねながら一〇〇〇㍍の岩壁を克服して登山隊員全員がその頂に立ったのは、岩壁を登り初めてから約一カ月後の事であった。

何事にも積極的な彼はキャラバンの途中、現地の人たちの踊りの輪の中に入ったり、子供たちとの屈託のない交歓は、四十数日後の帰路途中の村でコバニ（スモモ）を持って駆け寄る裸足の子供たちから〝奥サーブ〟としっかり名前を呼ばれたことからも窺える。

一九八八年の交差縦走ではまさに八面六臂の働きであったことは遠征中、奥様にしたためた文面に見ることが出来る。

「（前略）登山の方は順調に進んでいますが人の方は思ったより動ける人が少ないようです。（中略）私も最初はほとんどの人から役に立たないだろうと思われていたようですが、今一番、期待していたより良く働く内の一人となっています。重廣さんも僕を指名したことに満足しているのではないかと思われます。（後略）」

帰国後、奥氏はフルマラソン、トライアスロンに注力をするようになる。日本海マラソンで三時間を切った頑張りはまさに精神力、厳しいトレーニング、経験の三位一体のなせる技であった。

ナムチャバルワ峰の再挑戦にまたその手を借りなければ、と思っていた矢先の事故であった。

最後に、八八年のチョモランマ登山が終わってから、残余金で「海外登山基金」が創成され、その運用益で海外登山を目指す人たちに助成が行われている。三国友好登山は多くの人たちの支援をうけ、

会員募金・企業募金が順調であったこと、為替の変動による差益などが残余金の原資になっているが、その多くは装備を担当した奥氏の装備関係の取引先へのきめ細かい寄贈依頼の成果の賜物であった事を付け加え、永く心に留めたいと思う。

天空を翔けぬけた友（享年四十四歳）の冥福を祈って　―合掌―

（重廣恒夫）

会報「山」訃報　追悼文一覧

一九九二年六月号（五六五号）
訃報　田中栄三氏（Y・M）、佐藤敏彦氏
八月号（五六七号）
今西錦司氏葬儀（藤平正夫）、今西錦司元会長を偲ぶ（斎藤惇生）
早坂敬二郎君のこと（織内信彦）
訃報　板倉勝正氏（Y・M）
九月号（五六八号）
岩手支部長佐藤敏彦氏を悼む（宇都木慎一）
十月号（五六九号）
今西錦司元会長追想（富田健一）
訃報　見学玄氏（Y・M）
十一月号（五七〇号）
故・高本信子さんへ（佐藤知恵子）
十二月号（五七一号）
今西錦司先生をしのぶ　八十二歳の成人登山（大谷優）
一九九三年二月号（五七三号）
訃報　平野隆司氏（Y・M）
四月号（五七五号）
訃報　小野幸氏（Y・M）

支部だより

北海道支部

平成四年度は役員の交代年度ではなかったので、四月十七日の支部総会では一名の新任を除いて他は留任。平成三年度の事業報告・会計報告を承認、四年度の事業計画・予算案を決める。

支部山行は、五月十六日～十七日・増毛山地黄金山、七月二十五日～二十六日・大雪山愛山渓から比布岳・愛別岳・沼ノ平、十月十日～十一日・日高山脈芽室岳、翌五年二月十三日～十四日・ニセコアンヌプリ周辺でスキー。大雪山は前日は雨模様だったが当日は晴れ後時々ガスで、朝早発ちで三つの班に分かれ、登山と高山植物を楽しんだ。十月はお月見を兼ね、新しい新得の登山学校に泊まり見事な名月を楽しむ。翌日は快晴、霜の下りた綿秋の十勝平野を芽室岳登山口まで走り、紅葉の進んだ尾根路を登って、頂からは初冬の北日高の山並みを望むことができた。また冬のニセコでは時間の余裕がある人は、会員の経営する望羊荘に十一日から泊まりこんでの長丁場、充分にスキーを楽しむ。

十二月第二土曜の十二日は恒例の支部忘年会。参加者の一分間（？）スピーチ、新入会員の紹介等楽しい一時を持った。

五年二月十七日の海外登山研究会では、ネパールのヒムルンヒマール（七一二六㍍）に初登した丹羽由紀夫氏、外国人に開放されたばりのカムチャツカの山に登りに行った上野八郎氏、チベット高原の山・人・花の旅を楽しんだ石崎貞子氏から、それぞれ美しいスライドを交えながら報告があった。特に、公式記録では、すでに登られたことになっているヒムルンヒマールは別の山で、実はもう一つ未登のヒムルンヒマールがあったこと、ベースまで路がなくヘリで往復する原始のカムチャツカの山々等、興味を引かれた。

平成五年度は役員の交代年度にあたり、四月二十二日の支部総会で、支部長以下八名が新任、十二名の再任が決まった。また今年は支部設立二十五周年に当たり、記念山行として、新たに登山路ができた日高山脈のイドンナップ岳（一七五二㍍）が選ばれた。この山は日高の奥深く、夏冬ともに訪れる人の少ない山だが、六月五日～六日に下見に行ったところ、路ができたとはいえ奥深い山であることには変りなかった。

また本年度は、従来からの年四回の支部山行、恒例のお月見、忘年会、海外登山研究会等の他に、自然観察会や厳冬期の登攀訓練など、幅広い活動を行いたいと、それぞれの担当役員は準備を進めている。

北海道は周知のように地域が広く、約二百人の会員が分散している。そのため支部山行などはできるだけ道内各地で行い、それぞれの地域の会員が参加しやすいよう努めているが、山行だけではなく、各種集会も各地で行いたいと考えている。

（野田四郎）

秋田支部

平成四年度の支部活動は、太平山・智異山姉妹山一周年記念事業の実施が主体となり、例年にない忙しい年となった。

支部山行は例年通り、県内にひっそりと佇む古里の山を中高年に併せての計画とし、十三名の参加者を得て八月二日に十和利山を実施した。また、韓国山岳会慶南支部一行の来秋準備で、春期から走り回ったが、九月の実施段階で中止となり、逆に締結一周年記念として十月七日から一週間の日程をもって、岡田支部長始め一行十五名が訪韓。歓迎の慶南支部（朴支部長）との合同登山を実施し、快晴の智異山頂で締結一周年記念を祝した。下山後、ソウルの北漢山に登り、韓国山岳会並びに同元老会との親睦を計り、友好の絆を一層深めあった。

本会総会に先だって開かれた支部総会は、二十名の出席のもとに開催、会計・事業・予算案などを審議、規約の一部改定などを行った。

東北地区持ち回りの福島集会（安達太良山）には、事業の重なりで一名のみの出席となってしまったが、年次晩餐会には昨年と同数の十名が出席、共に交流を深めた。

支部報の発行は例年通り二回、通算二十三号に至っている。新入会員は三名、本年も残念ながら前支部長の柴田と奥山の両氏が逝去され、それに高齢により武田氏が退会、二名の明治生まれを失い実質会員は五十九名となっている。

（佐々木民秀）

福島支部

福島支部は昭和二十二年十二月に創設された。今年で四十六周年になる。

現在、中嶋正夫支部長（二代目）以下百十七名の会員により支部活動を実施している。

さて、その活動状況であるが、過日（七月三日）開催した定時総会において承認された平成四年度事業報告にもとづき、実施事項に若干説明を付して、与えられた題目「支部だより」に代えさせていただく。

平成四年度事業の実施概況

1、定時総会…平成四年五月三十日ふくしま社会保険センター（福島市）において開催、支部長以下二十四名出席し、平成三年度事業報告・決算を承認、平成四年度事業計画・予算を原案どおり可決。議事終了後は会場レストランで懇親会を開き歓談した。

2、夏山小集会…同年六月二十八日高湯温泉水呑場（福島市）近辺にて「姫小百合を観る会」を開催、群落地を訪れ開花のたたずまいを観賞、会員十一名が参加した。

3、秋山小集会（兼東北地区集会）…同年十月十七・十八日沼尻勤労者保養センター母成（猪苗代町）にて開催、一日目は受付のあと夕食とあわせて懇親会を開き歓談、二日目は記念山行で宿舎を午前八時出発、安達太良船明神コース往復、会員十八名のほか秋田、山形支部からのゲスト三名を加え、おだやかな晩秋の山旅を満喫した。

4、第八回そばを食う会…同年十一月一日耶麻郡山都町唐橋克己氏宅（会員五十嵐昭市氏の知己）にて開催、唐橋家自家産の新そば粉を、家伝の製法によって打ったそばを賞味、会員とその同伴者十一名が参加した。

5、新年会…平成五年一月二日ふくしま社会保険センター・レストランにて開催。支部長以下二十一名が参加し歓談した。

6、安達太良スキーツアー…同年三月十四日岳温泉（二本松市）奥岳スキー場リフト終点より山頂へのコースを往復する予定であったが、強風のため途中笹平から引き返した。会員九名参加。

7、西吾妻スキーツアー…同年三月二十八日グランデコスキー場（耶麻郡北塩原村）リフト終点より西大嶺―西吾妻小屋―西吾妻山頂を往復、復路は西大嶺頂上から南に伸びる大斜面を滑降、豊富な積雪とまずまずの天気に恵まれ山スキーを楽しんだ。会員十名参加。

以上が事業のあらましである。ついで平成五年度の計画と今後の課題を付記したい。

1、平成五年度事業計画…実施事項及び時期については、前年度とほぼ同様とするが、秋山小集会は山形支部主催の集会に参加する。平成四年度未実施に終わった四十五周年記念事業は、五十周年（平成九年度）に持ち越すこととしたが、本年度中に企画委員会を組織して実施案を検討、次期総会に提案することにした。

2、今後の課題…今までの行事は親睦交流に傾きがちであったとする反省の声もあり、会員の山に対する知識、技術の向上を図ることを行事に取り入れることにした。具体的には担当委員（野地克也、大谷司両氏）に企画、実行面を一任することにしたが、会員の要求と企画をうまく嚙み合わせることができるかどうかが今後の課題である。

（安藤　治）

京都支部

京都支部は昭和六十一年創立以来、順調に入会者が相次ぎ、平成五年度当初には、支部正会員二百二十六名、支部会友二十六名を数える大世帯となった。会員数の増加そのものが支部活動の隆盛指数とは言えないものの、その原動力としては得がたいもので、平成三年に設立五周年記念事業として、日本パキスタン合同のティリッチミール登山隊を送りだし、須藤建志、宮川清明両隊員が、見事登頂に成功している。

海外遠征では主なものでも、チョモランマ／サガルマタ三国友好登山には、当支部から斎藤惇生支部長と山本一夫、須藤建志、平田和男、神園泰比古の四会員が参加し、平成四年十月のナムチャバルワ登山隊には斎藤支部長が副総隊長、山本一夫会員が登攀隊長として参加している。なかには斎藤惇生支部長と中島道郎会員により、シシャパンマでの八千峰（メートル）で、二人合わせて年齢百二十歳というユニークな登頂記録もある。

そして平成五年度に至って、陰謀を持ち大目標を秘める団体たれと、早くも支部としての次回の海外遠征計画を暖めつつある。

国内では創立以来、インドア例会の山水会を含め四季を通じて、月に二・三回の行事・例会を計画し会員同士の交流を計っている。

平成四年度五月には、関西支部と合同でお世話させて頂いた全国

自然保護集会には、全国から大勢の御参加を頂き、また、その他に年間二十五回の行事・例会が計画実施され、参加者は延べ四百六十三名を数え、支部活動はますます盛況の感がある。

しかし、会員の高年齢化は当支部においても例外ではなく、又、支部会員数の増加につれて、例会にも行事にも参加しないペーパー会員の比率が増え、参加者が固定化されつつあるのも否めない事実であり、今後の大きな課題となっている。

前年にも紹介したが、一昨年から毎月シリーズ化された京都の身近な山を巡る「新山城三十山」は、この傾向を打開すべく、だれでも気軽に参加できる例会として、第一ステージは平成五年六月に終了、記録を出版化しようという計画も進められている。続いて今西先生が京都一中時代の青葉会で選定されたものの、「新山城三十山」には漏れた山々を対象とした例会を新たに取り組んでいる。

平成五年度においても延べ二十七回にわたり、山水会、山城三十山、岩登り、沢登り、スケッチ山行、スキー山行、他支部との合同山行等々の多彩な行事・例会が計画され、年に五回程度の支部報を発行し、これを通じてより多くの会員が参加し、いっそうの交流が深められるよう努めている。

平成四年六月十五日は、京都支部の会員はもとより、多くの山を愛する人々を深い哀しみが包んだ日であった。

人類学の権威であり、カゲロウの研究家からダーウィンの進化論に対する棲みわけ理論など、数々の学問上の功績から文化勲章を受賞され、幾多の登山と探検の記録を残し、多くの後継者を育成するとともに、酒と人に愛され、山を愛して九十年、千五百山登山も達成した元日本山岳会会長、そして陰謀を持ち大目標を秘める団体たれと、日本山岳会京都支部を設立し育成された支部顧問の今西錦司先生の逝去である。

「静ヲ以テ身ヲ處シ　慈ヲ以テ後輩ヲ導ク　千載ノ會将ニ頭梁ノ仁　茲ニ生寄死帰　幽明　永ニ違ヒ再ビ其薫陶ノ乞ヒ難キヲ知ル　嗚呼哀シイ哉」。

しかし此の年、残念な出来事はこれだけにとどまらなかった。

山々にも深まりゆく秋の気配が色濃くなった十月十五日の早朝、「会員の松浦勇次氏が大峰山系笠捨山で行方不明」の報である。

松浦氏は京都支部委員であるとともに、京都府山岳連盟傘下の京都山岳会の長老でもあり、直ちに岳連や友人たちとの合同の大捜索活動が開始された。しかしながら、延べ十三日間、三百四十人余りもの仲間の献身的な努力にも関わらず、残念ながら行方を発見するに至らず、ついに捜索を断念。松浦勇次氏は今も大峰の深い山々に抱かれて静かに眠っている。

前掲の弔辞は、わずか四カ月前に今西先生追悼のため松浦氏が詠んだもので、世の無情を感じざるを得ない。

この捜索に際して、国土地理院発行の二万五千分の一地形図の不備を、当支部の豊城邦民会員が朝日新聞に記事としたところ、当分の間は修正予定になかった二万五千分の一地形図が、緊急修正されることになったのである。地図の緊急修正は、地震や噴火による急激な地形の変化等以外は無く、遭難事故をきっかけとした修正は初めてのことであるという。十二月十一日の朝日新聞のコラムは「国土地理院の素早い対応に拍手」と称えている。

この遭難事故を通じベテランといえども、中高年の登山のあり方について、改めて考えさせられる年であった。（岡田茂久）

富山支部

創立四十五周年記念、播隆上人顕彰碑建立十周年記念式典について

日本山岳会富山支部創立四十五周年を迎え、六月六日、大山町旧河内集落に建立した槍ヶ岳開山者播隆上人の遺徳を偲ぶと共に、富山支部創立以来立山山域で心ならずも他界されたりした故会員五十余名の法要を覚証寺住職を導師に迎え、会員及び播隆上人の縁故者四十人等で厳修、富山短大客員教授広瀬誠氏による播隆上人の人となりに始まり修行中の諸事入寂に至るまでの記念講演、続いて播隆の幼少時登ったであろう高頭山（一二〇三㍍）へ記念登山を行った。

覚証寺は富山市西四十物町にあるが、播隆の生家は「河内道場」といって寺院ではなく、近在の仏教信者が念仏を唱える場所で、水害等によって道場としての姿がなくなった時代もあり再興に播隆も心を痛め修業先から覚証寺に対し再興を懇請し再興の証明を得た本寺である。この寺に播隆の遺品もあったようだが戦災により焼失した。

六月十二日は県民会館で、第二次日中合同隊の気象係隊員として参加した吉田科学館学芸員の飯田肇氏による「ナムチャバルワ峰初登頂と気象」について生の講演会を催した。北信越五県からの招待者を含め約七十名の聴衆と共に、ビデオの映像を使った報告に科学



播隆上人顕彰碑と法要参加者

の多用性を認識した。

続いて記念式典を行い日本山岳会会長藤平正夫氏の祝辞に続き、県自然保護課長の挨拶、石川、福井両支部長の祝辞があってパーティーにうつり、共どもに山岳会の発展を誓い祝った。

十三日は石川、福井、富山支部会員相互の親睦登山を行った。登山した山は中山（一二五五㍍）で、上市町馬場島の登山口からの登山であったが出発後小雨となり、頂上に達した頃はガスのため視界がなく、記念撮影もそぞろに下山、憩いの家で越中そばで舌を打ち墨絵の如き剱岳本峰に続く北方稜線を望みながら帰路についた。

以上の如く創立四十五周年記念の行事、法要を会員の協力と播隆上人関係者の熱意と希望によって無事終えた。

支部五十周年記念行事は五年後になるが、今からその準備に着手しなければならず、一層会員相互の協力が必要となることであろう。

（石坂久忠）

■福井支部

設立二年目に入った当支部では、三水会と名づけて、毎月第三水曜は例会の日と決め、クラブライフを楽しんでいる。

というのも、福井支部会員の大半は、県下各山岳会の古くからのメンバーであり、支部事務局長は岳連会長でもある、ということにもよる。そこで三水会の例会は、山岳情報交換の場であり、ヨーロッパアルプス情報（支部長の個人山行による）、を聞く場ともなっている。

例会場は福井市の北部にある。もちろん、周囲での駐車は可。その上、なんといっても会場を特徴づけるものは、建物南壁に設けられた、六コースからなる本格的クライミングウォールであろう。

このフリークライミング用の壁は、当支部事務局長が自宅の新築に際して、道路に面した南壁の有効利用を思ってのものであったが、色分けされたホールドによって、難度別にコースが定められている。中でも、フィンガーホールドと細かいスタンスを使っての垂壁登りは、短いけれどもきびしく、若い支部会員の心を惹きつけている。ときには、こっそり腕だめしを試みるオールドクライマーも見かけるのであるが。

南壁裏にはルートがあり、つぼ足で登れる階段となって、直登すれば二階の玄関テラスに至り、更にその奥は三十畳の板張りの大ホールとなる。

山岳会の例会場のために、自宅の一部を開放することは、ままあることではあるが、福井支部の場合は、家主が、まず山岳会や山岳連盟などの使用を考え、その必要量に合わせたホールを設計してのち、自宅を考え新築したという会場である。ビデオ、スライド等の準備もある。小講演会などにも十分であった。

これまで、会員のスライドによって、カラコルム、ネパール、ミニヤコンカ、シルクロード、アルプス、インド奥地の登山と風景が上映されている。いろんな所へ出かけるものと、私などは驚くばかりである。

さて、かんじんの山登り。こちらは、福井支部としてまとまっての行動は、今後の課題となっている。というのも、先きに書いたよ

うに、支部員の大方は既に、各山岳会のメンバーであり、そちらでは柱となって山に登っている。

とはいっても、日本山岳会にのみ所属する会員も、これまた多くなりつつある。支部として、特色ある地域活動や、山行計画を明らかにしてゆくのは、これらかということになろう。（増永迪男）

関西支部

支部の運営は支部会員の力で――支部運営のあり方を検討したワーキング・グループの結論として発表された言葉である。「支部運営上、支部会費徴収の必要性は十分に理解できたので、この上は支部会員全員に平等な負担を願うため徴収率の向上に委員会の一段の努力を望む」と云う提言を戴いて、支部総会の議を経て支部会費徴収は、本年度よりスタートした。

当面の支部活動方針の基本を次の四点におくこととした。

一、会員相互の親睦には、より多くの交流事業を催すこと。委員分担を大きく変え、それぞれ新しいポストで支部活動に取り組む。

二、登山情報・支部情報の提供には、支部報の内容を充実する。支部会員に広く投稿をお願いし、又、支部委員全員が支部報記者のつもりで、大小・長短を問わず情報収集に努力する。

三、登山の研鑽には、支部ルームの設置と、蔵書の管理、閲覧の場を提供する。平成六年には、関西新空港も開港するので、足場の良い大阪市内に、ＪＡＣ第二ルームの設置を提案したい。関西支部会員は元より、大阪を通るＪＡＣのメンバーのオアシスとし活用し、又、蔵書の活用も出来れば、永年の課題が一挙に解決するのではないでしょうか。

四、支部活性化には、財政を安定させ資金の蓄積を必要とする。充実した支部活動を展開するとともに、目的を持った資金蓄積を計るべきではないだろうか。本年度の結果をみて、次年度以降のテーマとなるであろう。

以上、四つの基本方針を支えるものとして委員会がある。本年度より、委員会開催形式を大きく変えた。委員会前半を委員分担による分科会として、委員活動の場を広く求め、支部会員の声も委員会に反映されやすいように考慮した。後半を全体会議として、各委員会の報告・調整を行い、又、委員分担を離れて、活発な話し合いが行なわれるようになった。更に、今まで、ともすれば埋もれていた課題が、ひと言提案されると、取り上げられると云うように、自由な発言の場と変わった。支部会員の参加による支部会員会議も企画されている。

初年度は、色々試行錯誤もあろうかと思うが、皆様のご支援をお願い申し上げたい。四百人の支部会員がおれば、四百通りの支部像があって良いと思う。四百色のモザイク・タイルで関西支部壁画を作ろうではありませんか、私たち支部委員は、そのタイル下地として頑張ります。色鮮やかな壁画が出来るのを楽しみに。

支部の運営は支部会員の力で。

（桑田　結）

山陰支部

平成四年度の主な行事は、七月に会員四名が縁あってモンゴルに視察旅行。何かに役立てばと思い、現地の日本人墓地に眠る鳥取県出身者の名簿を作成して帰りました。

恒例の一般募集による友の会山行は、七月二十四日から二十七日にかけて富士山、三ッ峠とし、会員・友の会員四十七人が参加。天候に恵まれ、全員無事登頂を果たしました。

同じく恒例の友の会・大山もみじ狩り山行は十一月三日会員・友の会員四十三人が参加。ユートピア―野田山コース、県民の森―矢筈ヶ山コースに分かれて、新雪と紅葉の山歩きを堪能しました。

支部独自の年次晩餐会は十二月十二日米子国際ホテルで開催、ゲストに帰国まもないナムチャバルワ登山隊員・佐藤正倫氏を迎え、スライドを交えて登頂のもようを聞くなど盛会でした。

明けて平成五年三月六日には大山で福岡支部との交流会を開き、盛大な前夜祭のあと、当日は悪天候のため、合同登山は中止して、支部会員五名で雪上訓練を行った。

平成五年度の予定としては、まず前々年から始めている県境三百五十㍍踏破がありますが、実際にとりかかってみると予想外に手ごわいことがわかり難渋しています。一応の目標としている支部創立四十五周年（平成六年）の完遂が危うくなってきましたが、あきらめずに頑張るつもりです。

もう一つの四十五周年記念事業である友の会と合同のヨーロッパアルプス遠征の方は、友の会から予想以上の参加希望があり、今のところ会員を含めて二十数名が参加を予定。平成六年七月に二週間程度で登山とハイキングを行う予定で、今年度から既に毎月のように集まっては、準備に余念がありません。

今年の友の会の山行は、待望の日本山岳会上高地山岳研究所が完成したのを機会に、三年ぶりにまた同研究所にお世話になることにし、九月十八日から十九日にかけて蝶ヶ岳、徳本峠などに登ることにしています。この友の会山行もこれで十回目。わが山陰支部の大きな特色で、自分たちが山を楽しむだけでなく、最近ふえてきた中高年登山の正しい普及に、一役買っているものと自負しています。

さらに地元大山をはじめとする自然保護運動に積極的に参加する一方、山を通じての人間関係をだいじにし、日本山岳会本部および各支部との交流も極力深めるよう努めています。わずか三十五名の小さな支部ですが、代わりに平日の夜にでも集まれるという便利さがあり、チームワークは最強。小つぶでもピリリとからい支部を目指しています。

（吉川暢一）

福岡支部

福岡支部は平成四年五月に支部長が権藤前支部長から吉村新支部長に引き継がれ、事務局も福岡市から北九州市に移りました。従って事務局の担当者も熟達者から新人に替わりましたので当初は要領がわからず、大分まごついたようです。

本年は当支部としては全国集会の行事を英彦山で十月末日から十一月一日にかけて行うことが決まっていたので、全国の会員に支部

の実態を知ってもらう絶好の機会であると思い支部会員の総力をあげて頑張りました。全国集会も年毎に会費が高くなり、宿泊施設も高級なものが使われ、何かと批判の声も一部では聞かれましたので、出来るだけ安い会費で参加者の負担を軽くするよう配慮致しました。その結果剰余金を捻出し、ナムチャバルワ登山と山岳研究所改築の資金として寄付をすることが出来ました。又計画の実施に当たっては福岡支部だけの行事でなく、他の九州三支部との共同行事として日程も配慮して計画し事前の打ち合わせ会などを行いました。特に宮崎支部の例年行事の宮崎ウェストン祭に続くように日程を組みました。又、「九州登山史年表」も内容は充実していませんが土産にして御持ち帰り戴くべく準備致しました。

当支部には支部創設以来「支部報」なるものがなく、支部員相互や他支部との交流のために、無理をしてでも発行したいと願っていたので、全国集会を契機として十二頁のものを創刊号として平成四年十月に発行し、第二号は平成五年五月に発行致しました。経費が嵩むので大変ですが年二回発行を続けるつもりです。原稿は短文でも支部員の多数の方々の参加により、お互いの「考え」や「動静」が判り、親睦が深まれば大成功だと思います。

今まで色々な行事をやっても顔を出す人は同じで、もう一段の発展のためには工夫が必要だと痛感しているところです。通信用の返信ハガキには必ず「コメント欄」を作り会報の資料にしようと編集者は苦労しています。

支部の行事としては年四回の山行と二回の講演会を主軸として編成していますが、支部の基盤とする地域には高い山がなく、どうしても他所の地域の山に登る機会が多く、当支部はよい山域にある支部との「よき交流」をはからなければならない運命にあります。それで、九州の他の三支部や隣の山陰支部との交流の機会を作り目下のところ、進行中であります。四回の登山行事は雷山、英彦山（二回）、大山、講演会は八月にシシャパンマ登頂報告会と五年四月にナムチャバルワ登頂報告会を開き、成末隊長、重廣隊長に講師を依頼しました。

当支部は五月現在で百三十名になったが依然として平均年令が高いので若い会員と女性会員の入会をお願いしたい。（吉村健児）

■熊本支部

平成五年三月、支部報第四号を発行することができた。世に前例が多い三号誌で終わるのではないかと心配していたが、幸いにも原稿が多く杞憂に終わった。昨年は熊本支部設立三十五周年に当たり、何か記念行事をということで、七月にカナディアン・ロッキーのアサバスカ登山とトレッキングを、会員十名の参加を得て実施した。また、カトマンズクラブが主催した八〇〇〇メートル峰チョー・オユーとシシャパンマの連続登山に、馬場博行会員が参加してチョー・オユーの無酸素登頂に成功した。あれこれと原稿の材料に恵まれたということである。ともあれ支部報の発行は会員連帯の要であり、支部の歴史を記録するものと受けとめているので、今後共その継続に努力したい。

今回のカナディアン・ロッキー登山は、一九七九年夏アッシニボ

インやアサバスカなど単独で放浪登山をした工藤文昭会員の提案によるものである。期間は一九九二年七月十八日から二十七日までの十日間。メンバーはチーフ・リーダー工藤文昭、サブ・リーダー広吉功、隊員本田誠也、石井久夫、藤本多加志、藤木孝一、丸尾龍一とトレッキングの和仁古昇、河上洋子、大木野徳敏の計十名。平均年令五十九歳の中高年パーティーである。七月十八日、福岡空港から大韓航空でソウル、ハワイ経由ロスアンゼルスへ。翌日、ソルトレークを経由してカナダに入り、カルガリからレンタカー三台に分乗して、カナディアン・ロッキーの山の街バンフに向かう。スーパーマーケットで食糧、燃料等を購入して午後八時過ぎ、まだ明るいレイク・ルィーズのロッジに着いた。翌朝、美しいルィーズ湖畔を歩いて体を慣らし、夕刻アサバスカの登山基地コロンビア・アイスフィールド・シャレーに入る。アサバスカ（三四九二㍍）は眼前間近かに純白の北面氷河を懸けて迫る。七月二十一日、朝食携行でまだ暗い四時に出発。氷河はかなり後退しているようで取付点までサイドモレーンを一時間半も登る。クレバスを避けて左岸を高巻きし過ぎたため、シルバーホーン基部への横断にかなり時間がかかった。陽が高くなるにつれ、強い雪面の照り返しで脱水状態になり、疲労感が強くなる。大クレバスを大きく右へ巻いて上部プラトーに出た所で老年組の本田、藤本がギブアップ、シルバーホーン直下のアンドロメダ北西稜分岐（三三六〇㍍）までたどりついたが、時間切れで引き返すことになった。表層ナダレやブロック崩壊の跡を縫うようにして、苦しい脱出行。二十時アイスフィールド・パークウェイに下りつき休む間もなく次の宿泊地ジャスパーまで一〇〇㌔余のドライブ。登頂できなかったのは、老年組のトレーニング不足が最大の原因と反省する。十分な休養後はジャスパー周辺の湖沼群を巡ったり、エディスキャベルやロブソンランチ付近のトレッキングを楽しんだ。

（本田誠也）

■ 宮崎支部

宮崎支部も本年四月に第九回宮崎支部総会を開催することができました。思えば十年前、今西錦司先生が宮崎の山に登られた際、昭和五十九年が日本山岳会八十周年になるので、それを記念して二十番目の支部として宮崎でも支部を作りなさい、との至上命令で東九州支部の野口支部長さん、熊本支部の西沢支部長さんの御指導と御助言をいただき、会員の増員をはかり支部結成に漕ぎ着けて、以来八年、大谷副支部長の多大の努力により結成時の二十三名の会員が現在では五十人を越す支部になりました。

宮崎支部は結成時第一に宮崎県高千穂町のウェストン碑を支部で顕彰することを決めてから平成四年で、第八回を迎え実施して来ました。その間第二回ウェストン祭には本部より今西壽雄会長、西堀栄三郎元会長、大塚博美副会長を迎え第一回全国支部集会をも合わせて開催いたしましたので九州を中心に全国から百二十名の日本山岳会会員の参加を得て盛大に開催することが出来ました。宮崎ウェストン祭も回を重ねるたびに盛大になり、講師にも、松田副会長、中村現副会長、九州の各支部長さんに講演、山岳講話をお願いし、現在では高千穂町長をはじめ町民の方々の御好意により前夜祭には

高千穂夜神楽、地元の民舞等が、地元山岳会のキャンプファイヤーの中で進められ、ウェストン祭には前夜祭に引き続いて地区の方々の参加、五ヶ所小学校児童による合唱等入れて村起こしの一環行事として力を入れ、地元と一体となって盛大に催すまでになりました。

第二には昭和六十一年第一回諸塚山の山開きを日本で一番早い山開きに、諸塚村の後援をして開催し、今年で八回を迎えました。諸塚山は古い言い伝えを残し、古くは大伯山、又諸羽の山と言われ標高一三四一㍍の山ですが山頂付近には古墳が数多く残っており、百五十年～二百年のぶなの原生林に覆われた、古い山の名が示す通り、天孫降臨の伝説、山伏伝説の地でもあり毎年山開きには北九州、福岡の岳人の方々の参加が多く、今では六百人を越える参加があります。

第三に宮崎支部では宮崎百山を登ろうをキャッチフレーズに、宮崎の山から百山選定をすべく支部員五十名が、地元の山を愛し山を尊ぶ情熱を宮崎百山に向け同じ山に二度三度と足をはこび記録を残して行きます。宮崎の山は一度登ったものの一年たつと林道が通り、山林伐採が進んで登山道が変わり、台風が来ると夏道は付け変えたような変わりようなので安全な登山ができる山々にして行きたいと頑張っております。

宮崎支部では以上の三つの柱を主体に毎年総会において行事、例会の事業計画を決めますが集会の日を毎月第一木曜日、宮崎百山のつどいとして登山研究会をかねて実施、例会登山日についても毎月第二日曜日を登山日にあて、県内の山を中心に計画しております。

四月は尾鈴山、五月は大崩山を中心に県北のあけぼのつつじ、石楠花を、六月～十月未調整の百山、十一月ウェストン祭と祖母山、十二月忘年会を兼ねて双石山、一月の新年登山は霧島山縦走、二月向坂山（スキーも出来る）、三月日本で一番早い諸塚山の山開き、と参加しやすい計画ができています。

県外山行はグループ登山として、主に九州の山、県境の山、屋久島の山を中心に計画し遠征として全国支部集会の参加と北・南アルプスの山々。本年も八月五日～十日に白馬三山を八名で登山すべく計画書が出ています。

最後に南国宮崎でも向坂山に天然スキー場が出来、本格的な施設の整備もととのい、地元はもとより九州各地から訪れています。宮崎支部でもスキー部会を作り一月～三月の行事の中に組み込んで行きたいと思っています。

（魚本定良）

会務報告

一九九二年（平成四）六月～一九九三年（平成五）五月

一九九二年度役員・評議員・支部長

会　　長　山田二郎
副 会 長　藤平正夫・松田雄一
常務理事　小倉茂暉・大倉昌身・重廣恒夫・大森弘一郎・神崎忠男
理　　事　入澤郁夫・穴田雪江・小倉　厚・山本良三・関口令安・伊丹紹泰・石橋正美・藤井正彦・山口俊輔・村井龍一・片岡泰彦・南川金一
監　　事　飯野　亨・中島伊平
常任評議員　鴨原啓佑・橋本　清・斎藤惇生・湯浅道男・西村政晃
評 議 員　今西壽雄・吉村健児・大塚博美・宝賀輝男・佐藤　光・奥原教永・河野　長・大森久雄・西丸震哉・村木潤次郎・徳久球雄・鈴木郭之・國見利夫・田部井淳子・廣江　研
支 部 長　小須田喜夫（北海道）・中谷　充（岩手）・岡田光行（秋田）・大橋克也（山形）・西郡光昭（宮城）・中嶋正夫（福島）・佐藤一栄（越後）・赤羽孝一郎（信濃）・大澤伊三郎（山梨）・安間　荘（静岡）・湯浅道男（東海）・松井辰彌（岐阜）・斎藤惇生（京都）・木戸繁良（富山）・増江俊三（石川）・中村義（福井）・阿部和行（関西）・吉川暢一（山陰）・吉村健児（福岡）・梅木秀徳（東九州）・本田誠也（熊本）・魚本定良（宮崎）

理事会は会長、副会長、理事、監事、常任評議員によって構成される。

◇六月理事会　一九九二年六月十一日　本会会議室
出席者十五名
▽審議事項
一、ナムチャバルワ登山の件―日本体協の記者クラブで隊員を発表
二、新岩手支部長の件―中谷充氏
三、ルーム管理の件―コードレス電話の導入、他
四、指導者責任賠償保険の件、他
▽報告事項
一、上高地山岳研究所改築の件―行政諸官庁への届けおよび許可完了
二、合同募金状況の件
三、笹川スポーツ財団ＳＳＦスポーツエイド助成の件―中高年登山対策全国大会を申請
四、ＨＡＴ―Ｊの件―高尾山清掃登山、青少年国際交流清掃登山の実施、他
会報「山」五六七号参照

◇七月理事会　七月九日　本会会議室
出席者十八名
▽審議事項
一、ナムチャバルワ登山の件
二、山研改築の件
三、合同募金について
四、信州大バインターブラック峰登山隊の件、他
▽報告事項
一、ナムチャバルワ峰登山壮行会
二、早坂前理事を偲ぶ会、他
会報「山」五六八号参照

◇**九月理事会**　九月十日　本会会議室
出席者二十二名
▽審議事項
一、ナムチャバルワ登山の件―登山隊、報道隊九月二日成田出発
二、気象ファクシミリ購入について
三、山研について―九月三日上棟式実施
四、農大ガッシャブルムⅡ峰登山隊の件
五、シルバータートル・ダウラギリ主峰登山隊の件
六、事務室用パソコン更新について
七、「第一回青森ウェストン祭」後援について
▽報告事項
一、周恩来展レセプションについて
二、山里寿男会員「山のデッサン館」開館について
三、田部井淳子会員の「スポーツ功労者」表彰受賞について、他
会報「山」五七〇号参照

◇**十月理事会**　十月八日　本会会議室
出席者十七名
▽審議事項
一、「上高地新山研利用の手引」案について―利用の条件・料金等
二、秩父宮記念学術賞推薦について―「登山医学の研究と普及に関する業績」（大森薫雄会員）を推薦
三、会長特別表彰内規案について―①表彰対象を会員にとどめず非会員も含める、②必ずしも登山に限定しない
四、㈶植村記念財団への協力について、他
▽報告事項
一、ナムチャバルワ登山隊について
二、山研改築について
三、募金について
四、会員名簿作成について、他
会報「山」五七一号参照

◇**評議員会**　十一月十一日　本会会議室
出席者　藤平・松田副会長、鳴原・西村・吉村・奥原・室賀・國見・大塚・鈴木・橋本の各評議員、小倉常務理事
▽議事
一、名誉会員制度継続の是非について―継続を承認
二、名誉会員推薦に関する内規改訂の件
三、本年度名誉会員推薦の件―太田敬、橋本誠二、村山雅美、坂倉登喜子の四氏に加えチベット登山協会の洛桑達瓦主席の計五名とする
四、会長特別表彰の件―理事会マターとして理事会に一任

◇**十一月理事会**　十一月十二日　本会会議室
出席者　十七名
▽審議事項
一、ナムチャバルワ隊祝賀会、報告会について
二、会長特別表彰について―会長と常務理事会に一任
三、「植村直己冒険館」（仮）への支援依頼について
▽報告事項
一、山研について
二、合同募金について
三、年次晩餐会について
四、支部懇談会について―福岡支部主催で英彦山で開かれた。来年度は山梨支部
五、評議員会について

六、中間会計監査について
七、「日韓台山岳交流」について、他
会報「山」五七二号参照
◇**常務理事会**　十一月二十七日　帝国ホテルにて
一、会長特別表彰について―田部井淳子会員を表彰
二、名誉会員の推薦について―十一月十一日開催の評議員会の推薦案にもとづき五名を決定
◇**支部長会議**　十二月五日　新高輪プリンスホテル、国際パミール館紅玉の間
出席者　三十四名
▽議事
一、会長挨拶（会長欠席のため藤平副会長）
二、ナムチャバルワ峰登頂報告
三、上高地山研改築経過報告
四、合同募金について
五、全国支部懇談会について
六、中高年登山対策全国大会について
七、各支部報告
◇**十二月理事会**　十二月十日　本会会議室
出席者　二十一名
▽審議事項
一、常任募金委員会開催について―山研の資金について約四百万円不足しているので会員に最後のお願いをする、他
▽報告事項
一、合同募金について
二、日本山岳会と韓国山岳会の話し合いについて、他
会報「山」五七三号参照
◇**一月理事会**　一月二十一日　本会会議室
出席者　二十二名
▽審議事項
一、海外登山基金助成について―マッキンリー気象観測（科学委員会）五十万円、バインターブラック峰（信州大学学士山岳会）八十万円、サルトロカンリ西壁（日印合同・広島山岳会）、皇冠峰（日本山岳会東海支部）五十万円
二、海外登山基金委員会の委員の改選並びに委員会設置についての案文の改訂について
三、ナムチャバルワ登山委員会解散について
四、ナムチャバルワ登山報告書の発行について
五、ナムチャバルワ登山隊の残余装備について、他
▽報告事項
一、山研について
二、合同募金について―十二月十九日募金委員会を開き会員に最後のお願いをすることとした
三、韓国山岳会（韓国学生山岳連盟）の講習会について
会報「山」五七四号参照
◇**二月理事会**　二月九日　本会会議室
出席者　二十一名
▽審議事項
一、ナムチャバルワ登山隊会計監査について
二、「登山特別基金」の「海外登山基金」への繰り入れについて
三、五年度予算案について
▽報告事項

一、会員募金について、他
会報「山」五七五号参照

◇**三月理事会**　三月十八日　本会会議室
出席者二十三名
▽審議事項
一、日中合同ヤルツァンポ下降探検隊後援依頼について
二、明学大トウィンズ峰登山隊後援依頼について
三、四年度事業報告、収支決算報告および五年度事業計画案、収支予算案について
四、定款一部改正について―副会長を三名にする案を総会に提出したい
▽報告事項
一、会員募金について、他
会報「山」五七六号参照

◇**評議員会**　四月十五日　本会会議室
出席者　山田会長、藤平・松田副会長、鴨原・西村常任評議員、吉村・大塚・室賀・河野・西丸・村木・鈴木・國見・廣江各評議員
一、役員候補者推薦について―細則第七―八条にもとづき、再任者を除く。会長、副会長二名、理事十名、監事一名を次のとおり推薦することを決める。会長＝藤平正夫、副会長＝鴨原啓佑・中村純二、理事＝松浦祥次郎・伊藤敞・水野勉・南井英弘・堀井昌子・渡辺雄二・溝口洋三・中川武・山本宗彦・大谷亮、監事＝川崎巌
二、定款改訂について
三、通常総会提出議案について
会報「山」五七七号参照

◇**四月理事会**　四月十五日　本会会議室
出席者二十六名
▽審議事項
一、役員改選について―評議員会より推薦のあった会長、副会長二名、理事十名、監事一名について承認
二、評議員候補者推薦の件―再任者を除く十名の候補者として次の各氏を推薦。山田二郎、松田雄一、小須田喜夫、梅木秀徳、田中弘美、宮本数男、宮下秀樹、重廣恒夫、神崎忠男、平林克敏
三、図書管理要員（図書館司書）雇用について
四、事務局員勤務体系一部変更について
五、立教大・チョモレンゾ登山隊後援について
六、四年度収支決算報告および合同募金決算報告について、他
会報「山」五七七号参照

◇**五月理事会**　五月十三日　本会会議室
出席者二十二名
▽審議事項
一、図書管理パソコン購入について
二、アドベンチャー2000出席について
三、自然保護専門委員会設置について
四、責任者賠償保険への同好会の加入について、他
▽報告事項
一、山研竣工式について
二、総会、支部長会議について、他
会報「山」五七八号参照

◇**支部長会議**　五月十五日　コープビル
出席者三十九名
▽議事
一、全国支部懇談会について

二、支部事務局担当者会議について
三、定款変更について

◇**平成五年度通常総会**　五月十五日　千代田区内神田コープビル
出席者二一四七名（委任状を含む）
▽総会次第
一、会長挨拶
二、会務報告
三、平成四年度事業報告承認の件
四、同収支決算、財産目録承認の件
五、監査報告
六、平成五年度事業計画（案）承認の件
七、同収支予算（案）承認の件
八、定款一部変更の件
九、役員改選の件
一〇、四年度除籍対象者の件

◇**五月臨時理事会**　五月二十八日　本会会議室
▽審議事項
一、新役員の分担について―会長＝藤平正夫、副会長＝鳴原啓佑・中村純二、常務理事＝小倉茂輝（総務）・大森弘一郎（自然保護）・大倉昌身（財務）・村井龍一（青年）、理事＝山口俊輔（資料、フィルム・ビデオ）・片岡泰彦（指導、遭難対策）、南川金一（山岳）・伊藤敞（会報）・中川武（総務・集会）・水野勉（図書管理）・渡辺雄二（高所）・堀井昌子（医療）・松浦祥次郎（科学）・山本宗彦（学生部）・大谷亮（海外）・南井英弘（図書）・溝口洋三（山研）、監事＝中島伊平・川崎巌、常任評議員＝斉藤惇生・湯浅道男・西村政晃・宮下秀樹・重廣恒夫・神崎忠男、評議員＝西丸震哉・村木潤次郎・徳久球雄・鈴木郭之・國見利夫・田部井淳子・廣江研・山田二郎・小須田喜夫・松田雄一・平林克敏・田中弘美・梅木秀徳・宮本数男
二、新支部長について―北海道支部長に野田四郎会員
三、合同募金委員会の解散について―募金額は、企業募金五一五三万六〇〇〇円、会員募金四五六四万三九四〇円、利息二二万七六五四円、計九八四〇万七五九四円

◇**主な行事と集会**
▽六月一―二日　上高地
　第四十六回ウェストン祭
▽六月十二―十四日　谷川岳
　青年部学生部合宿
▽六月二十―二十一日　小川山
　学生部小川山集会
▽六月二十七―二十八日　富士山
　青年部富士山合宿
▽七月七日　ルーム
　マッキンリーとスミスロック報告会
▽七月十―十一日　谷川岳
　カメラ、ビデオ撮影会
▽七月十六日　ルーム
　青年部マッキンリー報告会
▽八月二十九―三十日　御岳山
　女性懇談会全国集会「女性登山史について」
▽八月六日　ルーム
　青年部・グリーンランド報告会
▽九月三日　ルーム

青年部・トムール峰報告会
▽九月五日　丹沢
丹沢・葛葉沢沢登り
▽九月十二日　高柄山
サタデープラン親子ハイキング
▽十月六日　ルーム
青年部・アムネマチン報告会
▽十月十四日　ルーム
講演会「森を読む」パート1
▽十月十七～十八日　小川山
青年部・学生部・初級岩登り講習会
▽十月十七～十八日　吾妻耶山・大峰山
探索山行「吾妻耶山、谷川岳の地形と地質」
▽十月十七～十八日　一切経山
スケッチ山行
▽十月十七～十八日　小川山
岩登り講習会
▽十月十九日　ルーム
新入会員懇談会
▽十月二十四日　ルーム
第二十三回図書交換会
▽十月二十五日　夜叉神峠
カメラ、ビデオ撮影会
▽十月三十一日　英彦山
全国支部懇談会
▽十一月四日　ルーム
青年部・学生部・中央大学パミール登山隊報告会
▽十一月六日　ルーム
16ミリフィルム映写会「福原健司作品」
▽十一月七日　ルーム
海野治郎氏講演会
▽十一月八日　皇居周辺
学生部第二十九回マラソン大会
▽十一月十一日　ルーム
講演会「森を読む」パート2
▽十一月十七日　ルーム
ヨセミテクライミング報告会
▽十一月二十五日　ルーム
立教大コンデリ峰報告会
▽十一月二十七日　ルーム
講演会「遭難防止」
▽十二月一日　ルーム
学生部女子懇談会
▽十二月二日　ルーム
東洋大チョンブー報告会
▽十二月五日　新高輪プリンスホテル
支部長会議
▽十二月五日　新高輪プリンスホテル
年次晩餐会
▽十二月六日　陣馬山
年次晩餐会懇親山行
▽十二月十三日　二十六夜山

忘年山行

▽一九九三年一月十三日　ルーム
ビデオ上映「四姑娘南壁」
▽一月十五～十七日　八方尾根
懇親スキー合宿
▽一月二十二～二十六日　渋谷
第二回アルパインスケッチクラブ展
▽一月二十四日　千葉
女性懇談会懇親山行
▽二月三日　ルーム
梅里雪山遭難報告会
▽二月五～七日　八ヶ岳
アイスクライミング集会
▽二月二十～二十一日　黒斑山
雪山集会
▽二月二十五日　ルーム
16㍉フィルム映写会「福原健司作品」
▽二月二十六日　ルーム
第二十一回山岳史懇談会「北大山岳部の登山」
▽二月二十八日　水道橋グリーンホテル
全国支部事務局担当者会議
▽三月三日　ルーム
アマ・ダブラム南西稜報告会
▽三月六～八日　戸隠
女性懇談会戸隠スキー集会
▽三月十三日　ルーム

新入会員オリエンテーション

◇**研究・シンポジウム**

▽六月三日　ルーム
地域研究「メルンツェ峰」
▽七月十一日　筑波大ホール
第十二回日本登山医学シンポジウム　Ⅰ低圧シュミレーターによる高所体験、Ⅱ高山病予防のための高所順応トレーニングについて、Ⅲ高山病対策のための救急医学
▽七月十六日　ルーム
「ナムチャバルワの気象解析」「マッキンリー気象データーロガ設置報告」
▽十一月二十八日　青山学院
雪崩シンポジウム
▽二月二十四日　ルーム
「中高年登山者のトレーニングとその効果」

◇**登山施設の改善、その他登山のための適切な事業**

▽上高地山岳研究所の改築
▽山に関する貴重なフィルム、スライド、テープ、アルバム等の複製、絵画の補修および資料の収集、整理、管理

◇**山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導**

▽二月二十七～二十八日　水道橋グリーンホテル
中高年登山対策全国大会

◇**自然保護活動の推進**

▽六月七日　「三頭山と都民の森」自然観察と台風被害視察
▽十一月八日　ライオンズクラブ国際協会「高尾山の自然観察と山をきれいにする活動」への支援
▽十一月十九日　講演会「登山者による自然破壊」

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. 88 **Issued December 1993**

CONTENTS

Mountains in Kinji IMANISHI ····· TAGUCHI Jiroh··· (7)
Visit to Aomori, Walter WESTON ····· MITSUI Yoshio··· (22)
Construction of New Kamikohchi Mountain Institute ····· ISHIBASHI Masami··· (30)
Organization and subject, in U.I.A.A. ····· KANZAKI Tadao··· (38)
≪Japan-China joint expedition to Namcha Barwa≫
Finished Japan-China joint expedition to Namcha Barwa ····· YAMADA Jiroh··· (48)
The track to the summit of Namcha Barwa ····· SHIGEHIRO Tsuneo··· (54) ※
The summit of first party, Namcha Barwa ····· YAMAMTO Kazuo··· (69)
The summit of second party, Namcha Barwa ····· MITANI Toh-ichiroh··· (70)
Document on Japan-China joint expedition to Namcha Barwa 1991
····· TAKAMI Kazushige··· (73)
First ascent of Himlung Himal ····· NIWA Yukio··· (103) ※
First ascent of Signiangshan south face ····· YOSHIMURA Chiharu··· (110)
Expedition of Anterctic pole walking ····· MATSUBARA Hisayuki··· (120)
Expedition of winter Ama Dablam ····· AOTA Hiroshi··· (128)
The north-east ridge of Mt.Qomolangma ····· OHMIYA Motomu··· (133) ※
Mountaineering history of the Alpine Club Hokkaido University
····· ASAHINA Eizoh and HASHIMOTO Seiji··· (141)
Book Review ····· (162)
Obituary : ····· (183)
Reports from branches : ····· (225)
JAC's notes ····· (236)
Record of Japan-China joint expedition to Namcha Barwa ····· (A42)
An effect of trainig by older mountaineer ····· ASANO Katsumi··· (A30)

※ English abstract attached

The Japanese Alpine Club
(Founded 1905)
Address : Tokyo, Chiyoda-ku, Yonban-cho, 5-4

Office Bearers and Committee
1993 (May1993-April1994)

President : FUJIHIRA Masao
Vice Presidents : SHIGIHARA Keisuke, NAKAMURA Jyunji
Honorary Secretary : OGURA Shigeki
Honorary Editor : MINAMIKAWA Kinichi
Honorary Librarian : MIZUNO Tsutomu
Honorary Treasurer : OHKURA Masami
Auditor : NAKAJIMA Ihei, KAWASAKI Iwao

Committee

MATSUURA Shohjiroh
HORII Masako
ITO Sho
KATAOKA Yasuhiro
MINAMI Hidehiro
MINAMIKAWA Kin'ichi
MIZOGUCHI Yohzoh
MIZUNO Tzutomu
MURAI Ryuichi
NAKAGAWA Takeshi
OGURA Shigeki
OHKURA Masami
OHMORI Kōichiro
OHTANI Ryoh
WATANABE Uhji
YAMAMOTO Munehiko
YAMAGUCHI Shunsuke

Council

HIRABAYASHI Katsutoshi
KANZAKI Tadao
KOSUDA Yoshio
HIROE Ken
KUNIMI Toshio
MATSUDA Yuichi
MIYAMOTO Kazuo
MIYASHITA Hideki
MURAKI Junjiroh
NISHIMURA Masaaki
SAITO Atsuo
SHIGEHIRO Tzuneo
SUZUKI Hiroyuki
TABEI Junko
TANAKA Hiromi
TOKUHISA Tamao
UMEKI Hidenori
YAMADA Jiroh
YUASA Michio

Chairmen of Branches

Hokkaido : NODA Shiroh
Iwate : NAKAYA Mitsuru
Akita : OKADA Mitsuyuki
Yamagata : OHHASHI Katsuya
Miyagi : NISHIGORI Mitsuaki
Fukushima : NAKAJIMA Masao
Echigo : SATO Ichiei
Shinano : AKABANE Kohichiroh
Yamanashi : OHSAWA Isaburoh
Shizuoka : ANMA So
Tokai : YUASA Michio
Gifu : TAKAGI Sakio
Kyoto : SAITO Atsuo
Toyama : KIDO Shigeyoshi
Ishikawa : MASUE Shunzoh
Fukui : NAKAMURA Tadashi
Kansai : ABE Kazuyuki
San-in : KIKKAWA Yohichi
Fukuoka : YOSHIMURA Kenji
Higashi Kyushu : UMEKI Hidenori
Kumamoto : HONDA Seiya
Miyazaki : UOMOTO Sadayoshi

JAPAN CHINA JOINT EXPEDITION TO NAMCHA BARWA

Tsuneo Shigehiro

OBJECTIVE OF THE EXPEDITION

1. To reach the summit of the world's highest unclimbed mountain, Namcha Barwa.
2. To develop the close relationship with China and improve climbing skill through cooperative activities between Chinese and Japanese climbers
3. To celebrate the 20 th anniversary of the diplomatic relation between Japan and China

CLIMBING PLAN

Route : South wall route via Mt. Naipun

Period : From Sep.15, 1992 to Nov. 6, 1992

Climbing Method : Non-oxygen polar method

OVERVIEW OF EXPEDITION

Namcha Barwa is the highest unclimbed mountain in the world, located 29° 37' 51" north latitude and 95° 3' 31" east latitude in the east end of the Himalayas.

There are two large and long ridges in W.N.W. and E.N.E. of the highest peak, respectively as well as a steep ridge on the south face, leading to Mt. Naipun (7,043 m). The height of the col. between the highest peak and Mt. Naipun is 200 m and the inclination of the col is 80°.

The expedition established a base camp at an altitude of 3,520 m in the S.E. side of the Namcha Barwa, in the nomadic area near the village, called "Jiedi Dangga". They entered into the valley on the right and then established C 1 (4,350 m), after passing the virgin forest. They further proceeded on the way along the valley to reach C 2 (4,800 m). Subsequently, the expedition entered into the glacier, choosing a route in the S.S.W. ridge, and then constructed C 3 after climbing 350 m of the rocky ridge. C 4 was established on the snow ridge, leading to Mt. Naipun, C 5 (6,900 m) was established right below Mt. Naipun, and the final camp (6,700 m) was established on the bottom of the col between Mt. Naipun and the highest peak. After departing the col, the expedition found a route on the snow ice wall on the right of the col, and passed rock band in an altitude of 7,350-7,450 m. The attack members passed the bad-conditioned ice-snow wall, and finally reached the summit of Mt. Namcha Barwa.

MEMBERS OF THE EXPEDITION

JAPANESE MEMBERS :

Expedition Leader : Tsuneo Shigehiro (Age 45)
Climbing Leader : Kazuo Yamamoto (Age 46)
Climbing Member (Corespondent and Tactics) : Touichiro Mitani (Age 36)
Climbing Member (Food) : Hiroshi Aota (Age 34)
Climbing Member (Food) : Atsushi Yamamoto (Age 30)
Climging Member (Equipment) : Masamori Sato (Age 29)
Weater Observation : Hajime Iida (Age 37)
Manager/Translator : Masato Kajita (Age 31)
Doctor : Akira Kojima (Age 31)
CHINESE MEMBERS :
Team Leader : Sanz zhu (Age 36)
Climbing Member : Jiau (Age 34)
Climbing Member : Cirenduoji (Age 36)
Climging Member : Bianba zaxi (Age 28)
Climbing Member : Da Qimi (Age 36)
Climbing Member : Da Qiong (Age 31)

CHRONOLOGY OF THE EXPEDITION

1990
Nov.15-Dec.15 : The Japanese and Chinese joint reconnoitering party reached Mt. Naipun (6,900 m), and confirmed a route to Namcha Barwa.
Nov.25-26 : Scouted the area from the sky by small jet aircraft.
1991
May 1 : The Japan and China expedition performed signing ceremony.
Sep.24 : The Japanese team arrived at Lasa, and met Chinese members.
Sep.30 : BC was established.
Oct.16 : Hiroshi Onishi, a Japanese climging member was killed by the avalanche, on the way to the planned C 4 construction point.
Oct.11 : The attack members were appointed.
Oct.20 : The first attempt to reach the summit failed because of a snowfall.
Oct.22 : The second attempt also failed because of a snow flow.
Oct.24 : Decided to retire.
1992
Mar.7 : The re-attempt to climb Namcha Barwa by the Japan and China expedition was decided.
Sep.2 : The Japanese members left for China.
Sep.6 : The Japanese members met Chinese members in Lasa.

Sep.14 : Opening ceremony for BC was performed.

Sep.15 : C 1 was constructed at an altitude of 4,350 m.

Sep.16 : C 2 was established at an altitude of 5,600 m.

Sep.23 : C 3 was established at an altitude of 5,600 m.

Sep.30 : C 4 was constructed at an altitude of 6,200 m.

Oct.1 : A route to C 5 was developed.

Oct.9 : The 6 first attack members departed C 3, aiming to reach the summit on Oct.15.

Oct.11 : The first attack members constructed C 5 at an altitude of 6,900 m.

Oct.13 : Due to bad weather conditions, the target date for reaching the summit was postponed to Oct.17.

Oct.15 : Due to bad weather conditions, the attack members climbed down to C 3.

Oct.17 : The attack tactics was reconsidered, aiming to reach the summit on Oct.23.

Oct.18 : The first-attack members entered into C 4, and re-started the attempt to reach the summit.

Oct.19 : The attack members stayed in C 4 because of a snowfall.

Oct.21 : Due to the sustained bad weather, the attack members went back to C 2.

Oct.22 : The target day for reaching the summit was changed to Oct.29.

Oct.24 : The first-attack members climbed to C 3.

Oct.25 : C 4 was re-construced.

Oct.26 : C 5 was re-constructed.

Oct.27 : C 6, a base camp for the attack was constructed.

Oct.28 : A route was extended to the point at an altitude of 7,200 m, for the preparation of the attack.

Oct.29 : Passed rocky bank, and stayed at an altitude of 7,600 m.

Oct.30 : The 11 first and second attack members succeeded in reaching the summit.

Nov.7 : Left B.C.

Nov.17 : The celebration ceremony was held in the Great Public Hall in Beijing.

Nov.18 : Returned to Japan.

Nov.19 : The 11 climging members were awarded by the Mnister of Education, as an honor of sports.

Nov.27 : The celebration party was held, inviting 13 representative of the Chinese team, at the Imperial Hotel in Tokyo.

RECORD OF THE CLIMBING OF NAMCHA BARWA

1. Failure in 1991

When scouting in Dec. 1990, it took only 8 days to reach the end of the ridge at an altitude of 6,900 m. However, they suffered unexpectedly deep snow in 1991. On Oct. 16, Mr. Onishi who led the party, was killed by the avalanche on the route which was the only passable way.

The progress after the accident was very slow, because of strong wind post monsoon in the end of October. Despite the difficult conditions, the climbing members still had strong willingness, and gradually approached to the summit. However, on Nov. 22, after passing the toughest part of the rock bank, the attack members faced strong snow shower, caused by the winds beyond the summit. On Nov. 24, because of lack of food and equipment and exhausting conditions of the climbing members, the expedition decided to retire.

2. Tactics in 1992

The reason for the failure in 1991 was the delay of the commencement of climbing. The research and survey concluded that there is the highest chance of the success during the 4-5 days in the middles of October. Based on that, the following action plan was arranged :

1. The departure was advanced to complete carrying equipment to C 2 by the middle of September.
2. The climbing period was split into three terms;construction of B.C., C 1, C 2 and a route to C 3, and carrying food and equipment to C 3 in the first term;construction of C 3, C 4 and a route to C 5 and carrying food and equipment to C 5 in the second term;construction of C 5 and a route to C 6 and a route to rock band. The attack to reach the summit in the third term.
3. Delivery and distribution of goods are to be handled under the strict control of the six cooperative members for the task in the high altitudes.
4. The expedition consists of two terms, with each team holding three members, totaling six members. The distance of these two teams is to be kept one camp.
5. One of the major reasons for failure in 1991 was that they could not adequately catch the changing conditions of the weather. Based on that, an expert of the weather observation was added to the staff.

3. Reasons for the success in 1992 :

- Relatively stable weather conditions helped the expedition members extend the route,

according to the plan. However, the climbing members were forced to postpone the attack to the summit twice, influenced by passing Saicron after Oct. 9. Fortunately, the winds were weaker than last year, even post Monsoon. Through the meteorological satellite, called "Noa", the expedition could access to the information provided by the Japan Meteorological Association.

Helped by the supports of high altitudes cooperative members, goods were carried properly to each camp, so that the attack members could stay in the camps in the unexpected bad weather.

When they constructed a route to rock band and climbed the summit, the attack members were prepared to stay in the small tent, to save the time to go back to C 5. More importantly, strong willingness;of both Japanese and Chinese expedition members enabled themselves to turn up the C 5 buried 2 m below snow and stay over the night at the point of an altitude of 7,600 m, and finally made all 6 attack members succeed in reaching the summit.

4. Final Comment

When we went scouting and made a reconnaissance by a small jet airplane, the mountain was covered with so much snow, and the routes seemed not so technically difficult to climb. Although we are conscious of the volatile weather conditions, we regret Mr. Onishi's death from the bottom of our heart caused by our misjudgment of the conditions. The climbers strong will is necessary to promote the team's activities, this, however, could increase possibility of an accident, if we are not careful enough.

The lasting physical strength and will, and good weather raises possibility of the success in reaching the summit. Therefore, it is not too much to say that I, as the leader of the expedition, devoted myself to helping the climging members maintain the willingness to reach the summit and secure their safety.

Three years sounded to pass so soon from the reconnaissance in 1990, the expedition in 1991, and rechallenge in 1992. However, if I try to remember each event, one by one, I feel that it was such a long way to reach the goal.

Since we could make many members the summiters, many people could think it was easy to climb Namcha Barwa. However, because of the different environment, the Japanese members tended to have heavier burden in the preparation, so that the integral strategies were required.

The First Ascent of Himlung Himal

Himlung Himal Expedition
Academic Alpine Club of Hokkaido

On September 5 of 1992, most members of our term arrived in Kathmandu. We had a permission to scale Himlung Himal from its west side in autumn season. The main group left Kathmandu on 12 th for the approach march along Marsyangdi river. When we approached to Manang district, the path from Kodo to Meta was unable to go through since some of bridges over Nar Khola had fallen. Consequently, we had to access upper Nar Khola across Kang La from Ngawal to Nar (see map on page 11).

Passing by two interesting Tibetan villages of Nar and Phu, we established Base Camp at the height of 4,850 meters on September 25. It was located at the upper border of one of pastures belonged to Phu (see map on page 38). Yaks, goats, sheep, herdsmen, and lamas of Tashi-gompa of Phu visited us everyday, while we stayed there.

From September 26, we started finding routes and setting advanced camps upwards. On the first day, Hanai and Koizumi made reconnaissance up to the height of 5,620 meters and determined the site of Camp 1. The route from base camp was on a moraine up to 5 200 meters where a deposit camp was established later. From there, the route was taken on a stable glacier covered with snow. We set up Camp 1 at the height of 5,450 meters on the glacier on September 27.

We made a detour through a small icefall just above Camp 1 and reached an upper snow plateau. Then we took a route on a snow slope to the northwest ridge. We fixed ropes for 200 meters at the steep slope for the convenience of descent. Meanwhile some porters carried luggage up to the deposit and Camp 1. A part of members, Kizaki, Sato and Nagoshi left Base Camp on September 29, for their trekking journey to Pokhara via Thorung La and Kali Gandaki.

On October 1, Hanai, Koizumi and Nima sherpa left Base Camp and set up Camp 2 at 6 000 meters on the northwest ridge. The route around Camp 2 was significantly wide and gentle slope covered with deep snow. They went along the snow ridge without any difficulty on the next day and set up Camp 3 at 6,250 meters at the foot of the slope to the summit. They left Camp 3 at 6 : 00 a.m. on October 3 and climbed on snow slope to the summit. Koizumi and Nima reached the summit at 10 : 45 a.m. They descended to Base Camp on the same day. Hanai felt so chilly at his toes on his way up to the summit because it blew very cold wind on that morning, he returned to Camp 3. After making some treatment, he started again and reached the summit at 13 : 35. The weather was fine on that day, and they took pictures of surrounding high peaks.

The secnd assault party of Shimizu, Higuchi, Saito and Danu sherpa set out Camp 2 on

October 4 and stayed that night at Camp 3. Whereas they tried to make ascent on the next day, they had to stay at Camp 3 due to bad weather. Saito descended alone to Base Camp because of high altitude sickness on that day. The rest of the party climbed up to the summit on October 6. They arrived at summit at 11：15 a.m. and descended to Camp 2. The final trial for the summit was made on October 7 by Ishibashi and Phuri sherpa. Although they set out Camp 3 on that morning, eventually they had to quit up ascending because Ishibashi had not acclimatized well and felt weary to go forward.

On October 7, members and sherpas on higher camps carried all gear and food down to Base Camp. We evacuated Base Camp on October 9 and moved down to a temporary residence of Phu named Pangari Kharka. We stayed there waiting for porters for two days and started return marching on October 12. Since the fallen bridges between Meta and Kodo were not repaired yet at that time, we made some donation for the reconstruction project and took the same route as forward journey crossing Kang La. Finally we returned in Kathmandu on October 21.

Members：

Yukio Niwa (Leader)
Osamu Hanai (Climbing leader)
Norio Kawai
Akio Koizumi
Hideaki Toda
Osamu Shimizu
Kazuo Higuchi
Eiji Ishibashi
Kiyokatsu Saito
Takeshi Yamaguchi
Minoru Masuda
Akio Nagoshi
Yukio Sato
Koshiro Kizaki

Liaison Officer：

Yeuddha Bahadur Gharti

Headman：

Ang Phuri Sherpa

High altitude porters：

Ang Nima Sherpa
Danu Sherpa

Cook：

Dolje Sherpa

QOMOLANGMA'S NORTHEAST RIDGE
The Joint Japanese-Kazakhstan Qomolangma Expedition 1992

In the spring of 1992, a joint Japanese-Kazakh expedition attempted to scale entirely the northeast ridge of Qomolangma (Everest) to its summit, which is known as the most difficult ridge of Everest which has not yet been climbed all the way to its summit. The four Kazakh members of the expedition were recognized much more experienced than the four Japanese members, except the Japanese leader, Motomu Ohmiya, who was climbed Kanchenjunga and several other Himalayan peaks. For that reason, the Kazakh members undertook mainly to prepare the route with the help of two Sherpas, Nawansg Shakya and Dawa Tsiring from Nepal.

On April 3, Base Camp was established at 5,200 meters on the East Rongbuk Glacier. Camps 1 and 2 were placed at 5,500 and 6,000 meters on April 6 and 7. Camp 3 was placed as an Advanced Base Camp at 6,500 meters on April 8 near the Raphu La at the foot of the northeast ridge. The route was extended on to the northeastridge and the Camp 4 was set up at 7,050 meters on April 15 and Camp 5 was set up on the 7,990 meters on April 18. About 4,000 meters of rope were fixed on the rugged ridge and snow caves were also dug at the sites of Camps 4 and 5 respectively against the strong winds by Kazakh members. Everthing went well with the expedition so far as this stage.

As they planned early in May at Base Camp, the Kazakh members set out on May 12 to work out a route above the Camp 5 and to attempt a possible ascent to the summit. They broke through the rugged rocky tract and could pitch the final Camp 6 at 8,360 meters on May 16, nearly at the junction of the northeast ridge and the north ridge. However, unfortunately, they were storm-bound on the following day. The four Kazakhs were stuck at a two persons' small tent, and, on May 18 they had to decide to abandon the ascent to the summit. Two of them descended the ascent route while the other two went down via the North Col and after stay overnight at the American's tent reached the Advance Base Camp.

Meanwhile, three of the Japanese and three Sherpas set out from Advanced Base Camp on May 15, but, there were storm-bound at Camp 4 for several days. One of the Japanese, Kokubo, suffering from the altitude, descended with Nawang Furba Sherpa. The upward progress of Ohmiya and Hoshi was very slow.

Although still not adequately rested from their previous effort but knowing that the date for the end of the expedition was nearly upon them, the four Kazakh members left Base Cmap on May 22, planning to spend nights at Camps 3, 4 and 5 and to make summit attempt, bypassing Camp 6 on May 25. Unfortunately, their plan could not be carried out. Ohmiya and Hoshi had continued along the fixed ropes slowly, sending Sherpas Dawa Tenzing and Nawang Shakya ahead. The Sherpas carried four cylinders of oxygen to the final Camp 6 and descended via the North Col, while Ohmiya and Hoshi were forced to bivouc at 8,250

meter high point. They could not move upward any more on the following day, but they began slow climb. Hoshi realized that they were just below the final Camp 6 and he climbed ahead of Ohmiya to secure oxygen cylinders for both of them.

Notified by radio that Ohmiya and Hoshi had not yet reached Camp 6, Kazakhs left Camp 4 for Camp 5 at 10 : 30 p.m. by headlamp. They reached Camp 5 at 5 : 30 on the morning of May 24, where they drank tea and rested until 7 : 30, then they climbed on. At 2 : 00 p.m. they found Ohmiya alone in a pitiful state three rope-lengths below Camp 6, as he spent three days and nights without a tent. Hoshi was not with him. A hundred meters below Camp 6, Kazakhs found Hoshi's Jümar on the fixed rope and his ice axe leant against the rock. Hoshi was not in Camp 6, where he could have had oxygen. The Kazakh members carefully got Ohmiya to Camp 6 where there were four oxygen cylinders and took Ohmiya descent to the Base Camp.

During the climb on the route, the members saw a corpse near the top of the second pinnacle on the East Rongbuk Glacier side of the ridge. The body was later identified the corpse of Peter Boardman by the photographs taken by Kazakh, Suviga on the spot.

In conclusion, the Japanese members owed much to the Kazakh members for all the efforts they rendered to rescue Ohmiya. In fact, Ohmiya had a hairbreadth escape from the jaw of death.

Lastly, it is quoted the saying of Valeri Khrishchaty, Kazakh co-leader, as follows :

"We walked the last several meters into the camp below the North Col, staggering, at the end of the day. That was actually the end of our joint Kazakh-Japanese expedition. We walked downward from Everest, carrying away in our hearts the pain of the irreplaceable loss of Hoshi and also unrealized dreams of the summit and the hope to come back again some day."

*****

Summary of Statistics :

Area : Qomolangma (Everest) on the Tibetan side

Attempted Route : Qomolangma via the Northeast Ridge to 8,360 meters.

Personnel : Motomu Ohmiya (44), leader, Manabu Hoshi (28, disappeared and presumably died near the high point), Yoichiro Taniguchi (35), Tsuyoshi Kokubo (22), Japanese;Valeri Khrishcharty (40), co-leader, Vladimir Suviga (38), Yuri Moiseev (38), Viktor Dedi (32), Kazakhs.

Editor's Note :

* This summary was written with reference to the report of Motomu Ohmiya and "Everest's Northeast Ridge" in The American Alpine Journal 1993.

** According to Mountain INFO/High Magazine, October 1993, Valeri Khrishchaty was killed by an avalanche in Semenovski Glacier of Khan Tengri on August 3, 1993. May his soul rest in peace !

中高年登山者のトレーニングとその効果

浅野勝己
（筑波大学体育科学系運動生理）

1952年以後今日までの40年間に，ヒマラヤ周辺の6,000 m以上の高峰を目指した日本人登山者8,476人のうち209人が死亡しており，その死亡率は2.5%，すなわち40人に1人の割合にのぼっているという事実が，日本ヒマラヤ協会の山森欣一氏から報告されている。40人に1人が死亡するということは他のスポーツでは考えられないことである。また，同氏によると，6,000 m峰登山者のうち中高年者の占める割合は，1970年代の5%に対し，1980年代は20%に増大しているという。

そこで，中高年登山者の事故対策の一環として，トレーニングによる体力向上の必要性とその効果について明らかにし，具体的なトレーニング方法を紹介したい。

1. 中高年期の老化と体力

われわれの登山の原点は，基本的には体力レベルを上げておくことにより高山病を予防することである。

中高年になると体力がどのようなレベルになるのか。まず人間の老化と体力についてみてみたい。

加齢には成長，成熟および退縮の3つの時期があり，特に退縮期が老化とよばれる。現在，男性は76歳，女性は82歳の平均寿命であり，大体70～80歳の人生において，20歳までに成長，成熟して，その後は退縮する。

20歳の男性の各体力指標を100%として，加齢に伴う変化を70歳までについて検討したのが図1である。加齢により最も低下度の大きいのは閉眼片足立ちと脚筋力であり，体のバラ

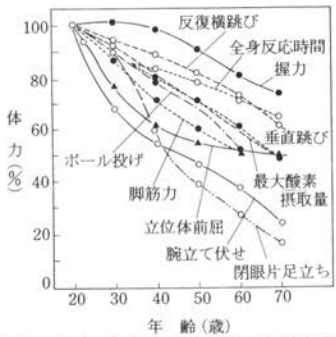


図1　体力の加齢による変化（20歳の体力を100とし，それぞれの年齢の体力を相対値で示している）（池上，1987）

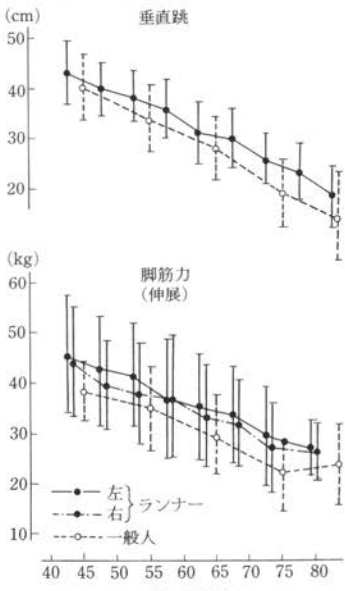


図2　ランナーと一般人との垂直跳および脚力の比較（浅野，1977）

ンスと柔軟性および脚筋力が低下してくる。すなわち60歳で30～50%を示し，「人は足から衰える」ことを証明している。次いで腕立て伏せ，立位体前屈，垂直跳びおよび最大酸素摂取能が衰退し，各項目とも60歳では約40～60%に低下している。

一方，1回4km以上のランニングを週3回以上継続している40歳から80歳の中高年マラソンランナーについて脚筋力と垂直跳びを測定し，一般人と比較したものが図2である。すなわち脚伸展筋力は両群ともに加齢によって低下するが，ランナーは各年齢において約5kg以上の高値を示し，垂直跳びも約3～4cm高い値を示している。この結果は，継続的なランニングは老化の指標とされる脚筋力や脚パワーの低下を予防する可能性を示唆している。

図3は加齢による骨塩量の変化を示している。年をとると骨が脆くなり，骨粗鬆症になりやすい。縦軸は骨塩量で，1cm³当たり約0.5g以下になると骨が脆くなる。男性に比べて女性の方が加齢に伴う下がり方が著しい。閉経によって女性ホルモンが減りカルシウムの尿中への排出量が増加し骨が脆くなる。一方，70歳以上の高齢者でも運動を継続している人は30歳代の骨塩量を維持していることが認められている。トレーニングによって骨塩量減少が予防される機序は明らかでないが，骨への重力負荷，筋肉による牽引，圧迫などの機械的ストレスおよび骨内血流の高進が造骨細胞を活性化し，また血液の酸性化を抑制して酸に溶けやすいカルシウムの遊出を予防するものと考えられている。中高年，特に更年期以後の女性は体を動かすことが重要であり，カルシウムの摂取を多くすることも当然であるが，運動により骨に刺激を与えることが非常に重要である。

次に，加齢に伴う筋力低下は，筋量の減少および筋線維の萎縮・減少によることが明らかにされている。22歳から65歳までの健康な一般

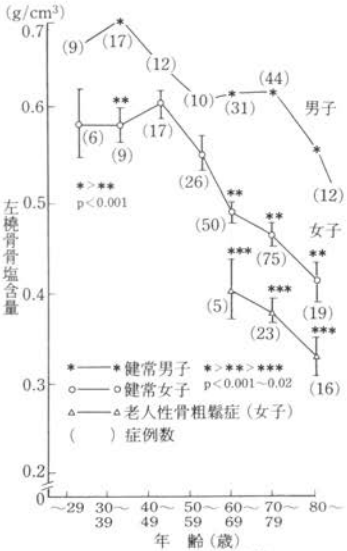


図3 加齢による骨塩量変化
(Orimoto, H. et al., 1979)

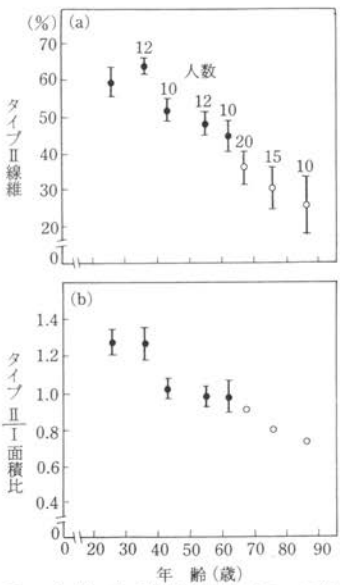


図4 加齢に伴う左外側広筋（22～89歳の座位生活男性）の筋線維構成比と筋線維面積の変化
（●；Larsson 1978，○；Scelsiら，1980）(Larsson.L., 1983)

男性について，大腿部外側広筋の筋線維組成をみると，20歳代でタイプⅡ（速筋線維，白筋）が約60%を占めていたものが，60歳では約45%に減少し（図4上），またタイプⅠ（遅筋線維，赤筋）との面積比も加齢とともに低下している（図4下）。この傾向を裏づけるように，最大脚筋力と最大脚筋パワーの年齢別変化においても，40歳以後急に低下することが明らかにされている（図5）。このように，加齢に伴い主に収縮速度が速く，パワー発揮の大きい速筋線維（白筋）の萎縮が，遅筋線維（赤筋）に比べて著しいことが注目される。しかし，ランニングトレーニングを継続すると，速筋線維の萎縮や減少を予防する可能性が報告されている。

次に，体力の最も重要な指標であり，呼吸循環系機能を表わす最大酸素摂取能について，加齢による影響とトレーニング効果を検討する。継続的にランニングトレーニングを行っている男子中高年ランナーの最大酸素摂取能について，一般人の値と比較したのが図6である。最大酸素摂取能は両群とも加齢により直線的に減少するが，ランナーは一般人よりも各年代とも25～30%高い値を示している。すなわち，体重1kg当たりの最大酸素摂取量で60歳代のランナーの44 ml/kg/分は，40歳代の一般人の値を上回っており，また70歳以上のランナーの35 ml/kg/分は，50歳代の値にほぼ相当している。したがってランナーの値は，一般人に比べて少くとも20歳は若い値であるといえよう。

従来から指摘されているように，高度上昇に伴って最大酸素摂取量は指数関数的に減少する。すなわち1,500 m以上から1,000 m上昇毎に約10%の低減を示し，富士山頂では約20%の減少である。しかし，登山活動に要する酸素摂取は高度に関係なくほぼ一定値（20～30 ml/kg/分）を必要とするために，高度上昇に伴い登山活動の運動強度（最大酸素摂取能に対

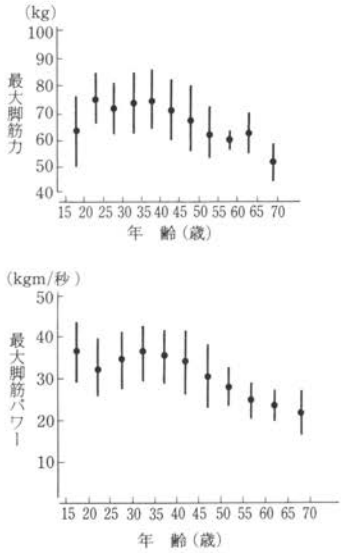


図5　最大脚筋力およびパワーの加齢による変化（川初，1974）

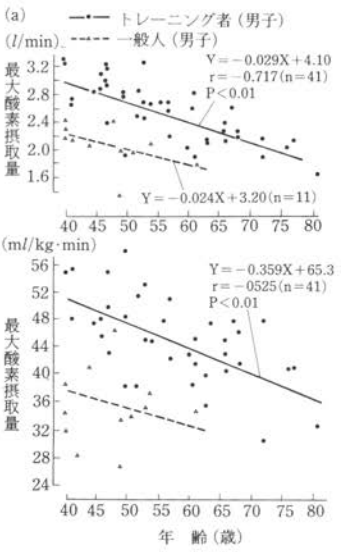


図6　中高年長距離ランナーと一般人との最大酸素摂取量の年齢別比較（Asano, K. et al., 1976）

する相対比率）は増大することになる（図7）。したがって，予め最大酸素摂取能を高めておくことにより，その相対的比率をより低下させ，予備能力を高めることができるものと考えられる。

このように，持久性トレーニングの継続によって，中高年齢においても最大酸素摂取能の水準を20～30歳若い高値に維持できるという事実を，中高年登山者は認識し，図6に示した長距離ランナーに匹敵するトレーニングを実施することが望まれる。

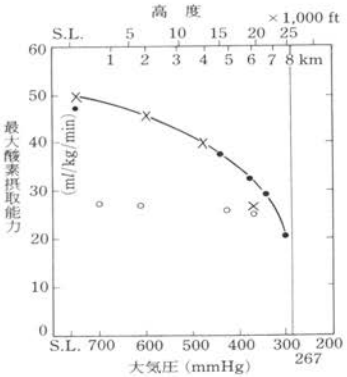


図7　高度，大気圧と最大酸素摂取能力の関係
○：通常登山運動時
●：ヒマラヤ遠征時（1960/1961）
×：エベレスト遠征の最大運動時

2.　登山者の体力特性とトレーニングの必要性

体力とはどういうことか。図8に登山者の体力特性を示した。行動体力と防衛体力の2つを合わせて体力という。行動体力というのは，行動を起こす能力（筋力，瞬発力）と行動を継続する能力（筋持久力，呼吸循環の持久力），そして行動をコントロールする能力（バランス，敏捷性）であり，これらは登山に必要なものである。同時に，特に強調したいのは防衛体力である。生物的，生理的および精神的ストレスへの耐性能力である防衛体力は，登山者には特に重要である。すなわち，低圧低酸素および低温という異常環境に対する抵抗力が要求されるからである。このような防衛体力は持久性トレーニングの継続による行動体力の向上に付随して向上することが明らかにされている。このことを図8に示した。健康状態の行動体力，および防衛体力がそれぞれ10点ずつとすると，健康体力水準は20点であるが，虚弱時には両体力とも半減して健康体力水準は10点に半減する。一方トレーニングを行った強壮状態の時には行動体力は普通の健康状態の2.5倍の25点に高ま

〔登山者の体力特性〕

体力
- 行動力B
  - 行動を起こす能力－筋力，瞬発力
  - 行動を持続する能力－持久力（筋持久力，呼吸循環の持久力）
  - 行動をコントロールする能力－調整力（平衡性，巧緻性，敏捷性）柔軟性
- 抵抗力A
  - 物理化学的ストレスに耐える能力－気温，気圧，気温，加速度，化学物質
  - 生物的ストレスに耐える能力－細菌，ビールス，寄生虫
  - 生理的ストレスに耐える能力－空腹，不眠，口渇，疲労
  - 精神的ストレスに耐える能力－緊張，不快，苦悩，悲哀

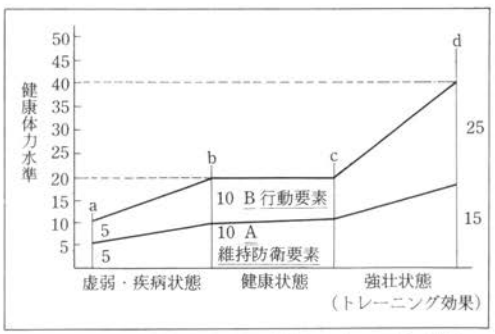


図8　登山者の体力内容と健康体力水準の関係（朝比奈，浅野，1979）

り，それに伴い防衛体力も1.5倍の15点に増大し合計40点となり，普通の状態の2倍の健康体力水準に達する。つまり防衛体力は，行動体力水準がトレーニングによって高まらないと向上してこないのである。すなわち筋力とかスタミナが高まれば，それに伴いストレスに対する抵抗力――病原菌に対する免疫力，精神的ストレスに対する抵抗力，さらに低圧低酸素に対する抵抗力など――が向上してくる。このように行動体力の増進に伴い，ストレス耐性の向上がもたらされるものと考えられる。もっとも，この機序についてはまだ十分には解明されていないけれども，防衛体力の向上について近年，実証されつつある。

そこで，図9でストレス耐性について考えてみたい。ストレスに対する抵抗力が高まるということは，ホルモンの分泌に関係してくる。ストレスを受けると，脳下垂体前葉から副腎皮質刺激ホルモンが分泌され，これが副腎皮質からコルチゾールというホルモンを遊出して血糖を高める緊急反応をもたらす。血糖の維持は生命活動の原点なのである。トレーニング量の増大は，その反応を強め，副腎重量を次第に増加させる。その増加率は心臓の肥大率をはるかに上回るもので，「スポーツ心臓」に対して「スポーツ副腎」ともいえる。図9の右はネズミによる実験であるが，運動の強度が上がるに伴い副腎の重さが増え，運動する前の約3倍くらいになる。

さらに，持久性トレーニングの心血管系代謝に及ぼす健康増進効果について紹介したい。30歳代から50歳代のマラソン愛好者と一般人の総コレステロールおよびHDL（高比重リポ蛋白：善玉コレステロール）について比較すると，各年代ともランナーでは総

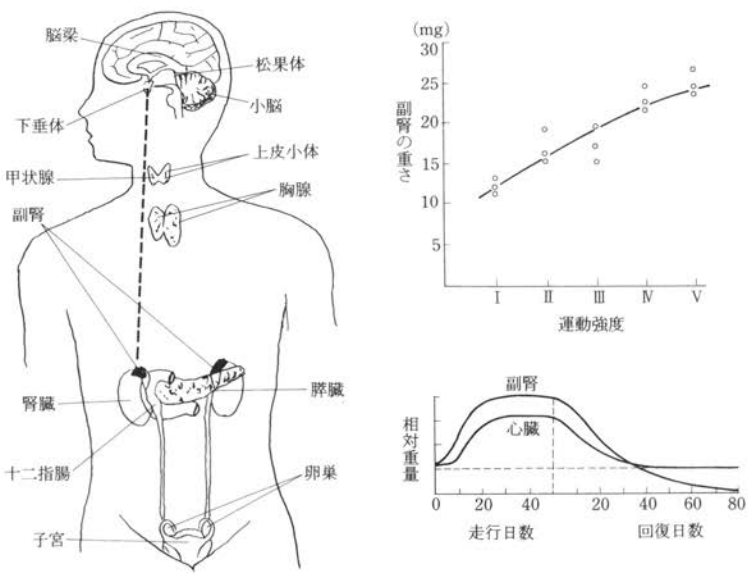


図9　体内の内分泌器官の分布（左）とトレーニングによる副腎重量の変化（右）

コレステロールが低く，逆にHDLが高値を示している（表1）。HDLが血管内膜に沈着した粥腫を除去し，沈着を促進するLDLに拮抗する作用があることから，トレーニングの継続は，脂質代謝を高進させ，動脈硬化予防に貢献することが示唆される。

さらに，1回に4 km以上のランニングを，週3回以上で2年以上継続している中高年ランナーについて，安静時血圧を一般人と年代別に比較したのが図10である。すなわち収縮期血圧および拡張期血圧ともにランナーの方が各年代ともに低値を示し，特に収縮期血圧の差が大きい。その差は各年代とも約10 mmHgであり，高齢になるほど増大する傾向にある（図10）。

一例をあげると，Clarence DeMar (1888-1958)は，約50年間にわたり毎日平均12マイルを走り続け，ボストンマラソンに計34回出場して7回優勝した「マラソンおじさん」である。1958年に直腸癌で亡くなった直後，ハーバード大病理学教室において解剖されたが，心臓重量は340 g（一般人300 g），左室壁厚は18 mm（一般人10～12 mm），さらに右室壁厚8 mm（一般人3～4 mm）であり，冠状動脈の大きさ（周径）は一般人の2～3倍で，しかも内膜の粥腫は一般人に比べて明らかに軽微で内腔の広いことが認められた。このように永年にわたるランニングトレーニングを継続することによって，冠動脈内径を広大にして粥腫を軽減し，冠血流量の十分な供給を可能にし，虚血性心疾患の予防に貢献することになる。

表1　マラソン愛好者と一般人のコレステロールの比較

年齢（歳）	グループ	コレステロール (mg/dl) 総	HDL
35～39	マラソン	183	59
	一　般	202	43
40～49	マラソン	207	64
	一　般	212	41
50～59	マラソン	198	70
	一　般	212	44
全体の平均	マラソン	200	64
	一　般	210	43

(Wood,P. D. et al.,1977)

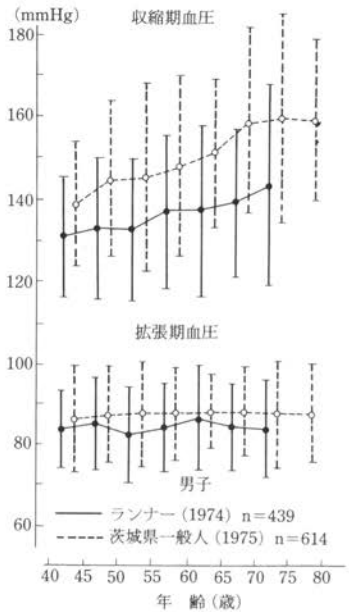


図10　ランナーと一般人との安静時の収縮期および拡張期血圧の比較（浅野ら，1976）

3.　運動の生理的意義とトレーニング処方

運動の心臓機能に及ぼす影響について考えてみたい。運動の強度を増すことにより心拍数はほぼ直線的に増加する。しかし，心臓からの1回拍出量は心拍数120～140拍／分（最大酸素摂取能の約60％の運動強度）までは増大するが，それ以後はほぼプラトー値に達する（図11）。したがって心筋を刺激するための最低の運動強度は，心拍数120～140／分程度の運動ということになる。すなわち下肢部に貯留した静脈血を，下肢筋

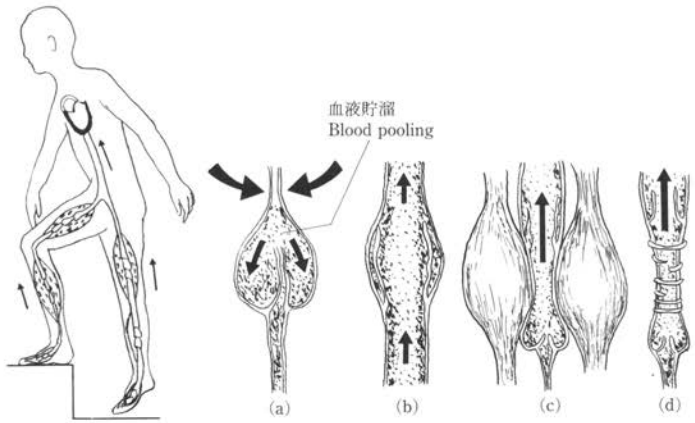


図12 “搾乳運動”（ミルキングアクション）

の収縮により心臓へ環流させる“搾乳運動”（ミルキングアクション）がこの運動強度で達成されるのである（図12）。この運動強度では筋組織への酸素供給が比較的円滑であるため，ミトコンドリア内のエネルギー生成に依存し，疲労物質の乳酸が産生されない。したがってこのようなLSD（Long,Slow,Distance）の運動は中高年者の呼吸循環系機能の向上には最適なものである。

運動時の心拍数と運動強度（最大酸素摂取能に対する比率）の関係を，20歳代から60歳代にわたり示したのが図13である。加齢に伴って直線の勾配が低くなることがわかる。すなわち，最大酸素摂取能の60%の運動強度は，20歳代では140拍／分であるが，加齢によって減少し，40歳代では130拍／分を示し，さらに60歳代では120拍／分となっている。このようにして運動中の心拍数を測定することによって，その運動強度を推定することができる。

この運動強度と時間の組み合わせについては，図14に示すように，時間経過に伴い運動強度は一般に低減するように組み合わせられる。例えば，最大酸素摂取能の60%の運動を

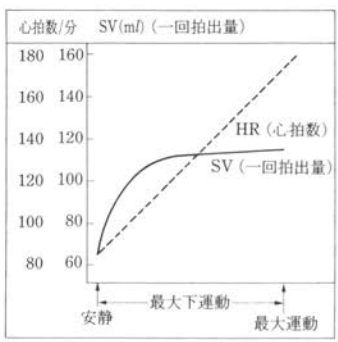


図11 運動時心拍数と拍出量の関係

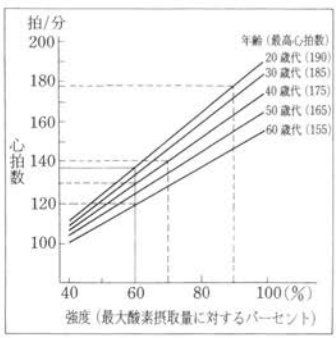
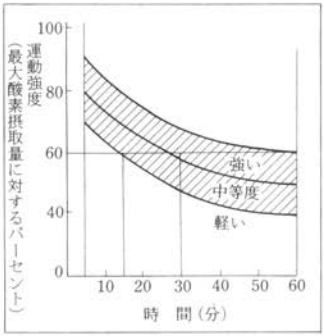


図13 年齢別にみた運動強度と心拍数との関係（体育科学センター）



運動カルテの時間と強度の組み合わせ強度
（最大酸素摂取量に対する%）

時　間	5分	10分	15分	30分	60分
軽い トレーニング	70%	65%	60%	50%	40%
中程度の トレーニング	80%	75%	70%	60%	50%
強い トレーニング	90%	85%	80%	70%	60%

図14　運動カルテによるトレーニング処方の強度と時間の組み合わせ
（体育科学センター）

15分行う場合は軽度であり，30分継続すれば強いトレーニングとなる。

運動を継続させる心理的ドライブの根源は，運動時に間脳―下垂体より遊出されるベータ・エンドルフィンであろうということが最近明らかにされている。プレジャー・サブスタンスともいわれているが，このような脳からの内分泌物質によって，トレーニングが継続されていくようになれば，前述した多くの生理的効果が期待されることになる。

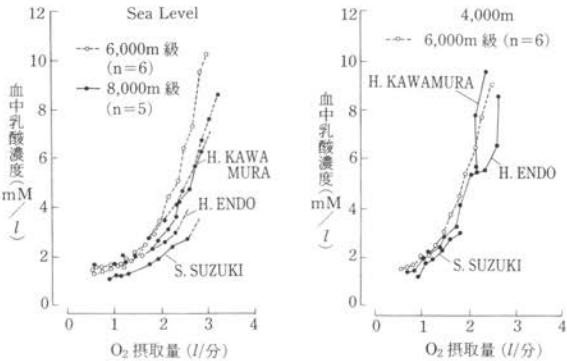


図15　エベレスト無酸素登頂者3名の運動時 O_2 摂取量と血中乳酸濃度応答の6,000 m 級および8,000 級登山者との比較（浅野ら，1984）

4.　高所登山とトレーニング

遠征登山に参加する時には，少くとも1年前から，1回に30分以上の全身の持久性運動（ジョギング，水泳，サイクリングなど）を，週3回程度継続する有酸素性トレーニングを行うことが必要である。もし低圧シュミレー

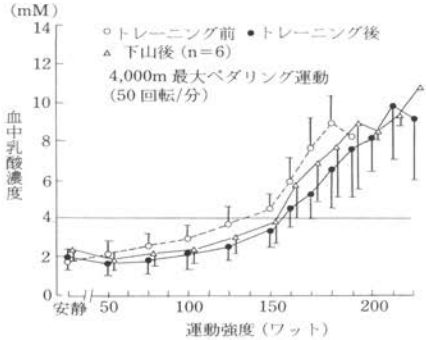


図16　高所順応トレーニング前・後および下山後の4,000 m 相当高度における最大ペダリング時の血中乳酸濃度の比較（浅野ら，1992）

ターに入室して，4,000～6,000 m 相当高度の低圧低酸素環境でトレーニングできれば，高所感覚や高山病症状の体験を含め，効果的であることはいうまでもない。

このことについてもう少し詳しく説明してみよう。体内で最も酸素が必要な臓器は脳と心臓であり，全身で1分間に 300 ml の酸素を使う内，脳がその 20%，さらに心臓が 10% を占めている。100 g 当たりでは心臓が最も酸素の需要が大きい。心不全で死亡する人が多いのは，心臓の筋肉が体内で最も酸素を必要としているため酸欠におちいりやすいからである。したがって高所へ行くと循環障害や意識障害を起こしやすいのである。このように高所は低圧低酸素環境であり異常な環境であるということを十分に理解しておくべきである。

図 15 は日本人で初めて無酸素でエベレストに登った川村，鈴木および遠藤の3氏に下山直後に筑波大に来てもらい，4,000 m 相当高度内で自転車のペダリング運動テストを行ってもらった結果である。このようにして筋肉や血液中にどのくらい疲労物質の乳酸が蓄積しているかを測定したものである。この結果，一流登山家では同じ酸素摂取量，運動強度であっても，乳酸のたち上がりが少ないことを示している。この事実から，無酸素でエベレストに登れるような人では，同じ運動強度であっても筋肉や血液への乳酸蓄積は比較的少なくなるような適応が起こっていることが考えられたのである。

図 16 は同じ運動強度において，ト

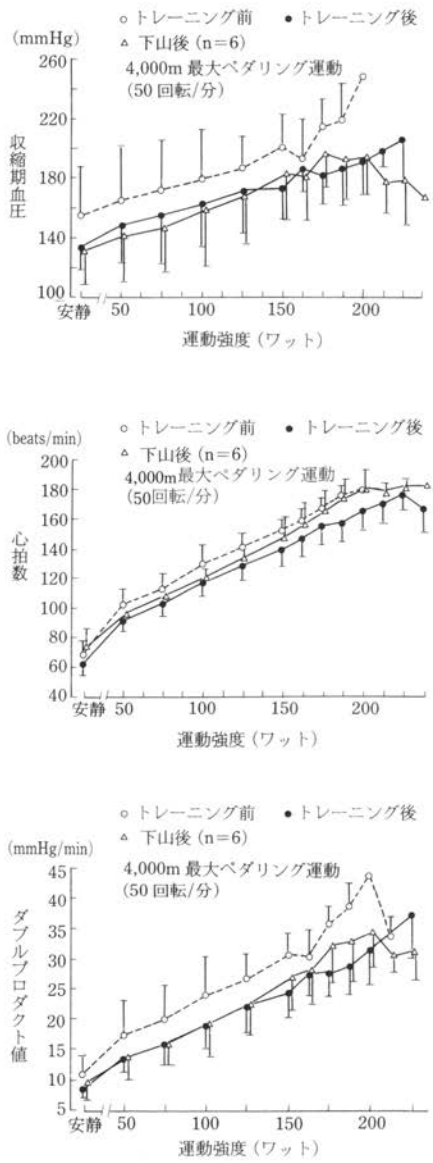


図 17　高所順応トレーニング前・後および下山後の 4,000 m 相当高度における最大ペグリング時の収縮期血圧，心拍数およびダブルプロダクトの比較（浅野ら，1992）

レーニングの前と後，遠征登山から帰ってからの血中の乳酸量を比較したものである。トレーニング後および下山後に同一運動量での血中乳酸量の減少していることが明らかである。さらに，トレーニングにより，同じ運動強度であっても血圧は下がってくる。とくに収縮期血圧に心拍数を掛けた数値（ダブルプロダクト）は，心臓の筋肉の酸素消費量を示している（図17）。トレーニング後にこの値が下がるということは，それだけ心筋の酸素利用の効率が良くなること，すなわち余力のできたことを示している。したがって高所ではそれだけ心筋に酸素を供給しやすいようになるということであり高山病予防に貢献することになる。

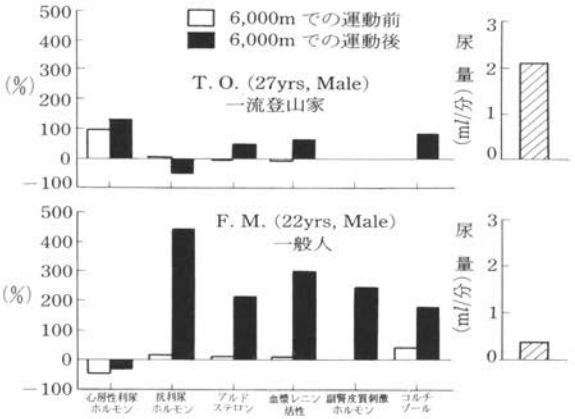


図18　一流登山家と一般登山家の6,000 m高度における運動時内分泌応答と尿量の比較（菅沼ら，1993）

図18はシュミレーターを用いて6,000 m相当高度に滞在して30分間の自転車運動を行ったときのホルモン応答と尿量変化について，トレーニングをしていない人と一流クライマーで比較したものである。トレーニングをしていない人では運動後の抗利尿ホルモンが多量に分泌され，逆に尿量の著しく少ないことがわかる。一方，一流のクライマーでは抗利尿ホルモンはむしろ減少し，尿量の著増する傾向にあって対照的な変化を示している。

図19は6,000 m相当高度で自転車を30分間ペダリングすることを3ヵ月にわたり8回繰り返す訓練を行い，

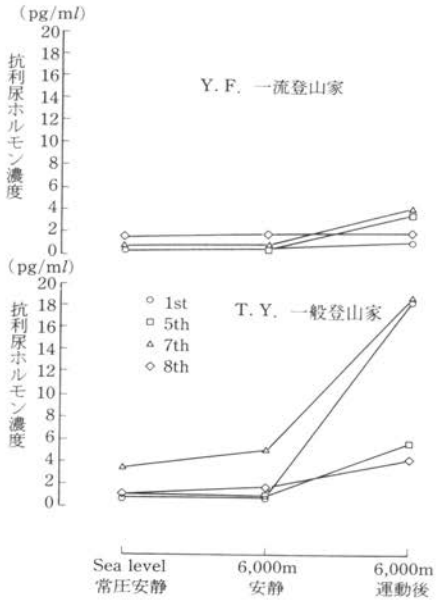
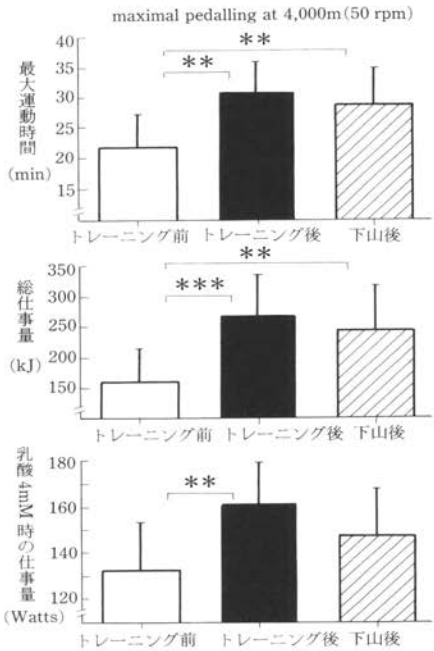


図19　一流登山家と一般登山家の6,000 m高度での順応トレーニングの抗利尿ホルモン応答変化の比較（水野ら，1993）

2週間おきに抗利尿ホルモン濃度を測定したものである。一流クライマーでは全過程の運動前後でほとんど変化を示さないが，トレーニングをしていない人ではトレーニング初期には運動後に著しい増加を示している。ところが，トレーニングの継続に伴って次第に運動後の濃度が減少してくることが明らかとなった。このことから6,000 m相当高度に何回か暴露して運動を継続すると，抗利尿ホルモンの分泌が減弱してくることが考えられる。したがって低圧シュミレーター内での高所順応トレーニングを行うことによって高峰登山時の高度障害を軽減し得る可能性が指摘できよう。さらに図20に示すように1ヵ月の遠征登山から下山後の4,000 m相当高度での最大運動時間，総仕事量および乳酸4 mM時仕事量が，3ヵ月の高所順応トレーニング後の値とほぼ同じレベルであったということは，この高所順応トレーニングによって，1ヵ月間高所へ行って順応したとほぼ同等の生理的な特性を、出発する前に既に獲得していたことを意味している。



＊：$p<0.05$，＊＊：$p<0.01$，＊＊＊：$p<0.001$

図20　高所順応トレーニング前・後および下山後の4,000 m相当高度における最大運動時間，総仕事量および乳酸4 mM時の仕事量の比較（浅野ら，1992）

以上を要約すると次のとおりである。

1)　一定強度の運動時の血中乳酸は，トレーニング後に明らかに減少し，筋肉への酸素供給がより円滑に行われるようになる。

2)　トレーニング前には交感神経系が過剰反応して，抗利尿ホルモン（排尿を抑える働き）が多量に分泌されていたものが，トレーニング後には交感神経系の応答が減弱し，抗利尿ホルモンが減少して排尿しやすい状態になる。したがって高山病を起こしにくい生理的状況になる。

3)　持久性トレーニングは，低酸素に対する耐性を高め，高所順応の早期獲得を促進する効果がある。

実は，1992年アルベールビル冬季オリンピックのノルディック複合で優勝を果たした三ケ田，河野，荻原の3選手は，出発前に筑波大学の低圧シュミレーター内で気温5℃，2,000 m相当高度で午前，午後1時間ずつのランニングおよびペダリング運動を1週間にわたりトレーニングしたのである。この結果，寒冷および高所への順応と耐性を高め

ることができ好成績を生むことになったものと考えている。

平地における持久性トレーニングによっても，高所順応トレーニングと同様の効果が期待できるので，登山者は自分の日常のトレーニングを継続して行動体力を高め，それに伴う防衛体力を向上させる努力をして，山での遭難を少しでも減らしてもらいたいものである。

（本稿は医療委員会・集会委員会主催により93年2月24日，本会集会室で開催された中高年登山者のためのトレーニングについての講演会における浅野先生の講演要旨である。中高年登山者はもちろん広く登山を行うものにとって極めて示唆に富む内容であるので，先生の快諾を得て本誌に掲載することとした。編集委員会において作成した原稿に加筆・訂正をお願いしたものである。）

ナムチャバルワの気象（1992年）

奥山　巖

1. はじめに

1991年度の登山では，登山時期が遅かったのと隊員の雪崩遭難とが重なって，山頂アタックが11月下旬にずれこみ，強風と悪天候のため登頂を断念せざるをえなくなった。

1992年度はその反省にもとづき登山時期を半月ほど早め，BCに気象に詳しい隊員*1を配置した．またBCとC3に気象測器を設置，その観測記録を常時収集，またノア画像受画解析装置も借用*2，毎日「NOAA（ノア）」からの雲画像を受画，解析した。また日本気象協会からは毎日，気象資料（300，500hpa実況図と予想図，特に500hpaについては1週間先までの予想図）と予測担当者*3の予測とコメントをもらうなど気象予測面を充実させた。

その結果，幸いにも10月末の好天予測が的中，無事登頂に成功した。この間の詳しい気象記録は別に飯田隊員の方から報告があるので，ここでは登山中の主な気象現象についての天気図解析と予測についての考察を述べよう。

＊1　飯田肇隊員

＊2　日本気象協会　森本情報処理部長代行の紹介により，日本舶用エレクトロニクス（株）から借用。

＊3　日本気象協会気象情報部・奥山巖，市川清見，島田健司。

2. 悪天，好天時の天気図

① 9月16日の例

BCに入った9月12日から16日にかけては毎晩雨が降るが，雨は午前中に止み，午後は晴間ものぞく天気がくり返された。

このときの500hpaうず度分布図（第12図から9月15日）をみてみると，東西にのびるプラスうず度（上空の前線帯に相当）はまだ山の北方にあって，山はその南側の高気圧内にある。

しかし，500hpa天気図の方をみると，たとえば9月16日12Z（第2図）では山のはるか南には低気圧があるが，その低気圧の南側は南西風，東側は南南東風，山のすぐ南側は南南西風となっていて，ベンガル湾からの南よりの暖湿気流が弱いながらも直接入る場となっている．偏西風帯の中の気圧の谷は山の西にあるが弱く，山の上はどちらかというと高圧帯の中といってもよい。

このため，夜の山は雲に包まれ降水があるものの，日中は日射の影響による対流（上下運動）が起ると雲に隙間もできるのであろう。

② 9月21日の例

9月17～19日は，それまでより晴れることが多くなったが，午後になると夕立のようににわか雨が降った。しかし，9月20～24日は降水現象は全然ない好天となった。

第3図は9月21日の天気図であるが，気圧の谷は山の北側を通過，山は南側にある高気圧におおわれ，第1図のシーケンスから500，400hpaの風をみてもごく弱い。また気温曲線をみてもこの時期は比較的気温も高かった。

このように高気圧のど真中か，その近くに入るときは，上空の空気の下降も顕著となるため，普通は午後になると山の斜面にそって吹き上る谷風もおさえられるか，あっても弱い状態となる。

③ 9月28日の例。

第4図は28日10時23分の「ノア」による雲画像スケッチである。山の南西方には割合明瞭な渦状雲があって北東に進んでいる。結果的にはそれは山の南方を通り，しかも東に動くにつれ弱まったので影響はなかったが，事前にはサイクロンの接近かとかなり心配した。

第5図は前日27日12Zの500hpa天気図。カルカッタ北方に低気圧があるが，この付近の風が弱いからサイクロンまでには発達はしていない。しかし，雲の形はきれいな渦巻きを示していたから山の近くまで接近したらかなりの影響はあったであろう。

この例を含めて，今年は9月15日～10月末までの登山期間だけでも渦状の雲は3回北上している。いずれも南方では渦巻きがはっきりしていたが，北上するにつれ弱まったり分裂してしまった。

④ 10月12～16日の例

10月12～16日は，今年の登山期間でもっとも悪天が持続した。BCでは雨が強く降り，山の高い所ではかなりの降雪となった。

第6図をみると，山の上層には強風帯があり，山の西側には偏西風帯の谷が停滞。12日はまたサイクロンに似た渦巻き状の雲も接近してきた。この形は日本付近に置き換えると本州南岸ぞいに前線停滞，南西方からは台風接近という悪天の典型例とも対応する。

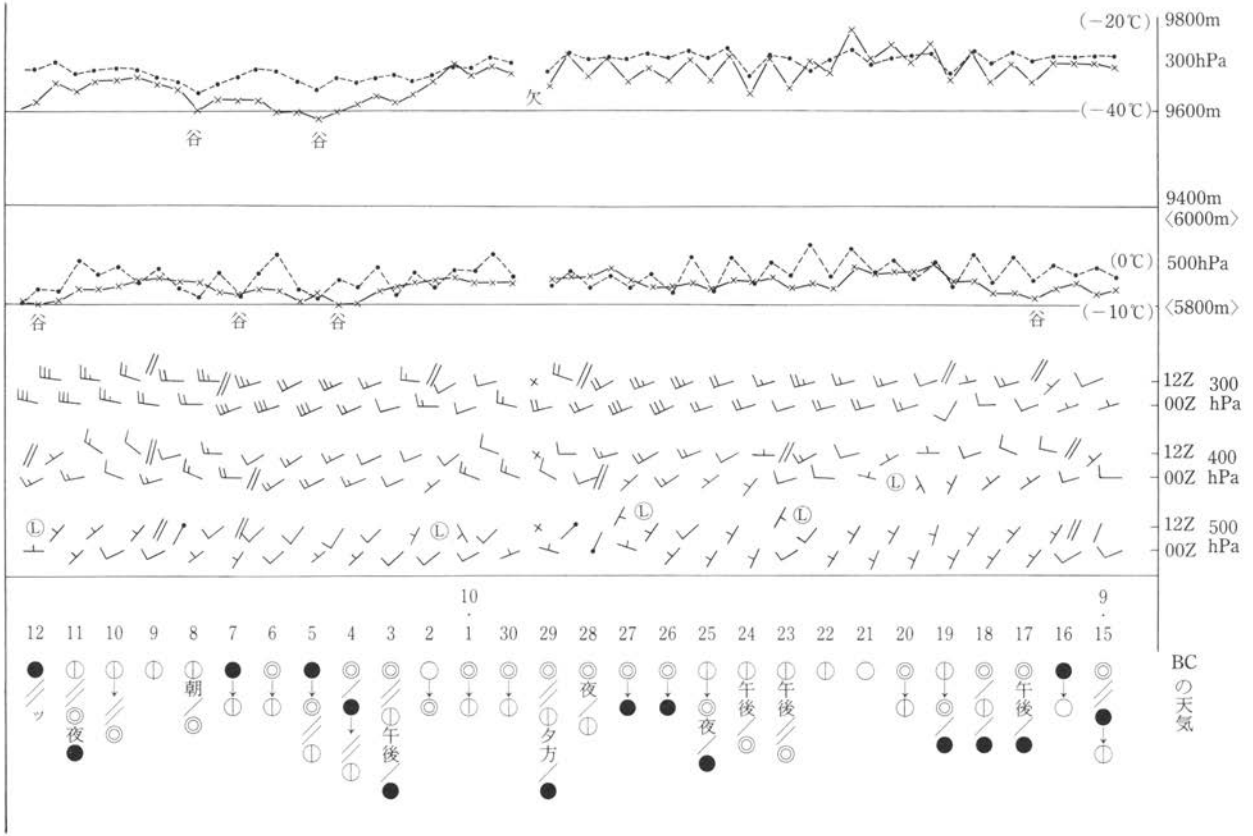
この渦巻き雲は11日夜のときは明瞭な渦状を示していたが，12日6時41分になると雲スケッチ図（**第7図**）のように，雲は27°N 82°Eと27°N 85°Eの2つに分裂した。

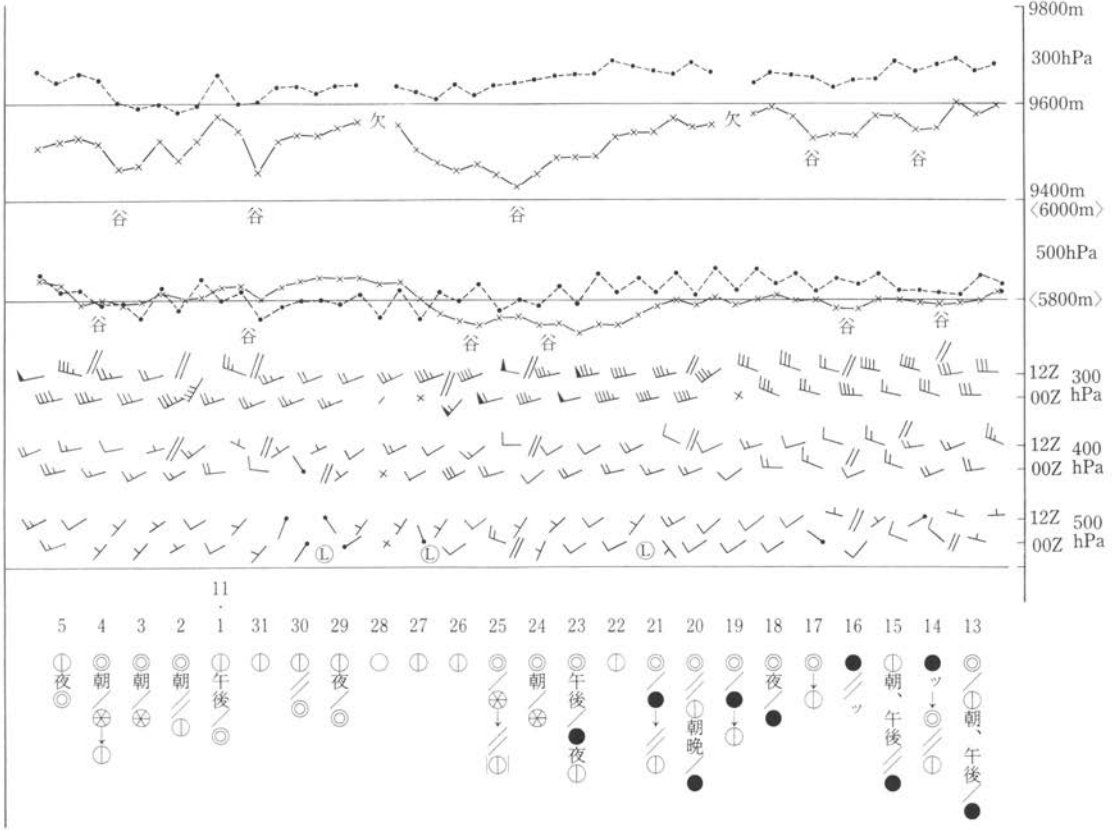
東側の雲は東北東へ割合早い速度で動いたものの，西側の方は停滞気味となった。東側のうず雲の進行につれ，山にはこの雲の東側を吹く湿った南東風が入り，雨が降りつづき時々は強く降った。この雲が通過した13日後半，いったん天気は回復するが，14日は残っていた西側の雲が山の南方を通過，雨が強まった。

14日後半～15日にかけては小康状態となるが，16日は再び雨が強まった。これは山の西方で停滞していた，偏西風帯の最後の気圧の谷が動き出して接近，そこへベンガル湾からの湿った南西風も重なったためである。

登山計画では，はじめ15日頃を登頂予定日としていたが，この頃は皮肉にももっとも

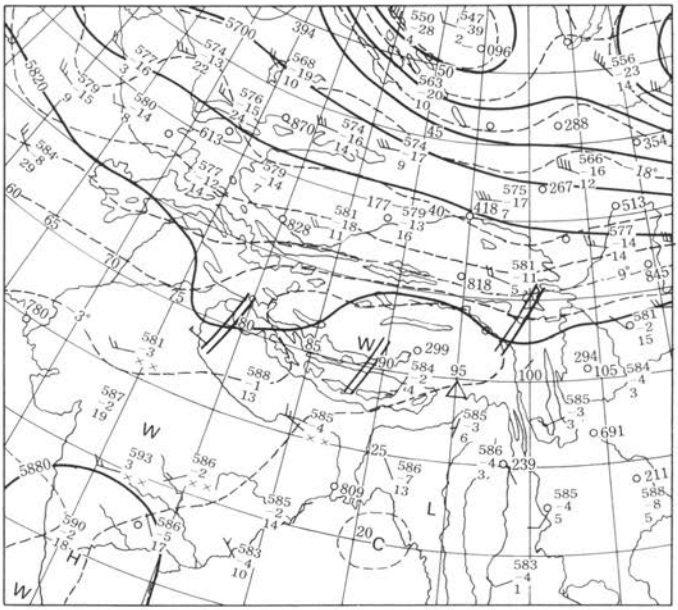
第1図　ナムチャバルワの気象とラサの上層資料（'92、9、15～11、5）





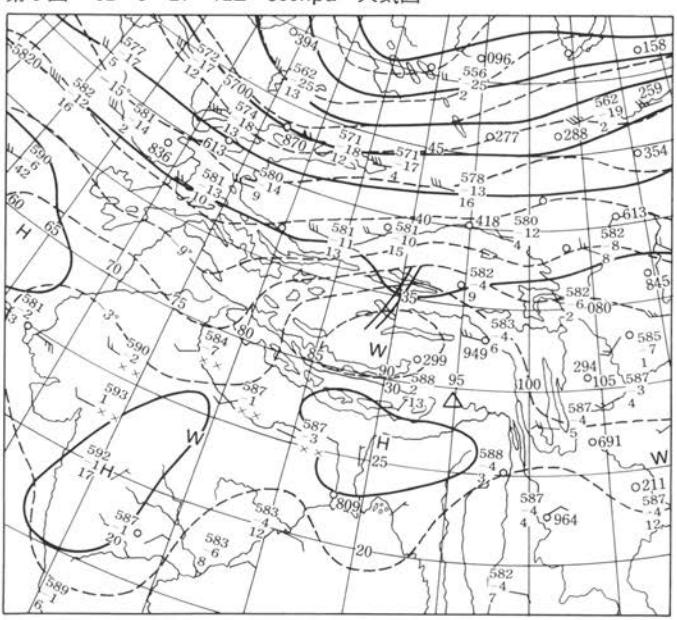
（注）
上の実線と破線…ラサ300hPaの高度、気温
中の実線と破線…ラサ500hPaの高度、気温
下の矢羽根の上が300、中が400、下が500hPaの風、最下欄はBCの天気
二重線は気圧の谷、Ⓛは低気圧、谷は高度場の谷を示す
なお」は10KT（5m／s）、▙は50KT（25m／s）
なお300hPaの平均高度は9600m、400hPaは7600m、500hPaは5800m

第2図　'92・9・16　12Z　500hpa　天気図

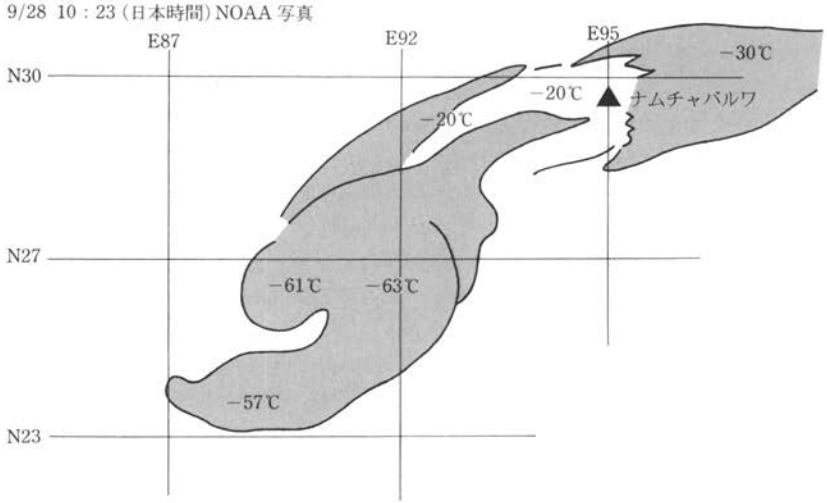


（注）　実線は等高度線（60mおき）、
破線は等温線（3°Cおき）、
地点の数値は上から高度、気温、（気温－露点温度）、
最後のは値の小さい程、湿っていることを示す。

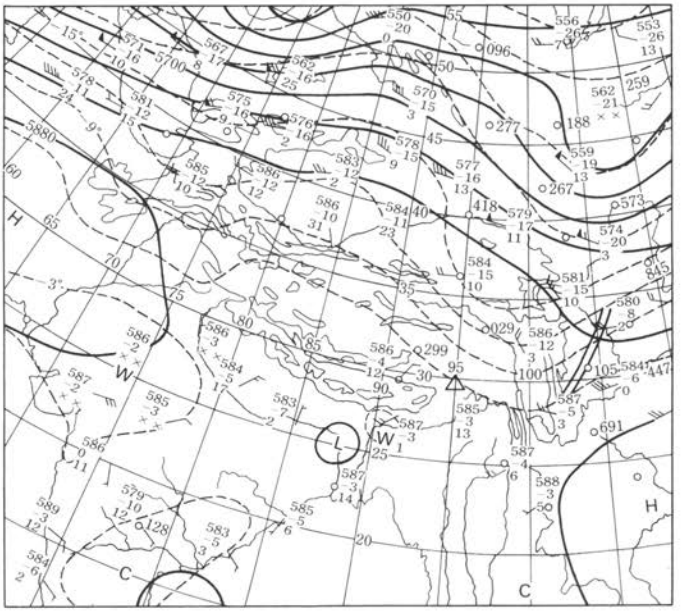
第3図　'92・9・21　12Z　500hpa　天気図



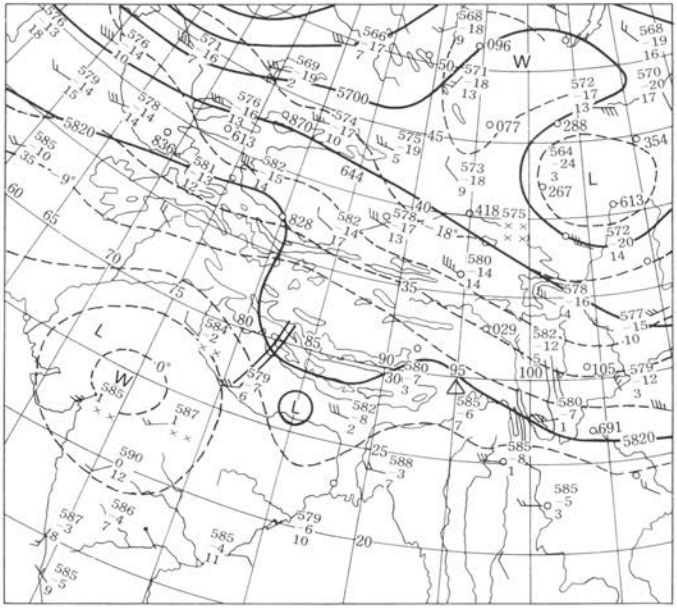
第4図　'92・9・28　10h23m（JST）のノア写真（IR）スケッチ図



第5図　'92・9・27　12Z　500hpa　天気図

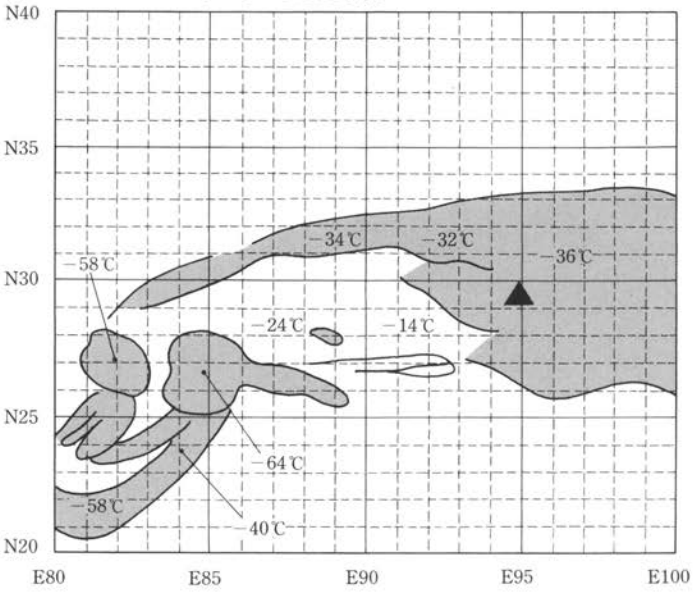


第6図　'92・10・12　1ZZ　500hpa　天気図

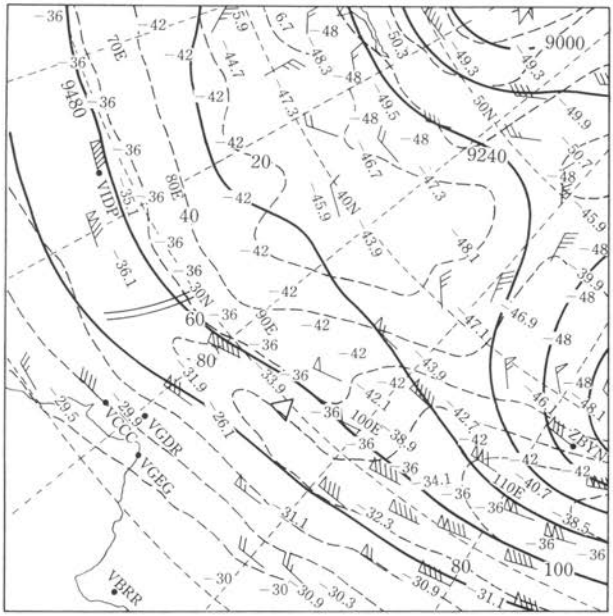


第7図　'92・10・12　06h41m（JST）のノア写真（IR）スケッチ図

1992年10月12日06時41分　NOAA写真

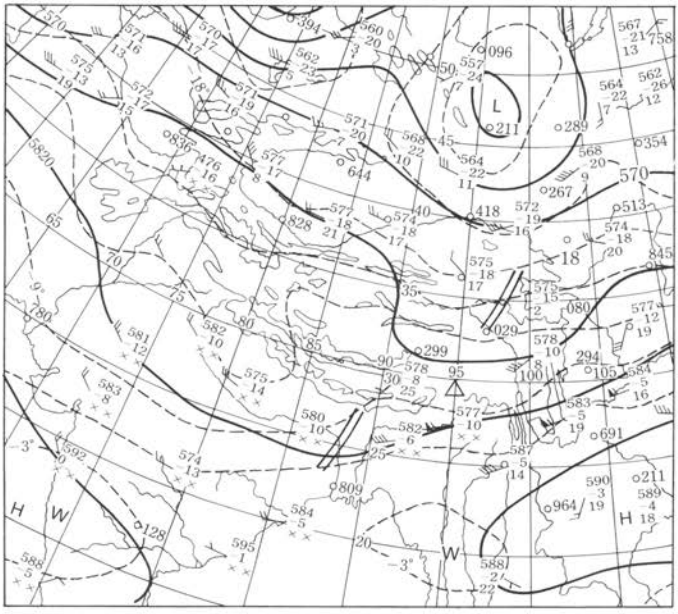


第8図　'92・10・23　00Z　300hpa　天気図



（注）実線は等高度線（120mおき）、破線は等風速線（20KTおき）、地点の数値は気温の観測値、また列状に並んでいる数値は衛星からの気温推定値。

第9図　'92・10・26　12Z　500hpa　天気図



天気が悪い状態がつづいていた。このため，いつ天気は回復するのか，長期予測はどうなるのかなどの質問が相つぎ，気象予測担当者にとっては頭の痛い時期であった。

⑤　10月23日の例

登山期間の500hpa，うず度分布図（第12図）をみると，前項に述べた一連の悪天期間が終った10月17日になっても，なお山には東西にのびるプラスうず度帯（前線帯）がかかったままであった。

そして，18～25日にかけては（22日のみは晴），日中は晴間が出るが，夜間は降水がある状態がくり返された。この問題は次の「日変化」でとり上げる。

この状態の第１の原因は，上空の前線帯の停滞のためであるが，前線帯が停滞することは強風帯が停滞することでもある。

第１図の300hpa の風をみても，21日頃からやや強まり出し，22～26日は50～75KT（25m/s～38m/s）に達した。今年の登山期間は概して風が弱かったが，この間だけが強風期間であって，観測された風では最大風速は75KT であった。

一方，1991年10～11月の方は，ほとんど連日50KT 以上で最大風速は110KT であった。このように1991年度は強風つづきだったのと比べると，1992年度は極めて風が弱かったのが大きな違いである。

また，その強風の起り方も1991年のときは亜熱帯高気圧の北上，張り出しに伴う（強風前に気温上昇）ものが多かったのに，1992年の方はこの型はなかった。

10月23日（第８図）のときも上層の気圧の谷接近に伴う強風（気温下降後強風）であった。

⑥　10月28～30日の例

10月26日以降，東西にのびるプラスうず度帯はやっと山の南側へ南下，山の天気も回復してきた。BC の天気も26～31日は快晴状態となった。

第９図は26日12Z の，第10図は29日12Z の500hpa 天気図である。まず27日に，次に30～31日にかけ気圧の谷が通過しているが，山の南方を通っているので山への影響はなく，山は強風帯の北の寒気場の中に入った。

つまり第11図のモデル図のように，高気圧としてはっきり書けないまでも，山は上層寒気内の下降気流域にあり，相対的な高気圧におおわれる形となっている。また強風は前線帯（強風帯）に伴うから，前線帯の南下につれ，山は好天になるとともに風も弱まった。

3.　'92年度の天気の特徴

①　日　変　化

毎日の１日における天気の変化を日変化というが，普通の日変化とは午前中は晴れていても午後は斜面を吹上げる谷風とともに雲が発達，夕方頃にわか雨や雪が降るが，夜に入って風が山風に変わると，雲も次第に消えてゆく変化をさす。

今登山期間では，この日変化の他，別の日変化も現れた。9月12～16日と10月18～25日（22日は除く）がそれである。

このときは日中の方が晴れているが，夜になると雲が厚くなり降水が起るのである。

前者の通常の日変化の起りやすい天気図型は，弱いながら高気圧におおわれるときとか，上層の気圧の谷が接近しはじめたときが多い。すなわち午後吹く谷風をおさえる程の下降流場ではないときで，しかも比較的天気はよい状態のときである。

後者の日変化については２つの型がありそうである。1つは９月12～16日であって500hpa以下の下層で弱いながら暖湿気が入るが，上空には前線帯がない場合，もう１つは10月18～25日の方で，下層の暖湿気の流入はほとんどないが，上空前線帯を伴うときである。

まず上空前線帯を伴う方をみると，この場合，山にかかっている雲は上，中層雲主体の雲であろうが，上空の気温の日変化に応じ，雲層も日中は山頂より上へ上昇，山は曇りか晴間ある状態になるが，夜になって冷えてくると雲層もまた山頂付近へと下降し，降水現象を生じるようになる。

また上空前線帯はないが，下層が湿っているときは，おそらく夜の山は全層雲に包まれ降水もあるだろうが，日中対流が起るとその雲層もまた，その雲層の上限の安定層も上昇するとともに拡散し，雲に隙間も生じるようになるのであろう。

② 500hpa うず度分布図

500hpa うず度分布図（**第12図**）で注目すべきはハッチをつけたプラスうず度，それも東西にのびたプラスうず度帯（以下，うず度とはとくに断らない限りプラスうず度をさす）の動きである。

数値が大きいのはうず度が大きいことを示す。うず度は500hpa等高度線の曲率と風速の水平シャー（水平方向の風速差）によって決まる。東西にのびるうず度帯ということは，曲率はほとんどないので，水平シャーのあるところとなる。

つまり，うず度帯の両端は強風帯の一番強いところ（強風軸）を示す。また上層の強風帯とはそこで温度の集中が起っているわけだから，前線帯といってもよい。

うず度帯＝前線帯としてみてみると，東西にのびるうず度の南北変動と山における天気の変化との割合よい対応もうなずけてくる。

9月15～18日のときだけは，500hpaうず度帯が山の北側にあるのに悪天だったが，これは前に述べたように，500hpa以下の下層暖湿気の流入によるものである。

しかし，その他の降水があった期間をみると気圧の谷が通過しているときか，うず度帯が山付近にかかっているときが多かった。10月25日以降は，うず度は山の南側へと南下，それとともに山も好天ベースに変わってきた。

③ 5日平均図

前項でうず度帯が山付近にかかっていることが悪天の１つの要因と述べたが，悪天についてのもう１つの要因は山の西側に気圧の谷があるかどうかである。

移動性の谷なら悪天は谷の通過するまでの一過性であるが，谷が停滞性なら谷の東側は南からの湿った気流が入り，何日も連続して悪天が続く。また停滞性の谷なら，5日間平均の天気図をみると，それが一層よく表現されているであろう。

第13図は500hpaの5日平均図である。ここでたとえば10月7日とあるのは，10月5～9日の平均図であり，ハッチをしてあるところは，より長期の平均値からの偏差のマイナス域である。

比較的天気のよかった10月上旬は，山のところの偏差はプラス。しかし，中旬になると山はマイナス域に変わり，しかもそのマイナス域も広くなるが，下旬になるとマイナス域は縮小に向かっている。

また等高度線の示す谷をみると，12日は大きな谷は中国東部方面にあるが，山の西側にも弱いながら別の谷が表現されている。17，22日は山のすぐ西側に明瞭な谷が示されている。

すなわち，10月は上旬の天気ベースは割合よかったが，中旬から下旬はじめにかけては山のすぐ西に谷が残り，しかもマイナス域も大きい。山は南よりの湿潤気流が入りやすい西谷場だった。しかし，27日以降は西谷場はなお残っているものの，谷は弱まり，かつ南下して天気は回復傾向となったことを示している。

4．日本気象協会の役割

1992年度は気象予測面を充実させるため，日本気象協会に協力を依頼。またBCには気象に明るい隊員を配するなどの体制も整えた。

しかし，いくら体制を整えても予測は水ものであって，気象協会内部にも日本国内の予報だってはずれることがあるのに，まして遠くようすのわからないヒマラヤの予報なんてと，はじめは危惧の念を持つ人もあった。

気象協会として行ったことは，BC設営日から10月末にかけて毎日1回（16時発表），500hpaの前日12Zの天気図とそれからの予想図（はじめ24，36，48，72時間後の5枚。10月半ばからはさらに96，120，144時間後の予想図も加わる）。300hpaの方は当日00Zの実況図と24時間後の予想図，それと予測担当者の今後1週間の気圧の谷通過予測日と予測についてのコメントを加えてFAXで送信した。

一方，BCの方からは毎日朝11時頃，前日からのBC，C3の天気，風速，気温，湿度の実況，「ノア」の雲のスケッチとともに天気や雲の変化をコメントをつけて送ってきた。

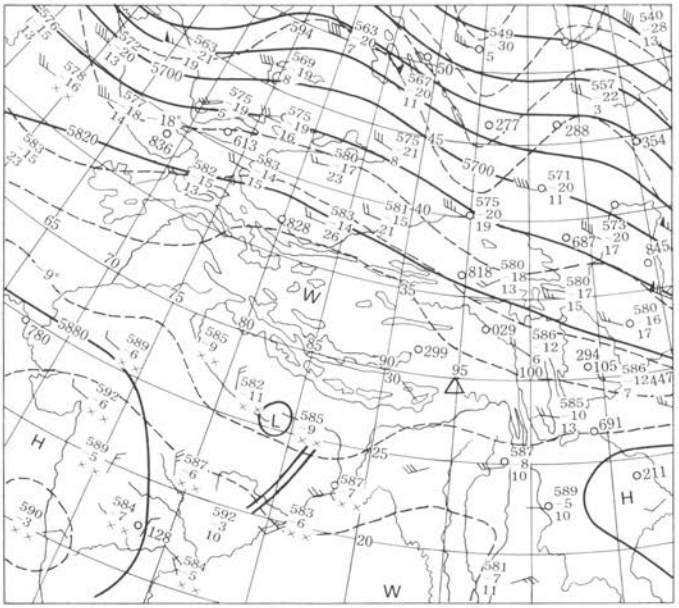
その他，BCからときどき直接電話がかかり，意見を求められた。とくに登頂日の予定を作るため，10月中旬以降は翌日の天気ばかりでなく，長期予測を聞かれることが多く，かなり緊迫したやりとりもあった。

しかし，幸いなことに10月下旬はじめまでつづいた悪天ベースも25日以降は前線帯南下，晴ベースに変わりそうなことが予想天気図から推測できた。

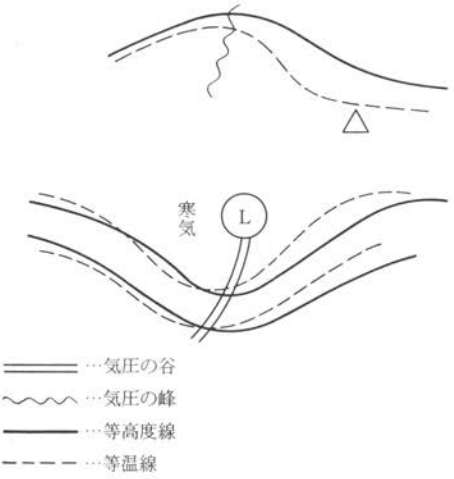
結果的にはそれが的中したわけだが，それまでが悪天つづきだったので，好天予測も何日も前の段階ではどうしても控え目にならざるをえなかった。

10月21，22日における予測コメントの一部を引用すると以下の通りであった。

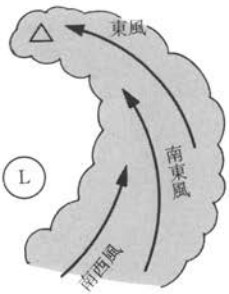
第10図　'92・10・29　12Z　500hpa　天気図



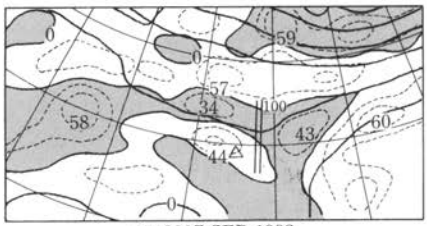
第11図　寒気南下，天気回復モデル図



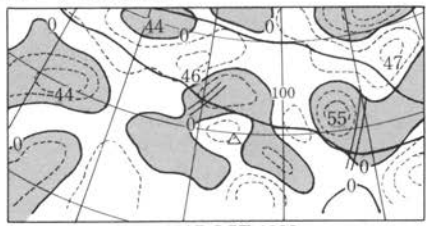
第14図　山への暖湿気流入と
雲のかかり方のモデル図



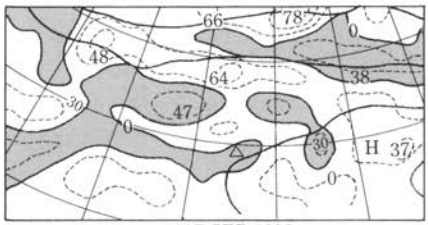
第12図　（'92・9・15～10・30，5日ごと）500hpa　うず度分布図



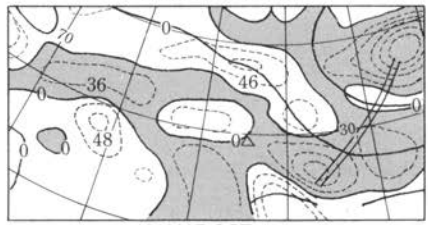
151200Z SEP 1992



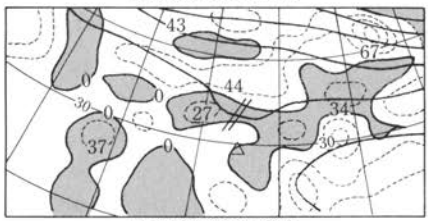
101200Z OCT 1992



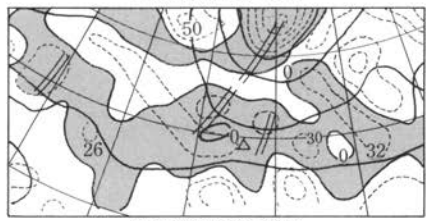
201200Z SEP 1992



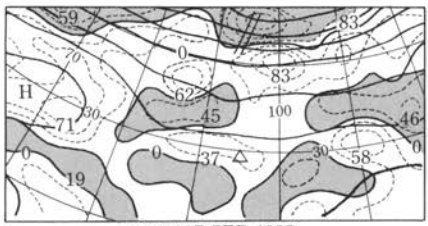
151200Z OCT 1992



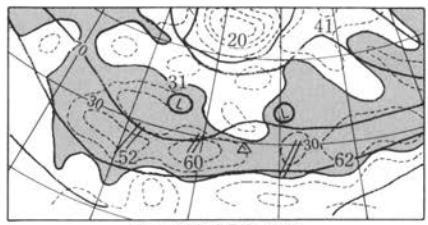
251200Z SEP 1992



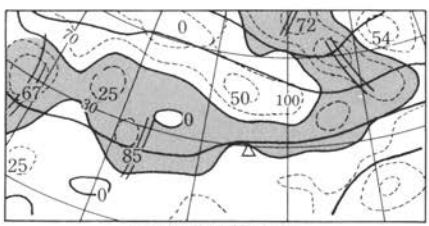
201200Z OCT 1992



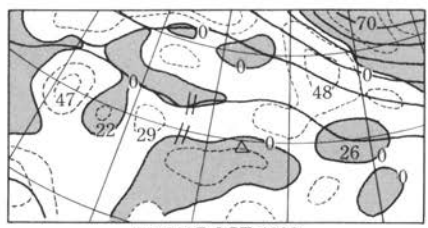
301200Z SEP 1992



251200Z OCT 1992



051200Z OCT 1992



301200Z OCT 1992

(注)　HEIGHT(M)，VORT(10＊＊-6/SEC)
実線・等高度線　　ハッチ域・プラスうず度

▷10月21日予測コメント

今後の予測としては，23，24日と相ついで谷が通過。その後も短周期で25，26日と谷通過するも，うず度の通過はやや南偏してくる。短かい波長のうず度は精度に問題があるから，より長い谷の状態をみると，山の西に谷ある西谷パターンは28日以降もつづく。

しかし，27日山の北側を低気圧通過するに伴い，その西側の高圧帯（山の北側）が南下してくるので，山を横切っていた東西のうず度（前線帯）も南下しそう。

このため，27日以降月末にかけては比較的天気回復する可能性があるとみたい。上層の風も現在と同じか弱まる見込み。

▷10月22日予測コメント

昨日の850hpa 天気図をみると，山のところが低圧部となり，山へは下層の湿った南～南東～東風が入る場になっているが，地上の予想天気図をみると，26日以降は北の高気圧が強まりそう。地上の1020hpa 等圧線をみても，26日以降は山の南側へ南下する。500hpa はまだうず度通過場であるが，地上の方は高圧部になりつつあるので，今までの悪天連続から次第に周期変化型へ変わるかもしれない（実際には26～31日にかけて連日快晴状態となる）。

5. '91年と'92年の気象の比較

'91年は10月初めから15日にかけてモンスーンのぶり返しがあったが，それ以降は谷通過に伴う一過性の悪天はあるものの，悪天が連続することはなかった*1。

しかし，'92年度は９月から10月にかけて，モンスーンが終ったと思うと，南からサイクローンのような熱帯低気圧の北上とともにまたぶり返し，いつ終ったのかもはっきりしない状態がつづいた。

また，とくに10月中旬は南から熱帯低気圧や暖湿気北上と偏西風帯の西谷型が持続，悪天が連続したことも違う点である。また上層風の風の強さも大きく違っていた。'91年と'92年の同じ10月の風を比べてみればわかるが，'91年の300hpa の風は連日50KT 以上，最大110KT だったのに'92年の方は10月23～26日に50KT 以上が一時的に出ただけで（最大75KT），非常に弱い状態であった。

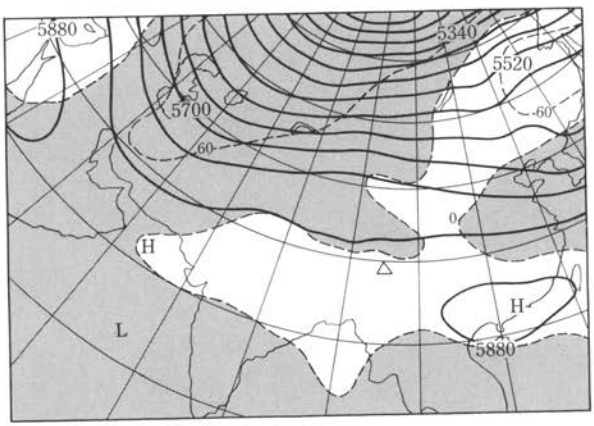
これは'91年の方は偏西風帯の中の強風軸が山付近へ南下，停滞したのに，'92年は**第12図**の10月下旬の500hpa 平均図をみても，強風軸（等高度線の間隔の狭いところ）は40°N 以北で，山のある30°N 付近は極めて弱風域となっていた。いうなれば，'92年度は季節の進みが遅れており，10月でもまだ夏の名残がある状態だったといえそうである。

また，'92年のナムチャバルワの気象の特徴の１つは，山の南側からベンガル湾にかけていつも低圧部ができ，ベンガル湾からの湿った気流がその低圧部を廻って入りやすかった。モデル的に図示すると**第14図**のようになる。山の西側では快晴となっているのに，山だけはいつも雲がかかり雪も降る状態がつづいた。ナムチャバルワは地形的に南からの湿った空気が入りやすい場所でもあるのであろう。

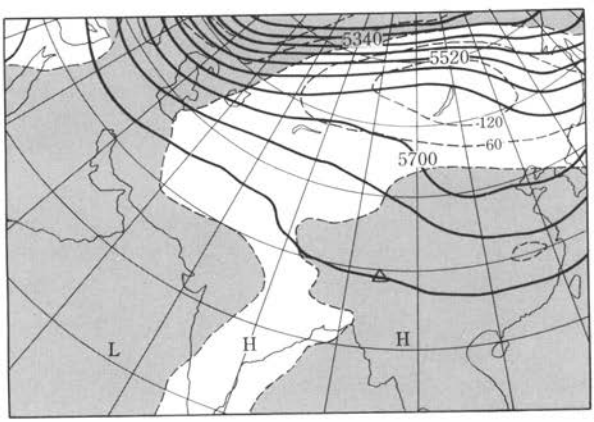
上層の強風も'91年は連日強風つづきで，時には70KT 以上の強風が何日も連続して現われたのに，'92年度は１回だけ2，3日50KT 以上が現れただけで，他は極めて風が弱

第13図　500hpa　5日平均図と偏差図

実線・平均等高度線，
ハッチ域・偏差マイナス域，
平均は，たとえば10/7なら10/5～9の平均

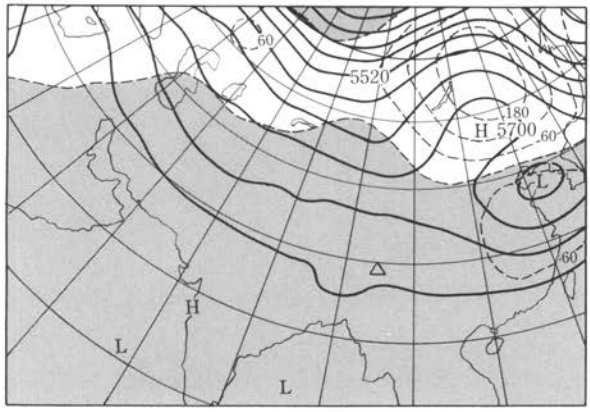


10月7日

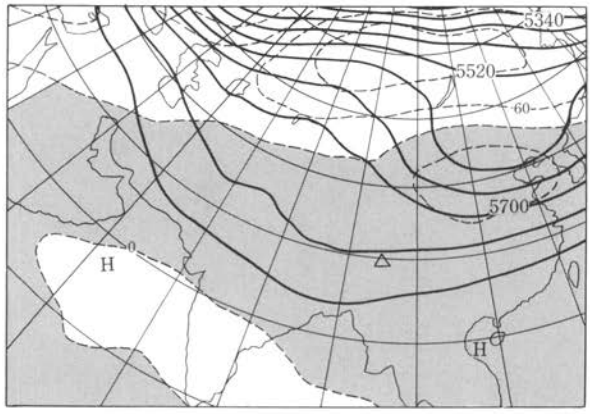


10月12日

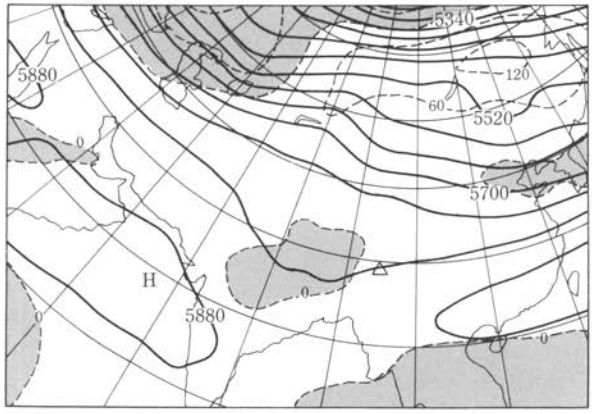
10月17日



10月22日



10月27日



かった。

またその強風の現われ方も '91年のときは南からの亜熱帯高気圧の張り出しで強風が起り，起るとその強風は何日も連続するのに，'92年ではその型の強風は全然なく，1回あった強風も偏西風帯の谷通過のときのものであった。

このことからヒマラヤの気象も2,3年みただけではなかなか一口ではまとめられない。なぜなら，年の癖が極めて大きいからである。前年がこうであったから今年も，とはとてもいえない。年によって全然違った顔をみせるからである。これが '91～92年を比較し総括した私の感想である。

6. ま と め

前の気象の総括でも述べたが，ヒマラヤの天気は年のくせが極めて大きい。それ故さらにより深く知ろうとするなら，今後も毎年持続的に天気の特徴を調べてゆく必要がある。そうすれば，いつも違うわけでなくいくつかのパターンがきっとあるはずで，それが周期的にくり返されるのか，あるいはそうならなくとも今年の状態を事前に予測できる何らかの指標が得られるかもしれない。

それには何年ものデータの蓄積と解析が必要なので，昨年の報告でも述べたように会員の協力を得たいと思う。

また，最近の気象庁の電子計算機による数値予報も飛躍的に進歩しており，今回の10月末の好天予想も割合早い段階から予想していた。

将来のヒマラヤ登山には，今以上にFAX持参が1つの流行となるかもしれない。しかし，現在の日本ではまだ予想資料は一般に公表されていないので，気象協会なり他の民間気象会社へ依頼することになり，費用もかかることから，まだ将来の課題ではあるが。

最後になったが，日本気象協会からは予測担当者として一緒に予測発表に苦労した市川，島田氏と業務面でお世話になった前橋気象情報部長，高橋応用気象課長。日本山岳会からは飯田隊員，松田副会長，大森常任理事および関係者に厚く御礼申上げます。

（日本気象協会調査役，日本山岳会科学研究委員）

＊4　ナムチャバルワの気象（1991年）『山岳』Vol.87　1992　A 37～50　日本山岳会

気 象 報 告

飯田　肇

1. はじめに

ナムチャバルワは，「悪天の山」として知られている。多量の降雪，雪崩，流雪，懸垂氷河の崩壊，強風等，気象・雪氷条件がもたらす危険度が他のヒマラヤの高峰と比較してより多く介在するからである。この山の初登頂には，それぞれの危険箇所をタイミングよく通過することが必要である。そのためには，この山の複雑な気象を読むことが，第一の課題となる。

今回与えられた課題は，気象担当にとっては頭の痛いものだった。例えば，登頂期間だけでも，主峰へのルート工作・アタック・ビバーク・登頂・安全圏への下山と，最低4日間の好天・弱風が必要である。また，雪崩・流雪を避けるためにはその前の期間の降雪が少なく，積雪層が安定していることが必要条件となる。天候がめまぐるしく変わるナムチャバルワで，果たしてこのような好条件が得られるのであろうか。

このような不安を少しでも解消するために，1992年には，登山隊としてはたいへん恵まれた気象システムを配備していただいた。まず，日本気象協会からのFAXを通しての気象情報や天気予測の提供は，専門家のアドバイスとして登山隊を支える大きな力となった。

また，現地では，自動気象観測システム（気象ロボット）の導入による上部キャンプの気象データの把握，気象衛星画像のBCでの直接受信等，登山隊としては初めての試みも数多く取り入れられ，それなりの成果を上げることができた。しかし，それにしてもナムチャバルワは悪天の山であった。予想もしなかった現象に，あわてることもしばしばだった。

ここでは，登山期間中を通しての現地での気象変化を中心に報告したい。また，地域的に特異で気象データの乏しい東チベット高山地帯において約60日間の観測データが得られたのであわせて報告する。なお，高層天気図解析等からみたナムチャバルワの気象については，別稿（奥山）にて詳細に取り上げられている。

2. ナムチャバルワ周辺の気候特性

① 地 域 性

ナムチャバルワは，北緯29度38分，東経95度3分に位置する東チベットの最高峰であり，その天を刺すような特異な山容，置かれた位置の特殊性から，今世紀初頭以来，登山家，探検家の間で「幻の山」として知られていた。しかし，地理的に近づくのが困難であること，インドとの国境近くにあるという政治的な理由から，長いこと未踏の地のまま残されることになった。

この一帯は，チベットの大河，ヤルツァンポー河がヒマラヤ山脈を縦断するように大きく湾曲する地点で，チベット高原を西から東に時には川幅３km 以上にも及んで流れてきたヤルツァンポー河は，この地域で川幅100m の激流に姿を変え，ナムチャバルワを取り囲むように弧を描いて，標高差2500m の大峡谷を一気に流れ下る。そして，インド平原で東から西に向きを変えてブラマプトラ河となってベンガル湾に注ぐ。このヤルツァンポー河の独特の地形により，ナムチャバルワ周辺は水蒸気源であるベンガル湾との間にさして顕著な障壁がなく湿潤な空気が直接ぶつかることとなり，周辺でも特に降水量が多い地域となっている。そして，その量はより前面，より高所で多くなる。

このことは，現地の植生からも容易に推測される。一般にチベットというと乾燥地帯の高原といったイメージがあるが，同じチベットでもこんなに湿潤な地域が存在するのは驚きであった。森林限界は4300m 付近で，4100m 付近までカラマツ・カンバなどの樹林が発達している。また，それらからはサルオガセが垂れ，付近の降水量の多さを実感した。また，大きな谷氷河の末端は3700m 付近で，氷河が樹林に深く入り込んでいる特異な景観が見られる。3000m 以下のジャングルから，亜高山帯，高山帯と高度差により気候が大きく変化する独特の特性を持った地域となっている。

② 気候特性と登山時期について

ナムチャバルワに最も近い観測点はナムチャバルワより56km 西の林芝（リンチー，3000m）と75km 北西の波密（ポミ，2760m）の２点である。ラサ気象局のご好意により入手したこの２点での気象データから，ナムチャバルワ周辺の気候の年変化を推測する。

図１より，月別の降水は冬期に極端に少なく10mm 以下となり，夏期に集中して200mm 以上になることがわかる。夏期の降水はモンスーンによるものだが，主に４月から10月に集中している。ネパール・ヒマラヤではモンスーンによる降水は通常５月下旬から９月下旬までだが，この山域では，長い時は４月上旬から10月下旬までその影響下にあることがわかる。つまり，プレモンスーン，ポストモンスーンの登山適期でも天候は安定しない。

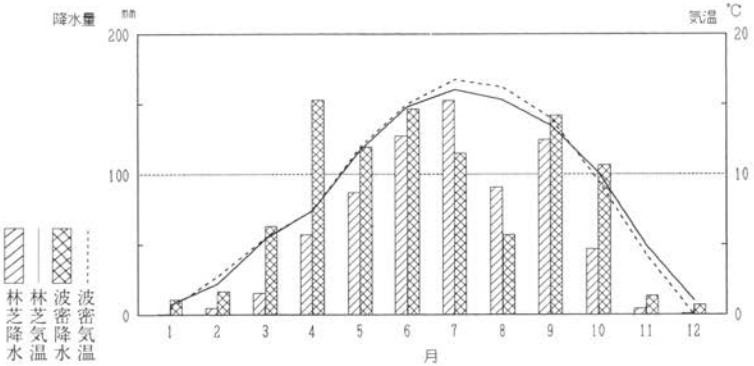


図１　林芝および波密における 1989 年～1991 年の各月の平均気温と降水量

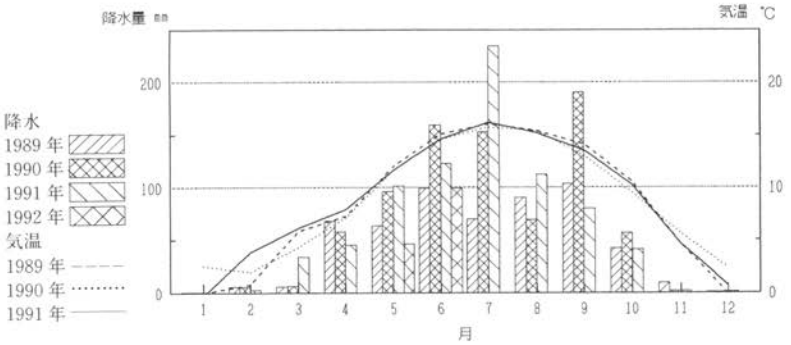


図2 林芝おける 1989 年～1992 年の月別平均気温と降水量

また，図2より，同地点でも各年ごとの変動が大きい。この傾向は特にモンスーン中に顕著であり，モンスーンの不安定性がうかがえる。図中，8月に降水が少ないのも特徴であるが，統計年数が少ないため一般的な現象かどうかは不明である。

一方，ナムチャバルワから東に400km ほど離れた梅里雪山（6740m）も，悪天の山として知られている。1991年にこの山に挑んで大規模な雪崩事故に遭遇した京都大学学士山岳会の登山隊では，付近の徳欽での過去40年の観測記録から登山適期を冬期の12月～1月に設定した。徳欽の気候特性は，ナムチャバルワ周辺の林芝・波密と類似した値を示し，モンスーン期間が長く冬期の降水量が極端に少なかったからである。

ナムチャバルワと梅里雪山は，共にベンガル湾からのモンスーン気流が流入し易い地形的な特色を持ち，乾燥チベットとは異なる独特のモンスーン影響圏を構成しているのであろう。

京都大学登山隊の登山適期判断は，7000m 以下の標高の梅里雪山では妥当であったといえる。しかし，ナムチャバルワの標高では，冬期の登山は困難だと推測される。11月に入ると晴天日は多くなるが，上空の亜熱帯ジェット気流の強風軸がヒマラヤまで南下し，それに伴う強風が吹き荒れ行動不能になるケースが多いからだ。実際，1991年の日本中国合同登山隊では，この強風にさんざん苦しんだ。7000m 以上の高峰では晴天でもジェット気流についての配慮が必要になる。

これらによりナムチャバルワの登山適期を検討すると，10月中下旬のわずかなポストモンスーン期が最も妥当と考えられる。1992年の登山は，その期間に照準をあわせて計画された。そのため，モンスーン中に下部のルート工作・荷上げを開始しなければならず，モンスーンの動向がまず問題となった。

1992年の登山時期の９月～10月にかけて，この山域の天候を支配するのは，次の要素である（図3）。

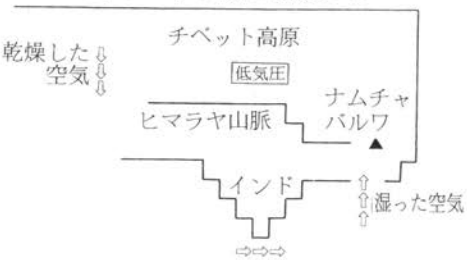
1) ベンガル湾からのモンスーン気流の流入。

モンスーンの強弱，モンスーン明けの時期が，登山に大きな影響をもたらす。

2) ジェット気流の強風軸の南北変動。

図3　ナムチャバルワ周辺の気象模式図

〈夏〉 5月上旬～10月上旬
モンスーンの海風が発達する



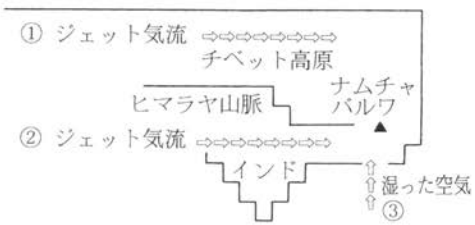
ナムチャバルワ周辺に多くの雪・雨が降る

〈冬〉 11月～4月 太平洋高気圧が弱まって，
ジェット気流が南下する



ナムチャバルワ辺りに強い風が吹く

〈10月〉 ジェット気流がチベット高原の
北側から南側に移動する時期



①の場合－ナムチャバルワに北北西の風
②の場合－ナムチャバルワに西南西の風
③の場合－(ジェット気流が弱まる)

亜熱帯ジェット気流はこの時期，ヒマラヤの北側から南側に移動してくる。

7000m 以上の高さでは，この風の強弱が登山の成否を左右する。

3) 偏西風波動に伴う上層の気圧の谷の通過。

西からの偏西風に伴う気圧の谷が周期的に通過し，悪天をもたらす。

4) サイクロン及び熱帯低気圧の通過。

ベンガル湾に近いこの地域独特のもので，ヒマラヤに大雪をもたらす。

これらの要素が混在して現れるため，9月～10月は比較的好天期とはいえ，天気予測が難しい時期となっている。

③ 1992年モンスーン前半の気候

図2に，林芝での1992年5～7月の天候を示す。

気温は平年並みだったが，降水は5月以降平年より少なく，5月中旬から6月中旬が特に少ない。6月下旬にようやくモンスーンにはいったが，平年より数十日も遅い異例の記録だった。実際，入山時の BC 周辺は乾燥していて，これまでの降水の少なさがうかがえた。モンスーンの年々変動の大きさに驚くとともに，モンスーン明けがいつになるかがまず注目された。

3. 気象観測および情報収集方法

今回の登山隊では，BC に気象担当隊員を専属でおき，現地での気象情報の収集に努める一方，日本でも天気図解析および予測を日本気象協会にお願いするという，非常に恵まれた体制をとった。日本と現地との通信は，読売新聞社の FAX（インマルサット）を利用させていただき，現地からのリアルタイム情報と日本からの予測情報は毎日交信された。

天気予測方法としては，これらの天気図予報資料から気圧配置，気圧の谷の通過予測，上空の風の予測を行なった。また，現地での高度別の観測データより，大きなスケールの気圧場のパターンにおいて現地でどのような局地的な気象現象が起きるのかを把握することを目標とした。

さらに，気象衛星より得られた雲画像から，実際の雲の分布や変動等について細かく解析し，天気図とあわせることにより予測の精度を高めた。

このうち，現地で実施した気象観測は下記の通りである。

1) 自動気象観測システム（気象ロボット）

BC（3520m）および C3（5600m）において，気温，湿度，風向，風速，雪温勾配の1時間毎の自動計測を実施し，得られたデータを無線を使用して BC で毎日回収し，分析した。

（使用した機器）• 自動気象観測システムおよび無線データ通信システム　LS 3000 Ptv 他　　白山工業株式会社

2) 海洋気象衛星 NOAA の雲画像の受信

BC で，気象衛星 NOAA の雲画像を1日4回直接受信し，雲の分布と変化を追跡した。

図4　現地気象資料（BC→日本）

（TO）日本気象協会気象情報部
　　奥山、市川、島田　様

（FROM）　ナムチャバルワ日中合同登山隊
　　気象担当　　飯田　肇

ナムチャバルワの気象状況をお知らせします。よろしくお願いいたします。

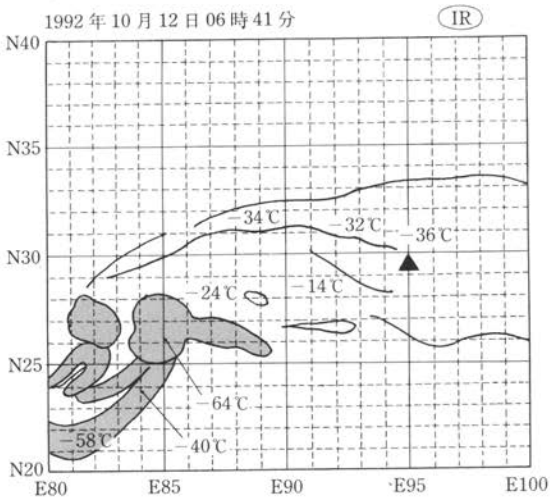
（ナムチャバルワ付近の気象状況）

10月11日
- 6：00　雲多い。全天にAs−Ac広がる。やがて谷沿いに昇るStに包まれる。
- 9：00　一時晴れてピークよく見える。上部風弱い。しかし，W方向よりCc，Csが広がり，やがてAcが全天覆う。谷の接近か。上層雲がでたのは久しぶり。
- 12：00　上層雲は広がらずCuの発達パターン。しかし、Cuの発達は遅い。
- 18：00　Cu発達せずScが広がる。全体に雲少ない。
- 20：30　突然雨降り出しあわてる。NOAAによると熱帯低気圧の雲塊からのびている腕の先端がピークにかかっている。しとしと降り続ける。

10月12日
- 6：00　夜半から雨連続して降る。NOAAの画では、熱帯低気圧（？）からENEへ伸びる雲の腕の中に現地が入っている。熱帯低気圧も向きを東に変えている模様。上部キャンプでは積雪多い。C5　20cm，C4　15cm。
- 8：00　小康状態。降雨おさまる。しかし，Ns, Stに覆われる。

登頂にむけての日程は、以下の通りです。
12日　1次隊C5−C6，2次隊C4−C5，13日　休養，14日　ロックバンドルート工作BP。
15日　1次隊登頂，2次隊BP．16日　2次隊登頂
11から12日の雨は予測できませんでした。上部キャンプで積雪が多く心配です。熱帯低気圧（？）の衰弱の様子、今後の動き等をお知らせ下さい。よろしくお願い致します。

（NOAAの雲写真の状況）



（コメント）

熱帯低気圧（？）が2分し，中心が各々N27 E82, N27 E85に東進してきた。
中心から伸びる腕の中に雲塊が点在し，悪天となっている。
現地では，7000m付近まで降雪，20cm。背の高い雲に包まれている模様。

1992 NAMCHABARWA EXPEDITION

BC(3520m) 気象目視観測 (時刻は現地時間, 日本時間－1時間)

月日	時刻	天気	雲量		雲1 N－E 方向 NM ピーク	雲2 E－S 方向 BC 裏山, 南稜	雲3 S－W 方向 米林, ラサ	雲4 W－N 方向 WNW 稜	MEMO
10/12	06：00	ツ	10	視程	NM ピーク	裏山 S 稜	稜線	WNW 稜	
				種別	Ns	Ns	Ns	Ns	
				雲底	4500	4500	4500	4500	
				雲頂	7000	7000	7000	7000	
					雨が連続して降り続ける。BC 入りして以来一番まとまった雨。上部は無風で雪。C4 15cm。C5 20cm。				
	09：00		10	視程	NM ピーク	裏山 S 稜	稜線	WNW 稜	
				種別	Ns	Ns	Ns	Ns	
				雲底	4500	4500	4500	4500	
				雲頂	7000	7000	7000	7000	
					雨が止まず。断続的に降り続ける。				
	12：00	ヨ	10	視程	NM ピーク	裏山 S 稜	稜線	WNW 稜	
				種別	Ns.St	Ns.St	Ns.St	Ns.St	
				雲底	3000	3000	3000	3000	
				雲頂	7000	7000	7000	7000	
					雨が止まず。断続的に降り続ける。				
	15：00	／◎	10	視程	NM ピーク	裏山 S 稜	稜線	WNW 稜	
				種別	Ns.St	Ns.St	Ns.St	Ns.St	
				雲底	3000	3000	3000	3000	
				雲頂	7000	7000	7000	7000	
					雨が止まず。断続的に降り続ける。				
	18：00		10	視程	NM ピーク	裏山 S 稜	稜線	WNW 稜	
				種別	Ns.St	Ns.St	Ns.St	Ns.St	
				雲底	3000	3000	3000	3000	
				雲頂	7000	7000	7000	7000	
					雨が止まず。断続的に降り続ける。				
	21：00	ツ	10	視程	NM ピーク	裏山 S 稜	稜線	WNW 稜	
				種別	Ns.St	Ns.St	Ns.St	Ns.St	
				雲底	3000	3000	3000	3000	
				雲頂	7000	7000	7000	7000	
					雨が止まず。断続的に降り続ける。				
10/13	06：00		10	視程	NM ピーク	裏山 S 稜	稜線	WNW 稜	
				種別	Ns.St	Ns.St	Ns.St	Ns.St	
				雲底	3000	3000	3000	3000	
				雲頂	7000	7000	7000	7000	
					雨が連続して降り続ける。夜半から上部で 4～5m/s の風。降雪続く。				
	09：00	◎	10	視程	NM ピーク	裏山 S 稜	稜線	WNW 稜	
				種別	Ns.St	Ns.St	Ns.St	Ns.St	
				雲底	3500	3500	3500	3500	
				雲頂	7000	7000	7000	7000	
					3：00 から降雨止む。ようやく雲塊から脱出か。St.Ns が広がりまだ悪天。降水はなし。				

※長い悪天でしたが, 12日10：00雲が切れ始めました。しかし仲々すっきりは晴れません。

図5　日本気象協会からの気象資料（BC→日本）

ナムチャバルワ日中合同登山隊気象班御中

1992年10月12日 160JIMT 発表
財）日本気象協会気象情報部　担当 奥山
Tel 03−3201−4751
Fax 03−3216−4818

ナムチャバルワ付近の気象解説

（今後5日間の気圧の谷通過日と天気変化の傾向）

T=24 12日	T=48 13日	T=72 14日	T=96 15日	T=120 16日	17日	18日
㊀	南方谷	南方谷	㊀		南方谷	㊀

谷

コメント

○気圧の谷は昨夜1つ通ったが，今夜も通る見込み。この谷の前面にインド中部にあるサイクロン(弱まっているが)から湿った南風が入ったため，昨夜は予想以上の降雪となったと思われる。

○気象衛星からの雲画像によると，サイクロン性のうず状の雲。今回06Zでは2つに分れ，1つは25°N 85°E，もう1つは27°N 90°E付近にあった東〜東北東に進んでいるもよう。

○後者の雲のかたまりから北東へ雲が広がり，山付近にかかっている。今夜通過する谷の前面にまた暖気入り，雪の降る可能性がある。

（使用した機器）• 海洋気象衛星「NOAA」受信システム　NPS-1　日本舶用エレクトロニクス株式会社

3) BCにおいて，日中3時間ごとに目視気象観測を実施し，雲量，雲の種別，雲頂雲低高度，特異な気象現象等を記録した。同時刻に全天雲写真撮影を実施した。

（使用した機器）• 35mmカメラ（ニコンF3），魚眼レンズ（ニッコールフィッシュアイ8mm）　株式会社ニコン

4) 気象FAXによる現地での天気図の受信

BCで，小型気象ファクシミリにより，北京とニューデリーからの気象情報（高層天気図等）を受信し，現地気象情報の収集に努めた。

（使用した機器）• 小型気象用ファクシミリJAX-9　日本無線株式会社

このうち，1)，2) については，登山隊としては初めての試みであった。BCでの気象観測の状況を毎日，日本へ送付した現地情報の例を図4に示す。

また，日本気象協会から毎日以下の気象資料と予測コメントをFAXにてBCに送っていただいた。

1) 300hpa高層天気図　実況図と24時間後の予想図

2) 500hpa高層天気図　実況図と4日後までの予想図

（10月中旬からはさらに7日後までの予想図を追加）

3) 気圧の谷通過予想と予測担当者のコメント

図5に送付資料の例を示す。

この日本気象協会からの情報提供は，専門家からの情報としてたいへん心強いものであり，今回の登山隊にとって大きな力となった。毎日遠く離れたヒマラヤの天気図解析を行い，コメントを作成する作業は並大抵のものではない。

実際の作業を担当された日本気象協会　奥山巌氏，市川清見氏，島田健司氏に対し，この場を借りて心より感謝申し上げたい。また，気象情報提供に関して便宜を図っていただいた高橋供一応用気象課長にも記してお礼申し上げたい。

また，チベット自治区ラサ気象局からは，毎日無線を通して翌日のナムチャバルワ周辺の天気予報と上空7000m，9000mの風向風速予想を伝えていただいた。この現地情報は，天気図解析の上でたいへん役だった。

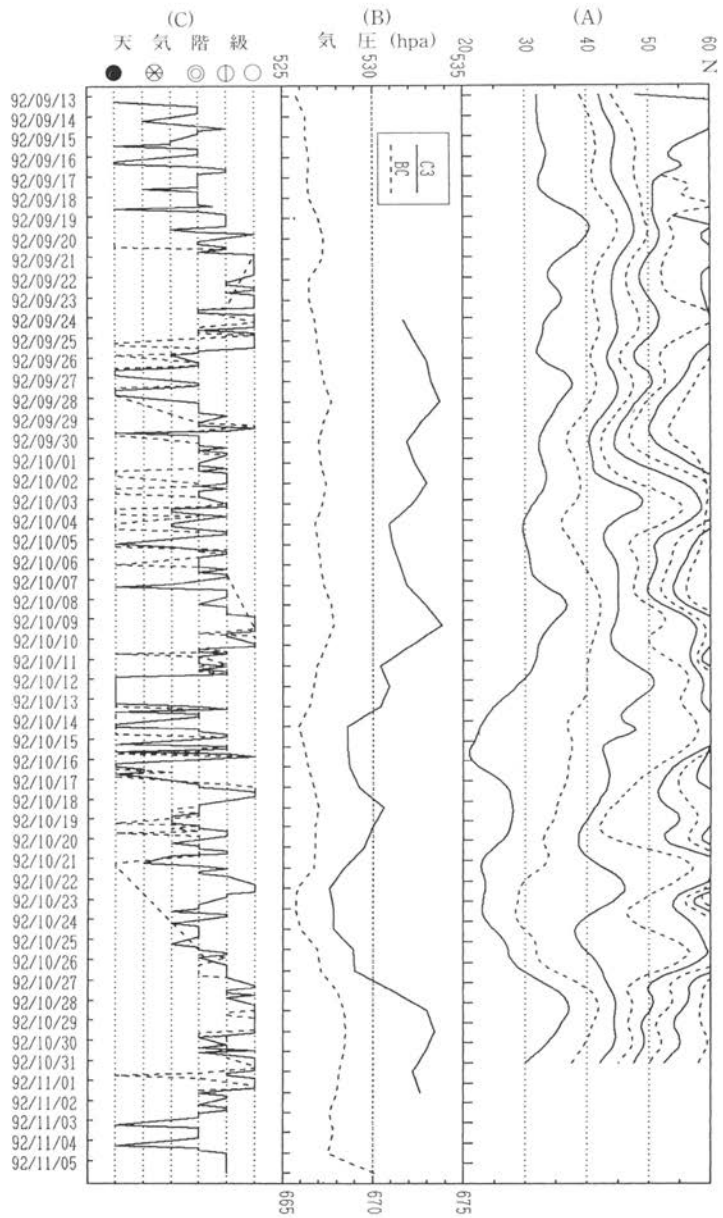
ラサ気象局の予報担当の索郎多吉副局長，朱宝維技師他関係の皆さんに記してお礼申し上げる。

上記の気象観測を実施するに当たり，以下の方々にたいへんお世話になった。ここに記して感謝申し上げたい。

1) については，機器の借用，機器のシステム構成や使用についてのアドバイスで，白山工業株式会社社長吉田稔氏，小林氏，株式会社ジオシステムズ竹中修平氏にたいへんお世話になった。

機器のシステム構築について，日本山岳会科学研究委員会大森弘一郎氏，長谷川厚志氏，中村慎一氏に，マッキンリー気象登山隊の経験を生かしての適切なアドバイスをいただき，実際にシステムを構築していただいた。この方々のお蔭でマッキンリー気象観

図 6　（A）東経 95 度線に沿った北緯 20 度から 60 度における 500 hpa 等圧面高度の時間変化　（B）BC および C 3 における日平均気圧　（C）天気階級



測登山隊の経験がナムチャバルワでの気象観測に生かされることになった。

2）については，日本気象協会・森本陸世氏の発案で実施することができた。また，日本舶用エレクトロニクス株式会社社長安坂氏，課長伊東氏，大阪氏に，機器の借用，使用についての便宜，丁寧な指導やアドバイスを受けた。NOAA の画像受信は気象予測の大きな力となった。

3）については，株式会社ニコンより，機器の借用を受け実施することができた。

4）については，日本無線株式会社に機器の購入についてお世話になった。

気象観測体制全体の構築については，山岳会の関係の皆様に多くのご助言，ご助力をいただいた。あわせて感謝申し上げたい。

4. 観測結果

① 登山期間中の気象状況

本年の BC 入り以後の天気概況は，おおまかに次の 4 つのステージに分けられる。

1) 9月11日～10月11日　モンスーンによる悪天と中休みの好天。
2) 10月12日～10月25日　サイクロンの通過と偏西風トラフによる悪天，夜間の悪天。
3) 10月26日～10月31日　ポストモンスーンの好天。ジェット気流の南北変変動。このうち28～31日は気圧の尾根に入り好天弱風。
4) 11月1日～　ジェット気流の強風軸に伴う強風，気温の低下。

登山期間中の気象状況を知るため，この各ステージについて細かくながめてみる。

図6に，9月13日から11月5日までの東径95度線に沿った北緯20度から60度における500hpa 等圧面高度の時間変化を示す。また，BC（3520m）と C3（5600m）での日平均気圧，天気階級をあわせて示す。天気階級は，1974年の京都大学 K12登山隊・能田成隊員が考案したもので，天気変化がグラフ化されている（金山，1976）。

1) モンスーン期（9月11日～10月11日）

この期間は，モンスーンの悪天と中休みの好天が交互に訪れた。このうち好天期は9月20～24日，9月28日～10月3日，10月8～11日であり，悪天期は9月13～19日，9月25～27日，10月4～7日である（図6（c））。悪天の現れ方は決して単純ではないが，いくつかのパターンがみられた。

まず，9月13～16日は，毎日夜間（23：00頃より翌朝9：00頃）に降水があり，朝方止み日中には多少雲もきれるが晴天とはならない，という天気が繰り返された。降水量は全体に少ないが，夜間の降水比率が多いのが特徴である（図6（c））。この間，顕著な気圧の谷の通過はみられず，ベンガル湾からのモンスーン気流の影響を受けていたと考えられる。

また，BC では曇でも C2（4800m）では降水（霙か雪）がある。この時期 C2 の地上気温は2～4°C 付近にあり，ちょうど雨と雪の境界領域であった。

9月17～19日は，朝は比較的天気がよいが，午後になると谷風にのってきた対流性の雲が広がり，降雨となる典型的な局地循環（谷風）に伴う悪天がみられた（図6（C））。BC での気圧変化は少ないが，どちらかというと高圧帯にはいっている（図6（B））。

日中に積雲や積乱雲などの対流性の雲が発生・発達し，夜間に消滅するという日変化の天気パターンが多く，上層の顕著な気圧の谷の通過に伴う悪天はほとんど見られなかった（図6（A））。

このため，C3までのラバ口のルート工作は，さしたる積雪もなく順調に進んだ。この期間は，雲量は多いけれども比較的降水量が少ない日が多く，また上部の風も弱かった。しかし，BCで雨の時C2ではすでに雪が降るようになった。

9月20～24日は好天期である。午後になっても積雲は雄大積雲に発達することができずに一日好天が持続し，モンスーン明けを暗示させるような天候であった。C3でも，20日午後に若干の降雪をみたのみで，午後になり雲中にはいりガスがでることはあっても降雪はなく，好天に恵まれ続けた（図6（C））。この好天期にC4までのルート工作が無事終了した。

また，24日よりC3の気象ロボットが作動を始め，リアルタイムデータが得られるようになった。

しかし，9月26～27日に比較的強い気圧の谷の通過があり悪天となる（図6（A）（C））。降水量も多く，BCで27日に16mmに達した。C3では，12：00から21：00すぎまで雪が降り続き，新雪深は20cmに達した。

また，雲の観察より，26日には，絹雲，絹積雪等の上層雲がみられ，谷の接近を明示していた。相対湿度をみると通常好天時には昼間に気温上昇のため下降するのが，80～90％で一日中変動し水蒸気量が多いことがわかる。

この後，9月29日～10月3日までモンスーンとしては好天期にはいるが，完全に晴天となることは少なく水蒸気が多い天候だった（図6（C））。午後の局地循環，対流性の雲の発達による降水がみられ，朝も層状の雲がひろがっていることが多い。BCでの降水はないが，C2，C3は雲の中にはいり一日ガスで，降雪がみられた。BCと比較するとC3での悪天率が高い。しかし，降水量は少なく行動できる程度の天候が続き，ルート工作，C4への荷上げは順調に進んだ。

そんな中で，9月28日山の南西をサイクロン（あるいはそこまでは発達していない渦状雲）が通過し，気象担当としては肝を冷やした。

10月4～7日は再び夜間の降水が多く見られるようになった（図6（C））。全体に雲量が多く，モンスーン気流の影響が顕著だった。また，10月4～5日には上層の気圧の谷が通過し悪天となるが，降水量は少なく，BCで4mm，C3で新雪5cm程度であった。しかし，C4付近の吹きだまりでは膝までのラッセルとなる。10月6日にC4上部の斜面で雪崩が発生するが，この降水が引き金になったと考えられる。

このステージでC5までの荷上げが終了し，アタックへむけての休養にはいった。

10月7日～11日までは，モンスーン気流の流入がなくなりベンガル湾，バングラデッシュに今まで見られた積乱雲のバンドが消失した。気圧は上昇傾向，気温も低下して，まさにモンスーン明けを思わせるような好天となった（図6（A）（B）（C））。10月7日に弱い谷の通過で朝方若干の降水があったが，その後晴天が続き，NOAAの画像でもモンスーン気流に伴う雲が全く見られなくなったので，モンスーン明けと判断した。こ

の間にC2を出発した第1次アタック隊は，順調にC5までルートをのばし，いよいよ第1次アタック態勢に入った。ここまでは万事が順調のようにみえた。ただし，このとき1つだけ気がかりなことがあった。10月7日のNOAAの画像に大きな渦状の雲が写り始めたのだ。このサイクロンと思われる雲塊が，後に登山隊に大きな影響を与えることになるが，この時点では北西方向（インド，パキスタン方面）に去ったように見え一安心していた。

2) サイクロンとモンスーンの戻りの悪天期（10月12～24日）

10月11日夜半から降雪が激しくなる。その前兆として，11日昼には久々に絹積雲，絹層雲等の上層雲が広がる。いったん北西方向に去り影響がでなかったと思われたサイクロンが向きを急速に東に変え，ナムチャバルワに急接近していたのだ。サイクロンは，11日夜には明瞭な渦状を示していたが，12日6時には2つに分裂した（図6（A）（B）（C））。このうち東側の雲が急速に東進し，これにモンスーン気流が流入して多量の降雪降雨となった。

最初の雲が通過後，13日に天気はいったん回復するかにみえたが，14日にもう一つの西側の雲がナムチャバルワを通過，ふたたび悪天となる（図6（A）（B）（C））。14日後半から15日には小康状態になったが，16日にいままで西側で停滞していた顕著な上層の気圧の谷が通過（これが登山期間中で最も強い気圧の谷），そこにモンスーン気流が流入して，降水量の多い最悪の天候となった。12日から14日までの降雪量はC4で30cm，C5で40cmに達した。

この天候は，日本でいうと梅雨前線に台風が進入してきたようなもので，多量の降雪による雪崩の危険，上空の強風等の悪条件が重なり，第1次アタックはC5までで撤退せざるを得なかった。最初の登頂予定日が皮肉にもすべてを立て直す下山の日となった。この悪天をラサの気象局はモンスーンの戻りの異常気象と表現していた。

10月17日は全員C3に結集，態勢をたてなおすための休養日であったが，皮肉にもこの日は快晴，しかし，雪崩の危険のためどちらにしても行動不能であった。

10月18～25日の期間は，今度は夜間の降雪が特に顕著になる。今回の登山で特徴的だったのは，この夜間の降水現象である。10月18～20日，23，24日と夜半から朝までの降雪が続き，早朝出発時に積雪が増しているため雪崩の危険に見舞われ，連日停滞が続いた（図6（C））。そのため，引き続き行われた第2次アタックでも，C4上の雪崩危険斜面を突破するチャンスを見いだせず，21日に撤退せざるを得なかった。

サイクロンが去り，好天を期待しての第2次アタックであったが，夜半にBCのテントを打つ雨音に悩まされ続けた，気象担当としては最も苦しい数日間であった。

また，19日にナムチャバルワの南にサイクロンの渦がみえはじめ，22日にナムチャバルワのすぐ南を通過していた。幸い22日は快晴のまま終始したが，経路がもう少し北よりであったならまた大荒れになるところであった。

さらに22日頃よりジェット気流の南下が始まり，上空の風が強くなり始めた。1991年の隊が強風に苦しめられたことを考えると，不安な材料が山積みしていた時期だった。

3) ポストモンスーンの好天期（10月25～31日）

しかし，10月25日を境にいよいよポストモンスーンの好天が訪れた。気圧は鍋底型から急上昇に転じ，気温，湿度も下がり好天傾向となった（図6（A）（B）（C））。この中で24日に，立て直したアタック隊が出発した。

アタック隊は，まずC4で埋没したテントを掘り出し，雪崩危険斜面にトレースを刻んだ。翌26日は晴天だったにもかかわず，現地のすぐ北側を気圧の谷が通過したため上空の風は強かったようだ。強風の中，C5まで深いラッセルでたどりついたら一面の雪面で10日前に放置したテントが全く見あたらない。一時は吹き飛ばされたことも考えたが，気を取り直して掘ったところ，雪面から2m以上も下からテントが発見された。7000m近い高度でのたいへんな掘り出し作業に敬服すると共に，この高度でこれだけの吹き溜まりができるナムチャバルワの雪の多さにあらためて驚かされた。

また，翌27日にも困難が待ちかまえていた。C6で，強風のためテント設営がなかなかできなかったのだ。毎日何が起きるか予測できないきわどい局面であったが，アタック隊員の粘り強い努力で何とかC6まで歩を進めることができた。この2日間の前進は，登頂の成否の大きなポイントであった。

10月28日から31日までは，上層の気圧の尾根部にはいったため，今度こそ本格的なポストモンスーンの好天が訪れた。第3次アタックは，この束の間の好天・弱風時に行われ，初登頂に成功することができた。特にこの期間，上空の風が弱かったことが，ビバークや登頂の大きな助けになった。

まず28日は，朝からチベット・ヒマラヤ全域に全く雲が見られず，一日中快晴で気温も低下し，気圧も急上昇していた（図6（B）（C））。午後からピークに山旗雲がかかり，この中にアタック隊員が包まれたが，全く無風で絹手袋だけでも充分という交信であった。ルートの向きが，ピークをとりまく無風帯にはいっていたようだ。

10月29日は，いよいよアタック日だ。4：00のNOAA画像でも全く雲が見られず，上空の風も2～5m/S以内で，絶好のアタック日和となった。前夜のC5での最低気温が－27°Cまで下がる。好天だが，9：00頃よりピークのみに山旗雲がかかる。アタック隊は，またもやこの雲の中に入ってしまう。しかし，ガスがかかるが風は弱いとのこと。予定どおりビバークしたが，ビバーク中も風はほとんどなく安心した。ビバーク中の気温は－30°Cまで下がったと予測される。

10月30日は，4：00に快晴。7：00には低層に薄い層雲かかるが上空は快晴。今日も絶好のアタック日となる（図6（C））。9：00頃よりピークに小さな積雲系の雲がかりだす。いつもの山旗雲にならないのは，上空の風が弱いからか。やがて層状雲がなくなり，ピークの雲のみとなる。アタック隊はこの雲の中に入り視界こそ悪かったが，順調に登高し，12：00に第1次隊，15：00に第2次隊が無事に登頂を果たし，好天の中C5，C6まで帰着することができた。この日は午後に積雲が発達するが，夕刻には解消に向かい，絶好のアタック日和であった。

この好天は10月31日まで続き，アタック隊は安全圏まで無事下山することができた。登山期間全体を通して見ても，登頂のチャンスはこのわずかな数日間しか見いだせなかった。この間に，頂上へのルート工作，ビバーク，登頂，そして安全圏までの下山を

一気に実施することができたのは，本当に幸運だったと思う。

4) ジェット気流の強風軸に伴う強風（11月1日～）

そして，登山隊の下山を待つように，11月上旬から晴天にもかかわらず，ジェット気流の強風軸に伴う強風が吹き荒れ，ナムチャバルワは冬の様相を呈し始めた。11月に入ると，この強風のため登頂チャンスはほとんど得られなかったと思われる。

② 気象観測結果

1) 天気・降水

天気は，実にめまぐるしく変動した。高層天気図だけでは予測できない現象が多々あり，この山の複雑さが伺えた。

図6（C）に天気階級を示す。天気推移についてはすでに述べたが，キャンプごとの天気を比較すると，C2以上ではBCより悪天率がはるかに高い。一般に上部ほど天候が悪いようすがうかがえる。

降水については，7000m以下では高さが増すほど降水量が多くなる傾向がある。それ以上の高さのことは不明だが，山頂直下の氷河の発達状態等を見るとかなりの高度でも降雪が多いと思われる。

2) 気温・湿度

通風しながらの測定ではなかったので，風が弱い日の最高気温は輻射のため高めにでている。朝方は最低気温，午後のはじめに最高気温，悪天時は日較差が小さくなる一般的な変化を繰り返しているが，日平均気温の変動をみると，いくつかのステージがみられる。

BCでは，9月13～22日までは平均で11.9℃，最高13.9℃，最低10.8℃で変化していた気温が，9月23～10月11日までは，平均で8.7℃，最高10.0℃，最低6.9℃に下がっている。その中でも9月26，27日，10月5～7日の気温の谷通過時の悪天で下降傾向を示している。10月12～22日では，平均5.9℃，最高7.4℃，最低3.7℃まで下降し変動して，さらに23～11月2日で，平均4.8℃，最高6.1℃，最低3.8℃まで下降した。さらに11月に入ると，2.5℃付近の変動となった。

登山期間中のBCでの最高気温は22.3℃，最低気温は－2.3℃であった。C3でもだいたい同様の変動で，9月23日～10月11日で平均－3.9℃，最高－2.2℃，最低－5.7℃，10月12～22日では，平均－6.5℃，最高－3.9℃，最低－7.7℃を示していて，10月23日～11月2日では，平均－10.3℃，最高－8.4℃，最低－12.1℃まで下がっている。登山期間中のC3での最高気温は6.8℃，最低気温は－18.7℃であった。

これらの大きな変動は，天気図スケールの気象変化に対応していて，例えば気圧の谷の通過や，10月23日以降の亜熱帯ジェット気流の南下などが要因となっている。

また，相対湿度は，夜間に90％を越え，日の出以後の気温上昇に伴い急激に下降，それが午後からの雲の発達に従って再び上昇するパターンが多い。しかし，悪天時には昼間の相対湿度下降が小さくなる。BCよりもC3の方が，雲のかかる率の高いことが顕著に現れている。

標高が100m上がるごとに気温が何度下がるかというと，期間中の平均値は，0.63℃/100mであった。また，最高値は0.98℃/100m，最低値は0.20℃/100mであった。日平均値でみると，値はすべて0.5～1.0℃/100mの範囲内にはいり，これは湿潤断熱減率の範囲と一致する。全体に雲量が多く，水蒸気量が多かったことが示されている。

また，低い値は気圧の谷通過等の悪天時にみられ，高い値は10月25日以降の好天時にみられる。

3) 気 圧

BC，C3ともに1日2回の大気潮汐を繰り返しているが，これを差し引くため日平均値で見てみると，各ステージでの気圧変動がよくわかる（図6（B））。一般にC3の方がBCより気圧の振幅が大きいが，基本的な変動傾向は一致している。そして，C3の標高は500hpaの平均高度（5800m）と近いため，ラサの500hpaの気圧変動と連動している。C3は，現地の高層気象観測点としての意味がある。

モンスーン中は，気圧変動がたいへん小さい。弱い谷の通過が現れてはいるが，微妙である。変動が顕著になるのは10月からであるが，この頃より気圧変動と天気変動が一致するようになる（図6（A）（B）（C））。特にサイクロン性の擾乱で悪天が続いた10月12～16日および夜間の降水に悩まされた10月18～25日は，気圧の下降が特に顕著であった。後者では，鍋底のようなゆるやかな低圧期間が続いた。そして，10月26日付近を境に急激に気圧が上昇し，高圧帯にはいって好天が訪れた。

一般に，偏西風が卓越した領域にはいると気圧と天気はよい相関を示すが，モンスーン中では両者の関係ははっきりしない。

4) 風

風は，BCでは予想よりもたいへん弱かった。平均値では，ほとんど1m/s以下である。BCが谷の中とはいえ，尾根状の台地に位置することも関係すると思われる。風向は東～南が卓越している。これは谷方向であるので，弱いながらも谷風が卓越していた。また，夜間の記録をみても山風成分が強化されることはほとんどない。

一方C3では，平均で1～5m/s程度の風が吹いたが，予想よりははるかに弱かった。それでも，気圧の谷に伴う強風は顕著に現れた。ただし，C5で強風が吹き荒れた10月15日や10月27日の記録を見ても，そのようすが顕著に現れていない。C3の位置まで上がれば上層のようすとよく対応した変化が得られると考えたが，ジェット気流の影響等を知るためには，7000m近くに観測点をおく必要がありそうだ。登山期間中のC3の最大風速は16.2m/s（10分平均風速の最大値）であった。また，風向については，南南西～南西方向が卓越している。雲の動きなどから上空の風は西風成分が多いが，C3の高さでは地形や局地循環の影響を受け，違う風系になっている。

C3以上では，正確な記録はないが，10月15日のC5，10月27日のC6などで平均で20m/s，瞬間で30 m/s以上の強風が吹いたと推測される。

また，ピークにかかる山旗雲から上層の強風が推定される。ピークに山旗雲がかった日は，9月24，29日，10月1，7，8，15，17，23，25，26，31日，11月1日である。雲の動きからの推定では，強風時には30m/sを越える風が吹いていたと思われる。

③ 特徴的な天候と天気予測

500hpa や300hpa 高層天気図等の天気図解析からみたナムチャバルワの気象については，日本気象協会　奥山巌氏の報告に詳しいので，ここでは，現地でみられた事例を中心に述べてみたい。

1) 偏西風トラフと亜熱帯ジェット気流

ヒマラヤの天気変化を追跡するには，500hpa の波動の谷を追跡するのがもっとも有効な方法である。これは，従来の遠征隊で何回も試みられ，有用な結果を得ている。特にネパールヒマラヤのプレ・ポストモンスーンの登山やカラコラムの夏期の登山での応用例は多い。

ナムチャバルワでも，偏西風トラフの経時変化を追跡することを天気予測の基本においた。図６（A）に東経95度での500hpa 高度断面の時間経過を示す。1988年のチョモランマ三国合同登山隊の報告で，現地の北と南の両方の谷が天気に影響を与えることが示唆されたので，今回も北緯30度付近（ナムチャバルワ付近）と，北緯40～50度付近の気圧の谷の動きを BC で毎日プロットした。

偏西風に伴う気圧の谷は，北緯40度付近では，9月から定期的に来襲している。また，波の持続期間も長く，東経95度付近を計14回近くも通過している。これらの変化は，図６（A）にも顕著な低圧期間として現れている。亜熱帯ジェット気流は今回の登山期間中，この付近にあることが多かった。

これに比較して，北緯30度付近を通過する気圧の谷は，9月13日～10月３日まで，小さな振幅はあるもののはっきりしない状態が続いている。谷の持続時間も短く，また，等高度線のみでは谷をはっきり認別することが難しい。弱い谷の通過は９月 17日，22日，26～27日にみられるが，天気にはっきり影響が現れたのは９月26～27日のみであった。

これは，モンスーン期の特徴であり，亜熱帯ジェット気流がヒマラヤ付近に南下するまで，谷の通過での天気判断ができない状態が続いた。

しかし，10月12日頃から北緯30度付近でも顕著な波動が認められるようになる。10月12～16日，21～24日などがこれにあたる。特にジェット気流が南下した10月22～25日は振幅が大きくなっている（図６（A））。この頃から，偏西風波動の振幅と天気が連動しだし，予測がだしやすくなった。

300hpa の平均高度は9600m で，亜熱帯ジェット気流の強風軸をみわけるよい目安となる。ここで，風速が70KT（35m/s）を越える日は，10月15日，22～26日となっている。この頃，亜熱帯ジェット気流がナムチャバルワ上空まで南下した。実際 C5での風速も強くなり，15日，27日には，平均で20m/s におよぶ強風を体験している。また，この時期は寒気の南下に伴い，気温の低下も顕著である。

しかし，登頂ステージの10月28日からは，風速が弱くなる。しかし，気温は低い状態を続けた。これは，亜熱帯ジェット気流の強風軸が一時的にナムチャバルワの南に下がったため現地は寒冷場にはいり好天となったと考えられる。

11月に入ると再び風速が増し気温低下，亜熱帯ジェット気流がナムチャバルワ付近に居座るようになる。

2)　日周期の天気変化

日周期でおきる気象現象のうち，昼間降水型と夜間降水型がみられた。昼間（特に午後）降水については日射に伴う谷風の卓越による対流性の雲の発達で説明できるが，夜間降水の原因がつかめずに苦しんだ。夜間降水では，夜半から日中にかけて中層雲が広がり夕刻までに一時解消するが，夜半に再び層状の雲が発生する。

顕著な夜間降水があったのは9月12～16日と10月18～25日である。このうち前者では，NOAAの画で山の南側にモンスーン気流の流入が認められ，大気が全般に湿っていたことがわかる。一方，後者の悪天時，NOAAの画では雲頂温度－10～－20℃の中層雲が山をおおっているのみで，山の南や西側は晴天域となっている。

この型の夜間降水は，気象衛星画像からは顕著な悪天の要因が見つからず，予測困難であろう。

天気図解析によると，このときの降水では上空の前線帯と西側の気圧の谷の存在が要因となっているということである。これについては，別稿（奥山，1993）で詳しく触れられている。

3)　サイクロン

登山期間中接近したサイクロンあるいは熱帯低気圧は，顕著なもので3回あった。9月28日，10月12～14日，10月22日である。このうち山を通過したのは10月12日からのものだけだが，他のものも影響こそでなかったが南側をぎりぎりで通過している。サイクロンには気象衛星の画像が有効であり，ベンガル湾からそのようすが追跡できた。

しかし，10月12日のサイクロンの動きは複雑であった。このサイクロンは10月7日にベンガル湾に現れた。その後，北西進し，10日にはインド中央部まで達してもう影響圏外と判断された。ところが，11日に偏西風にのり，急に向きを東にかえる。この頃より渦は二分し，そのうち東側の渦の雲が12日からナムチャバルワにかかるようになる。また，この渦の接近につれ，東側に南東からの湿った気流が入り込み，山は悪天となった。

最初の渦雲は13日までに通過するが，続いて西側の渦が14日に山の南を通過，再び悪天となった。サイクロンの進路については，300hpaの強風帯にもう少し注意していれば予測可能であったかもしれない。

他の2回の経路は，バングラディシュから北東方向にナムチャバルワ方向へ向かうものだが，北上するにつれ渦がはっきりしなくなり衰退している。

④　気象衛星NOAAの画像

今回の新しい試みとして，気象衛星NOAAの画像をBCで直接受信した。約3000kmにおよぶ広範囲の雲のようすを見られるこのシステムはたいへん有効で，サイクロンの追跡，偏西風波動に伴う雲の変動，日変化に伴う雲の変動等が把握でき，これと高層天気図をあわせることで精度の高い天気予測が期待できる。天気図だけでは読めない雲の変化をビジュアルにみられる利点はたいへん大きい。しかし，夜間の降水に代表されるような局地的な現象は，NOAAでは追跡できない。やはり，現地での観測と天気変化のパターン認識も重要である。

NOAA 画像は1日4回，赤外画像中心に解析し，可視画像を参考にした。

5. 雪氷特性

① 雪 崩

1991年10月16日，C4（6120m）上の斜面で，幅150m，長さ80m，深さ30～80cm におよぶ乾雪表層雪崩が発生し，登山隊の大西宏隊員が巻き込まれて遭難死するという惨事が発生した。この雪崩跡の写真を見ると，面発生の表層雪崩で，中規模だが破断面が顕著で，霜ざらめ雪による弱層が積雪内に広く発達，これに力が加わって発生したものと考えられる。前日までの気象状況を見ると，3日前の夜間に晴天で放射冷却の顕著な晩があり，この際，霜ざらめ雪が発生し，その後2日間の30cm にもおよぶ降雪で，斜面がたいへん不安定な状態になっていたものと考えられる。典型的な弱層の形成によって発生した雪崩であった。

そこで1992年の登山では，北海道大学低温科学研究所の福沢卓也氏の協力を得て，高所で雪温勾配を測定して無線により BC で回収し，事前に弱層の発生を予測する試みを行った。

方法は，夕刻から夜間に，雪面および雪面下2cm で雪温勾配を測定し，その結果に，実験から求められた次の基準を適応した（福沢，1991）。

○霜ざらめ雪の弱層形成パターン

- 雪面と雪面下2cm の温度勾配が　4°C/2cm：弱層が形成されている。
  3°C/2cm：弱層形成条件を満たしている。

○表面霜の弱層形成パターン

- 雪面温度と気温（1m）の差　5°C：表面霜形成条件を満たしている。
  7°C：表面霜形成条件をたいへん満たしている。
- 上の時の湿度　60%　：表面霜形成条件を満たしている。
  80% 以上　：表面霜形成条件をたいへん満たしている。

このように弱層が形成された後に新たに30cm 以上の降雪があると，たいへん危険な状態となる。

これから弱層の形成を予知し，その後の積雪状況によって雪崩に対する警戒を心がけるというものであった。限られた項目の無人観測であり，また，観測場所と雪崩斜面が異なるので，あくまでも一つの目安にすぎないが，この観測で2回ほど顕著な弱層形成条件があり，その後の降雪条件と相まって雪崩警戒に役立てることができた。

刻々と条件が変わる山の斜面において雪崩の危険を予知するのはたいへん困難であるが，これらの試みが雪崩を警戒する心構えを助長できたならば価値があったと考えている。また，現地での判断基準として最も有効な弱層テストを，今回ほど繰り返した遠征隊はなかったと思う。

また，1991年のアタック日に遭遇した流雪についてであるが，日本にはこのような用

語はなく中国独特のものと考えられる。現象としては，急斜面のルンゼ状の窪地を小規模な雪崩が連続的に流下し，これに加えて独立峰の独特の吹き上げの風が流れる雪を再び上部に運ぶことを繰り返す現象である。ナムチャバルワピークに強い西風が当たったときの風系については，NHK がCRC 総合研究所に依頼して行ったシミュレーション結果がある。これを見ると，風下側の下降流が卓越していること，ある高さから吹き上げの風（ローター）が発生することがうかがえる。降雪とこれらの複雑な風系が流雪現象を発生させている可能性が高い。

つまり，短時間にある程度の降雪があること，ピークに強風が吹き付けることが流雪発生条件である。1992年のピークアタック時には，これらの要素は全くみられず，流雪も発生しなかった。

② 氷 河

通常ヒマラヤの高山では，一回の降雪で降雪量がいちばん多いのは，6000m 付近といわれる。しかし，ナムチャバルワ峰では，山頂直下にも巨大なセラックやクレバスが存在し，氷河涵養域が山頂まで続いている。これは，山頂付近でいかに雪が降るかの証拠である。また，5500～7000m 付近まで続く氷河の氷厚は平均で100m 程度で，氷化深度は表面から約20m 付近とみられる。チベットの典型的な寒冷氷河と比較して，氷化深度がたいへん浅い印象を受けた。これは，この付近の積雪の特性に起因していると思われる。また，ルート中の氷河の流動もかなり速く，ルート上で懸垂氷河の崩壊がたびたび発生した。多いときは一日に10回にもおよんだ。

また，ルート上のクレバスの変化も激しかった。

さらに氷河末端が近年大きく後退しているようだ。今回の登山で氷河の写真資料が数多く揃ったので，今後過去の写真と比較検討してみたい。

③ 融 雪

7000m 以上のロックバンドや南壁で長さ５m 以上におよぶ巨大なつららを多数見ることができた。つららは，融雪がないと出来得ない。気温からいえば融雪は考えにくいが，高山の強烈な短波放射によりかなりの量の融雪が進んでいると考えられる。

6. おわりに

今回の登山隊は，現地での気象観測において，気象ロボットによる上部気象のリアルタイムモニターや気象衛星画像の直接受画等の新しい試みを実施した。最近のテクノロジーの発展には著しいものがあり，これらの機器もここ数年のうちに開発されたものである。登山隊として気象 FAX を持ち込み，高層天気図を受画する隊は増加しているが，これに加えて今後は，現地での特に上部での気象観測とリアルタイムモニター，気象衛星画像の直接の受画が一つの方向となろう。

ナムチャバルワ登山における環境保護

梶田　正人

はじめに

自然をあるがままの姿で残す，山を汚さない，持ち込んだゴミは全て持ち帰る。環境保護が叫ばれて久しく，それなりの効果は出ていると思われる。

しかし，山にはいれば，少なからず自然を破壊し，山本来の持つ姿を大なり小なりかえてしまう。山を汚したくないなら，初めから山登りなど，やめておけばよい。

もとより人間の営みは，自然の対局に位置するがゆえに，自然を遊びの対象とすることで，破壊を続けてきた。

山に登りながら自然保護を唱える活動には，それ自身矛盾をはらんでおり，take in take out とセンチメンタル，かつまた一種新興宗教的なお題目を唱えながら，山に登り，環境破壊に心を痛め，自らが散らかしたゴミを自ら片づけながら無上の法悦にひたることにたいしては，必要以上に進化した人間特有のマゾヒズムを感じないではいられない。

こんなことを思いながらも，今回の原稿を引き受けたが，私としては，筆を曲げることなく，思ったことと，事実を述べてゆきたい。

今回は91年の経験から，ゴミになるものはなるべく持ち込まないよう，日本での梱包段階で，食糧の包装は最少限にしたが，便利さを追求するがゆえに日本のインスタント食品を使う意義があり，その根源となる石油化学製品の包装が，ナムチャバルワの山麓に散乱したのは，免れざるを得ない必然と言うべきか。

チベット族，漢族とも中国側隊員には環境保護の意識がなく，ましてや現地の住民，民工たちに環境保護を説くのはそれこそナムチャバルワに登頂するより困難であり，道中アメ，せんべいの包紙，吸殻等が散乱したのはしかたの無いことと諦め，撤収時に日本側隊員が片づけながら下山し，目につくものだけは全て回収することで，ナムチャバルワへの義理を果たした。

BC，C1

BCには日中双方の隊員，報道隊，低所協力員の生活領域であり，常に30人前後，多いときには60人にものぼる人間が飯を食い，クソをたれ，FAX，コンピューターまで扱い，その上，接地当嘎，格嘎等の現地住民が日々ポリ袋と空き瓶を求め，徘徊しているわけだから，膨大なゴミが出るわけです。

ゴミ処理は可燃物については100％焼却するということで，２年越しの「焼却場」は常に満杯，周辺には常にゴミが散乱していた。

現地住民の役立つ物を見つけると，燃え盛る炎も顧みず，我先に火の中に飛び込んでゆくその姿には，地獄絵図と言うよりも文明人の価値観を超越した神の意志を感じたが，

周りに散らばるゴミには神でさえも手の下しようが無く，なるがままに任せ，最後の審判を待つしかないようであった。

小島ドクターの出した医療廃棄物もついにそのゆくえはわからず，近い将来東チベットに原因不明の奇病が蔓延するかもしれない（ドクターの説明によれば，廃棄物は全て焼却，使えるものは現地病院に寄付し，２年連続で現地住民への医療活動を行った小島ドクターの銅像が建つ予定とか）。

休養日には隊員総出で大掃除を行い，BC 周辺半径200m に散乱する人糞にまみれたトイレットペーパーを，そのために特に日本から持参した金バサミで集め，焼却した時に漂った臭いには，遠い昔への郷愁を感じさせるものがあった。

ローサンダワ総隊長もゴミの回収には腐心され，現地の子供たちに不燃ゴミ１KG につき１元を与えるとの法外な賞金（民工の BC－C2の手当が１元／KG）を出し，多くの不燃ゴミを回収したが，あまりの出費に恐れをなしたのか，その試みも１日で終わってしまった。

衛生観念，環境保護の観点から見れば，チベット人と大差ない私であるが，神が人間に与えたもうた文明の源"火"を何の躊躇も無く使えることだけがナムチャバルワにとっての救いだったかもしれない。

荷上げの中継のため C1には永く滞在し，暇にまかせて燃やせるものは全て燃やし尽くした。

幸い燃料となる薪は豊富で，運動不足解消のかたわら集めた薪に充分火がまわったところで，日々出るゴミをのせ，全てが灰になるまで見守った。たとえ，それら全てが有毒ガスと化したにしても，ヒマラヤの清烈な大気はいかばかりも動じる気配は無かった。

C2以上でのゴミ処理

今年もまた C2で延べ１カ月以上も生活することとなった。アタック前の休養時には隊員，高所協力員，報道隊員でにぎやかになったが，平時は NHK の東野カメラマン，読売の秋元カメラマンと数人の高所協力員がひっそりと生活し，アルコールの消費量でしか，自らの存在と体調を確認すべが無い毎日であった（今年は小島ドクターは酒調達ため支援隊の出迎えに BC へ下る途中，股関節を痛め，ついに C2へは戻らなかった）。

可燃ゴミは乾かしながらこまめに焼却するつもりであったが，敬虔な仏教徒であるチベット族にとっては，炎と煙を立ち上がらせることは，それこそ仏を恐れぬ行為であり，仏罰など恐れぬ私であるが，立場上，彼らの要求を無視するわけにはゆかず，仏の意志か天の意志かは知らないが，折からの大雪のため，一部のゴミが80cm の根雪の下に埋もれてしまい，最後まで日の目を見ることがなかった。

雪の後はゴミ集積地の場所を変え，無事登頂後，ガソリンと EPI ガスをお供えに，天まで届くかのような炎を上げ，仏様に感謝の意を表すことができた。

C2では C3以上のキャンプから下りて来るゴミを可燃物（食料の包装，生ゴミ）と不燃物（空き瓶，空き缶）を分別，不燃物の荷下ろしには，登りと同じく１元／KG が民工に支払われ，稼ぎのためには重さを厭わない彼らにより，途中で消え去ることも無く

無事BCまで送り届けられた。

上部キャンプで出るゴミの主流はEPIの空き缶であり，いかにも頑丈そうなその空き缶は潰すこともままならず，高所協力員が頻繁に雪崩が発生する危険なルートを，生命の危険を省みずプラスチックボックスに詰めて荷下げしたのは，プラスチックボックスの再利用のもくろみがあったにせよ，環境保護への貢献度において，賞賛に値する。

これらの空き缶はキーカルまで下ろされた後，重廣隊長の一喝のもと，トラックに積まれ，登山隊ともども，祝福の提灯行列と喝采の中，600kmの道のりをラサに帰ることとなった。

まとめ

幾ら事前に対策を講じても，おてんとう様だけはどうにもならず，また現地人の習慣を無視してまで，こちらの論理を押しつけることはできない。

モラルの高い日本人（今回の登山隊のメンバーのような？）だけの登山隊で，ふんだんに札ビラを切れるなら，ゴミを全て持ち帰ることも可能だろう。

自ら文明人と思っている我々とは全く違った常識の中で生活している人々の中では，理想論のみでは何もできず，環境保護という理想を完璧に実現するためには，悲しいことながら，万能の価値を持つ金銭が最も効力を発揮することに気づかなければならない。

最後に，環境保護面でのナムチャバルワ合同登山隊に対する可否は，次に入るであろう登山隊による評価を待ちたい。

医　療　報　告

小島　彰

私は，1991年，1992年と２年続けて日中合同ナムチャバルワ登山隊のチームドクターとして参加しましたが，今思い返せば，医師としての仕事はほとんどしていないと思います。もちろん，２カ月半を２回に渡り，登山隊と共に唯一の医師として生活した訳ですから，多種多彩な出来事を経験しました。やはり最も衝撃的であったのは，１年目の大西隊員の雪崩による遭難事故の時です。

当時，私はBCに在り，現場のようすはほとんど解らない状態でした。高見登攀隊長からの無線連絡で，現場に数人の日本人がおり，既に心肺蘇生術を施行していること。心臓マッサージと人工呼吸の回数の比から，一応知識のある者が蘇生術を行っていること。無線の声の調子から，蘇生術を行うことが，施行者にとって肉体的にもかなり大きな負担であること。

そして，雪崩の二次遭難は大丈夫なのであろうか？　こんなことを，私は遙か彼方安全なBCで感じていました。そして，私の医師としての仕事は，無線での角膜反射等の確認の指示と死亡の宣告！　２日後にC2で，雪が舞う中，死体検案をしたときのことはたぶん一生忘れないでしょう。

１年目には，また手足の指に凍傷を起こしてしまった隊員が数人でました。これはアタック時の悪天候の為ですが，日本人隊員・中国人隊員それぞれ１名がかなり重症で，プロスタグランジン（PGE1）の静脈内点滴を施行しました。残念ながら手術をしなければなりませんでしたが，それなりの効果はあったようで，これはParadoxicalにも副作用で確認されました。

すなわち，PGE1を投与したため動脈が開き（これは凍傷の部位には極めて有効であるが）皮膚から熱が逃げ，寒気を自覚したのです。このように点滴は効果も大きいのですが，長期間に渡り実行できません。１年目は経口のプロスタグランジン，あるいはプロスタサイクリン製剤を持って行かなかったのですが，これらの製剤は是非とも必要だと実感いたしました。

２年目も，登山自体は成功するまでにかなり難儀をしましたが，隊員の病人はほとんど出ませんでした。ただ，アタック時，時間的にも，距離的にも，また高度の上からもかなりハードな行動となったためか，日本人隊員に１名下山時体調を崩した者がいました。症状が咳嗽と喀痰であったため，重廣隊長の機転でアダラート（カルシューム拮抗剤）を服用させ，私が診察した時には肺水腫を思わせるような聴診所見もなく，特に治療の必要もありませんでした。

アダラートといえば報道隊員に１名，疲労のための一過性の高血圧を認めた者があり，一度服用してもらいました。この薬は高地肺水腫の予防にもなり，高血圧にも有効であ

別 表 1-1

抗生剤		
マドレキシン	200	明治製菓
オーグメンチン	200	明治製菓
ホスミシン	200	明治製菓
ケモサイクリン	200	明治製菓
ミオカマイシン	200	明治製菓
タリビット	500	第一製薬
フラジール	200	塩野義製薬
解熱鎮痛剤		
ボルタレン(po)	500	日本チバガイギー
ボルタレン(坐)	500	日本チバガイギー
フェナゾックス(po)	200	明治製菓
ポンタール	500	三共
感冒薬		
PL-G	1000	塩野義製薬
ダンリッチ	1000	住友製薬
セデスG	500	塩野義製薬
トリルダン	300	塩野義製薬
ポララミン	300	シェリングプラウ
鎮咳薬		
メジコン	1000	塩野義製薬
レスプレン	500	中外製薬
メプチン	100	大塚製薬
スロービット	200	日本アップジョン
リンコデ	100	
胃腸薬		
新三共胃腸薬	1000	三共
エクセラーゼカプセル	500	明治製菓
ユーワンS	700	明治製菓
ガスター	500	山之内製薬
オメプラゾン	100	吉富製薬
ナウゼリン(PO)	300	協和醗酵工業
ナウゼリン(坐)	100	協和醗酵工業
アンチビオフェルス(粉)	1000	明治製菓
下痢止め		
フェロベリン	100	扶桑薬品工業
ロペミン	300	大日本製薬
下痢剤		
プルセニド	100	三共
ビタミン剤		
ポポンS	1000	塩野義製薬
ビタメジン	1000	三共
ビタミンE	1000	明治製菓
鎮痙剤		
スパリコン	100	山之内製薬
ブスコパン(PO)	300	田辺製薬
ブスコパン(坐)	200	田辺製薬
利尿剤		
ラシックス	100	ヘキスト・ジャパン
ダイアモックス	300	武田薬品工業
末消循環改善薬		
ドルナー	400	山之内製薬
睡眠剤		
ハルシオン(0.25)	200	日本アップジョン
トローチ		
SPトローチ	780	明治製菓
複合トローチ	1200	明治製菓
Ca 拮抗薬		
アダラート	200	バイエル
狭心剤		
ニトロペン	50	日本化薬
駆虫剤		
コンバントリン	300	ファイザー製薬
外用薬		
リンデロン DPoint	20	塩野義製薬
リンデロン VGoint	80	塩野義製薬
リンデロン Voint	20	塩野義製薬
ロコイド oint	30	鳥居薬品
ケナログ oint	30	スクイブ
マイコスポール oint	20	バイエル
ヒルロイド oint	100	マルホ
カナマイ oint	100	明治製菓
リンデロン Adrip	100	塩野義製薬
フラビタ drip	100	山之内製薬
パニマイ drip	100	明治製菓
モムホット	20	日本火薬
モーラス	30	久光薬品
デムコ oint	20	明治製菓
痔 薬		
ボラギノールN(坐)	200	武田薬品工業
強力ポステリザン	100	マルホ
テープ		
ミリスロールテープ	50	日本火薬

別　表　1−2

注射薬		
1% キシルカイン	30	藤沢薬品工業
ラシックス (15 mg)	20	ヘキスト・ジャパン
セジラニド (0.4 mg)	10	三共
ソセゴン (15 mg)	10	山之内製薬
硫アト (0.5 mg)	10	田辺製薬
ミノペン (100 mg)	10	明治製菓
ネオフィリン (250 mg)	30	エーザイ
メイロン (7 %, 20 ml)	50	大塚製薬
デガドロン (8 mg)	10	万有薬品
アミカシン (100 mg)	10	明治製菓
プレドニン (10 mg)	20	塩野義製薬
ドブトレックス (100 mg)	10	塩野義製薬
メイセリン (1 g)	10	明治製菓
ノルアド (1 mg)	10	三共
ホリゾン (10 mg)	10	山之内製薬
ボスミン (1 mg)	20	第一製薬
リドカイン (1000 mg)	5	藤沢薬品
20% ブドウ糖液 (20 ml)	100	第一製薬
生理食塩水 (20 ml)	100	大塚製薬
ソルメドロール (500 mg)	10	日本アップジョン
パンスポリン (2 g)	10	武田薬品工業
プロスタディン	10	小野薬品工業
プロスタグランディン I2	20	小野薬品工業
RL 液 (500 ml)	10	大塚製薬
5% ブドウ糖液(500 ml)	10	大塚製薬
ST 3 液	10	武田薬品工業
メテルギン (0.2 mg)	10	三共
ブスコパン (20 mg)	30	田辺製薬
アタ P (25 mg)	30	ファイザー製薬
強力ミノファーゲンC (20 ml)	30	ミノファーゲン
ソセゴン (30 mg)	20	山之内製薬
5% ブドウ糖液 (20 ml)	100	第一製薬
その他		
ウロパック	2	
バルーン	5	
弾力包帯・包帯	22	竹虎
バストバンド	2	竹虎
シーネ	2	竹虎
ソフラチュール	40	森下・ルセル
キシロカインゼリー (30 ml)	10	藤沢薬品
メンソレータムリップクリーム	100	ロート製薬
H 焼け止めクリーム	100	カネボウ
ハーブキャンディー	100	山之内製薬
注射筒 (50 cc)	10	
(20 cc) (10 cc)	各20	
(5 cc) (3 cc)	各20	
注射針 (18 G)	100	
(21 G) (23 G)	各100	
トンボ針 (21 G) (23 G)	各30	
エラスタ (18 G)	10	
(20 G)	15	
(24 g)	15	
延長チューブ	20	
テルモ点滴セット	40	
喉頭鏡	1	
挿管チューブ	4	
三方活栓	10	
ナートセット	1	
縫合糸	20	
IVH セット	2	
駆血帯	10	
消毒薬		
イソジン液	10	明治製菓
イソジンガーグル	30	明治製菓
ヒビテン液 (5%, 500 ML)	3	
カナマイスプレー (600 mg)	4	
マキロン (70 ml)	20	山之内製薬
プリンペラン (10 mg)	20	藤沢製薬
カッドバン (M) (L)	600	竹虎
粘着性伸縮包帯	10	竹虎
滅菌ガーゼ	100	竹虎
粘着テープ	5	竹虎
清潔手袋	10	
鼻チューブ	2	
ディスポメス	7	
カテランシン (23 G)	20	
マーゲンチューブ	2	
ガーゼ	18	
有窓	1	
無窓	3	
ケミカルシーツ	2	

別 表 2

個人用薬剤

1)	ポポンS	総合ビタミン剤。1日1錠。白い丸い錠剤。
2)	ボルタレン錠	鎮痛剤。頭痛，発熱，その他の疼痛。1回1錠，1日2〜3回。黄色い錠剤。
3)	ボルタレン座薬	2) 無効の時使用するロケット型の薬剤。Voltaren と記載されている。
4)	ブスコパン錠	腹痛時（差し込むような痛み）。1−2錠服用。
5)	ブスコパン座薬	4) 無効の時使用するロケット型の薬剤。Buscopan と記載されている。
6)	PL−G	風邪薬。1日3回，1回1包。白い粉薬 PL と記載されている。
7)	ダンリッチ	風邪薬。1日2回，1回1カプセル。黒と透明のカプセル。鼻水に良く効く。
8)	メジコン	鎮咳薬。1日3回，1回1錠。小さい白い錠剤，Medicon と記載されている。
9)	ユーワンS	抗潰瘍薬。上腹部の痛み。1日3回，1回1包。粉薬，緑色の記載有り。
10)	ガスター	抗潰瘍薬。9) 無効の時，1日1〜2回服用。
11)	ラシックス	利尿剤。むくみ，白−赤い大量の痰を伴う咳を認めるとき。1日1回，1回1錠。
12)	ロペミン	下痢止め。12) 無効の時。1日2回，1回1カプセル。Lopemine と記載されている。
13)	リンデロンVG	かゆみ，かぶれ等に使用する軟膏。橙色のキャップ。
14)	ヒルロイド	軽い凍傷，打撲部に使用する軟膏。出血部は禁忌。赤いキャップ。
15)	リンデロンA点眼	雪目に使用する点眼薬。1日3〜4回点眼。
16)	パニマイ点眼	異物等が入り，目に炎症が起こった時に使用。1日2〜3回点眼。青いキャップ。
17)	フラビタ点眼	ビタミン入りの普通の目薬。黄色いキャップ。

注） 各薬剤は補充が可能です。不足の時は小島まで連絡下さい。
余り無理をせず，良くならない時，不安の時は気軽に相談して下さい。
個人医薬品としては，この他にカットバン3枚，滅菌ガーゼ1枚を入れておいた。

り，遠征隊には是非ほしい薬です。

この他に，遠征隊に是非ほしい薬としては抗生剤・解熱鎮痛剤・感冒薬…と多々ありますが，1992年に私がBCに持ち込んだ薬品，並びに医療器具を**別表1**にまとめておきます。これらの薬は，BCを含めた各キャンプに分配しましたが，それら以外にも**別表2**に示した説明書と共に各個人に少量ずつ持たせるようにしました。

別表1をみれば解るように，種類も実に多いけれども，各薬剤の数量がかなり多い感じがすると思います。まさにその通りで，大方の物は余り，ラサの病院と，北京の日本大使館に寄付しました。その中で，ビタミン剤・トローチ・感冒薬・胃薬・カットバン・ハーブキャンディー・リップクリーム等はほぼ無くなりました。

ビタミン剤やトローチが無くなったのは，現地の人が何か理由をつけて薬を貰いに来るからでした。BCからC2まで荷物をしょって5時間程度で到着してしまう民工（ポーター）がみな，風邪だから薬をくれ，と言ってくるのだから無くなっても仕方がありません。いずれにしても，医師としての大方の仕事は（元気な）チベッタン相手であり，忙しかったとはとても言えません。

ただ，2年目にはBCにて自転車エルゴメーターを使っての運動負荷の実験を，登山隊員・報道隊員の協力を得て行いました。結果をかいつまんで言えば，

1) 登山隊員は3500mもの高度にあるBCですら優秀な運動能力を持っていること。
2) しかし，過酷な登山活動でその運動能力は登山終了時にはかなり低下すること。
3) 3500mに滞在するだけで報道隊員や支援隊員の有酸素運動能力は低下すること。

というものでしたが，この実験だけが少しはドクターらしい仕事かな，と今からは思えます。

取り留めの無い話を書き，医療報告のつもりが随筆になってしまいましたが，どんな医薬品が必要か？　だけでも参考になれば幸甚です。

装 備 報 告

佐 藤 正 倫

ナムチャバルワ登山に1990年の偵察を含めて，足かけ3年の長期に渡る登山となってしまった。

ただし，回数を重ねるに従って，山の性質もおぼろげながら理解することができた。1992年については，実情に応じた装備の準備および適切な消化ができたのではないかと思う。

しかし，BC周辺で使う物品に関しては，使用する低所協力員の数の移動と'90年以来のデポの集積などがあって，若干余分と思える物もあった点は否めない。

基本的な考え方として以下の点に留意し，装備の調達を行った。

1. BCまでの露営用具，炊事具に関しては，すべて中国側で用意し，燃料はガソリンを主体とする。
2. BCに無線の電源用としての発電機を用意し，隊員の各テントにも照明用として流用する。
3. C1以上の登山用テントに快適な生活ができるゴアテックステントとし，C1，C4以外については6人用テントに3人が生活するようにする。
4. C1以上の燃料としてはガスを用意し，ガスコンロ，ガスランタンを使用して生活する。
5. ラパ口，C4上部からはC5にかけてのクレバス帯，C5からC6への下り，C6からビバークサイトにかけては必要な所にロープを固定し，登降の安全を図る。
6. 個人装備に関しては，ミトン，ソックス，特に凍傷を意識してのポーラーフリースやWフェースのウールソックス等を使用した。

   また，プラスチック製登山靴の使用とともに，長時間の歩行やビバーク等を考慮してシンサレート入りのオーバーシューズを使用した。
7. ナムチャバルワの広大な雪の稜線を辿ることになり，強風や降雪によってルートを見失うことも多かったので赤布を多用した。

   実際，荷上げを終えての午後のC4～C3の下りではホワイトアウトになることも幾度かあり，間隔の狭い赤旗に助けられることが多かった。

以上，ポストモンスーンの7000m峰ということもあって，特に新しい装備や特殊な装備を用意しなかった。

高所における装備は過分な物よりは，使いこなすことのできる，あるいは信頼のおける常日頃使用している装備で充分であった。

今後は装備の改良よりは現状の装備を使いこなす体力，技術の習得のほうが必要ではないだろうか。

個人装備リスト(1)

NO	品　名	日本人隊員	中国人隊員	高所協力員	カメラマン	BC要員(総指揮含)	ラサ要員	低所協力員	合　計
		6	6	12	1	17	5	10	57
1	ピッケル	6	6	12	1				25
2	アイゼン	6	6	12	1				25
3	ピッケルバンド	6	6	12	1				25
4	アイゼンバンド								
5	ハーネス	6	6	12	1				25
6	安全環付カラビナ	12	12	24	2				50
7	スリングテープ	12	12	24	2				50
8	補助ロープ6 m/m	6	6	12	1				25
9	エイト環	6	6	12	1				25
10	アタックザック	6	6	12	1	17	5		47
11	背負子	6	6	12	1			10	35
12	テルモス	6	6	12	1	17	5		47
13	水筒	6	6	12	1	17	5		47
14	ヘッドランプ	6	6	12	1	17	5		47
15	ユマール	6	6	12	1				25
16	ゴーグル	6	6	12	1				25
17	コンパス	6	6	12	1	17	5		47
18	ナイフ	6	6	12	1	17	5		47
19	食器セット	6	6	12	1	17	5		47
20	スプーンセット	6	6	12	1	17	5		47
21	小物入れ	6	6	12	1	17	5	10	57
22	筆記具	6	6		1	17	5		35
23	リップクリーム	6	6	12	1	17	5		47
24	T　シャツ	6	6	12	1	17	5	10	57
25	個人用キャンパス袋	6	6	12	1	17	5		47
26	ウエストバック	6	6	12	1	17	5		47
27	爪切	6	6	12	1	17	5		47
28	ストック	12	12	24	2	17	5	10	82
29	スポーツソックス	12	12	24	2	34	10	20	114
30	スポーツタオル	6	6	12	1	17	5		47
31	登山靴	6	6	12	1				25
32	防寒軽登山靴	6	6	12	1	17	5		47
33	ジョキングシューズ	6	6	12	1	17	5		47
34	トレーニングウェア・上下	6	6	12	1	17	5		47
35	登山ズボン	6	6	12	1	17	5		47
36	登山シャツ	6	6	12	1	17	5		47
37	下着・ウール	12	12	24	2	17	5		72

個人装備リスト(2)

NO	品　名	日本人隊員	中国人隊員	高所協力員	カメラマン	BC要員(総指揮含)	ラサ要員	低所協力員	合計
		6	6	12	1	17	5	10	57
38	下着・クロロファイバー	6	6	12	1	17	5		47
39	ロングソックス	12	12	24	2	17	5		72
40	ソックス	12	12	24	2	17	5		72
41	手袋(毛5本指)	12	12	24	2	17	5		72
42	ジャンパー	6	6	12	1	17	5		47
43	ヤッケ	6	6	12	1	17	5		47
44	オーバーズボン	6	6	12	1	17	5		47
45	オーバーミトン	6	6	12	1				25
46	インナー手袋・シルク	6	6	12	1				25
47	インナー手袋・ウール	6	6	12	1	17	5		47
48	雨具・上下	6	6	12	1	17	5		47
49	ロングスパッツ	6	6	12	1	17	5		47
50	オーバーシューズ	6	6	12	1				25
51	スカーフ	6	6	12	1	17	5		47
52	シュラフカバー	6	6	12	1				25
53	ウレタンマット	6	6	12	1	17	5	10	57
54	羽毛シュラフ	6	6	12	1	17	5		47
55	羽毛服	6	6	12	1	17	5		47
56	羽毛下着・上下	6	6	12	1				25
57	羽毛ベスト	6	6	12	1	17	5		47
58	羽毛ミトン	6	6	12	1				25
59	羽毛シューズ	6	6	12	1	17	5		47
60	P.P パンツ	12	12	24	2	17	5		72
61	綿パンツ	12	12	24	2	34	10	20	114
62	綿シャツ	6	6	12	1	17	5	10	57
63	高所帽	6	6	12	1				25
64	日出帽	6	6	12	1	17	5	10	57
65	日除け帽	6	6	12	1	17	5		47
66	サングラス	6	6	12	1	17	5		47
67	ガスライター	30	30	60	5	85	25	50	285
68	羽毛ズボン	6	6	12	1	17	5		47
69	長靴	6	6	12	1	17	5	10	57
70									

各キャンプ荷上表

	B・C 3520 m	C 1 4350 m	C 2 4800 m	C 3 5600 m	C 4 6200 m	C 5 6900 m	C 6 6700 m	合　計
最大収容人員		12	20	20	9	8	8	
延べ滞在人員	186	72	320	250	66	44	56	994
露営具		82	174	53	40	48	37	434
（雑具含む）	434	434	352	178	125	85		
食糧	240	117	618	440	112	87	104	1718
（ガスボンベ含）	1718	1478	1361	743	303	191		
燃料	248	96	427	326	80	59	67	1303
（ガスボンベ数）	1303	1055	959	532	206	126		
登攀具			99	28	19	14	88	248
	248	248	248	149	121	102		
通信機関係	100	7	65	30	6	9	6	223
	223	123	116	51	21	15		
医療用品	72		32					104
	104	32						
酸素器具				30		20		50
	50	50	50	50				
写真機材	10		30	10	5	5		60
	60	50	50	20	10			
気象観測機材	50			50				100
	100	100	100					
個人装備								1500
	1500							
各キャンプ重量	1972	206	1018	641	182	183	235	4437
累積重量	4437	2465	2259	1241	600	418		
読売新聞社								2080
ＮＨＫ								727
総合計								(3765) 6200

キャンプ別荷上げ重量表（登攀具）

キャンプ / 品名	B・C 3520 m	C 1 4350 m	C 2 4800 m	C 3 5600 m	C 4 6200 m	C 5 6900 m	C 6 6700 m	B・P 7200 m	合 計
フイックスR			12						12
9 m/m×50 m			33.6						33.6
フイックスR						1			1
10 m/m×200 m						15.0			15.0
フイックスR			9	2	4		15	5	35
8 m/m×50 m			22.5	3.0	10.0		37.5	12.5	85.5
登攀用R								2	2
9 m/m×50 m								5.6	5.6
登攀用R			1					4	5
7 m/m×60 m			2.7					10.8	13.5
スノーバー			5	5	5	15	30	5	65
			2.0	2.0	2.0	6.0	9.0	1.3	22.3
アイス ハーケン			31			10	10	20	71
			4.7			1.5	1.5	3.0	10.7
ロック ハーケン			10					30	40
			0.7					2.1	2.8
シュリンゲ			10		5	5	20	10	50
6 m/m×1•5 m			1.0		0.5	0.5	2.0	1.0	5.0
テープ シュリンゲ			13	5	5	10	10	4	47
15 m/m×1•3 m			1.3	0.5	0.5	1.0	1.0	0.4	4.7
カラビナ			22	3	5	30	20	10	100
			1.3	0.2	0.3	1.8	1.2	0.6	5.4
赤 はた			20	50	50	30			150
			2.0	5.0	5.0	3.0			15.0
			219.1	147.3	136.6	118.3	89.5	37.3	219.1

テント明細

	登山隊員	スタッフ	高所協力員	合　計
	隊　長×2 登攀隊長×2 隊　員×8	マネージャー×2 医　師　×1 通　訳　×2 技　師　×2 炊事員　×3 運転手　×1	12	35
C6 6700 m	ツェルト×4 6人用　×2			ツェルト×4 6人用　×2
C5 6900 m	6人用　×3			6人用　×3
C4 6200 m	6人用　×2		6人用　×1	6人用　×3
C3 5600 m	4人用　×2 6人用　×4		6人用　×1	4人用　×2 6人用　×5
C2 4800 m	4人用　×2 6人用　×4	4人用　×2	6人用　×2	4人用　×4 6人用　×6
C1 4350 m	6人用　×2		6人用　×1	6人用　×3
BC 3520 m	4人用　×2 6人用　×4 オーナロッジ×2 中国テント×2	4人用　×2 中国テント×1	中国テント×1	4人用　×4 6人用　×4 オーナーロッジ×2 中国テント　×4
合　計	ツェルト×4 4人用　×6 6人用　×21 オーナロッジ×2 中国テント×2	4人用　×4 中国テント×1	6人用　×5 中国テント×1	ツェルト×4 4人用　×10 6人用　×26 オーナーロッジ×2 中国テント　×4

食糧・燃料報告

山本　篤

1. 基本的な方針について

1991年，92年と２年続けて食糧および燃料の係を担当した。長期にわたる高所登山において食事は言うまでもなく，唯一の楽しみであり，火はその生活上の欠くことのできない手段である。よって，各隊員から様々な意見，不満が出たが，係としては不評であった1991年の反省をもとに，以下のように92年の基本方針を挙げた。

① 重量は１人１日，燃料込みで1.5kgを目安とする。

② C1，C2を中所食，C3～C6を高所食とし，アタック食は別に用意する。

③ 主食(米)は，中所食では生米，高所食では日本の上質米を加工したアルファ米※を使用する。

※ 91年は高所食において，レトルトのパック米を使用したが，一度凍ると味が落ち，ふかすのに多量の燃料を必要としたため。

④ 中所食までは，できる限り生鮮品を使用する。高所食においては，91年に引き続きフリーズドライ製品を使用するが，量を少なめにする。

⑤ 実際のカロリーより食べ易さを重視し，バラエティに富んだ内容にする。メニュー数は，中所食朝夕各９種類，高所食朝夕各８種類，昼食は中所，高所共通とし10種類のレーションを用意する。

⑥ 各人の嗜好に合うよう，調味料も多種類のアイテムを用意し，C3以上では各テントに配置する。

⑦ スペシャル食の配置は，C6＝15kg，C5＝15kg，C4＝15kg，C3＝45kg，C2＝100kg，BC＝225kg（酒込み）とする。

⑧ 使用するアイテムは，それぞれできる限り高級，高品質なものを揃える。

⑨ 中国からの要望により，主食の比率は麺類を３，米類を２とする。

⑩ 燃料の使用量は，１人１日１コ（EPI小カートリッジ）を目安とし，照明用としては３人１日１コを目安とする。また，C3以上ではより気化しやすいエクスペディションモデルを使用する。

2. 食糧メニュー表

（1） 中所食　C1，C2　①重量比　朝：昼：夕＝350g：300g：450g　②目標摂取カロリー 3000Kcal／day

（2） 高所食　C3～C6　①重量比　朝：昼：夕＝250g：300g：350g　②目標摂取カロリー 2000Kcal／day

	朝	昼	夜
中所食（C1～C2）	1　力ラーメン 2　うどん 3　ビーフン 4　焼ソバ 5　雑煮 6　朝定食 7　ぞうすい 8　すし 9　赤飯	A　カロリーメイト，ビーフジャーキー B　カロリーメイト，ドライフルーツ C　オールレーズン，ピットイン D　オールレーズン，ようかん E　ネイビー，ナッツ F　ネイビー，コンデンスミルク G　クラッカー，チョコレート H　クラッカー，ピットイン I　エンゼルパイ，グミデザート J　ビスケット，エナジーバー	1　ラーメンライス 2　スパゲティ 3　焼そば 4　うな丼 5　カレー(シチュー) 6　肉野菜いため 7　マーボ春雨 8　石狩煮 9　カクステーキ
高所食（C3～C6）	1　ラーメン 2　お茶づけ 3　朝定食 4　雑煮 5　クラッカー 6　チーズスープ 7　雑炊 8　バターもち	A～J	1　ラーメン 2　スパゲティー 3　カレーうどん 4　レトルト丼 5　カレー(シチュー) 6　マーボー春雨 7　ジフィーズ 8　マウンテンハウス

3．準備面について

今回のナムチャバルワ登山においては，91年より，食糧係の基本方針として，とにかく“おいしい物，食べやすい物”ということが，大前提として挙げられた。そのため，隊長からの指示で，各隊員がそれぞれ良いと思う素材を持ちより，メニューを作成するということから始まった。

本来ならばそれで良い食糧計画ができるはずであったが，係の者の不慣れな面，また決定的であった発想の貧困さから91年は，従来となんら変わりばえのしない内容となり，全般に不評であった。そこで92年は，前年好評であった物を中心に，また生鮮品など現地の状況を加味し，計画を再考したことで改良がなされたと思う。

日本側の負担はC1以上の，日本，中国，および報道分であったが，スペシャルを含めて収集するアイテムが膨大なものとなり，その寄贈依頼社数も50社を越えた。そのため，作業は係の者だけではどうにもならず，事務局員も大いに忙殺された。厳しい資金繰りの中，やむを得ぬことかもしれないが，今後は主食などの大物と確実に寄贈が得られる所にのみ依頼を行い，細かな物は一括してスーパーなどに交渉して安く購入するのも一案であると思う。そうすることにより，納品の遅れで梱包作業に支障をきたすこともなく，またその後のアフターケアの軽減など，トータル面ではプラスになるのではないかと思う。

燃料の準備については，BC，C1分は91年デポ分を充当し，92年に日本で用意した物は，

C2より上部の分であった。C3より上部の物は，食糧で抱き合わせとなり，それぞれのブラカートンに，食糧９人日分，ガスカートリッジを12，3個入れ，多少の重量調整を行うことで，15kgの制限重量に合わせることができ，都合がよかった。

梱包作業は，量が多いことに加え，納品がまちまちで，当初は思うように進まなかったが，各大学山岳部員等の献身的な協力により，予定期間内に終了させることができた。

4. 実際面について

日本側が負担するC1以上の食糧に関しては，飲料も含め全てタクティクスに従い，３人分を基本としたレーションにしたので，心配された中国隊員の使い過ぎもなかった。スペシャルは，多くのアイテムをレーションにせず単体で用意したので，BC，C2など人の多く集まる拠点ではいろいろな物を作ることができ，この点は91年の反省が生かされた。またスペシャル食の内容が向上した点も好評であった。

現地購入の生鮮品は，91年の経験から，全ての物が八一鎮で手に入ることがわかっていたので，行きに最初の20日分をそこで購入した。その後の分は中国にオーダーし，順次C2へ上げてもらったが，中国側の努力もあってか，91年に比し，92年は内容，量ともに多く，満足できるものであった。

そして，この点が食糧の不満を少なくする大きな要因であったと思われる。

燃料に関しては，92年はC3以上をプロパンガスの比率の高いエクスペディションモデルに変更したが，火力が強く使い易い反面，従来の寒冷地用に比し，少し消費が早く，管理の強化をしたものの中国隊員の使い過ぎが目についた。足りなくなることはなかったものの，91年のように長期化した際の事を思うと，最後まで心配な点であった。

以上いくつかの点について述べたが，92年は，それなりに前年の反省が生かされ，実際面において，概ね問題はなかったと思う。

参考　八一鎮での生鮮品の価格

にんじん	0.8元／kg	しょうが	7.5元／kg	キャベツ	1.0元／kg
玉ねぎ	2.0元／kg	にんにく	5.0元／kg	大根	3.0元／kg
じゃがいも	0.6元／kg	青物各種	0.8～8.0元／kg		

5. 今後の課題と総括

合同登山を行うにあたって，実際的な面で最も文化の違いが現れるのが食生活である。今回の登山でも，最終的にはやはり中国隊員は，日本側の用意した物ではなく，自分達で用意した肉やツァンパを主食としていた。91年の反省をもとに，かなり中国側の意向も取り入れた食糧計画を立てたつもりであったが，無駄であったようだ。それならば，最初から中国は中国，日本は日本で食糧は調達し，必要な物で，どうしても中国では手に入らないもののみ日本が負担するというシステムが今後は良いと思う。

２年続けて，食糧，燃料の係を担当したが，正直いって合同登山は何をやるのも大変だというのが実感である。そんな中で，何とか大きな問題もなく，係の仕事が終了したことは，ひとえに全隊員の協力と広い心のおかげであると感謝している。

現物寄贈依頼記録

依頼書発行番号			
担　当　係		寄贈依頼金額概算値	
現物寄贈依頼先			
住　　所			
先方担当者部署名		TEL.	
担当責任者名		FAX.	

交渉月日	当方担当	先方担当	交渉状況（交渉経過）

現品受取日	月　日　時頃	現品受取場所	
受領書・礼状発送	月　日　済　未処理		

通信機器報告

三谷　統一郎

1．はじめに

1992年の登山は，1990年の偵察，1991年の第１次に続くものであった。登山隊に参加する日中双方のメンバーも，半数以上は重複しての参加であった。過去２回の経験，特に1991年の通信計画を踏襲して，その時の不備，不都合を修正する事とした。合同登山という意志疎通のむずかしい時には，大きく変更しない事が，いろいろなマニュアルを作成する事なく運用できると思われた。

そして，1991年の機材も現地にデポされていたため，基本的には使える物はそのまま使用し，変更になった機材や不足品を持参し，使用する事とした。

以上のような理由で，通信担当として行なったのは，次のような事である。

①　1991年のデポ品のチェック

これは，デポリストより通信関係の品目をピックアップした。これにより，不足品の購入などを行なった。

②　無線機のオーバーホールなど

中国より持ち帰った，HF や VHF の無線機をメーカーに出し，オーバーホールした。他，テレマウス（山岳遭難対策用発信機）の電池交換を行なった。

③　1991年の一部使用機材の変更

重廣隊長より，'91年の経験より非常時に中国側と別の周波数を使用するという決定があった。そのため，BC，C2の固定機と，日本側の隊長・登攀隊長・報道のハンディ無線機は，デュアルバンド機を使用する。周波数は144MHz と430MHz を使用。メインチャンネルで使用しても，他に登山隊などが近くにいないため問題ないと思われた。

実際の運用に関して

出発前に通信のマニュアルを作製して，おおむねそれに従って運行された。

①通信マニュアル

通信は，'91年のシステムを主に使用する。

不足品を用意し，現地のデポを回収し，使用する。

②無線機に関して

ラサ～BC 間　HF（短波）使用　　FT-757 GX Ⅱ

BC 以上・VHF（超短波）144MHz 帯　　UHF（極超短波）430MHz 帯

BC，C2は固定機を設置　　モービル用デュアルバンド144／430MHz　　BC・1C・2330M（25W）　　C2・1C・2330（10W）

アンテナは，2バンドモービルアンテナ（SG7500）使用。

設置には，アンテナ用スタンドとポールを使用。
'91年のFT－212H，212L（144MHz）は予備（'91年BC・C2で使用した機材）。
C1，C3，C4，C5，C6はハンディ機を使用する。
機種　日本人隊長・登攀隊長2人　　144／430デュアルバンドIC・W2　2台
日本人隊員4人　　144MHzハンディ　1C・2S　4台
中国人隊員・登攀隊長・隊員6人　　144MHzハンディ　C－111（ポケクロ）6台
高所協力員及び報道高所協力員　　144MHzハンディ　C－111（ポケクロ）6台
報道　144／430デュアルバンド　IC・W2　6台
※各キャンプで感度の悪い時は，ロッドアンテナを使用。
144／430デュアル用（RH－770）8本　　144MHz（RH－205）3本を用意。
なおC3，C5は2バンドモービルアンテナ(NR－770S)とポールと同軸ケーブルを用意。
上記ハンディ機は保温・保護のためネオプレーンのトランシーバーケースを使用。
(C1－2S・C－111はM，1C－W2はL)

③電源に関して
固定局　BCは発電機と太陽電池併用　C2は太陽電池
ハンディ機は乾電池を使用　1 set 6本
BCでは発電機を使用し，照明にも利用。ガソリン及びボリタンは，現地購入。

④電池の使用基準に関して
隊長　1 day／1 set（6本）×2人＝2 set（12本）
登攀隊長　2 day／1 set×2人＝1 set（6本）
隊員　3 day／1 set×8人＝8/3 set（16本）
高所協力員・報道高所協力員　3 day／1 set×6人＝2 set（12本）
'92年計画予定より，実働4～55まで，52日間として，46本×52日間＝2392本。
BCまでの使用及び予備を含め約3000本。

結　果

BC～ラサ間の無線機の使用は，中国側によって行い，特に苦情はなかった。BCでは配線は日本側で行ない，アンテナ設置などは中国側によってなされた。

BC～上部キャンプは，予定通り運行された。一部変更があった事は，ハンディの無線機を日中双方のマネジャー各1台，そして日本側BC用に1台使用した。

C2の固定機が悪天のため充電不足となり，これは，BCより充電した鉛電池を上げ対応した。やはり，太陽電池の時は，悪天時の充電不足に気をつけるべきであった。

ハンディ機については，メインチャンネルのみ使用するため，できるだけ簡単な操作で使用できる物が良かった。防寒については，ネオプレーンのケースを用意したが，手袋をして野外で使用する時，使いにくかった。そして，移動中の交信を考えれば，スピーカーマイクを各隊員に持たせておけば良かったかもしれない。

最後に，'91年の基本計画がしっかりできており，ほとんど改良せず使用できた。今回は日中合同登山であったため複雑になったが，合同でない時はもっと簡単になると思う。

輸送・梱包報告

滝澤　守生

はじめに

春の風がようやく感じられる92年４月初め輸送・梱包の準備を始めるべく，昨年の担当者であった大西宏氏のファイルを読むところから，それは見切り発車のごとくスタートした。

４月18日，まずは輸送・梱包計画基本方針を各係と検討の上作成。

①昨年の反省点，改善点を充分考慮する。

②隊荷量については人数の上からも大差はないと仮定し，早めに数量等を算出していく。

③出発の時期が約１カ月程早まったため，船便の出発を７月15日とする。

④地域的特質として湿気対策を行う。

⑤業者の確定，梱包場所の確保が急務である。

以上の基本方針に基づいた梱包資材の決定，そして概算数量を算出，４月19日の第３回登山隊会議に提出する。なおその時点においては梱包場所の確保が最優先事項として，松田副会長より日本通運岡本氏を通じ梱包場所の特定を平行して進めていった。

５月７日，村井理事の交渉から昨年使用した晴海倉庫が使用できないということで品川倉庫が候補に挙がるが，夜間の作業，土日の作業ができないという問題を含んでいた。

５月８日に（株）本州製紙に梱包用段ボールを依頼する。通常使用されるプラスチック製のものは不燃物であるため，ナムチャバルワ周辺の環境保全を考え処理の容易な紙製のものとした。

５月27日，倉庫を視察，検討の上仮決定し，５月30日の第５回登山隊会議にて了承を得る。しかし，土日の作業，夜間作業の禁止という問題は依然ペンディングとなったままであった。

梱包資材については，紙製ダンボールに加え（株）ダイニックより寄贈された再利用可能な丸型プラスチックカートン，角型プラスチックカートンを上部キャンプ用に使用することとなる。これはヨーロッパの遠征隊が使用する樽状のものである。他の梱包資材も順次手配され，６月15日より梱包作業はスタートすることとなった。

梱包作業日程

６月15日・作業開始（隊荷搬入）　19日・搬入品チェック，風袋外し
22日・倉庫連絡用移動電話設置　26日・報道隊分梱包開始
29日・食糧主食レーションパック造り，装備キャンプ別分類
７月２日・東京税関と打ち合せ　３日・通信機材梱包開始
４日・個人装備梱包開始　５日・食糧カートン詰め

11日・個装・共装・医療カートン詰め　12日・全カートン梱包終了ナンバリング
13日・パッキングリスト作成　14日・日通へ引き渡し　15日・隊荷バンニング
23日・アナカン梱包　27日・倉庫撤収作業

輸送について

一方輸送については，昨年担当の日本通運海外引越支店の小池氏に今回も手続きを依頼する。輸送系路は，船便のみという前提で作業を進めていくが，隊荷の納期が遅れるものも出てくるとの見込みで，空路（アナカン）も一応念頭に置いておくこととなった。

船便は，15日横浜発，23日天津新港着の予定。梱包作業については，当初納期の遅れ，土日，夜間作業の不可，人員確保の問題等，懸念される問題が多かったが，多くの方々の協力によりなんとか予定通りに進んだ。

そして今回の試みとして，倉庫と事務局の連絡をスムーズにするため，移動電話の導入，またパッキングリストの簡便化を図るため，パソコンの導入を行った。

パッキングリストは，ノート型パソコンを梱包場所へと持ち込み，カートン詰めが終ったものから逐次入力していくという方法をとった。そのため混乱を防ぐことができ，簡略化，検索，ソート，印刷等の手間が大分省略できた。土日の作業についても，日通品川倉庫の好意により２週間にわたり作業が可能となった。平日の梱包作業には，事務局の呼びかけにより13大学から延べ105人もの学生に協力を頂いた。約１カ月間の梱包作業従事者は延べ240人となった。

隊荷表記法は，B6サイズの白シールの上にマジックで通しナンバーとケースナンバーを書き込んでいった。

しかも，中国人隊員が１目で内容物が把握できるように，その白シールの下に４色に分類した蛍光シールを貼ることとなった。

７月13日，すべての梱包を終了して，通しナンバーを記載。倉庫での作業を終了する。その夜明日のドキュメント引き渡しのため，フロッピーディスクからパッキングリストをプリントアウトするため，読売新聞社機報部にてプリンター２台をフル稼働させ，徹夜のコピー作業の末，14日朝に日通に引き渡すことができた。

７月15日，通関を無事すませ，バンニングを倉庫で見守り隊荷を送り出す。

７月23日，若干の納期の遅れた装備，そして気象機材を航空便にてアナカンパニーラゲッジを使い発送することとする。アナカンの重量は約370kg。引き渡しは24日午前10時，これで当日手荷物を除き，すべての隊荷を発送したわけである。

７月27日，倉庫の撤収作業を行う。余剰装備食糧等は，一部を事務局へ移管し，その他についてはJAC 青年部の倉庫として使用させていただいている（株）数矢製材加工場へと移送した。

ゴミ処理

梱包作業に伴い処分したゴミの量を梱包初日より集計していた積算重量は，ダンボールを除いたビニール，風袋等は約560kg，ダンボールを含めるとゴミの総重量は1200kg

となった。日本において可能な限り外せる外装はすべて取り除き，できるだけ現地にてゴミとなるものを持ち込まないという方針を徹底させた結果が1.2トンの成果であった。

このゴミの処理は，しっかりと分別され，処分できるものは，同日，中央防波堤ゴミ処理場へと持っていった。

まとめ

今回は先発隊を組織していないため，実際現地での通関に不安が残る。29日にDHL便でCMAにパッキングリストを送付し，隊荷の現地通関に関しては日通に手続を依頼する。

若干の遅れはあったものの隊荷は無事通関を済ませて，８月１日にCMAにゆだねられ，現地にて陸路輸送が始まる。

しかし，ここで思わぬハプニングが起る。各カートンに標された行き先表示を確認せず，ラサ留め荷物であるはずの隊荷がすべてBCへ向かってしまったのだった。実際隊員が現地に到着してみてからわかったことであった。

今回は輸送・梱包担当者が現地に行かなかったことで各隊員の現地での仕事が増えてしまった。やはり輸送・梱包担当者としては，一足先に現地入りをして国内輸送からBC入りまで責任を持たねばならないと感じた。なんともおぼつかない経過であったが，各方面の方々のご協力のおかげでなんとか大役を果たせ，ほっといたしました。この場を借りてお礼申しあげます。

会 計 報 告

松 田 雄 一

1. 資金の調達

今回のナムチャバルワ登山では，入山許可取得の経緯もあって，中国当局に対する入山料については，共催団体である読売新聞社に負担して貰ったものの，三国友好登山の時と異なり，登山に要する費用については，日本山岳会が，自力で調達せねばならず，スポンサー丸抱えによる“冠り登山”という訳にはいかなかった。

そのため予算の計上に当たっては，まず収入面の見通しをつけることと，極力支出をきりつめることにし，

① 収入面について

1) スポーツ振興基金からの助成
2) 企業募金については経団連の紹介・割り当てを受ける。
3) 日本体育協会を通じて免税措置の取扱いを受ける。
4) 参加する隊員は，各自個人負担金を拠出する。
5) 会員からの募金については，上高地山岳研究所の募金と合わせ，合同募金の形で協力を仰ぐ。

② 支出面については

1) 日中合同登山の性格上，予算規模は大きくならざるを得なかったが，中国国内で発生する費用に対する援助額（議定書に記載されている援助額）を，遵守するよう中国側の協力を求める。
2) 装備・食糧等国内で調達する物資については，現物寄付を依頼するなどして節減をはかる。

以上を基本方針として資金の調達に当たった。

(1990年の偵察隊)

偵察隊の派遣決定が急なこともあり，国内費用については，本会一般会計からの借入金，国外費用については，読売新聞社に立替えて貰い，1991年の本隊に含めて精算した。

(1991年　第１次登山隊)

経団連の割り当て枠（支援目標額）の決定が遅れ，具体的な募金活動の開始は，登山隊の出発直前になったが，バブルが弾けた後ではあっても，日本の経済界には未だ好景気の余韻が残っていたので，何とか募金を遂行することができた。

このような状況下にあって，スポーツ振興基金からの3,000万円の助成金は，何よりも力強いバックアップとなった。

(1992年　第２次登山隊)

第１次に比べて，中国登山協会への援助額も20万ドルと倍増し，隊の予算規模も１次

隊に比べて高所協力員6名を増員することにしたため，若干大きくなった。

一方収入面では，

①金利の低下で，各助成金の額が1次隊に比べて半額となった。

②企業の不況も深刻な状況にあり，新たな募金先を求めることは，困難な状況にあった。

しかしながら，前年度繰越金や募金申込金の入金のずれこみがあったこともあり，最終的には資金の見通しをつけることができた。

2. 基 金 助 成

今回の登山に際しては，次の三つの基金より助成金の交付を受けることができた。

① スポーツ振興基金……4,500万円
② （財）放送文化基金……600万円
③ JAC海外登山基金……300万円

計 5,400万円

スポーツ振興基金は，1991年に新しく誕生した，スポーツ振興のための基金であって，日本体育・学校健康センターのスポーツ振興基金部が管理しており，この中には，国際的に卓越したスポーツ活動を行う計画に対し資金の支給，その他必要な援助活動を行う所謂「卓越スポーツ」（アドベンチャー・スポーツ）に関する助成が含まれており，今回のナムチャバルワ登山は，その第1号として先鞭をつけることになった。

今回の計画では，総資金の中35％がこの助成金でまかなわれており，このような制度ができたことは，わが国の登山界にとって，まことに喜ばしいことであった。

3. 募 金

1991年5月18日に開催された日本山岳会の総会に先立って，第1回合同募金委員会が開催され，新旧役員，評議員，支部長，山研委員および名誉会員を主体とした120名からなる募金委員会が発足した。同時に，募金委員会委員長に今西寿雄，副委員長に山田二郎，藤平正夫，飯野亨，小倉茂暉の4名を選任，併せて企業募金を目的に，48名の常任募金委員の選任を行われた。

募金の目標額は1億円とし，企業募金…7,000万円，会員募金…3,000万円，をそれぞれ当面の目標とし，募金活動はスタートした。

会員募金については，山研，ナムチャバルワ登山の募金が，同時に行われるため，会員各位の都合も考えて，合同募金の形をとることとした。

事務局としては，小倉茂暉常務理事を募金事務局長とし，企業募金（橋本清，伊丹紹泰），合同募金（小倉茂暉，石橋正美）の各理事，評議員が担当することになった。

なお募金に当っては，日山協を通して，日本体育協会に対し，免税寄付取扱の手続をとり，募金活動を開始した。しかし，経団連の総務委員会，理事会を通過するのに時間がかかり，漸く割当枠の内示を戴いたのは，登山隊出発の直前であった。

このように，企業募金はスタートが遅れ，前途多難を思わせたが，幸いなことに，バ

ブルが弾けた後ではあったが，東京銀行協会をはじめとする大手の５団体の協力をいただき，年内に，3,000万円，年が明けて２月末に4,000万円が集まり，最終的には5,000万円の大台を越えることができた。

一方，会員募金の方は時間がかかり，年内には1,800万円に過ぎなかったものの，第２次の登山が成功する頃には，目標の3,000万円を超えることができた。

しかし，山研の建設費が予想外にかかり，1993年の１月には若干の資金不足が見込まれたので，会員各位に最後のお願いを行った結果，最終的には女性懇談会からの650万円の拠金も合せ，4,500万円を超える資金を集めることができた。

1993年３月末現在の募金の状況

会員募金（2574名)…45,643,940円　企業募金（186団体)…51,536,000円

合計…97,179,940円となり，４月初めには１億円の大台に達することができた。

4. 登山隊＜総合＞収支決算書について…次頁の別表参照

- 本表には，平成５年４月以降支出する予定の報告書費用は含まれていない。
- 収支のバランスは収入之部の寄付金で調整しているので，収支零となっている。
- '91年と'92年の支援トレッキング隊，名誉総隊長隊，大西家の現地訪問等の費用は別途会計とした。
- 収入之部の協賛金の中には取材協力費が含まれている。
- 支出之部の渡航費については，全日本空輸（株）の全面的な協力を得た。
- '90年偵察隊の費用は１次隊に含まれている。
- 装備，食糧，医薬品等の調達物資については，多数の企業からの物品提供を受けた。

5. ま と め

このように，山研，ナムチャバルワ登山の二大プロジェクトは，会の総力をあげて取り組み，両方とも成功することができた。これも偏えに，募金委員ならびに会員各位のご協力の賜物であった。

最後にこの資金集め，会計処理を行った裏方を紹介し，謝意を表してまとめとしたい。

- 企業募金会計事務……橋本清，中沢光江
- 合同募金会計事務……石橋正美，堀嘉余子
- スポーツ振興基金
- 放送文化基金

　伊丹紹泰（１次)，松田雄一（２次)

- 登山隊会計事務

　第１次隊（偵原隊含む)…橋本清，伊丹紹泰，中沢光江

　第２次隊…松田雄一，中沢光江，滝沢ちよ子，相馬勉（コンピューター処理)

　第１次～第２次の現地会計…梶田正人

そしてこれらの全体については，本会財務担当の大倉昌身常務理事が総括，経理処理上の問題については西村政晃常任評議員の指導を受け，最後に飯野亨，中島伊平両監事の監査を受けた。記して謝意を表したい。

登山隊＜総合＞収支決算書

〔1〕 収 入 之 部　　1993.3.31 現在

項　　目	1次隊計	第2次隊	合　　計
スポーツ振興基金助成金	30,000,000	15,000,000	45,000,000
放送文化基金助成金	4,000,000	2,000,000	6,000,000
日本山岳会海外登山基金	1,500,000	1,500,000	3,000,000
寄付・協賛金	25,346,552	36,594,923	61,941,475
隊員負担金	4,800,000	4,400,000	9,200,000
雑収入・受取利息	549,892	3,208,498	3,758,390
収入 計	66,196,444	62,703,421	128,899,865

〔2〕 支 出 之 部

〔国 内 費 用〕			
渡 航 費	736,120	720,122	1,456,242
輸 送 費	1,422,980	1,038,698	2,461,678
梱 包 費	275,310	367,976	643,286
装 備 費	25,906,440	19,252,790	45,159,230
食 糧 費	636,733	225,999	862,732
医 薬 品 費	50,000	0	50,000
印刷・報告書費	6,045,000	1,128,045	7,173,045
保 険 料	366,870	399,225	766,095
雑 費	80,500	314,110	394,610
事 務 局 費	3,928,732	9,745,368	13,674,100
小 計	39,448,685	33,192,333	72,641,018
〔国 外 費 用〕			
(1) 登 山 隊 費			
旅 費	1,018,290	6,977,367	7,995,657
輸 送 費	10,255,597	4,099,216	14,354,813
装 備 費	4,165,906	287,815	4,453,721
食 糧 費	0	2,843,265	2,843,265
人 件 費	3,288,038	6,199,655	9,487,693
滞 在 費	5,138,576	3,531,330	8,669,906
保 険 料	0	584,342	584,342
道路補修費	750,600	0	750,600
事 務 局 費	0	842,405	842,405
気 象 費	0	1,025,160	1,025,160
雑 費	1,110,464	51,953	1,162,417
小 計	25,727,471	26,442,508	52,169,979
(2) 対外折衝費	1,020,288	3,068,580	4,088,868
国外費用計	26,747,759	29,511,088	56,258,847
支出 計	66,196,444	62,703,421	128,899,865

登山隊日誌

1992年

9月 2日　成田から全日空にて北京入り。

3日～4日　北京，成都では早朝ランニングで体調維持に努める。

6日　成都からラサへ，ラサでは珍しい雨天の中、ローサンダワ総隊長の出迎えをうける。

7日　ラサにて隊荷の整理。

8日　日本隊先発隊4名がBCに出発。

9日　先発隊BC入り，テントサイト，装備の整理，電気系統の配線に従事。

11日　本隊BC到着，装備の配分，物資の仕訳，BC整理。

12日　荷上げに従事する民工集結，BCもにぎやかになる。昨年と同様ダニ発生。

13日　気象ロボット，気象衛星受信機等を設置，C1，C2への荷上げ開始。

14日　開村式，日中両国の国旗を掲げビールで乾杯。

15日　1次隊出発，BC～C1。

16日　2次隊出発，1次隊がC2設営。昨年より雪が少ない，荷上げ中継のため梶田C1入り。

17日　2次隊C2入り。

18日　ラバロルート工作開始，雪少なく落石多い。

19日　ラバロルート工作終了。

20日　C3荷上げ開始。

23日　C3建設，サンジュ隊長を除く11名がC3入り。

24日　C4ルート工作，荷上げ開始，C3に気象ロボット設置。

25日　C4荷上げ後，C2に下降。重廣，サンジュ，梶田BCに下降。橋本名誉総隊長BC入り，無線でC2にいる隊員を激励。

26日　C2，BC休養，橋本名誉総隊長シェジータンガ村を訪問。

27日　重廣，サンジュ，梶田C2に出発。午後から大雪，C1，C2間はほとんど視界なし。日本からの手紙がC2に届く。

28日　前日の降雪のためラバ口に雪崩の危険あり，停滞。

29日　重廣，サンジュ以外10名C3入り，高所協力員荷上げ。

30日　C4設営三谷，佐藤，ジャブー，シェリンドルジC4入り。重廣，サンジュ，C3入り。

10月 1日　三谷，佐藤，ジャブー，ツェリンドルジC5へるルート工作。

2日　ツェリンドルジ日焼け治療のためBCに下山。

3日　本隊休養，高所協力員C2～C3荷上げ。

4日　C4荷上げ，1次隊C4入り。

5日　C3～C4荷上げ，C4休養。

6日　C4～C5，C3～C4荷上げ，全員BCに下降。
C5～C4の下降でラバ，ペンパザシ流雪に遭遇。大西の遭難と同じ場所だ。ラバ埋まるが，ダーチミに救われ，事なきを得る。

7日　全隊員休養，アタックステージに備え鋭気を養う。BCからツェリンドルジ合流。

8日　アタック隊の編成決定，1次隊・山本一夫，青田，山本篤，ジャブー，ツェリンドルジ，ペンパザシ。2次隊・重廣，三谷，佐藤，サンジュ，ダーチミ，ダチョン。久々の好天の中，山田，ローサンダワ両総隊長の激励を受ける。昨年遭難した大西の慰霊碑に手を合わせ，登頂を誓う。

9日　1次隊C3入り。

10日　1次隊C4入り，2次隊C3入り。

11日　1次隊C5建設，連日の快晴。

12日　悪天のため上部行動できず停滞。やはり簡単には進まない。C5に20cmの積雪。

13日　雪降りやまず，連日の停滞。C5積雪50cm。

14日　3日続きの悪天吹雪のため，全く行動できない状態。2次隊の中国隊は上部食料節約のためC4からC3に撤退。C5の積雪は1mを越える。

15日　雪は止んだが強風続く，全隊C3に撤退。

16日　C3で休養，積雪は70cmに達する。支援隊出迎えのため小島ドクターBCに下る。

17日　アタック態勢立て直しのため，計画を再検討。18日から新たなアタック態勢に入る事を決定。

18日　1次隊C4入り，腰までのラッセルに苦しむ。C4テントは雪に埋没。スコップで掘り出す。

19日　悪天のためC4，C3とも行動できず停滞。支援隊BC到着。

20日　C4上部へのルート付け偵察を試みるが悪天のため引き返す。C4，C3停滞。

21日　再度アタック態勢立て直しのため全員C2に撤退。総指揮部と協議のため重廣，サンジュ，梶田BCに下山。

22日　中国隊全員と青田，山本篤BCに下山。秋の気配が漂うBCで一時の休息。日中総指揮部と協議，飯田気象予報官の予報に基づき，24日C2から行動開始，29日登頂の計画を決定。

23日　全員C2に集結。

24日　1次隊C3入り，ラバ口のルート補修に苦心する。

25日　天気良し，2次隊C3入り，1次隊は膝までのラッセルでC4到着，雪に埋没したテントを掘り出しC4再建。

26日　天気良く行動に支障無し，C5に到着したが，テントが見つからない。強風に飛ばされたかと愕然としたが，竹竿の先端を発見し，5時間かけてテントを掘り出す。2次隊C4入り。

27日　本日も晴天，1次隊C6建設，2次隊もC5入り。

28日　快晴，7200 mの垂壁までルート工作，好天を利用し明日頂上アタックに決定。

29日　絶好の好天，ロックバンドは前年のフィックスを利用し難なく突破。上部で予想以上に時間がかかったため，予定どおりビバークを決定。飯田の天気予報は明日も好天。

30日　朝，快晴。1次隊が12時9分ついに登頂を果たす。重廣以外は2次隊も2時30分に登頂。重廣は1次，2次隊の安全を考え，フィックスをはずし使用させ，自らは登頂を断念。

31日　中国1次隊C2まで下山，残りはC3。

11月　1日　隊員，高所協力員による撤収作業。

2日　登頂隊員はBCに下山。

3日　重廣，梶田，レンチンピンゾ，ガヤ，シャオチミで雪の降る中，C2の最終撤収作業完了。大西の慰霊碑に別れを告げ，BCに下山。

1日～6日　BC撤収作業。

7日　大西のレリーフにお参り，キーカルから八一鎮に出発。八一鎮では8千人の大歓迎の中，大通りをパレード。

10日　ラサでの歓迎式典に参加。ポタラ宮下の人民公園でパレード。

11日　遺失品の回収のため，重廣，飯田，張江援，李豪杰で再びキーカルへ向かう。本隊はラサから成都に出発。

17日　北京人民大会堂での祝賀式典に参加。

18日　全日空便で帰国。

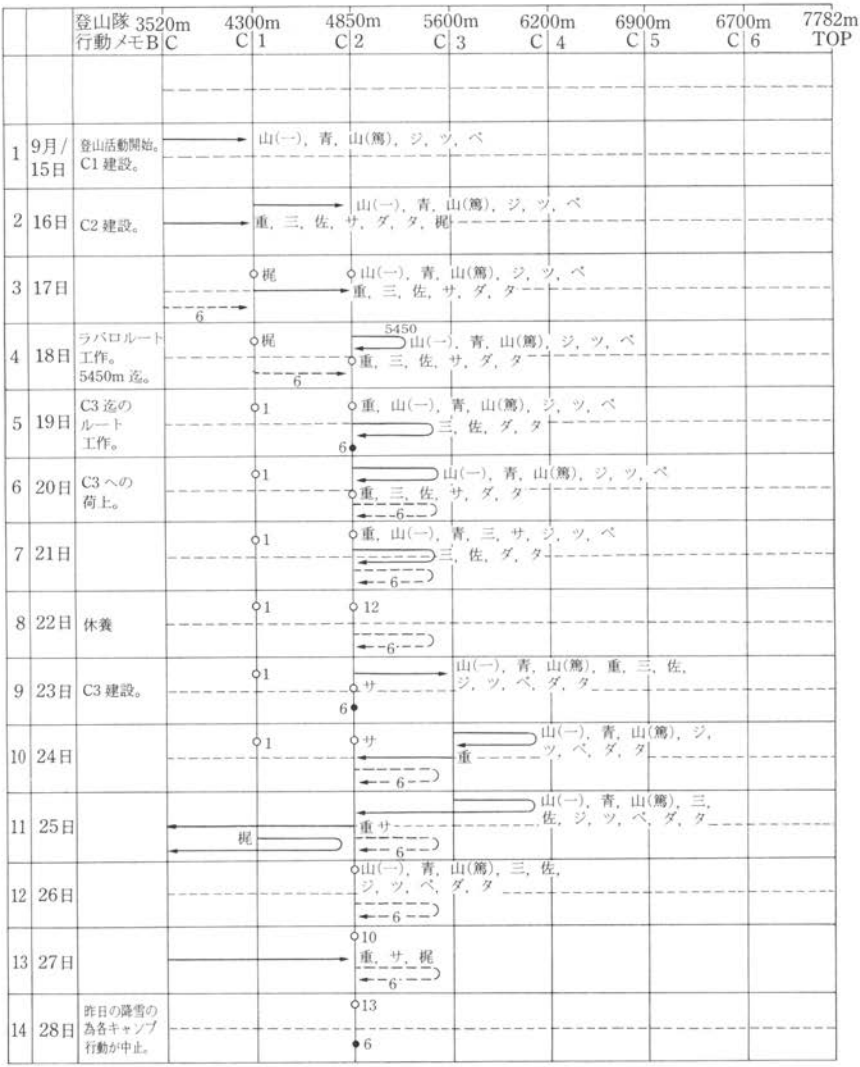
行 動 表 (1)

日本側隊員名

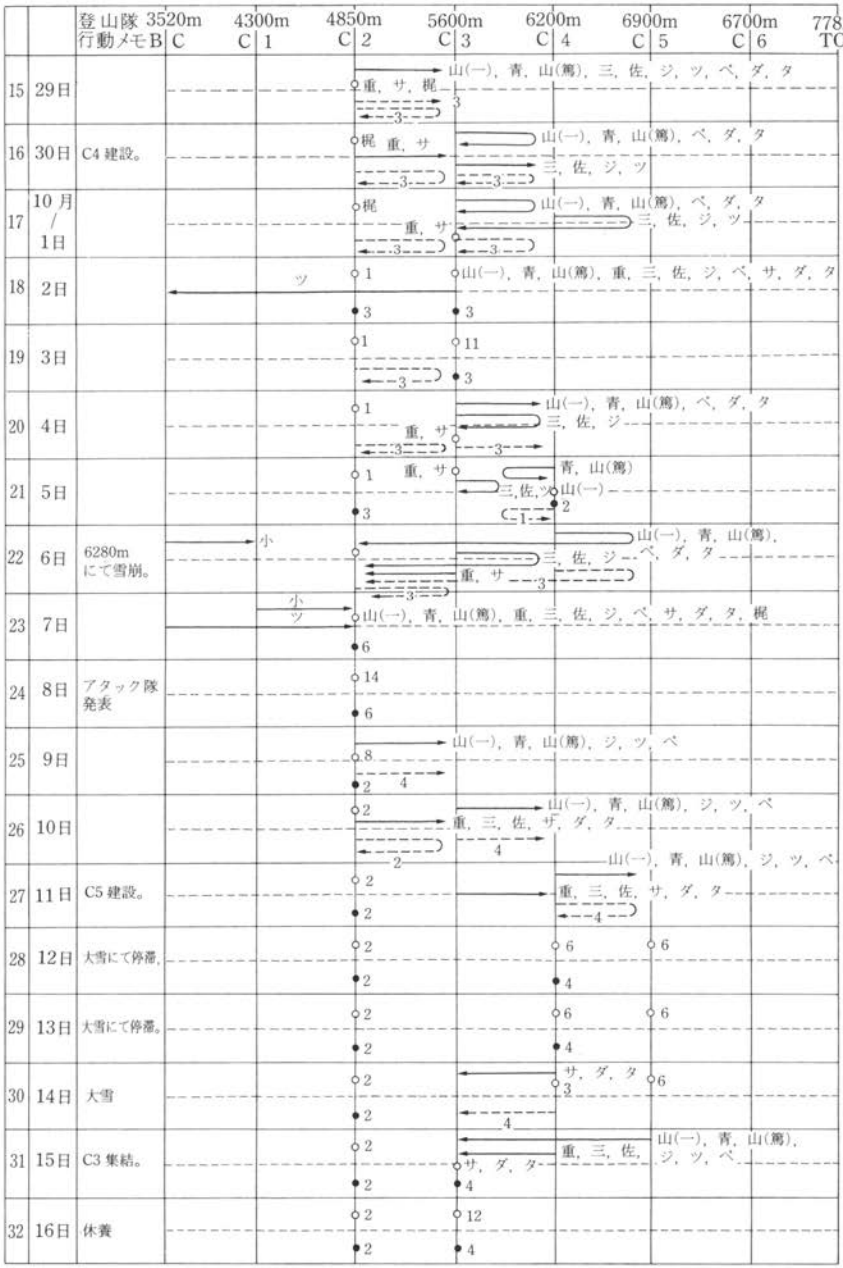
重＝重廣恒夫　山(一)＝山本一夫　三＝三谷統一郎　青＝青田浩
山(篤)＝山本篤　佐＝佐藤正倫　梶＝梶田正人

中国側隊員名

サ＝サンジュ　ジ＝ジャブー　ツ＝ツェリンドルジ　ペ＝ペンパサシ
タ＝ターチミ　ダ＝ダチョン　⊃＝高所協力員

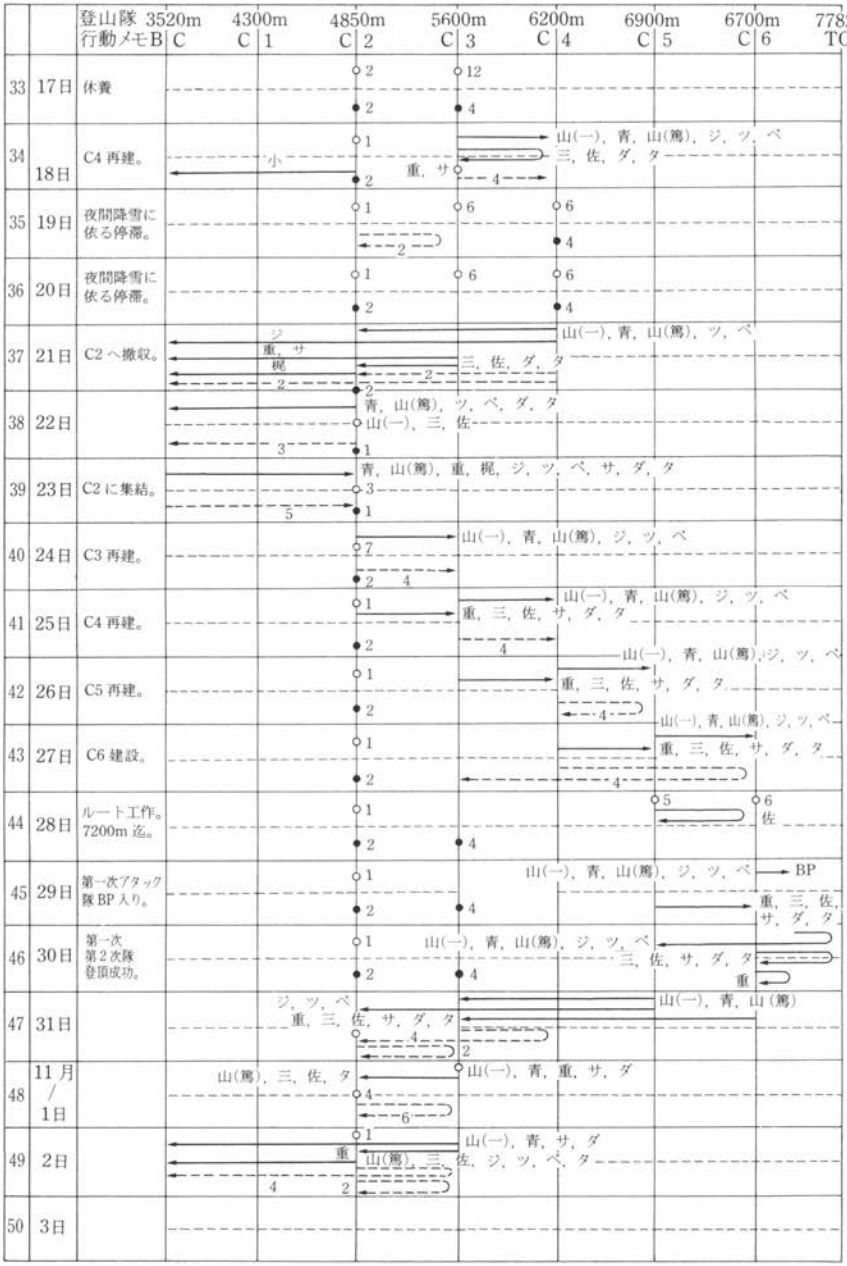


行 動 表 (2)



		登山隊 行動メモ	3520m B C	4300m C 1	4850m C 2	5600m C 3	6200m C 4	6900m C 5	6700m C 6	7782m TOP
15	29日				重, サ, 梶 3 3	山(一), 青, 山(篤), 三, 佐, ジ, ツ, ベ, ダ, タ 3				
16	30日	C4 建設。			梶 重, サ 3	山(一), 青, 山(篤), ベ, ダ, タ 三, 佐, ジ, ツ 3				
17	10月 / 1日				梶 重, サ 3	山(一), 青, 山(篤), ベ, ダ, タ 三, 佐, ジ, ツ 3				
18	2日			ツ	1 3	山(一), 青, 山(篤), 重, 三, 佐, ジ, ベ, サ, ダ, タ 3				
19	3日				1 3	11 3				
20	4日				1 重, サ 3	山(一), 青, 山(篤), ベ, ダ, タ 三, 佐, ジ 3				
21	5日				1 3	重, サ 三, 佐, ツ 1	青, 山(篤) 山(一) 2			
22	6日	6280m にて雪崩。		小		三, 佐, ジ 重, サ 3	山(一), 青, 山(篤), ベ, ダ, タ			
23	7日			小 ツ	山(一), 青, 山(篤), 重, 三, 佐, ジ, ベ, サ, ダ, タ, 梶 6					
24	8日	アタック隊 発表			14 6					
25	9日				8 2 4	山(一), 青, 山(篤), ジ, ツ, ベ				
26	10日				2 2	山(一), 青, 山(篤), ジ, ツ, ベ 重, 三, 佐, サ, ダ, タ 4				
27	11日	C5 建設。			2 2		山(一), 青, 山(篤), ジ, ツ, ベ 重, 三, 佐, サ, ダ, タ 4			
28	12日	大雪にて停滞,			2 2		6 4	6		
29	13日	大雪にて停滞。			2 2		6 4	6		
30	14日	大雪			2 2	サ, ダ, タ 3 4	6			
31	15日	C3 集結。			2 2	重, 三, 佐, サ, ダ, タ 4	山(一), 青, 山(篤), ジ, ツ, ベ			
32	16日	休養			2 2	12 4				

行 動 表 (3)


登山隊 行動メモ
3520m C
4300m C
4850m C
5600m C
6200m C
6900m C
6700m C
7782m TOP
1
2
3
4
5
6
33 17日 休養
34 18日 C4 再建。
35 19日 夜間降雪に依る停滞。
36 20日 夜間降雪に依る停滞。
37 21日 C2 へ撤収。
38 22日
39 23日 C2 に集結。
40 24日 C3 再建。
41 25日 C4 再建。
42 26日 C5 再建。
43 27日 C6 建設。
44 28日 ルート工作。7200m 迄。
45 29日 第一次アタック隊 BP 入り。
46 30日 第一次第2次隊登頂成功。
47 31日
48 11月/1日
49 2日
50 3日
山(一), 青, 山(篤), ジ, ツ, ペ
三, 佐, ダ, タ
重, サ
小
ジ
重, サ
梶
青, 山(篤), ツ, ペ, ダ, タ
山(一), 三, 佐
青, 山(篤), 重, 梶, ジ, ツ, ペ, サ, ダ, タ
山(一), 青, 山(篤), ジ, ツ, ペ
重, 三, 佐, サ, ダ, タ
BP
山(一), 青, 山(篤), ジ, ツ, ペ, サ, ダ, タ
三, 佐, サ, ダ, タ
重
山(一), 青, 山
重, 三, 佐, サ, ダ, タ
山(篤), 三, 佐, タ
山(一), 青, 重, サ, ダ
山(一), 青, サ, ダ
重
山(篤), 三, 佐, ジ, ツ, ペ, タ

事　務　局　日　誌

• ナムチャバルワ登山隊事務室は読売新聞社より提供を受ける。
（住所・東京都中央区日本橋小舟町７番２号　読売日本橋別館５階）

1991 年

12月12日　理事会にてナムチャバルワ峰再挙承認。

21日　番町グリーンパレスにて，登山隊検討会，大西宏氏追悼会。

1992 年

２月13日　第２次ナムチャバルワ登山隊総隊長・山田，登山隊長・重廣を理事会にて承認。

３月５日～８日　北京会談（出席・日中友好協会，日本山岳会，読売新聞社，NHK）。

12日　登山実行委員会委員決定，依頼。

29日　第１回登山隊会議（北京会談報告・気象担当隊員人選・隊員内定者任務分担・準備態勢他について）10:30～14:45。

４月３日　定例会議（隊員および協力者による打ち合せ）19:00～21:00。

７日　助成金内定通知受領（日本体育学校健康センター・スポーツ振興基金）。

10日　定例会議（隊員および協力者による準備）19:00～21:00。

11日　第２回登山隊会議（食糧・準備・経費計画・資料作成・輸送梱包について他）10:00～15:00。収支予算案の検討 16:00～18:00。

17日　定例会議（現物寄贈依頼および調達計画他）19:00～21:00。

19日　第３回登山隊会議（共催団体連絡会議報告・予算について他）10:30～15:00。

24日　定例会議（現物寄贈依頼開始）19:00～21:00。

27日～28日　北京会談（出席・斉藤，重廣）。

５月１日　定例会議 19:00～21:30。

８日　第４回登山隊会議（北京会談議事報告他）19:00～21:00。

14日　第１回ナムチャバルワ合同委員会（北京会談報告・隊員派遣依頼他）16:00～18:00。

15日　定例会議（現物調達他）19:00～21:30。

22日　定例会議 19:00～21:30。

30日　第５回登山隊会議（倉庫・その他準備について）10:00～11:00。

６月５日　定例会議（外務省に登山隊の名義後援承認申請書提出）19:00～21:30。

12日　定例会議（各大学山岳部へ梱包協力依頼他）19:00～21:00。

15日　梱包作業開始（日通品川倉庫）9:00～17:00。

21日　第６回登山隊会議（梱包状況他）12:00～13:30。

22日　倉庫連絡用移動電話設置。

７月３日　定例会議（東京税関長宛隊荷物通関の念書提出他）19:00～21:30。

10日　第７回登山隊会議（各担当者より進行状況報告・梱包作業終了について他確

認)19:00～20:30。
13日　梱包作業終了，隊荷輸出申告。
15日　船便隊荷通関。
17日　定例会議(航空貨物コンテナ詰め作業)19:00～21:30。
18日　JACにて雪崩，蘇生法研修会 10:00～17:00。
24日　定例会議 19:00～21:30。隊荷(アナカン)引き渡し。
26日　船便隊荷，天津新港着。放送文化基金助成援助金承認通知受領。
27日　品川倉庫撤収。
31日　定例会議 19:00～21:00。
8月1日　定例会議 19:00～21:00。
2日　第8回登山隊会議(各担当者報告，誓約書等の確認他)10:00～15:30。
3日　第2回ナムチャバルワ合同委員会(支援隊，壮行会，登山隊留守本部等について)13:00～16:20。
8月7日　定例会議 19:00～21:00。
9日～16日　夏休み
17日　四者会談(最終打ち合せ)
21日　壮行会(アルカディア市ヶ谷)18:30～21:00。
22日　第9会登山隊会議(最終確認他)10:00～11:30。故大西宏氏墓参。
28日　定例会議(最終連絡会議)19:00～22:00。
9月1日　登山隊員は成田全日空ホテルに宿泊。
2日　登山隊出発，MH 905 便・10:20 発。
21日　橋本龍太郎名誉総隊長隊出発，MH 905 便・10:20 発。
23日　山田総隊長，斉藤副総隊長出発，MH 905 便・10:20 発。
28日　留守本部通信(1)発行。
10月2日　名誉総隊長隊帰国。
9日　留守本部通信発(2)発行。
10日　支援トレッキング隊出発，CA 926 便・15:30。
13日　会計中間監査。
18日　支援隊帰国
19日　留守本部隊通信(3)発行。
26日　留守本部隊通信(4)発行。
29日　登頂
30日　登頂報告文書発送。
11月11日　留守本部隊通信(5)発行。
16日　訪中祝賀団，北京入り。
17日　北京祝賀会(北京人民大会堂)
18日　登山隊および訪中祝賀団帰国，MH 906 便・20:15 着。隊員は東京宿泊。
19日　スポーツ功労賞受賞(12:00)。残務整理後，隊員帰宅。

26日　中国より祝賀団来日，帝国ホテル泊。
27日　東京祝賀会(帝国ホテル富士の間)18:00～20:00。
29日　中国祝賀団帰国。
12月5日　報告会(新高輪プリンスホテル)13:30～16:00。
15日　NHK スペシャル放映案内状発送。
20日　書類整理，借用装備返却終了。
1993年
1月2日　NHK スペシャル「未踏峰ナムチャバルワ」放映 19:15～20:45。
15日～17日　装備，写真整理。JAC，大町山岳博物館，植村記念財団宛寄贈装備分配品整理。
21日　登山委員会(収支報告，残務報告他)15:30～16:30。
23日　実行委員会(収支報告，残務報告他)11:00～12:10。
登山隊会議(報告書原稿打ち合せ)14:00～18:00
新年会 19:00～22:30
24日　隊員連絡会議(アンケート，報告書作成他)14:00～15:00。分配品移送，大掃除。
25日　登山隊事業終了報告文書発送。
29日　第42回日本スポーツ賞受賞(読売新聞社)12:00～14:00。
30日　事務局撤収。
2月9日　会計監査(JAC ルームにて)10:30 より。
3月24日～4月5日　ナムチャバルワ初登頂写真展(小田急百貨店新宿店)。

ナムチャバルワ登山活動委員

1　登山活動の組織

	日本側	中国側
（1）	総顧問：櫻内義雄（衆議院議長） 堀田弥一 （日本山岳会名誉会員） 田口二郎 （日本山岳会名誉会員）	伍紹祖（中国国家体育運動委員会主席＝スポーツ大臣） 江村羅布（西蔵自治区人民政府主席）
（2）	名誉総隊長：橋本龍太郎 （前大蔵大臣，日本山岳会会員）	史占春（中国登山協会主席）
（3）	総隊長：山田二郎（日本山岳会会長）	洛桑達瓦 （西蔵自治区体育運動委員会主席）
（4）	副総隊長：斎藤惇生 （日本山岳会常任評議員）	王鳳桐（中国登山協会副主席）
（5）	登山隊長：重廣恒夫 （日本山岳会常務理事）	桑珠（西蔵登山協会委員）

尚，総指揮部は日中双方の総隊長，副総隊長の4名をもって構成する。

2　登山委員会（日本山岳会側委員）

委員長：今西壽雄（前日本山岳会会長）

委　員：	山田二郎（日本山岳会会長）	渡辺兵力（日本山岳会名誉会員）
	大塚博美（日本山岳会前副会長）	村木潤次郎（日本山岳会前副会長）
	藤平正夫（日本山岳会副会長）	松田雄一（日本山岳会副会長）
	宮下秀樹（日本山岳会前評議員）	平林克敏（日本山岳会前評議員）
	鴫原啓佑（日本山岳会常任評議員）	湯浅道男（日本山岳会常任評議員）
	西村政晃（日本山岳会常任評議員）	

以上12名で構成

3　実行委員会

委員長：山田二郎（日本山岳会会長）

藤平正夫（日本山岳会副会長）…募金担当　松田雄一（日本山岳会副会長）…事務局担当　斎藤惇生（日本山岳会常任評議員）…現地登山担当

委　員：橋本　清（日本山岳会常任評議員）

小倉茂暉，重廣恒夫，大倉昌身，大森弘一郎，神崎忠男（以上常務理事）

村井龍一，伊丹紹泰，関口令安，片岡泰彦（以上本会理事）

以上14名で構成

ナムチャバルワ登山
上高地山岳研究所 合同募金委員

委員長　今西壽雄
副委員長　飯野　亨　小倉茂暉　藤平正夫　山田二郎

常任委員　石橋正美　伊丹紹泰　入沢郁夫　宇田川芳伸　大倉昌身　太田晃介　大塚博美　大森弘一郎　小川　武　小倉董子　尾上　昇　片岡　博　神崎忠男　小林政志　斎藤惇生　坂本正智　沢村幸蔵　鴫原啓佑　重廣恒夫　鈴木郭之　竹田寛次　田辺　寿　中川　武　中村太郎　西村政晃　橋本　清　日下田實　平野真市　平林克敏　広江　研　藤井正彦　松田雄一　溝口洋三　宮下秀樹　村井龍一　村木潤次郎　山口俊輔　山野井武夫　湯浅道男　吉田　宏　吉村健児

委　員　青木保良　赤羽孝一郎　麻生武治　穴田雪江　阿部和行　安間　荘　磯野剛太　井野千枝子　井上豊重　魚本定良　梅木秀徳　大沢伊三郎　大島輝夫　大橋克也　大森久雄　岡田光行　岡部みち子　岡村　武　奥野正亥　奥原教永　奥原　宰　奥原広次　小倉　厚　小須田嘉夫　織田沢美知子　小原　俊　梶　正彦　片岡泰彦　上條岳人　上條輝夫　上條敏昭　川上　隆　国見利夫　河野　長　権藤太郎　斎藤健治　佐々保雄　佐藤　光　佐藤敏彦　佐藤一栄　鹿野勝彦　島田　巽　庄司駒男　杉野目　浩　関口令安　関根吉郎　高山忠四朗　田口二郎　辰沼廣吉　谷口現吉　田部井淳子　継松久美男　角田啓蔵　徳久球雄　中島伊平　中嶋正夫　中世古隆司　西丸震哉　野口末延　早川種三　原　真　広羽　清　藤本敏行　堀田弥一　堀嘉余子　増江俊三　松井辰弥　松本恒広　南川金一　三辺夏雄　室賀輝男　望月達夫　山本良三　吉川暢一　吉沢一郎　若林啓之助　渡辺兵力　（五十音順）

協賛・支援団体企業

旭硝子㈱
㈱アサヒコーポレーション
㈱アートオフィスプリズム
㈱アドベンチャーロード
飯田製作所
石黒建設㈱
㈱石黒保険事務所
㈱井上
㈱今西組
入江興産㈱
ウィンドミル㈱
㈶植村記念財団
㈱江口巌商店
大町山岳博物館
沖電気工業㈱
㈱小月製作所
数矢製材㈱
関西ペイント㈱
北九州商工会議所
キッコーマン㈱
共栄産業㈱
近畿日本鉄道㈱
㈱QUICK
黒崎窯業㈱
京阪電気鉄道㈱
㈱ケンコー社
光兆産業㈱
コスモ石油㈱
寿観光㈱
小林電工㈱
㈱小松製作所
コーヤク㈱
㈱近内工務店
埼玉県和光市役所
笹野商事㈱
㈱佐波宇野
三共㈱
サンスター技研
㈱ザンター
塩野義製薬㈱
柴田商事㈱
渋谷地下街㈱
清水建設㈱
下村石膏㈱
昭光物産㈱
昭和培土㈱
㈳信託協会
新日本コア㈱
末廣酒造㈱
スクエア21
鈴木商工㈲
住友ゴム工業㈱
住友ゴム特品販売㈱
静甲㈱
㈱清光社
㈳生命保険協会
㈳全国乗用自動車協会
㈳全国地方銀行協会
全日本空輸㈱
㈱ダイエー
ダイト㈱
㈳第二地方銀行協会
大日本印刷㈱
大信貿易㈱
大丸興業㈱
大油運送㈱
㈱高田工業所
㈱田島木材
武田薬品工業㈱
千葉トヨタ自動車㈱
中外製薬㈱
㈱槌屋
㈱ツムラ
電気事業連合会
東亜薬品㈱
㈱東芝
東急建設㈱
東急サービス㈱
㈱東急ストア
㈱東急百貨店
東急車輌製造㈱
㈱東急設計コンサルタント
東急不動産㈱
㈱東急ホテルチェーン
東急リゾート㈱
㈱東急レクリエーション
東陶機器㈱
東横車輌電設㈱
㈳東京銀行協会
東京急行電鉄㈱
東京トヨペット㈱
東京木場筏㈱
同和火災海上保険㈱
㈱ドッドウェルビー・エム・エス
凸版印刷㈱
富山信用金庫㈱
豊田合成㈱
トヨタ自動車㈱
豊田化学工業㈱
長野コカ・コーラボトリング㈱
南海電気鉄道㈱
㈲西糸屋
日成共益㈱
㈳西日本工業倶楽部
日鋼貿易㈱

日進機工㈱
日成ビルド工業㈱
㈳日本医師会
㈳日本ガス協会
㈳日本建設業団体連合会
㈳日本自動車工業会
㈳日本自動車車体工業会
日本交通㈱
㈳日本損害保険協会
㈱日本電信電話
㈳日本電機工業会
日本石油㈱
日本通運㈱
㈳日本鉄鋼連盟
日本電気㈱
㈱ニッポンレンタカー東急
日英ビジネスマシンズ㈱
㈱日本エアシステム
日本パーカーライジング㈱
日本マイヤー㈱
㈱ノエビア
白山工業㈱
㈱服部セイコー
浜本メーリング㈱
㈱ハヤシグリーンテクノ
㈱八十二銀行
阪急電鉄㈱
阪神電気鉄道㈱
菱機工業㈱
㈱ビール協会
ヒマラヤ観光開発㈱
㈱福井銀行
㈱福光屋
富士ゼロックス㈱
富士通㈱
㈱ブリヂストン
㈱ブリヂストンタイヤ
ブルドックソース㈱
㈱本間ゴルフ製作所
㈱松浦機械製作所
㈱マルイ
前田製管㈱
松本コンベンション推進協議会
松本商工会議所
松本土建㈱
松下電工㈱
㈱ミクニ
㈱ミクニアデック
三國総業㈱
三國物流サービス㈱
三國商工㈱
ミズノ㈱
三菱重工業㈱
三菱商事㈱
三菱電機㈱
㈱宮本設計事務所
水戸守法律事務所
㈱モリタ
㈱モルテン
㈱安川電機製作所
大和塗料販売㈱
ユニー㈱
吉村興産㈱
吉村建設工業㈱
隆清商会㈲
ワシマイヤー㈱

助成金交付団体

㈶放送文化基金
スポーツ振興基金
支援企業グループ

朝日生命保険相互会社
㈱大林組
鹿島建設㈱
協栄生命保険㈱
㈱熊谷組
㈱さくら銀行
三洋電機㈱
㈱三和銀行
清水建設㈱
新日本製鐵㈱
㈱住友銀行
住友信託銀行㈱
住友生命保険相互会社
西武鉄道㈱
ソニー㈱
大成建設㈱
太陽生命保険相互会社
㈱第一勧業銀行
第一生命保険相互会社
大同生命保険相互会社
第百生命保険相互会社
㈱大和銀行
㈱竹中工務店
中央信託銀行㈱
千代田生命保険相互会社
東京海上火災保険㈱
東京生命保険相互会社
東邦生命保険相互会社
東洋信託銀行㈱
戸田建設㈱
凸版印刷㈱
トヨタ自動車㈱

西松建設㈱
㈱日本交通公社
日本信託銀行㈱
日本生命保険相互会社
日本団体生命保険㈱
富国生命保険相互会社
㈱富士銀行
㈱フジタ
平和生命保険㈱
松下電器産業㈱
㈱マルニ
ミズノ㈱
三井信託銀行㈱
三井生命保険相互会社
㈱三菱銀行
三菱信託銀行㈱
㈱村田製作所
明治生命保険相互会社
安田火災海上保険㈱
安田信託銀行㈱
安田生命保険相互会社

装備・食糧・医療

アルキテック㈲
㈱ICI 石井スポーツ
㈱アドベンチャーロード
㈱アトラストレック
㈱アルテリア
味の素㈱
旭松食品㈱
㈱アシックス
安房医師会病院
㈱イスカ
イワタニプリムス㈱
ウインドミル㈱
㈱ウエダ
㈱ウシオユーテック
エーザイ㈱
㈱エバニュー
エバラ食品工業㈱
㈱エキスパートオブジャパン
エンペックス気象計㈱
NHK 営業サービス㈱
大倉スポーツ用品販売㈱
尾西食品㈱
㈱大塚製薬
オールホンダ販売㈱
カシオ計算機㈱
カンロ㈱
亀田製菓㈱
㈱釜屋
㈱カニヤ
㈱加藤美蜂園本舗
キッコーマン㈱
㈱木徳
九州太陽化成㈱
京セラ㈱
協和醗酵㈱
共成水産㈱
㈱紀文
群馬県経済農業共同組合連合会
㈱ケーイーエム
㈱ケンコー社
建織㈱
ケンミン食品㈱
㈱国分
コクヨ㈱
佐藤食品工業㈱
サントリー㈱
昭和マツタカ㈱
㈱白子
十条キンバリー㈱
寿がきや食品㈱
水晶ローソク㈱
ストラパック㈱
住友製薬㈱
㈱セイワインターナショナル
仙波糖化工業㈱
セメダイン㈱
ソニー㈱
象印マホービン㈱
第一製薬㈱
㈱ダイニック
台糖ファイザー㈱
㈱竹虎
武田薬品工業㈱
㈱ダンロップレジャースポーツ
大洋漁業㈱
大日本製糖㈱
中国ユアサ電池販売㈱
千葉大学医学部
中外製薬㈱
東鳩製菓㈱
東海漬物製造㈱
㈱東海
東レ㈱
東洋水産㈱

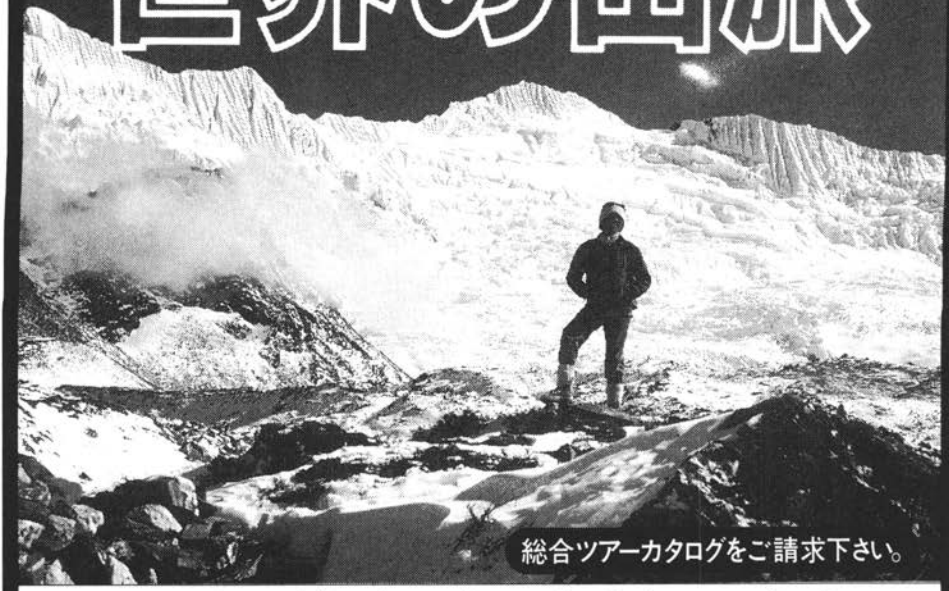
㈱トヨムラ
鳥居薬品㈱
㈱中埜酢店
㈱永谷園本舗
㈱中村屋
㈱ニュートップ
㈱二色屋
㈱にんべん
日清製粉㈱
日清食品㈱
ニチバン㈱
㈱ニコン
㈱ニチロ
共栄建材㈱
巴電業㈱
日本チバガイギー㈱
日本アップジョン㈱
日本マタイ㈱
㈱日本 ROC
日本タッパーウェア㈱
日本通運㈱
日本アムウェイ㈱
野崎産業㈱
バクスター㈱
ハウス食品工業㈱
ヒガシマル食品㈱
久光製薬㈱
㈱広瀬商会
富士電機化学㈱
藤沢薬品工業㈱
㈱ヘキストジャパン
㈱ポッカコーポレーション
本州製紙㈱
㈲マウント・ダックス
㈲マジックマウンテン
丸美屋食品工業㈱
㈲前田精肉商会
㈱丸山園
マルタイ㈱
㈱マルホ
明星食品㈱
三井農林㈱
村岡食品工業㈱
明治製菓㈱
明治屋㈱
㈱モチヅキ
㈱森田製作所
森永製菓㈱
森永乳業㈱
山之内製薬㈱
㈱ヤマコウ
山印醸造㈱
ヤマモリ㈱
ユニバーサルトレーディング㈱
雪印乳業㈱
㈱米屋本店
ライオン㈱
㈱ライオン事務器
リーベルマン海外㈱
㈱ルセルジャパン
㈱ロストアロー

気　象

㈶日本気象協会
日本舶用エレクトロニクス㈱
日本無線㈱
白山工業㈱
㈱ジオシステムズ

●敬称略
●御支援，御協力ありがとうございました。

世界の山旅



総合ツアーカタログをご請求下さい。

トレッキングからエクスペディションまで。

25th Anniversary

アルパインツアーはヒマラヤからカラコルム、ヨーロッパアルプス、アラスカ、カナダ、USA、南極、アンデス、パタゴニア、ニュージーランド、中国、アフリカ、北極圏その他の山岳地帯・辺境地域への主催ツアーやインフォメーションを用意しております。もちろん日本国内の山旅も企画しております。トレッキングのパッケージはもとより登山隊のための航空便や地上手配などに関し、私達は豊富な知識と経験をもとにご相談に応じることができます。ぜひ、お問合せ下さい。

運輸大臣登録一般旅行業第490号／日本旅行業協会正会員 IATA公認代理店

アルパインツアーサービス株式会社

東　京	〒105	東京都港区新橋2-13-8(新橋東和ビル5階)	☎03(3503)1911(代表)
名古屋	〒450	名古屋市中村区名駅3-23-6(第2千福ビル8階)	☎052(581)3211(代表)
大　阪	〒550	大阪市西区靱本町1-5-18(本町天祥ビル9階)	☎06 (444)3033(代表)
広　島	〒730	広島市中区小町2-28(小町ハイツ5階)	☎082(542)1660(代表)
福　岡	〒810	福岡市中央区舞鶴1-2-8(セントラルビル5階)	☎092(715)1557(代表)

覆刻 日本の山岳名著

全18点 22冊

解題書・特別資料付
企画・編集/日本山岳会
現金価格195,700円

日本の近代アルピニズム史上不滅の光を放つ
〝山岳名著〟全22冊、原本そのままの姿で完全覆刻

日本風景論 志賀重昂
日本山嶽志 高頭式編
日本アルプス 全四巻 小島烏水
アルペン行 鹿子木員信
日本アルプスと秩父巡禮 田部重治
山行 槇有恒
黒部谿谷 冠松次郎
山—研究と随想 大島亮吉
山と雪の日記 板倉勝宣
雪・岩・アルプス 藤木九三
尾瀬と鬼怒沼 武田久吉
スウィス日記 辻村伊助
ハイランド 辻村伊助
氷河と萬年雪の山 小島烏水
北の山 伊藤秀五郎
山岳省察 今西錦司
Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps
日本アルプス登山と探検 ウォルター・ウェストン
別巻 山の憶ひ出 全二巻 木暮理太郎 新装増補版
●解題書
覆刻日本の山岳名著解題 日本山岳会編
●特別資料
日本山岳会『會報』覆刻合本 第一号～第一〇〇号

新選覆刻 日本の山岳名著

全20点 29冊

解題書・特別資料2点付
企画・編集/日本山岳会
現金価格180,250円

江戸期から昭和期前半まで、現在入手困難な「山の名著」の集大成

名山圖譜 全三巻 谷文晁
迦多賀嶽再興記 播隆上人
信州鎗嶽畧縁起 播隆上人
石狩日誌 松浦武四郎
山岳紀行六種(私家版) 松浦武四郎
乙酉掌記 他五種
歐洲山水奇勝 全二巻 高島北海
富士案内 野中至
西藏旅行記 全二巻 河口慧海
山水無盡藏 小島烏水
ヒマラヤ行 鹿子木員信
釵澤に逝ける人々 東京帝國大學山の會
山岳美觀 吉江喬松
山の繪本 尾崎喜八
先蹤者 大島亮吉
白頭山 京都帝國大學白頭山遠征隊編
アルピニストの手記 小島烏水
ナンダ・コット登攀 竹節作太
山に描く 足立源一郎
Playground of the Far East ウォルター・ウェストン
別巻 山岳礼拝(新編集) 中村清太郎
●解題書『新選覆刻日本の山岳名著解題』日本山岳会編
●特別資料(1)
日本山岳会『會報』第一〇一号～第二〇〇号
●特別資料(2)
播隆上人筆『鎗ヶ嶽繪圖』

図説百科 山岳の世界

A.バウムガルトナー・H.ビーベルリーター・N.ディーレンファース 他著
西堀栄三郎・宮下啓三 監訳

600枚におよぶ美術的かつ科学的に貴重な写真・図版類をもとに、自然として、文化としての山岳のすべてを体系的にまとめた「山学」の基本図書。
B4変型判・310頁 定価18,540円

遙かなり エヴェレスト
—マロリー追想—

島田 巽 著

エヴェレスト初挑戦の英国隊員として頂上を目ざしたまま還らぬ人となった、若きアルピニストマロリーの素顔を、人々との出会いを通して描く。
四六判・294頁 定価1,545円

大修館書店

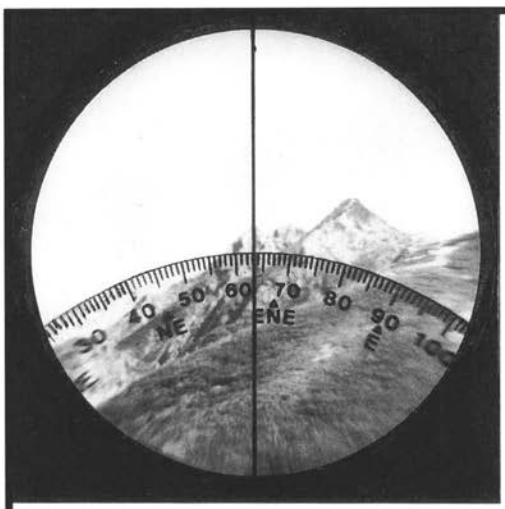
■内容見本呈
●定価はすべて消費税込みです。
〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 振替/東京9-40504 電話(03)3294-2221〈大代表〉

軽く、コンパクトなテントのことなら

ARAI TENT

㈱アライテント

〒175 東京都板橋区赤塚5-13-7 Tel.03(3939)6481



海上での遭難、酷使と高空1万mの低圧に耐えるプロ用です。
その信頼と精度を山の行動と安全にお使い下さい。
カタログ代無料、電話　FAX　葉書でどうぞ。

東京都練馬区上石神井1丁目37番13号

株式会社　石神井計器製作所

電話03-3928-5411　FAX03-3928-5411

手のひらサイズの高精度方位鏡

ハイアイポイント

コンパスグラス HB-3

自信を持って山に行こう！

山座同定 迷走脱出に力強い味方です。

広視界10°高倍率の明るい視界内に見える目標がそのまま正しい磁気方位です。完全水密 耐圧水深50m 耐高度1万m 耐寒−25° 軽量78g水面浮上 フォーカスフリー 方位自動追尾

つや消し黒　¥17,000　LED照明付　¥19,800

黄橙色メタリック　¥18,000　（消費税別）送料 ¥600



コンパスグラスは狙った目標を絶対に逃がしません。

旅するあなたのサポート隊

パッケージツアー・グループ・トレッキングは**西遊旅行**が、割引航空券・個人旅行・個人山行は、**キャラバンデスク**が、皆様のお手伝いをいたします。

秘境の地へ
世界の山々へ







ネパールではカトマンズ連絡事務所の社員が、皆様のお世話をいたします。

トレッキング部門は、JAI・HIMAL TREK-KINGが、一般観光部門はSAIYU・TRAVELがそれぞれ皆様のお手伝いをいたします。スタッフは日本語も話せますので、お気軽にご利用下さい。



～ 地球の果てまでお手伝い ～
個人旅行・航空券手配の専門相談室

キャラバンデスク
03-3237-8384

シルクロード・秘境旅行・トレッキング・海外登山のパイオニア

運輸大臣登録一般旅行業第607号

株式会社 西遊旅行（さいゆうりょこう）

本　　社　〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5F
☎03（3237）1391代
大阪営業所　〒530 大阪市北区神山町6-4　北川ビル5F
☎06（367）1391代
キャラバンデスク（航空券専門相談室）　〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル4F
☎03（3237）8384
カトマンズ連絡事務所　P.O. BOX3017, Durbar Marg Kathmandu Nepal.
☎221707, 224248

M·KATAGIRI SINCE 1914 TOKYO JAPAN

山と山スキーの専門店

クレッターザック
キスリング
夏冬用テント
カナダ、カウチン・
オリジナルセーター

片桐

東京都文京区湯島3－38－9
〒113　片桐理一郎
Tel　03(3831) 1794
FAX 03(3831) 6680

信頼されて60年

山とスキー用品専門店

TAKAHASHI

山友社 たかはし

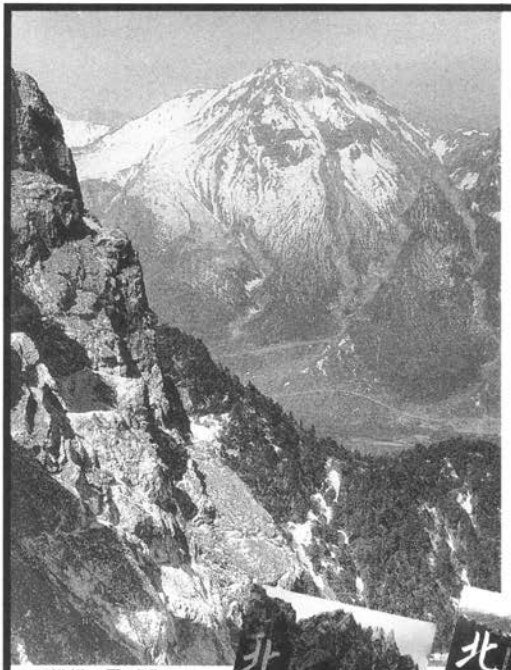
四谷本店 〒160 四谷1－20 相田ビル TEL (3351)7432・1912

北アルプス

題字・井上　靖

〝日本の屋根〟の全域をルポ

好評発売中



しま模様に雪が残る
焼岳（上巻から）



表紙・
剣岳三ノ窓雪渓



表紙・
夜明けの槍ケ岳

長野、岐阜、富山、新潟の四県にまたがる広大な北アルプスの豊かな自然と多様な民俗を、新聞記者がペンとカメラで紹介――。

〈主な内容〉

◎上巻＝二一二頁、カラー一七六枚
▼日本の屋根（槍・穂高のパノラマ）▼上高地周辺の山々▼乗鞍岳初夏▼穂高連峰▼槍ヶ岳▼飛騨の山々▼山上の別天地（雲ノ平ほか）▼裏銀座を行く▼忘れられた山系（船窪岳ほか）▼高瀬渓谷▼常念山系▼梓川渓谷▼越年登山▼シーズンを待つ（高山祭り、涸沢ほか）

◎下巻＝二〇八頁、カラー一八四枚
▼開山祭▼雪形▼黒部峡谷（黒部源流、下ノ廊下ほか）▼後立山連峰▼北端の山々（朝日岳ほか）▼剣岳▼立山▼西部の山々（薬師岳ほか）▼冬のアルペンルート▼冬の黒部峡谷▼白馬スキー事情▼北アを守れ・座談会ほか

◆定　価
各巻（菊四変）
三、五〇〇円
（税込み）

信濃毎日新聞社出版部
〒380　長野市南県町657
026(236)3377

飼料・肥料配合プラントのコンサルタント

飼料・肥料製造用諸機械及び部
品の販売・関連機器の斡旋取扱

株式会社橘エンジニアリング
名古屋市中区橘一丁目27番8号
〒460 ☎名古屋052(321)1501(代)

ニッチ
登山・ハイキング

※登山・ハイキングシリーズにはこれだけの仲間が揃っています。

① 北アルプス
② 立山・剣　黒部渓谷
③ 黒部・白馬　鹿島槍
④ 雲ノ平
⑤ 槍・穂高　アルプス銀座
⑥ 上高地　乗鞍岳
⑦ 御岳　木曽路
⑧ 中央アルプス
⑨ 南アルプス北部
⑩ 南アルプス南部
⑪ 入笠山　守屋山・高遠
⑫ 八ヶ岳　蓼科山
⑬ 霧ヶ峰　白樺湖・蓼科山
⑭ 美ヶ原 霧ヶ峰
⑮ 軽井沢　妙義山
⑯ 浅間・菅平
⑰ 志賀高原　草津白根
⑱ 加賀白山　白川郷
⑳ 奥武蔵　武甲・雲取
㉑ 奥多摩　大菩薩
㉒ 奥秩父
㉓ 陣馬・高尾　秋川渓谷
㉔ 丹沢山塊
㉕ 富士・五湖　三ツ峠
㉖ 箱根　熱海・湯河原
㉗ 伊豆半島　大島
㉘ 三浦半島　鎌倉
㉙ 房総半島
㉚ 奥日光　奥鬼怒
㉛ 尾瀬　銀山湖
㉜ 谷川岳
㉝ 苗場・鳥甲　清津峡
㉞ 越後三山　奥只見・巻機山
㉟ 那須・塩原　鬼怒川
㊱ 磐梯・吾妻　安達太良
㊲ 蔵王連峰
㊳ 飯豊・朝日
㊴ 八幡平　岩手山・駒ヶ岳
㊵ 大雪山　層雲峡・然別湖
㊶ 東海自然歩道Ⅰ
㊷ 東海自然歩道Ⅱ
㊸ 東海自然歩道Ⅲ
㊾ 金剛山　葛城・岩湧山
㊿ 六甲・摩耶
(51) 比良連山
(54) 大峰・吉野
(55) 大台ヶ原　大杉谷
(56) 赤目・青山　室生寺
(57) 鈴鹿連峰　御在所・伊吹
(58) 大山・蒜山
(59) 阿蘇山

全56巻
定価各700円

登山ハイキング用　新シリーズ
地球の風

★登山・ハイキング用B半裁地図とオールカラーのガイドブック（96～128頁）がドッキングしました。
★登山のガイドだけでなく下山後の観光・グルメ等の楽しみ記事も充分に盛り込みました。
●富士と五湖
●八ヶ岳　蓼科
●高尾　陣馬　●印発売中
以下、上高地、黒部、立山、槍・穂高、尾瀬、丹沢、奥多摩、奥武蔵その他続刊。

定価1100～1300円

地図の **日地出版**
本社　東京都千代田区西神田2-2-15
東京 03 (3261)5126
支店　大阪市中央区南船場2-11-23
大阪 06 (252)7421

実業之日本社の山と旅の本

＊定価はすべて消費税込みです。

山登りは道草くいながら
本多勝一　A5判／定価1850円

車窓の山旅・中央線から見える山
山村正光　A5変型判／定価1960円

関東百山
―100の山へのガイド・エッセイ―
浅野孝一・打田鉄一・楠目高明・横山厚夫
A5変型判／定価1850円

一日の山・中央線私の山旅
横山厚夫　A5変型判／定価1750円

展望の山旅(正)(続)
藤本一美・田代博
A5変型判／定価(正)1960円(続)2000円

カメラの山旅
―山の写真とカメラハイク12カ月―
川口邦雄　A5変型判／定価1850円

雲取山に生きる
新井信太郎　A5変型判／定価1750円

甲斐の山旅・甲州百山
蜂谷緑・小俣光雄・山村正光
A5変型判／定価1900円

富士の見える山小屋
工藤隆雄　A5変型判／定価1900円

花の山旅・日本アルプス
新妻喜永　A5変型判／定価2200円

スケッチの山旅12カ月
山里寿男　A5変型判／定価2400円

黄色いテント
田淵行男　A5変型判／定価3910円

イタリヤところどころ
―光の国の歴史・美術散歩―
西本晃二　四六判／定価1650円

ブルーガイド・ワールド

⑪スイス　定価1400円

⑯ヨーロッパ・アルプス　定価1300円

㉔ヒマラヤ・トレッキング　定価1420円

㉜アラスカ　定価1200円

㉝ニュージーランド　定価1200円

●ご注文はもよりの書店へお願いします。品切れの場合でも、書店へご依頼になれば取り寄せてくれます。
●書店に遠くご不便の方は小社に送料(冊数に関係なく一律210円)を加算してご送金下さればお送りします。(前金制・切手代用一割増)
〒104　東京都中央区銀座1-3-9／振替東京1-326

平凡社・山と旅の本

《東洋文庫》

186 **秋山記行・夜職草** 鈴木牧之／宮栄二 校注
『北越雪譜』の著者による信越秋山郷探訪記。併せて『笛場山記行』自叙伝『夜職草』を収録。●定価2,884円(税込)

240 **日本奥地紀行** イザベラ・バード／高梨健吉 訳
明治初期の日本を、東京から北海道まで旅したイギリス女性の克明な記録。本邦初訳。●定価2,884円(税込)

248・249 **東西遊記**《全2巻》 橘南谿／宗政五十緒 校注
医者でもあった著者の天明二年から六年にかけて日本国内を旅した記録。●定価1,472円・2,1,854円(税込)

461 **江漢西遊日記** 司馬江漢／芳賀徹・太田理恵子 校注
おもしろ人間江漢の残した、江戸後期の日本旅行記。愉快なワンダーフォーゲルぶりを翻刻。●定価2,266円(税込)

472 **江戸温泉紀行** 板坂耀子 編
江戸後期の有馬・熱海・箱根・草津、今はなき湯倉などの温泉町の様子をいきいきと描く。●定価2,369円(税込)

542・543 **チベットの報告**《全2巻》 イッポリット・デシデリ／フィリッポ・デ・フィリッピ 編／薬師義美 訳
一八世紀初頭、イタリア人宣教師によって報告され、長く失われていた古典の本邦初訳。●定価各2,884円(税込)

544・550 **日本旅行日記**《全2巻》 アーネスト・サトウ／庄田元男 訳
サトウの残した膨大な日記から、日本旅行にかかわる部分を抄出。●定価1,781円・2,884円(税込)

555 **東洋紀行1**《全3巻》 Gクライトナー／大林太良 監修／小谷裕幸 ほか訳
一九世紀後半、中国・日本など東アジア各地を観察・踏査したオーストリア人地理学者の記録。●定価3,090円(税込)

鹿野忠雄(かのただお) 台湾に魅せられたナチュラリスト 山崎柄根
戦前、台湾にとりつかれ優れた学問的足跡を遺した男の波瀾万丈な日本エッセイスト・クラブ賞受賞。●定価2,700円(税込)

〒102 東京都千代田区三番町5/振替・東京8-29639/Tel.03-3265-0455

既刊好評発売中!

●原 真の本 定価各2500円(税込)

還らざる者たち——極限にきらめく生と死
世界の高峰を舞台に描く山岳風雲録。自らの登山を通して極限状況の人間を鮮やかに活写。

頂上の旗(新版)——生と死のあるところ
登山界の論客による辛口エッセイ。旧版(筑摩書房刊)に黒澤明、今西錦司論等17編を増補。

西堀榮三郎選集
●定価1、2、3巻各3500円／別巻4500円(税込)

大西 宏遺稿集 12月1日発売!

遠く高く

A5判 上製函入 約700頁



定価6500円(税込)

明大山岳部先輩・植村直己を継ぐと目され、「アイスウォーク」北極点踏破、宿願のエベレスト登頂に成功。次なる目標・南極行を目前にナムチャバルワに逝った29歳の強烈な個性。探検への真摯な思いと葛藤を膨大な日記と記録で綴る。追悼文41本を収録。

悠々社

〒162 東京都新宿区神楽坂3-6 ジーイージャパンビル2F
TEL 03-5261-0052 FAX 03-5261-0054

全国各地の美味・珍味を満載。
取り寄せて味わうもよし、
贈り物にもよしの、
便利な産直ガイド。

北海道から沖縄まで、代表的な名産と珍味を都道府県別に紹介。好物・おいしいものを取り寄せたいとき、お中元、お歳暮などの贈答用のカタログとして、旅先での買物、おみやげのガイドとして、いろいろに活用できる便利な一冊。

全国 名産・珍味 うまいもの

ふるさと宅配便

￥1,500

●全国のうまいもの180を厳選して紹介!

北海道＝天然貝柱・新巻鮭／青森＝八戸するめ／秋田＝きりたんぽ／岩手＝卵めん／宮城＝白石温麺／山形＝牛肉さくらんぼ漬／福島＝天然なめこ／新潟＝献上鮑／富山＝鱒ずし／石川＝ごり佃煮／福井＝小鯛ささ漬／栃木＝揚巻湯波／群馬＝水沢うどん／茨城＝だるま納豆／千葉＝鮒すずめ焼／埼玉＝岩茸／東京＝くさや／神奈川＝梅花はんぺん／山梨＝ブドウ酒／長野＝馬さし／静岡＝マスクメロン／愛知＝八丁味噌／岐阜＝筏ばえ／滋賀＝鮒ずし／京都＝西京味噌／大阪＝塩昆布／奈良＝三輪そうめん／和歌山＝ほろほろ鳥くんせい／兵庫＝いかなご佃煮／広島＝広島かき／鳥取＝松葉がに／島根＝出雲そば／山口＝ふく一夜干／香川＝さぬき手打うどん／徳島＝すだち／高知＝酒盗／愛媛＝五色そうめん／福岡＝明太子／佐賀＝わらすぼ／長崎＝からすみ／大分＝かぼす／熊本＝辛子れんこん／宮崎＝焼やまめ／鹿児島＝さつま揚／沖縄＝パパイヤ漬　他多数

富士書店　東京都文京区本郷４丁目１-14
電話03-3814-0498

よりよきテントの最高峰を めざすヨシダテント！

1978年　植村直己北極点単独旅行
1978年　日本大学北極点遠征隊
1981年　植村直己冬期エベレスト登山隊
1981年　明治大学エベレスト登山隊
1981年　早稲田大学K2登山隊
1984年　第26次南極観測隊
1985年　和泉雅子北極点遠征隊
1985年　第27次南極観測隊
1987年　風間深志北極点遠征隊
1988年　日本テレビ〝チョモランマ〟報道隊
1989年　和泉雅子北極点遠征隊
1989年　大韓民国北極点遠征隊



小さな店の大きな自信！

株式会社
ヨシダテント

〒167　東京都杉並区桃井1-3-3
☎03(3399)2548・FAX03(3395)4655

株式会社ラマーノ
Lamano
手造りのトロフィー・オブジェ

中川　武

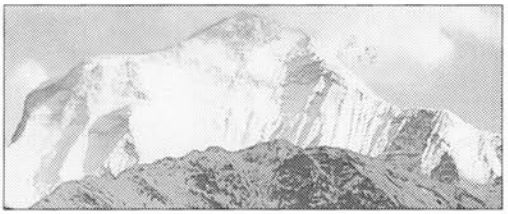
バッジ・タイ止・ループタイ・美術造型看板

〒160 東京都新宿区四ツ谷2丁目4番地
フラワホームズ四ツ谷204号
TEL03-3351-9927
FAX03-3351-9906

山岳名著選集

実際のドラマチックな体験をもとに、世界屈指のアルピニストたちが綴った感動の物語。

〈各巻A5判〉



ダウラギリ登頂
マックス・アイゼリン 著／横川文雄 訳 定価1545円

エヴェレスト登頂記
ジェームス・アルマン 著／丹部節雄 訳 定価2575円

パミール—シルクロードの城塞—
田村俊介 編著 定価2575円

遙かなる天山—天山に魅せられた探検家セミョーノフ伝—
A・アルダン＝セミョーノフ 著／田村俊介 訳 定価2575円

〝遠い頂〟ヌプツェ—北西壁初登頂の記録—
登歩渓流会 編著 定価2575円

プモ・リ—世界で最も美しい山—
ゲルハルト・レンザー 著／織方郁映、橋本 信 共訳 定価2575円

アムネマチン初登頂
上越山岳協会 編著 定価2472円

スイスの山々—SAC山案内人の体験談—
オレル・フュスリ社 編／岡沢祐吉 訳 定価1957円

北アルプス白馬讃歌—山案内60年の回想—
大谷定雄 著 定価1957円

ナンガ・パルバート回想—闘いと勝利—
カール・M・ヘルリッヒコッファー 著／岡沢祐吉 訳 定価1957円

氷山雪嶺二千年—中国登山史話—
周 正 著／譚佐強・田川常雄 共訳 定価2266円

スイス—山案内人の手帳より
岡沢祐吉 著 定価2266円

登山ハンドブック・シリーズ

山岳研究会 編 各巻A5判

中級登山者のための一般的な解説から、先鋭的氷壁登攀技術、それに古典的山岳文学、山と人間との長い関わりの歴史までを論ずる、最新の登山総合解説書。

登山教本 定価1009円
世界の山岳 定価1009円
山の心 定価1009円
山の自然科学 定価1009円
山の資料 定価1009円

●不朽の名著、復刻なる！

湖底幻影

全3巻

小島六郎 監修 定価28000円

■造本・体裁
●第1巻 背三つ目綴り（225×153㍉）マット入り
●第2巻・第3巻 A4変型判上製カバー装（287×210㍉）

明治34年、北魚沼郡長の発企による銀山探検隊が組織された。学問と産業開発の両面より、それぞれの専門家32名、案内人と人夫を含む総勢58名。その際の記録が「銀山平探検記」となって結実したのであった。これをそのまま復刻したのが第一巻。わかりやすい現代文にしたものが第二巻、第三巻には諸家の貴重な周辺登山紀行を集録。よって、湖底に沈んだ銀山への鎮魂となす！

豪華写真集

天山

中国新疆人民出版社 編
ベースボール・マガジン社 訳
A4判変型上製／定価7107円

アムネマチン

上越山岳協会 編
A4判変型上製 定価4944円

中国登山ハンドブック

上越山岳協会 編／中国人民体育出版社 監修
A5判 定価1854円

山登りのための体力トレーニング

窪田 登 著
新書判／定価855円

体育・スポーツ総合出版
株式会社 ベースボール・マガジン社 〒101東京都千代田区三崎町3-10-10☎03(3238)0181※宅配も可（送料380円）

＊山と自然のエッセイ・シリーズ＊

高原の音楽譜

信州霧ヶ峰の山小屋暮しに
共鳴する回想のメロディー

手塚宗求

序文・串田孫一

四六判
定価1800円

古き良き山小屋の青春時代から現在に至るまで、
四十年に及ぼうとする山暮しの折りふしに、
耳にし心に触れたメロディーや音楽の思い出に寄せて、
山小屋の主人が綴った三十五篇の佳作。
一本の古びたギターや蓄音器から、
草原を吹き渡る風や雲から、
色鮮やかな情景とともに懐しい旋律が聴こえてくる



高原の花物語
手塚宗求著●A5判上製／定価2800円

高原の野鳥物語
手塚宗求著●A5判上製／定価2800円

息子と行く山
北原節子著●A5判上製／定価2800円

新編 邂逅の山
手塚宗求著●A5判上製／定価2800円

雲をつかむ話
三宅 修著●A5判上製／定価2800円

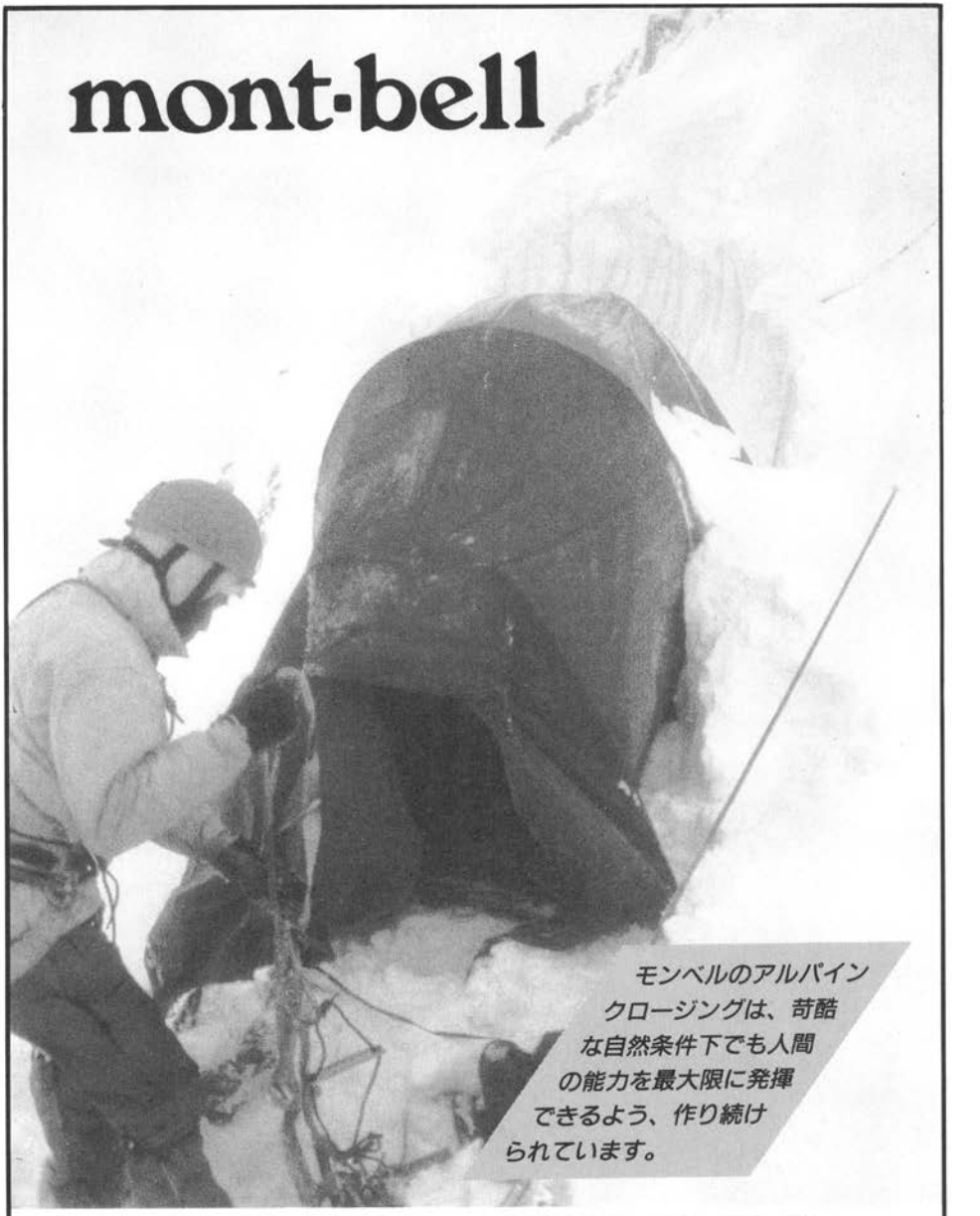
わが山と旅
秋谷 豊著●A5判上製／定価2800円

緑の牧歌
太田愛人著●A5判上製／定価2800円

北の大地から
―川と水をめぐる二十六の物語
竹田津実著●A5判上製／定価2800円

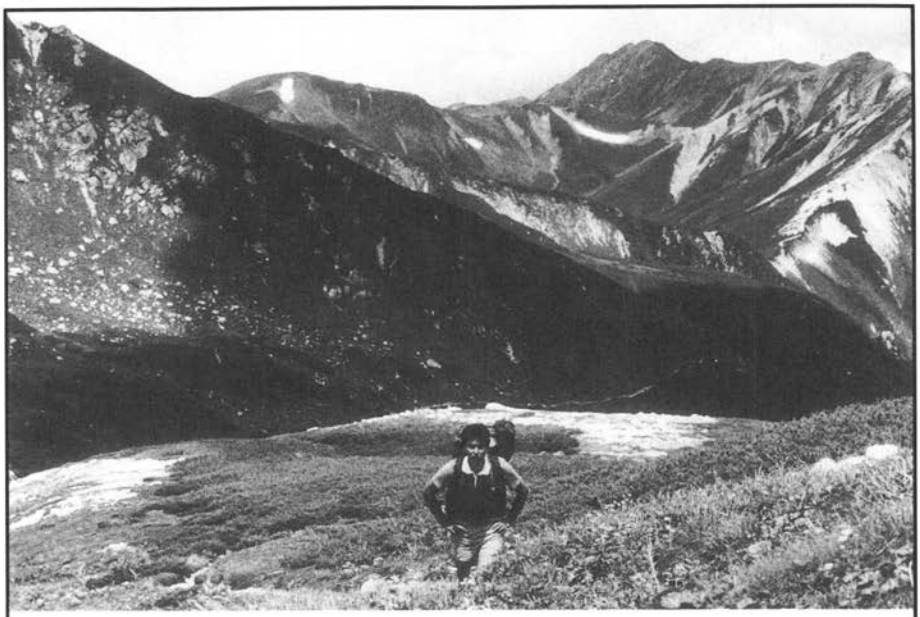
恒文社
〒101東京都千代田区三崎町3-10-10☎03(3238)0181※宅配も可(送料380円)

mont-bell



モンベルのアルパインクロージングは、苛酷な自然条件下でも人間の能力を最大限に発揮できるよう、作り続けられています。

モンベル　本　　社●大阪市西区立売堀1丁目6-17　☎06-531-4761代　〒550
東京営業所●東京都渋谷区恵比寿南1-18-6　☎03-3760-2131代　〒150



読者と自然を結んで64年!

●山登りの話題と情報を満載した月刊誌

山と溪谷

毎月15日発売／定価780円

●クライミングと海外登山の専門誌

岩と雪

奇数月１日発売／定価880円

●直接購読のご案内●

「山と溪谷」一カ年分9360円(送料は無料，特大号値上げ分サービス)
「岩と雪」一カ年分5280円(送料は無料，６冊)
振替または現金書留で「山と溪谷○月号より」「岩と雪○号より」と指定のうえ住所・氏名を明記して本社営業部あてお送り下さい。

山と溪谷社

〒105東京都港区芝大門1-1-33/☎03(3436)4055・FAX03(3433)4057/振替・東京8-60249

山の絵はがき

さわのひとし

山の便り（カラー6枚） 1,000円

エッチング（モノクロ8枚） 1,000円

足立源一郎

山 の 絵（カラー12枚） 1,200円

島田 巽

山稜の読書家 4,017円

山・人・本 2,472円

三田幸夫

わが登高行 上 3,914円

下 4,635円

小谷隆一

山なみ帖 3,296円

山崎安治

登山史の発掘 2,575円

登山史の周辺 3,914円

織内信彦

快晴の山 2,575円

加藤泰安

森林・草原・氷河 2,575円

藤島敏男

山に忘れたパイプ 3,296円

望月達夫

折々の山 1,957円

忘れえぬ山の人々 1,957円

渡辺公平

山は満員 2,266円

初見一雄

すこし昔の話 1,236円

伊藤秀五郎

北の山 続篇 2,781円

山の風物詩 1,442円

坂本直行の本

わたしの草と木の絵本 1,800円

雪原の足あと 3,914円

原野から見た山 4,300円

山・原野・牧場 1,800円

淡彩絵はがき（カラー6枚）

2集、3集、4集 各 600円

渡辺兵力

山旅の足音 1,442円

自然流スキー考 1,600円

川崎精雄ほか

静かなる山 正 1,751円

続 1,854円

望月・岡田共著

藪山辿歴 1,545円

山田・横山共著

青空と輝く残雪の山々 1,339円

木南金太郎

日本の山登り記 1,545円

小方全弘

続ブータン感傷旅行 1,545円

グリンデルヴァルトの山案内人

ブラーヴァン 3,914円

カンチェンジュンガ縦走

カンチ登山隊 5,150円

遥かなる未踏の尾根

東海支部隊 4,944円

ナンダ・デヴィ縦走1976

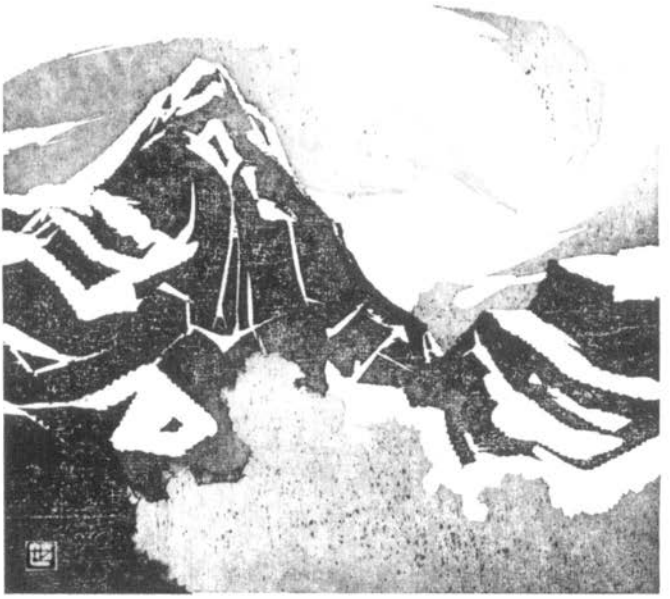
デヴィ登山隊 4,017円

山の本 茗渓堂

〒101 東京都千代田区神田駿河台2の1

電話 03−3291−9442 FAX 03−3295−2043

振替口座 東京 8−24723



ナムチャバルワ　　塔田也寿

編集後記

・本誌においても、このところワープロ打ちの原稿が増えている。それは一向にかまわないのだが、推敲不十分なものが少くないのが気になる。もちろん日頃書き慣れている人にはそのようなことはないが。ワープロでの打ちっ放しで読み直しをしたとも思われない、小さな字がビッシリと詰まったものを、締切り日を大幅に過ぎてからファックスで送られて来ることがある。そのような原稿を目にすると、編集者は正直いって冷静さを失う。少くとも、執筆者の意を体して良い仕事をしようという意欲は萎えてしまう。ワープロという道具は、推敲作業にとってこそ文明の利器である筈であり、その本来機能を十分に生かしてもらいたいものである。

・今年のような異常気象は山に登る者にとっても永く気憶に残るだろう。「ウェストン青森を歩く」の年も今年のような冷夏だったと思われる。米が大凶作でも騒ぎが起きないのは、食料はカネで外国から買えるという安心感からか。それにしても、いくら日本びいきとはいえ、山登りだけでなく、社会にも目を向けて行動するウェストンらのヒューマニズムには胸を打たれる。

・今号にはナムチャバルワ登山の報告を入れることになった。当初の計画ではもっと厖大なページ数になると見込まれたので、他の記事は抑え気味とした。そのため投稿希望を寄せられた方にはお断りをせざるを得なくなり、申し訳なく思っている。なお、ナムチャバルワ報告の構成等は登山隊の編集スタッフによる。

（南川）

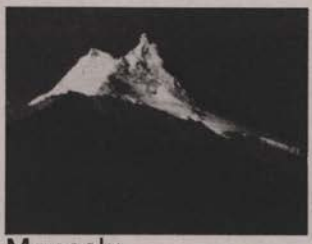
山岳　第八十八年（通巻一四六号）
一九九三年十二月四日発行
価三五〇〇円
発行所　社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビューハイツ四番町
（〒一〇二）
電話　東京三二六一局四四三三番
振替口座　東京三―四八二九番
発行人　藤平正夫
編集人　南川金一
印刷所　株式会社　技報堂
発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二―一
電話　東京三二九一局九四四二番
振替口座　東京八―一四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

大好きな自然を、ゆっくりと楽しみたい

ATLAS TREK

ビギナーのための冒険旅行から、未知の魅力を秘めた国々へ、そしてエクスペディションまで、それぞれのニーズにお応えし、新しいユニークな手づくりの旅をコーディネイトします。



Manaslu



Sagalmatha



Nanda Devi



Qomolangma



Kangchenjunga



Namcha Barwa

☆世界各地、日本の名峰へのトレックツアー、各種手配旅行、国内外航空券を取扱っております。

※まことに残念ですが、全ての情報はここに載せられませんので、ご要望は直接お問い合わせ下さい。
詳細パンフレットをご請求下さい。ご氏名、ご住所、お電話番号を明記し、お申込み下さい。お電話でも結構です。

株式会社 アトラストレック　なんでも相談　☎03-3341-0030

〒160　東京都新宿区三栄町23番地

東京海上火災保険株式会社代理店　(社)日本旅行業協会正会員　運輸大臣登録一般旅行業第1167号

ISSN 0286-7508

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. 88

1993